

JP1 Version 9

JP1/Performance Management 設計・ 構築ガイド

解説・手引・操作書

3020-3-R31-31

対象製品

P-242C-AA94 JP1/Performance Management - Manager 09-50 (適用 OS : Windows Server 2003)
P-2A2C-AA94 JP1/Performance Management - Manager 09-50 (適用 OS : Windows Server 2008)
P-1J2C-AA91 JP1/Performance Management - Manager 09-50 (適用 OS : HP-UX 11i V2 (IPF) , HP-UX 11i V3 (IPF))
P-9D2C-AA91 JP1/Performance Management - Manager 09-50 (適用 OS : Solaris 9 (SPARC) , Solaris 10 (SPARC))
P-1M2C-AA91 JP1/Performance Management - Manager 09-50 (適用 OS : AIX 5L V5.3 , AIX V6.1 , AIX V7.1)
P-9S2C-BA91 JP1/Performance Management - Manager 09-50 (適用 OS : Linux 5 (x86) , Linux 5 Advanced Platform (x86) , Linux 5 (AMD/Intel 64) , Linux 5 Advanced Platform (AMD/Intel 64))
P-812C-AA91 JP1/Performance Management - Manager 09-50 (適用 OS : Linux Server 6 (32-bit x86) , Linux Server 6 (64-bit x86_64))
P-242C-AJ94 JP1/Performance Management - Base 09-50 (適用 OS : Windows Server 2003)
P-2A2C-AJ94 JP1/Performance Management - Base 09-50 (適用 OS : Windows Server 2008)
P-1J2C-AJ91 JP1/Performance Management - Base 09-50 (適用 OS : HP-UX 11i V2 (IPF) , HP-UX 11i V3 (IPF))
P-9D2C-AJ91 JP1/Performance Management - Base 09-50 (適用 OS : Solaris 9 (SPARC) , Solaris 10 (SPARC))
P-9E2C-AJ91 JP1/Performance Management - Base 09-50 (適用 OS : Solaris 10 (x86) , Solaris 10 (x64))
P-1M2C-AJ91 JP1/Performance Management - Base 09-50 (適用 OS : AIX 5L V5.3 , AIX V6.1 , AIX V7.1)
P-9S2C-BJ91 JP1/Performance Management - Base 09-50 (適用 OS : Linux AS 4 (x86) , Linux ES 4 (x86) , Linux AS 4 (AMD64 & Intel EM64T) , Linux ES 4 (AMD64 & Intel EM64T) , Linux 5 (x86) , Linux 5 Advanced Platform (x86) , Linux 5 (AMD/Intel 64) , Linux 5 Advanced Platform (AMD/Intel 64))
P-9V2C-AJ91 JP1/Performance Management - Base 09-50 (適用 OS : Linux AS 4 (IPF) , Linux 5 (IPF) , Linux 5 Advanced Platform (IPF))
P-812C-AJ91 JP1/Performance Management - Base 09-50 (適用 OS : Linux Server 6 (32-bit x86) , Linux Server 6 (64-bit x86_64))
P-242C-AR94 JP1/Performance Management - Web Console 09-50 (適用 OS : Windows Server 2003)
P-2A2C-AR94 JP1/Performance Management - Web Console 09-50 (適用 OS : Windows Server 2008)
P-1J2C-AR91 JP1/Performance Management - Web Console 09-50 (適用 OS : HP-UX 11i V2 (IPF) , HP-UX 11i V3 (IPF))
P-9D2C-AR91 JP1/Performance Management - Web Console 09-50 (適用 OS : Solaris 9 (SPARC) , Solaris 10 (SPARC))
P-1M2C-AR91 JP1/Performance Management - Web Console 09-50 (適用 OS : AIX 5L V5.3 , AIX V6.1 , AIX V7.1)
P-9S2C-AR91 JP1/Performance Management - Web Console 09-50 (適用 OS : Linux 5 (x86) , Linux 5 Advanced Platform (x86) , Linux 5 (AMD/Intel 64) , Linux 5 Advanced Platform (AMD/Intel 64))
P-812C-AR91 JP1/Performance Management - Web Console 09-50 (適用 OS : Linux Server 6 (32-bit x86) , Linux Server 6 (64-bit x86_64))

上記製品のほか、JP1/Performance Management - Base を前提とする JP1/Performance Management の PFM - Agent 製品、および PFM - RM 製品を対象とします。また、これらの製品には、他社からライセンス

を受けて開発した部分が含まれています。

輸出時の注意

本製品を輸出される場合には、外国為替および外国貿易法ならびに米国の輸出管理関連法規などの規制をご確認の上、必要な手続きをお取りください。

なお、ご不明な場合は、弊社担当営業にお問い合わせください。

商標類

AIX は、米国およびその他の国における International Business Machines Corporation の商標です。

AIX 5L は、米国およびその他の国における International Business Machines Corporation の商標です。

AMD は、Advanced Micro Devices, Inc. の商標です。

BEA WebLogic Server は、BEA Systems, Inc. の登録商標です。

BSAFE は、EMC Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

DB2 は、米国およびその他の国における International Business Machines Corporation の商標です。

DB2 Universal Database は、米国およびその他の国における International Business Machines Corporation の商標です。

Firefox は Mozilla Foundation の登録商標です。

HP-UX は、Hewlett-Packard Development Company, L.P. のオペレーティングシステムの名称です。

IBM は、米国およびその他の国における International Business Machines Corporation の商標です。

Internet Explorer は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Itanium は、アメリカ合衆国およびその他の国における Intel Corporation の商標です。

J2EE は、Oracle Corporation 及びその子会社、関連会社の米国及びその他の国における登録商標または商標です。

Linux は、Linus Torvalds 氏の日本およびその他の国における登録商標または商標です。

Lotus は、IBM Corporation の登録商標です。

Lotus Domino は、IBM Corporation の登録商標です。

Microsoft および Hyper-V は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Microsoft Excel は、米国 Microsoft Corporation の商品名称です。

Microsoft Exchange Server は、米国 Microsoft Corporation の商品名称です。

Microsoft Internet Information Server は、米国 Microsoft Corporation の商品名称です。

Microsoft Internet Information Services は、米国 Microsoft Corporation の商品名称です。

Microsoft および SQL Server は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Mozilla は、Mozilla Foundation の、米国およびその他の国における商標です。

ODBC は、米国 Microsoft Corporation が提唱するデータベースアクセス機構です。

Oracle と Java は、Oracle Corporation 及びその子会社、関連会社の米国及びその他の国における登録商標です。

R/3 は、SAP AG のドイツ及びその他の国における登録商標または商標です。

Red Hat は、米国およびその他の国で Red Hat, Inc. の登録商標もしくは商標です。

RSA は、EMC Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

SAP は、SAP AG のドイツ及びその他の国における登録商標または商標です。

すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。SPARC 商標がついた製品は、米国 Sun Microsystems, Inc. が開発したアーキテクチャに基づくものです。

UNIX は、The Open Group の米国ならびに他の国における登録商標です。

VMware, Virtual SMP, VMotion は、VMware, Inc. の米国および各国での登録商標または商標です。

WebSphere は、米国およびその他の国における International Business Machines Corporation の商標です。

Windows は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Windows NT は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Windows Server は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

その他記載の会社名、製品名は、それぞれの会社の商標もしくは登録商標です。

プログラムプロダクト「P-9D2C-AA91, P-9D2C-AJ91, P-9D2C-AR91, P-9E2C-AJ91」には、Oracle Corporation またはその子会社、関連会社が著作権を有している部分が含まれています。

プログラムプロダクト「P-9D2C-AA91, P-9D2C-AJ91, P-9D2C-AR91, P-9E2C-AJ91」には、UNIX System Laboratories, Inc. が著作権を有している部分が含まれています。

This product includes software developed by the Apache Software Foundation (<http://www.apache.org/>).

This product includes software developed by Ben Laurie for use in the Apache-SSL HTTP server project.

This product includes software developed by IAIK of Graz University of Technology.

Portions of this software were developed at the National Center for Supercomputing Applications (NCSA) at the University of Illinois at Urbana-Champaign.

This product includes software developed by the University of California, Berkeley and its contributors.

This software contains code derived from the RSA Data Security Inc. MD5 Message-Digest Algorithm, including various modifications by Spyglass Inc., Carnegie Mellon University, and Bell Communications Research, Inc (Bellcore).

Regular expression support is provided by the PCRE library package, which is open source software, written by Philip Hazel, and copyright by the University of Cambridge, England. The original software is available from <ftp://ftp.csx.cam.ac.uk/pub/software/programming/pcre/>

This product includes software developed by Ralf S. Engelschall <rse@engelschall.com> for use in the mod_ssl project (<http://www.modssl.org/>).



JP1/Performance Management - Web Console は、EMC Corporation の RSA(R) BSAFE™ ソフトウェアを搭載しています。

HITACHI
Inspire the Next

◎ 株式会社 日立製作所



発行

2012 年 3 月 3020-3-R31-31

著作権

All Rights Reserved. Copyright (C) 2009, 2012, Hitachi, Ltd.
(C)opyright 2000-2009, by Object Refinery Limited and Contributors.

変更内容

変更内容（3020-3-R31-31）

追加・変更内容	変更箇所
記載内容を変更した。詳細は、付録 K を参照のこと。	付録 K

変更内容（3020-3-R31-30）JP1/Performance Management - Manager 09-50，JP1/ Performance Management - Base 09-50，JP1/Performance Management - Web Console 09-50

追加・変更内容	変更箇所
業務グループによるアクセスコントロール機能を追加し、ユーザーごとに監視できる範囲を設定できるようにした。	1.2.5，2.3.3，3.3.1，3.4，3.4.1， 4.7，5.1.2，5.1.4，5.3.3，5.3.4， 6.1.2，6.1.4，6.3.3，6.3.4，付録 E.5，付録 F.1，付録 K
Performance Management ユーザーの権限に、業務グループ一般ユーザーを追加した。	2.3.3，5.4.6，6.4.6
次のコマンドでプロセス監視を設定できるようにした。 <ul style="list-style-type: none">• jpcprocdef create アプリケーション定義を作成・編集するコマンド• jpcprocdef delete アプリケーション定義を削除するコマンド• jpcprocdef list アプリケーション定義の定義名の一覧を表示するコマンド• jpcprocdef output アプリケーション定義の定義内容を出力するコマンド	4.8.1，付録 C.2
次のコマンドで業務グループを作成および編集できるようにした。 <ul style="list-style-type: none">• jpcconf bgdef check 業務グループ定義ファイルの内容を検証するコマンド• jpcconf bgdef delete 業務グループの定義情報を削除するコマンド• jpcconf bgdef display 業務グループの定義情報を表示するコマンド• jpcconf bgdef export 業務グループの定義情報をファイルにエクスポートするコマンド• jpcconf bgdef import 業務グループの定義情報をファイルからインポートするコマンド• jpcconf bgdef list 業務グループ名の一覧を表示するコマンド	4.8.1
jpc tool service sync コマンドで、PFM - Manager と PFM - Web Console に登録されているサービス情報を同期できるようにした。	4.8.2，5.2.3，5.3.3，5.3.4，6.2.3， 6.3.3，6.3.4
次のオプションで、コマンドの操作対象ホストを制限できるようにした。 <ul style="list-style-type: none">• Agent ホストリモート操作制限オプション• Agent 間直接情報参照抑止オプション	4.7，4.8.4，5.4.11，6.4.10，付録 E.5

追加・変更内容	変更箇所
ユーザー作成のアラームテーブルと監視テンプレートのアラームテーブルを、それぞれ別のツリーとして表示できるようにした。	5.4.6, 6.4.6
業務グループを利用する場合、PFM・Web Console でキャッシュに保持するイベントの最大数を設定できるようにした。	5.4.6, 6.4.6
グラフに使用されるデフォルトの系列色を変更した。	5.4.6, 6.4.6, 付録 E.5
グラフの表示に関する次の項目を設定できるようにした。 <ul style="list-style-type: none"> ・ グラフの系列色 ・ グラフの系列色のうち円グラフに使用しない色 ・ 折れ線グラフ表示時のプロットのサイズ ・ 集合横棒グラフの凡例の表示順序 ・ 複合レポートの最前面に表示するグラフ種別 ・ グラフの目盛に表示するデータラベルの有効小数けた数 ・ グラフの目盛に表示するデータラベルのけた区切りコンマの有無 	5.4.6, 6.4.6
オートラベル機能で、グラフ上のプロットに対応するデータの値を、ツールチップに表示できるようにした。	5.4.6, 6.4.6, 付録 K
アラーム更新時にアラームが不正に削除される問題に対策できるようにした。	5.4.6, 6.4.6
jperpt コマンドの入力パラメーターファイルで指定するブックマーク名の属性値の読み込み方法を指定できるようにした。	5.4.6, 6.4.6
一つのアラームテーブルに定義できるアラームの最大数を、50 から 250 に変更した。	付録 A.4
グラフの外観を変更した。	付録 E.5
エージェントのアラームステータスの確認状況によっては、エージェントイベントとして次に示すメッセージテキストが出力されるようにした。 <ul style="list-style-type: none"> ・ State change(Unconfirmed) ・ State information ・ State information(Unconfirmed) 	付録 E.5, 付録 F.1
ヘルスチェックエージェントの Health Check Detail レコードの Host Op Status フィールドで取得される値を変更した。	付録 H.1
コマンドの格納先一覧を追加した。	付録 I

はじめに

このマニュアルは、JP1/Performance Management の機能および設計・構築方法について説明したものです。

対象読者

このマニュアルは次の方にお読みいただくことを前提に、JP1/Performance Management について説明しています。

- ・ 稼働監視システムの導入に際し、JP1/Performance Management の機能概要を把握したい方
- ・ 稼働監視システムを設計または構築したい方

なお、監視対象システムの運用について熟知していることを前提としています。

JP1/Performance Management - Agent または JP1/Performance Management - Remote Monitor を使用してパフォーマンスデータを収集する方法については、JP1/Performance Management - Agent または JP1/Performance Management - Remote Monitor の各マニュアルもあわせてお読みください。

マニュアルの構成

このマニュアルは、次に示す編から構成されています。なお、このマニュアルは各 OS (Operating System) に共通のマニュアルです。OS ごとに差異がある場合は、本文中でそのつど内容を書き分けています。

第 1 編 概要編

JP1/Performance Management の概要および操作例について説明しています。

第 2 編 設計編

JP1/Performance Management を使って稼働監視システムを構築する上での主な設計項目と JP1/Performance Management の機能について説明しています。

第 3 編 構築編

JP1/Performance Management の環境構築および構成変更について説明しています。

関連マニュアル

このマニュアルの関連マニュアルを次に示します。必要に応じてお読みください。

JP1/Performance Management 関連

- ・ JP1 Version 9 JP1/Performance Management 運用ガイド (3020-3-R32)
- ・ JP1 Version 9 JP1/Performance Management リファレンス (3020-3-R33)
- ・ JP1 Version 9 JP1/Performance Management - Remote Monitor for Platform (3020-3-R39)
- ・ JP1 Version 9 JP1/Performance Management - Remote Monitor for Oracle (3020-3-R40)
- ・ JP1 Version 9 JP1/Performance Management - Remote Monitor for Microsoft(R) SQL Server (3020-3-R41)

- JP1 Version 9 JP1/Performance Management - Agent Option for Platform (Windows(R) 用)
(3020-3-R48)
- JP1 Version 9 JP1/Performance Management - Agent Option for Platform (UNIX(R) 用)
(3020-3-R49)
- JP1 Version 9 JP1/Performance Management - Agent Option for Virtual Machine
(3020-3-R50)
- JP1 Version 9 JP1/Performance Management - Agent Option for Service Response
(3020-3-R51)
- JP1 Version 9 JP1/Performance Management - Agent Option for Oracle (3020-3-R52)
- JP1 Version 9 JP1/Performance Management - Agent Option for Microsoft(R) SQL Server
(3020-3-R53)
- JP1 Version 9 JP1/Performance Management - Agent Option for IBM(R) DB2(R) Universal
Database(TM) (3020-3-R54)
- JP1 Version 9 JP1/Performance Management - Agent Option for HiRDB (3020-3-R55)
- JP1 Version 9 JP1/Performance Management - Agent Option for JP1/AJS3 (3020-3-R56)
- JP1 Version 9 JP1/Performance Management - Agent Option for Enterprise Applications
(3020-3-R57)
- JP1 Version 9 JP1/Performance Management - Agent Option for Domino (3020-3-R58)
- JP1 Version 9 JP1/Performance Management - Agent Option for Microsoft(R) Exchange
Server (3020-3-R59)
- JP1 Version 9 JP1/Performance Management - Agent Option for Microsoft(R) Internet
Information Server (3020-3-R60)
- JP1 Version 9 JP1/Performance Management - Agent Option for IBM WebSphere
Application Server (3020-3-R61)
- JP1 Version 9 JP1/Performance Management - Agent Option for Oracle(R) WebLogic Server
(3020-3-R62)
- JP1 Version 9 JP1/Performance Management - Agent Option for uCosminexus Application
Server (3020-3-R63)
- JP1 Version 9 JP1/Performance Management - Agent Option for IBM WebSphere MQ
(3020-3-R64)
- JP1 Version 9 JP1/Performance Management - Agent Option for OpenTP1 (3020-3-R65)

JP1 関連

- JP1 Version 9 JP1/Base 運用ガイド (3020-3-R71)
- JP1 Version 9 JP1/Integrated Management - Manager クイックリファレンス (3020-3-R75)
- JP1 Version 9 JP1/Integrated Management - Manager 導入・設計ガイド (3020-3-R76)
- JP1 Version 9 JP1/Integrated Management - Manager 構築ガイド (3020-3-R77)
- JP1 Version 9 JP1/Integrated Management - Manager 運用ガイド (3020-3-R78)
- JP1 Version 9 JP1/Integrated Management - Manager 画面リファレンス (3020-3-R79)
- JP1 Version 9 JP1/Integrated Management - Manager コマンド・定義ファイルリファレンス

(3020-3-R80)

- JP1 Version 9 JP1/Integrated Management - Manager メッセージ (3020-3-R81)
- JP1 Version 9 JP1/NETM/DM 運用ガイド 1(Windows(R) 用) (3020-3-S81)
- JP1 Version 9 JP1/NETM/DM Client(UNIX(R) 用) (3020-3-S85)
- JP1 Version 8 JP1/NETM/DM SubManager(UNIX(R) 用) (3020-3-L42)
- JP1 Version 8 JP1/Cm2/Network Node Manager ネットワーク管理ガイド (3020-3-L01)
- JP1 Version 6 JP1/NETM/DM Manager (3000-3-841)

新旧対応表

JP1 Version 9 JP1/Performance Management では、マニュアル「JP1 Version 8 JP1/Performance Management システム構築・運用ガイド」(3020-3-K61-80) の内容を次の 2 冊に分冊しています。

- マニュアル「JP1 Version 9 JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」(3020-3-R31)
- マニュアル「JP1 Version 9 JP1/Performance Management 運用ガイド」(3020-3-R32)

マニュアル「JP1 Version 8 JP1/Performance Management システム構築・運用ガイド」(3020-3-K61-80) とこのマニュアル「JP1 Version 9 JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」(3020-3-R31) との対応は次のようになっています。

JP1 Version 8 JP1/Performance Management システム構築・運用ガイド (3020-3-K61-80)	JP1 Version 9 JP1/Performance Management 設計・構築ガイド (3020-3-R31)
【概要編】	【概要編】
1. Performance Management の概要	1. Performance Management の概要
2. Performance Management を使ってみよう	2. Performance Management を使ってみよう
【設計編】	【設計編】
3. Performance Management を活用した稼働監視システムの設計	3. Performance Management を活用した稼働監視システムの設計
4. Performance Management の機能	4. Performance Management の機能
【構築編】	【構築編】
5. インストールとセットアップ (Windows の場合)	5. インストールとセットアップ (Windows の場合)
6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)	6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

JP1 Version 8 JP1/Performance Management システム構築・運用ガイド (3020-3-K61-80)	JP1 Version 9 JP1/Performance Management 設計・構築ガイド (3020-3-R31)
【運用・操作編】	マニュアル「JP1 Version 9 JP1/Performance Management 運用ガイド」(3020-3-R32)へ移動
7. Performance Management の起動と停止	
8. ユーザーアカウントの管理	
9. エージェントの監視	
10. 稼働監視データの管理	
11. 稼働分析のためのレポートの作成	
12. アラームによる稼働監視	
13. イベントの表示	
14. バックアップとリストア	
【システム連携編】	
15. クラスタシステムでの構築と運用	
16. 統合管理製品 (JP1/IM) と連携した稼働監視	
17. ネットワーク管理製品 (NNM) と連携した稼働監視	
18. ODBC 準拠のアプリケーションプログラムと連携した稼働分析	
【トラブルシューティング編】	
19. Performance Management の障害検知	
20. トラブルへの対処方法	
付録 A 制限値	付録 A 制限値
付録 B 命名規則	付録 B 命名規則
付録 C システム見積み	付録 C システム見積み
付録 D カーネルパラメーター一覧	付録 D カーネルパラメーター一覧
付録 E 移行手順と移行時の注意事項	付録 E 移行手順と移行時の注意事項
付録 F 日本語版と英語版の混在環境での注意事項	「付録 F 日本語版と英語版の混在環境での注意事項」は、マニュアル「JP1 Version 9 JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」(3020-3-R31)の「4.8.3 日本語版と英語版の混在環境での注意事項」へ移動しました。
付録 G バージョン互換	付録 F バージョン互換
付録 H 動作ログの出力	付録 G 動作ログの出力
付録 I ヘルスチェックエージェント	付録 H ヘルスチェックエージェント
-	付録 I コマンドの格納先
付録 J 各バージョンの変更内容	付録 J 各バージョンの変更内容

JP1 Version 8 JP1/Performance Management システム構築・運用ガイド (3020-3-K61-80)	JP1 Version 9 JP1/Performance Management 設計・構築ガイド (3020-3-R31)
付録 K 用語解説	付録 K 用語解説

JP1/Performance Management マニュアルの使い分けについて

JP1/Performance Management のマニュアルは、次の表に示すマニュアルに分かれています。次の表で各マニュアルの記述内容をご確認の上、利用目的に合わせてマニュアルをお読みください。

マニュアル名	記述内容
JP1/Performance Management 設計・構築ガイド	機能および設計・構築方法
JP1/Performance Management 運用ガイド	操作方法
JP1/Performance Management リファレンス	画面、コマンドおよびメッセージ

読書手順

このマニュアルは、利用目的に合わせて章を選択して読むことができます。利用目的別にお読みいただくことをお勧めします。

マニュアルを読む目的	記述箇所
JP1/Performance Management の特長を知りたい。	1 章
JP1/Performance Management の使い方を知りたい。	2 章
JP1/Performance Management をどのように運用すればよいのかを知りたい。	3 章
JP1/Performance Management の機能について知りたい。	4 章
インストールとセットアップ方法を知りたい。	5 章、6 章

このマニュアルでの表記

このマニュアルでは、日立製品およびその他の製品の名称を省略して表記しています。製品の正式名称と、このマニュアルでの表記を次に示します。

このマニュアルでの表記	正式名称
AIX	AIX 5L V5.3
	AIX V6.1
	AIX V7.1
HP-UX	HP-UX 11i V2 (IPF)
	HP-UX 11i V3 (IPF)
Hyper-V	Microsoft(R) Hyper-V(TM) 1.0
	Microsoft(R) Hyper-V(TM) 2.0

このマニュアルでの表記			正式名称
Internet Explorer			Microsoft(R) Internet Explorer(R)
			Windows(R) Internet Explorer(R)
IPF			Itanium(R) Processor Family
J2EE			Java(TM) 2 Platform, Enterprise Edition
JP1/IM	JP1/IM - Manager		JP1/Integrated Management - Manager
	JP1/IM - View		JP1/Integrated Management - View
JP1/NETM/DM			JP1/NETM/DM Client
			JP1/NETM/DM Manager
			JP1/NETM/DM SubManager
Linux	Linux (IPF)	Linux 5 Advanced Platform (IPF)	Red Hat Enterprise Linux(R) 5 Advanced Platform (IPF)
		Linux 5 (IPF)	Red Hat Enterprise Linux(R) 5 (IPF)
		Linux AS 4 (IPF)	Red Hat Enterprise Linux(R) AS 4 (IPF)
	Linux (x64)	Linux 5 Advanced Platform (AMD/Intel 64)	Red Hat Enterprise Linux(R) 5 Advanced Platform (AMD/Intel 64)
		Linux 5 (AMD/Intel 64)	Red Hat Enterprise Linux(R) 5 (AMD/Intel 64)
		Linux AS 4 (AMD64 & Intel EM64T)	Red Hat Enterprise Linux(R) AS 4 (AMD64 & Intel EM64T)
		Linux ES 4 (AMD64 & Intel EM64T)	Red Hat Enterprise Linux(R) ES 4 (AMD64 & Intel EM64T)
	Linux (x86)	Linux 5 Advanced Platform (x86)	Red Hat Enterprise Linux(R) 5 Advanced Platform (x86)
		Linux 5 (x86)	Red Hat Enterprise Linux(R) 5 (x86)

このマニュアルでの表記			正式名称
		Linux AS 4 (x86)	Red Hat Enterprise Linux(R) AS 4 (x86)
		Linux ES 4 (x86)	Red Hat Enterprise Linux(R) ES 4 (x86)
	Linux Server 6	Linux Server 6 (32-bit x86)	Red Hat Enterprise Linux(R) Server 6 (32-bit x86)
		Linux Server 6 (64-bit x86_64)	Red Hat Enterprise Linux(R) Server 6 (64-bit x86_64)
MSCS			Microsoft(R) Cluster Service
NNM	HP NNM		HP Network Node Manager Software バージョン 6 以前
			HP Network Node Manager Starter Edition Software バージョン 7.5 以前
	JP1/Cm2/NNM		JP1/Cm2/Network Node Manager バージョン 7 以前
			JP1/Cm2/Network Node Manager Starter Edition 250 バージョン 8 以前
			JP1/Cm2/Network Node Manager Starter Edition Enterprise バージョン 8 以前
Performance Management			JP1/Performance Management
PFM - Agent	PFM - Agent for Cosminexus		JP1/Performance Management - Agent Option for uCosminexus Application Server
	PFM - Agent for DB2		JP1/Performance Management - Agent Option for IBM(R) DB2(R) Universal Database(TM)
	PFM - Agent for Domino		JP1/Performance Management - Agent Option for Domino

このマニュアルでの表記		正式名称
PFM - Agent for Enterprise Applications		JP1/Performance Management - Agent Option for Enterprise Applications
PFM - Agent for Exchange Server		JP1/Performance Management - Agent Option for Microsoft(R) Exchange Server
PFM - Agent for HiRDB		JP1/Performance Management - Agent Option for HiRDB
PFM - Agent for IIS		JP1/Performance Management - Agent Option for Microsoft(R) Internet Information Server
PFM - Agent for JP1/AJS	PFM - Agent for JP1/AJS2	JP1/Performance Management - Agent Option for JP1/AJS2
	PFM - Agent for JP1/AJS3	JP1/Performance Management - Agent Option for JP1/AJS3
PFM - Agent for Microsoft SQL Server		JP1/Performance Management - Agent Option for Microsoft(R) SQL Server
PFM - Agent for OpenTP1		JP1/Performance Management - Agent Option for OpenTP1
PFM - Agent for Oracle		JP1/Performance Management - Agent Option for Oracle
PFM - Agent for Platform	PFM - Agent for Platform (UNIX)	JP1/Performance Management - Agent Option for Platform (UNIX 用)
	PFM - Agent for Platform (Windows)	JP1/Performance Management - Agent Option for Platform (Windows 用)
PFM - Agent for Service Response		JP1/Performance Management - Agent Option for Service Response

このマニュアルでの表記		正式名称
	PFM - Agent for Virtual Machine	JP1/Performance Management - Agent Option for Virtual Machine
	PFM - Agent for WebLogic Server	JP1/Performance Management - Agent Option for BEA WebLogic Server
		JP1/Performance Management - Agent Option for Oracle(R) WebLogic Server
	PFM - Agent for WebSphere Application Server	JP1/Performance Management - Agent Option for IBM WebSphere Application Server
	PFM - Agent for WebSphere MQ	JP1/Performance Management - Agent Option for IBM WebSphere MQ
PFM - Base		JP1/Performance Management - Base
PFM - Manager		JP1/Performance Management - Manager
PFM - RM	PFM - RM for Microsoft SQL Server	JP1/Performance Management - Remote Monitor for Microsoft(R) SQL Server
	PFM - RM for Oracle	JP1/Performance Management - Remote Monitor for Oracle
	PFM - RM for Platform	JP1/Performance Management - Remote Monitor for Platform
PFM - Web Console		JP1/Performance Management - Web Console
Solaris	Solaris 9	Solaris 9 (SPARC)
	Solaris 10	Solaris 10 (SPARC)
		Solaris 10 (x64)
		Solaris 10 (x86)

このマニュアルでの表記		正式名称
Windows Server 2003	Windows Server 2003 (x64) または 2003 (x64)	Microsoft(R) Windows Server(R) 2003, Enterprise x64 Edition
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2003, Standard x64 Edition
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2003 R2, Enterprise x64 Edition
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2003 R2, Standard x64 Edition
	Windows Server 2003 (x86) または 2003 (x86)	Microsoft(R) Windows Server(R) 2003, Enterprise Edition
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2003, Standard Edition
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2003 R2, Enterprise Edition
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2003 R2, Standard Edition
Windows Server 2008		Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 Enterprise
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 Enterprise without Hyper-V(TM)
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 Standard
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 Standard without Hyper-V(TM)
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 R2 Datacenter
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 R2 Enterprise

このマニュアルでの表記	正式名称
	Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 R2 Standard
WSFC	Microsoft(R) Windows Server(R) Failover Cluster

- PFM - Manager , PFM - Agent , PFM - Base , PFM - Web Console , および PFM - RM を総称して , Performance Management と表記することがあります。
- Windows Server 2003 および Windows Server 2008 を総称して , Windows と表記することがあります。
- HP-UX , Solaris , AIX および Linux を総称して , UNIX と表記することがあります。

このマニュアルで使用する英略語

このマニュアルで使用する英略語を , 次の表に示します。

このマニュアルでの表記	正式名称
CCMS	Computing Center Management System
CPU	Central Processing Unit
CSV	Comma Separated Values
DB	DataBase
DHCP	Dynamic Host Configuration Protocol
DNS	Domain Name System
EJB	Enterprise JavaBeans
ERP	Enterprise Resource Planning
FQDN	Fully Qualified Domain Name
FTP	File Transfer Protocol
GIF	Graphics Interchange Format
GMT	Greenwich Mean Time
GUI	Graphical User Interface
HTML	HyperText Markup Language
HTTP	HyperText Transfer Protocol
IP	Internet Protocol
LAN	Local Area Network
NAT	Network Address Translation
ODBC	Open DataBase Connectivity
OS	Operating System
PDF	Portable Document Format

このマニュアルでの表記	正式名称
SMTP	Simple Mail Transfer Protocol
SNMP	Simple Network Management Protocol
TCP	Transmission Control Protocol
UAC	User Account Control
URL	Uniform Resource Locator
UTC	Universal Time, Coordinated
WAN	Wide Area Network
WRP	Windows Resource Protection
XML	eXtensible Markup Language

このマニュアルで使用する記号

このマニュアルで使用する記号を次に示します。

記号	意味
[]	画面，タブ，項目名，ボタン，チェックボックスなどを示します。 (例) [メイン] 画面 [新規フォルダ] ボタン
太字	重要な用語，または利用状況によって異なる値であることを示します。

図中で使用する記号

このマニュアルの図中で使用する記号を次のように定義します。

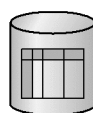
●コンピュータ



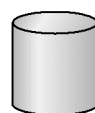
●サーバ



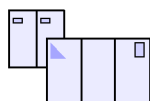
●データベース



●共有ディスクまたはローカルディスク



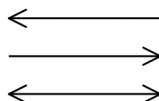
●ホストセンタ



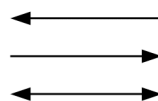
●データの流れ



●制御の流れ



●その他の流れ



●プログラム



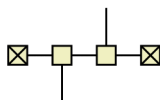
●入出力の動作



●画面



●処理の流れ

●ネットワーク
WAN●ネットワーク
LAN

●Eメール



●携帯電話



●障害



このマニュアルの数式中で使用する記号

このマニュアルの数式中で使用する記号を次に示します。

記号	意味
*	乗算記号を示します。
/	除算記号を示します。

フォルダおよびディレクトリの統一表記

このマニュアルでは、Windows で使用されている「フォルダ」とUNIX で使用されている「ディレクトリ」とが同じ場合、原則として、「ディレクトリ」と統一表記しています。

ブックマークの用語表記について

このマニュアルでは、「ブックマーク」と「複合ブックマーク」を区別する必要がない個所では「ブックマーク」と表記しています。複合ブックマーク独自の機能を説明している個所だけ「複合ブックマーク」と表記しています。

このマニュアルでのプロダクト名，サービス ID，およびサービスキーの表記

Performance Management 09-00 以降では，プロダクト名表示機能を有効にすることで，サービス ID およびサービスキーをプロダクト名で表示できます。プロダクト名表示機能を有効にしたときの，PFM - Agent for Platform (Windows) のサービス ID およびサービスキーの表示例を次に示します。

識別子	プロダクト名表示機能	
	無効	有効
サービス ID	TS1 ホスト名	ホスト名 <Windows>(Store)
	TA1 ホスト名	ホスト名 <Windows>
サービスキー	agtt	Windows

このマニュアルでは，プロダクト名表示機能を有効としたときの形式で表記しています。

なお，プロダクト名表示機能を有効にできるのは，次の条件を同時に満たす場合です。

- PFM - Agent または PFM - RM の同一装置内の前提プログラム (PFM - Manager または PFM - Base) のバージョンが 09-00 以降
- PFM - Web Console および接続先の PFM - Manager のバージョンが 09-00 以降

Performance Management のインストール先ディレクトリの表記

このマニュアルでは，Windows 版 Performance Management のインストール先フォルダをインストール先フォルダ，UNIX 版 Performance Management のインストール先ディレクトリをインストール先ディレクトリと表記しています。

Windows 版 Performance Management のデフォルトのインストール先フォルダは，次のとおりです。

PFM - Web Console 以外の Performance Management のプログラムのインストール先フォルダ

- Windows Server 2003 (x64)，64 ビット版の Windows Server 2008 の場合
システムドライブ ¥Program Files (x86)¥Hitachi¥jplpc
- 上記以外の場合
システムドライブ ¥Program Files¥Hitachi¥jplpc

PFM - Web Console のインストール先フォルダ

- Windows Server 2003 (x64)，64 ビット版の Windows Server 2008 の場合
システムドライブ ¥Program Files (x86)¥Hitachi¥jplpcWebCon

- ・ 上記以外の場合

システムドライブ ¥Program Files¥Hitachi¥jp1pcWebCon

UNIX 版 Performance Management のデフォルトのインストール先ディレクトリは、次のとおりです。

PFM - Web Console 以外の Performance Management のプログラムのインストール先ディレクトリ

/opt/jp1pc

PFM - Web Console のインストール先ディレクトリ

/opt/jp1pcwebcon

Performance Management で対応する NNM 製品について

Performance Management では、次の製品との連携をサポートしています。

- ・ HP Network Node Manager Software バージョン 6 以前
- ・ HP Network Node Manager Starter Edition Software バージョン 7.5 以前
- ・ JP1/Cm2/Network Node Manager バージョン 7 以前
- ・ JP1/Cm2/Network Node Manager Starter Edition 250 バージョン 8 以前
- ・ JP1/Cm2/Network Node Manager Starter Edition Enterprise バージョン 8 以前

このマニュアルでは、これらの製品を「NNM」、これらの製品と連携するための機能を「NNM 連携」と表記しています。

なお、Performance Management では、次の製品との連携はサポートしていません。ご注意ください。

- ・ HP Network Node Manager i Software v8.10
- ・ JP1/Cm2/Network Node Manager i 09-00 以降

KB (キロバイト) などの単位表記について

1KB (キロバイト), 1MB (メガバイト), 1GB (ギガバイト), 1TB (テラバイト) はそれぞれ 1,024 バイト, 1,024² バイト, 1,024³ バイト, 1,024⁴ バイトです。

目次

第 1 編 概要編

1	Performance Management の概要	1
1.1	企業システムでの稼働監視の必要性	2
1.1.1	なぜ稼働監視が必要か	2
1.1.2	Performance Management による稼働監視	6
1.1.3	Performance Management が提供する製品群	9
1.2	Performance Management の特長	11
1.2.1	大規模で複雑な企業システムの稼働状況を一元監視できます	11
1.2.2	高い信頼性，可用性の求められるミッションクリティカルシステムで運用 できます	14
1.2.3	稼働監視システムの構築・運用が容易にできます	19
1.2.4	目的に応じた監視方式を選択できます	27
1.2.5	ユーザーごとに監視できる範囲を設定できます	30
2	Performance Management を使ってみよう	33
2.1	パフォーマンス監視の背景	34
2.2	パフォーマンス監視システムの設計・構築	36
2.2.1	監視項目の検討	36
2.2.2	システム構成の検討	36
2.3	パフォーマンス監視システムの運用	38
2.3.1	Performance Management のサービスを起動する	38
2.3.2	Web ブラウザで PFM - Web Console にログインする	38
2.3.3	ユーザーアカウントを作成する	40
2.3.4	監視用のエージェント階層を作成する	42
2.3.5	レポートを表示する	45
2.3.6	アラームを利用して監視する	47
2.3.7	イベントを表示する	52

第2編 設計編

3

Performance Management を活用した稼働監視システムの設計	57
3.1 Performance Management のサポート範囲	58
3.2 Performance Management の設計から運用までの流れ	60
3.3 稼働監視システムの構成設計	62
3.3.1 システム構成の検討	62
3.3.2 クラスタ構成の検討	67
3.3.3 ネットワーク構成の検討	68
3.4 稼働監視システムの運用設計	72
3.4.1 ユーザー管理方式および業務グループ利用の検討	72
3.4.2 監視エージェントの管理方式の検討	74
3.4.3 監視項目の検討	75
3.4.4 アラームテーブルのバインド方式の検討	79
3.4.5 データの管理方式の検討	81
3.4.6 Store データベースの保存方式の検討	83
3.4.7 稼働監視システム自身の障害対策の検討	84
3.4.8 Performance Management で必要なディスク容量の見積もり	86

4

Performance Management の機能	89
4.1 Performance Management のサービス	90
4.1.1 サービスの概要	90
4.1.2 サービスの表示・指定方法	95
4.2 パフォーマンスデータを収集・管理する機能	100
4.2.1 パフォーマンスデータとは	100
4.2.2 パフォーマンスデータの収集機能	104
4.2.3 パフォーマンスデータの管理機能	108
4.2.4 パフォーマンスデータの要約	118
4.2.5 Store データベースの保存方式	120
4.2.6 Store バージョン 2.0 で利用できる機能	123
4.2.7 Store バージョン 2.0 の導入の流れ	125
4.3 システムが危険域に達したときに警告する機能	128
4.3.1 アラームイベントデータとは	128
4.3.2 アラームイベントデータ収集機能	128
4.3.3 アラームイベントデータの要約とレコード数の上限	130

4.4	稼働監視システム自身の障害を検知する機能	131
4.5	稼働監視システムのサービスを自動的に再起動する機能	140
4.6	Performance Management の監視コンソール機能	144
4.7	業務グループごとに監視する機能	147
4.8	Performance Management のコマンド	151
4.8.1	システムの設定で使用するコマンド	151
4.8.2	システムの運用で使用するコマンド	156
4.8.3	システムの起動・停止で使用するコマンド	158
4.8.4	コマンドの操作対象ホストを制限する設定	159
4.9	注意事項	160
4.9.1	監視対象マシンの時刻設定に関する注意事項	160
4.9.2	日本語環境に関する注意事項	160
4.9.3	日本語版と英語版の混在環境での注意事項	161
4.9.4	一時ファイルに関する注意事項	162
4.9.5	Windows Server 2008 を利用する場合の注意事項	164

第3編 構築編

5	インストールとセットアップ (Windows の場合)	167
5.1	インストールとセットアップ	168
5.1.1	インストールとセットアップの前に	168
5.1.2	インストールとセットアップの流れ	178
5.1.3	インストール手順	180
5.1.4	PFM - Manager のセットアップ手順	183
5.1.5	PFM - Web Console のセットアップ手順	189
5.1.6	監視コンソールの Web ブラウザの設定手順	191
5.2	アンインストールとアンセットアップ	196
5.2.1	アンインストールとアンセットアップの前に	196
5.2.2	アンインストール手順	198
5.2.3	サービス情報の削除	199
5.3	Performance Management のシステム構成の変更	201
5.3.1	ネットワーク構成の変更	201
5.3.2	接続先 PFM - Manager の変更	207
5.3.3	Performance Management システムでのホスト名の変更	209

5.3.4	運用開始後のマシンの物理ホスト名の変更	222
5.4	Performance Management の運用方式の変更	239
5.4.1	共通メッセージログのファイルサイズ設定	239
5.4.2	イベントデータの格納先の変更	240
5.4.3	通信回線の切断の設定	244
5.4.4	アラームテーブル複数バインド機能の設定	244
5.4.5	IP アドレスの設定変更	246
5.4.6	PFM - Web Console の設定変更	249
5.4.7	Store バージョン 2.0 のセットアップとアンセットアップ	262
5.4.8	ファイル権限の強化	264
5.4.9	プロダクト名表示機能の設定	265
5.4.10	アラーム正常回復時の測定値出力機能の設定	266
5.4.11	Agent ホストリモート操作制限オプションおよび Agent 間直接情報参照抑止オプションの設定	269
5.5	Web ブラウザでマニュアルを参照するための設定	272
5.5.1	設定手順	272
5.5.2	参照手順	273

6

	インストールとセットアップ (UNIX の場合)	275
6.1	インストールとセットアップ	276
6.1.1	インストールとセットアップの前に	276
6.1.2	インストールとセットアップの流れ	286
6.1.3	インストール手順	288
6.1.4	PFM - Manager のセットアップ手順	298
6.1.5	PFM - Web Console のセットアップ手順	305
6.1.6	監視コンソールの Web ブラウザの設定手順	309
6.2	アンインストールとアンセットアップ	311
6.2.1	アンインストールとアンセットアップの前に	311
6.2.2	アンインストール手順	313
6.2.3	サービス情報の削除	315
6.3	Performance Management のシステム構成の変更	317
6.3.1	ネットワーク構成の変更	317
6.3.2	接続先 PFM - Manager の変更	323
6.3.3	Performance Management システムでのホスト名の変更	325
6.3.4	運用開始後のマシンの物理ホスト名の変更	338
6.4	Performance Management の運用方式の変更	356

6.4.1	共通メッセージログのファイルサイズ設定	356
6.4.2	イベントデータの格納先の変更	357
6.4.3	通信回線の切断の設定	361
6.4.4	アラームテーブル複数バインド機能の設定	361
6.4.5	IP アドレスの設定変更	363
6.4.6	PFM - Web Console の設定変更	366
6.4.7	Store バージョン 2.0 のセットアップとアンセットアップ	379
6.4.8	プロダクト名表示機能の設定	381
6.4.9	アラーム正常回復時の測定値出力機能の設定	382
6.4.10	Agent ホストリモート操作制限オプションおよび Agent 間直接情報参照抑止オプションの設定	385
6.5	Web ブラウザでマニュアルを参照するための設定	388
6.5.1	設定手順	388
6.5.2	参照手順	389

付録 391

付録 A	制限値	392
付録 A.1	システム構成	392
付録 A.2	PFM - Web Console の表示	394
付録 A.3	Store データベースのサイズ	395
付録 A.4	アラーム数, アラームテーブル数の制限について	395
付録 B	命名規則	396
付録 B.1	サービスの命名規則	396
付録 B.2	Performance Management のサービス名と Windows のサービス名との対応	400
付録 B.3	PFM - Agent のサービスキー一覧 (プロダクト名表示機能有効時)	402
付録 C	システム見積もり	403
付録 C.1	メモリー所要量	403
付録 C.2	ディスク占有量	404
付録 C.3	クラスタシステムで運用する場合のディスク占有量	412
付録 C.4	PFM - Agent 08-00 以降を Store データベース (Store バージョン 2.0) で使用する 場合のディスク占有量	418
付録 C.5	Store データベースに対する jpctool db backup コマンド・jpctool db dump コマンド実行時に必要なディスク占有量	425
付録 C.6	レポートキャッシュファイルを使用する場合のディスク占有量	430
付録 C.7	PFM - Manager に接続する PFM - Agent および PFM - RM が多い場合の見積 もりと設定	433
付録 D	カーネルパラメーター一覧	438

付録 D.1 HP-UX の場合	438
付録 D.2 Solaris の場合	442
付録 D.3 AIX の場合	446
付録 D.4 Linux の場合	449
付録 E 移行手順と移行時の注意事項	452
付録 E.1 Performance Management の製品体系の変更	452
付録 E.2 08-00 以降の PFM - Web Console と 07-00 以前の PFM - View との関係について	453
付録 E.3 07-50 以前から 09-00 以降へ移行時のインストール順序	454
付録 E.4 Performance Management のプログラムのバージョンアップ方法	458
付録 E.5 移行時の注意事項	459
付録 F バージョン互換	463
付録 F.1 システム構成のバージョン互換	463
付録 F.2 データモデルのバージョン互換	469
付録 F.3 PFM - Web Console でのデータモデルの表示	471
付録 F.4 PFM - RM を運用する場合のシステム構成のバージョン互換	471
付録 G 動作ログの出力	473
付録 G.1 動作ログに出力される事象の種別	473
付録 G.2 動作ログの保存形式	474
付録 G.3 動作ログの出力形式	474
付録 G.4 動作ログを出力するための設定	483
付録 H ヘルスチェックエージェント	486
付録 H.1 データモデル	486
付録 H.2 監視テンプレートの概要	512
付録 H.3 監視テンプレート (アラーム)	512
付録 H.4 監視テンプレート (レポート)	522
付録 I コマンドの格納先	533
付録 I.1 コマンドの種類と格納先	533
付録 I.2 コマンドごとの格納先一覧	533
付録 J 各バージョンの変更内容	535
付録 J.1 09-10 の変更内容	535
付録 J.2 09-00 の変更内容	536
付録 J.3 08-50 の変更内容 (適用 OS が Windows Server 2008)	537
付録 J.4 08-50 の変更内容 (適用 OS が Windows Server 2008 以外)	537
付録 J.5 08-11 の変更内容	537
付録 J.6 08-10 の変更内容	538
付録 J.7 08-00 の変更内容	538

付録 J.8 07-50 の変更内容	539
付録 J.9 07-00 の変更内容	539
付録 K (3020-3-R31-31) の変更内容	540
付録 L 用語解説	571

索引	581
----	-----

1

Performance Management の概要

Performance Management は、企業システムを構成するデータベースやアプリケーションなどの稼働状況を監視する製品です。システムが危険域に達したときに事前にシステム管理者に通知することで、業務に影響が出る前に障害を回避できます。また、稼働状況を中長期的な視点で分析するために必要なデータを、効率良く収集します。

この章では、Performance Management の特長について説明します。

1.1 企業システムでの稼働監視の必要性

1.2 Performance Management の特長

1.1 企業システムでの稼働監視の必要性

今日の企業システムは、ビジネスを支える重要な役割を担っています。そのため、企業の基幹業務システムでトラブルが発生すると、業務の遅延や中断による巨額の損失が発生するだけでなく、顧客の信用を失うおそれがあります。したがって、企業システム全体の可用性を向上したり、システムのボトルネックを解消し業務を安定稼働させたりすることは、ビジネスの重要な課題となっています。

ここでは、企業システムの可用性を向上させたり、システムを安定稼働させたりするにはどのようにすればよいかを説明します。

1.1.1 なぜ稼働監視が必要か

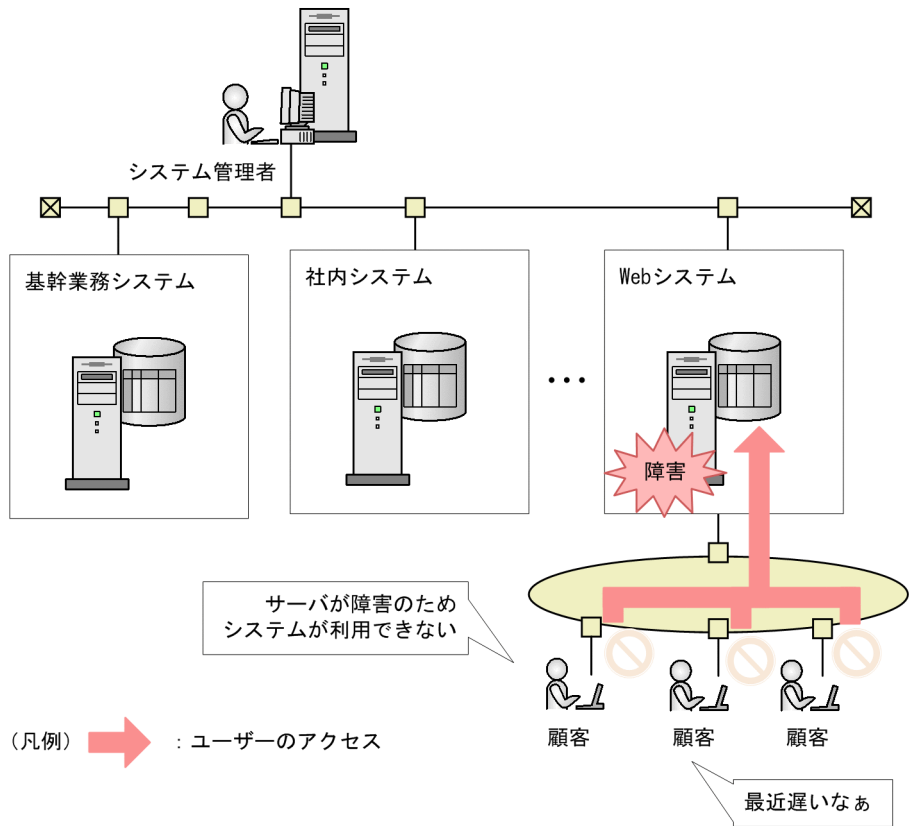
企業システムを安定稼働させ続けるためには、システム管理者は、大規模化、複雑化したシステムのデータベースやアプリケーションなどの障害を検知して適切に対処する必要があります。また、ネットワークや OS などのリソースやデータベースの性能などの稼働情報を収集・分析して障害の発生を予見し、危険を未然に回避しながら運用管理をすることが必要になります。

ここでは、稼働監視をしていない場合の問題と、稼働監視で実現できることについて説明します。

(1) 稼働を監視していない場合の問題点

システム管理者は、システムのデータベースサーバやアプリケーションサーバに障害が発生した場合、稼働中のシステムへの影響を最小限にすることが必要です。そのため、サーバの稼働状態を監視して、システム障害を検知し、すぐに対処できる仕組みを検討しなければなりません。しかし、稼働監視していない場合、サーバでいったん障害が発生すると、システム利用者がシステムを使えないことによって業務に支障が出るおそれがあります。稼働を監視していない場合の問題点を次の図に示します。

図 1-1 稼働を監視していない場合の問題点

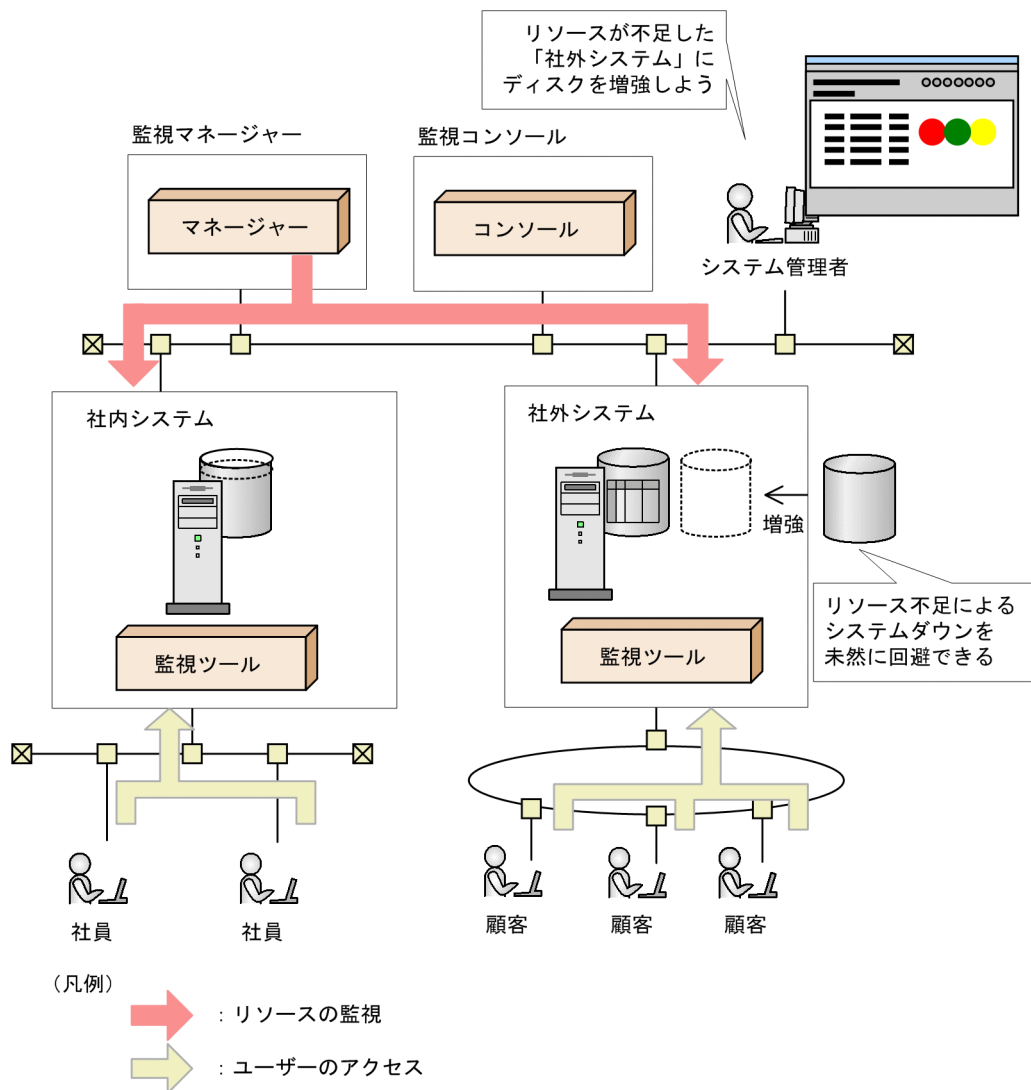


(2) 稼働監視で実現できること

企業システムを 24 時間 365 日安定稼働させるために、システム管理者はデータベース、ネットワーク、OS などのリソースを監視して、稼働中のシステムに十分なリソースが確保されているかを確認します。これによって、リソース不足によるシステムダウンを未然に回避できます。リソース監視の概要を次の図に示します。

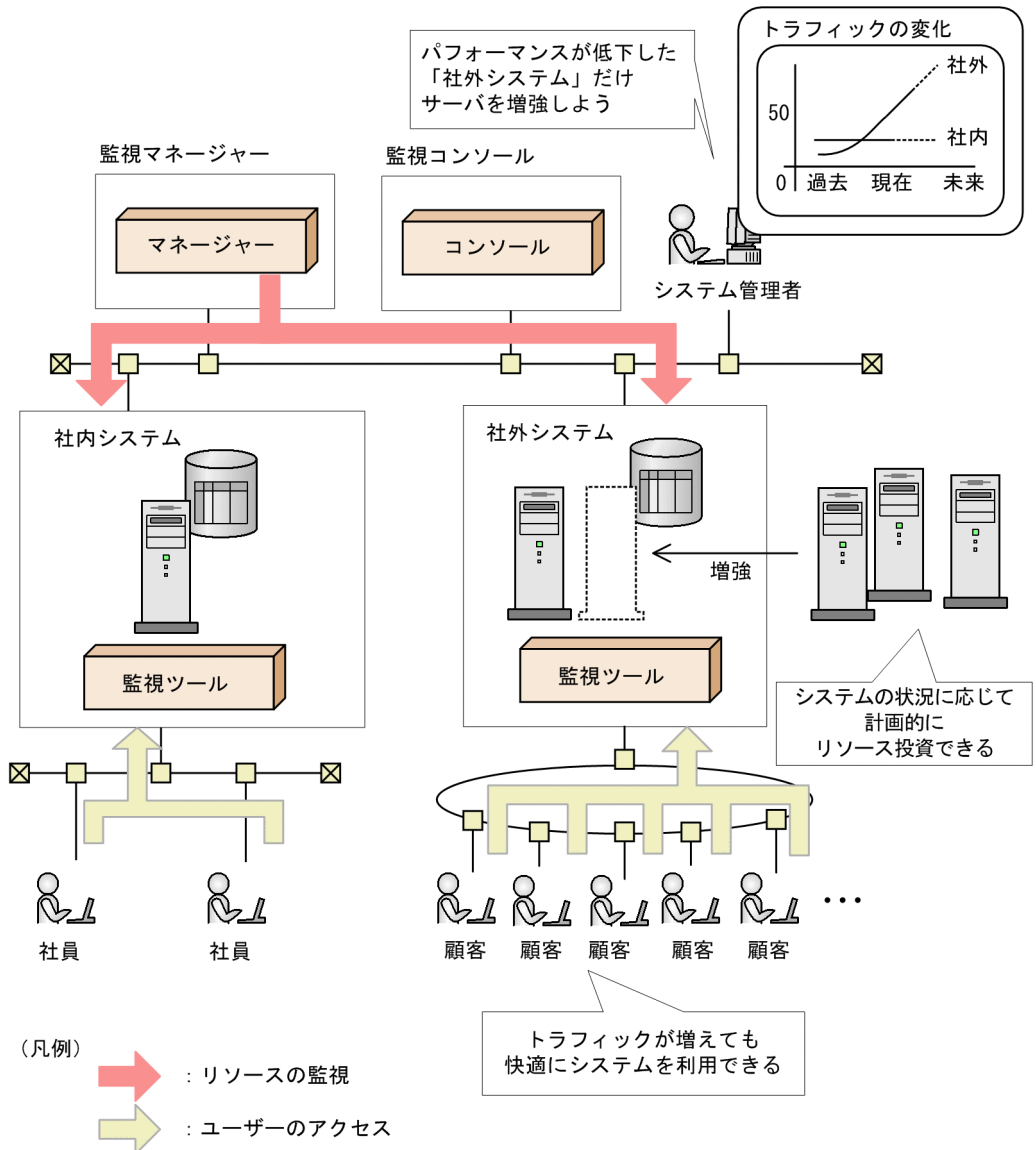
1. Performance Management の概要

図 1-2 リソース監視の概要



また、システム管理者は業務アプリケーションサーバやデータベースサーバのトラフィック量やレスポンスタイムなどのパフォーマンスを監視して、監視結果（パフォーマンスデータ）をレポートに表示させることで、システム利用者が快適にシステムを利用できているかや、システムのボトルネックはどこにあるかなどを正しく把握できます。これによって、システムの状況に応じて計画的にリソースを投資できます。

図 1-3 パフォーマンス監視の概要



このように、稼働監視をすると、大規模で複雑なシステムやミッションクリティカルなシステムを、安定稼働できます。また、システム全体のパフォーマンスデータを収集・分析して障害の発生を予見することで、危険を未然に回避しながら継続的に運用できます。

また、稼働監視をすると、システムのサービスレベルを定量的に把握できます。そのため、計画的なシステム投資や、ビジネスチャンスの損失を未然に防止することができます。

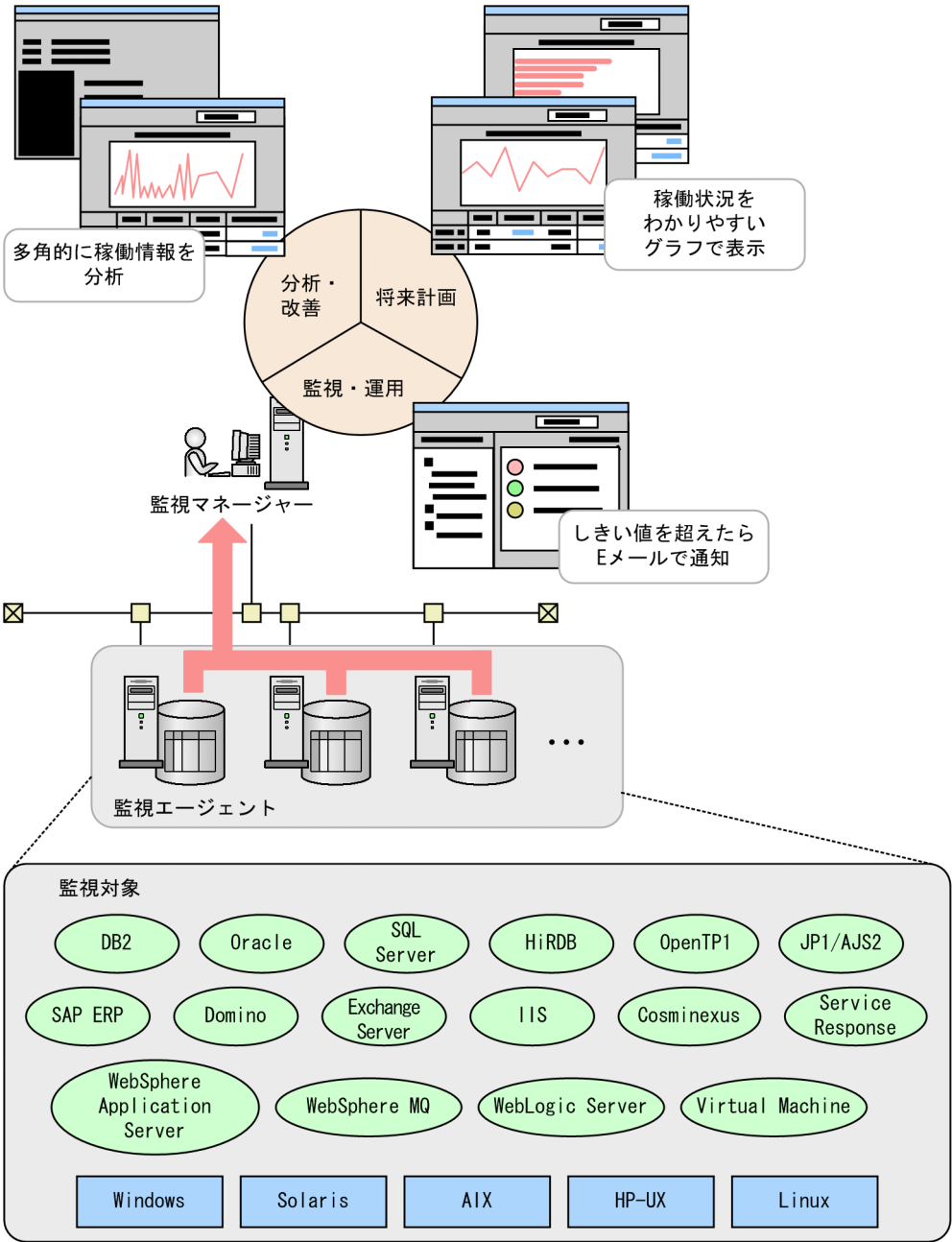
1.1.2 Performance Management による稼働監視

Performance Management は企業システム内のデータベースサーバ、アプリケーションサーバなどの稼働状況を監視して、一元管理するための製品です。

Performance Management を利用した稼働監視は、監視対象に合わせたエージェントを配置することで、詳細な情報を取得できるため、きめ細かな稼働監視システムを実現できます。

Performance Management ではさまざまな監視対象に対応したエージェント製品群や稼働情報を分析するための製品を用意しています。必要なエージェントだけを追加して監視できるため、既存のシステム環境に応じて柔軟に対応できます。また、運用時には監視対象をリアルタイムに監視するだけでなく、システムリソースなどのパフォーマンスデータを収集し、蓄積します。この収集、蓄積されたデータを分析することで、システム全体の稼働状態の分析や将来に向けて長期的なパフォーマンスの改善に役立てることができます。Performance Management による稼働監視を次の図に示します。

図 1-4 Performance Management による稼働監視



上の図に示したように Performance Management を使用することで、システム管理者は多種多様な製品が混在している分散システム環境でも、プラットフォームの違いを意識することなくパフォーマンスデータを収集し、一元管理できます。Performance Management で収集できるパフォーマンスデータの例を次の表に示します。

表 1-1 収集できるパフォーマンスデータの例

監視対象		収集できる主なパフォーマンスデータの例
OS	Windows	CPU 使用率、メモリーの空き容量、ディスク使用状況、ネットワーク使用状況、デバイス情報など
	HP-UX, Solaris, AIX, Linux	CPU 使用率、メモリーの空き容量、ディスク使用状況、ネットワークデータ転送量など
データベースサーバ	Oracle	データベース使用率、SQL 情報、パラメーター情報など
	SQL Server	CPU 使用状況、データベーススペース使用状況、キャッシュヒット率、ロック発生情報など
	DB2	メモリー使用状況、ソート情報、エラー情報、構成パラメーター情報など
	HiRDB	トランザクション数、ログ入出力エラー回数、HiRDB ファイルシステムスペース利用状況など
分散トランザクションマネージャー	OpenTP1	トランザクション情報、RPC コール、スケジュール情報、ジャーナル取得状況など
ジョブ管理	AJS2 または AJS3	実行開始ジョブ数、遅延ジョブ数、滞留ジョブ数、ジョブの滞留時間など
Web サーバ	IIS	Web 接続失敗 (Not Found エラー) 状況、ASP のリクエスト実行時間、セッション情報など
Web アプリケーションサーバ	Cosminexus	Java ヒープの使用状況、J2EE サーバが使用する OS リソース消費量、EJB (Enterprise JavaBeans) 稼働情報、Web コンテナ稼働情報など
	WebLogic Server	スレッドプールの情報、EJB (Enterprise JavaBeans) 稼働情報など
	WebSphere Application Server	スレッドプールの情報、EJB (Enterprise JavaBeans) 稼働情報、Web コンテナ稼働情報など
サービスレスポンス管理	インターネットサービス	HTTP・SMTP・FTP・TCP などのプロトコルの応答時間
ERP	SAP R/3	ロール領域使用率 (SAP メモリー)、レスポンスタイム、システムログ/CCMS アラートなど
グループウェア	Lotus Notes/ Domino	ノートログ (log.nsf) の収集、ノートメールの発生状況、LDAP 詳細状況、レプリケーターによる複製実行状況など
	Exchange Server	キュー/メッセージ、ユーザーログオン、未使用 E メール BOX など
メッセージキューイング	WebSphere MQ	キュー情報、キューマネージャー情報、キューにアクセスしているハンドルの情報、チャネル情報

監視対象		収集できる主なパフォーマンスデータの例
仮想環境	VMware	物理サーバおよび各仮想マシンの次のパフォーマンスデータなど <ul style="list-style-type: none"> • CPU 使用状態 • ディスク I/O • ディスク使用率 • メモリー使用状態 • ネットワークデータ送受信量
	Hyper-V	• 物理サーバおよび各仮想マシンの次のパフォーマンスデータなど <ul style="list-style-type: none"> • CPU 使用状態 • ディスク I/O • メモリー使用状態 • ネットワークデータ送受信量 • 物理サーバの次のパフォーマンスデータなど <ul style="list-style-type: none"> • ディスク使用率
	日立サーバ仮想化機構「Virtage」	• 物理サーバおよび各仮想マシンの次のパフォーマンスデータなど <ul style="list-style-type: none"> • CPU 使用状態 • ディスク I/O • ネットワークデータ送受信量 • 物理サーバの次のパフォーマンスデータなど <ul style="list-style-type: none"> • メモリー使用状態

収集できるパフォーマンスデータの詳細については、各 PFM・Agent または PFM・RM マニュアルを参照してください。

1.1.3 Performance Management が提供する製品群

Performance Management は、稼働監視に必要な次の四つの製品を提供します。

監視マネージャー (PFM・Manager)

稼働状況を一元統合管理する。

監視コンソールサーバ (PFM・Web Console)

グラフィカルなレポートを出力し、Performance Management の各種設定や稼働状況の分析を支援する。

監視基盤 (PFM・Base)

稼働監視を行うために必要な基盤プログラム。収集した稼働監視データの管理やログの出力などを行う。

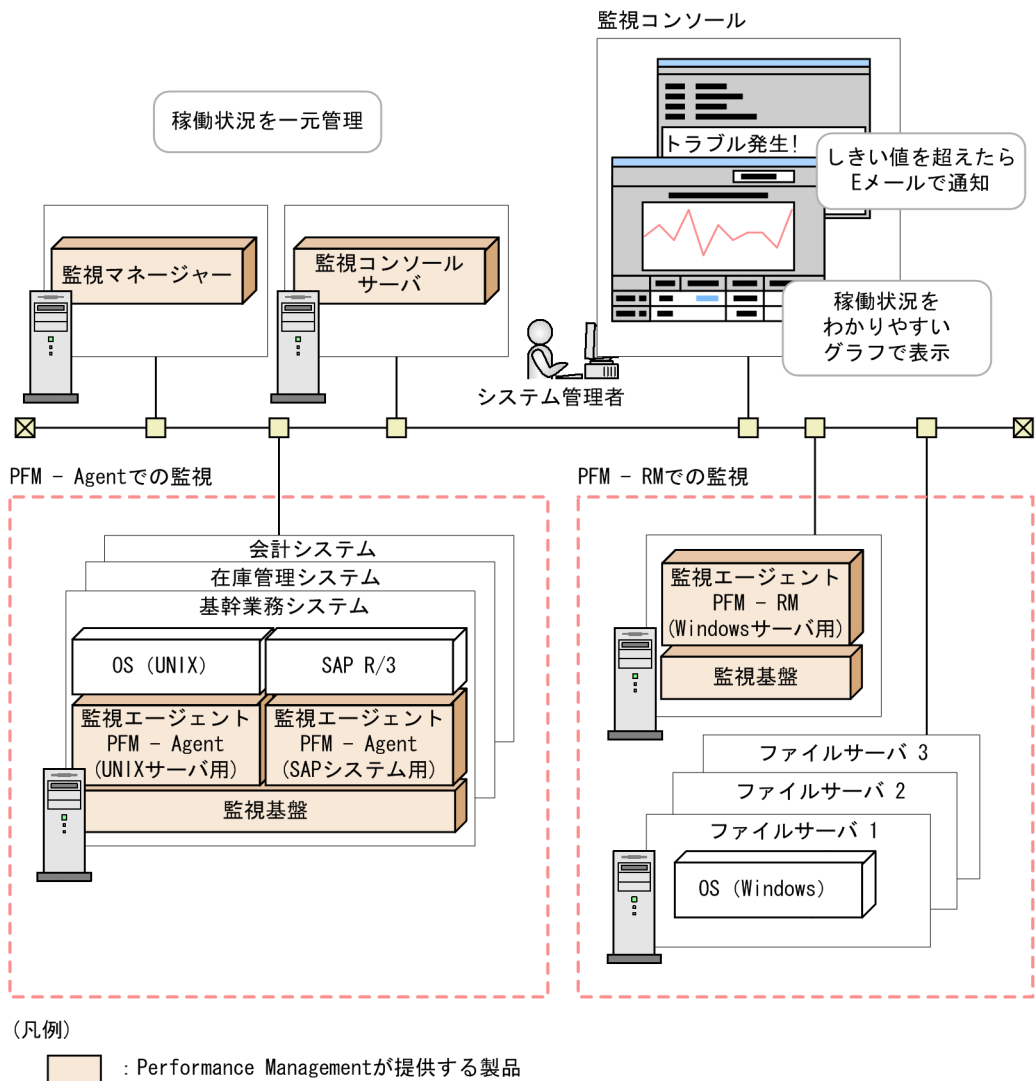
監視エージェント (PFM・Agent または PFM・RM)

OS やサーバプログラムの稼働状況を監視するエージェント。

PFM・Agent はエージェント監視を実施するために必要なプログラムで、監視対象サーバにインストールして使用する。PFM・RM はリモート監視を実施するために必要なプログラムであり、監視対象サーバにインストールする必要はない。

1. Performance Management の概要

図 1-5 Performance Management の構成例



1.2 Performance Management の特長

Performance Management は、大規模で複雑なシステムやミッションクリティカルのシステムでも、容易に業務アプリケーションのプロセスやデータベースリソースなどの稼働状況を把握できます。

ここでは、稼働監視を行うための Performance Management の特長を説明します。

1.2.1 大規模で複雑な企業システムの稼働状況を一元監視できます

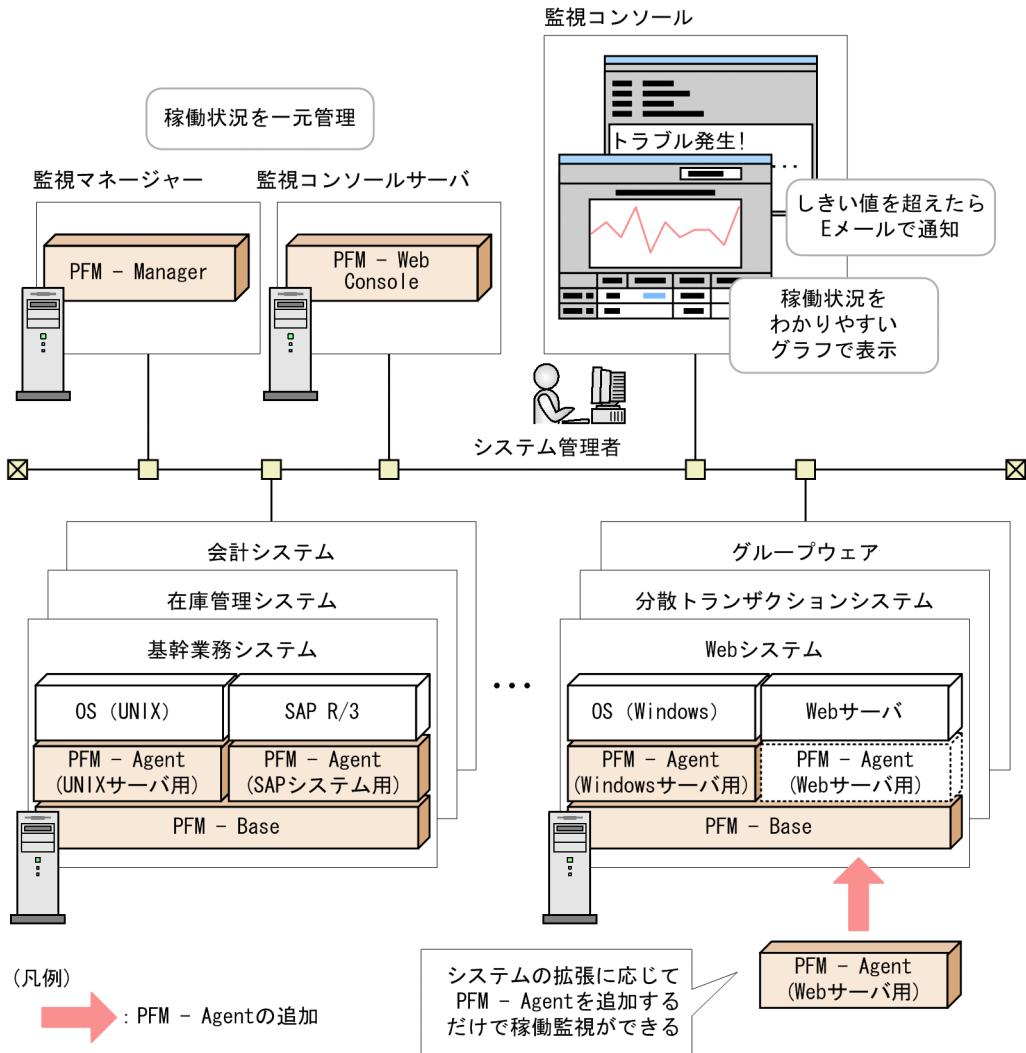
さまざまなサーバや業務アプリケーションが混在する大規模システムでは、プロセスやデータベースリソースの稼働を監視することは、大変な労力と時間が掛かる場合があります。しかし、Performance Management は大規模で複雑な構成の企業システムでも、容易に稼働監視システムを構築して一元監視できます。さらに、統合運用管理システムやネットワーク管理システムなどほかの運用管理システムと連携したり、システムの本質的な問題を把握するために収集したパフォーマンスデータを分析したりできます。これによって、企業システムにおける問題の早期検出、性能分析、システムの将来的な動作を見据えた補強計画を立てることができます。

ここでは、大規模システムで Performance Management を使うときの主な特長を説明します。

(1) 監視対象システムの構成に応じて容易に拡張できます

Performance Management は、データベースサーバや業務アプリケーションサーバなどを監視するための数多くの監視エージェントを提供しています。そのため、企業システムの環境に応じて、必要な監視エージェントを追加するだけで、稼働監視ができます。

図 1-6 監視対象のシステムが追加になった場合の構成変更の例



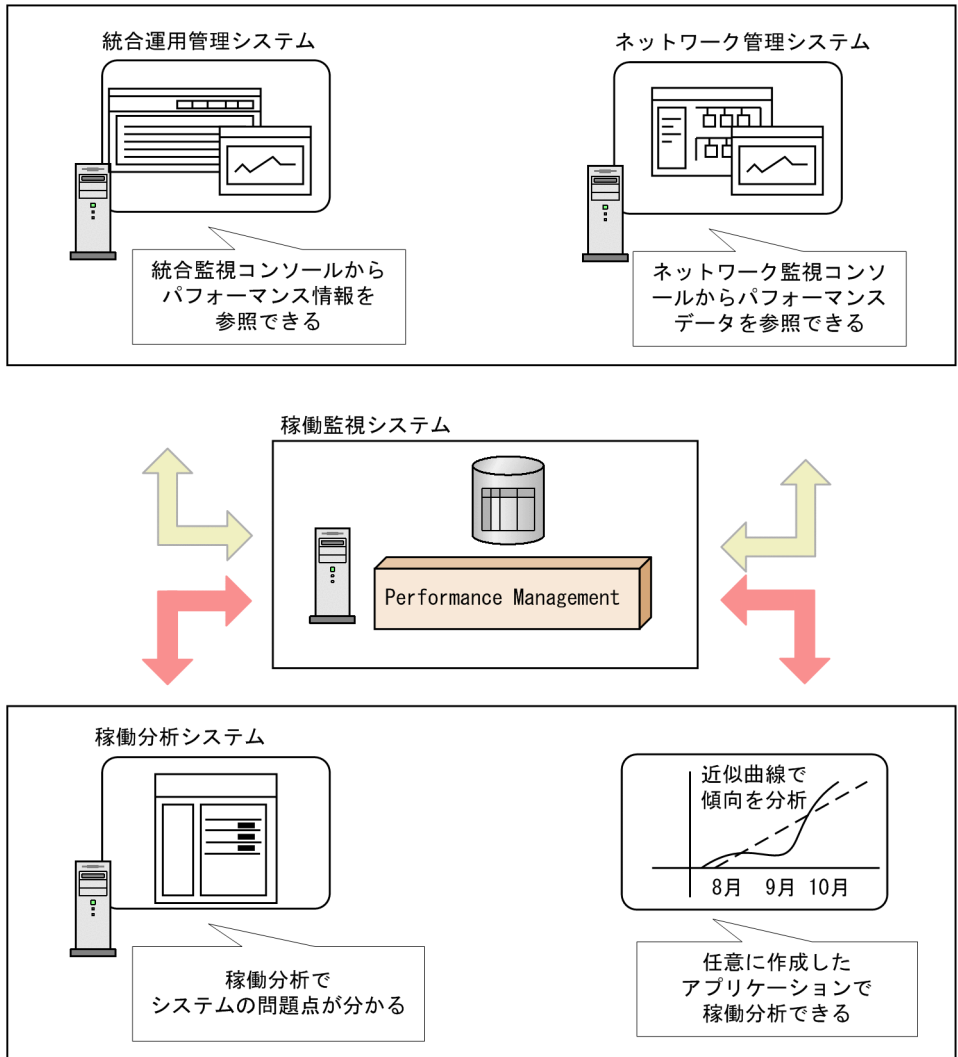
Performance Management を使った稼働監視システムの構築およびシステムの構成の詳細については、Windows の場合は「5. インストールとセットアップ (Windows の場合)」を、UNIX の場合は「6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)」を参照してください。

(2) 他システムと柔軟に連携できます

Performance Management は、複数のサーバやプログラムから成る大規模システムで、ほかのシステムと柔軟に連携できます。統合運用管理システムやネットワーク管理システムと連携すると、企業システム全体の視点で可用性や信頼性を向上させることができます。また、Performance Management で収集した稼働監視データを、稼働分析することで、システム管理者は企業システムの本質的な問題を把握することができます。

図 1-7 Performance Management のほかのシステムとの連携

システムの統合監視を実現するための連携



収集したパフォーマンスデータを有効活用するための連携

- システム統合管理製品と連携して企業システム全体の運用管理を最適化します
Performance Management から発行された JP1 イベントをシステム統合管理製品である JP1/IM で監視したり，Performance Management を JP1/IM から呼び出したりできます。また，Performance Management の状態を示すグラフィカルなアイコンによる一元監視もできます。これによって，システム管理者はパフォーマンスが低下してボトルネックになっている個所を特定でき，業務に重大な影響が出る前に，適切に対処できます。このように，稼働状況の監視から対策までのサイクルを企業システム全体の視点で統合的に支援し，大規模で複雑な企業システムでも運用管理を最適化できます。

- ネットワーク管理製品と連携して企業ネットワークの安定稼働を支援します。
Performance Management で監視しているシステムの状態を、ネットワーク管理製品である NNM から監視できます。大規模ネットワーク環境下でシステムの稼働状況を一元管理できます。これによって、企業システムを支えるネットワークの安定稼働を支援します。
- 収集したパフォーマンスデータを用途に合わせて自由に加工できます
収集したパフォーマンスデータを、Microsoft Excel などの ODBC 準拠のアプリケーションプログラムで読み込めるように、Performance Management ODBC ドライバーを提供します。これによって、ユーザーの目的に応じたレポートの作成や、パフォーマンスデータの分析が容易にできます。
- パフォーマンスを分析する製品と連携して、システムの問題点を把握できます
収集したパフォーマンスデータを、システム稼働分析製品である PFM・Analysis で分析できます。これによって、システムの稼働の傾向を分析し、システムの問題点を障害が発生する前に把握できます。

1.2.2 高い信頼性、可用性の求められるミッションクリティカルシステムで運用できます

Performance Management はミッションクリティカルシステムでも、高い信頼性と可用性を維持したまま稼働監視できます。

ここでは、ミッションクリティカルシステムで Performance Management を使うときの主な特長を説明します。

(1) 監視対象の企業システムに負荷を掛けることなく稼働監視できます

Performance Management は、データベースリソースや業務アプリケーションのプロセス稼働状況などの収集したパフォーマンスデータを監視マネージャーではなく、監視エージェントで収集し、Performance Management 独自のデータベース（Store データベース）に蓄積します。ネットワーク上に、定期的に大量のパフォーマンスデータが送信されることがないため、ネットワークに不要な負荷を与えません。

また、収集した稼働監視データが肥大化するのを防ぐ機能を提供しています。そのため、ディスク容量を圧迫することなく限られたリソースの中で、必要な稼働情報だけを収集できます。

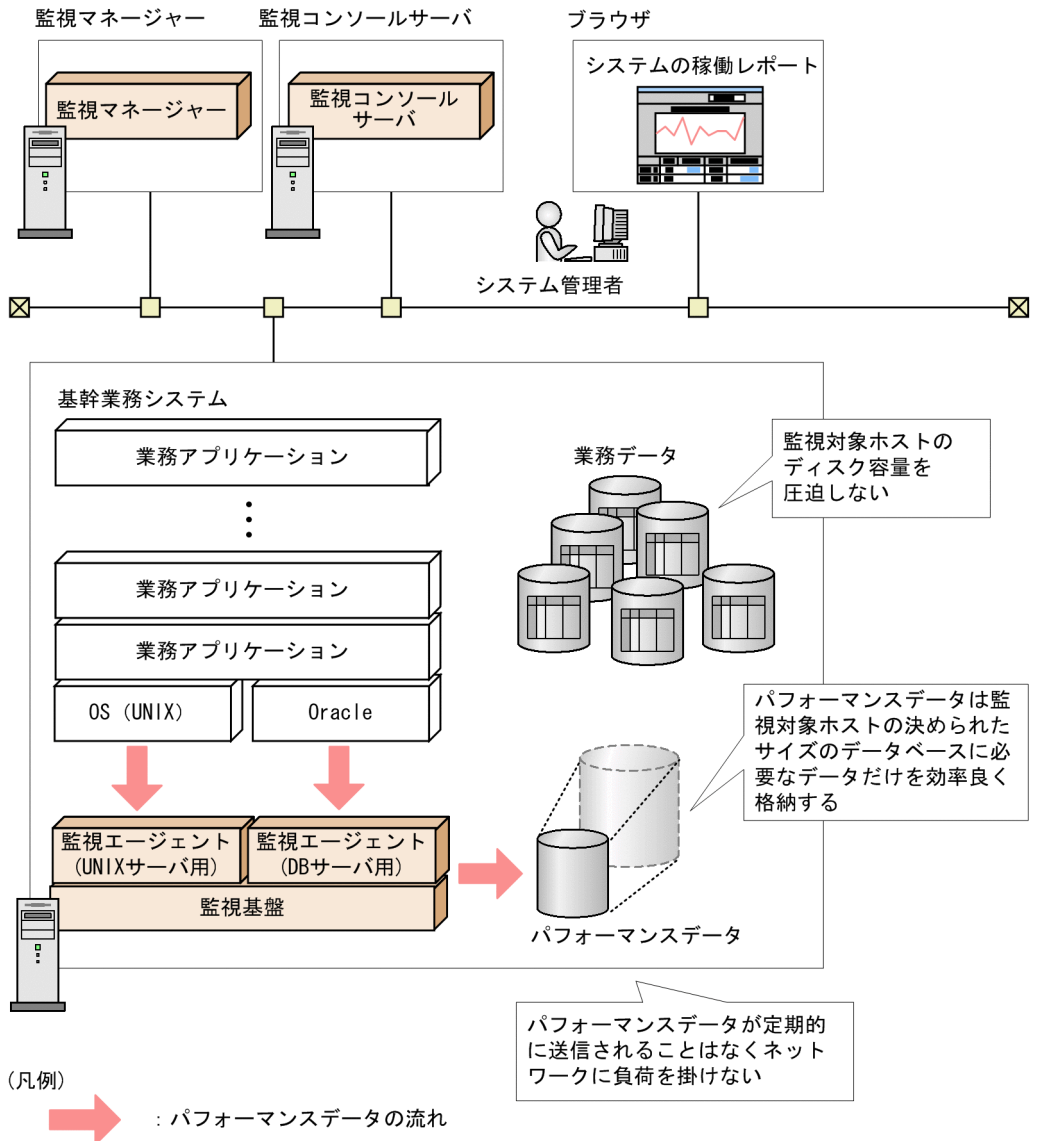
例を次に示します。

企業システムの規模やユーザーの利用形態などの特性に応じて、どのサーバの、どの監視項目の稼働情報を、どのタイミングで取得するかという詳細な設定ができる。

監視項目によっては、ある一定の時間ごとに要約したデータを収集できる。

過去のデータを自動的に上書きするため、一定のディスク容量の中で稼働監視を運用できる。

図 1-8 Performance Management で収集した稼働監視データの流れ



Performance Management のデータ管理の詳細については、「4.2 パフォーマンスデータを収集・管理する機能」を参照してください。

(2) 業務に影響が出る前にシステムの問題を管理者に知らせることができます

Performance Management では、監視対象のシステムが危険域に達したときにシステム管理者に通知するように設定できます。

監視対象システムの運用上の問題を早期に発見し、業務に影響が出る前に、問題に対処

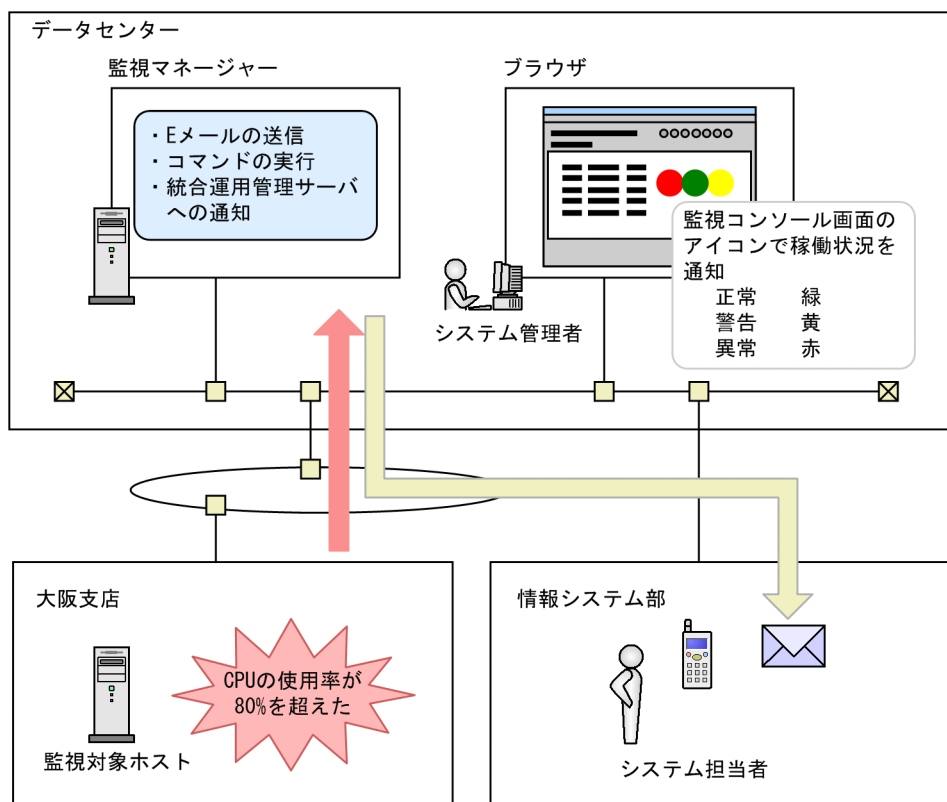
できます。

例えば、あるシステムのサーバで CPU の使用率が 80% 以上になったときに、システム管理者に E メールで連絡したり、ディスク容量が 30% 以下になったときに、コンソールでアイコンを点滅させてシステム運用者に知らせたりすることができます。

また、システムが危険域に達したときに任意のコマンドを自動で実行することもできます。

したがって、大規模システムでも少人数のメンバーで効率的に監視できます。

図 1-9 システムの異常をシステム管理者に E メールで通知する例

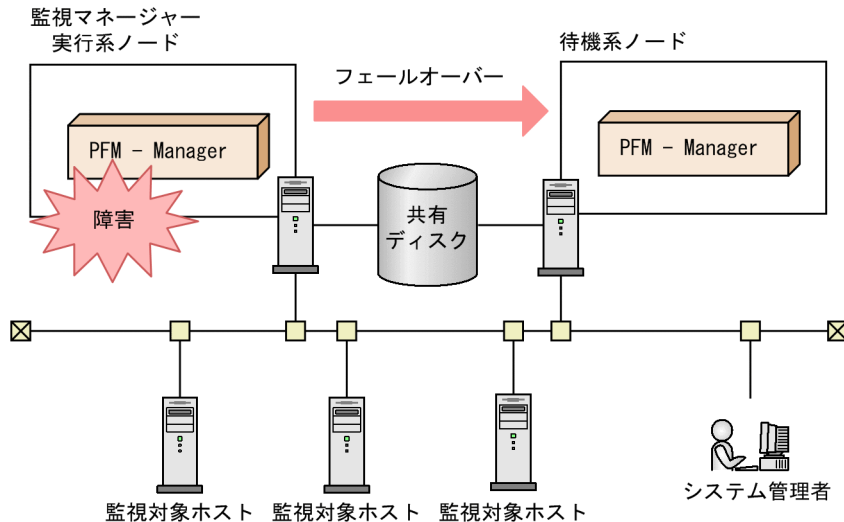


しきい値の超過で発行されるアラームの詳細については、「4.3 システムが危険域に達したときに警告する機能」を参照してください。

(3) 24 時間 365 日システムを安定稼働させるためのクラスタシステムで運用できます

Performance Management をクラスタシステムで使うと、システムに障害が発生した場合にも継続して業務を運用できる、信頼性の高いシステムが構築できます。クラスタシステムの運用例を次の図に示します。

図 1-10 クラスタシステムの運用例



クラスタシステムでの Performance Management の構築と運用の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

(4) 稼働監視システム自身の障害を検知し、システムを安定稼働に導きます

Performance Management では、PFM - Agent または PFM - RM のサービス稼働状態や PFM - Agent または PFM - RM が稼働しているホストの稼働状態を監視できます。また、PFM - RM の監視対象ホストの稼働状態を監視できます。これをヘルスチェック機能と呼びます。ヘルスチェック機能によって、ホストの稼働状態を監視したり、監視対象が PFM - Agent や PFM - RM によって正しく監視されているかを確認したりできます。

監視結果は PFM - Web Console の次の画面で確認できます。

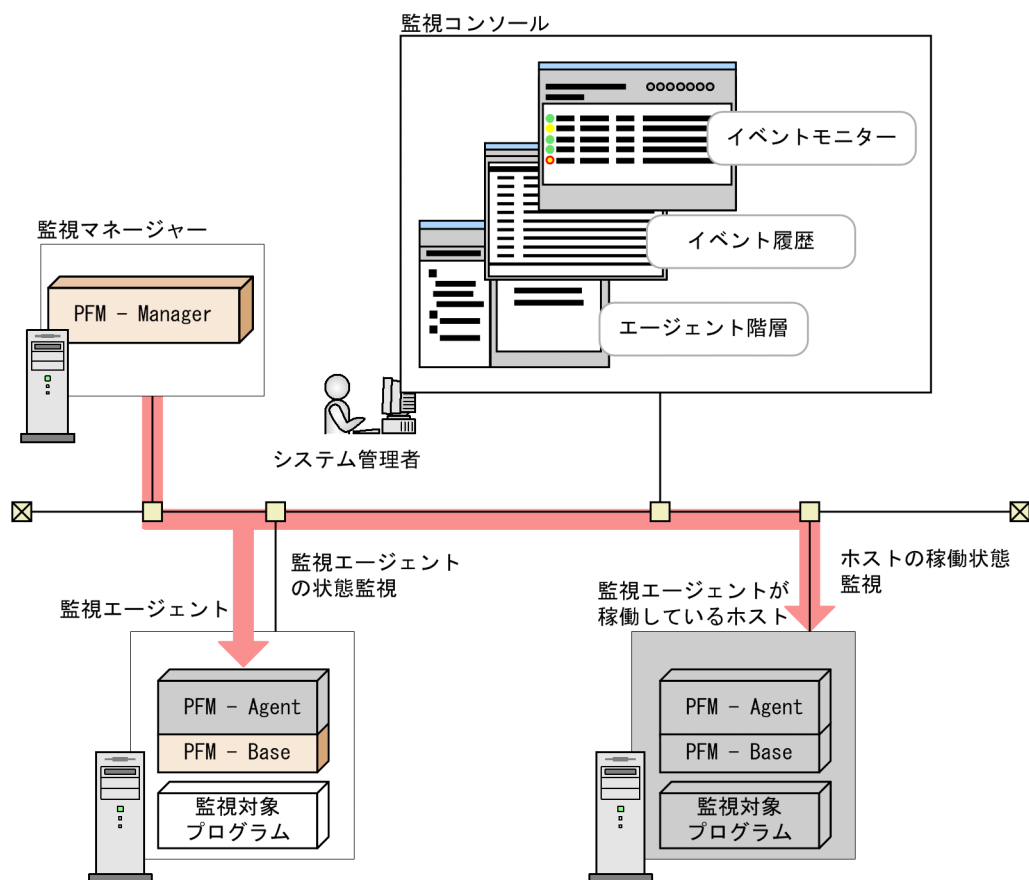
- エージェント階層
- [イベントモニター] 画面
- [イベント履歴] 画面

ヘルスチェック機能では、稼働状態の監視結果を保存できるため、過去から現在までの稼働状態をレポートで確認できます。

また、稼働状態の監視結果にアラームを設定することで、ホストが正常に稼働していないことを検知したときや PFM - Agent または PFM - RM が正しく稼働していないことを検知したときにアラームイベントを発生させたり、E メール送信などのアクションを実行させたりすることもできます。

ヘルスチェック機能による稼働状態監視の例を次の図に示します。

図 1-11 ヘルスチェック機能による稼働状態監視の例（エージェント監視の場合）



なお、リモート監視の場合は、監視対象ホストが正常に稼働していないことを検知したときにアラームイベントを発生させたり、Eメール送信などのアクションを実行させたりできます。

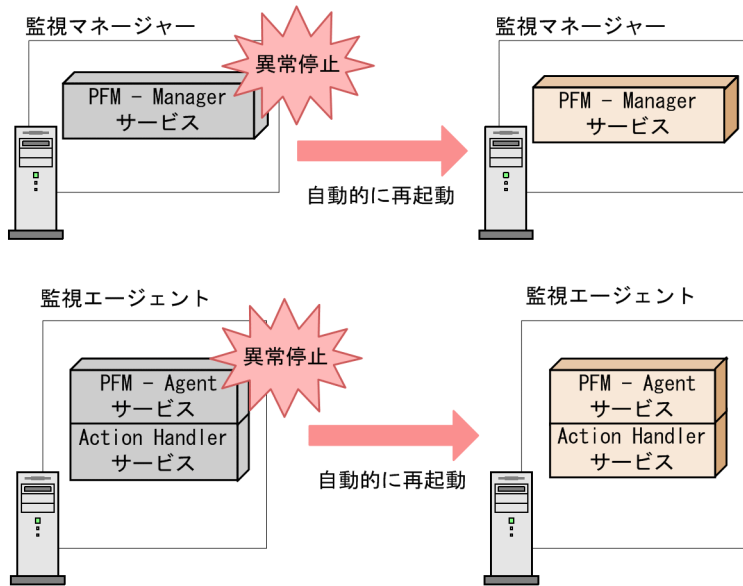
さらに、Performance Management システムで、PFM サービスが何らかの原因で異常停止した場合に、PFM サービスを自動的に再起動する機能を用意しています。これを PFM サービス自動再起動機能と呼びます。

PFM サービス自動再起動機能の対象となる PFM サービスは、PFM - Manager サービス、Action Handler サービス、PFM - Agent または PFM - RM サービスです。なお、Status Server サービスは再起動の対象となりません。サービスの詳細については、「4.1 Performance Management のサービス」を参照してください。

この機能によって、PFM サービスが異常停止した場合でも監視を継続することができます。

PFM サービス自動再起動機能の概要を次の図に示します。

図 1-12 PFM サービス自動再起動機能の概要



1.2.3 稼働監視システムの構築・運用が容易にできます

企業システムが大規模化，複雑化することに伴い，システム管理者の負荷は増加します。そのため，システムの稼働監視をする場合，更なる人員確保やスキル向上のための施策を検討する必要があります。Performance Management は稼働監視システムの構築，運用をサポートするさまざまな機能を提供します。これによって，システム管理者は少ない負荷で稼働監視できます。

ここでは，Performance Management を使って稼働監視システムの構築，運用するときの主な特長を説明します。

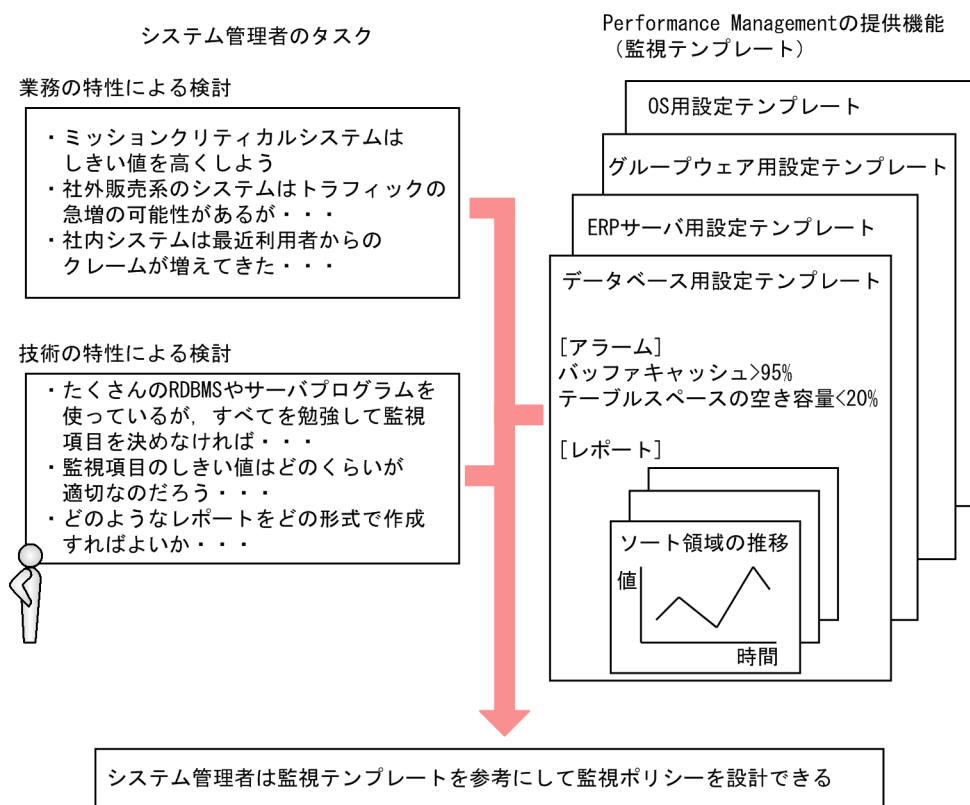
(1) テンプレートを用いて監視項目を容易に設定できます

稼働監視システムで，どの項目をどのように監視するかを検討するためには，高いスキルが求められます。

Performance Management は，よく利用される監視項目をあらかじめ定義した「監視テンプレート」と呼ばれる，ひな形を提供しています。

この監視テンプレートを使用すると，どのような項目を監視すればよいかの設定が容易にできます。

図 1-13 監視項目の検討のためのシステム管理者のタスクと監視テンプレート



例えば、Windows サーバの場合、次に示す監視項目が危険域に達したとき、警告する設定が、あらかじめテンプレートに定義されています。

- ・利用できる物理メモリのサイズが 4 メガバイトより小さくなったとき
- ・CPU 利用率が 80% より大きくなったとき
- ・論理ディスクドライブの空き領域の割合が 15% より小さくなったとき

監視テンプレートは、カスタマイズすることもできます。

監視テンプレートについては、各 PFM・Agent または PFM・RM マニュアルの、監視テンプレートについて説明している章を参照してください。

(2) システム管理者の作業負担を低減する便利なツールを提供します

Performance Management では、稼働監視するための監視コンソールや運用コマンドを提供しています。監視対象ごとに異なる複数の監視ソフトウェアを導入したり、習得したりする必要がありません。

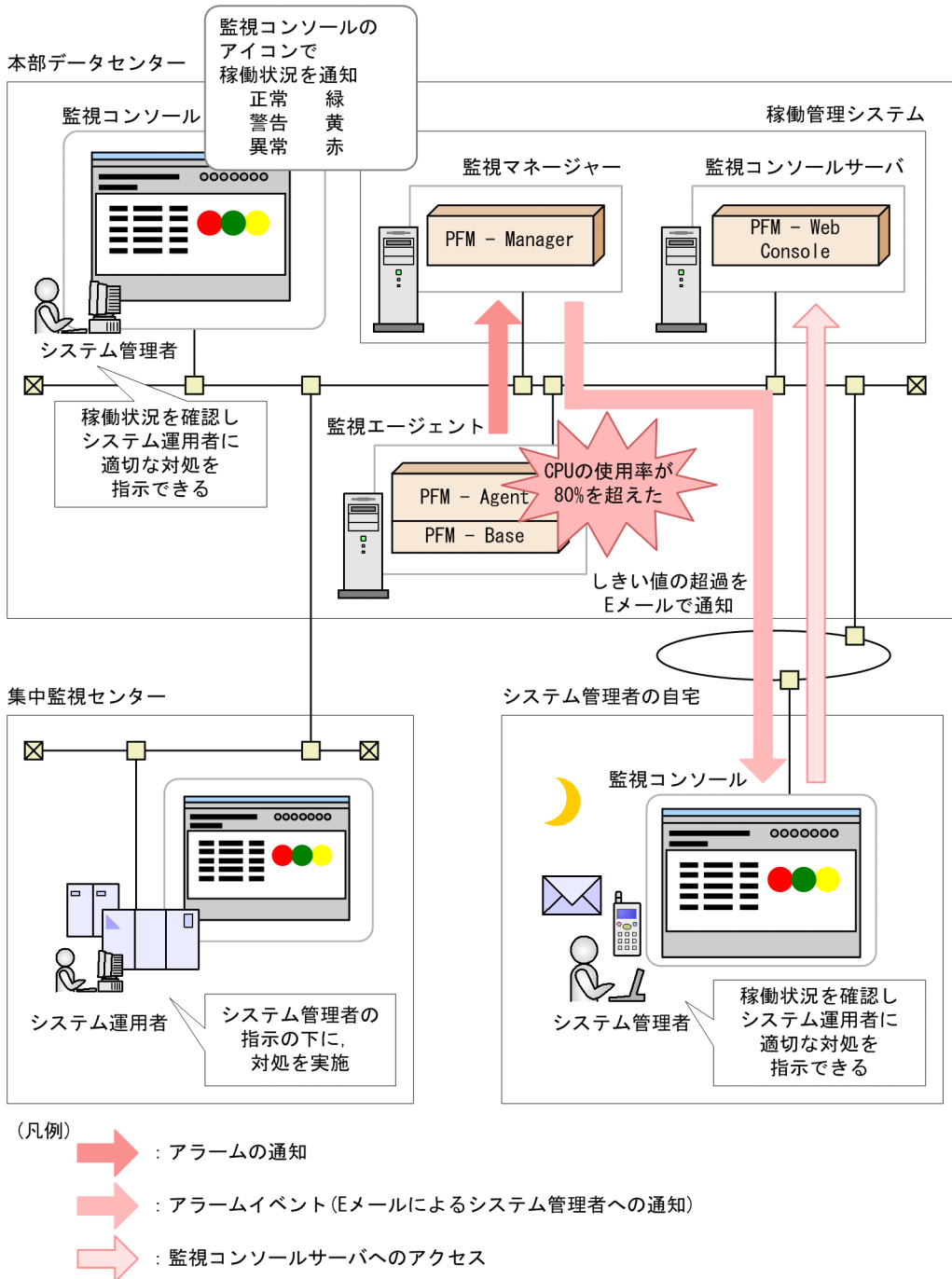
システム管理者は、これらの操作性の高い管理ツールを目的に応じて使うことで、稼働監視の作業負担を軽減できます。

(a) Web ブラウザで企業システムを監視できます

システム管理者は、監視コンソールサーバに Web ブラウザでアクセスすることで、企業システムで発生している問題をリアルタイムで把握したり、監視対象のシステムの構成を管理したりできます。例えば、システム管理者は、システムで問題が起こったときに、自宅から稼働監視システムの状況を確認して、業務に支障が出る前に、素早く問題に対処することができます。

1. Performance Management の概要

図 1-14 遠隔地から Web ブラウザで稼働監視システムの状況を確認する例



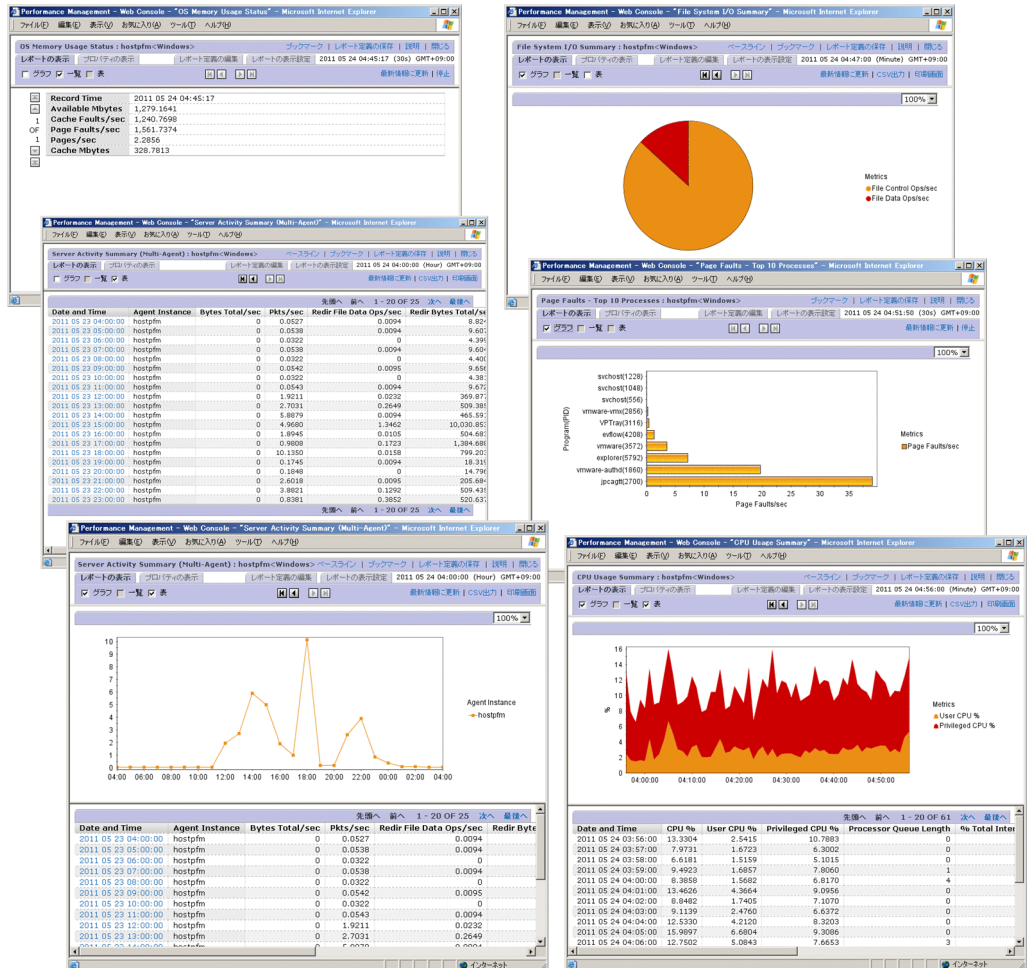
(b) パフォーマンスデータを分析しやすい形式で出力できます

Performance Management で収集したパフォーマンスデータは、「レポート」と呼ばれ

るグラフィカルな形式に加工して Web ブラウザで表示できます。監視対象システムの稼働情報をわかりやすいグラフや表で表示することでシステムの問題点をすばやく分析できます。

レポートの表示例を次の図に示します。

図 1-15 レポートの表示例

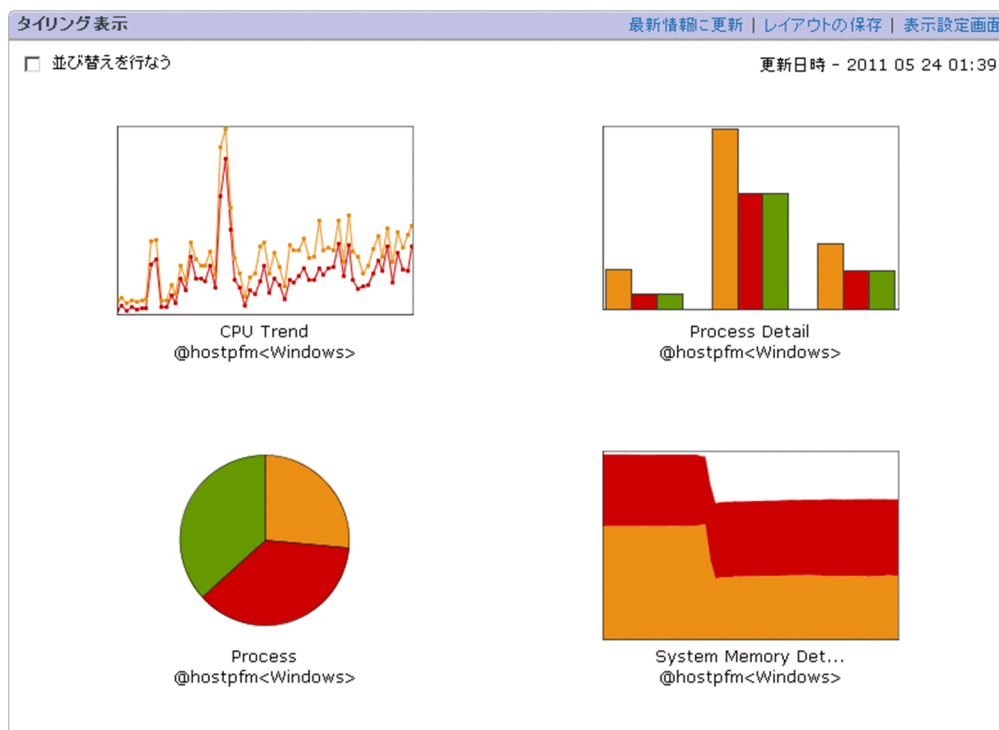


レポートの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働分析のためのレポートの作成について説明している章を参照してください。

(c) 複数のレポートのグラフを並べて表示できます

ブックマークで管理している複数の履歴レポートのグラフを並べて表示できます。これによって、障害要因の分析、ネットワークやOSのリソースの管理などを容易にできます。複数のレポートのグラフを並べて表示したものをタiling表示と呼びます。タiling表示の例を次の図に示します。

図 1-16 タイリング表示の例



タイリング表示の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働分析のためのレポートの作成について説明している章を参照してください。

(d) 複数のレポートを重ね合わせて表示できます

複数のレポートを同じグラフ上に重ね合わせて表示できます。また、過去の周期性のあるデータや安定稼働時のデータを同じグラフ上に基準値（ベースライン）として表示することで、システム全体の稼働状況を総合的に判断できます。複数の履歴レポートやベースラインを同じグラフ上に表示したものを複合レポートと呼びます。複合レポートの表示例を次の図に示します。

図 1-17 複合レポートの表示例



同じグラフ上に表示できるレポートは、通常のレポートの場合と複合レポートの場合とで異なります。

通常のレポートの場合

履歴レポートで同一レコードの場合に限り、複数のエージェントのレポートを同じグラフ上に表示できます。

複合レポートの場合

エージェントのプロダクトやレポートのレコード種別に関係なく、複数のレポートを一つのグラフに表示できます。ただし、複合レポートとして表示できるのは、履歴レ

1. Performance Management の概要

ポートだけです。複合レポートを利用すると、次のようなことができます。

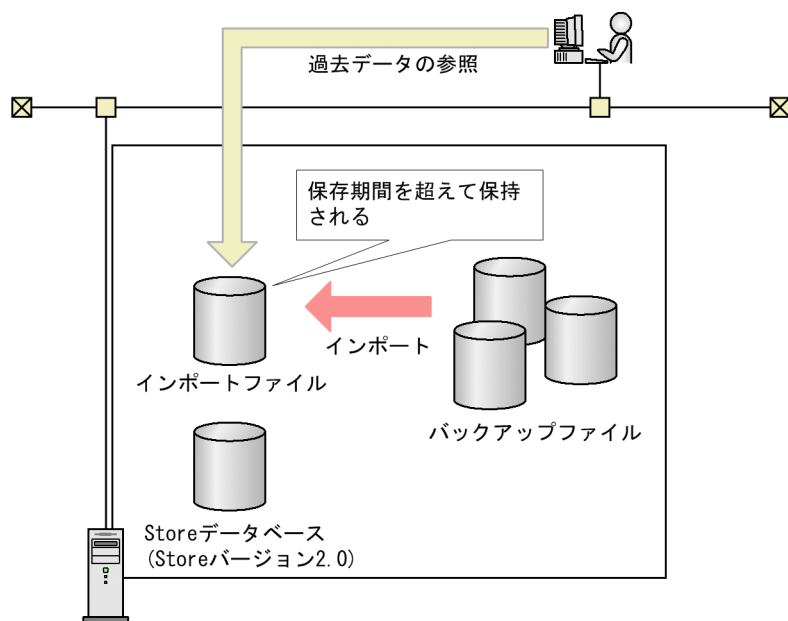
- 同一レコードで異なるフィールドのレポートを表示する。
- 異なるエージェント種別の同系レコードをレポート表示する。
- 異なるエージェント種別の異なるレコードをレポート表示する。
- ベースラインと同時にレポート表示する。

複合レポートの表示方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働分析のためのレポートの作成について説明している章を参照してください。

(e) 過去のパフォーマンスデータを参照できます

Store データベースのバージョン 2.0 (Store バージョン 2.0) では、一度バックアップした稼働監視データをインポートすることで、過去のパフォーマンスデータを参照できます。インポートしたデータは、あらかじめ設定した保存期間を超えて保持されるため、どの時点でも過去のデータを参照できます。過去のデータの参照例を次の図に示します。

図 1-18 過去のデータの参照例



バックアップデータのインポートについては、「4.2.6(2) 過去の稼働監視データの参照」を参照してください。

(f) 実運用に根ざした管理コマンドを提供します

大規模システムで複数のサーバを一元管理するために、管理コマンドで、バッチ処理や自動処理を行うことができます。

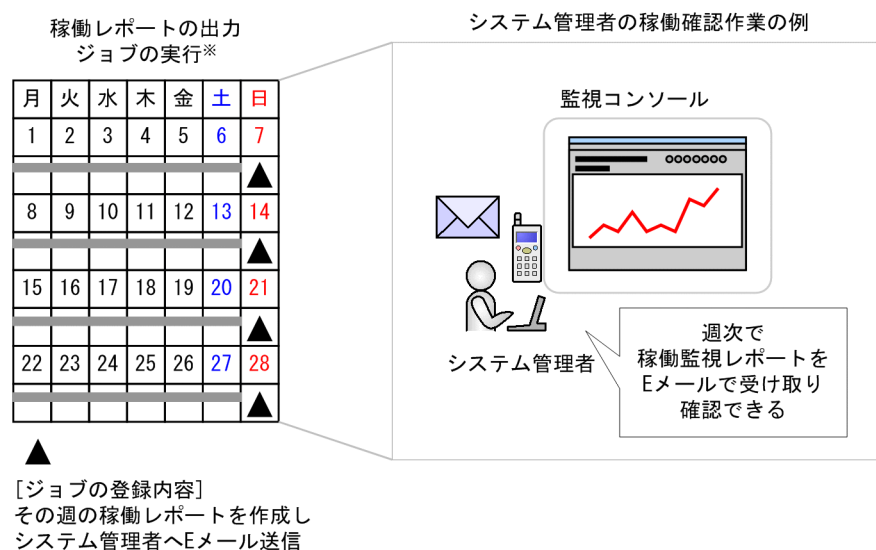
パフォーマンスデータの管理やサービスの管理などは、運用コマンドを使ってバッチ処

理や自動処理ができ、効率的にシステムを運用できます。Performance Management が提供する運用コマンドの例を、次に示します。

- 警告アラームの一括設定コマンド
- 稼働監視レポートの出力コマンド
- 収集した稼働監視データのバックアップやリストアコマンド
- Performance Management の起動や停止のコマンド など

システム管理者が、稼働レポートを Performance Management が提供する稼働レポートの出力コマンドで作成したものを、ほかのジョブ管理システムなどと連携して週次で出力して E メールで確認する例を次の図に示します。

図 1-19 システム管理者の稼働確認作業の例



注※
ジョブの実行は、ジョブ管理システムで実施。

コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドについて説明している章を参照してください。

1.2.4 目的に応じた監視方式を選択できます

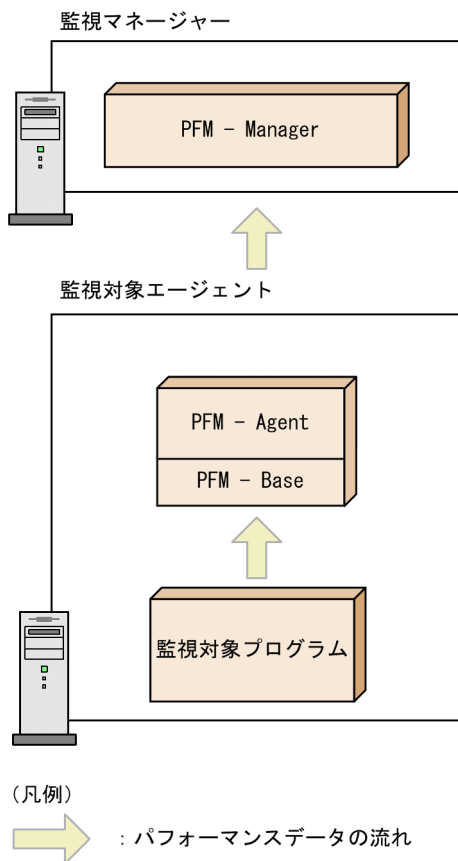
Performance Management では、監視対象サーバの重要度および稼働監視システムの設計・構築に掛けられるコストや時間に応じて、監視方式を選択できます。

エージェント監視

監視対象のサーバにエージェントをインストールして、サーバの稼働状況を監視する運用形態です。監視対象のサーバにエージェントをインストールする必要がありますが、充実した監視項目でサーバの稼働状況を監視できます。

1. Performance Management の概要

図 1-20 エージェント監視

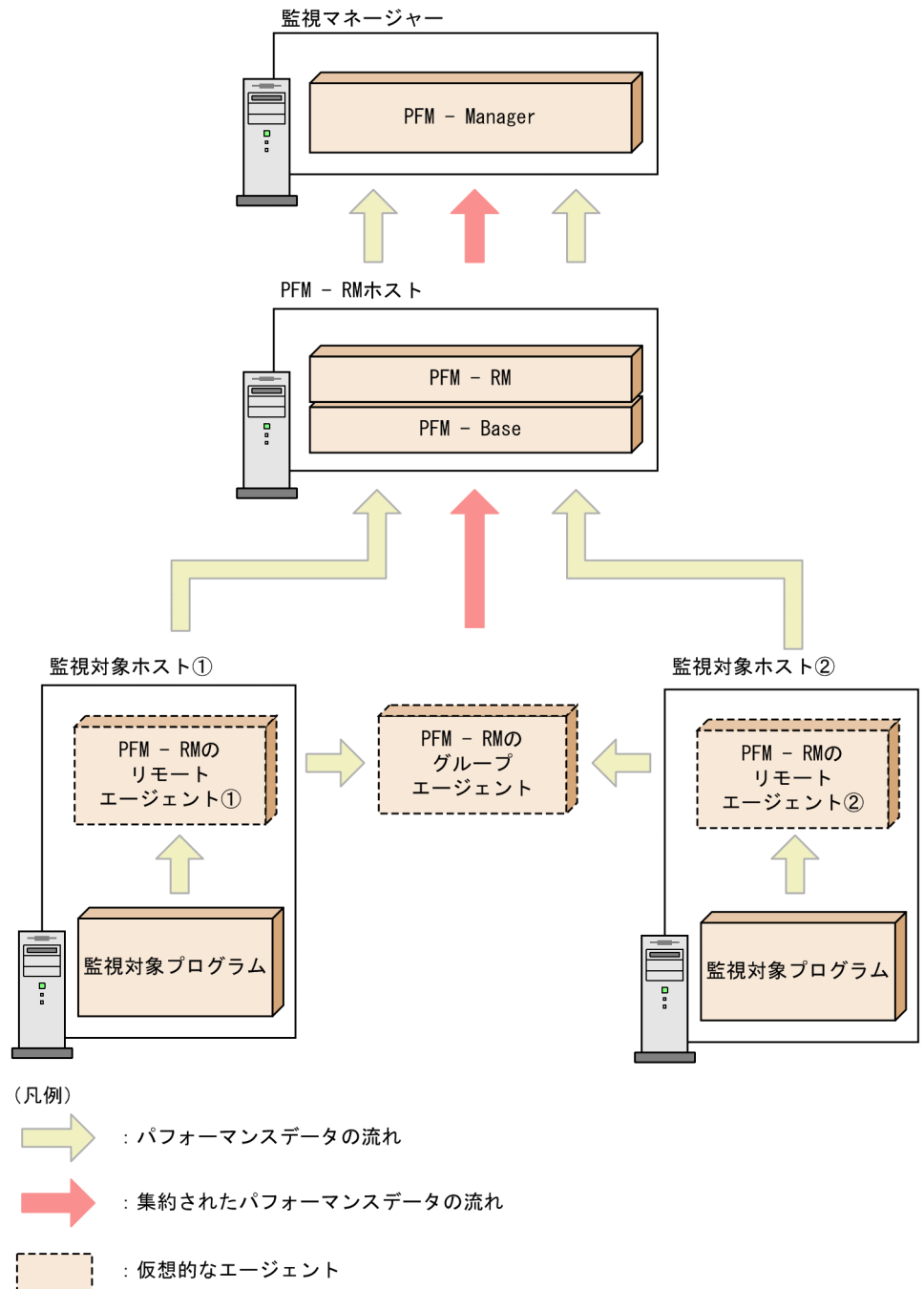


リモート監視

監視対象のサーバにエージェントをインストールしないで、別のホストからリモートでサーバの稼働状況を監視する運用形態です。監視対象のサーバにエージェントをインストールする作業が不要なので、稼働中のシステムに対して稼働監視を始める場合に便利です。エージェント監視と比較すると監視項目は少ないものの、一つの PFM - RM で、複数の監視対象のパフォーマンスデータを収集・管理できます (PFM - RM ホスト自身も監視対象ホストに指定できます)。

PFM - RM では、従来のエージェント監視と同様のインターフェースで監視条件などを設定するための概念「リモートエージェント」と、複数のリモートエージェントのパフォーマンスデータを集約した値を監視するための概念「グループエージェント」を提供しています。

図 1-21 リモート監視



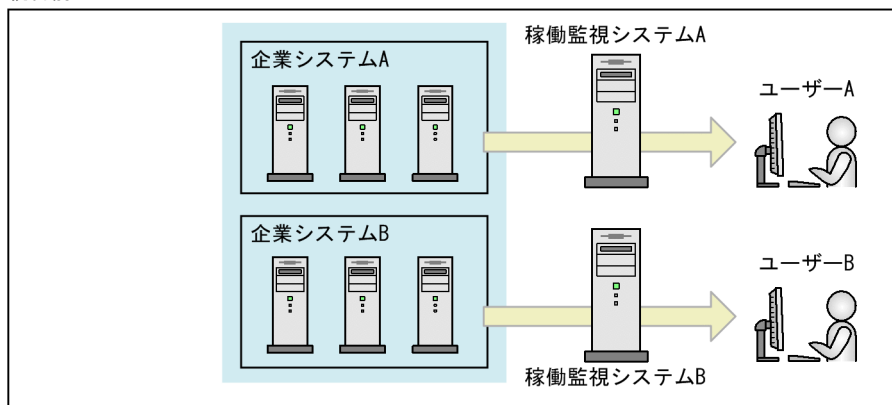
これらの監視方式は組み合わせることもできます。PFM - Agent で詳細に監視する方式と、PFM - RM で簡易的に監視する方式とを、監視対象サーバごとに選択することで、最適な稼働監視を実現できます。

1.2.5 ユーザーごとに監視できる範囲を設定できます

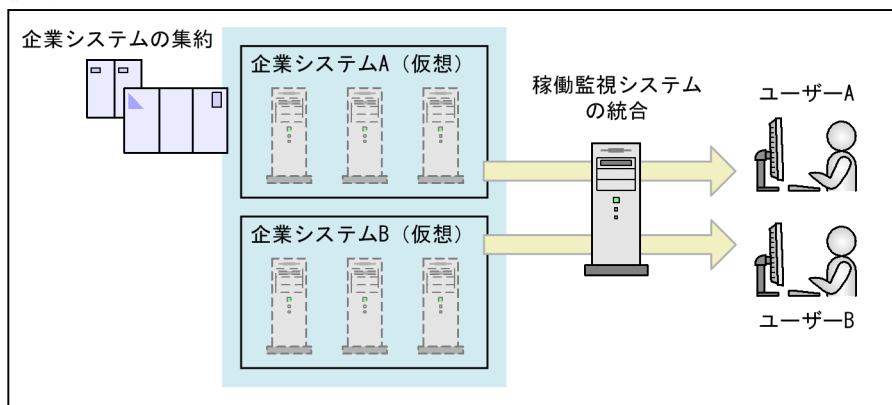
システムの仮想化によってデータセンターや監視対象ホストの集約が進むと、それらを監視する稼働監視システムも集約または統合する必要が高まります。Performance Management では、稼働監視システムの監視範囲をユーザーごとに設定することで、1 台の稼働監視システムで複数の企業システムの監視を実現できます。

図 1-22 仮想化に伴う稼働監視システムの統合

統合前



統合後



(1) 業務グループによる監視範囲の設定

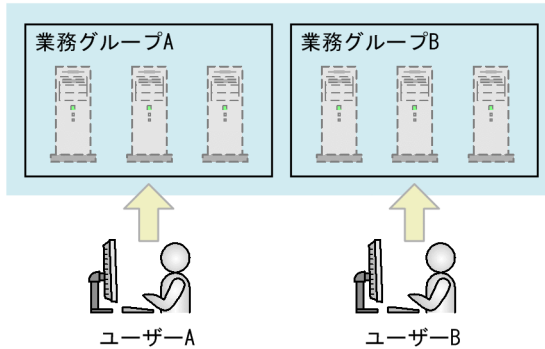
監視範囲を業務グループとして設定することで、ユーザーは業務グループ単位でシステムを監視できます。業務グループは、各システムのユーザーが相互に参照できないように設定できるので、情報混在を防止し、操作ミスを低減でき、各監視システムの独立性を保持できます。

例えば、業務システム A と B に、それぞれ業務グループ A, B を定義した場合、業務システム A のユーザーは業務グループ A を参照できますが、同じ稼働監視システム上の業

務グループ B は参照できません。

図 1-23 業務グループの設定例

企業システム

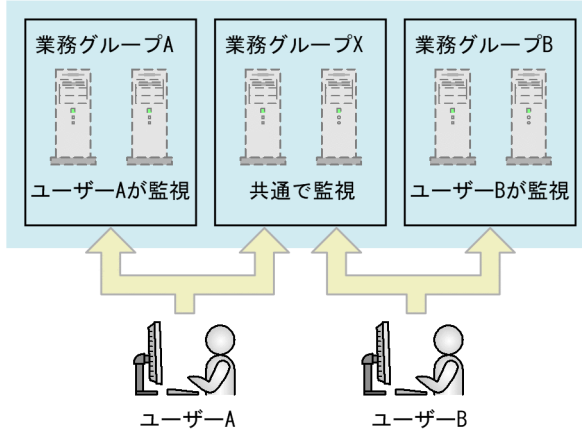


(凡例) → : 監視できる業務グループ

共通の業務グループを監視する場合は、共通する業務グループを個別に設定し、それぞれのユーザーが共通の業務グループも監視対象にすることで実現できます。

図 1-24 共通の業務グループの設定例

企業システム



(凡例) → : 監視できる業務グループ

監視対象ホストを追加・変更するときは、業務グループの設定を更新するだけで簡単に定義できます。

(2) 業務グループのインポート

JP1/IM で定義した業務グループをインポートできます。すでに JP1/IM で業務グループ単位での監視をしている場合、その業務グループの定義をインポートすることで、

1. Performance Management の概要

Performance Management でも同じ業務グループを同じユーザーが稼働監視できます。

2

Performance Management を使ってみよう

この章では、Performance Management を使った業務システムのパフォーマンス監視について、「インターネット販売システムを運用する H 社」を例にして説明します。

Performance Management システムの構築から運用までを、一連の流れで示しているので、Performance Management の基本操作の流れを理解してください。

2.1 パフォーマンス監視の背景

2.2 パフォーマンス監視システムの設計・構築

2.3 パフォーマンス監視システムの運用

2.1 パフォーマンス監視の背景

例題

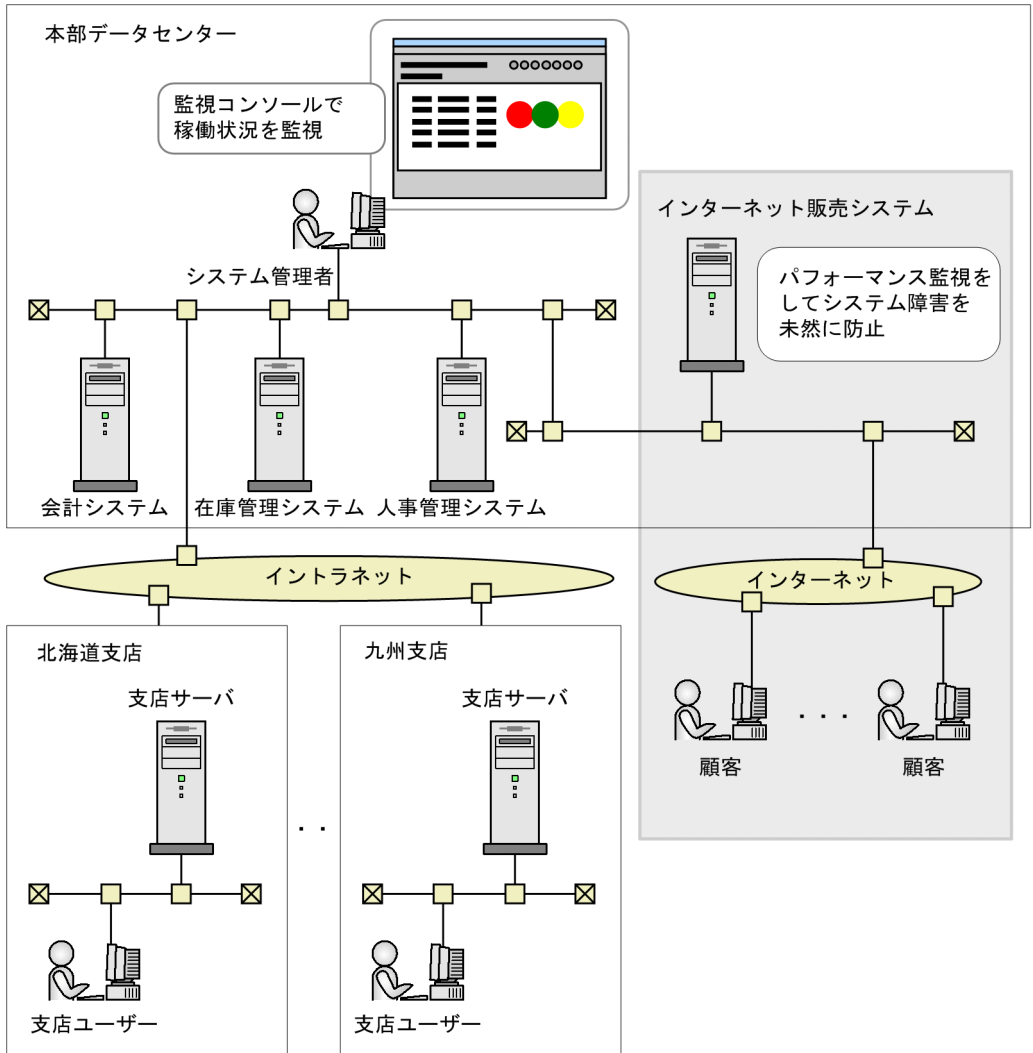
H 社は、全国に支店を持つ小売業社で、大規模な社内システムを持っています。H 社ではインターネットでの商品の販売を始めるために、新たにインターネット販売システムを導入しました。インターネットでの商品の販売は好調で、インターネット販売システムの利用者は増え続けていました。

そこで、H 社の情報システム部では、このインターネット販売システムの稼働状況を把握し、システムの問題箇所を事前に対策するため、Performance Management を使ってパフォーマンス監視システムを構築することにしました。

インターネット販売システムは Windows サーバで稼働しています。

H 社のシステムの全体概要を次に示します。

図 2-1 パフォーマンス監視の背景（インターネット販売システムの例）



以降の説明では、H 社のインターネット販売システムに対して稼働監視することを前提に説明します。

2.2 パフォーマンス監視システムの設計・構築

適切なパフォーマンス監視をするには、監視対象のシステムのどのような稼働状況や問題点を把握したいのか、どのパフォーマンスデータを収集するのかを決める必要があります。また、どのようなシステム構成で Performance Management を運用するかについても検討する必要があります。

2.2.1 監視項目の検討

H 社の情報システム部は、インターネット販売システムの Windows サーバで稼働状況を監視したい項目について検討しました。そして、稼働監視の要件とその要件を満たすために必要な監視項目を、次のように決めました。

表 2-1 監視項目の検討例

目的	監視項目	監視項目に対応するレコード名 (PFM - Agent for Platform (Windows) の場合)
CPU の使用率を監視し、CPU の負荷状況の傾向を知りたい。	CPU 使用率	System Overview(PI)
物理メモリの空き容量を監視し、空き容量が少なくなったら、システム管理者が対応できるようにしたい。	物理メモリの 空き容量	System Overview(PI)

Performance Management はパフォーマンスデータをレコードという単位で収集します。監視項目を決めたら、対応する Performance Management のレコード名を調べます。

検討の結果、インターネット販売システムのパフォーマンス監視要件をすべて満たす PFM - Agent for Platform (Windows) の監視テンプレートを利用することにしました。Performance Management では、「監視テンプレート」と呼ばれる、よく利用される監視項目があらかじめ定義されたレポートおよびアラームを提供しています。この監視テンプレートを使用することで、複雑な定義をしなくても監視対象の運用状況を監視する準備が容易にできます。

なお、監視項目を検討する際のポイントについて「3.4.3 監視項目の検討」で解説しているので参照してください。

また、提供されている監視テンプレートおよび収集するレコードについての詳細は、各 PFM - Agent マニュアルの、監視テンプレートおよびレコードについて説明している章を参照してください。

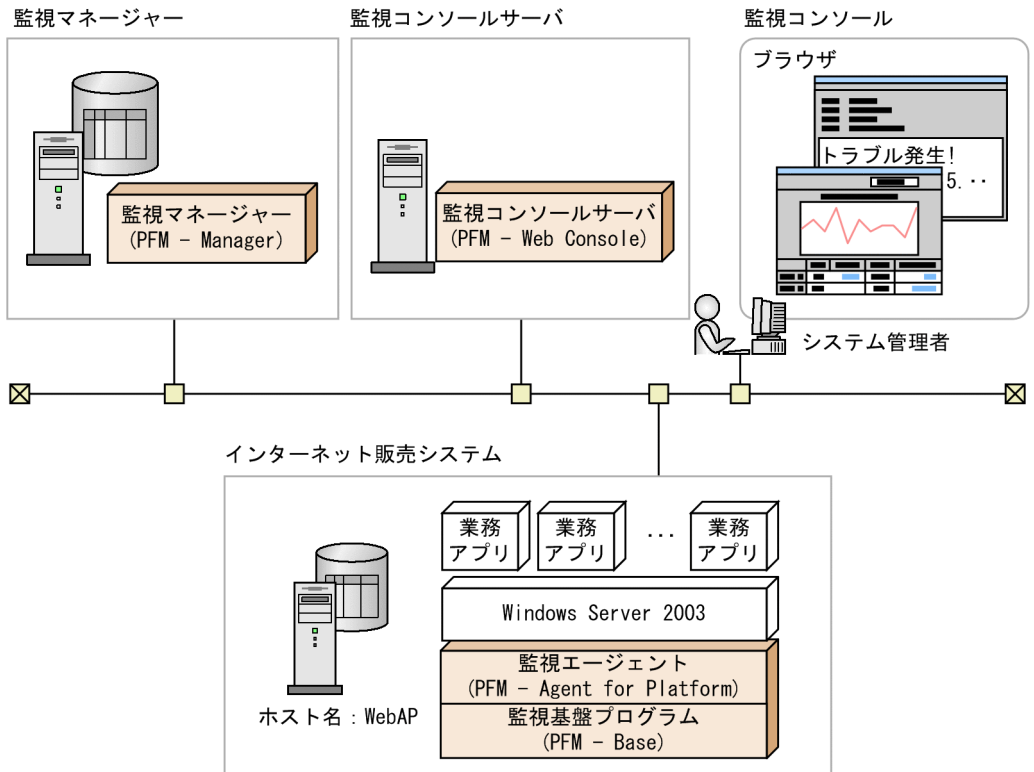
2.2.2 システム構成の検討

パフォーマンス監視を運用するためのシステム構成を検討します。

H 社では、システムの規模や今後の拡張性を検討し、監視マネージャー、監視コンソールサーバ、および監視エージェントをそれぞれ別々のホストで構築します。

H 社でのシステム構成を次の図に示します。

図 2-2 H 社での Performance Management システムの構成



インターネット販売システムの稼働状況の統合管理を行う監視マネージャーのホストに PFM - Manager、稼働状況を確認するための監視コンソールサーバのホストに PFM - Web Console をインストールします。

また、インターネット販売システムのサーバ上には、Windows のパフォーマンスデータを収集するための監視エージェントである PFM - Agent for Platform (Windows) および、監視基盤である PFM - Base をインストールします。

Performance Management のプログラムのインストールとセットアップの方法については、「5. インストールとセットアップ (Windows の場合)」および各 PFM - Agent マニュアルの、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

2.3 パフォーマンス監視システムの運用

監視項目が決定し、パフォーマンス監視システムの設計が終了したら、Performance Management で稼働監視を開始します。

次の流れで、基本的なパフォーマンス監視の例を説明します。

1. Performance Management のサービスを起動する
2. Web ブラウザで PFM - Web Console にログインする
3. ユーザーアカウントを作成する
4. 監視用のエージェント階層を作成する
5. レポートを表示する
6. アラームを利用して監視する
7. イベントを表示する

2.3.1 Performance Management のサービスを起動する

Performance Management のプログラムをインストールしたら、各プログラムのサービスを起動します。

Windows の場合、デフォルトで OS の起動時に自動起動されるように設定されているため、特に操作は不要です。UNIX の場合は、起動スクリプトの設定が必要です。

サービスの起動については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

Performance Management のプログラムの各サービスを起動すると、PFM - Agent によってデフォルトで収集するように設定されているパフォーマンスデータの収集が開始されます。

注

デフォルトで収集されるパフォーマンスデータについては、各 PFM - Agent マニュアルの、レコードについて説明している章を参照してください。

2.3.2 Web ブラウザで PFM - Web Console にログインする

監視コンソールの Web ブラウザから PFM - Web Console にログインします。

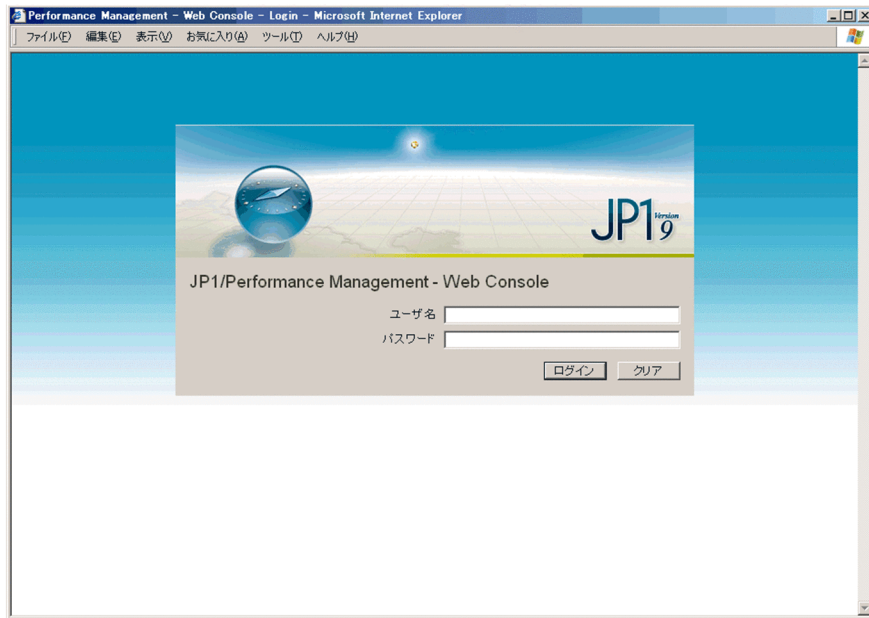
手順を次に示します。

1. 監視コンソールの Web ブラウザで次の URL を入力する。

`http://PFM - Web Consoleがインストールされているサーバ名:20358/
PFMWebConsole/login.do`

ログイン画面が表示されます。

図 2-3 ログイン画面



2. [ユーザー名]および[パスワード]を入力する。

インストール直後は、ユーザー名が「ADMINISTRATOR」でパスワードが設定されていないユーザーアカウントがデフォルトで設定されています。

次のように入力します。

[ユーザー名]: ADMINISTRATOR

[パスワード]: 入力しない

注意

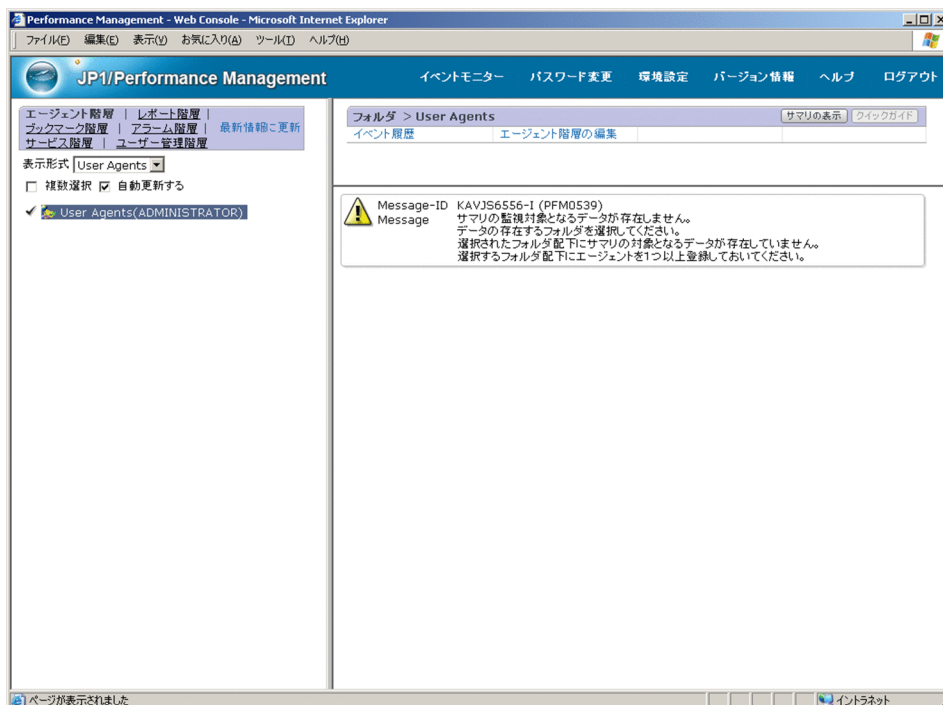
安全に運用するために、Performance Management の運用を開始する前に「ADMINISTRATOR」ユーザーに対してパスワードを設定してください。ユーザーアカウントの管理については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、ユーザーアカウントと業務グループの管理について説明している章を参照してください。

3. [ログイン] ボタンをクリックする。

PFM - Web Console へログインし、メイン画面が表示されます。

2. Performance Management を使ってみよう

図 2-4 メイン画面



以降、PFM・Web Console の画面でユーザーアカウントの作成や監視用エージェント階層の作成などをしていきます。

2.3.3 ユーザーアカウントを作成する

Performance Management では、Performance Management システムで管理する「Performance Management ユーザー」と呼ばれるアカウントか、または JP1/Base で管理する「JP1 ユーザー」と呼ばれるアカウントを使用します。

ここでは、Performance Management システムで管理する Performance Management ユーザーを作成する手順について説明します。

Performance Management ユーザーには、次の 3 種類があります。

- 管理ユーザー
- 一般ユーザー
- 業務グループ一般ユーザー

注

業務グループによるアクセスコントロール機能が有効な場合だけ使用できます。

権限によって PFM・Web Console の各画面で利用できる機能が異なります。権限および業務グループによるアクセスコントロール機能の詳細については、マニュアル「JP1/

Performance Management 運用ガイド」の、ユーザーアカウントと業務グループの管理について説明している章を参照してください。

Performance Management ユーザーは、PFM - Web Console の [ユーザー管理階層] 画面で作成します。ここでは、「INT_ADMIN」という管理ユーザー権限を持つ Performance Management ユーザーを作成する例を紹介します。

手順を次に示します。

1. [メイン] 画面のナビゲーションフレームで [ユーザー管理階層] タブを選択する。
[ユーザー管理階層] 画面が表示されます。
2. [ユーザー管理階層] 画面のメソッドフレームで、[新規ユーザー] メソッドを選択する。
[新規ユーザー] 画面が表示されます。
3. [ユーザー名] に「INT_ADMIN」と入力する。
4. [パスワード] および [パスワードの確認] に任意のパスワードを設定する。

注意

Performance Management は、6 文字以上の、英文字、数字、記号などを含めたパスワードを推奨しています。英文字だけまたは数字だけで構成されたパスワードや、5 文字以下のパスワードなど、推奨されないパスワードが入力された場合は確認メッセージを表示します。また、ユーザー名と同一のパスワードが入力された場合も同様にメッセージを表示します。

5. [権限の選択] で「管理ユーザー」を選択する。
[新規ユーザー] 画面の表示例を次に示します。

図 2-5 [新規ユーザー] 画面の表示例

6. [OK] ボタンをクリックする。

2. Performance Management を使ってみよう

ナビゲーションフレームの Performance Management ユーザー階層に、作成したユーザーアカウントが追加されます。

7. メニューバーフレームの [ログアウト] をクリックし、いったん PFM - Web Console からログアウトする。
8. 「INT_ADMIN」のユーザーアカウントで再度ログインする。

2.3.4 監視用のエージェント階層を作成する

Performance Management では、監視対象であるエージェントを階層で管理し、監視します。エージェント階層には、次の二つがあります。

- ・製品ごとにグルーピングされたエージェント階層で監視する
製品ごとのフォルダでグルーピングされたエージェント階層で監視します。
- ・ログインユーザーごとに作成したエージェント階層で監視する
ログインユーザーごとに任意に作成したエージェント階層で監視します。例えば、システムの構成や組織などの単位にフォルダを作成し、それぞれに監視エージェントをグルーピングできます。

エージェントの管理および監視は、PFM - Web Console の [エージェント階層] 画面で行います。

(1) フォルダの作成

ここでは、支店ごとにフォルダを作成する例を紹介します。

手順を次に示します。

1. [メイン] 画面のナビゲーションフレームで [エージェント階層] タブを選択する。
[エージェント階層] 画面が表示されます。
2. メソッドフレームで [エージェント階層の編集] メソッドを選択する。
[エージェント階層の編集] 画面が表示されます。
「User Agents (ログインユーザー名)」がインフォメーションフレームに表示されます。
3. 「User Agents (ログインユーザー名)」を選択し、[新規フォルダ] ボタンをクリックする。
[エージェント階層の編集 > 新規フォルダ] 画面が表示されます。
4. [新しいフォルダ名] に「本部データセンター」と入力する。
入力例を次の図に示します。

図 2-6 [エージェント階層の編集 > 新規フォルダ] 画面の入力例

エージェント > webapp <Windows>				サマリの表示	クイックガイド
レポートの表示	アラームの状態の表示	プロパティの表示	イベント履歴		
アラームテーブルのバインド	アラームテーブルのアンバインド	エージェント階層の編集	ブックマークの登録		
プロセス監視の設定					

エージェント階層の編集 > 新規フォルダ		OK	キャンセル
新しいフォルダ名: 本部データセンター			
		OK	キャンセル

5. [OK] ボタンをクリックする。

インフォメーションフレームの「User Agents (ログインユーザー名)」の配下に「本部データセンター」フォルダが作成されます。

6. 手順 3 ~ 手順 5 と同様の操作で、次のフォルダを作成する。

- ・北海道支店
- ・九州支店

7. さらに手順 3 ~ 手順 5 の操作で作成した「本部データセンター」フォルダを選択し、[新規フォルダ] ボタンをクリックする。

8. [新しいフォルダ名] に「インターネット販売システム」と入力し、[OK] ボタンをクリックする。

次の図のような階層ができ上がります。

図 2-7 エージェント階層の作成例

エージェント > webapp <Windows>				サマリの表示	クイックガイド
レポートの表示	アラームの状態の表示	プロパティの表示	イベント履歴		
アラームテーブルのバインド	アラームテーブルのアンバインド	エージェント階層の編集	ブックマークの登録		
プロセス監視の設定					

エージェント階層の編集		最新情報に更新			
		コピー	削除	新規フォルダ	新規エージェント
<div> User Agents (ADMINISTRATOR) <ul style="list-style-type: none"> 九州支店 神奈川 北海道支店 本部データセンター <ul style="list-style-type: none"> インターネット販売システム </div>					
		コピー	削除	新規フォルダ	新規エージェント
名前の変更					

(2) PFM - Agent を配置する

フォルダを作成したら、各フォルダにエージェント (PFM - Agent のプロダクト) を配置します。

ここでは、「インターネット販売システム」フォルダにエージェントを配置する手順について説明します。

手順を次に示します。

2. Performance Management を使ってみよう

1. [エージェント階層] 画面のメソッドフレームで [エージェント階層の編集] メソッドを選択する。
[エージェント階層の編集] 画面が表示されます。
「User Agents (ログインユーザー名)」がインフォメーションフレームに表示されます。
2. エージェント階層から「インターネット販売システム」フォルダを選択し、[新規エージェント] ボタンをクリックする。
[エージェント階層の編集 > 新規エージェント] 画面が表示されます。

図 2-8 [エージェント階層の編集 > 新規エージェント] 画面の表示例



[エージェント階層の編集 > 新規エージェント] 画面には、PFM - Manager に接続されている PFM - Agent が表示されます。各 PFM - Agent の名称は、サービス ID で表示されます。例えば、プロダクト名表示機能が有効な場合、PFM - Agent for Platform (Windows) のエージェントで、ホスト名が「WebAP」であれば、「WebAP<Windows>」と表示されます。

サービス ID については、「付録 B.1 サービスの命名規則」を参照してください。プロダクト名表示機能については、「4.1.2 サービスの表示・指定方法」を参照してください。

3. エージェント階層からフォルダに追加したい PFM - Agent を選択する。
複数の PFM - Agent を選択することもできます。
選択した PFM - Agent にチェックマークが表示されます。
4. [OK] ボタンをクリックする。
次の図のように、「インターネット販売システム」フォルダの下に PFM - Agent が追加されます。

図 2-9 エージェント階層の表示例



参考

同じ PFM - Agent を、複数のフォルダに配置することもできます。また、フォルダに配置しないで、直接「User Agents (ログインユーザー名)」の直下に配置することもできます。

2.3.5 レポートを表示する

Performance Management システムで作成できるレポートには、監視テンプレートとしてシステムがあらかじめ用意したレポートと、ユーザーが定義したレポートがあります。

ここでは、PFM - Agent for Platform (Windows) の監視テンプレートの「Memory Available Trend(Multi-Agent)」レポートを表示する例を紹介します。「Memory Available Trend(Multi-Agent)」は、複数システムの最近 1 か月のメモリー使用状況を表示できるレポートです。このレポートは折れ線グラフで表示されます。

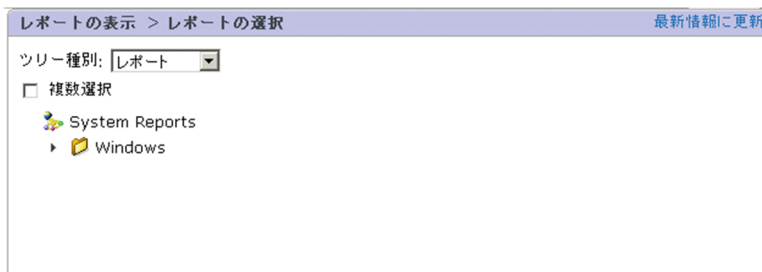
レポートの表示は、主に「エージェント階層」画面から行います。

手順を次に示します。

1. 「エージェント階層」画面のナビゲーションフレームでエージェントを選択する。
選択したエージェントにチェックマークが表示されます。
2. メソッドフレームで「レポートの表示」を選択する。
「レポートの表示 > レポートの選択」画面が表示され、インフォメーションフレームに PFM - Agent for Platform (Windows) の監視テンプレートのレポートが階層表示されます。

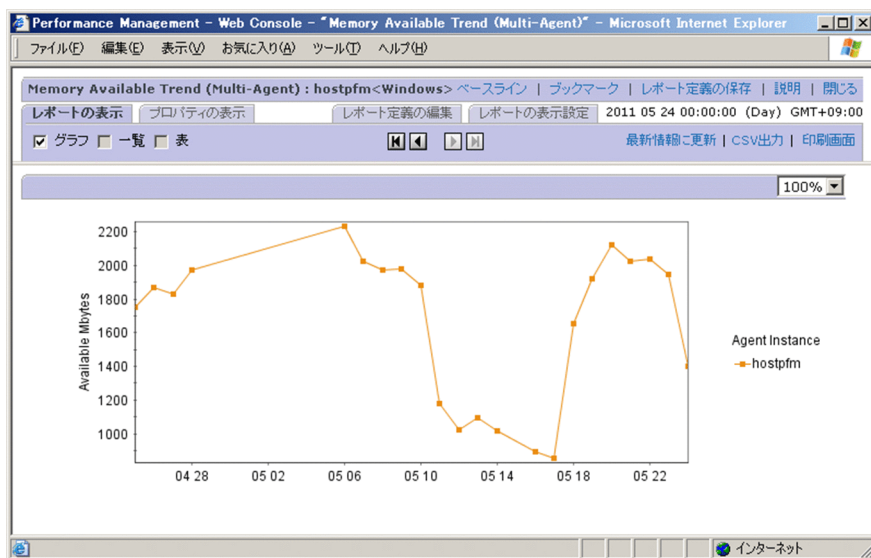
2. Performance Management を使ってみよう

図 2-10 [レポートの表示 > レポートの選択] 画面の表示例



3. 「Windows」フォルダ - 「Operating System」フォルダ - 「Monthly Trend」フォルダの「Memory Available Trend(Multi-Agent)」レポートをクリックする。
「Memory Available Trend(Multi-Agent)」レポート画面が別ウィンドウで表示されます。

図 2-11 レポート画面



例えば、レポートを確認したところ、空きメモリの容量が減り続けていたとします。そのような場合に、このレポートを CSV や HTML 形式で出力し、業務アプリケーションの開発担当者に調査と対応を依頼するなどができます。
このように、Performance Management を使用してパフォーマンス管理を行うことで、業務に支障が出る前に問題箇所を改善し、システムダウンなどの障害を未然に防ぐことができます。

ここでは監視テンプレートの定義をそのまま利用しましたが、用途に合わせて監視テンプレートのレポートの定義をカスタマイズしたり、監視テンプレートを使わないで固有

のレポートを定義したりすることもできます。

レポートの定義方法の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働分析のためのレポートの作成について説明している章を参照してください。

参考 レポートの種類とレポート表示のためにしておくこと

レポートには、過去から現在までのエージェントの状況を示す「履歴レポート」と、エージェントの現在の状況を示す「リアルタイムレポート」の2種類があります。

履歴レポートを表示するには、エージェントのパフォーマンスデータが Store データベースに記録されるように設定しておく必要があります。リアルタイムレポートの場合には設定の必要はありません。

レポートと Store データベースとの関係や、Performance Management でのパフォーマンスデータの扱い方については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

2.3.6 アラームを利用して監視する

アラームを設定することで、パフォーマンスデータがあらかじめ定義したしきい値に達したとき、監視画面のランプ状のアイコン（アラームアイコン）が赤く点滅し、システム管理者に問題発生（アラーム）を知らせるなどができます。なお、アラーム発生時にログ（動作ログ）を出力することができます。動作ログについては、「付録 G 動作ログの出力」を参照してください。

アラームを利用して監視するには、監視対象のエージェントとアラームテーブルを関連づけるという操作をします。この操作を「バインド」といいます。アラームテーブルのバインドでは、一つの監視エージェントに対して一つのアラームテーブルをバインドしたり、一つの監視エージェントに対して複数のアラームテーブルをバインドしたりするなどのバインド方式を選択できます。アラームテーブルのバインド方式については、「3.4.4 アラームテーブルのバインド方式の検討」を参照してください。

バインドされた時点で、Performance Management はアラームの定義に基づいた監視を開始します。

（1）アラームテーブルをコピーしてカスタマイズする

ここでは、PFM - Agent for Platform (Windows) の監視テンプレートのアラームテーブル「PFM Windows Solution Alarms 8.00」をカスタマイズして「Web サーバ監視」というアラームテーブルを作成する例を紹介します。

手順を次に示します。

1. [メイン] 画面のナビゲーションフレームで、[アラーム階層] タブを選択する。
[アラーム階層] 画面が表示されます。

2. Performance Management を使ってみよう

2. [アラーム階層] 画面のナビゲーションフレームで、「Windows」フォルダの下位の階層を展開する。

PFM - Agent for Platform (Windows) の監視テンプレートのアラームテーブルが表示されます。

3. ナビゲーションフレームのアラーム階層から「PFM Windows Solution Alarms 8.00」を選択する。

「PFM Windows Solution Alarms 8.00」にチェックマークが表示されます。

4. メソッドフレームで [コピー] メソッドを選択する。

[コピー > 名称入力 [アラームテーブル]] 画面が表示されます。

5. [新しいアラームテーブル名] に「Web サーバ監視」と入力する。

次のように入力します。

図 2-12 [コピー > 名称入力 [アラームテーブル]] 画面の入力例

アラーム階層 > アラームテーブル > PFM Windows Solution Alarms 8.00

コピー	アクティブ設定	バインドしたエージェントの表示	エクスポート
インポート			

コピー > 名称入力[アラームテーブル]

OK キャンセル

コピー元アラームテーブル名: PFM Windows Solution Alarms 8.00

新しいアラームテーブル名: WEBサーバ監視

OK キャンセル

注意

アラームテーブル名は任意に命名できますが、先頭文字に「PFM」を指定することはできません。

6. [OK] ボタンをクリックする。
[アラーム階層] 画面のナビゲーションフレームに、作成したアラームテーブルが追加されます。
7. 作成したアラームテーブルの CPU の監視条件を編集したいので、「CPU Usage」アラームを選択する。
作成したアラームテーブルの下位の階層を表示させて選択します。

図 2-13 アラーム階層からアラームを選択



「CPU Usage」アラームにチェックマークが表示されます。また、「CPU Usage」アラームを選択すると、メソッドフレームに [編集] メソッドが表示されます。

8. メソッドフレームの [編集] メソッドを選択する。
[編集 > 基本情報] 画面が表示されます。

9. [高度な設定] の、次の項目の値を変更する。
[発生頻度] の設定を次のように変更します。
 - ・「4」回しきい値超過 / 「5」インターバル中

図 2-14 [編集 > 基本情報] 画面の変更例

高度な設定

☒ アラームを有効にする
 ☐ 常にアラーム通知する
 ☐ すべてのデータを評価する

監視時刻範囲

☒ 常に監視する

開始: HH:MM
 終了: HH:MM

発生頻度

☒ 発生頻度を満たした時にアラーム通知する

回しきい値超過 / インターバル中

キャンセル 次へ > 完了

2. Performance Management を使ってみよう

図 2-15 [編集 > アラーム条件式] 画面の変更例

編集 > アラーム条件式

キャンセル < 戻る 次へ > 完了

レコード: System Overview (PI) 追加 説明

フィールド: CPU % 更新 説明

条件: >=

異常値: 90.0 Decimal fraction

警告値: 80.0 Decimal fraction

異常条件: CPU % >= "90.000"

警告条件: CPU % > "80.000"

削除

すべて削除

編集

キャンセル < 戻る 次へ > 完了

図 2-16 [編集 > アクション] 画面の変更例

編集 > アクション

キャンセル < 戻る 次へ > 完了

実行するアクション

アクション	異常	警告	正常
Eメール	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
コマンド	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
SNMP	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

表示するレポート

参照 削除

キャンセル < 戻る 次へ > 完了

図 2-17 [編集 > アクション定義] 画面の変更例

編集 > アクション定義

キャンセル < 戻る 完了

コマンドの定義

コマンド名: net send jp1-server JP1イベント設定

アクションハンドラ: LOCAL
(“PH1” + 実行ホスト名、または“LOCAL” (アラーム監視ホストで実行))

変数名

日付/時刻 (%SCT) ↑ ↓
 エージェント名 (%ANS) ↑ ↓
 ホスト名 (%HNS) ↑ ↓
 状態 (%SCS) ↑ ↓

実数値を追加

コマンド引数:

キャンセル < 戻る 完了

発生頻度とは

発生頻度とは、「何回のインターバル中に何回しきい値を超過したら通知するか」を設定する項目です。この項目を設定することで、CPU が継続的に高負荷となる状態のときだけ通知する、などの運用ができます。

10.[完了] ボタンをクリックする。

次にバインドの操作をします。

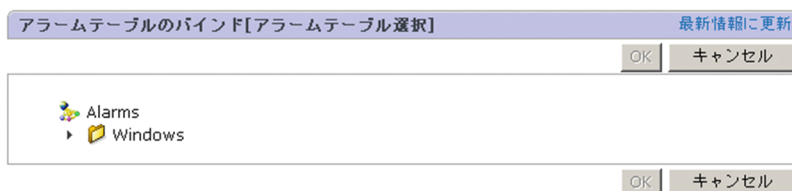
(2) アラームテーブルとエージェントをバインドする

作成したアラームテーブルとエージェントをバインド（関連づけ）します。バインドされた時点で、Performance Management はアラームの定義に基づいた監視を開始します。ここでは、一つの監視エージェントに対して一つのアラームテーブルをバインドする手順について説明します。

手順を次に示します。

1. [メイン] 画面のナビゲーションフレームで、[エージェント階層] タブを選択する。
[エージェント階層] 画面が表示されます。
2. [エージェント階層] 画面のナビゲーションフレームで、作成したアラームテーブルをバインドするエージェントを選択する。
選択したエージェントにチェックマークが表示されます。
3. メソッドフレームで [アラームテーブルのバインド] メソッドを選択する。
[アラームテーブルのバインド] 画面が表示されます。
インフォメーションフレームにアラームテーブルの階層が表示されます。

図 2-18 [アラームテーブルのバインド] 画面



4. アラームテーブル階層からバインドしたいアラームテーブルを選択する。
選択したアラームテーブルにチェックマークが表示されます。
5. [OK] ボタンをクリックする。
エージェントにアラームテーブルがバインドされると、アラームテーブルの定義に基づいた監視が開始されます。
6. メソッドフレームで、[アラームの状態の表示] メソッドを選択する。
[アラームの状態の表示] 画面が表示されます。

図 2-19 [アラームの状態の表示] 画面の表示例



バインドされているアラームテーブルに定義されているアラームが表示されます。アラームが発生した場合は、アラームアイコンがアラームの状態を示す色で表示されます。アラームアイコンをクリックすると、アラームの [プロパティ] 画面が表示され、アラームの定義内容を確認できます。

また、「ヘルスチェックステータス」に表示されるメッセージによって監視エージェントの稼働状態を確認できます。

ここでは、監視テンプレートのアラームテーブルをコピーし、カスタマイズして使用する方法を紹介していますが、監視テンプレートのアラームテーブルをそのまま使用することもできます。また、監視テンプレートを使わないで固有のアラームテーブルを定義することもできます。アラームテーブルの定義方法の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、アラームによる稼働監視について説明している章を参照してください。

2.3.7 イベントを表示する

Performance Management システムで発生したイベントは、PFM・Web Console の [イベントモニター] 画面で確認できます。[イベントモニター] 画面で確認できるイベント情報には、次の三つがあります。

- ・ エージェントイベント
エージェントの状態の変化を示すイベント
- ・ アラームイベント
エージェントでのアラームの発生を示すイベント
- ・ ヘルスチェックイベント
監視エージェントのヘルスチェック状態の変化を示すイベント

参考

[イベントモニター] 画面ではヘルスチェック状態も確認できます。

[イベントモニター] 画面では、イベントを発生順に一覧表示します。エージェントの状態、アラームの状態およびヘルスチェックの状態は、アイコンの色や形で確認できます。

手順を次に示します。

1. [メイン] 画面のメニューパーフレームで、[イベントモニター] メニューを選択する。

[イベントモニター] 画面が表示されます。

図 2-20 [イベントモニター] 画面の表示例

日付/時刻	エージェント	ホスト名	状態	レポート	アラーム名	アラームテーブル名	メッセージテキスト
2009 03 02 13:04:00	webapp<Windows>	webapp	OK	n/a	n/a	n/a	State change
2009 03 02 13:04:00	webapp<Windows>	webapp	OK	n/a	CPU Usage	PfM Windows Solution Alarms 8.50	CPU is at 53.5
2009 03 02 13:02:00	webapp<Windows>	webapp	Warning	n/a	n/a	n/a	State change
2009 03 02 13:02:00	webapp<Windows>	webapp	Warning	n/a	CPU Usage	PfM Windows Solution Alarms 8.50	CPU is at 89.3
2009 03 02 13:01:00	webapp<Windows>	webapp	Exception	n/a	n/a	n/a	State change
2009 03 02 13:01:00	webapp<Windows>	webapp	Exception	n/a	CPU Usage	PfM Windows Solution Alarms 8.50	CPU is at 98.4
2009 03 02 12:58:00	webapp<Windows>	webapp	Warning	n/a	n/a	n/a	State change
2009 03 02 12:58:00	webapp<Windows>	webapp	Warning	n/a	CPU Usage	PfM Windows Solution Alarms 8.50	CPU is at 81.7
2009 03 02 12:54:00	webapp<Windows>	webapp	Exception	n/a	n/a	n/a	State change
2009 03 02 12:54:00	webapp<Windows>	webapp	Exception	n/a	CPU Usage	PfM Windows Solution Alarms 8.50	CPU is at 98.0
2009 03 02 12:45:00	webapp<Windows>	webapp	OK	n/a	n/a	n/a	State change
2009 03 02 12:45:00	webapp<Windows>	webapp	OK	n/a	CPU Usage	PfM Windows Solution Alarms 8.50	CPU is at 65.4
2009 03 02 12:43:00	webapp<Windows>	webapp	Warning	n/a	n/a	n/a	State change
2009 03 02 12:43:00	webapp<Windows>	webapp	Warning	n/a	CPU Usage	PfM Windows Solution Alarms 8.50	CPU is at 93.4
2009 03 02 12:37:00	webapp<Windows>	webapp	OK	n/a	n/a	n/a	State change
2009 03 02 12:37:00	webapp<Windows>	webapp	OK	n/a	CPU Usage	PfM Windows Solution Alarms 8.50	CPU is at 57.8
2009 03 02 12:34:00	webapp<Windows>	webapp	Exception	n/a	n/a	n/a	State change
2009 03 02 12:34:00	webapp<Windows>	webapp	Exception	n/a	CPU Usage	PfM Windows Solution Alarms 8.50	CPU is at 95.6
2009 03 02 12:32:00	webapp<Windows>	webapp	Warning	n/a	n/a	n/a	State change
2009 03 02 12:32:00	webapp<Windows>	webapp	Warning	n/a	CPU Usage	PfM Windows Solution Alarms 8.50	CPU is at 87.8
2009 03 02 12:20:00	webapp<Windows>	webapp	Exception	n/a	n/a	n/a	State change
2009 03 02 12:20:00	webapp<Windows>	webapp	Exception	n/a	CPU Usage	PfM Windows Solution Alarms 8.50	CPU is at 92.0
2009 03 02 12:17:00	webapp<Windows>	webapp	Warning	n/a	n/a	n/a	State change
2009 03 02 12:17:00	webapp<Windows>	webapp	Warning	n/a	CPU Usage	PfM Windows Solution Alarms 8.50	CPU is at 83.7
2009 03 02 12:06:00	webapp<Windows>	webapp	Exception	n/a	n/a	n/a	State change

ここでは、[イベントモニター] 画面に表示される主なアイコンの意味について説明します。表示内容の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management

2. Performance Management を使ってみよう

運用ガイド」の、イベントの表示について説明している章、またはマニュアル「JP1/ Performance Management リファレンス」の、[イベントモニター] 画面の説明を参照してください。

表 2-2 イベントモニターの意味

アイコン	説明
エージェントイベントアイコン	 監視エージェントが正常に動作している、または未起動（状態不明）である
	 監視エージェントが警告状態である
	 監視エージェントが異常状態である
アラームイベントアイコン	 (緑) 正常のアラームイベントが発生した
	 (黄) 警告のアラームイベントが発生した
	 (赤) 異常のアラームイベントが発生した
	 常にアラーム通知する設定のアラームであることを示す アラームの定義で「常にアラーム通知する」を選択している場合だけに表示される
ヘルスチェックイベントアイコン	 非対応
	 動作中
	 縮退稼働
	 サービス停止
	 状態不明
	 ホスト停止
レポートアイコン	 など 関連づけられたレポートがある
	「n/a」または「 - 」 関連づけられたレポートがない

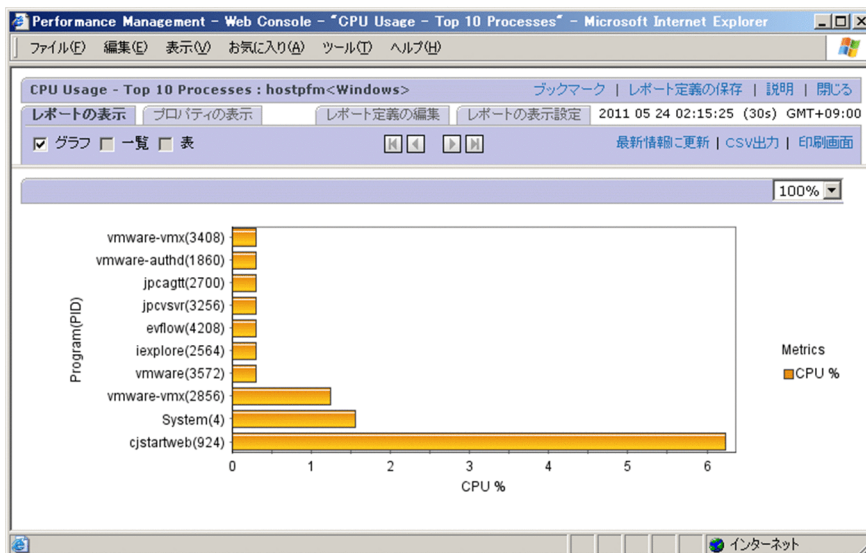
注

ヘルスチェックイベントアイコンで表示される状態の詳細については、マニュアル「JP1/ Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

アラームイベントに対してレポートを関連づけている場合には、「レポート」欄にレポートアイコンが表示されます。アイコンをクリックすると、関連レポートが表示されます。

例えば、アラームが発生しているためにレポートを確認したところ、特定のプログラムで CPU 使用率が高くなっている、などをレポートから分析できます。

図 2-21 レポート画面



参考 イベントモニターからレポートを表示するためにしておくこと

イベントモニターからアラームに関連したレポートを表示させるには、アラームを定義するときに、あらかじめ表示させたいレポートを関連づけておく必要があります。アラームの定義方法とレポートの関連づけについては、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、アラームによる稼働監視について説明している章を参照してください。

3

Performance Management を活用した稼働監視システムの設計

この章では、Performance Management を活用した稼働監視システムの設計について説明します。

3.1 Performance Management のサポート範囲

3.2 Performance Management の設計から運用までの流れ

3.3 稼働監視システムの構成設計

3.4 稼働監視システムの運用設計

3.1 Performance Management のサポート範囲

ここでは、システム管理者が稼働監視システムを構築する際の一般的な流れと、Performance Management のサポート範囲を示します。稼働監視システムを設計する前に、稼働監視システムのライフサイクルと Performance Management を使ってできることを確認してください。

Performance Management の提供機能の詳細については、「4. Performance Management の機能」を参照してください。

図 3-1 稼働監視システム構築の一般的な流れと Performance Management のサポート範囲



システム化計画フェーズ

稼働監視システムを構築するための計画を立案するフェーズです。システムの目的、構築に掛かる費用や体制、およびスケジュールなどを検討します。

Performance Management を使用する場合は、システムの要件に応じた監視エージェント製品を選定します。

設計フェーズ

稼働監視システムの基盤方式を設計するフェーズです。

まず、システムの構成やネットワーク構成などを設計します。稼働監視システムを、統合運用管理システム（JP1/IM）やネットワーク監視システム（NNM）など、ほかのシステムと連携させる場合は、連携の方式も検討します。

次に、監視項目の選定、システムが危険域に達したときの対処方法、監視項目のレポートの表示形式、構築した稼働監視システムの運用ルールなどを設計します。

Performance Management の提供機能

- ・ メモリー所要量など、システム見積もりのための算出式の提供
 - ・ 監視項目を選定するための、監視テンプレート（ひな形）やデータモデル（各種レコード）の提供
 - ・ 他システムとの連携機能の提供（JP1/IM 連携、NNM 連携など）
- など

構築フェーズ

設計フェーズで検討した内容に従い、稼働監視システムを導入して各種設定を行うフェーズです。Performance Management をインストールし、パラメーターや環境を設定します。

Performance Management の提供機能

- 各種設定を行うための GUI (PFM - Web Console の画面) の提供
- 各種設定を行うためのコマンドの提供

運用フェーズ

稼働監視システムを運用するフェーズです。稼働監視データを収集し、システムが危険域に達したことを検知したときに適切に対処したり、レポートを参照して稼働状態を分析したりします。

Performance Management の提供機能

- パフォーマンスデータの収集・管理機能
- パフォーマンスデータがしきい値に達したときのアラーム通知機能
- パフォーマンスデータのレポート機能
- パフォーマンスデータの出力機能
- 運用コマンドによるパフォーマンスデータのバックアップ、リストア、バックアップデータのインポートなどの機能
など

分析・再構築フェーズ

稼働監視システムで得られたパフォーマンスデータを基に、監視対象であるシステムの問題点を分析し、必要に応じて再構築を行うフェーズです。

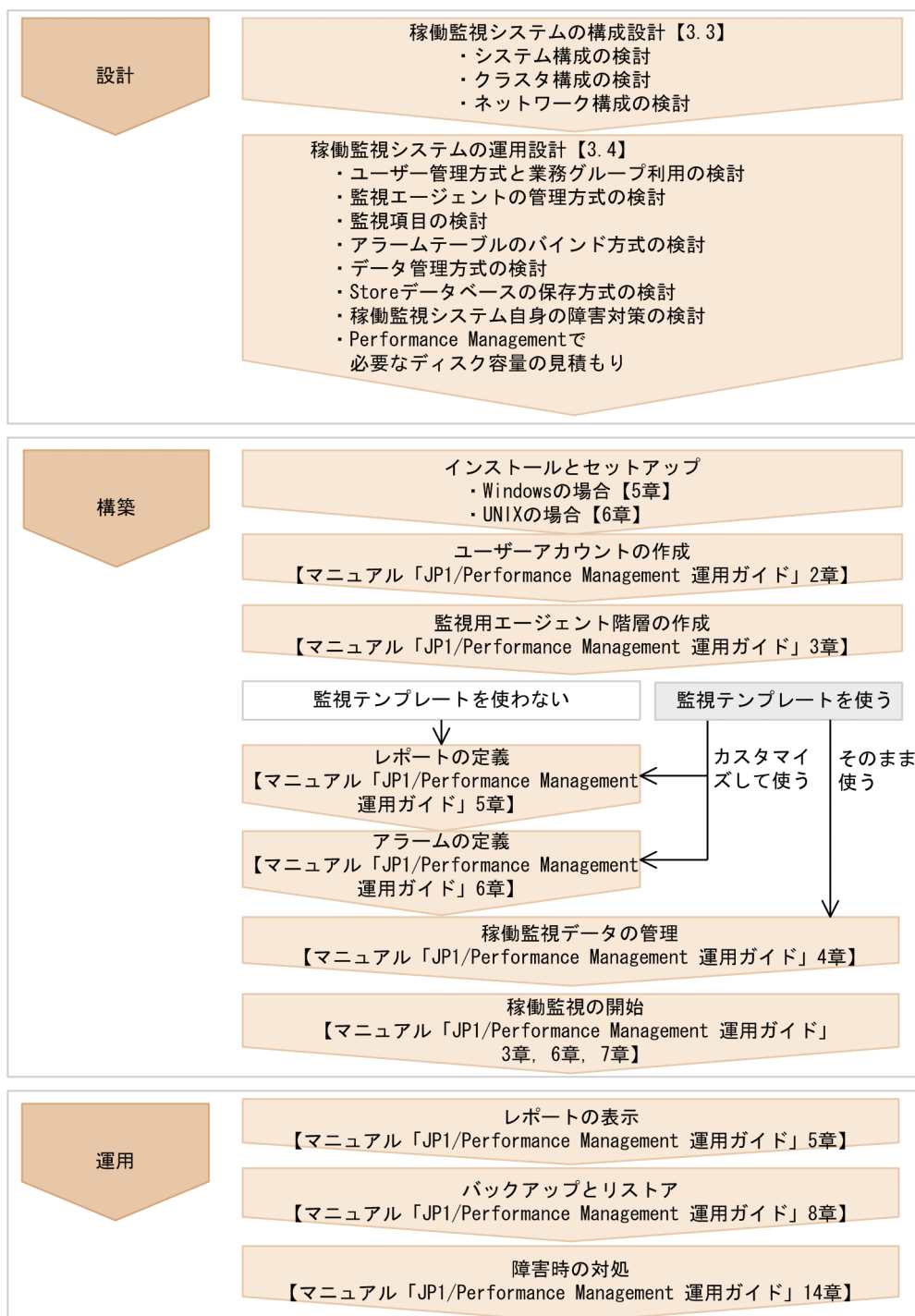
Performance Management の提供機能

- パフォーマンスデータのファイル出力機能の提供
Performance Management で出力したファイルは、稼働分析製品 (PFM - Analysis) で利用できます。

3.2 Performance Management の設計から運用までの流れ

Performance Management の設計から運用までの流れを次の図に示します。

図 3-2 設計から運用までの流れ



(凡例)

【 】: 参照先

3.3 稼働監視システムの構成設計

Performance Management を使った稼働監視システムの構築に当たって、次の内容について検討する必要があります。

- システム構成の検討
- クラスタ構成の検討
- ネットワーク構成の検討

それぞれの検討内容について説明します。

3.3.1 システム構成の検討

システム管理者はどのようなシステム構成で稼働監視システムを構築するかを検討します。Performance Management では、監視対象に応じて必要な PFM・Agent を追加したり、リモート監視に必要な PFM・RM を導入したりすることで、システムを構成できます。システムの利用者や負荷の増大など、運用状況に合わせて柔軟にシステムを拡張できます。

ここでは Performance Management のシステム構成例について説明します。

ポイント

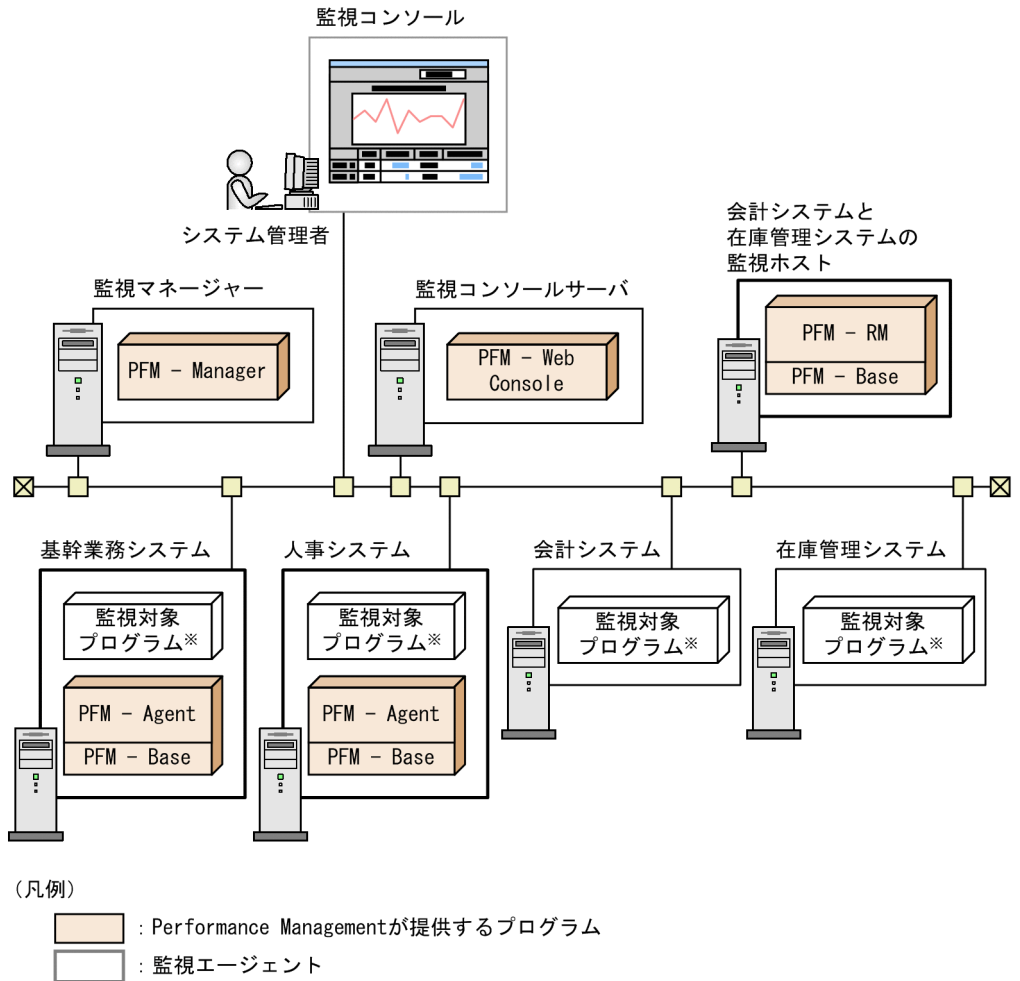
監視エージェント 1 台にすべての Performance Management プログラムをインストールして稼働監視システムを構成することもできます。

(1) データベースや業務アプリケーションを稼働監視する場合のシステム構成例

データベースや業務アプリケーションを稼働監視する場合は、1 台の監視マネージャーで複数の監視エージェントを一元管理するシステムを構成できます。また、PFM・RM を構成に含めることで、複数の監視対象システムを一つの監視ホストで監視できます。

構成例を次の図に示します。

図 3-3 データベースや業務アプリケーションを稼働監視する場合のシステム構成例



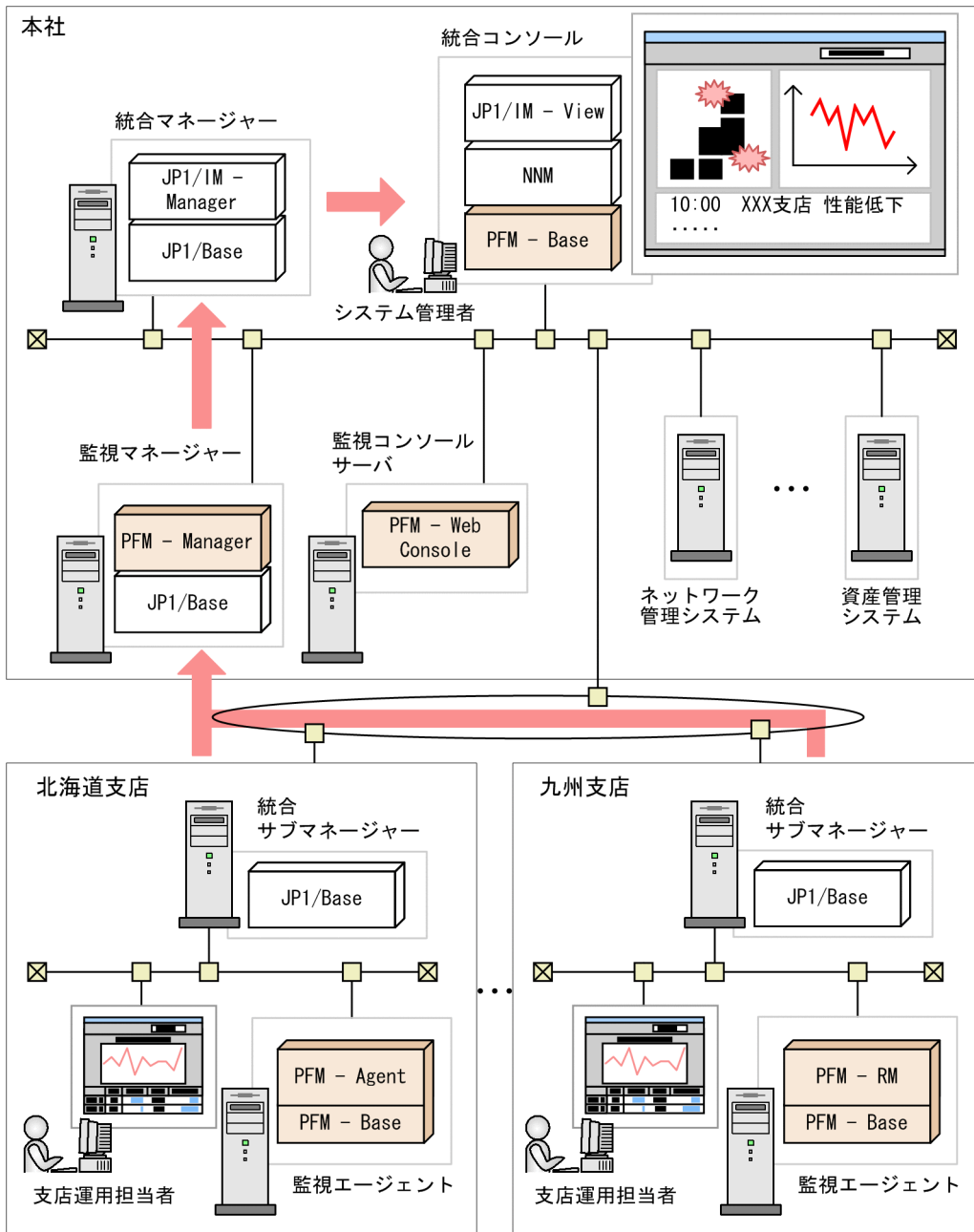
注※ OSや各種サーバアプリケーションなど。

(2) 業務全体の視点から稼働監視する場合のシステム構成例




統合管理製品 (JP1/IM) やネットワーク管理製品 (NNM) から Performance Management で収集したパフォーマンスデータを確認すると、業務全体の視点から稼働状況を監視できます。ネットワーク管理製品に NNM を、統合管理製品に JP1/Base および JP1/IM を使用した大規模システムの構成例を次の図に示します。

3. Performance Management を活用した稼働監視システムの設計

図 3-4 大規模システムの構成例



(凡例)

-  : データの流れ
-  : Performance Managementが提供するプログラム
-  : ほかのJP1製品が提供するプログラムなど

ポイント

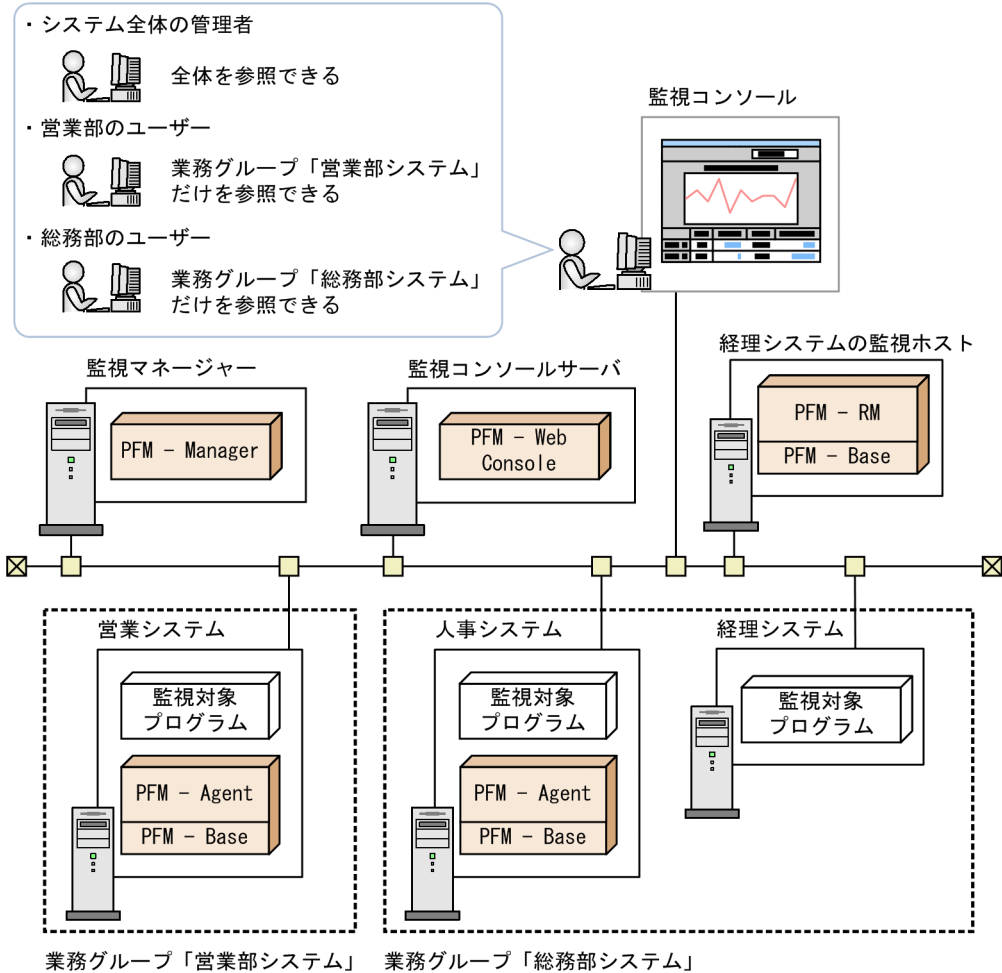
Performance Management では、システム構成によって、一つの PFM・Manager に接続できる PFM・Agent、PFM・RM、および PFM・Web Console の数が異なります。これらの数を考慮して、適切なシステム構成を設計してください。Performance Management の制限値の詳細については、「付録 A 制限値」を参照してください。また、使用するマシンのメモリーなど、性能が十分であるかどうかを考慮する必要があります。Performance Management のシステム見積もりの詳細については、「付録 C システム見積もり」を参照してください。

(3) 業務グループ単位で稼働監視する場合のシステム構成例



業務ごとに監視できるユーザーを決めたい場合は、業務グループを設定してください。各ユーザーは自分に権限がある業務グループだけを参照できるので、情報混在を防止し、操作ミスを低減でき、各監視システムの独立性を保持できます。

構成例を次の図に示します。

図 3-5 業務グループ単位で稼働監視する場合のシステム構成例



(凡例)

-  : Performance Managementが提供するプログラム
-  : 業務グループ

ポイント

リモートエージェントを監視する場合でも、対応する PFM・RM ホストを同じ業務グループに含める必要はありません。ただし、PFM・RM ホストを業務グループに含める場合は、その監視対象ホスト（リモートエージェントホスト）もすべて、PFM・RM ホストと同じ業務グループに含めるようにしてください。なお、各リモートエージェントに対する収集間隔などの設定は、システム全体を操作できるシステム管理者が実施します。

3.3.2 クラスタ構成の検討

システム管理者は、システムの可用性を向上させるため、クラスタ構成にするかどうかを検討します。Performance Management は、製品によって対応するクラスタ構成が異なります。次に対応するクラスタ構成を示します。

PFM - Manager のクラスタ構成

PFM - Manager は、アクティブ・スタンバイ構成のクラスタに対応しています。実行系ノードと待機系ノードのどちらか一つだけ実行できます。実行系ノードが障害のときは、フェールオーバーして待機系ノードに処理を引き継ぎます。

PFM - Web Console のクラスタ構成

PFM - Web Console は、アクティブ・スタンバイ構成のクラスタに対応しています。実行系ノードと待機系ノードのどちらか一つだけ実行できます。実行系ノードが障害のときは、フェールオーバーして待機系ノードに処理を引き継ぎます。

PFM - Base のクラスタ構成

PFM - Base は、アクティブ・アクティブ構成のクラスタに対応しています。PFM - Base のホストに PFM - Agent や PFM - RM がインストールされている場合、同居する PFM - Agent や PFM - RM に応じたクラスタ環境を構築できます。

PFM - Agent のクラスタ構成

PFM - Agent のクラスタ構成は、監視対象プログラムによって異なります。例えば、Oracle データベースを監視する PFM - Agent for Oracle は、アクティブ・スタンバイ構成に対応しているため、実行系ノードが障害のときは、フェールオーバーして待機系ノードに処理を引き継ぎます。一方、OS のサーバを監視する PFM - Agent for Platform は、クラスタ環境で動作できますが、PFM - Agent for Platform 自身がフェールオーバーすることはできません。

PFM - RM のクラスタ構成

PFM - RM のクラスタ構成は、監視対象プログラムによって異なります。例えば、サーバの OS を監視する PFM - RM for Platform は、アクティブ・スタンバイ構成に対応しているため、実行系ノードが障害のときは、フェールオーバーして待機系ノードに処理を引き継ぎます。

PFM - Manager および PFM - Web Console のクラスタの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。PFM - Agent や PFM - RM のクラスタの詳細については、各 PFM - Agent または PFM - RM マニュアルの、クラスタシステムでの運用について説明している章を参照してください。

注意

Performance Management では、次のようなクラスタ構成には対応していません。

- ・物理ホスト名と論理ホスト名を同じ名称にして運用するクラスタ構成
- ・フェールオーバー時に物理ホスト名を変更するクラスタ構成

Performance Management をクラスタシステム上で運用するためには、クラスタを構成するノードの物理ホスト名と論理ホスト名を異なる名称にする必要があります。物理ホスト名と論理ホスト名を同じ名称にして運用するクラスタ上で Performance Management を動作させる場合は、監視ホスト名設定機能を使用して物理ホスト上のホスト名が一意的な名称になるように設定してください。監視ホスト名設定機能については、Windows の場合は「5.3.3 Performance Management システムでのホスト名の変更」を、UNIX の場合は「6.3.3 Performance Management システムでのホスト名の変更」を参照してください。

3.3.3 ネットワーク構成の検討

システム管理者は、稼働監視システムをどのようなネットワーク構成で構築するかを検討します。

ポイント

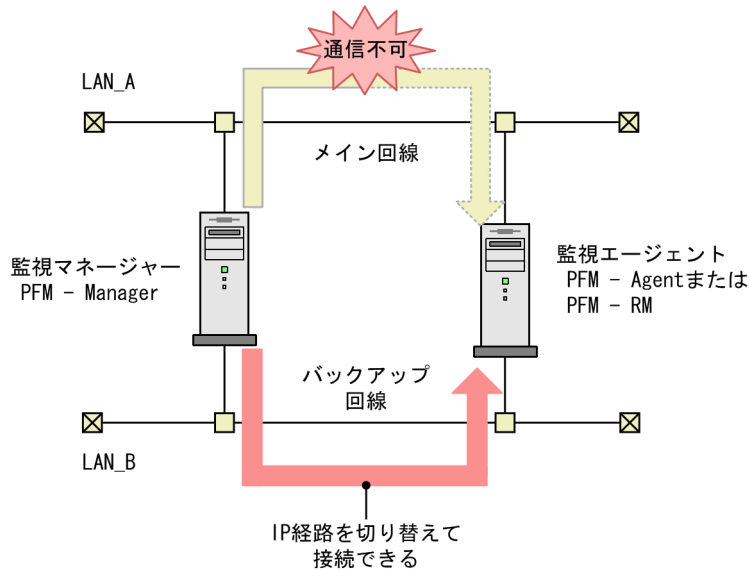
Performance Management では、監視エージェントで収集されたパフォーマンスデータは監視エージェント自身に蓄積されます。そのため、ネットワーク上に、大量のパフォーマンスデータが定期的に送信されることはありません。

(1) Performance Management を LAN 環境で使用する例

Performance Management では、複数の LAN ボードを持つホストに PFM・Manager、PFM・Web Console、PFM・Agent、または PFM・RM をインストールし、そのホストから複数の LAN に接続して Performance Management を運用するシステム構成に対応しています。

例えば、PFM・Manager と、PFM・Agent または PFM・RM のそれぞれで複数の LAN ボードを持ち、複数の IP 経路がある場合で、一部の経路ではネットワークに接続できないときは、接続 IP 経路を切り替えることができます。接続 IP 経路の切り替えができるシステム構成例を次の図に示します。

図 3-6 接続 IP 経路の切り替えができるシステム構成例



複数の LAN に接続されたネットワーク環境で運用する場合、IP アドレスを設定する必要があります。IP アドレスの設定方法については、「5. インストールとセットアップ (Windows の場合)」または「6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)」を参照してください。

(2) Performance Management を WAN 環境で使用する例

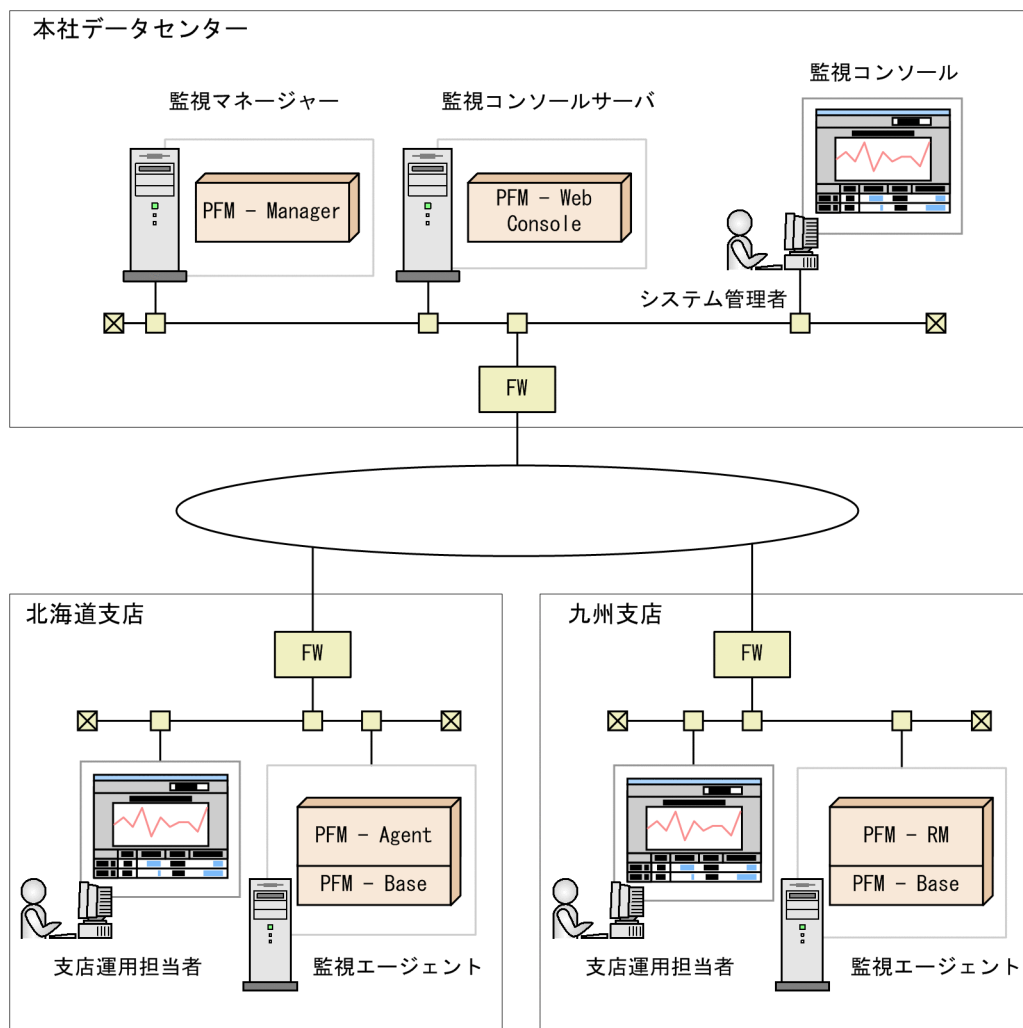
Performance Management では、ファイアウォールを挟んで PFM - Manager、PFM - Web Console、PFM - Agent または PFM - RM を配置できます。

Performance Management は、1 対 1 のアドレス変換をする静的 NAT (Basic NAT) に対応しています。また、Performance Management が使用するポート番号は、環境に合わせて任意な番号に変更できます。

Performance Management を WAN 環境で使用する例を次の図に示します。

3. Performance Management を活用した稼働監視システムの設計

図 3-7 Performance Management を WAN 環境で使用する例



(凡例)

- FW : ファイアウォール
- : Performance Managementが提供するプログラム

ポート番号の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の付録に記載されている、ポート番号一覧を参照してください。

(3) Performance Management を同名のホストが複数ある環境で使用する例

Performance Management では、複数のドメインにまたがる場合など、同じホスト名を持つホストが複数ある環境でも使用できます。このような環境では、各ホストにエイリアス名を付与して、ホスト名が重複しないようにします。

Performance Management では、ホスト名として、実ホスト名を使用するか、エイリアス名を使用するかを選択できます。ホスト名としてどちらを使用するかの設定については、Windows の場合は「5.3.3 Performance Management システムでのホスト名の変更」を、UNIX の場合は「6.3.3 Performance Management システムでのホスト名の変更」を参照してください。

参考

論理ホスト環境のホスト名としてはエイリアス名は使用できません。

3.4 稼働監視システムの運用設計

Performance Management を使った稼働監視システムを運用するに当たって、次の内容について検討する必要があります。

- ユーザー管理方式および業務グループ利用の検討
- 監視エージェントの管理方式の検討
- 監視項目の検討
- アラームテーブルのバインド方式の検討
- データ管理方式の検討
- Store データベースの保存方式の検討
- 稼働監視システム自身の障害対策の検討
- Performance Management で必要なディスク容量の見積もり

それぞれの検討内容について説明します。

3.4.1 ユーザー管理方式および業務グループ利用の検討

システム管理者は、セキュリティポリシーに基づいたユーザーアカウントの管理方式、運用方式、および業務グループの利用要否を検討します。ユーザーアカウントには、各担当者の業務内容に応じた適切な権限を設定するように考慮します。

(1) ユーザーアカウントの管理方式の検討

Performance Management では、ユーザーアカウントの管理方式として、稼働監視システム内でユーザーアカウントを管理する方法と、統合管理システム（JP1/IM）でユーザーアカウントを一元管理する方法の二つから選択できます。

稼働監視システム内でユーザーアカウントを管理する方法（PFM 認証モード）

ユーザーアカウントを PFM・Manager で管理する方法です。ユーザーアカウントは PFM・Web Console の画面で作成します。この方法は、Performance Management システムでの標準のユーザーアカウントの管理方式です。

統合管理システムでユーザーアカウントを一元管理する方法（JP1 認証モード）

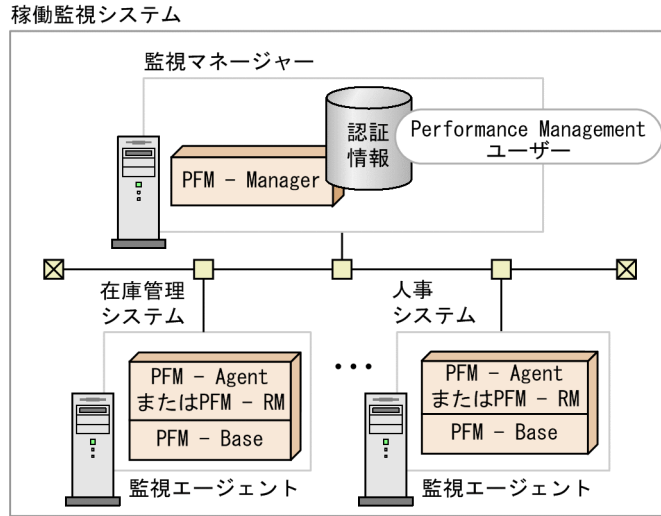
統合管理システム（JP1/IM）でユーザーアカウントを一元管理する方法です。ユーザーアカウントは、統合管理システムの認証サーバである JP1/Base で JP1 ユーザーとして作成します。すでにほかの JP1 製品で JP1/Base による認証を行っている場合や、Performance Management の連携機能を使って JP1/IM と連携する場合などにこの方式にすると、複数のアカウントを管理する必要がありません。

JP1 ユーザーでアカウントを管理する場合は、PFM・Manager がインストールされているホストに JP1/Base が必要になります。クラスタ環境で利用する場合は、PFM・Manager と JP1/Base の論理ホスト名を同じにする必要があります。

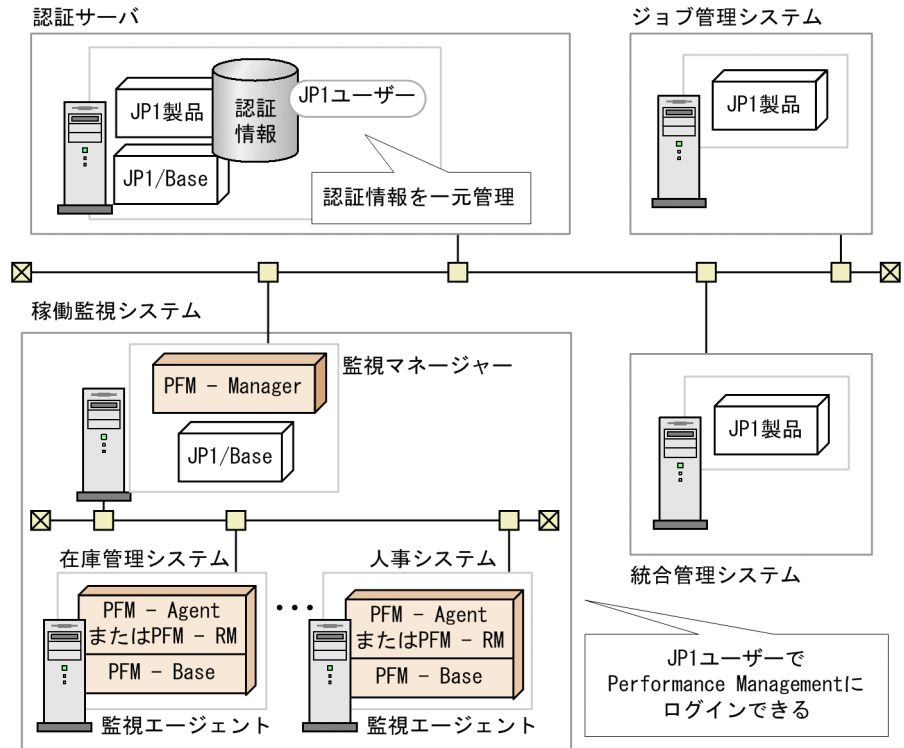
ユーザーアカウントの管理方法の違いを次の図に示します。

図 3-8 ユーザーアカウントの管理方法の違い

稼働監視システム内でユーザーアカウントを管理する方法



ほかのJP1製品とユーザーアカウントを一元管理する方法



(2) ユーザーアカウントの運用方式の検討

セキュリティを確保するために、システム管理者はユーザーアカウントに適切な権限を

設定します。設定できるユーザーアカウントの権限は、「管理ユーザー権限」と「一般ユーザー権限」の2種類があります。

また、ユーザーアカウントにはパスワードを設定します。成り済ましを防ぐために、他人に推測されにくいパスワードを設定する必要があります。セキュリティ向上のため、使用していないアカウントは削除してください。また、パスワードは定期的に変更することをお勧めします。

(3) 業務グループの利用の検討

業務システムごとに、稼働情報データを参照できるユーザーを限定したい場合は、業務グループを利用します。

ポイント

複数のシステム管理者が分担してシステムを監視する場合や、大規模なシステムを監視する場合は、業務グループの利用を検討してください。

業務グループを利用する場合は、どの監視対象ホストを同一の業務グループとして定義するか、および各グループに対してどのユーザーアカウントに権限を与えるかについて検討してください。

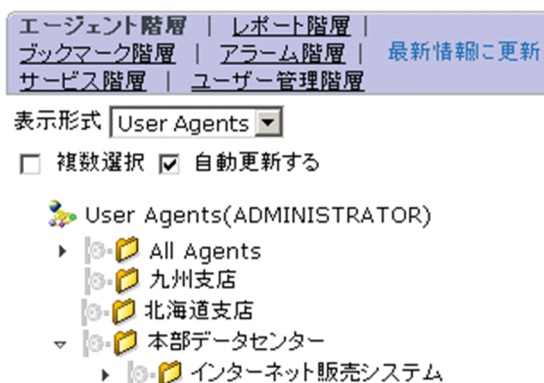
3.4.2 監視エージェントの管理方式の検討

システム管理者は、稼働監視システム内の監視エージェントをどのように管理するかを検討します。Performance Management では、監視対象のプログラムの違いを意識することなく、監視エージェントを管理できるように、監視エージェントの管理方法として次の方法を提供しています。

- PFM・Agent や PFM・RM ごとにグルーピングされたエージェント階層で監視する
稼働監視システム内のすべての PFM・Agent や PFM・RM について、製品ごとのフォルダに自動的にグルーピングされたエージェント階層で監視する方法です。一般ユーザー権限を持つユーザーに対して、この監視方法を禁止して、参照できるエージェントを制限することもできます。
- ログインユーザーごとに作成したエージェント階層で監視する
ログインユーザーごとに任意に作成したエージェント階層で監視する方法です。システムの構成や組織などの単位に、フォルダを自由に構成できます。一般ユーザー権限を持つユーザーに対して、エージェント階層の編集を禁止して、参照できるエージェントを制限することもできます。

稼働監視システムを運用する環境に応じて、監視用のエージェント階層を作成してください。監視エージェントの管理の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、エージェントの監視について説明している章を参照してください。

図 3-9 企業の組織や業務ごとに監視対象プログラムを監視するための設定例



3.4.3 監視項目の検討

稼働監視システムの目的は、システムが危険域に達したことを事前に把握し、トラブルを未然に防止することです。そのために、システムの監視項目を検討することは最も重要な作業になります。監視項目の検討では、どのような監視項目をどのように監視するかを決めます。監視項目を選定する際は、各 PFM・Agent または PFM・RM マニュアルを参照して検討してください。

監視項目を検討する流れを次に示します。

1. アラームの検討

監視対象システムのどのような項目を監視するかを決めて、監視項目に対するしきい値を決めます。例えば、共有サーバ上での作業が正常にできなくなることがないように、共有サーバの論理ディスクドライブの空き容量の割合を監視項目とし、しきい値を決めます。

また、しきい値に達した場合にどのような方法でシステム管理者に通知させるかを決めます。例えば、E メールや SNMP トラップを送信できます。

2. レポートの検討

設定したしきい値を超え、アラームが発生した場合に、原因分析や状況把握のためにどのようなレポートを表示させるかを決めます。例えば、共有サーバの論理ディスクドライブの空き容量が少ない上位 10 個を集合横棒グラフに表示する、などのように監視項目と表示形式を決めます。

なお、監視項目の選定には、Performance Management で提供している監視テンプレートを利用できます。監視テンプレートをそのまま利用したり、一部の定義をカスタマイズしたりすることで、システム管理者の監視項目を定義する作業を軽減できます。

ポイント

監視項目は、監視対象プログラムのパラメーターの選定など技術的なことだけでなく、システムの業務特性やシステムの運用体制を考えて検討することをお勧めします。

次に、アラームとレポートの検討についてそれぞれ説明します。

(1) アラームの検討

アラームで検討する内容について説明します。

(a) しきい値をどう設定するか

Performance Management では、PFM・Agent や PFM・RM で収集したパフォーマンスデータが、あらかじめ定義されたしきい値に達したときに、アラームイベントを発行させることができます。システム管理者はこの機能を利用して、どの監視項目が、どのような値を超えたらアラームイベントで警告させるかを決めてください。Performance Management ではアラームイベントを発生させる条件を時間帯ごとに定義することもできます。

例えば、次のような設定ができます。

- 昼間と夜間で監視するプロセスを別々に設定する
- 昼間は監視センターでシステム運用者が常時監視するため、監視コンソールのアイコンの点滅で通知し、夜間はシステム管理者の携帯電話に E メールを送信する

システム管理者は、必要に応じて、監視対象をどの時間帯に監視するかを決めてください。

また、Performance Management では、突発的な負荷によってしきい値が超過した場合にアラームイベントを発生させないように設定できます。「監視のインターバル何回中に何回しきい値を超過したら通知するか」という発生頻度を設定することで、継続的に CPU が高負荷となる状態のときだけ通知する、などの運用ができます。突発的で一時的な負荷の場合には通知を抑えることができるので、システムの特性を考慮した効率の良いアラームを発生させることができます。

(b) しきい値に達したらどう対処するか

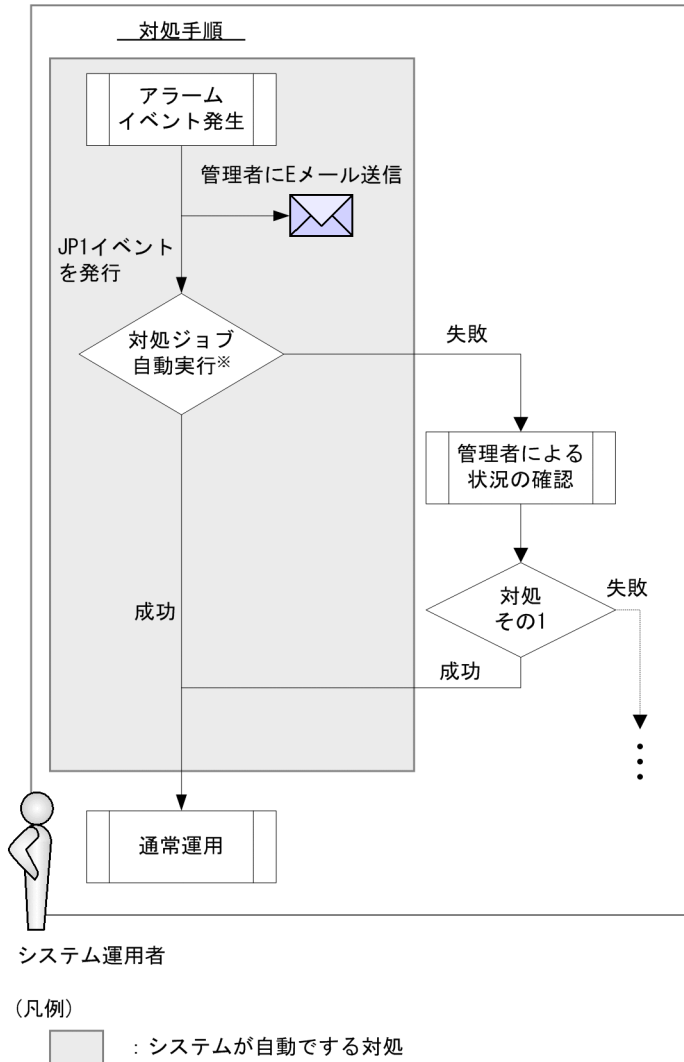
監視対象プログラムが危険域に達したときに、どのように問題の個所を検知し、だれがどのような一次処置を行うのか、また、一次処置で解決しないときはどのような方法で解決するのかを決めます。Performance Management では、アラームイベントが発生したときに次のアクションを自動実行できます。

- システム管理者に E メールで通知する
- SNMP トラップを送信する
- E メールや、SNMP トラップ以外の通知のためのコマンド（メッセンジャサービス（`net send` コマンド）や `wall` コマンドなど）を実行する
- ほかの JP1 製品と連携するための JP1 イベントを発行する

システム管理者は、これらの Performance Management の機能の利用を含めて、稼働監視システムからアラームが通知されたときの対処について検討してください。

次の図に、アラーム発生時の対処についての検討例を示します。

図 3-10 監視対象システムが危険域に達したときの対処手順の例



注※

対処ジョブの自動実行はジョブ管理システムで行う

ポイント

アラームイベントが発生したときに、自動で修復プログラムなどを実行してシステムを自律的に正常な状態にしたい場合は、JP1 イベントを発行して、ジョブ管理システムなどと連携することをお勧めします。

(2) レポートの検討

レポートで検討する内容について説明します。

3. Performance Management を活用した稼働監視システムの設計

(a) どのようなレポートにするか

Performance Management では、現在の稼働状況をつかむためのリアルタイムレポートと長期的な稼働状況の傾向をとらえるための履歴レポートを作成できます。システム管理者は、パフォーマンスデータを基にどのようなレポートを作成して稼働状況を確認するかを検討してください。わかりやすいレポートを作成することで、システムの問題点を正しくとらえることができます。

Performance Management では、日次、週次、月次、および年次などの期間ごとのレポートを表示できます。また、アラームイベントが発生したときにアラームのアイコンからレポートが表示されるようにしたり、あるレポートに関連性のあるレポートをあらかじめ定義しておくことでレポートから別のレポートをドリルダウン表示させたりすることもできます。

なお、システムの稼働状況を総合的に判断したい場合に、複数のレポートを同じグラフ上に重ね合わせて表示させることもできます。

長期的な稼働分析のために、レポートを定期的に出力する必要がある場合は、出力方式を検討します。Performance Management では、レポートを PFM - Web Console の画面で表示するか、または運用コマンド (jpcrpt コマンド) で CSV または HTML 形式のテキストファイルに出力できます。

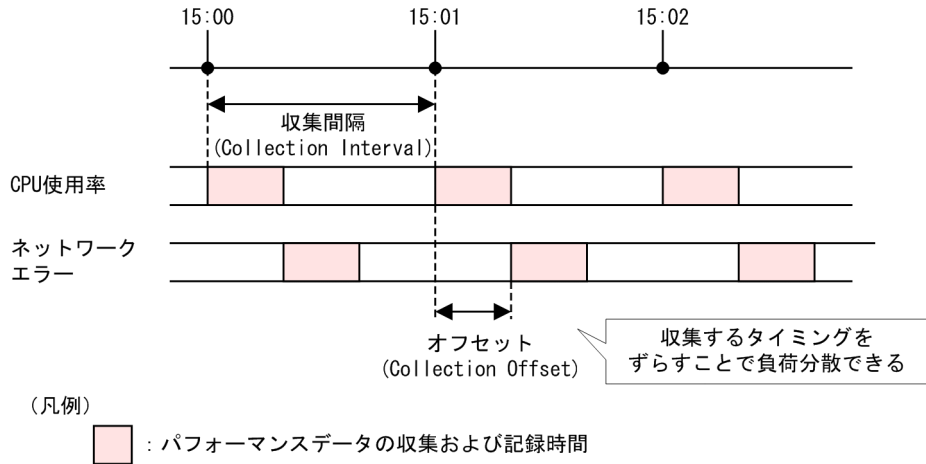
レポートの定義方法やレポートの出力方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働分析のためのレポートの作成について説明している章を参照してください。

(b) どの項目をデータベースに保存するか

システム管理者は、監視エージェントで収集されるパフォーマンスデータについて、次のことを決めてください。

- パフォーマンスデータを Store データベースに記録するかどうか
パフォーマンスデータを履歴レポートとして表示するには、レポートに表示するパフォーマンスデータを Store データベースに保存するように設定する必要があります。
- パフォーマンスデータの収集間隔とタイミング
監視項目が多数あると、収集処理および記録処理がある時点に集中するため、性能が低下します。その場合には、パフォーマンスデータを収集するタイミングを監視項目ごとにずらすことでシステムの負荷を分散します。
例えば、1 分間隔で収集するパフォーマンスデータが二つある場合、一方のデータのオフセットを 0 秒に設定し、もう一方のデータのオフセットを 20 秒に設定すると、パフォーマンスデータの収集開始時刻が 20 秒ずれます。オフセットの値を変更する場合は、収集処理の負荷を考慮した上で値を設定してください。

図 3-11 パフォーマンスデータの収集間隔とオフセットの設定例



パフォーマンスデータの記録方法の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

3.4.4 アラームテーブルのバインド方式の検討

Performance Management でアラームを利用した監視を行うには、監視エージェントとアラームテーブルを関連づける必要があります。アラームテーブルとは、幾つかのアラームをまとめたものです。この関連づけを「バインド」といいます。

監視エージェントは、バインドされているアラームテーブルに含まれるすべてのアラームについて、条件式を評価し、アラームの定義に応じて PFM・Web Console などにアラームを通知します。通常は、評価の結果、状態の変化があった場合にアラームが通知されます。

すでに監視エージェントにバインドされているアラームテーブルに新しくアラームを追加した場合や、既存のアラームの定義を変更した場合、自動的に新しい定義で評価が行われます。

アラームテーブルのバインド方式には次に示すものがあります。

- 一つの監視エージェントに対して、一つのアラームテーブルをバインドする。
- 一つの監視エージェントに対して、複数のアラームテーブルをバインドする。

一つの監視エージェントに対して、複数のアラームテーブルをバインドする場合には、監視エージェントごとにバインドするアラームテーブルの組み合わせを変えることで、監視エージェントごとにアラームの条件を分けられるようになります。例えば、あらかじめ DB キャッシュ監視用、CPU 使用率監視用、プロセス監視用のアラームテーブルというように監視分類ごとにアラームテーブルを作成しておき、ある監視エージェントには DB キャッシュ監視用とプロセス監視用のアラームテーブルを組み合わせでバインド

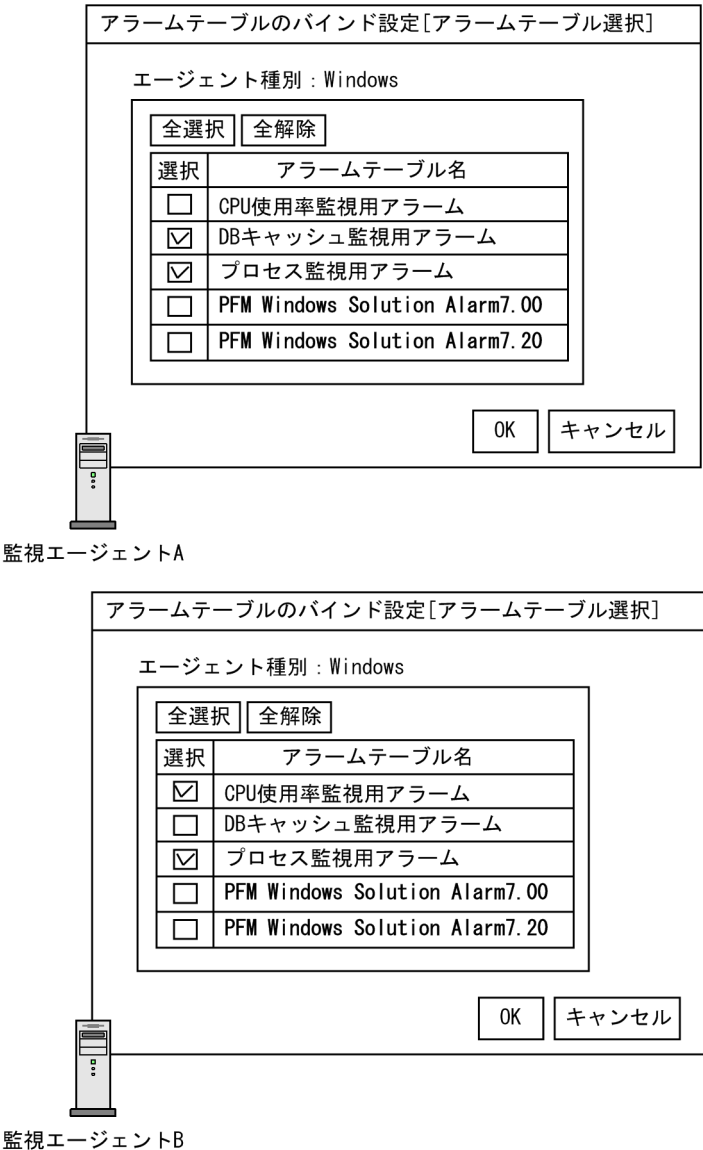
3. Performance Management を活用した稼働監視システムの設計

したり、ある監視エージェントには CPU 使用率監視用とプロセス監視用のアラームテーブルを組み合わせてバインドしたりすることができます。

また、複数の監視エージェントがある場合に、共通のアラームテーブルを全監視エージェントにバインドし、ある監視エージェントだけ特殊なアラームテーブルを追加してバインドすることもできます。

複数のアラームテーブルをバインドする例を次の図に示します。

図 3-12 複数のアラームテーブルをバインドする例



アラームテーブルのバインド方式については、PFM - Manager で設定します。一つの監

視エージェントに対して複数のアラームテーブルをバインドできるようにする場合、PFM・Manager および PFM・Web Console が 08:50 以降である必要があります。また、複数のアラームテーブルをバインドする監視エージェントは、PFM・Agent が 08:00 以降、PFM・Base が 08:50 以降である必要があります。また、PFM・RM の監視エージェントに対してアラームテーブルをバインドするには、Performance Management 製品が 09:00 以降である必要があります。アラームテーブルのバインド方式の設定方法については、Windows の場合は「5.4.4 アラームテーブル複数バインド機能の設定」を、UNIX の場合は「6.4.4 アラームテーブル複数バインド機能の設定」を参照してください。

3.4.5 データの管理方式の検討

ディスク障害でデータが破損するなどの万一のトラブルに備えて、システム管理者は、Performance Management で利用するデータのバックアップを取得する方式を検討します。Performance Management でバックアップが必要なデータと、タイミングを次に示します。

稼働情報

Performance Management で収集される稼働情報のデータ（パフォーマンスデータおよびイベントデータ）をバックアップします。これらの稼働情報のデータは日々更新されるデータのため、バックアップは週次や月次など必要に応じて定期的に取り出すことをお勧めします。

定義情報

Performance Management を動作させるために必要なサービスの定義ファイルや、アラーム、レポートの設定情報などをバックアップします。これらの定義情報は、システム構成を変更した場合や、設定を変更した場合にバックアップすることをお勧めします。

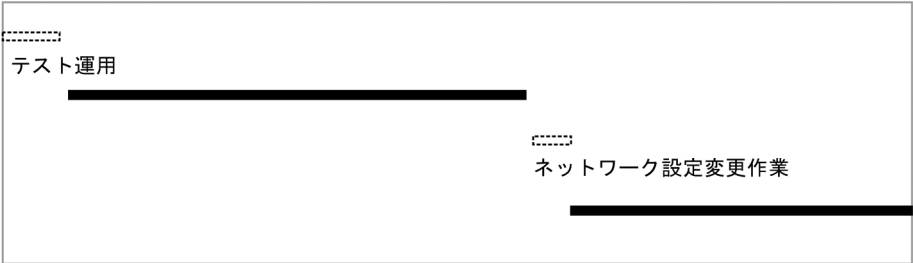
3. Performance Management を活用した稼働監視システムの設計

図 3-13 Performance Management で必要なバックアップデータの取得例

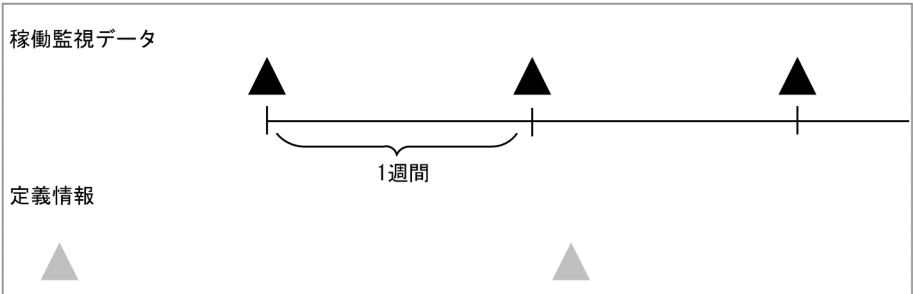
カレンダー

日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24

システムの稼働状況



バックアップの取得例



稼働監視データは、週次など定期的にバックアップする
定義情報は、システムの構成変更時に随時バックアップする

(凡例)

- ▲ : 稼働監視データのバックアップ
- ▲ : 定義情報のバックアップ
- : オンラインシステム稼働中
- : オンラインシステム停止中

また、取得した稼働情報をほかのアプリケーションで利用するためにデータをエクスポートする場合は、その方式を検討します。

稼働情報のバックアップやエクスポートは、運用コマンド（jpctool db コマンド）で行います。バックアップの方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、バックアップとリストアについて説明している章を参照してください。

ポイント

ジョブスケジューラーなどに運用コマンドを登録することで、稼働情報の自動管理ができます。

3.4.6 Store データベースの保存方式の検討

Performance Management では、監視エージェントで収集した稼働監視データを蓄積するためのデータベースを用意しています。これを Store データベースと呼びます。Store データベースには保存方式の違いによって、バージョン 1.0 とバージョン 2.0 があり、それぞれ Store バージョン 1.0、Store バージョン 2.0 と呼びます。利用するバージョンによって、機能、保守、使用リソースの面から特長が異なるため、稼働監視システムを構築する場合は、Store データベースの保存方式を検討する必要があります。

ポイント

PFM・RM で利用できるのは、Store バージョン 2.0 だけです。

Store バージョン 1.0 と Store バージョン 2.0 の特長を次の表に示します。

表 3-1 Store バージョン 1.0 と Store バージョン 2.0 の特長

分類	項目	Store バージョン 1.0 の特長	Store バージョン 2.0 の特長
機能性	蓄積可能なパフォーマンスデータ量	各エージェント（インスタンス）のレコードタイプ（PI・PD・PL）ごとに 2 ギガバイトを上限とする	各エージェント（インスタンス）のレコードごとに 1 日当たり 2 ギガバイトを上限とする
	保存期間の設定	PI レコード： レコード単位での保存期間は設定できない。PI レコード全体の保存期間を設定できる PD レコード： レコード単位に保存レコード数を設定できる PL レコード： レコード単位に保存レコード数を設定できる	PI レコード： レコード単位に保存期間を設定できる PD レコード： レコード単位に保存期間を設定できる PL レコード： レコード単位に保存期間を設定できる
	PI レコードの保存期間の最大値	分・時・日・週・月レコードは最長 1 年。年レコードは制限なし	分・時レコードは最長 1 年、日・週・月レコードは最長 10 年。年レコードは制限なし
	過去データの参照	保存条件から外れた期間のデータはバックアップデータが存在しても参照できない	期間に関係なくバックアップデータをインポートすることで参照できる

3. Performance Management を活用した稼働監視システムの設計

分類	項目	Store バージョン 1.0 の特長	Store バージョン 2.0 の特長
保守性	バックアップ	データベース全体のバックアップ（フルバックアップ）だけ可能	データベース全体または実行日からの相対日で期間を指定して部分バックアップが可能（前回との差分だけバックアップが可能）
	データベース再編成	定期的に無効領域を削除するためにデータベースの再編成が必要	データベース再編成は不要
使用リソース	作成されるファイル数	少ない（19 ファイル）	多い（詳細については、各 PFM - Agent または PFM - RM マニュアルの付録を参照のこと）
	同時にオープンできるファイルの数	少ない（19 ファイル）	多い（詳細については、各 PFM - Agent または PFM - RM マニュアルの付録を参照のこと）
汎用性	利用できる Performance Management プログラム	PFM - Agent	PFM - Agent および PFM - RM

上記の特長から、推奨する運用例について説明します。

Store バージョン 1.0 での運用を推奨するケース

Store バージョン 2.0 では、08-00 以前のバージョンと比べて使用するシステムリソース（ファイル数、ファイルオープン数）が増加します。また、保存期間の設定内容が変更されたことで、使用ディスク容量も含めた設定内容の再見積もりが必要になります。

このため、システム運用開始後のバージョンアップなどで、上記設定の変更が難しい場合には、Store バージョン 1.0 で運用することをお勧めします。この場合、従来どおり（バージョン 08-00 以前）のシステム見積もりで運用を継続できます。

Store バージョン 2.0 での運用を推奨するケース

Store バージョン 2.0 では、パフォーマンスデータの部分バックアップやインポートができるため、長期間にわたって稼働性能情報の管理ができます。このため、新規にシステムを構築する場合には、Store バージョン 2.0 で運用することをお勧めします。また、バージョン 08-00 以前からバージョンアップする場合に、蓄積したいパフォーマンスデータ量や保存期間が Store バージョン 1.0 では対応できないときは Store バージョン 2.0 を利用してください。

3.4.7 稼働監視システム自身の障害対策の検討

稼働監視システム自身を安定稼働させるために、システム管理者は稼働監視システム自身の障害を検知し、トラブルが発生した場合の対処を検討します。

(1) Performance Management の障害検知

Performance Management では、ヘルスチェック機能を利用すると、監視エージェントが稼働するホストの死活監視や監視エージェントによって監視対象を正しく監視できているかを確認できます。ヘルスチェック機能には、監視レベルの違いによって次に示す2段階の監視方法があります。

監視エージェントが稼働するホストの稼働状態監視

PFM - Agent または PFM - RM が稼働するホストの稼働状態および PFM - RM の監視対象ホストの稼働状態を監視し、PFM - Web Console 上で稼働状態を確認できます。

監視エージェントのサービスの稼働状態監視

PFM - Agent または PFM - RM が稼働するホストの稼働状態監視に加え、Agent Collector, Remote Monitor Collector, Agent Store, および Remote Monitor Store サービスの稼働状態を監視し、PFM - Web Console 上で稼働状態を確認できます。

ヘルスチェック機能では、監視したい対象と条件によって自由に運用を切り替えられます。ただし、それぞれ前提となる条件が異なります。ヘルスチェック機能使用時の前提条件については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

なお、PFM - Manager 自身の稼働状態はヘルスチェック機能では監視できません。jpctool service list コマンドを使用することで、PFM - Manager, PFM - Agent, または PFM - RM のサービスの詳細な状態を確認できます。また、ほかの JP1 製品 (JP1/Base) と連携することで障害を検知できます。

Performance Management の障害検知の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

(2) PFM サービスの自動再起動

Performance Management では、PFM サービス自動再起動機能を利用することで、万が一 PFM サービスが何らかの原因で異常停止した場合でも自動的に該当サービスを再起動できます。これによってシステムの監視が続けられるようになります。システムの高可用性を実現するクラスタシステムを利用しない場合は、PFM サービス自動再起動機能を利用することを検討してください。PFM サービス自動再起動機能には次に示す二つの機能があります。

自動再起動機能

何らかの原因によって異常停止した PFM サービスを自動的に再起動します。

定期再起動機能

OS や PFM サービス自身の問題によるメモリーリーク、ハンドルリークなどを回避

するため、PFM サービスを定期的に再起動します。

PFM サービス自動再起動機能を利用する場合の前提条件や設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

(3) トラブル時の保守情報の収集

障害の原因を解明するには、稼働情報のほかに OS のログや Performance Management が出力している内部ログなどの情報が必要になる場合があります。Performance Management では、これらの保守情報を一括取得するための運用コマンド（jpcras コマンドおよび jpcwras コマンド）を提供しています。

トラブル時の、保守情報の採取の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

3.4.8 Performance Management で必要なディスク容量の見積もり

監視項目などを決定し、最後に Performance Management で必要なディスク容量を見積もります。Performance Management では、大きく分けて次の 3 種類のデータを扱います。システム管理者は、これらのデータ容量を見積もり、必要なディスク容量を用意してください。

- ・ 監視エージェントが収集するパフォーマンスデータ
- ・ 監視エージェントの状態を示すイベントデータ
- ・ Performance Management が動作するために必要なデータや Performance Management が出力するログファイルなど

ディスク容量は、システムの拡張性を考えて、余裕を持って設計することをお勧めします。

次に、Performance Management のそれぞれのプログラムでのディスク容量の見積もりの概要を説明します。ディスク容量の見積もりの詳細については、「付録 C システム見積もり」を参照してください。

(a) PFM - Manager に必要なディスク容量

PFM - Manager で必要なディスク容量を次に示します。

- ・ システムを動作させるために必要なディスク容量
PFM - Manager をインストールする OS やシステムが出力するログの保存期間などによって異なります。
- ・ イベントデータの蓄積に必要なディスク容量
PFM - Manager に接続する PFM - Agent および PFM - RM の数やイベントデータの

保存件数などによって異なります。また、データのバックアップやエクスポートなどを行う場合は、別にその分のディスク容量を確保する必要があります。

- ヘルスチェックによる監視結果のデータの蓄積に必要なディスク容量
Store データベースに格納するデータの数や保存条件などによって異なります。また、データのバックアップやエクスポートなどを行う場合は、別にその分のディスク容量を確保する必要があります。なお、Store データベースの保存方式（Store バージョン 1.0 または Store バージョン 2.0）によって必要なディスク容量が異なります。保存方式に応じたディスク容量を見積もってください。

(b) PFM - Web Console に必要なディスク容量

PFM - Web Console の実行に必要なディスク容量は、PFM - Web Console をインストールする OS やシステムが出力するログの上限値などによって異なります。

また、レポートキャッシュファイル化機能を使用する場合は、レポートキャッシュファイルの利用に必要なディスク容量も見積もってください。レポートキャッシュファイル化機能に必要なディスク容量は、表示するレポートのパフォーマンスデータの数などによって異なります。

(c) PFM - Base に必要なディスク容量

PFM - Base に必要なディスク容量は、PFM - Base をインストールする OS やシステムが出力するログの上限値などによって異なります。

(d) PFM - Agent および PFM - RM に必要なディスク容量

PFM - Agent および PFM - RM に必要なディスク容量を次に示します。

- システムを動作させるために必要なディスク容量
PFM - Agent および PFM - RM をインストールする OS やシステムが出力するログの保存期間などによって異なります。
- パフォーマンスデータの蓄積に必要なディスク容量
Store データベースに格納するパフォーマンスデータの数や保存条件などによって異なります。また、データのバックアップやエクスポートなどを行う場合は、別にその分のディスク容量を確保する必要があります。なお、Store データベースの保存方式（Store バージョン 1.0 または Store バージョン 2.0）によって必要なディスク容量が異なります。保存方式に応じたディスク容量を見積もってください。

4

Performance Management の機能

この章では、稼働監視システムを構築するための、Performance Management の機能について説明します。

-
- 4.1 Performance Management のサービス
 - 4.2 パフォーマンスデータを収集・管理する機能
 - 4.3 システムが危険域に達したときに警告する機能
 - 4.4 稼働監視システム自身の障害を検知する機能
 - 4.5 稼働監視システムのサービスを自動的に再起動する機能
 - 4.6 Performance Management の監視コンソール機能
 - 4.7 業務グループごとに監視する機能
 - 4.8 Performance Management のコマンド
 - 4.9 注意事項
-

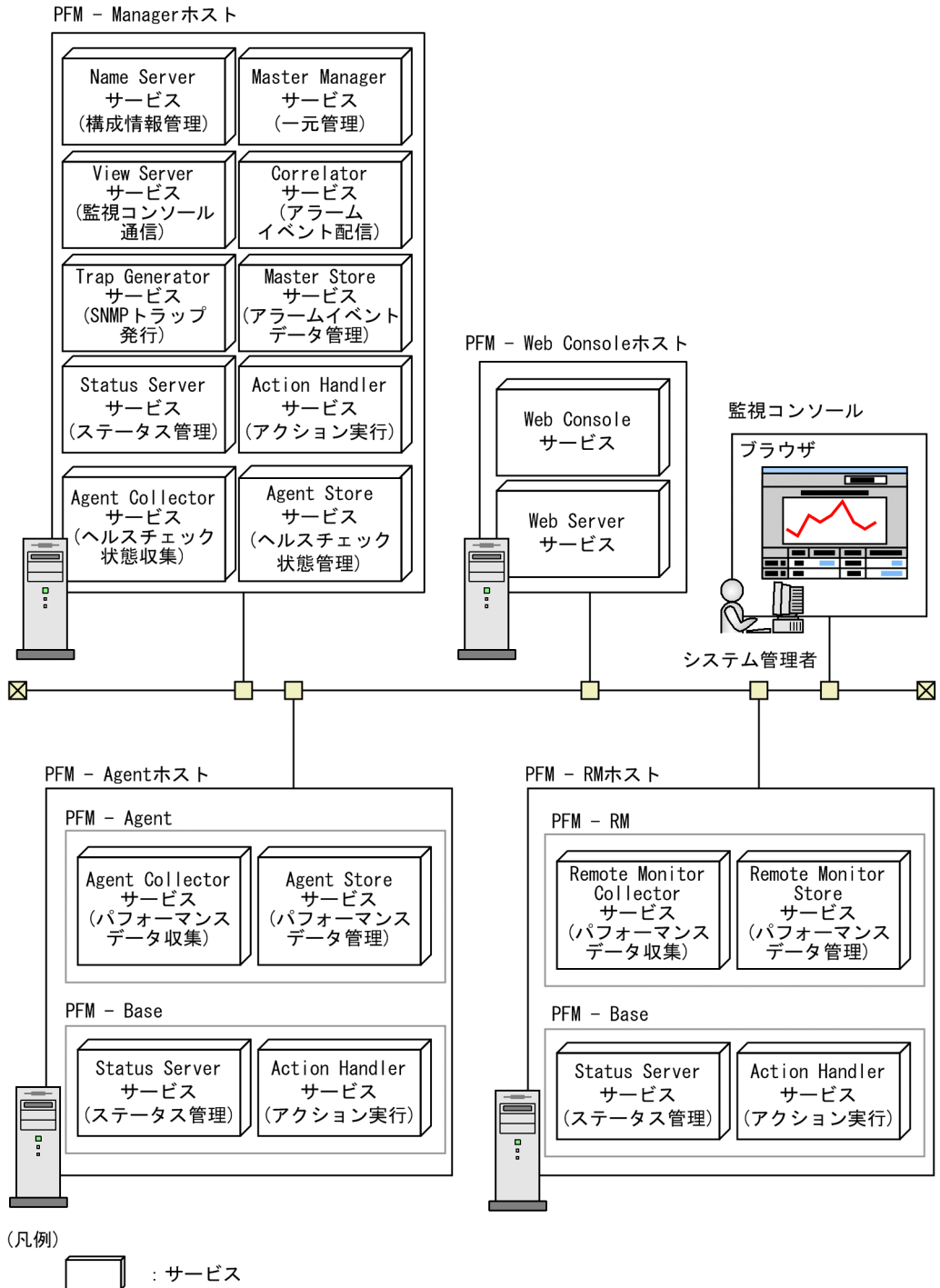
4.1 Performance Management のサービス

4.1.1 サービスの概要

Performance Management は、さまざまな機能を持つプロセスを実行することで、監視エージェントの稼働監視を行います。Performance Management のプログラムを構成する、機能ごとのプロセスを「サービス」と呼びます。Performance Management のサービスについて説明します。

Performance Management のサービスの概要を次に示します。

図 4-1 Performance Management のサービスの概要



監視コンソールで PFM - Web Console の [サービス階層] 画面を選択することで、サー

ビスのプロパティやステータスを確認できます。また、サービスを停止させることもできます。

(1) サービスの種類

Performance Management のサービスが持つ機能とサービス名の一覧を次の表に示します。Performance Management のサービスには、表に示すサービス名のほかにサービス ID が付いています。サービス ID はコマンドの実行や監視コンソールでの表示などに使われます。サービス ID については、「付録 B.1 サービスの命名規則」を参照してください。

表 4-1 PFM - Manager のサービス一覧

サービス名	機能	詳細
Name Server	サービス構成情報管理	Performance Management のサービス情報の登録や更新など、サービス構成情報を管理する。
Master Manager	システム一元管理	PFM - Manager の中核をなすメインサーバ。レポートやアラームの定義情報の管理や、定義情報の配信を実施する。
View Server	監視コンソール通信サーバ	PFM - Web Console と接続する場合の通信処理を管理する。
Correlator	アラームイベント配信制御	サービス間のアラームイベント配信を制御する。
Master Store	イベントデータ管理	各 PFM - Agent および PFM - RM から発行されたイベントデータを Store データベースに記録し、管理する。
Trap Generator	SNMP トラップ発行	監視エージェントのデータがしきい値を超えてアラームイベントが発生した場合、SNMP トラップを発行する。
Action Handler	アクション実行	監視エージェントのデータがしきい値を超えてアラームイベントが発生した場合、ユーザーに異常などの状況を通知するアクションを実行する。
Status Server	ステータス管理	Performance Management のサービスのステータスを管理する。
Agent Collector	ヘルスチェック状態収集	次に示す稼働状態を収集したり、しきい値を監視したりする。 <ul style="list-style-type: none"> • PFM - Agent および PFM - RM のサービス稼働状態 • PFM - Agent および PFM - RM が稼働するホストの稼働状態 • PFM - RM の監視対象ホストの稼働状態 PFM - Web Console の Web ブラウザでリアルタイムレポートを表示する場合のデータ処理をする。

サービス名	機能	詳細
Agent Store	ヘルスチェック状態管理	<p>次に示す、収集した稼働情報を Store データベースに記録し、管理する。</p> <ul style="list-style-type: none"> PFM - Agent および PFM - RM のサービス稼働状態 PFM - Agent および PFM - RM が稼働するホストの稼働状態 PFM - RM の監視対象ホストの稼働状態 <p>PFM - Web Console の Web ブラウザで履歴レポートを表示する場合のデータ処理をする。また、ODBC 準拠のアプリケーションプログラムを使用する場合のデータ処理をする。</p>

表 4-2 PFM - Web Console のサービス一覧

サービス名	機能	詳細
PFM - Web Console	Web アプリケーション実行機能	PFM - Web Console のメインサービス。PFM - Manager への接続や、Web ブラウザからの要求を処理する。
PFM - Web Service	http サーバ機能	Web ブラウザとの通信処理を管理する。

表 4-3 PFM - Base のサービス一覧

サービス名	機能	詳細
Action Handler	アクション実行	監視エージェントのデータがしきい値を超えてアラームイベントが発生した場合、ユーザーに異常などの状況を通知するアクションを実行する。
Status Server	ステータス管理	Performance Management のサービスのステータスを管理する。

注

複数の PFM - Agent または PFM - RM が同一ホスト上にある場合、そのホスト上には PFM - Base のサービスが一つだけ配置されます。

表 4-4 PFM - Agent のサービス一覧

サービス名	機能	詳細
Agent Collector	パフォーマンスデータ収集	監視エージェントのパフォーマンスデータを収集したり、しきい値を監視したりする。PFM - Web Console の Web ブラウザでリアルタイムレポートを表示する場合のデータ処理をする。

4. Performance Management の機能

サービス名	機能	詳細
Agent Store	パフォーマンスデータ管理	収集したパフォーマンスデータを Store データベースに記録し、管理する。PFM - Web Console の Web ブラウザで履歴レポートを表示する場合のデータ処理をする。また、ODBC 準拠のアプリケーションプログラムを使用する場合のデータ処理をする。

表 4-5 PFM - RM のサービス一覧

サービス名	機能	詳細
Remote Monitor Collector	パフォーマンスデータ収集	監視エージェントのパフォーマンスデータを収集したり、しきい値を監視したりする。PFM - Web Console の Web ブラウザでリアルタイムレポートを表示する場合のデータ処理をする。
Remote Monitor Store	パフォーマンスデータ管理	収集したパフォーマンスデータを Store データベースに記録し、管理する。PFM - Web Console の Web ブラウザで履歴レポートを表示する場合のデータ処理をする。また、ODBC 準拠のアプリケーションプログラムを使用する場合のデータ処理をする。

(2) インスタンス起動について

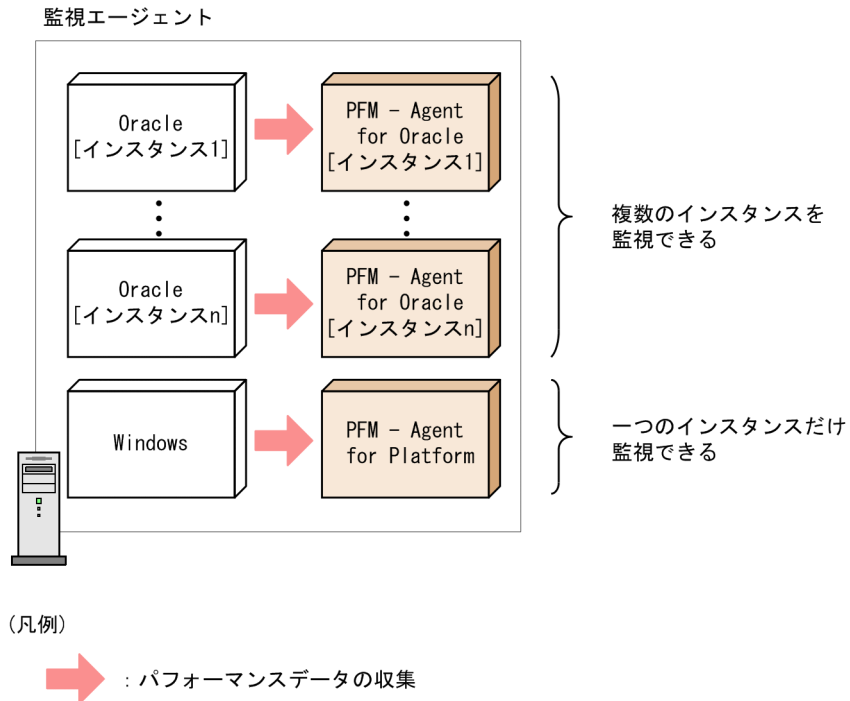
PFM - Agent または PFM - RM によっては監視対象プログラムのインスタンス ごとに監視できる製品があります。

注

このマニュアルでは、インスタンスという用語を二つの意味で使用しています。詳細については、「付録 K 用語解説」の「インスタンス」を参照してください。

例えば、PFM - Agent for Oracle では、SID を持つ Oracle インスタンスごとに監視できます。この場合、PFM - Agent のサービスも複数のインスタンスで動作させるために、インスタンス環境を構築する必要があります。

図 4-2 インスタンス起動の例



インスタンスごとに監視できるかどうか、およびインスタンス環境の構築方法については、PFM - Agent または PFM - RM マニュアルを参照してください。

4.1.2 サービスの表示・指定方法

ここでは、サービスを表示・指定するためのサービス ID およびサービスキーの形式について説明します。

Performance Management のサービスは、次の二つの識別子を持ちます。

- サービス ID
- サービスキー

09-00 以降の Performance Management では、プロダクト名表示機能を有効にすることで、表示・指定できるサービス ID およびサービスキーの形式を変更できます。

プロダクト名表示機能を利用する場合に必要な Performance Management 製品については、「(2) プロダクト名表示機能が利用できる範囲」を参照してください。

(1) プロダクト名表示機能の概要

プロダクト名表示機能は、Performance Management のサービス識別子の形式を変更する機能です。プロダクト名表示機能が有効な場合、それぞれの識別子に監視対象プロダ

ラムの名称が含まれるため、サービスをより判別しやすくなります。変更後の形式をプロダクト名と呼びます。

プロダクト名表示機能が有効な場合および無効な場合の識別子の形式については、「付録 B.1 サービスの命名規則」を参照してください。

次に、監視コンソールの表示例およびコマンド実行時の出力例を示します。

図 4-3 監視コンソールのサービス階層の表示例（プロダクト名表示機能が有効の場合）



図 4-4 監視コンソールのサービス階層の表示例（プロダクト名表示機能が無効の場合）



図 4-5 jpctool service list コマンド実行時の出力例（プロダクト名表示機能が有効の場合）

Host Name	Service	PID	Port	Status
pfm-host	pfm-host<Status Server>	3092	22350	Active
pfm-host	<Name Server>	3040	22285	Active
pfm-host	<Master Manager>	2192	4004	Active
pfm-host	<Master Store>	1644	4010	Active
pfm-host	<Correlator>	1940	4015	Active
pfm-host	<Trap Generator>	2100	4016	Active
pfm-host	<View Server>	252	4026	Active
pfm-host	pfm-host<Action Handler>	2992	4051	Active
pfm-host	pfm-host<Windows> (Store)	1408	4063	Active
pfm-host	pfm-host<Windows>	3880	4064	Busy
pfm-host	pfm-host<HealthCheck> (Store)	2960	4041	Active
pfm-host	pfm-host<HealthCheck>	2620	4042	Active

KAVE06003-I サービス情報の表示処理が正常終了しました

図 4-6 jpctool service list コマンド実行時の出力例（プロダクト名表示機能が無効の場合）

Host Name	ServiceID	Service Name	PID	Port	Status
pfm-host	PT1pfm-host	Status Server	3092	22350	Active
pfm-host	PN1001	Name Server	3040	22285	Active
pfm-host	PM1001	Master Manager	2192	4004	Active
pfm-host	PS1001	Master Store	1644	4010	Active
pfm-host	PE1001	Correlator	1940	4015	Active
pfm-host	PC3pfm-host	Trap Generator	2100	4016	Active
pfm-host	PP1pfm-host	View Server	252	4026	Active
pfm-host	PH1pfm-host	Action Handler	2992	4051	Active
pfm-host	TS1pfm-host	Agent Store	1408	4063	Active
pfm-host	TA1pfm-host	Agent Collector	3880	4064	Busy
pfm-host	OS1pfm-host	Agent Store	2960	4041	Active
pfm-host	OA1pfm-host	Agent Collector	2620	4042	Active

KAVE06003-I サービス情報の表示処理が正常終了しました

参考

jpctool service list コマンド実行時の出力をプロダクト名で表示するには、プロダクト名表示機能を有効にした上で「-v」オプションを指定してください。

（２）プロダクト名表示機能が利用できる範囲

次の表に、プロダクト名表示機能が利用できる範囲を示します。これらの項目以外では、プロダクト名表示機能が有効な場合でも、識別子にプロダクト名は利用できません。また、設定が必要なホストと必要な Performance Management 製品を項目ごとに示します。なお、プロダクト名表示機能を利用するときに PFM・Agent および PFM・RM のバージョンは問いません。

表 4-6 プロダクト名が利用できる項目

プロダクト名が利用できる項目	プロダクト名表示機能を設定するホスト	必要な Performance Management 製品
監視コンソール画面に表示されるサービス ID	PFM - Manager ホスト	<ul style="list-style-type: none"> PFM - Manager 09-00 以降 PFM - Web Console 09-00 以降
監視コンソールのレポート		
イベントモニター		
イベント履歴画面に表示されるサービス ID		
jpctool service list コマンドで表示されるサービス ID	コマンドを実行するホスト	コマンド実行ホストが PFM - Manager ホストの場合 <ul style="list-style-type: none"> PFM - Manager 09-00 以降 コマンド実行ホストが PFM - Agent ホストまたは PFM - RM ホストの場合 <ul style="list-style-type: none"> PFM - Base 09-00 以降
コマンドを実行する際に指定するサービスキー	-	
メッセージ中で表示されるサービスキー	メッセージを出力するホスト	メッセージ出力ホストが PFM - Manager ホストの場合 <ul style="list-style-type: none"> PFM - Manager 09-00 以降 メッセージ出力ホストが PFM - Agent ホストまたは PFM - RM ホストの場合 <ul style="list-style-type: none"> PFM - Base 09-00 以降

(凡例)

- : プロダクト名表示機能の有効 / 無効にかかわらず利用できる

注

プロダクト名で表示するには、「-v」オプションを指定してください。jpctool service list コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

(3) プロダクト名表示機能の設定

プロダクト名表示機能の設定方法については、「5.4.9 プロダクト名表示機能の設定」(Windows の場合) または「6.4.8 プロダクト名表示機能の設定」(UNIX の場合) を参照してください。

また、Performance Management のインストール方法によって、プロダクト名表示機能のデフォルトの設定は異なります。インストール方法とデフォルトの設定の一覧を次の表に示します。

表 4-7 Performance Management のインストール方法とプロダクト名表示機能のデフォルト設定の一覧

インストール方法	バージョンアップ前の Performance Management の バージョン	プロダクト名表示機能の設定
新規インストール	-	有効
バージョンアップインストール	09-00 以降	バージョンアップインストールの前の設定を引き継ぐ
	08-51 以前	無効

(凡例)

- : 該当しない

4.2 パフォーマンスデータを収集・管理する機能

Performance Management は、監視エージェントからパフォーマンスデータを収集します。収集したデータは、リアルタイムで推移を参照するものと、履歴を含めて参照するものに分けられます。履歴を含めて参照するパフォーマンスデータは、収集したデータを Store データベースに保存して管理します。

- パフォーマンスデータを Store データベースに記録する
収集したパフォーマンスデータを Store データベースに記録するかどうかを設定できます。さらに、パフォーマンスデータを Store データベースに記録する場合の判断条件を設定できます。
- パフォーマンスデータの収集間隔とタイミング
パフォーマンスデータを収集する間隔を設定できます。また、監視項目が多数あると、収集処理および記録処理がある時点で集中するため、性能が低下します。そのため、収集のタイミングを監視項目ごとにずらすことでシステムの負荷を分散できます。例えば、1 分間隔で収集するパフォーマンスデータが二つある場合、一方のデータの収集開始時刻のオフセット (Collection Offset) を 0 秒に設定し、他方のデータの収集開始時刻のオフセット (Collection Offset) を 20 秒に設定すると、収集のタイミングがずれてシステムの負荷を分散できます。

パフォーマンスデータを収集・管理する機能について説明します。

4.2.1 パフォーマンスデータとは

パフォーマンスデータとは、監視エージェントから収集した、稼働状況の詳細を表すデータです。システム管理者は、収集したパフォーマンスデータを、Web ブラウザを使って確認できます。

Performance Management では、パフォーマンスデータを「レコード」という単位で収集します。どのような項目を監視できるかは、PFM・Agent または PFM・RM によって決まっています。

パフォーマンスデータには、次の 2 種類があります。

リアルタイムデータ

監視対象の現在の状況を示すパフォーマンスデータです。

PFM・Web Console の画面で、刻々と変化するシステム状態の推移や問題点を確認するために使用します。

履歴データ

監視対象の過去から現在までの状況を示すパフォーマンスデータです。

主に、システムの傾向を分析するために使用します。履歴データは、データの特性に応じて次の二つの形式で監視エージェントのデータベースに格納されます。

- 要約レコード

監視エージェントが収集した値が自動計算され、分・時間・日・週・月・年単位に平均値や合計値などに要約されて Store データベースに格納されます。

システムの性能を長期間にわたって監視するレコードです。これらのレコードを、Product Interval レコードタイプ (PI レコードタイプ) と呼びます。

- 非要約レコード

監視エージェントが収集したパフォーマンスデータがそのまま Store データベースに格納されます。

現在起動しているプロセスの詳細情報など、ある時点でのシステムの状態を示すパフォーマンスデータが収集される Product Detail レコードタイプ (PD レコードタイプ) と、システムやアプリケーションのログやメッセージが収集される Product Log レコードタイプ (PL レコードタイプ) があります。

監視対象によっては、これらのレコードタイプ以外にも利用できるレコードタイプを持つものがあります。詳細については、各 PFM - Agent または PFM - RM マニュアルの、レコードについて説明している章を参照してください。

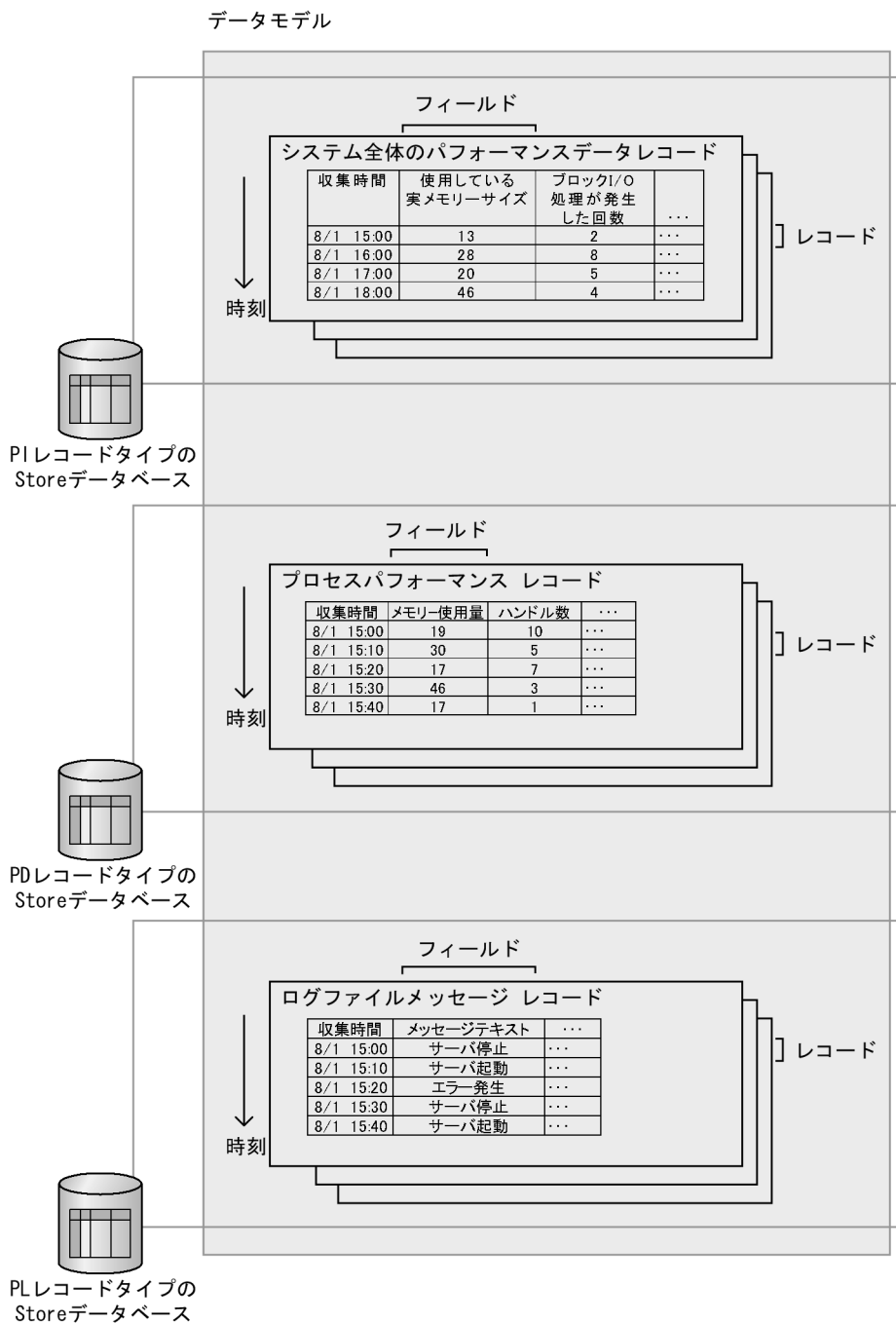
(1) データモデルとは

パフォーマンスデータは、レコード単位で Store データベースに格納されます。各レコードは、「フィールド」と呼ばれるさらに細かい単位に分けられます。

エージェントで収集できるパフォーマンスデータの総称を「データモデル」と呼びます。データモデルは、バージョンで管理されています。

データモデル、レコード、およびフィールドの概念図を次に示します。

図 4-7 データモデル、レコード、およびフィールドの概念図



(2) 単数インスタンスレコード・複数インスタンスレコードとは

Performance Management で収集されたパフォーマンスデータのレコードは、監視項目

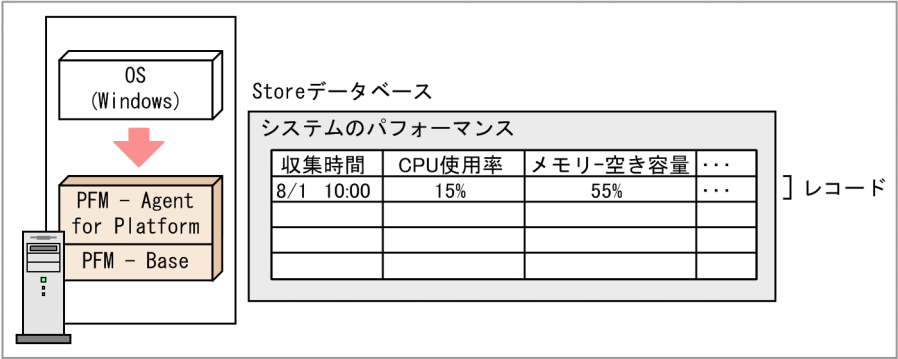
によって次の二つの種類があります。

単数インスタンスレコード

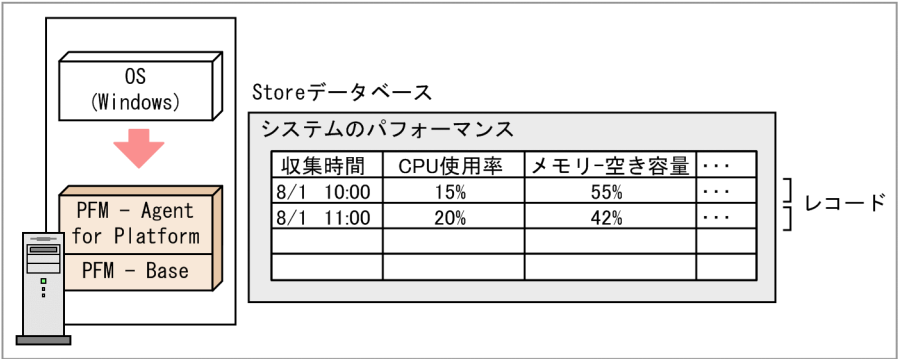
1 回で一つのレコードを収集するものを単数インスタンスレコードと呼びます。単数インスタンスレコードの例を次に示します。

図 4-8 単数インスタンスレコードの例


1回目の収集



2回目の収集



(凡例)

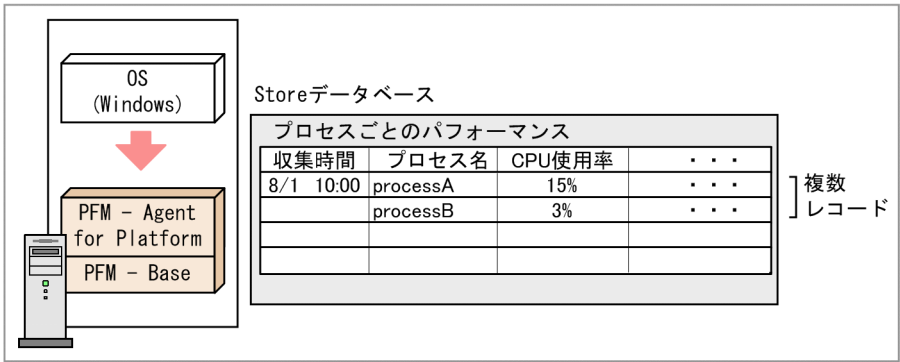
 : パフォーマンスデータの収集

複数インスタンスレコード

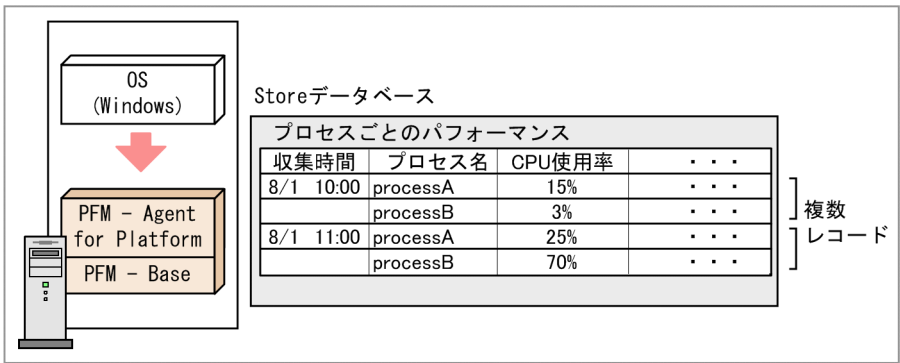
1 回で複数のレコードを収集するものを複数インスタンスレコードと呼びます。複数インスタンスレコードの例を次に示します。

図 4-9 複数インスタンスレコードの例

1回目の収集



2回目の収集



(凡例)

➡ : パフォーマンスデータの収集

ポイント

同じ時間に収集されたレコードを一つのグループとした集合を「データグループ」と呼びます。単数インスタンスレコードのデータグループは一つのレコードから成ります。複数インスタンスレコードのデータグループは、複数のレコードから成ります。

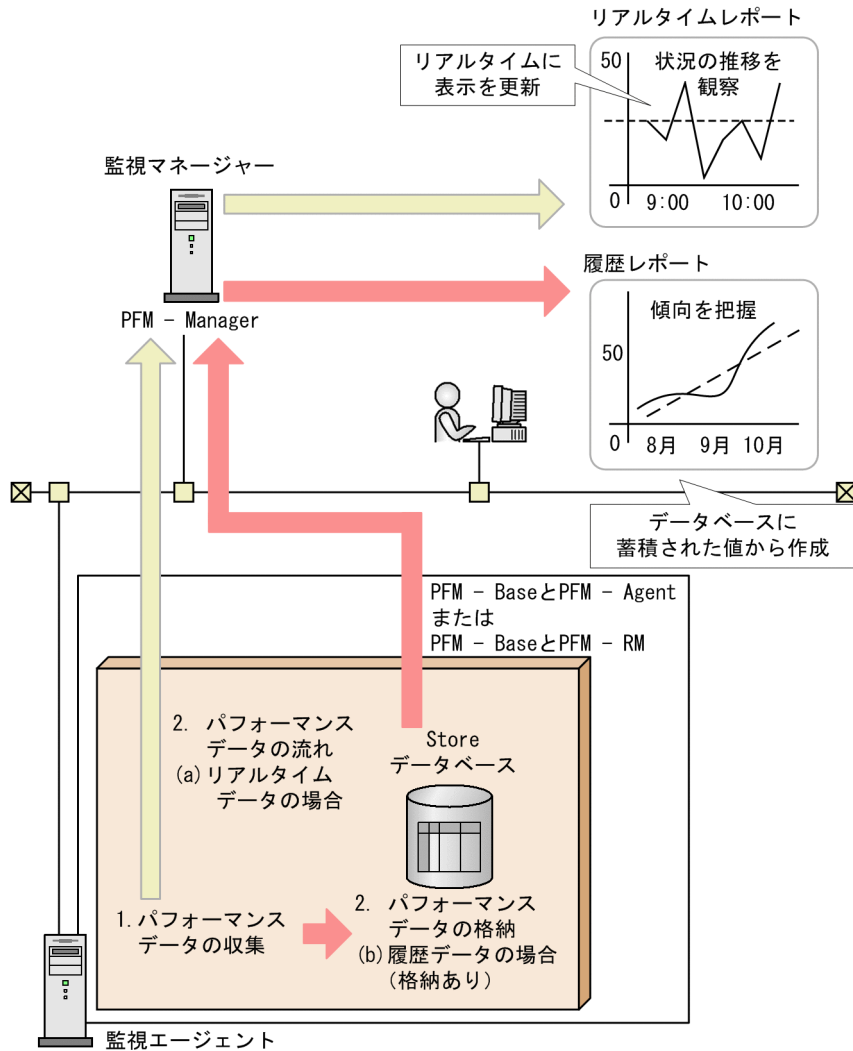
4.2.2 パフォーマンスデータの収集機能

パフォーマンスデータを収集する機能について説明します。

(1) パフォーマンスデータ収集の処理の流れ

パフォーマンスデータを収集するときの Performance Management の処理の流れについて次の図に示します。

図 4-10 パフォーマンスデータを収集するときの処理の流れ



(凡例)

- : 履歴レポートに使用するパフォーマンスデータの流れ
- : リアルタイムレポートに使用するパフォーマンスデータの流れ

1. パフォーマンスデータの収集

パフォーマンスデータは、Agent Collector サービス、または Remote Monitor Collector サービスによって収集され、レコードの形式で管理されます。

2. パフォーマンスデータの格納

(a) リアルタイムデータの場合

収集されたパフォーマンスデータは、Store データベースに格納されないで、リ

リアルタイムレポートの表示に使用されます。

(b) 履歴データの場合

収集されたパフォーマンスデータは、Agent Store および Remote Monitor Store サービスによって Store データベースに格納されます。これらのデータは、履歴レポートの表示、および ODBC ドライバーを使用した SQL クエリの実行に使用されます。

(2) パフォーマンスデータのライフサイクル

PFM - Agent および PFM - RM は、次に示すタイミングでパフォーマンスデータを収集します。

- リアルタイムデータの場合は、レポート定義で設定した更新間隔ごと
- 履歴データの場合は、各レコードの収集間隔 (Collection Interval) で設定した時間ごと

今回収集したパフォーマンスデータが、前回収集したパフォーマンスデータと同じ監視対象から取得したデータであると PFM - Agent または PFM - RM が判断した場合、実際には異なる監視対象から取得したデータであっても、PFM - Agent または PFM - RM は同じレコードの同じフィールドのデータとして扱います。例を次に示します。

一貫性に関する例

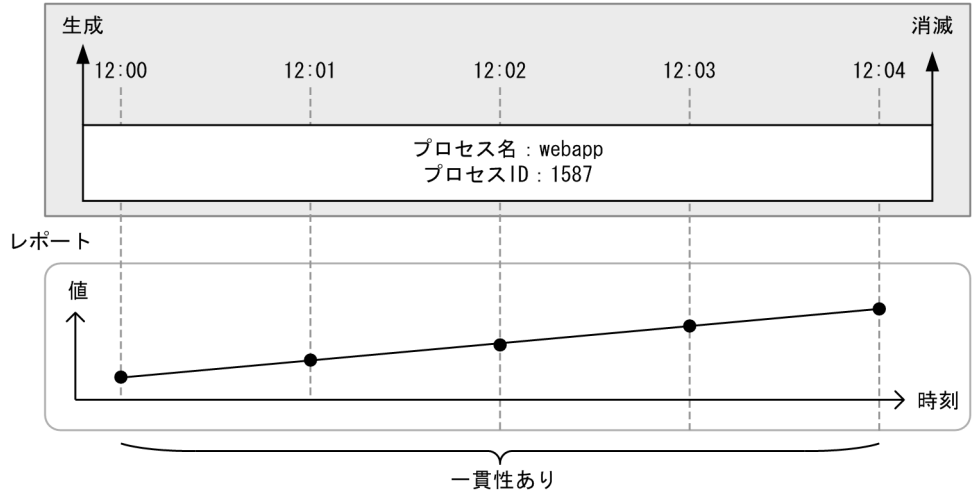
PFM - Agent for Platform (Windows) の Process Detail (PD) レコードの場合、同じ監視対象のパフォーマンスデータかどうかを、プロセス名とプロセス ID で判断します。

PFM - Agent for Platform (Windows) は、前回取得したパフォーマンスデータとプロセス名とプロセス ID が同じであれば、今回取得したパフォーマンスデータも同じプロセスのデータであると認識します。収集のインターバル中にプロセスがいったん消滅して再生成された場合でも、プロセス名とプロセス ID が同じであれば、PFM - Agent または PFM - RM は同じプロセスのパフォーマンスデータとして認識します。この場合、パフォーマンスデータの一貫性は失われます。

図 4-11 パフォーマンスデータの一貫性についての例

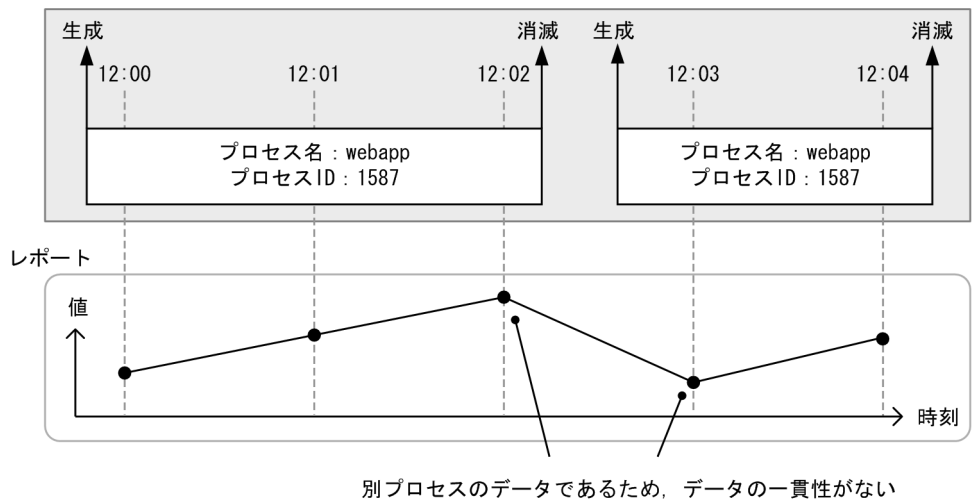
パフォーマンスデータの一貫性が保たれている例

プロセスの生成と消滅



パフォーマンスデータの一貫性が失われている例

プロセスの生成と消滅



(凡例)

----- : パフォーマンスデータを収集するタイミング

ポイント

パフォーマンスデータの一貫性が保たれる期間のことを、パフォーマンスデータの「ライフタイム」と呼びます。リアルタイムデータの更新間隔や履歴データの収集間隔を設定するときは、パフォーマンスデータのライフタイムを考慮してください。

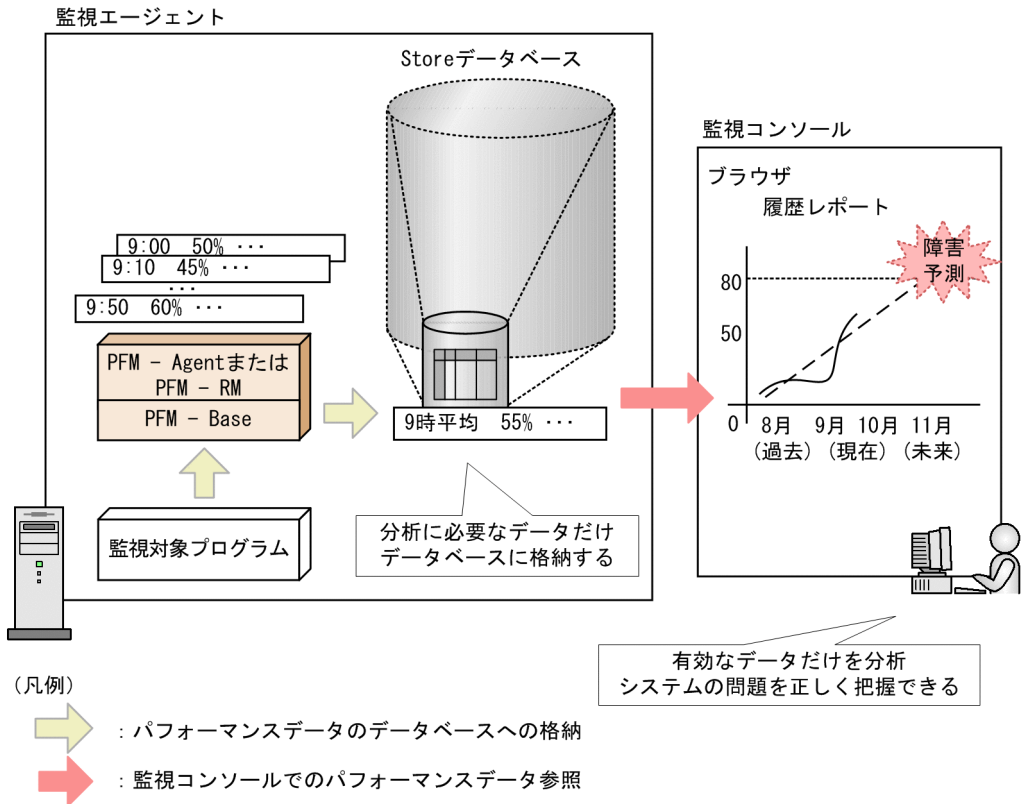
4.2.3 パフォーマンスデータの管理機能

Performance Management では、収集したレコードの中でシステムの分析に必要な稼働監視データだけを、必要な間隔でデータベースに格納できます。また、データベースに記録するデータの上限值を設定したり、保存期間を設定したりできるため、一定のリソース内で稼働監視ができます。さらに、監視レコードによっては、稼働監視データを期間ごとの平均値や最大値などの意味のあるデータに要約して、データベースに格納できます。このため、システム管理者はシステムの分析に必要なデータだけを効率良く管理できます。

稼働監視データを格納するための Performance Management 独自のデータベースを「Store データベース」と呼びます。

監視エージェントから収集したパフォーマンスデータの管理の概要を次の図に示します。

図 4-12 監視エージェントから収集したパフォーマンスデータの管理の概要



Performance Management では、Store データベースへのパフォーマンスデータの記録方法を設定できます。PFM・Web Console で設定できる項目を次に示します。

- 収集したパフォーマンスデータを Store データベースに記録するかどうか
- パフォーマンスデータの収集間隔
- パフォーマンスデータの収集負荷を分散させるためのオフセットの値
- パフォーマンスデータを Store データベースに記録するかしないかの判断条件
- パフォーマンスデータの保存期間

データの記録方法は、各レコードで異なります。各レコードの記録方法については、各 PFM・Agent または PFM・RM マニュアルの、レコードについて説明している章（各レコードのデフォルト値と変更できる値）を参照してください。

ポイント

アラームに設定する監視レコードは、必ずしも Store データベースに保存する必要はありません。ただし、アラームイベントが発生したときに、その監視レコードの履歴を確認することで、システムの状況を確認できるため、Store データベースに保存することをお勧めします。

パフォーマンスデータを管理する機能について次に説明します。

(1) リアルタイムデータの場合

リアルタイムデータの場合、収集されたパフォーマンスデータは Store データベースに格納されません。リアルタイムデータの場合の、パフォーマンスデータの収集開始時刻について説明します。

(a) リアルタイムデータの収集開始時刻

リアルタイムデータの場合、収集されたパフォーマンスデータは Store データベースに格納されません。この場合、パフォーマンスデータの収集開始時刻は、PFM - Agent または PFM - RM を起動させた時刻によって決まります。

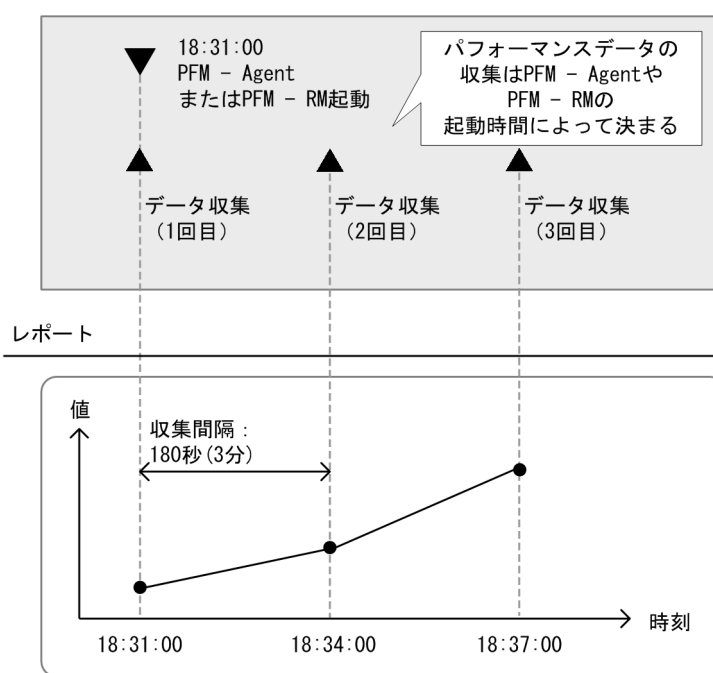
例を次に示します。

リアルタイムデータの収集開始時刻の例

PFM - Agent for Platform (Windows) の Content Index Detail (PD_CIND) レコードで、パフォーマンスデータの収集間隔を 180 秒 (3 分) と設定し、18:31:00 に PFM - Agent for Platform を起動させた場合、最初のデータ収集は、18:31:00 に開始されます。次のデータ収集は、データの収集間隔である 3 分後の 18:34:00 に開始されます。次の図にリアルタイムデータの収集開始時刻の例を示します。

図 4-13 リアルタイムデータの収集開始時刻の例

PFM - AgentまたはPFM - RMの動作



(凡例)

- ▼ : PFM - Agent または PFM - RM の起動
- ▲ : パフォーマンスデータの収集

(b) リアルタイムデータの格納方法

リアルタイムデータは Store データベースに格納されません。

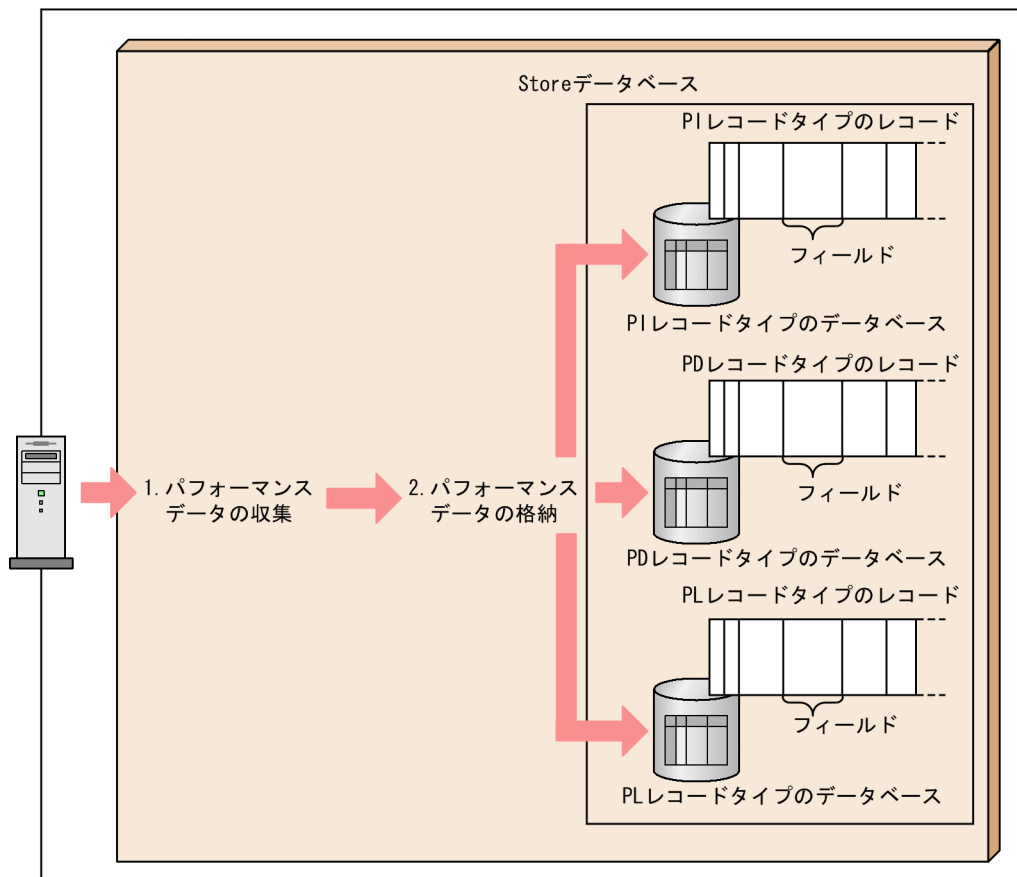
(2) 履歴データの場合

履歴データの場合、収集されたパフォーマンスデータは Agent Store または Remote Monitor Store サービスによって Store データベースに格納されます。

パフォーマンスデータが Store データベースに格納されるまでの流れを次の図に示します。

図 4-14 パフォーマンスデータが Store データベースに格納されるまでの流れ

監視エージェント



(凡例)

➡ : パフォーマンスデータの流れ

処理の流れを次に示します。

1. パフォーマンスデータの収集

パフォーマンスデータは、監視対象プログラムから Agent Collector または Remote Monitor Collector サービスによって収集され、レコードの形式で管理されます。

2. パフォーマンスデータの格納

収集されたパフォーマンスデータは、Agent Store または Remote Monitor Store サービスによって Store データベースに格納されます。PI レコードタイプの場合は、収集データを要約したデータが格納されます。PD レコードタイプおよび PL レコードタイプの場合は、収集データがそのまま格納されます。

パフォーマンスデータの収集間隔のデフォルト値は、レコードによって異なります。詳細については、各 PFM・Agent または PFM・RM マニュアルの、レコードについて説明

している章を参照してください。

履歴データの場合の、パフォーマンスデータの収集開始時刻および収集方法について次に説明します。

(a) 履歴データの収集開始時刻

履歴データの場合、パフォーマンスデータの収集開始時刻は、グリニッジ標準時の午前 0 時 0 分 0 秒を基準に、パフォーマンスデータの収集間隔 (Collection Interval) と収集開始のオフセット (Collection Offset) の設定値によって決まります。

収集開始時刻の設定手順を次に示します。

1. PFM - Agent または PFM - RM の起動時刻をグリニッジ標準時間に変更する。
2. グリニッジ標準時間の 00:00 に Collection Interval の値を足していき、手順 1 で求めた時刻を最初を超える時刻を求める。
3. 手順 2 の時刻を日本時間に変更する。
変更した時刻が収集開始時刻となります。
設定した時刻以降、Collection Interval の値の間隔で収集されます。

注 Collection Offset を指定している場合は、手順 3 で求めた時刻に Collection Offset の値を足した時刻が収集開始時刻になります。

収集開始時刻の設定例を次に示します。

収集開始時刻の設定例 1

次の条件で設定する場合の例について説明します。

- Collection Interval=28,800 秒 (8 時間)
- Collection Offset=0
- サービス開始時刻: 13:00

設定例を次に示します。

1. PFM - Agent または PFM - RM の起動時刻をグリニッジ標準時間に変更する。
日本時刻で 13:00 に起動するので、グリニッジ標準時では 4:00 起動です。
2. グリニッジ標準時間の 00:00 に Collection Interval の値を足していき、手順 1 で求めた時刻を最初を超える時刻を求める。
Collection Interval が 8 時間なので、最初に 4:00 を超える時刻はグリニッジ標準時 08:00 です。
3. 手順 2 の時刻を日本時間に変更する。
グリニッジ標準時 08:00 は、日本時刻で 17:00 です。これが収集開始時刻となり、この時刻以降 8 時間間隔 (翌日 01:00, 09:00, 17:00...) でパフォーマンスデータが収集されます。

収集開始時刻の設定例 2

次の条件で設定する場合の例について説明します。

- Collection Interval=28,800 秒 (8 時間)

4. Performance Management の機能

- Collection Offset=60 秒 (1 分)
- サービス開始時刻 : 13:00

設定例を次に示します。

1. PFM - Agent または PFM - RM の起動時刻をグリニッジ標準時間に変更する。
日本時刻で 13:00 に起動するので、グリニッジ標準時では 4:00 起動です。
2. グリニッジ標準時間の 00:00 に Collection Interval の値を足していき、手順 1 で求めた時刻を最初に超える時刻を求める。
Collection Interval が 8 時間なので、最初に 4:00 を超える時刻はグリニッジ標準時 08:00 です。
3. 手順 2 の時刻を日本時間に変更する。
グリニッジ標準時 08:00 は、日本時刻で 17:00 です。
Collection Offset を指定しているので、17:00 に Collection Offset の値 1 分を足した 17:01 が収集開始時刻になります。
この時刻以降 8 時間間隔 (翌日 01:01 , 09:01 , 17:01 . . .) でパフォーマンスデータが収集されます。

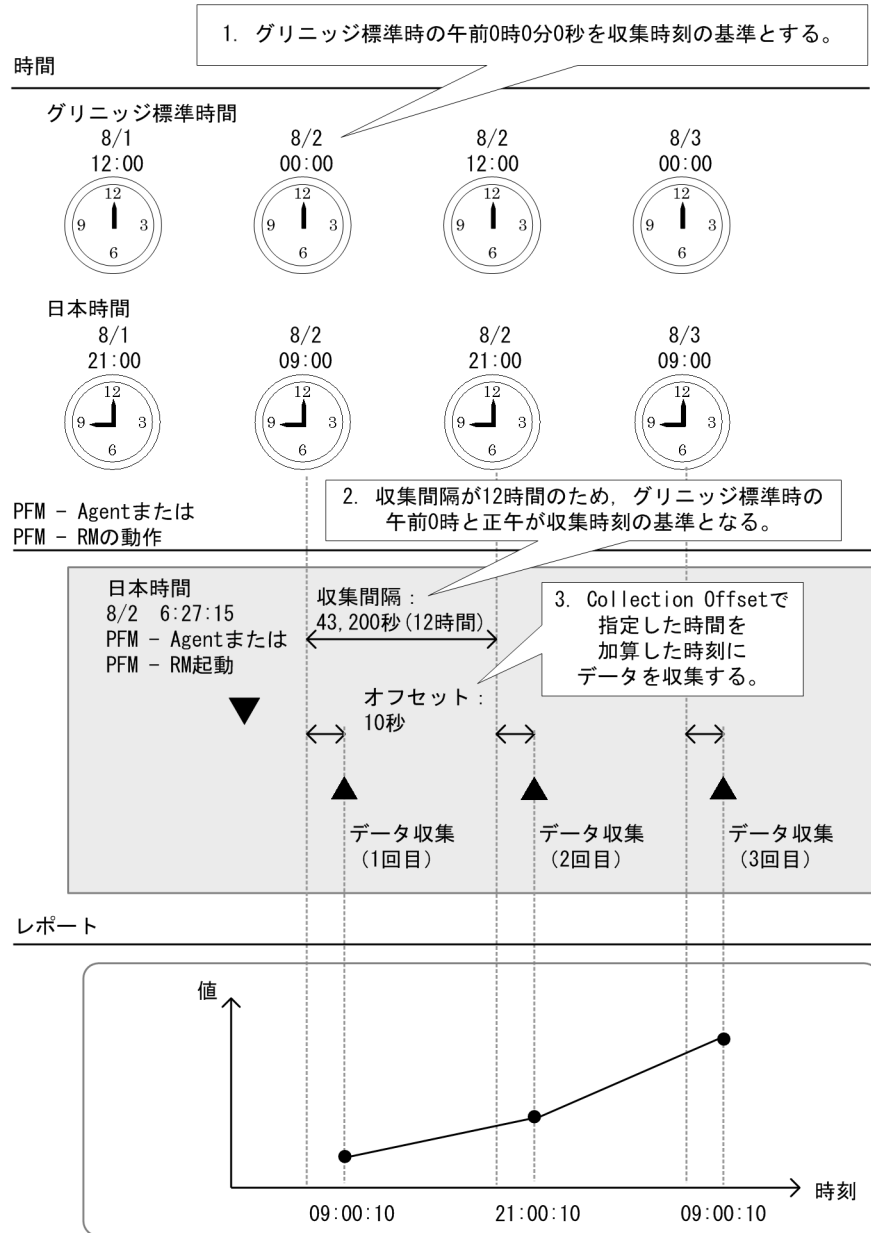
履歴データの収集開始時刻の例を次に示します。

履歴データの収集開始時刻の例

PFM - Agent for Platform (Windows) の System Overview (PI) レコードで、Collection Interval の値を 43,200 秒 (12 時間)、Collection Offset の値を 10 秒に設定したとします。

日本時間の 8 月 2 日 6 時 27 分 15 秒 (グリニッジ標準時の 8 月 1 日 21 時 27 分 15 秒) に PFM - Agent または PFM - RM を起動させた場合、最初のデータは日本時間の 8 月 2 日 9 時 0 分 10 秒 (グリニッジ標準時の 8 月 2 日 0 時 0 分 10 秒) から収集されます。次のデータは、収集間隔に従って、12 時間後の日本時間 21 時 0 分 10 秒 (グリニッジ標準時の 12 時 0 分 10 秒) から収集されます。次の図に履歴データの収集開始時刻の例を示します。

図 4-15 履歴データの収集開始時刻の例



(凡例)

▼ : PFM - AgentまたはPFM - RMの起動

▲ : パフォーマンスデータの収集

(b) 履歴データの格納方法

PI レコードタイプ、PD レコードタイプ、および PL レコードタイプのレコードのパフォーマンスデータは、それぞれ次のように格納されます。

- PI レコードタイプの場合

PFM・Web Console の画面で設定した収集間隔ごとにパフォーマンスデータが収集されます。ただし、パフォーマンスデータは、PFM・Agent または PFM・RM を起動してから 2 回目の収集時以降に Store データベースに格納されます。1 回目の収集時には Store データベースに格納されません。

- PD レコードタイプおよび PL レコードタイプの場合

PFM・Web Console の画面で設定した収集間隔ごとにパフォーマンスデータが収集されます。パフォーマンスデータは、PFM・Agent または PFM・RM を起動してから 1 回目の収集時から Store データベースに格納されます。

デフォルトの設定では、一部のレコードのパフォーマンスデータしか Store データベースに格納されません。Store データベースにパフォーマンスデータを格納したい場合、レコードごとに PFM・Web Console の画面で設定します。設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

(3) 差分データの保存について

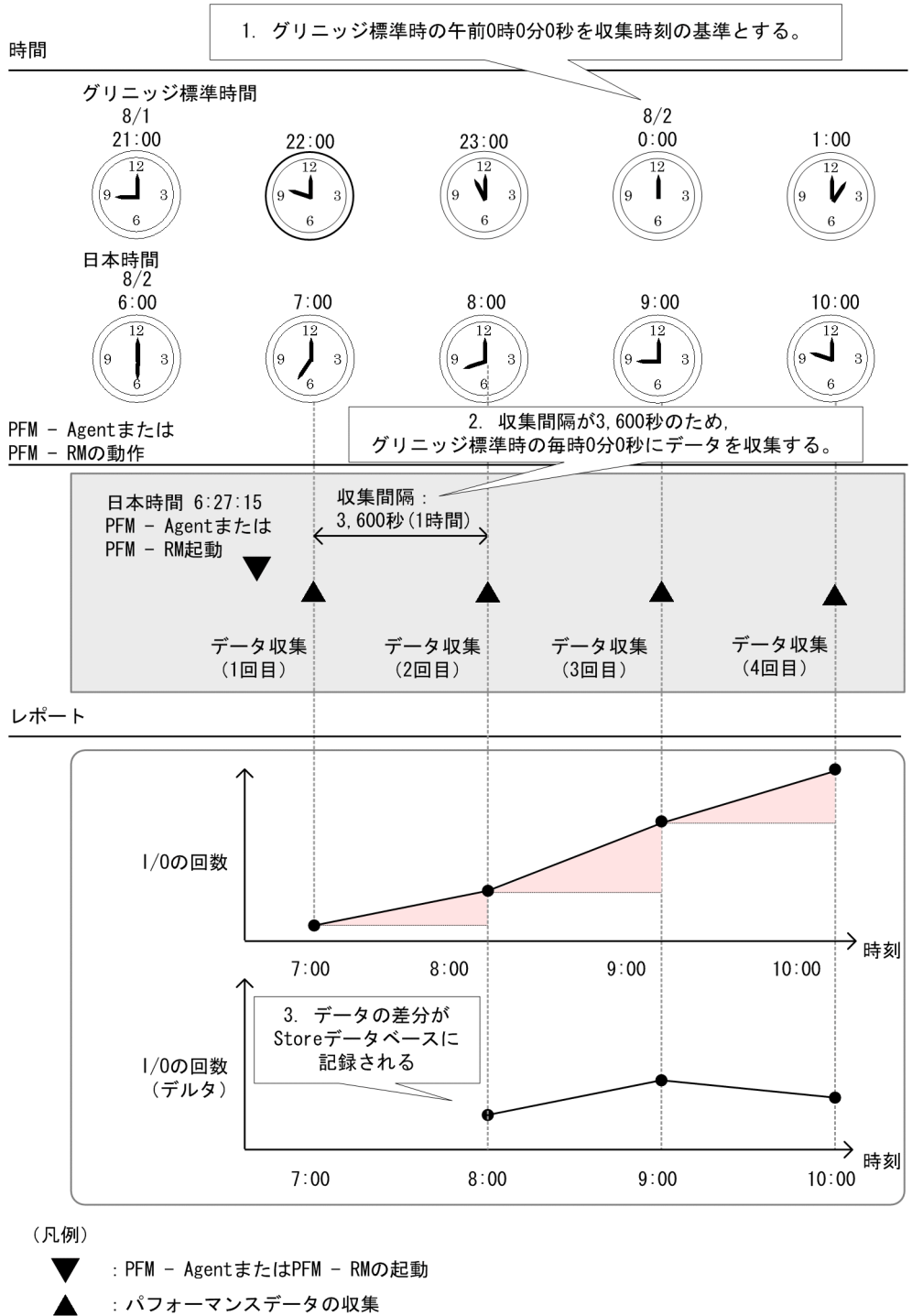
PI レコードタイプ、PD レコードタイプ、および PL レコードタイプのレコードの各フィールドには、格納される値が前回の収集データからの差分であるものがあります。この差分データを「デルタ」と呼びます。例を次に示します。

差分データを格納する例

システム起動時からの累計 I/O 回数を測定するフィールドの「デルタ」欄が「Yes」の場合、前回の収集時刻から今回の収集時刻の間に発生した I/O の回数が格納されます。パフォーマンスデータの収集間隔 (Collection Interval) を 3,600 秒 (1 時間) に設定したとします。

8 月 2 日 6 時 27 分 15 秒 (グリニッジ標準時の 8 月 1 日 21 時 27 分 15 秒) に PFM・Agent または PFM・RM を起動した場合、最初のデータは、日本時間の 8 月 2 日 7 時 0 分 0 秒 (グリニッジ標準時の 8 月 1 日 22 時 0 分 0 秒) から収集されます。次のデータは、日本時間 8 時 0 分 0 秒 (グリニッジ標準時の 8 月 1 日 23 時 0 分 0 秒) から収集されます。そのあと、日本時間 7 時 0 分 0 秒と 8 時 0 分 0 秒に収集されたデータを基に差分データが作成され、Store データベースに格納されます。次の図に差分データを格納する例を示します。

図 4-16 差分データを格納する例



各フィールドの値がデルタ値であるかどうかについては、各 PFM - Agent または PFM -

RM マニュアルのレコードについて説明している章（各レコードのフィールドの表）を参照してください。各レコードのフィールドの表で、「デルタ」欄が「Yes」のフィールドには、前回測定した値との差分が格納されます。

4.2.4 パフォーマンスデータの要約

パフォーマンスデータは、レコードの種類によって、保存条件として設定できる条件およびレコードの要約方法が異なります。ここでは、各レコードに対して保存条件として設定できる条件および要約方法について説明します。

（１）要約レコード（PI レコード）

PI レコードタイプのレコードが格納されるデータベースには、パフォーマンスデータが収集されるたびにデータが格納されていきます。このデータベースでは、パフォーマンスデータは、ある一定の時間（分、時、日、週、月、および年単位）で自動的に要約されます。数値が格納されるフィールドは、平均値または累積値などに要約されます。要約はパフォーマンスデータが収集されるたびにすべての単位のレコードで行われます。

PI レコードタイプの要約の例を次の図に示します。

図 4-17 PI レコードタイプの要約の例

1回目のデータ収集

分単位のレコード

収集時刻	パフォーマンスデータ
00分用	10
01分用	
02分用	
...	
59分用	

時単位のレコード

収集時刻	パフォーマンスデータ	累積値	データ収集回数
1時用	10	10	1
2時用			
3時用			
...			
24時用			

日単位のレコード

収集時刻	パフォーマンスデータ	累積値	データ収集回数
1日用	10	10	1
2日用			
3日用			
...			
31日用			

週単位のレコード

収集時刻	パフォーマンスデータ	累積値	データ収集回数
1週用	10	10	1
2週用			
3週用			
...			
5週用			

月単位のレコード

収集時刻	パフォーマンスデータ	累積値	データ収集回数
1月用	10	10	1
2月用			
3月用			
...			
12月用			

年単位のレコード

収集時刻	パフォーマンスデータ	累積値	データ収集回数
2005年用	10	10	1
2006年用			
2007年用			
...			
200x年用			

2回目のデータ収集

分単位のレコード

収集時刻	パフォーマンスデータ
00分用	10
01分用	20
02分用	
...	
59分用	

時単位のレコード

収集時刻	パフォーマンスデータ	累積値	データ収集回数
1時用	15	30	2
2時用			
3時用			
...			
24時用			

日単位のレコード

収集時刻	パフォーマンスデータ	累積値	データ収集回数
1日用	15	30	2
2日用			
3日用			
...			
31日用			

週単位のレコード

収集時刻	パフォーマンスデータ	累積値	データ収集回数
1週用	15	30	2
2週用			
3週用			
...			
5週用			

月単位のレコード

収集時刻	パフォーマンスデータ	累積値	データ収集回数
1月用	15	30	2
2月用			
3月用			
...			
12月用			

年単位のレコード

収集時刻	パフォーマンスデータ	累積値	データ収集回数
2005年用	15	30	2
2006年用			
2007年用			
...			
200x年用			

(凡例)



: 平均値で要約

PI レコードタイプのレコードでは、要約される時間でデータが区分されます。区分が「分」「時」「日」「週」「月」のデータは、設定された保存期間を過ぎると削除されます。区分が「年」のデータは、削除されません。PI レコードタイプの区分について、次の表に示します。

表 4-8 PI レコードタイプの区分

区分	説明
分	分単位のレコード。1 時間につき 60 レコードまで、1 日につき 1,440 レコードまで、1 週間に 10,080 レコードまで、1 月につき 44,640 レコードまで、1 年につき 527,040 レコードまで格納される。設定された保存期間を過ぎた場合、レコードは削除される。
時	時単位のレコード。1 日につき 24 レコードまで、1 週間に 168 レコードまで、1 月につき 744 レコードまで、1 年につき 8,784 レコードまで格納される。設定された保存期間を過ぎた場合、レコードは削除される。
日	日単位のレコード。1 週間に 7 レコードまで、1 月につき 31 レコードまで、1 年につき 366 レコードまで格納される。設定された保存期間を過ぎた場合、レコードは削除される。
週	週単位のレコード。1 月につき 5 レコードまで、1 年につき 52 レコードまで格納される。設定された保存期間を過ぎた場合、レコードは削除される。
月	月単位のレコード。1 年につき 12 レコードまで格納される。設定された保存期間を過ぎた場合レコードは削除される。
年	年単位のレコード。1 年につき 1 レコードが格納される。このレコードは削除されない。

(2) 非要約レコード (PD レコードおよび PL レコード)

PD レコードタイプおよび PL レコードタイプのレコードが格納されるデータベースでは、パフォーマンスデータの要約は行われません。PD レコードタイプおよび PL レコードタイプのレコードに対する保存条件の設定方法は Store バージョンによって異なります。Store バージョン 1.0 の場合、保存するレコード数を設定しますが、Store バージョン 2.0 では、PI レコードタイプのレコードと同じく保存期間を日数で設定します。どちらの場合も、保存条件を外れたデータは自動的に削除されます。Store バージョンについては「4.2.5 Store データベースの保存方式」を参照してください。

4.2.5 Store データベースの保存方式

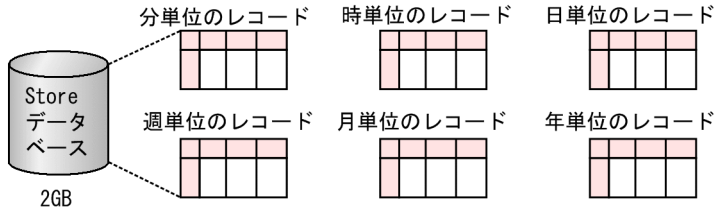
監視エージェントが収集した稼働監視データを保存しておく Store データベースには、バージョン 1.0 (Store バージョン 1.0) とバージョン 2.0 (Store バージョン 2.0) があります。なお、Store バージョン 2.0 は、バージョン 08-10 以降の PFM・Manager または PFM・Base とバージョン 08-00 以降の PFM・Agent の組み合わせで利用できます。また、PFM・RM では Store バージョン 2.0 だけを利用できます。

Store バージョン 1.0 と 2.0 では、稼働監視データの保存方式が異なります。

(1) Store バージョン 1.0 での保存方式

Store バージョン 1.0 での保存方式を次の図に示します。次の図は PI レコードを Store バージョン 1.0 で保存している例です。

図 4-18 Store バージョン 1.0 での保存方式



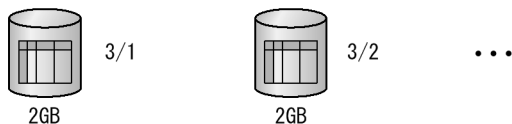
Store バージョン 1.0 では、レコードタイプ (PI/PD/PL) ごとに、レコード全体を一つのデータベースに稼働監視データとして保存していて、容量の上限はデータベース全体で最大 2 ギガバイトです。

(2) Store バージョン 2.0 での保存方式

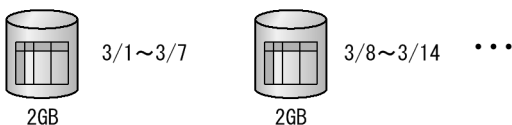
Store バージョン 2.0 での保存方式を次の図に示します。次の図は PI レコードを Store バージョン 2.0 で保存している例です。

図 4-19 Store バージョン 2.0 での保存方式

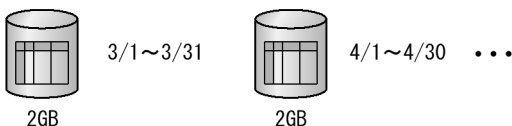
●分単位、時単位のレコード



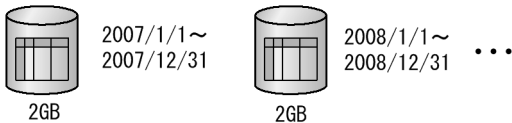
●日単位、週単位のレコード



●月単位のレコード



●年単位のレコード



Store バージョン 2.0 では、要約区分、レコードタイプによって決まる一定の期間（分割期間）ごとに複数のファイルに分割して Store データベースに格納します。なお、分割されたそれぞれのデータベースを単位 DB と呼びます。要約区分、レコードタイプによって決まる分割期間を次の表に示します。

表 4-9 要約区分と分割期間

要約区分	分割期間
分単位、時単位および PD、PL レコード	日単位
日単位、週単位のレコード	週単位
月単位のレコード	月単位
年単位のレコード	年単位

Store バージョン 2.0 では、Store データベース全体ではなく、分割されたそれぞれのファイル容量の上限が 2 ギガバイトになるため、Store バージョン 1.0 利用時よりも大量の稼働監視データを保存できます。また、稼働監視データの保存期間は分、時レコードは最長 1 年、日、週、月レコードは最長 10 年、年レコードは制限なしとなります。これによって、長期間にわたるシステムの稼働状況が分析できるようになります。

4.2.6 Store バージョン 2.0 で利用できる機能

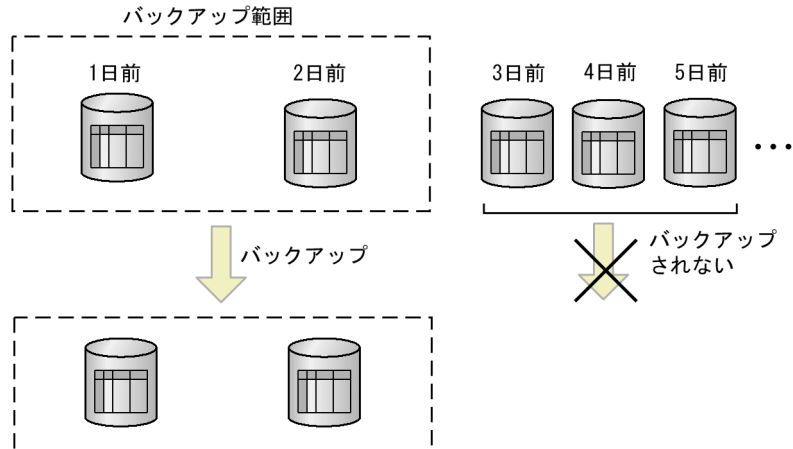
(1) Store データベースのバックアップ

定期的に稼働監視データのバックアップを取得することで、障害時のデータ喪失のリスクを低減できます。Store バージョン 2.0 では定期的なバックアップに加え、細分化した単位でバックアップを取得する部分バックアップを利用できます。

稼働監視データの部分バックアップを次の図に示します。

図 4-20 稼働監視データの部分バックアップ

部分バックアップの対象を1日前・2日前とした場合



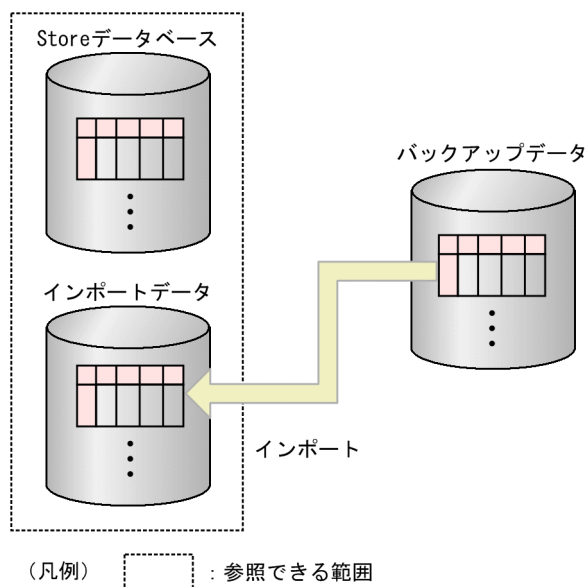
部分バックアップでは、特定の期間だけ、特定のレコードタイプだけ、特定の年月だけというようにバックアップ対象を部分的に特定してバックアップできます。例えば、上記に示した図のように今回バックアップする範囲として2日前から1日前のPDデータベースのPD_PDIレコードだけをバックアップしたり、2日前から1日前のPIデータベースの月レコードだけを部分的にバックアップしたりといった指定ができます。部分バックアップを活用することで、バックアップに掛かる時間を短縮できるだけでなく、データファイルの管理が効率良く行えます。

データの部分バックアップの方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、バックアップとリストアについて説明している章を参照してください。

(2) 過去の稼働監視データの参照

Store バージョン 2.0 を利用すると、バックアップデータをインポートして、保存期間を過ぎた過去の稼働監視データを参照できます。稼働監視データの参照を次の図に示します。

図 4-21 稼働監視データの参照



この図に示したように、現在運用している Store データベースの稼働監視データに加えてインポートしたデータを保持でき、Store データベース内のデータとインポートしたデータの両方を参照できます。また、インポートしたデータは、Store データベースのデータとは別に管理されるため、あらかじめ Store データベースで設定した保存期間を過ぎても削除されません。このため、どの時点でもデータを参照できます。

バックアップデータのリストアとは、次に示す点が異なります。

- ・ インポート前に Store データベースに格納されていたデータは、消去されません。
- ・ インポートしたデータは、設定した保存期間を過ぎても保持されます。

インポートは、`jpctool db import` コマンドを使用して、フルインポートと追加インポートを選択できます。

・ フルインポート

`jpctool db import` コマンドでフルインポートできます。コマンドを実行するとインポートディレクトリにあるファイルが削除されたあと、バックアップファイルが配置されます。

・ 追加インポート

`jpctool db import` コマンドに `-add` オプションを指定して追加インポートできます。追加インポートでは、元のインポートディレクトリのファイルにデータを上書きします。このため、インポートディレクトリにあるデータよりも古いバックアップデータを追加インポートすると、データが上書きされて要約レコードなどのデータが古いものとなります。追加インポートする場合は、古いデータからインポートしてください。

データをインポートする方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

インポートディレクトリは、Agent Store および Remote Monitor Store サービス停止時に `jpccconf db define` コマンドによって変更できます。また、`jpctool db import` コマンドに `-clear` オプションを指定することで、インポートディレクトリのデータを削除できます。

なお、プロダクト ID、Store バージョンが異なるバックアップデータはインポートできません。なお、バックアップデータのデータモデルのバージョンが現在使用しているデータモデルのバージョンよりも低い場合、`jpctool db dmconvert` コマンドでデータモデルをバージョンアップすることでインポートできます。

4.2.7 Store バージョン 2.0 の導入の流れ

Store バージョン 2.0 を使用するときの導入の流れについて次の図に示します。

図 4-22 Store バージョン 2.0 の導入から運用の流れ



(凡例) 【 】 : 参照先

(1) PFM - Agent のバージョン 08-10 以降または PFM - RM を新規インストールする場合

新規インストールを実施して、Store バージョン 2.0 で運用を始めるまでの手順について説明します。

1. システムリソース見積もりと保存期間の設計
Store バージョン 2.0 導入に必要なシステムリソースが、実行環境に適しているかど

うかを確認してください。必要なシステムリソースを次に示します。

- ディスク容量
- ファイル数
- 1 プロセスがオープンするファイル数

これらの値は保存期間の設定によって調節できます。実行環境が保有しているリソースを考慮して保存期間を設計してください。システムリソースの見積もりについては、各 PFM・Agent または PFM・RM マニュアルの付録に記載されているシステム見積もりについての説明を参照してください。

2. ディレクトリの設定

Store ディレクトリなど Agent Store および Remote Monitor Store サービスが使用するディレクトリをデフォルトから変更する必要がある場合に設定してください。ディレクトリの設定は、`jpccconf db define` コマンドで行います。

3. 保存期間の設定

手順 1 の見積もり時に設計した保存期間を設定してください。Agent Store または Remote Monitor Store サービスを起動して、PFM・Web Console で設定してください。

(2) Store バージョン 1.0 から移行する場合

Store バージョン 1.0 から移行して、Store バージョン 2.0 で運用を始めるまでの手順について説明します。

1. システムリソース見積もりと保存期間の設定

Store バージョン 2.0 の導入に必要なシステムリソースが、実行環境に適しているか確認してください。必要なシステムリソースを次に示します。

- ディスク容量
- ファイル数
- 1 プロセスがオープンするファイル数

これらの値は保存期間の設定によって調節できます。実行環境が保有しているリソースを考慮して保存期間を設定してください。システムリソースの見積もりについては、「付録 C.4 PFM・Agent 08-00 以降を Store データベース (Store バージョン 2.0) で使用する場合のディスク占有量」を参照してください。

2. パフォーマンスデータのバックアップ

Store バージョン 1.0 のデータをバックアップしてください。

3. ディレクトリの設定

Store バージョン 2.0 に移行する場合に、Store バージョン 1.0 でのディレクトリ設定では、Agent Store サービスが起動しないことがあります。このため、Agent Store サービスが使用するディレクトリの設定を見直す必要があります。Agent Store サービスが使用するディレクトリの設定は `jpccconf db define` コマンドを使用して表示・変更できます。

Store バージョン 2.0 は、Store データベースの作成先ディレクトリやバックアップ先ディレクトリの最大長が Store バージョン 1.0 と異なります。Store バージョン 1.0

でディレクトリの設定を相対パスに変更している場合、絶対パスに変換した値が Store バージョン 2.0 でのディレクトリ最大長の条件を満たしているか確認してください。Store バージョン 2.0 のディレクトリ最大長は 214 バイトです。ディレクトリ最大長の条件を満たしていない場合は、Agent Store サービスが使用するディレクトリの設定を変更したあと、手順 4 以降に進んでください。

4. セットアップコマンドの実行

Store バージョン 2.0 に移行するため `jpcconf db vrset -ver 2.0` コマンドを実行します。

5. 保存期間の設定

手順 1 の見積もり時に設計した保存期間を設定してください。Agent Store サービスを起動して、PFM - Web Console で設定してください。

(3) 通常の運用

Agent Store または Remote Monitor Store サービスを起動して運用します。通常運用は Store バージョン 1.0 のときと同様です。

(4) データのバックアップ

Store バージョン 2.0 では、大量の稼働監視データを管理できるため、フルバックアップよりも定期的に部分バックアップ取得の方が効率良く Store データベースを運用できます。一週間に一度など、一定の周期で部分バックアップを取得する計画を立ててください。

また、インポート機能を利用してバックアップデータを参照したい場合は、部分バックアップのディレクトリを、インポートして利用したい単位で変更することをお勧めします。1 か月程度で変更することを推奨します。

(5) 障害時のデータ採取

Store バージョン 2.0 を使用する場合、データベースの容量が大きくなるため、資料採取に時間が掛かります。この場合、次の両方のコマンドを実行して、データベース以外の資料を採取してください。

- `jpcras ディレクトリ名 all`
- `jpcras ディレクトリ名 all dump`

データベースの容量が大きい場合は、次のコマンドを実行して、データベースを含む資料を採取してください。

- `jpcras ディレクトリ名 all all`

コマンドを実行すると、Store ディレクトリのデータベースが採取されます。なお、環境変数 `JPC_COLIMPORT` が設定されている場合はインポートディレクトリのデータベースも一緒に採取されます。

4.3 システムが危険域に達したときに警告する機能

Performance Management では、監視エージェントのパフォーマンスデータが危険域に達したときに、システム管理者に E メールや監視コンソールで警告されるように設定できます。

システムが危険域に達したときに警告する機能について説明します。

4.3.1 アラームイベントデータとは

Performance Management は、監視エージェントのパフォーマンスデータがしきい値を超えて危険域に達したとき、システム管理者などに警告する機能を提供します。

Performance Management では、この警告を「アラームイベント」と呼びます。PFM - Agent または PFM - RM から発行されたアラームイベントは、接続先の PFM - Manager に送信されます。PFM - Agent または PFM - RM から送信されたアラームイベントは、PFM - Manager で一元的に管理されます。

アラームイベントは、システム管理者などに E メールや監視コンソールでシステムが危険域に達していることを知らせます。これを Performance Management では「アクション」と呼びます。また、アラームイベントが発生したときに、システムが危険域に達したことを通知するためのコマンドなどを自動で実行させることもできます。

アラームイベントデータは、「Product Alarm レコードタイプ (PA レコードタイプ)」のレコードとして、PFM - Manager の Master Store サービスによって Store データベースに格納されます。

4.3.2 アラームイベントデータ収集機能

アラームイベントデータを収集する機能について説明します。

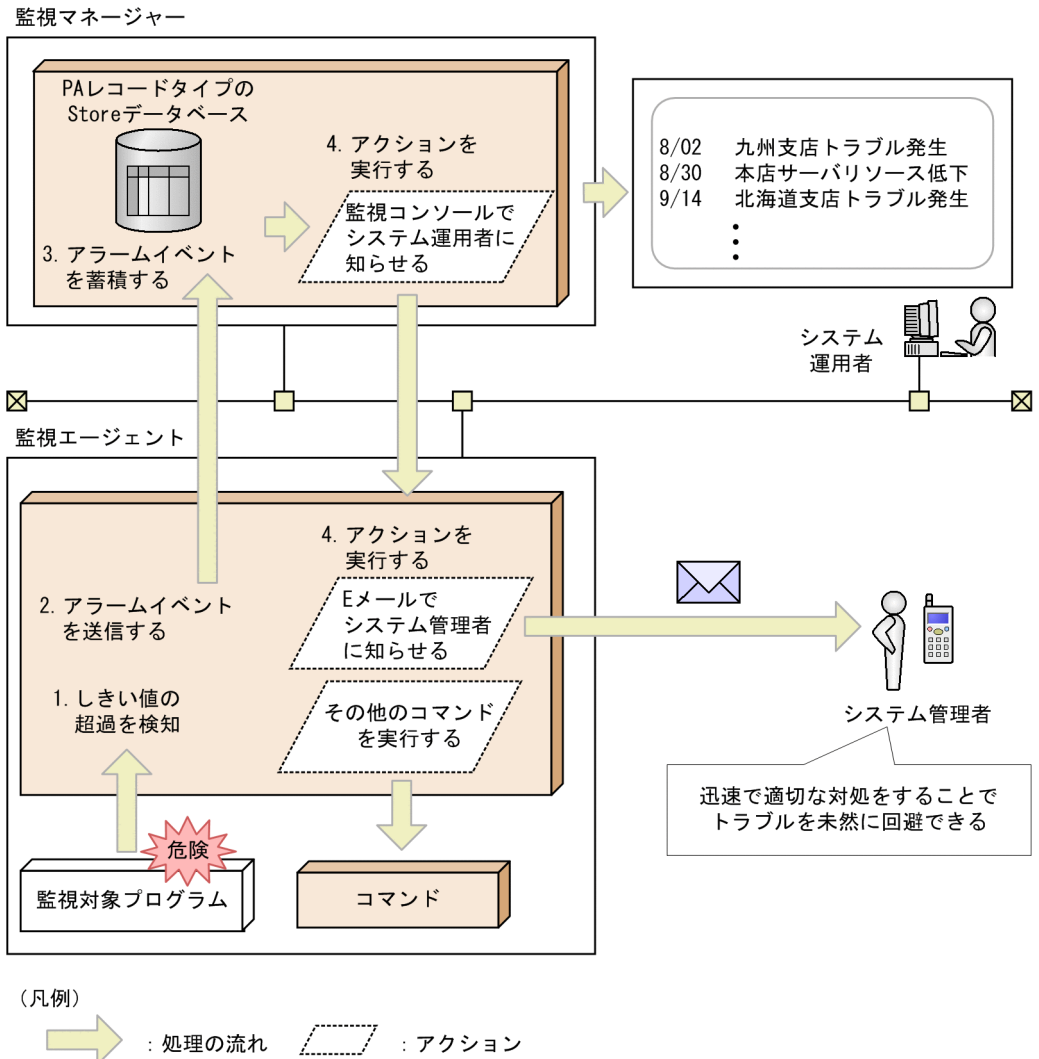
(1) アラームイベントデータの収集方法

アラームイベントは、監視エージェントのパフォーマンスデータがしきい値を超えたときに、PFM - Agent の Agent Collector サービスまたは PFM - RM の Remote Monitor Collector サービスによって発行されます。しきい値は、Performance Management システムが提供する監視テンプレートのアラーム定義であらかじめ設定されています。

アラームイベントの発行契機となるしきい値は、PFM - RM のグループエージェントに対しても設定できます。グループエージェントに対してしきい値を設定した場合、複数の監視対象のパフォーマンスデータを集約した値を基に、アラームイベントを発行できます。例えば、複数の監視対象の CPU 使用率を平均した値を基にアラームイベントを発行できます。

監視対象プログラムが危険域に達したときに警告する処理の流れを次の図に示します。

図 4-23 監視対象プログラムが危険域に達したときに警告する処理の流れ



処理の流れを説明します。

- しきい値の超過を検知する。
パフォーマンスデータの値がしきい値を超えた場合、PFM - Agent または PFM - RM によってアラームイベントが発行されます。
- アラームイベントを送信する。
PFM - Agent または PFM - RM によって発行されたアラームイベントが PFM - Manager に送信されます。PFM - Manager に送信されたアラームイベントの情報は、PFM - Web Console の [イベントモニター] 画面で確認できます。

3. アラームイベントを蓄積する。

PFM・Agent または PFM・RM から送信されたアラームイベントデータが PFM・Manager の Store データベースに格納されます。PFM・Manager の Store データベースに蓄積されたアラームイベントの情報は、PFM・Web Console の [イベント履歴] 画面で確認できます。

4. アクションを実行する。

発行されたアラームイベントに定義されているアクションが実行されます。PFM・Web Console の画面にアイコンで知らせたり、E メールで通知したりなどのアクションが実行されることでシステム管理者に警告できます。また、アラームイベントの発行を通知するためのコマンドを実行することもできます。

ポイント

監視エージェントで、アクションとして Eメールの送信またはコマンドの実行が設定されている場合、監視エージェントでアクションが実行されます。アクションは、監視マネージャーで実行させることもできます。

4.3.3 アラームイベントデータの要約とレコード数の上限

アラームイベントデータは要約されません。アラームイベントデータは、レコード数が上限値に達した場合、古いデータから上書きされていきます。

レコード数の上限は、PFM・Web Console の画面で変更できます。レコード数の上限の設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

4.4 稼働監視システム自身の障害を検知する機能

Performance Management には、監視エージェントや監視エージェントが稼働するホストの稼働状態を確認する機能があります。これをヘルスチェック機能と呼びます。ヘルスチェック機能を利用すると、監視エージェントによって監視対象を正しく監視できているか、監視エージェントが稼働するホストが稼働しているかを知ることができます。PFM・RM を使用している場合は、監視対象ホストが稼働しているかを知ることができます。また、稼働状態の監視結果にアラームを設定することで、PFM・Agent または PFM・RM が正しく稼働していないことを検知したときやホストの停止を検知したときにアラームイベントを発生させ、E メール送信などのアクションを実行させることができます。

また、Performance Management には、稼働監視システム上で動作する Performance Management のサービスの詳細な稼働状態を確認する機能があります。これをステータス管理機能と呼びます。

なお、ヘルスチェック機能によって監視エージェントの稼働状態を監視するには、ステータス管理機能を使用します。このため、対象となる監視エージェントがステータス管理機能に対応したバージョンであり、ステータス管理機能が有効になっている必要があります。ホストの稼働状態を監視する場合は前提となる条件はありません。ヘルスチェック機能による稼働状態の確認の概要を次の図に示します。

図 4-24 ヘルスチェック機能による稼働状態の確認の概要 (PFM - Agent の場合)

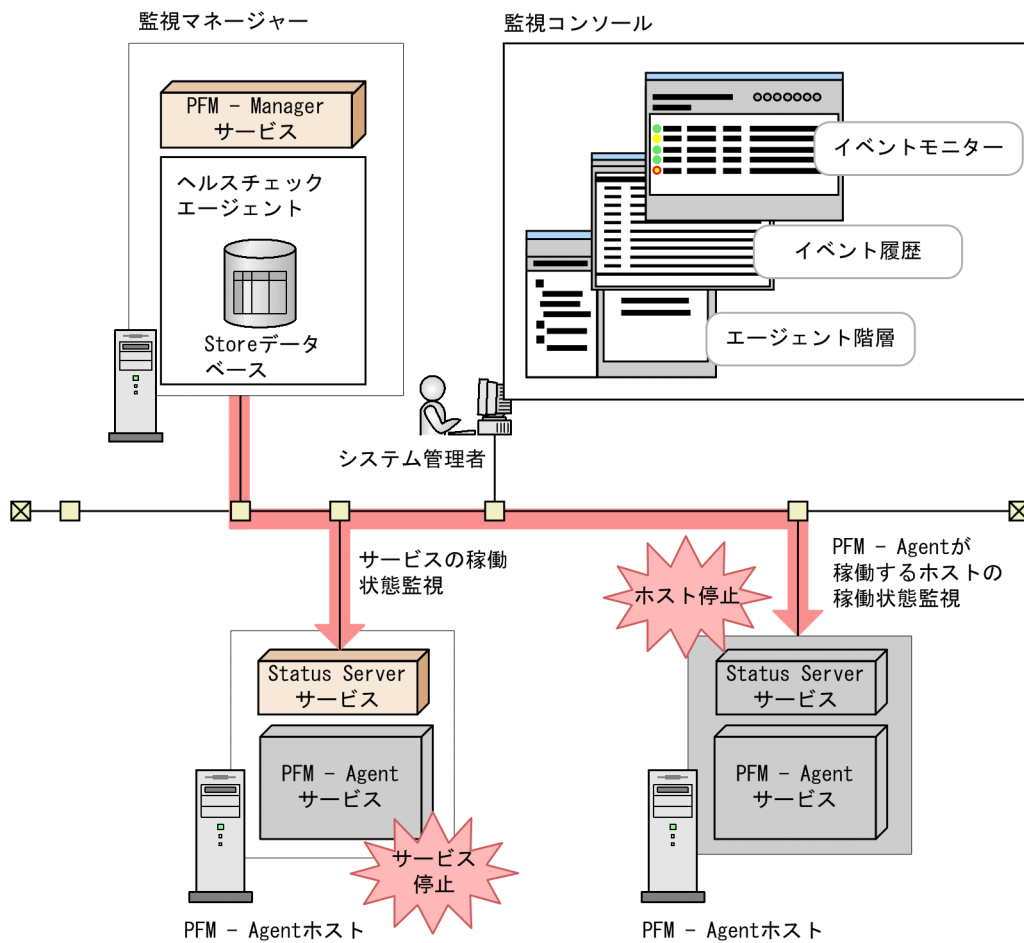
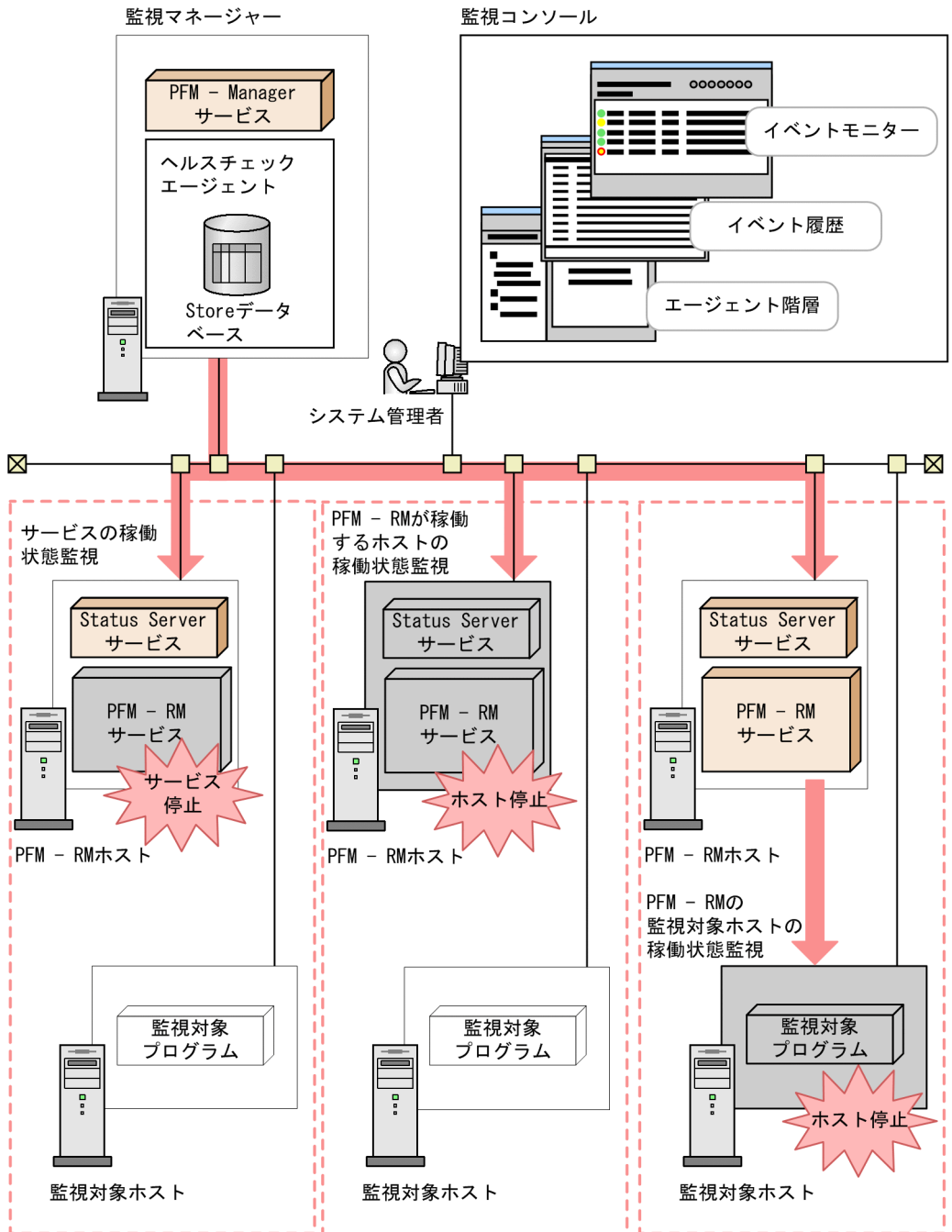


図 4-25 ヘルスチェック機能による稼働状態の確認の概要 (PFM - RM の場合)



ヘルスチェック機能では、次の２段階の監視ができます。

監視エージェントが稼働するホストの稼働状態監視

PFM - Agent または PFM - RM が稼働するホストの稼働状態および PFM - RM の監視

対象ホストの稼働状態を監視し、PFM - Web Console 上で稼働状態を確認できます。前提となるバージョンは次のとおりです。

- PFM - Manager と PFM - Web Console は 08-11 以降
- PFM - Agent または PFM - RM のバージョンに制限なし

監視エージェントのサービスの稼働状態監視

PFM - Agent または PFM - RM が稼働するホストの稼働状態および PFM - RM の監視対象ホストの稼働状態に加え、Agent Collector、Remote Monitor Collector、Agent Store、および Remote Monitor Store サービスの稼働状態を監視します。また、設定によって監視対象の同一ホスト上にある Action Handler サービスも監視できます。監視結果は、PFM - Web Console 上で確認できます。前提となるバージョンは次のとおりです。

- PFM - Manager と PFM - Web Console は 08-11 以降
- PFM - Agent 07-50-01 以降または PFM - RM でステータス管理機能が有効の場合

参考 PFM - RM のヘルスチェック

PFM - RM の場合、次の三つの稼働状態を監視できます。

- PFM - RM が稼働するホストの稼働状態
- PFM - RM のサービスの稼働状態
- PFM - RM の監視対象ホストの稼働状態

このうち、PFM - RM の監視対象ホストの稼働状態は、対応するリモートエージェントの稼働状態として監視されます。グループエージェントの稼働状態は監視できません。

PFM - RM の監視対象ホストの稼働状態は、ヘルスチェック機能をホスト監視レベルとサービス監視レベルのどちらに設定している場合でも監視できます。ただし、サービス監視レベルに設定した場合、PFM - RM の監視対象ホストの稼働状態は、Remote Monitor Store または Action Handler サービスの状態によって変化します。なお、PFM - RM の監視対象ホストの稼働状態を監視する場合、ヘルスチェック機能をホスト監視レベルに設定するときでも PFM - RM のステータス管理機能を有効にする必要があります。

PFM - RM の監視対象ホストの稼働状態監視の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

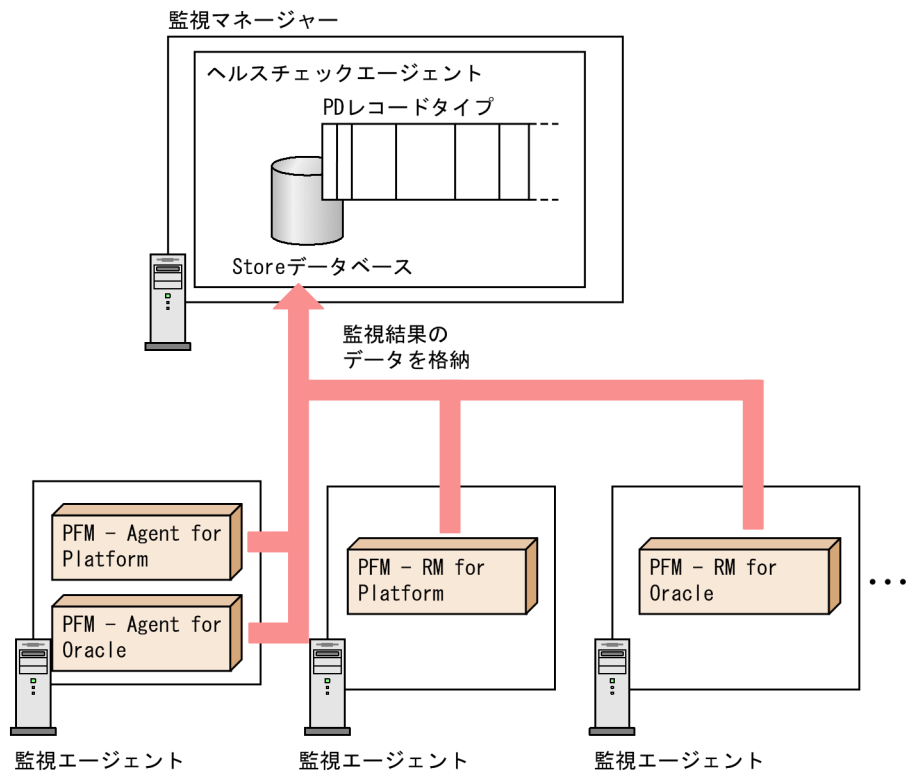
ヘルスチェック機能では、ヘルスチェックエージェントという稼働状態を監視するための専用のエージェントを使用して、監視エージェントや監視エージェントが稼働するホストの稼働状態を監視します。ヘルスチェックエージェントは、ヘルスチェック機能を有効にすることで PFM - Manager の起動時に起動します。ヘルスチェックエージェントは、監視エージェントのサービスや監視エージェントが稼働するホストの稼働状態を、一定の周期で確認し、確認結果を PFM - Web Console 上に表示することでシステム管理者に稼働状態の変化を知らせます。ヘルスチェック機能の設定方法および稼働状態の確


認方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

監視結果はイベント（ヘルスチェックイベント）として発行されるほか、パフォーマンスデータの形式でも収集されるため、必要に応じてアラームを設定し、アラームに対するアクションも設定できます。これによって、エージェント稼働状態の変化を契機とした JP1 イベント発行やコマンド実行、SNMP トラップ発行および E メール送信などができます。JP1 イベントや SNMP トラップを利用することで、JP1/IM、NNM などの統合運用管理製品と連携できます。

また、稼働状態の監視結果は、ヘルスチェックエージェントの設定によって、Store データベースに格納できます。このため、ヘルスチェックエージェントのレポート機能を利用して現在および過去の稼働状態を参照できます。なお、ヘルスチェックエージェントの Store データベースへ格納するとき、使用する Store バージョンの選択やデータの保存期間などを通常のパフォーマンスデータと同様に設定、管理できます。収集されたデータの管理方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。ヘルスチェック機能での監視結果のデータ管理を次の図に示します。

図 4-26 ヘルスチェック機能での監視結果のデータ管理

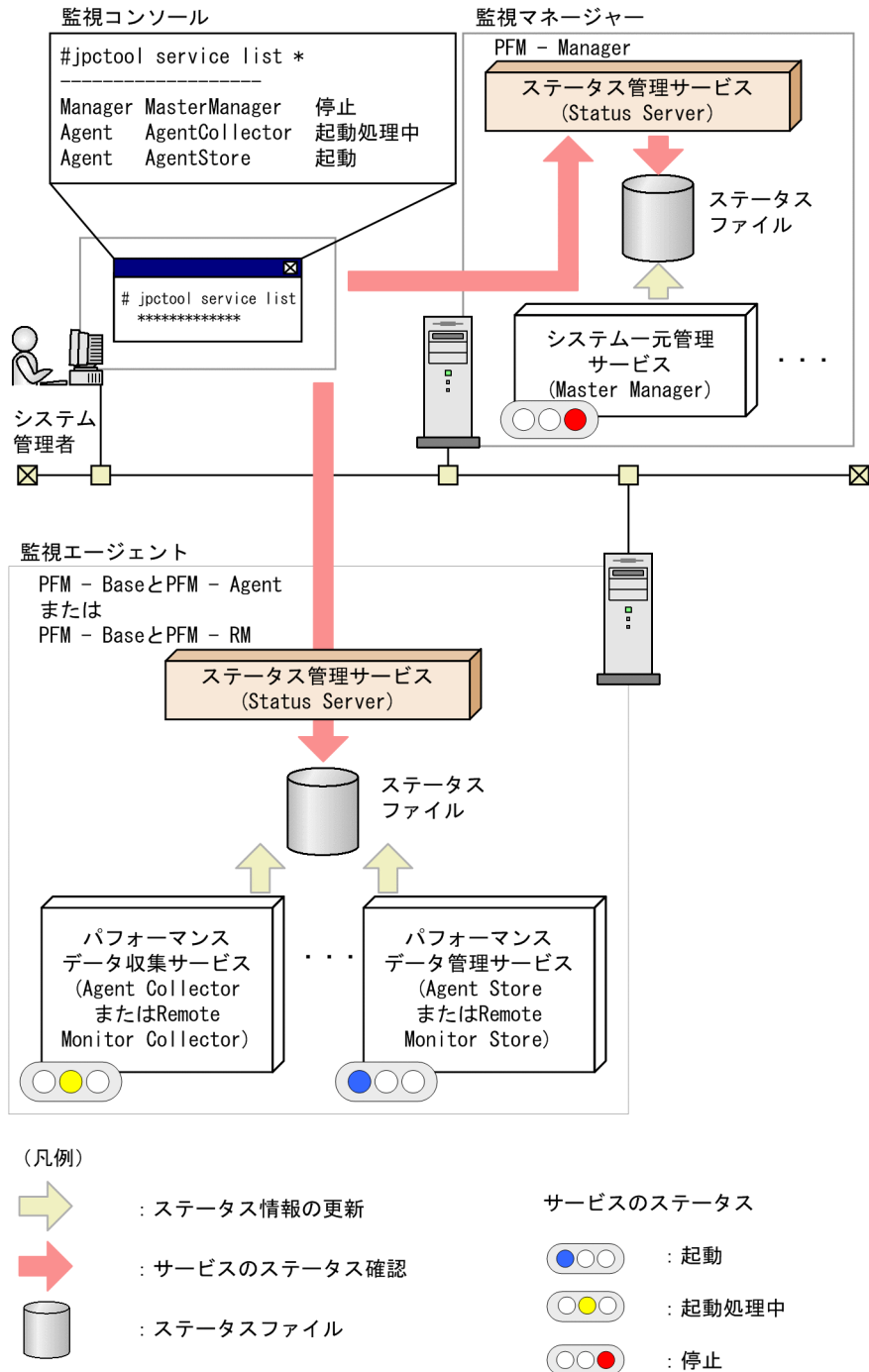


(凡例)  : 監視結果のデータの流れ

4. Performance Management の機能

一方、ステータス管理機能だけを利用して、Performance Management のサービスの状態を確認できます。ステータス管理機能が有効の場合、PFM・Manager および PFM・Base 上で動作するすべてのサービスは、自身の状態をステータスファイルに登録します。システム管理者は、ステータス管理サービス（Status Server サービス）を使ってステータスファイルの内容を確認することで、サービスの状態を知ることができます。ステータスファイルの内容を確認するには、運用コマンド（`jpctool service list` コマンド）を実行します。ステータス管理機能によるサービスの状態確認の概要を次の図に示します。

図 4-27 ステータス管理機能によるサービスの状態確認の概要



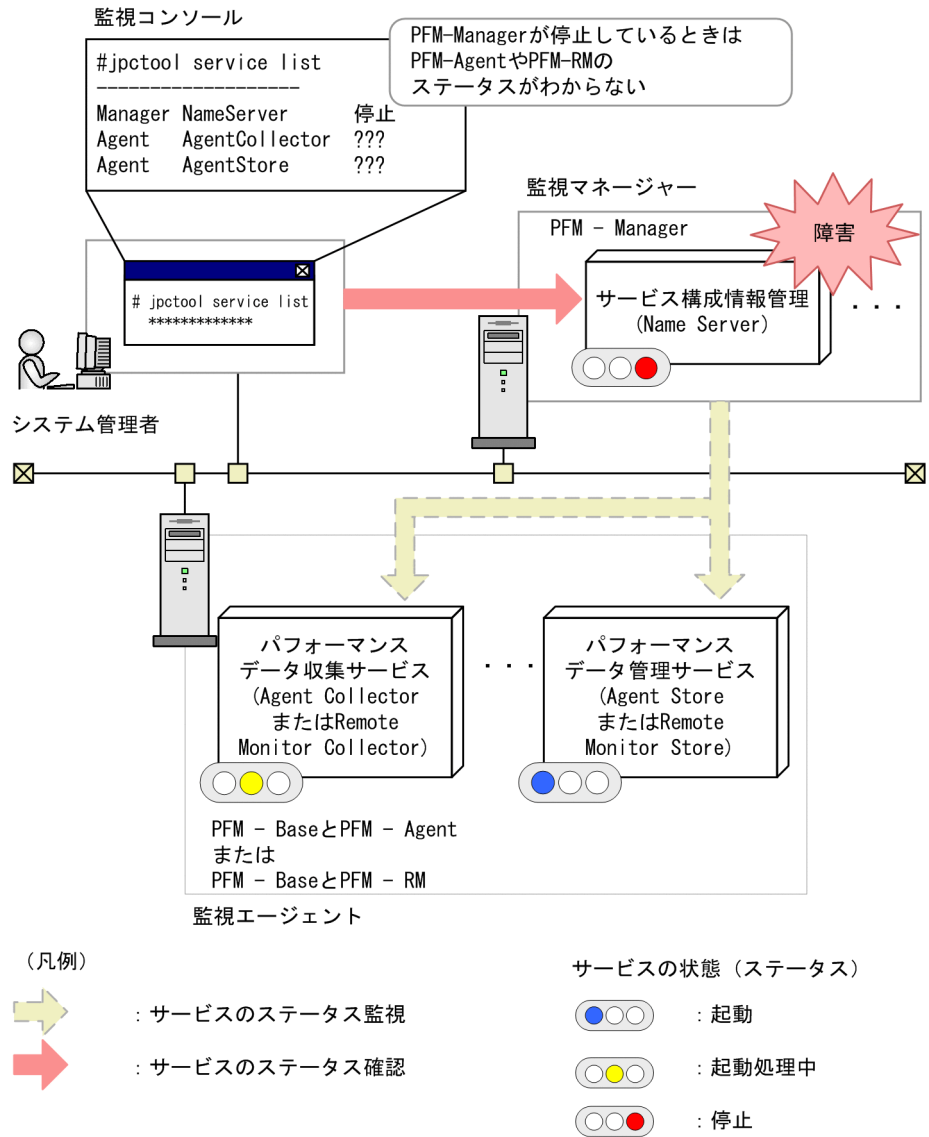
ステータス管理機能の設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明して

いる章を参照してください。

参考 ステータス管理機能が無効の場合のステータス管理

ステータス管理機能が無効の場合は、PFM・Manager が PFM・Agent または PFM・RM への通信に対する応答の有無によってサービスの状態を判定します。また、PFM・Agent または PFM・RM の IP アドレスやポート番号などのネットワーク情報を PFM・Manager が一元管理します。そのため、障害時やサービスの起動処理中などで PFM・Manager と通信できない場合や PFM・Agent または PFM・RM がスタンダロンモードで起動している場合には、サービスの状態を確認できません。ステータス管理機能が無効の場合、サービス起動中や停止中に `jpctool service list` コマンドでステータスを確認すると、サービスの状態を確認できない場合があります。サービスの状態を確認する必要があるときは、ステータス管理機能を有効にしてください。ステータス管理機能が無効の場合に、Performance Management のステータスを確認した場合の例を次の図に示します。

図 4-28 ステータス管理機能が無効の場合の例



jpctool service list コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

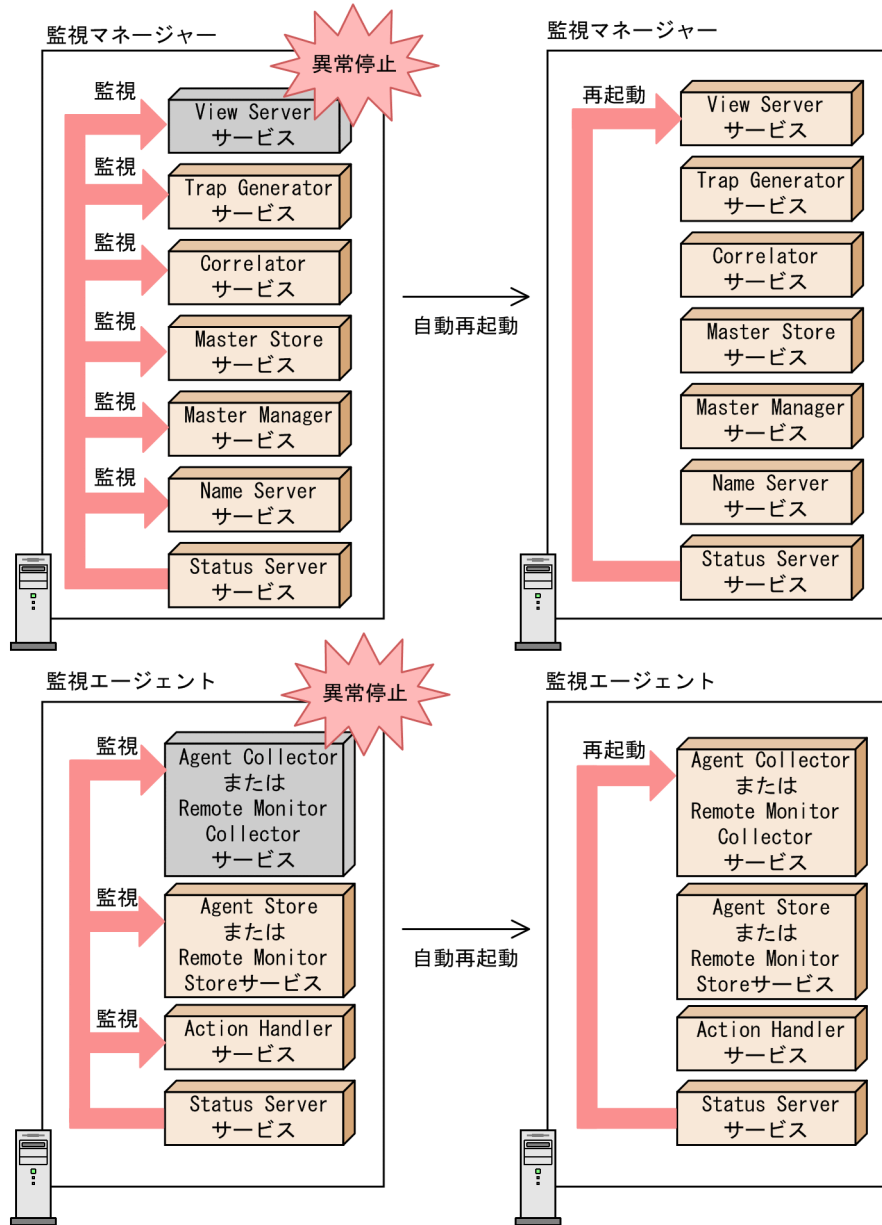
4.5 稼働監視システムのサービスを自動的に再起動する機能

Performance Management では、万が一 PFM サービスが異常停止した場合に備え、PFM サービスを自動的に再起動する機能があります。各ホストの Status Server サービスが、ステータス管理機能を利用して同一ホスト内の PFM サービスを監視し、異常停止を検出した場合に自動的に PFM サービスを起動します。また、異常停止していない場合にも一定時間間隔ごとに再起動することもできます。これを PFM サービス自動再起動機能と呼びます。PFM サービス自動再起動機能を利用することで、安定した監視環境を維持できます。

PFM サービス自動再起動機能では、ステータス管理機能を利用します。このため、対象となる PFM サービスがステータス管理機能に対応したバージョンであり、該当ホストでステータス管理機能が有効になっている必要があります。再起動の対象となる PFM サービスは、物理ホストで動作する PFM サービスだけとなります。なお、Status Server サービス自身は対象となりません。Performance Management をクラスタシステムで運用している場合、論理ホストで動作する PFM サービスの制御にはクラスタソフトを利用してください。PFM サービス自動再起動機能では論理ホストで動作するサービスを対象としていません。

PFM サービスの自動再起動の概要を次の図に示します。

図 4-29 PFM サービスの自動再起動の概要



PFM サービス自動再起動機能では、次の二つの機能を用意しています。

自動再起動機能

PFM サービスを監視し、PFM サービスの異常停止を検出した場合に、自動的に PFM サービスを再起動します。監視対象の PFM サービスおよび監視間隔は、サービス単位でユーザーが指定できます。ただし、監視対象の PFM サービスの異常停止を検出

した場合、サービスの起動は該当 PFM サービスの属するサービス起動単位で行われます。

定期再起動機能

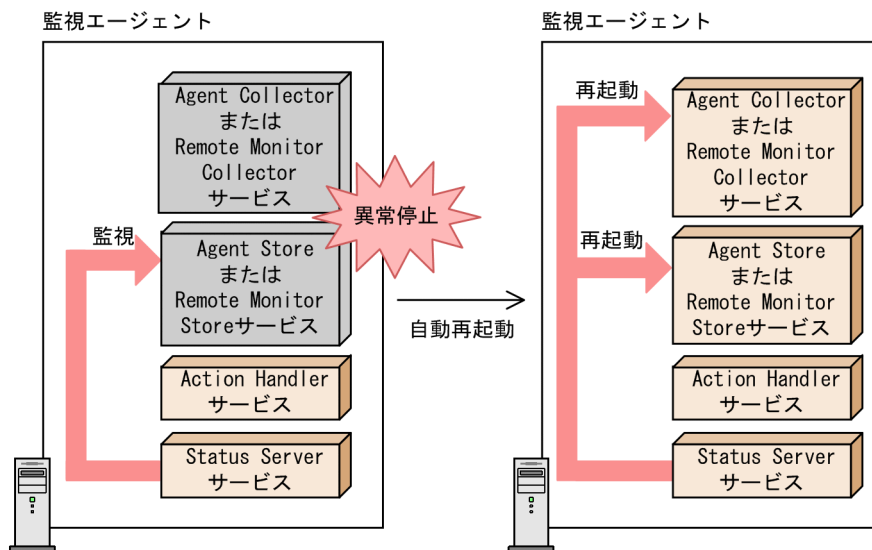
定期的に PFM サービスを再起動します。再起動対象の PFM サービスおよび再起動間隔は、サービス単位でユーザーが指定できます。ただし、サービスの停止は指定したサービス単位で行われますが、サービスの起動は該当 PFM サービスの属するサービス起動単位で行われます。

注

サービス起動単位とは、`jpcspm start` コマンドで指定できる最小単位です。つまり、監視エージェントの場合は、Agent Store および Remote Monitor Store サービスと、Agent Collector および Remote Monitor Collector サービスの対が単位になります。なお、マルチインスタンスエージェントの場合は、インスタンスごとに一単位になります。Action Handler サービスの場合は、Action Handler サービス単体になります。

サービスの起動がサービス起動単位で行われる例を次の図に示します。図の例では、Agent Store サービスだけを監視対象にしている場合でも、Agent Store サービスの異常停止を検出すると、Agent Store サービスの属するサービス起動単位である Agent Collector サービスおよび Agent Store サービスが起動されます。PFM サービス自動再起動機能でのサービス起動単位については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

図 4-30 該当サービスの属するサービス起動単位で起動する例



PFM サービス自動再起動機能の設定は、PFM・Web Console のサービス階層から、サー

ビスのプロパティで行います。PFM サービス自動再起動機能の設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

4.6 Performance Management の監視コンソール機能

Performance Management の監視コンソールは Web ブラウザです。システム管理者は、Web ブラウザから監視コンソールサーバにアクセスすることで、企業システムで発生している問題をリアルタイムでとらえることができます。エージェントごとに異なる監視ソフトウェアを導入したり、習得したりする必要はありません。Web ブラウザから PFM - Web Console にログインすれば、エージェントの稼働状況をリアルタイムに監視できます。

稼働状況の監視には、次の 2 種類があります。

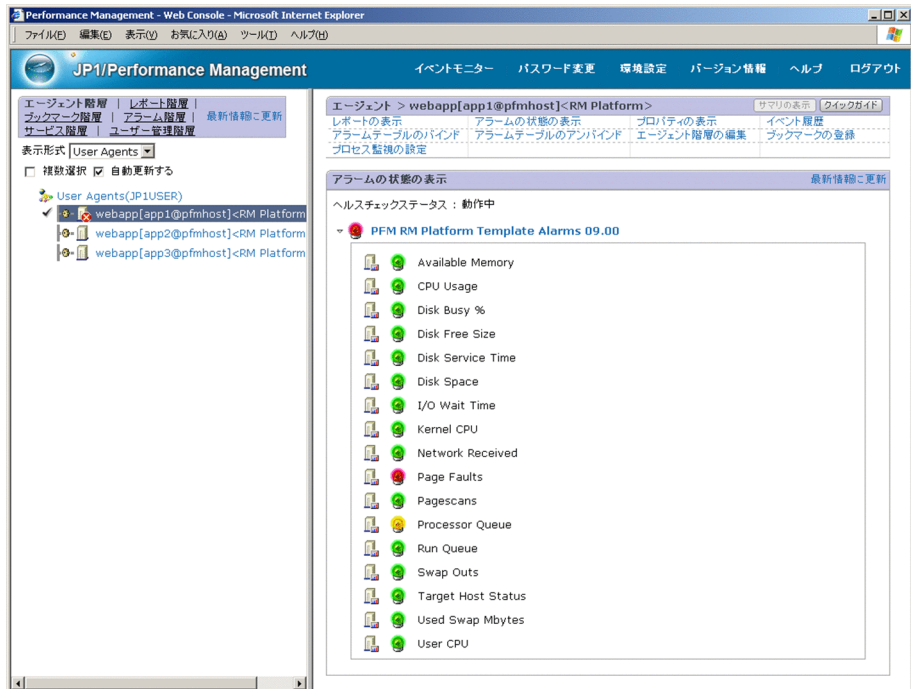
(1) エージェント階層によるエージェントの監視

エージェントの稼働状況をアイコンで表示します。アイコンをグループ分けしたり、グループを階層化したりすることで、エージェントをツリー構造で管理できます。これをエージェント階層といいます。エージェントでイベントが発生した場合、ツリー上のアイコンが変化します。これによって、どのようなイベントが発生しているかを視覚的に確認できます。

さらに、[アラームの状態の表示] 画面でエージェントのアイコンをクリックすると、あらかじめアラームに関連づけておいたレポートが、グラフや表形式で表示されます。表示されたレポートによってエージェントの稼働状態を確認できます。グラフや表の項目を選択して、別ウィンドウに項目別の詳細なグラフや表を表示させるように設定することもできます。レポートから呼び出す、さらに詳細なレポートを「ドリルダウンレポート」といいます。

エージェント階層によるエージェントの監視を次の図に示します。

図 4-31 エージェント階層によるエージェントの監視



(2) ログによるエージェントの監視

ログによるエージェント監視で発生したイベントの情報を表示します。イベントの発生日時やメッセージの詳細などは、[イベントモニター] で常に最新の情報を確認できます。また、過去に発生したイベントの履歴を [イベント履歴] 画面で確認できます。

ログによるエージェントの監視を次の図に示します。

4. Performance Management の機能

図 4-32 ログによるエージェントの監視

Performance Management - Web Console - "Event Monitor" - Microsoft Internet Explorer

ファイル(F) 編集(E) 表示(V) お気に入り(A) ツール(T) ヘルプ(H)

イベントモニター 開じる

レポートの表示 レポートの表示設定

表示 すべてのイベント 最新情報に更新

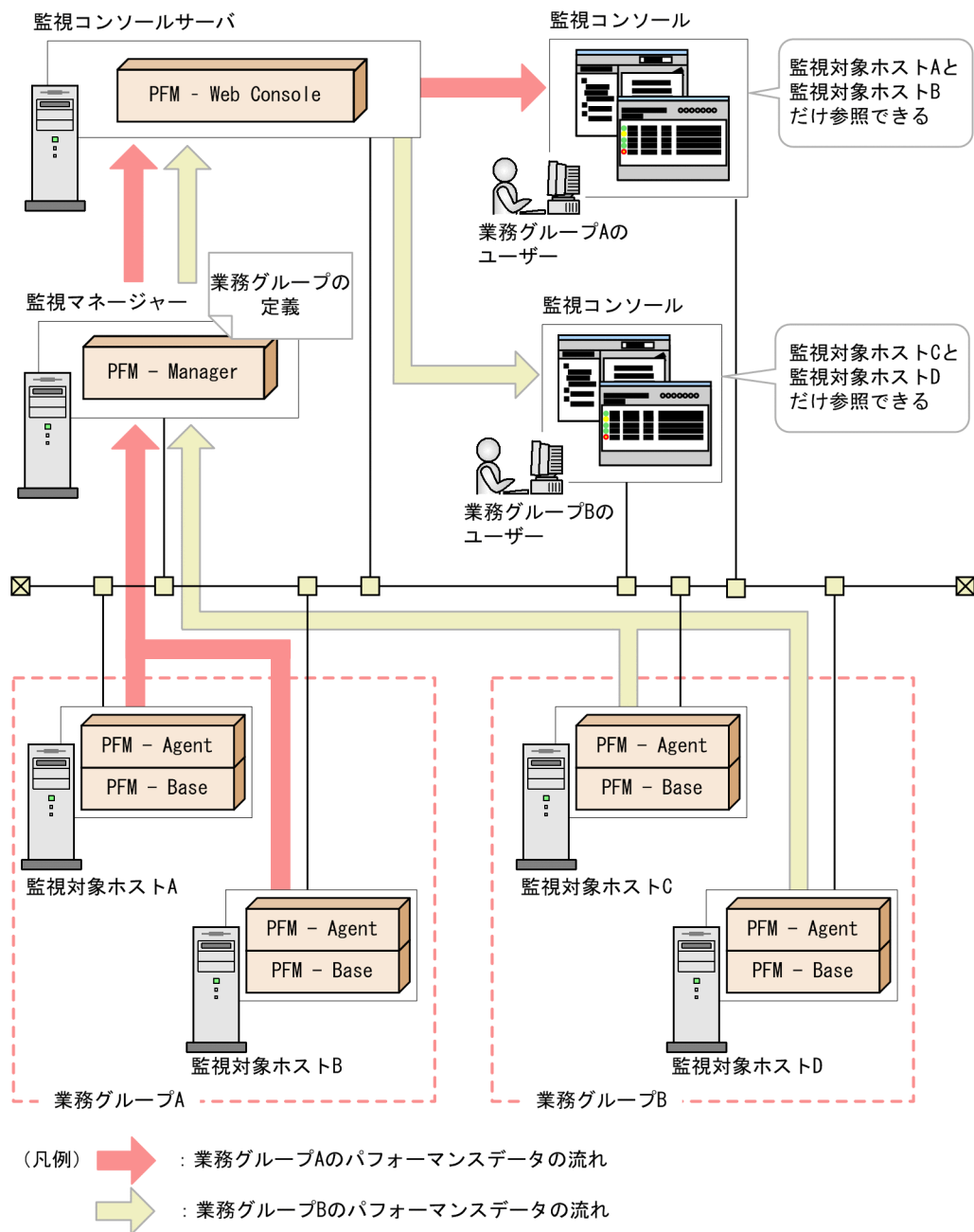
日付/時刻	エージェント	ホスト名	状態	レポート	アラーム名	アラームテーブル名	メッセージテキスト
2009 03 02 13:04:00	webapp<Windows>	webapp	OK	n/a	n/a	n/a	State change
2009 03 02 13:04:00	webapp<Windows>	webapp	OK		CPU Usage	PFM Windows Solution Alarms 8.50	CPU is at 53.5
2009 03 02 13:02:00	webapp<Windows>	webapp	Warning	n/a	n/a	n/a	State change
2009 03 02 13:02:00	webapp<Windows>	webapp	Warning		CPU Usage	PFM Windows Solution Alarms 8.50	CPU is at 89.3
2009 03 02 13:01:00	webapp<Windows>	webapp	Exception	n/a	n/a	n/a	State change
2009 03 02 13:01:00	webapp<Windows>	webapp	Exception		CPU Usage	PFM Windows Solution Alarms 8.50	CPU is at 98.4
2009 03 02 12:58:00	webapp<Windows>	webapp	Warning	n/a	n/a	n/a	State change
2009 03 02 12:58:00	webapp<Windows>	webapp	Warning		CPU Usage	PFM Windows Solution Alarms 8.50	CPU is at 81.7
2009 03 02 12:54:00	webapp<Windows>	webapp	Exception	n/a	n/a	n/a	State change
2009 03 02 12:54:00	webapp<Windows>	webapp	Exception		CPU Usage	PFM Windows Solution Alarms 8.50	CPU is at 98.0
2009 03 02 12:45:00	webapp<Windows>	webapp	OK	n/a	n/a	n/a	State change
2009 03 02 12:45:00	webapp<Windows>	webapp	OK		CPU Usage	PFM Windows Solution Alarms 8.50	CPU is at 65.4
2009 03 02 12:43:00	webapp<Windows>	webapp	Warning	n/a	n/a	n/a	State change
2009 03 02 12:43:00	webapp<Windows>	webapp	Warning		CPU Usage	PFM Windows Solution Alarms 8.50	CPU is at 83.4
2009 03 02 12:37:00	webapp<Windows>	webapp	OK	n/a	n/a	n/a	State change
2009 03 02 12:37:00	webapp<Windows>	webapp	OK		CPU Usage	PFM Windows Solution Alarms 8.50	CPU is at 57.8
2009 03 02 12:34:00	webapp<Windows>	webapp	Exception	n/a	n/a	n/a	State change
2009 03 02 12:34:00	webapp<Windows>	webapp	Exception		CPU Usage	PFM Windows Solution Alarms 8.50	CPU is at 95.6
2009 03 02 12:32:00	webapp<Windows>	webapp	Warning	n/a	n/a	n/a	State change
2009 03 02 12:32:00	webapp<Windows>	webapp	Warning		CPU Usage	PFM Windows Solution Alarms 8.50	CPU is at 87.8
2009 03 02 12:20:00	webapp<Windows>	webapp	Exception	n/a	n/a	n/a	State change
2009 03 02 12:20:00	webapp<Windows>	webapp	Exception		CPU Usage	PFM Windows Solution Alarms 8.50	CPU is at 92.0
2009 03 02 12:17:00	webapp<Windows>	webapp	Warning	n/a	n/a	n/a	State change
2009 03 02 12:17:00	webapp<Windows>	webapp	Warning		CPU Usage	PFM Windows Solution Alarms 8.50	CPU is at 83.7
2009 03 02 12:06:00	webapp<Windows>	webapp	Exception	n/a	n/a	n/a	State change

4.7 業務グループごとに監視する機能

Performance Management では、監視対象ホストを業務システムごとにグループにまとめ、それぞれのグループにアクセスできるユーザーを指定することができます。監視対象ホストをまとめたグループを業務グループと呼びます。業務グループを利用すると、稼働状況を監視するユーザーを業務システムごとに限定できるようになり、セキュリティを向上できます。これを業務グループによるアクセスコントロール機能と呼びます。

業務グループによるアクセスコントロール機能の利用例を次の図に示します。

図 4-33 業務グループによるアクセスコントロール機能の利用例



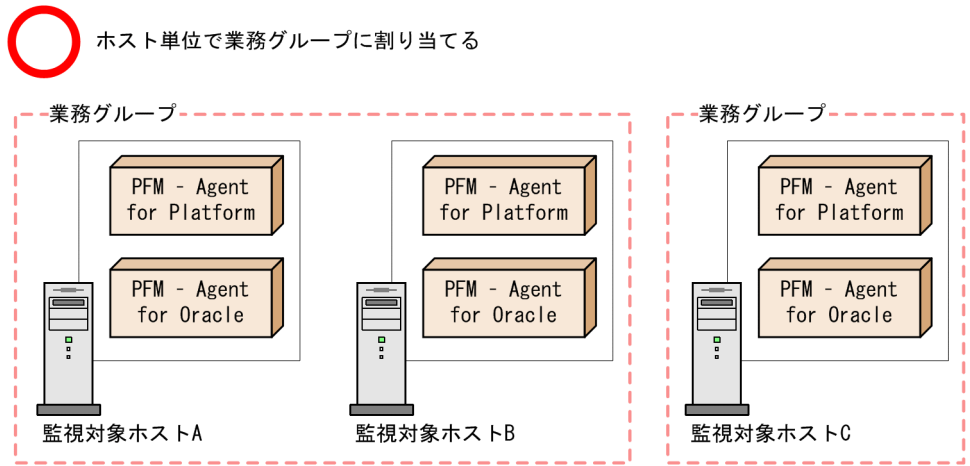
業務グループを割り当てられたユーザーが監視コンソールにログインすると、業務グループ内のエージェントだけが表示されます。ユーザーは、表示されたエージェントに対してだけ、レポートの表示などの稼働監視を実施できます。


業務グループによるアクセスコントロール機能の設定、および業務グループを割り当て

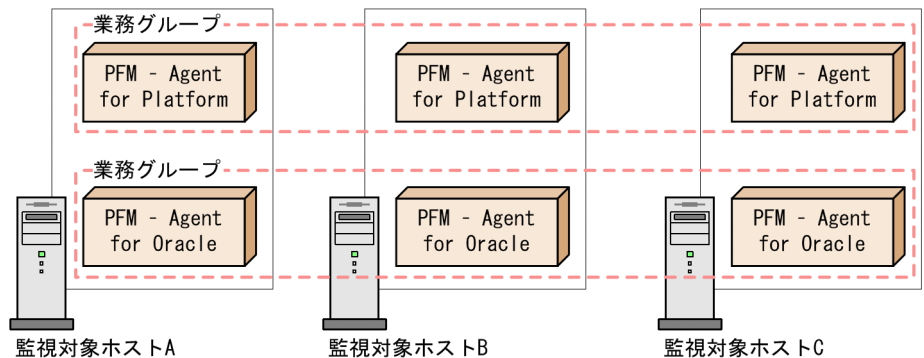
たユーザーが監視コンソールで実施できる操作の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、ユーザーアカウントと業務グループの管理について説明している章を参照してください。

なお、業務グループに割り当てるリソースは、監視対象ホスト単位で指定します。このため、同一ホストに複数のエージェントがインストールされている場合、それぞれのエージェントを別々の業務グループに割り当てることはできません。監視対象ホストに複数のエージェントがインストールされている場合の構成例を次の図に示します。

図 4-34 複数のエージェントがインストールされたホストを業務グループに割り当てる例



 エージェント単位では業務グループに割り当てられない



参考 業務グループ利用時のコマンド実行のアクセス制御

PFM・Manager および PFM・Base のコマンドは、業務グループごとに実行することはできません。ただし、オプション設定によっては、操作できるホストをローカルホストだけに制限することができます。これによって、各ユーザーが業務グループ

4. Performance Management の機能

ブ外のホストを操作することを防げます。詳細については、「4.8.4 コマンドの操作対象ホストを制限する設定」を参照してください。

PFM・Web Console のコマンドは、`jpcmkey` コマンドで作成する認証用キーファイルに指定したユーザーの権限で動作します。業務グループのユーザーが実行する場合、認証用キーファイルを作成したユーザーに割り当てられた業務グループ内の監視対象ホストに対してコマンドを実行できます。

4.8 Performance Management のコマンド

Performance Management では、効率良く運用できるようにさまざまなコマンドを用意しています。

それぞれのコマンドの概要について説明します。

なお、コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドについて説明している章を参照してください。

4.8.1 システムの設定で使用するコマンド

Performance Management では、システムの設定で使用する次のコマンドを用意しています。

- セットアップコマンド
- プロセス監視の設定で使用するコマンド
- Store データベースの設定で使用するコマンド
- Performance Management の機能の設定で使用するコマンド
- 他システムとの連携の設定で使用するコマンド
- エージェント階層の作成および編集で使用するコマンド
- 業務グループの作成および編集で使用するコマンド

なお、セットアップコマンドおよび Store データベースの設定で使用するコマンドの一部は、非対話形式で実行できます。非対話形式を使用すると、ユーザーの応答を求めないで、オプションの指定や定義ファイルの読み込みで代替して処理を続行できます。多数の監視対象をセットアップしたい場合などに活用できます。

(1) セットアップコマンド

セットアップコマンドには、次の種類があります。

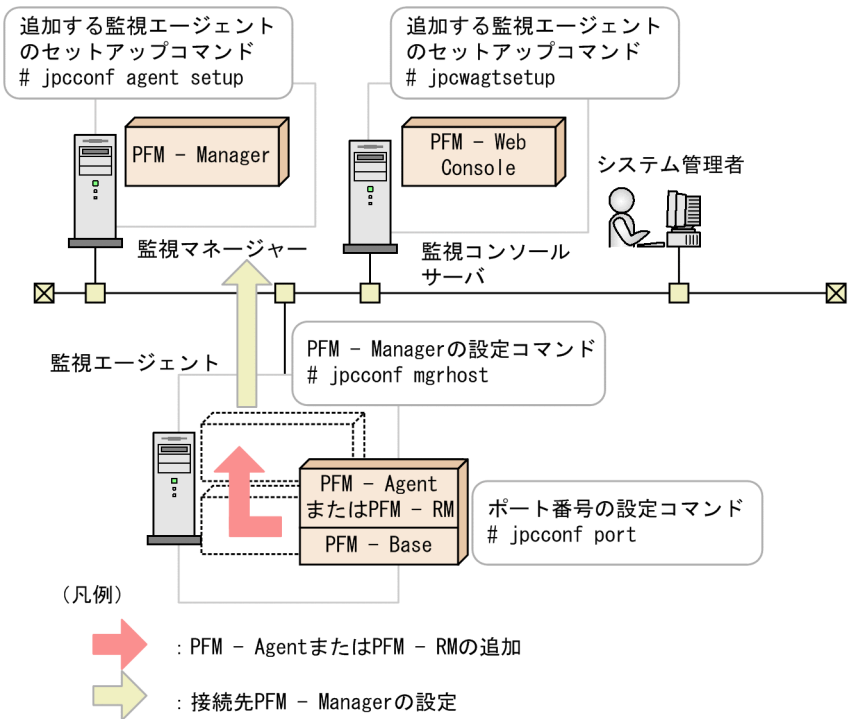
- セットアップで使用するコマンド
- PFM - RM の監視対象の設定で使用するコマンド
- インスタンス環境の構築で使用するコマンド
- クラスタシステムの設定で使用するコマンド

(a) セットアップで使用するコマンド

セットアップで使用するコマンドには、PFM - Agent または PFM - RM の接続先 PFM - Manager を設定したり、PFM - Agent または PFM - RM を追加したときのセットアップをしたり、Performance Management で使用するポート番号を設定したりするコマンドがあります。

セットアップで使用するコマンドの概要を次の図に示します。

図 4-35 セットアップで使用するコマンドの概要



セットアップするための主なコマンドを次に示します。

表 4-10 セットアップで使用する主なコマンド一覧

コマンド	説明
jpccconf mgrhost	接続先の PFM - Manager を表示、設定、および変更するコマンド
jpccconf agent setup	新しい PFM - Agent または PFM - RM を追加 セットアップするコマンド
jpccwagtsetup	新しい PFM - Agent または PFM - RM を PFM - Web Console に追加セットアップする コマンド
jpccconf port	Performance Management で使用するポート 番号を表示および設定するコマンド
jpccconf host	Performance Management システムでの監視 ホスト名を変更、または監視ホスト名の取得 方法を変更するコマンド

(b) PFM - RM の監視対象の設定で使用するコマンド

PFM - RM の監視対象の設定で使用するコマンドには、PFM - RM の監視対象を追加、削除、および表示するためのコマンドなどがあります。

PFM・RM の監視対象の設定で使用する主なコマンドを次に示します。

表 4-11 PFM・RM の監視対象の設定で使用する主なコマンド一覧

コマンド	説明
jpccnf target setup	PFM・RM の監視対象を追加するコマンド
jpccnf target unsetup	PFM・RM の監視対象を削除するコマンド
jpccnf target list	PFM・RM の監視対象の一覧を表示するコマンド
jpccnf target display	PFM・RM の監視対象の設定を表示するコマンド

(c) インスタンス環境の構築で使用するコマンド

インスタンス環境の構築で使用するコマンドには、インスタンス環境を作成、削除、および表示するためのコマンドなどがあります。

インスタンス環境の構築で使用する主なコマンドを次に示します。

表 4-12 インスタンス環境の構築で使用する主なコマンド一覧

コマンド	説明
jpccnf inst setup	インスタンス環境を作成するコマンド
jpccnf inst unsetup	インスタンス環境を削除するコマンド
jpccnf inst list	インスタンス環境を表示するコマンド

(d) クラスタシステムの設定で使用するコマンド

クラスタシステムの設定で使用するコマンドには、論理ホスト運用するときに必要なコマンドなどがあります。

クラスタシステムの設定で使用する主なコマンドを次に示します。

表 4-13 クラスタシステムの設定で使用する主なコマンド一覧

コマンド	説明
jpccnf ha	クラスタシステムで論理ホスト運用するときに使用するコマンド

(2) プロセス監視の設定で使用するコマンド

プロセス監視の設定で使用するコマンドには、アプリケーション定義を追加、削除、出力、および表示するためのコマンドがあります。

プロセス監視の設定で使用する主なコマンドを次に示します。

表 4-14 プロセス監視の設定で使用する主なコマンド一覧

コマンド	説明
jpccprocdef create	アプリケーション定義を作成・編集するコマンド
jpccprocdef delete	アプリケーション定義を削除するコマンド
jpccprocdef list	アプリケーション定義の定義名の一覧を表示するコマンド
jpccprocdef output	アプリケーション定義の定義内容出力するコマンド

(3) Store データベースの設定で使用するコマンド

Store データベースの設定で使用するコマンドには、Store データベースのバージョンを変更するコマンドなどがあります。

Store データベースの設定で使用する主なコマンドを次に示します。

表 4-15 Store データベースの設定で使用する主なコマンド一覧

コマンド	説明
jpccconf db vrset	Store データベースのバージョンを変更するコマンド
jpccconf db display	Store サービスの状態や Store バージョンを表示するコマンド
jpccconf db define	Store サービスの設定を変更および表示するコマンド

(4) Performance Management の機能の設定で使用するコマンド

Performance Management の機能を設定するときに使用するコマンドには、ステータス管理機能またはヘルスチェック機能の有効 / 無効の設定や情報を確認するコマンドなどがあります。

Performance Management の機能を設定するときに使用する主なコマンドを次に示します。

表 4-16 Performance Management の機能を設定するときに使用する主なコマンド一覧

コマンド	説明
jpccconf stat	ステータス管理機能の有効 / 無効の設定や情報を確認するコマンド
jpccconf hc	ヘルスチェック機能の有効 / 無効の設定や情報を確認するコマンド
jpccconf prodname	プロダクト名表示機能の有効 / 無効の設定や情報を確認するコマンド

(5) 他システムとの連携の設定で使用するコマンド

他システムとの連携を設定するときに使用するコマンドには、JP1/IM との連携機能を有効または無効にするコマンドなどがあります。

他システムとの連携を設定するときに使用する主なコマンドを次に示します。

表 4-17 他システムとの連携を設定するときに使用する主なコマンド一覧

コマンド	説明
jpconf im	JP1/IM との連携機能を有効または無効にするコマンド
jpconf ov	NNM との連携機能を有効または無効にするコマンド

(6) エージェント階層の作成および編集で使用するコマンド

エージェント階層の作成および編集で使用するコマンドには、エージェント階層の定義をファイルにエクスポートするコマンドと、エージェント階層の定義をファイルからインポートするコマンドがあります。

エージェント階層の作成および編集で使用するコマンドを次に示します。

表 4-18 エージェント階層の作成および編集で使用するコマンド一覧

コマンド	説明
jpconf agtree export	エージェント階層の定義をファイルにエクスポートするコマンド
jpconf agtree import	エージェント階層の定義をファイルからインポートするコマンド

(7) 業務グループの作成および編集で使用するコマンド

業務グループの作成および編集で使用するコマンドには、業務グループの定義情報をエクスポート・インポートするコマンドなどがあります。

業務グループの作成および編集で使用するコマンドを次に示します。

表 4-19 業務グループの作成および編集で使用するコマンド

コマンド	説明
jpconf bgdef check	業務グループ定義ファイルの内容を検証するコマンド
jpconf bgdef delete	業務グループの定義情報を削除するコマンド
jpconf bgdef display	業務グループの定義情報を表示するコマンド
jpconf bgdef export	業務グループの定義情報をファイルにエクスポートするコマンド

コマンド	説明
jpccnf bgdef import	業務グループの定義情報をファイルからインポートするコマンド
jpccnf bgdef list	業務グループ名の一覧を表示するコマンド

4.8.2 システムの運用で使用するコマンド

Performance Management では、システムの運用で使用する次のコマンドを用意しています。

- サービス管理コマンド
- アラーム管理コマンド
- レポート管理コマンド
- Store データベース管理コマンド
- 資料採取コマンド
- 他システムと連携した運用で使用するコマンド

(1) サービス管理コマンド

Performance Management は、サービスの状態を確認するためのコマンドを用意しています。

Performance Management のサービスを管理する主なコマンドを次に示します。

表 4-20 Performance Management のサービスを管理する主なコマンド一覧

コマンド	説明
jpctool service list	Performance Management のサービスの構成と状態を確認するコマンド
jpctool service delete	Performance Management のサービス情報を削除するコマンド
jpctool service register	Performance Management のサービス情報を再登録するコマンド
jpctool service sync	PFM・Manager と PFM・Web Console に登録されているサービス情報を同期するコマンド

(2) アラーム管理コマンド

アラーム管理コマンドには、監視対象プログラムがしきい値を超えたときに発行するアラームイベントの設定をするためのコマンドなどがあります。

アラームを設定する主なコマンドを次に示します。

表 4-21 アラームを設定する主なコマンド一覧

コマンド	説明
jpctool alarm	Performance Management のアラームを設定するコマンド

(3) レポート管理コマンド

レポート管理コマンドには、監視対象プログラムから収集したデータを基に稼働監視レポートを作成するためのコマンドなどがあります。

レポートを設定する主なコマンドを次に示します。

表 4-22 レポートを設定する主なコマンド一覧

コマンド	説明
jpctrdef	Performance Management のレポートを設定するコマンド
jpctrpt	稼働レポートを CSV または HTML 形式でバッチ出力するためのコマンド

(4) Store データベース管理コマンド

Store データベース管理コマンドには、Store データベースのセットアップやアンセットアップの操作をするためのコマンドなどがあります。

Store データベースを管理する主なコマンドを次に示します。

表 4-23 Store データベースを管理する主なコマンド一覧

コマンド	説明
jpctool db backup	データをバックアップするコマンド
jpctool db clear	データを消去するコマンド
jpctool db dump	収集したパフォーマンスデータをテキストファイルに出力するコマンド
jpctool db restore	データをリストアするコマンド
jpctool db import	Store バージョン 2.0 使用時に、Store データベースにバックアップデータをインポートするコマンド
jpctool db dmconvert	Store バージョン 2.0 使用時に、指定されたバックアップディレクトリのバックアップデータのデータモデルをバージョンアップするコマンド
jpccasrec	Store データベースの記録方法に関する定義を変更したり出力したりするコマンド

コマンド	説明
jpcaspsv	Store データベースの保存条件に関する定義を変更したり出力したりするコマンド

(5) 資料採取コマンド

資料採取コマンドには、トラブルの発生時に採取が必要な資料を一括して採取するコマンドなどがあります。

トラブルシュート用の資料の採取に使う主なコマンドを次に示します。

表 4-24 資料採取に使用する主なコマンド一覧

コマンド	説明
jpcras	PFM・Manager, PFM・Agent, PFM・RM, および PFM・Base のトラブルシュート資料を採取するコマンド
jpcwras	PFM・Web Console のトラブルシュート資料を採取するコマンド

(6) 他システムと連携して運用するときに使用するコマンド

他システムと連携して運用するときに使用するコマンドには、JP1/IM との連携機能を有効または無効にするコマンドなどがあります。

他システムと連携して運用するときに使用する主なコマンドを次に示します。

表 4-25 他システムと連携して運用するときに使用する主なコマンド一覧

コマンド	説明
jpcimevt	JP1/IM に登録したイベントを送信するコマンド

4.8.3 システムの起動・停止で使用するコマンド

Performance Management のシステムを起動・停止するときに使用する主なコマンドを次に示します。

表 4-26 Performance Management のシステムを起動・停止するときに使用する主なコマンド一覧

コマンド	説明
jpcspm start	Performance Management のサービスを起動するコマンド
jpcspm stop	Performance Management のサービスを停止するコマンド
jpcwstart	PFM・Web Console のサービスを起動するコマンド

コマンド	説明
jpcwstop	PFM - Web Console のサービスを停止するコマンド

4.8.4 コマンドの操作対象ホストを制限する設定

PFM - Base のコマンドには、ほかの PFM - Manager, PFM - Agent, および PFM - RM ホストを対象に操作できるコマンドがありますが、セキュアな運用を保つため、各エージェントホストからほかのエージェントホストは操作させたくない場合もあります。このような場合は、オプションの設定によってエージェントホスト間の操作を禁止し、操作対象を自エージェントホストに限定することができます。各エージェントホストからほかのエージェントホストを操作させたくない場合には、次に示すオプションを有効にすることを検討してください。

- Agent ホストリモート操作制限オプション
- Agent 間直接情報参照抑止オプション

オプションごとの対象コマンドと、オプションを有効にした場合の制限内容を次の表に示します。

オプション	対象コマンド	制限内容
Agent ホストリモート操作制限オプション	<ul style="list-style-type: none"> • jpcras • jpctool db backup • jpctool db dump • jpctool service list (-stat オプションなし) 	対象コマンドをエージェントホストで実行する場合、ほかのエージェントホストに対しては実行できないようにする。なお、このオプションを有効にしても、PFM - Manager ホストで対象コマンドを実行する場合、すべてのホストに対して実行できる状態は保たれる。
Agent 間直接情報参照抑止オプション	jpctool service list (-stat オプションあり)	対象コマンドが実行されても、このオプションが有効になっているリモートホストの情報は表示されないようにする。

設定方法の詳細については、「5.4.11 Agent ホストリモート操作制限オプションおよび Agent 間直接情報参照抑止オプションの設定」(Windows の場合)または「6.4.10 Agent ホストリモート操作制限オプションおよび Agent 間直接情報参照抑止オプションの設定」(UNIX の場合)を参照してください。

4.9 注意事項

Performance Management を使用するときの注意事項を次に示します。

4.9.1 監視対象マシンの時刻設定に関する注意事項

監視対象マシンの時刻設定に関する注意事項を次に示します。

- 時刻設定を変更する前に、Performance Management のサービスをすべて停止してください。時刻設定を変更したあと、Performance Management のサービスを再起動してください。
- 現在時刻より過去の時刻に変更した場合、変更後の時刻から、データの収集および履歴情報が保存されます。変更前の同じ日時に収集されたデータおよび履歴情報がある場合、上書きされます。例えば、現在時刻が 2006 年 7 月 5 日 12:00 であるとき、現在時刻を過去の日時である 2006 年 7 月 1 日 00:00 に変更すると、7 月 1 日 00:00 から 7 月 5 日 12:00 に収集されたデータおよび履歴情報は上書きされます。変更前の同じ日時に収集されたデータおよび履歴情報を保存しておきたい場合は、時刻設定を変更する前に `jpctool db backup` コマンドを実行して、データおよび履歴情報をバックアップしておいてください。
- 現在時刻より未来の時刻に変更した場合、変更前の時刻から変更後の時刻までの履歴情報は保存されません。
- 現在時刻より未来の時刻に変更した場合、パフォーマンスデータの保存期間の関係でデータが削除されてしまうおそれがあります。このため、未来の時刻に変更する前に `jpctool db backup` コマンドや `jpctool db dump` コマンドでデータをバックアップしておいてください。
- イベント履歴はイベント発行時刻の順番で表示されます。そのため、マシンの時刻設定を現在時刻より過去の時刻に変更した場合、過去のイベント履歴のログに現在のイベントが挿入されて表示されます。
- 履歴レポートを表示するときに指定する表示期間は PFM - Web Console の時刻設定が使用されます。Performance Management の各プログラム間で、時刻の設定を同期させる必要はありません。しかし、パフォーマンスデータは PFM - Agent や PFM - RM 側で収集・保存するため、PFM - Web Console と残りの Performance Management のプログラム間で時刻設定が異なる場合、表示しようとする範囲のパフォーマンスデータが PFM - Agent や PFM - RM に存在しないと、正しく表示できないことがあります。この場合、各プログラム間の時刻のずれを考慮して履歴レポートの表示範囲を設定してください。また、各プログラム間でタイムゾーンが異なる場合には、タイムゾーンの時差を考慮の上、履歴レポートの表示範囲を設定してください。

4.9.2 日本語環境に関する注意事項

Performance Management を運用する際に、使用できない文字と文字列の検索についての注意事項を次に示します。

(1) 使用できない文字について

Performance Management では、次に示す全角文字を使用できません。

- ・ ¢, ￠, ㄱ, ㄴ, ㄷ, ㄹ, ㅁ, ㅂ, ㅅ, ㅇ, ㅈ, ㅊ, ㅋ, ㆁ, ㆁ, ㆁ
- ・ 機種に依存する文字（丸付き数字, ローマ数字, JIS第1・第2水準以外の漢字など）

使用できない文字を使用した場合、アラームやレポートは正常に実行されません。また、使用できない文字は、「?」や解読できない文字で表示される場合があります。

(2) 文字列の検索について

文字列を検索する場合は、「*」や「?」のワイルドカードを使用してください。

「<」や「>」などの不等号は、検索対象のデータベースが起動されているホストの文字コード種別に依存するため、使用すると正しく検索できないことがあります。したがって、検索条件に「<」や「>」などの不等号を使用しないでください。

4.9.3 日本語版と英語版の混在環境での注意事項

Performance Management プログラムの日本語版と英語版を混在して使用する場合の注意事項について説明します。

(1) PFM - Manager, および PFM - Agent や PFM - RM に関する注意事項

PFM - Manager, および PFM - Agent や PFM - RM の日本語版と英語版が混在している場合、または Performance Management システム内で使用している LANG 環境変数の言語種別に日本語と英語が混在している場合、組み合わせによっては制限が発生する場合があります。

組み合わせによる制限の有無を次に示します。

PFM - Manager	PFM - Agent または PFM - RM	制限の有無
日本語版	日本語版	×
	英語版	
英語版	日本語版	
	英語版	

(凡例)

：制限あり

×：制限なし

制限がある場合、次の項目については、ASCII 7 ビットコードの範囲で表示、定義するようにしてください。日本語で定義すると、PFM - Web Console の Web ブラウザで正しく表示されない、またはプログラムが正しく動作しないおそれがあります。

- レポート画面およびレポートをエクスポートした CSV/HTML ファイルに表示されるパフォーマンスデータ（例：プロセス名、デバイス ID など）
- アラームのメッセージテキスト
- アラームの条件式
- アラームのアクション定義のコマンド名
- アラームのアクション定義のコマンド引数
- Store データベースへのデータ記録方法の LOGIF（条件式）

注意

Performance Management と連携する製品の日本語版と英語版の混在環境では、それらの製品の注意事項および制限事項を確認してください。

4.9.4 一時ファイルに関する注意事項

（１）一時ファイル出力先ディレクトリ

PFM - Web Console でリアルタイムレポートまたは履歴レポートを表示したり、イベント履歴を表示したり、ODBC ドライバーによって履歴データを取得したりした場合、Agent Collector サービス、Remote Monitor Collector サービス、Agent Store サービス、Remote Monitor Store サービス、および Master Store サービスは、下記のディレクトリに一時ファイルを作成します。

Windows の場合

システム環境変数 TMP に設定されているディレクトリ。

UNIX の場合

環境変数 TMPDIR に設定されているディレクトリ。

TMPDIR が設定されていなければ、/var/tmp または /tmp ディレクトリ。

上記のディレクトリが存在するディスクに空き容量が不足している場合、Agent Collector サービス、Remote Monitor Collector サービス、Agent Store サービス、Remote Monitor Store サービス、または Master Store サービスから KAVE00105-E メッセージが出力されることがあります。

なお、一時ファイル保存先ディレクトリに新たな空き容量を確保することが困難な場合、下記の環境変数を設定することで、一時ファイルが作成されるディレクトリを変更できます。

環境変数名	説明
JPC_TMPDIR	一時ファイルの出力先ディレクトリパスを指定します。

注意

Windows の場合は、JPC_TMPDIR 環境変数をシステム環境変数に設定してください。UNIX で自動起動スクリプトによる自動起動の設定をしている場合は、下記の

手順に従って自動起動スクリプトファイルを編集してください。

1. root ユーザーでログインする。
2. 自動起動スクリプトファイル `jpc_start` を `vi` などのエディターで開き、下記のような行を見つける。

```
export PATH SHLIB_PATH LD_LIBRARY_PATH LIBPATH HCCLIBCNF
```

3. 手順 2 で見つけた行を下記のように変更する。

```
JPC_TMPDIR=一時ファイル出力先ディレクトリ
```

```
export PATH SHLIB_PATH LD_LIBRARY_PATH LIBPATH HCCLIBCNF
JPC_TMPDIR
```

注 一時ファイル出力先ディレクトリには十分な空き容量のあるディスク上のディレクトリへのパスを指定してください。

4. システムを再起動する。

(2) 一時ファイルサイズの見積もり

レポート表示や、ODBC ドライバーによる履歴データの取得を行う際に作成される一時ファイルのサイズは、下記の式で計算できます。一時ファイルサイズの上限は 2 ギガバイトであるため、下記の見積もりに従ってレポートや ODBC ドライバーに指定する条件を調整してください。

指定フィールドサイズの合計 * インスタンス数 * レコード数 [バイト]

(a) PA レコード以外の場合

指定フィールドサイズの合計は、レポートや ODBC ドライバーに指定したフィールドの合計サイズとなります。

PFM - Agent for Platform(Windows) の PD_PDI レコードでの計算例

次の条件で履歴レポートを表示する場合、計算式は下記ようになります。

- "Date and Time" フィールド (char(6) 型 : 6 バイト) を指定 ¹
- ODBC キーフィールドを指定 ¹
 - "Program" フィールド (string 型 : 256 バイト)
 - "PID" フィールド (ulong 型 : 4 バイト)
- 上記以外に指定したフィールド
 - "CPU %" フィールド (float 型 : 4 バイト)
 - "User" フィールド (string 型 : 36 バイト)
 - "Date" フィールド (char(3) 型 : 6 バイト) ²
- 1 分ごとに収集されるインスタンス数 : 200 インスタンス
- 収集した期間 (要求するレコード数)
 - 1 日分の分単位レコードをレポート表示する場合、60 分 * 24 時間で 1440 レコードとなります。

計算式 : $(6 + 256 + 4 + 4 + 36 + 6) * 200 * 1440 = 89,856,000$ [バイト]

注 1

リアルタイムまたは履歴レポート表示時は、"Date and Time" フィールドと ODBC キーフィールドはレポート表示に含めなくても必ず取得されます。ODBC ドライバーを使用したデータ取得の場合は、条件に指定したフィールドだけが取得されます。

注 2

Store データベースに記録されるときに自動追加される "Date" フィールドおよび "Time" フィールドは、履歴レポートの場合はそれぞれ 6 バイト、ODBC ドライバーによるデータ取得の場合はそれぞれ 3 バイトとして計算してください。それ以外のフィールドは、各 PFM・Agent または PFM・RM マニュアル記載の型に応じたサイズで計算してください。

インスタンス数はレコード収集ごとに変動するため、上記は目安となります。各フィールドのデータ型、各データ型のサイズおよび ODBC キーフィールドについては、各 PFM・Agent または PFM・RM マニュアルのレコードについて説明している章を参照してください。

(b) PA レコードの場合

< 指定フィールドサイズの合計 > を 4409、< インスタンス数 > を 1、< レコード数 > を指定期間に発生したイベント数として計算してください。

補足

一時ファイルのサイズは、レポートで指定したレコードのインスタンス数やレコード数に比例します。このため、一時ファイルのサイズが 2 ギガバイトを超えそうな場合は、PFM・Web Console の履歴レポートやイベント履歴表示時に指定する [レコード数] で、表示するデータ量を調整することもできます。履歴レポートの [レコード数] には、上記の計算式の < インスタンス数 > * < レコード数 > に該当する値を指定してください。

注意

UNIX の場合、ulimit コマンドによるファイルサイズ制限によって、一時ファイルサイズの上限が 2 ギガバイト未満となる場合があります。上記見積もりによって一時ファイルサイズが 2 ギガバイトを超えない場合でも、レポート表示中などに KAVE00103-E メッセージが出力された場合は、ulimit コマンドでファイルサイズの上限值を確認してください。

4.9.5 Windows Server 2008 を利用する場合の注意事項

(1) Performance Management で管理者特権が必要な操作

Windows Server 2008 では、UAC 機能が有効の場合に、管理者特権が必要な操作があります。管理者特権が必要な操作をする場合は、操作前に特権昇格が必要になります。管理者特権が必要な操作と操作ごとの実行可否を次の表に示します。

表 4-27 管理者特権が必要な操作と操作ごとの実行可否

操作	管理者特権 の要否	UAC 機能有効時の 実行可否		UAC 機能無効時の 実行可否	
		管理ユー ザー権限	一般ユー ザー権限	管理ユー ザー権限	一般ユー ザー権限
インストール, アンインストール	要	1	1		×
Administrators 権限が 必要なコマンド	要	2	2		×
Administrators 権限が 不要なコマンド	否				
SCM からのサービス起 動, 停止	要	1	1		×

(凡例)

：実行できる

×：実行できない

注 1 UAC ポップアップで特権昇格が必要

注 2 Performance Management 管理者コンソールから実行する必要がある

(2) Performance Management 管理者コンソールの概要

Performance Management では、実行権限に管理者権限が必要なコマンド（管理者用コマンド）があります。Performance Management 管理者コンソールは、管理者用コマンドを実行するためのコマンドプロンプトです。

Windows のユーザーアカウント制御（UAC）が有効な場合は、管理者コンソールからコマンドを実行してください。

起動方法

- PFM - Base または PFM - Manager の場合
[スタート] メニューから [プログラム] - [Performance Management] - [管理者コンソール] を選択すると起動します。
- PFM - Web Console の場合
[スタート] メニューから [プログラム] - [Performance Management] - [管理者コンソール (Web Console)] を選択すると起動します。

停止方法

コマンドプロンプト上で exit コマンドを入力、または Close ボタン（×）をクリックすると停止します。

(3) Performance Management 固有のフォルダやファイルの作成について

Performance Management 固有のフォルダやファイルを作成する場合、UAC 機能が動作するフォルダへ作成しないでください。

(4) WRP (Windows リソース保護) について

WRP によるリソース保護が有効になっているフォルダ配下のリソースは削除および変更できません。WRP が設定されているフォルダ配下に、フォルダやフォルダの記録先を設定しないでください。

(5) Windows Defender への対応について

Windows Defender の機能であるソフトウェアエクスプローラで、未分類のプログラムに対して警告が出る場合があります。

なお、PFM - Manager のインストール時または PFM - Manager への PFM - Agent や PFM - RM の追加セットアップをする場合、Windows Defender の機能によって警告が出力されることがあります。このため、Windows Defender の機能をオフにしてください。または、PFM - Manager をインストールするフォルダを Windows Defender の監査対象から外してください。

(6) BackupOperators 権限が必要なコマンドについて

Windows Server 2008 では、BackupOperators グループに所属しているユーザーは、BackupOperators 権限が必要なコマンドを実行できます。

5

インストールとセットアップ （Windows の場合）

この章では、Windows の場合の Performance Management のインストールおよびセットアップ方法について説明します。

5.1 インストールとセットアップ

5.2 アンインストールとアンセットアップ

5.3 Performance Management のシステム構成の変更

5.4 Performance Management の運用方式の変更

5.5 Web ブラウザでマニュアルを参照するための設定

5.1 インストールとセットアップ

ここでは、Performance Management プログラムをインストールおよびセットアップする手順を示します。

5.1.1 インストールとセットアップの前に

Performance Management をインストールおよびセットアップする前に確認しておくことを説明します。なお、Windows Server 2008 に関する注意事項については、「4.9.5 Windows Server 2008 を利用する場合の注意事項」を参照してください。

(1) 前提 OS

Performance Management プログラムが動作する OS を次の表に示します。

表 5-1 前提 OS (Windows の場合)

OS 名	PFM - Manager	PFM - Web Console	PFM - Base
Windows Server 2003			
Windows Server 2008			

(凡例)

: 動作する

PFM - Agent または PFM - RM の前提 OS は、それぞれ異なります。詳細については、各 PFM - Agent または PFM - RM マニュアルを参照してください。

(2) システム構成の検討

PFM - Manager に接続する PFM - Agent または PFM - RM の数を検討します。見積もり方法の詳細については、「付録 A.1 システム構成」を参照してください。

(3) システム見積もり

Performance Management システムで必要なリソースの見積もりや設定を行います。見積もり方法の詳細については、「付録 C システム見積もり」と各 PFM - Agent マニュアルを参照してください。

(4) ネットワーク環境の設定

Performance Management が動作するためのネットワーク環境について説明します。

(a) IP アドレスの設定

Performance Management システムのすべてのホストは、ホスト名で IP アドレスを解

決できる環境を設定してください。IP アドレスを解決できない環境では、Performance Management をインストールできません。

監視ホスト名 (Performance Management システムのホスト名として使用する名前) には、実ホスト名またはエイリアス名を使用できます。

- 監視ホスト名に実ホスト名を使用している場合
Windows システムでは `hostname` コマンド、UNIX システムでは `uname -n` コマンドを実行して確認したホスト名で、IP アドレスを解決できるように環境を設定してください。
なお、UNIX システムでは、`hostname` コマンドで取得するホスト名を使用することもできます。詳細については、「6.3.3 Performance Management システムでのホスト名の変更」を参照してください。
- 監視ホスト名にエイリアス名を使用している場合
設定しているエイリアス名で IP アドレスを解決できるように環境を設定してください。

監視ホスト名の設定については、「5.3.3 Performance Management システムでのホスト名の変更」を参照してください。

ホスト名と IP アドレスは、次のどれかの方法で設定してください。

- `hosts` ファイル
- DNS (Domain Name System)
- Performance Management のホスト情報設定ファイル
 - `jpchosts` ファイル (PFM - Manager, PFM - Agent, PFM - RM, および PFM - Base の場合)
 - `config.xml` ファイル (PFM - Web Console の場合)

注意

- Performance Management は、DNS 環境でも運用できますが、FQDN 形式のホスト名には対応していません。このため、監視ホスト名は、ドメイン名を除いて指定してください。
- 複数の LAN 環境で使用する場合は、`jpchosts` ファイルで IP アドレスを設定してください。詳細については、「5.3.1 ネットワーク構成の変更」を参照してください。
- Performance Management は、DHCP による動的な IP アドレスが割り振られているホスト上では運用できません。Performance Management を導入するすべてのホストに、固定の IP アドレスを設定してください。
- IP アドレスにループバックアドレスは設定できません。
- PFM - Manager ホストにホスト名を二つ以上設定している場合、システム上の PFM - Agent または PFM - RM ホストで `jpccconf mgrhost define` コマンドにより設定する接続先 PFM - Manager ホストのホスト名は、次のようにする必要があります。

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

PFM - Manager の監視ホスト名に実ホスト名を使用している場合

Windows システムでは `hostname` コマンド, UNIX システムでは `uname -n` コマンドを実行して確認したホスト名

PFM - Manager の監視ホスト名にエイリアス名を使用している場合
設定しているエイリアス名

(b) ポート番号の設定

Performance Management プログラムのサービスは, デフォルトで次の表に示すポート番号が割り当てられています。これ以外のサービスまたはプログラムに対しては, サービスを起動するたびに, そのときシステムで使用されていないポート番号が自動的に割り当てられます。また, ファイアウォール環境で, Performance Management を使用するときには, ポート番号を固定してください。ポート番号の固定の手順は, 「5.3.1 (1) (b) ポート番号を設定する」を参照してください。

表 5-2 デフォルトのポート番号と Performance Management プログラムのサービス
(Windows の場合)

サービス説明	サービス名	パラメーター	ポート番号	備考
サービス構成 情報管理機能	Name Server	jplpcnsvr	22285	PFM - Manager の Name Server サービスで使用する ポート番号。Performance Management のすべてのホス トで設定される。
NNM 連携機 能	NNM Object Manager	jplpcovsvr	22292	PFM - Manager および PFM - Base の NNM 連携機能で, マップマネージャーとオブ ジェクトマネージャーの間の 通信で使用するポート番号。 PFM - Manager または PFM - Base がインストールされてい るホストで設定される。
サービス状態 管理機能	Status Server	jplpcstatsv r	22350	PFM - Manager および PFM - Base の Status Server サービ スで使用するポート番号。 PFM - Manager または PFM - Base がインストールされてい るホストで設定される。
監視コンソ ール通信機能	View Server	jplpcvsvr	22286	PFM - Manager の View Server サービスで使用する ポート番号。PFM - Manager ホストで設定される。
Web サービス 機能	Web Service	-	20358	PFM - Web Console の Web Service サービスが使用する ポート番号。

サービス説明	サービス名	パラメーター	ポート番号	備考
Web コンテナ 機能	Web Console	-	20359 20360	PFM・Web Console の Web Console サービスが使用する ポート番号。

(凡例)

- : 該当なし

これらの Performance Management が使用するポート番号で通信できるように、ネットワークを設定してください。

(5) インストールに必要な OS ユーザー権限について

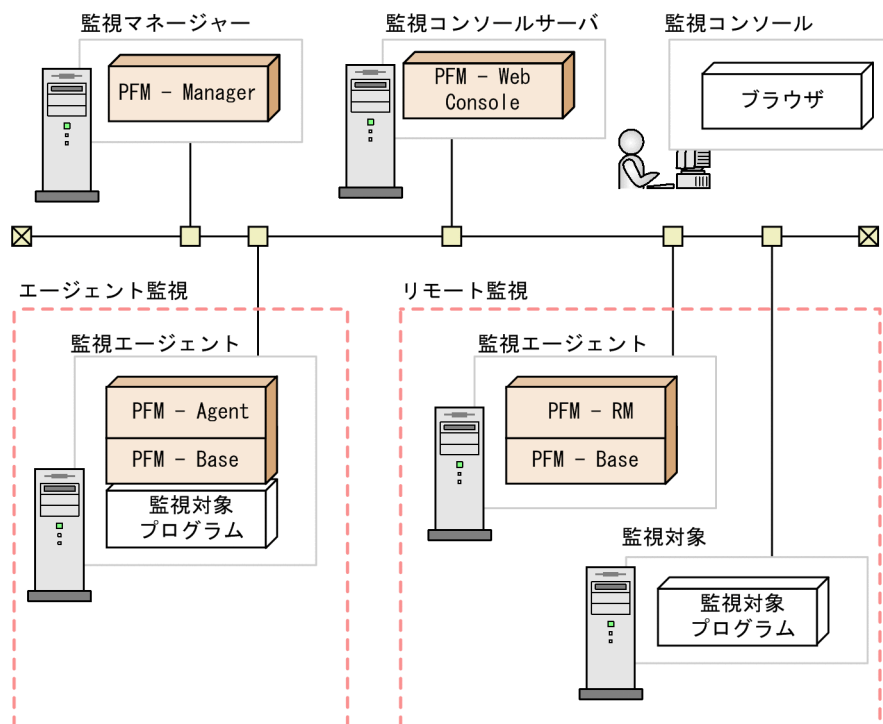
Performance Management プログラムをインストールするときは、必ず、OS の Administrators 権限を持つアカウントで実行してください。

(6) 前提プログラム



ここでは、Performance Management をインストールする場合に必要な前提プログラムを説明します。前提プログラムの構成図を次に示します。

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

図 5-1 プログラムの構成図



(凡例)

-  : Performance Managementが提供するプログラム
-  : 必要なプログラム

注意

- ・ アラームイベントが発生したときに、E メールでシステム管理者に通知する場合、E メールを送信するための SMTP サーバが必要です。詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、アラームによる稼働監視について説明している章を参照してください。
- ・ Performance Management とその他のシステムとの連携機能を使用する場合は、前提プログラムが異なる場合があります。連携機能についての詳細は、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、統合管理製品 (JP1/IM) と連携した稼働監視について説明している章、およびネットワーク管理製品 (NNM) と連携した稼働監視について説明している章を参照してください。

(a) 監視マネージャーの前提プログラム

監視マネージャーには、PFM - Manager が必要です。また、JP1 ユーザーによる統合認証を行うためには、JP1/Base が必要です。詳細については、JP1/Base マニュアルおよびマニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、ユーザーアカウントと業務グループの管理について説明している章を参照してください。

(b) 監視コンソールサーバの前提プログラム

監視コンソールサーバには、PFM・Web Console が必要です。

(c) 監視エージェントの前提プログラム

監視エージェントには、PFM・Agent または PFM・RM と、PFM・Base をインストールします。PFM・Base は PFM・Agent や PFM・RM の前提プログラムであるため、PFM・Base、PFM・Agent または PFM・RM の順にインストールしてください。

ただし、PFM・Manager と、PFM・Agent または PFM・RM を同一ホストにインストールする場合、PFM・Base は不要です。この場合、PFM・Agent または PFM・RM の前提プログラムは PFM・Manager になるため、PFM・Manager、PFM・Agent または PFM・RM の順にインストールしてください。

監視対象プログラムは、PFM・Agent または PFM・RM ごとに異なります。各 PFM・Agent または PFM・RM の監視対象プログラムについては、各 PFM・Agent または PFM・RM マニュアルを参照してください。

(d) 監視コンソールの前提プログラム

Performance Management で収集した稼働監視データを確認したり、Performance Management の設定を変更したりするためには、監視コンソールに Web ブラウザが必要です。

監視コンソールが Windows システムの場合に、Performance Management の前提となる Web ブラウザを次に示します。

- Internet Explorer 6.0 以降、Firefox(R) 2.0.x または Firefox 3

PFM・Web Console のバージョンによってサポートする Web ブラウザが異なります。詳細については、「5.1.6 監視コンソールの Web ブラウザの設定手順」を参照してください。

(7) クラスタシステムでのインストールとセットアップについて

クラスタシステムでのインストールとセットアップは、前提となるネットワーク環境やプログラム構成が、通常の構成のセットアップとは異なります。また、実行系ノードと待機系ノードでの作業が必要になります。詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

(8) 注意事項

ここでは、Performance Management をインストールおよびセットアップするときの注意事項を説明します。

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

(a) 環境変数に関する注意事項

Performance Management では JPC_HOSTNAME を環境変数として使用しているため、ユーザー独自に環境変数として設定しないでください。設定した場合は、Performance Management が正しく動作しません。

(b) 同一ホストに Performance Management プログラムを複数インストール、セットアップするときの注意事項

Performance Management は、同一ホストに次に示す Performance Management プログラムをインストールすることもできます。

- PFM - Manager
- PFM - Web Console
- PFM - Agent または PFM - RM

補足

システムの性能や信頼性を向上させるため、PFM - Manager、PFM - Web Console、PFM - Agent、および PFM - RM はそれぞれ別のホストで運用することをお勧めします。

同一ホストに Performance Management プログラムを複数インストールする場合の注意事項を次に示します。

- PFM - Manager と、PFM - Agent または PFM - RM を同一ホストにインストールする場合、PFM - Base は不要です。この場合、PFM - Manager が PFM - Agent または PFM - RM の前提製品になるため、PFM - Manager をインストールしてから PFM - Agent または PFM - RM をインストールしてください。
- PFM - Base と PFM - Manager は同一ホストにインストールできません。PFM - Base と、PFM - Agent または PFM - RM がインストールされているホストに PFM - Manager をインストールする場合は、PFM - Web Console 以外のすべての Performance Management プログラムをアンインストール後に PFM - Manager、PFM - Agent または PFM - RM の順でインストールしてください。また、PFM - Manager と、PFM - Agent または PFM - RM がインストールされているホストに PFM - Base をインストールする場合も同様に、PFM - Web Console 以外のすべての Performance Management プログラムをアンインストール後に PFM - Base、PFM - Agent または PFM - RM の順でインストールしてください。
- PFM - Manager がインストールされているホストに PFM - Agent または PFM - RM をインストールすると、PFM - Agent または PFM - RM の接続先 PFM - Manager はローカルホストの PFM - Manager になります。この場合は、PFM - Agent または PFM - RM の接続先 PFM - Manager をリモートホストの PFM - Manager に変更できません。リモートホストの PFM - Manager に接続したい場合は、インストールするホストに PFM - Manager がインストールされていないことを確認してください。
- PFM - Web Console がインストールされているホストに、Performance Management

プログラムをインストールする場合は、Web ブラウザ画面をすべて閉じてからインストールを実施してください。

- 監視ホスト名設定機能を使用している場合、同一ホスト上に 07-50 以前の PFM - Agent をインストールすることはできません。07-50 以前の PFM - Agent をインストールする場合、事前に監視ホスト名設定機能を使用しない設定に戻す (Get Host Mode ラベルに 0 を設定する) 必要があります。戻していない場合、07-50 以前の PFM - Agent のインストールに失敗することがあります。監視ホスト名の設定については、「5.3.3 Performance Management システムでのホスト名の変更」を参照してください。

(c) バージョンアップの注意事項

古いバージョンの Performance Management プログラムから、バージョンアップする場合の注意事項を次に示します。

なお、バージョンアップについての詳細は、「付録 E 移行手順と移行時の注意事項」を参照してください。

- Performance Management のプログラムをインストールするときには、ローカルホストの Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止しておいてください。なお、停止するサービスは物理ホスト上および論理ホスト上のすべてのサービスです。サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。
- PFM - Web Console を除く Performance Management のプログラムは、すでに Performance Management のプログラムがインストール済みのホストに別の Performance Management のプログラムをインストールする場合、インストールパスが一つ目のプログラムのものと同じになります。インストールパスを変更したい場合は、インストール済みの Performance Management プログラムをすべて削除し、インストールし直す必要があります。
- PFM - Base と PFM - Manager は同一ホストにインストールできません。PFM - Base と、PFM - Agent または PFM - RM がインストールされているホストに PFM - Manager をインストールする場合は、PFM - Web Console 以外のすべての Performance Management プログラムをアンインストール後に PFM - Manager、PFM - Agent または PFM - RM の順でインストールしてください。また、PFM - Manager と、PFM - Agent または PFM - RM がインストールされているホストに PFM - Base をインストールする場合も同様に、PFM - Web Console 以外のすべての Performance Management プログラムをアンインストール後に PFM - Base、PFM - Agent または PFM - RM の順でインストールしてください。
- バージョン 08-00 以降の Performance Management プログラムでは、Store サービスの実行プログラム (jpcsto.exe および stpq1pr.exe) の配置先が変更されています。PFM - Manager および PFM - Agent を 08-00 以降にバージョンアップする際に、旧配置先の Store サービスの実行プログラムは削除されます。

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

- オペレーティングシステムを Windows Server 2008 にバージョンアップする場合、Windows Server 2003 対応の Performance Management プログラムは、Windows Server 2008 上での動作を保証しないため、一度アンインストールする必要があります。バージョンアップ前に Performance Management 製品をすべてアンインストールしてからバージョンアップし、そのあとで Windows Server 2008 対応の Performance Management プログラムをインストールしてください。
- バージョンアップインストール時、既存の Store データベースを自動的にバージョンアップするため、一時的に Store データベースの格納先のディスクに Store データベースのサイズの 2 倍の容量を必要とします。バージョンアップインストールをする前に、Store データベースの格納先のディスク空き容量が十分かどうか確認してください。
必要な空き容量は、現在の Store データベースの合計サイズを基準に考慮してください。例えば、現在の Store データベースの合計サイズが 100GB の場合、バージョンアップインストールに必要なディスクの空き容量は 200GB 以上です。Store データベースの格納先ディスクを変更している場合は、変更後のディスク容量に対して考慮してください。

(d) PFM - Web Console の注意事項

PFM - Web Console をインストールする場合の注意事項を次に示します。

- PFM - Web Console を上書きインストールした場合、インストール先フォルダ ¥conf¥ に格納されている初期設定ファイル (config.xml) は更新されません。ただし、インストール先フォルダ ¥sample¥conf¥ に格納されている config.xml ファイルは更新されます。
- PFM - Web Console を新規にインストールした場合には、PFM - Web Console の設定を有効にするためにシステムの再起動が必要です。

(e) 他システムと連携するときの注意事項

NNM と連携している環境にインストールする場合、NNM 連携機能および ovw を停止してからインストールしてください。NNM 連携機能については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、ネットワーク管理製品 (NNM) と連携した稼働監視について説明している章を参照してください。NNM の環境変数とコマンドについてはマニュアル「JP1/Cm2/Network Node Manager ネットワーク管理ガイド」または HP NNM マニュアルを参照してください。

(f) その他の注意事項

- Performance Management のプログラムが一つもインストールされていない環境に新規インストールする場合は、インストール先フォルダにファイルやフォルダがないことを確認してください。
- Performance Management のプログラムおよびサービスや、Performance Management のファイルを参照するような他プログラム (例えば Windows のイベントビューアなど) を起動したままインストールした場合、システムの再起動を促す

メッセージが表示されることがあります。この場合は、メッセージに従ってシステムを再起動し、インストールを完了させてください。

- Performance Management のプログラムおよびサービスや、Performance Management のファイルを参照するような他プログラム（例えば Windows のイベントビューアなど）を起動したままの状態、ディスク容量が不足している状態、またはディレクトリ権限がない状態でインストールした場合、ファイルの展開に失敗することがあります。Performance Management のプログラムおよびサービスや、Performance Management のファイルを参照するような他プログラムが起動している場合はすべて停止してからインストールし直してください。ディスク容量不足やディレクトリ権限不足が問題である場合は、問題を解決したあとにインストールし直してください。
- Performance Management のプログラムをインストールする場合、次に示すセキュリティ関連プログラムがインストールされていないかどうか確認してください。インストールされている場合、次の説明に従って対処してください。
 - セキュリティ監視プログラム
セキュリティ監視プログラムを停止するか、または設定を変更して、Performance Management のプログラムのインストールを妨げないようにしてください。
 - ウィルス検出プログラム
ウィルス検出プログラムを停止してから Performance Management のプログラムをインストールしてください。
Performance Management のプログラムのインストール中にウィルス検出プログラムが稼働している場合、インストールの速度が低下したり、インストールが最後まで実行できなかったり、または正しくインストールできなかったりすることがあります。
 - プロセス監視プログラム
プロセス監視プログラムを停止するか、または設定を変更して、Performance Management のサービスまたはプロセス、および共通コンポーネントのサービスまたはプロセスを監視しないようにしてください。
Performance Management のプログラムのインストール中に、プロセス監視プログラムによって、これらのサービスまたはプロセスが起動されたり停止されたりすると、インストールに失敗することがあります。
- バージョン 08-00 以降の Performance Management プログラムをインストールした場合、ステータス管理機能の設定状態は次のようになります。
 - Performance Management のプログラムがインストールされていないホストに 08-00 以降の PFM - Manager または PFM - Base を新規インストールした場合
ステータス管理機能の設定状態：有効になります。
 - それ以外の場合
ステータス管理機能の設定状態：既存のままです。

注 次の場合が該当します。

- 06-70 ~ 07-50 の PFM - Manager を 08-00 以降にバージョンアップした場合
- 06-70 ~ 07-50 の PFM - Agent がインストールされている環境に、08-00 以降の

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

PFM・Manager または PFM・Base を新規インストールした場合

なお、06-70 ~ 07-10 の Performance Management はステータス管理機能を持たないため、この場合の設定状態は「無効」になります。

ステータス管理機能の設定の変更については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

- バージョン 08-11 以降の PFM・Manager の場合、ヘルスチェック機能を利用できます。バージョン 09-00 以降の PFM・Manager をインストールした場合、ヘルスチェック機能の設定状態は次のようになります。
- Performance Management のプログラムがインストールされていないホストに 09-00 以降の PFM・Manager を新規インストールした場合
ヘルスチェック機能の設定状態：有効になります。
- それ以外の場合
ヘルスチェック機能の設定状態：既存のままです。

注 次の場合が該当します。

- 06-70 ~ 08-10 の PFM・Manager を 08-11 以降にバージョンアップした場合
- 06-70 ~ 07-50 の PFM・Agent がインストールされている環境に、08-11 以降の PFM・Manager を新規インストールした場合

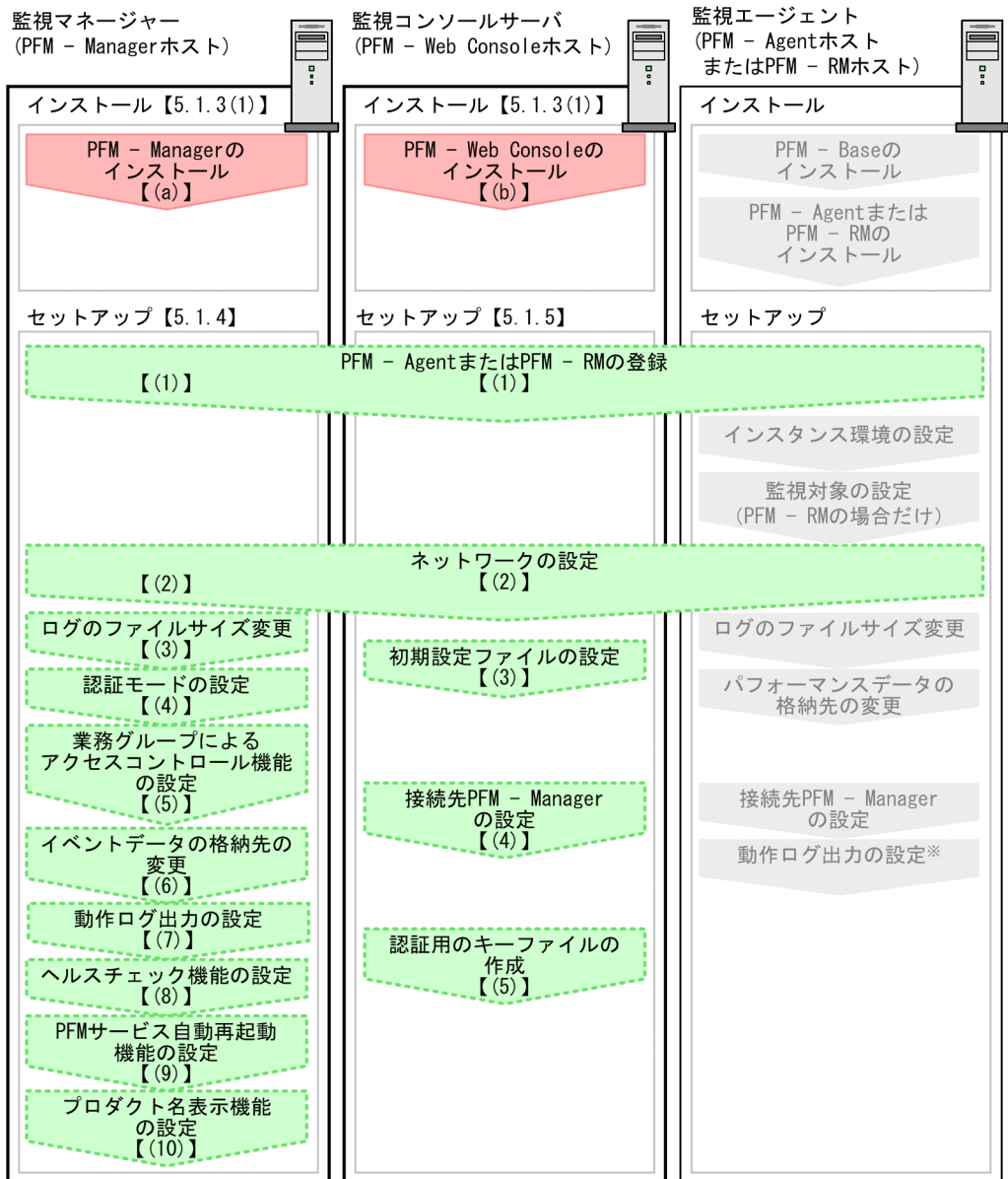
なお、06-70 ~ 08-10 の PFM・Manager はヘルスチェック機能を持たないため、この場合の設定状態は「無効」になります。

ヘルスチェック機能の設定については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

5.1.2 インストールとセットアップの流れ

Performance Management をインストールおよびセットアップする流れを説明します。

図 5-2 インストールとセットアップの流れ



(凡例)



: 必須セットアップ項目



: オプションのセットアップ項目



: 各PFM - AgentまたはPFM - RMのマニュアルに手順が記載されている項目

【 】 : 参照先

注※ 動作ログは、各ホストで一度設定すれば、08-00以降のすべてのPFM - Agentに適用されます。
 設定の詳細については、「付録G 動作ログの出力」を参照してください。

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

ここでは、PFM・Manager および PFM・Web Console のインストール、セットアップ手順を説明します。PFM・Agent または PFM・RM のインストール、セットアップ手順は、製品によって異なります。詳細については、各 PFM・Agent または PFM・RM マニュアルを参照してください。

なお、ユーザー入力を必要とするセットアップコマンドは、対話形式で実行するか非対話形式で実行するかを選択できます。

対話形式で実行する場合は、コマンドの指示に従ってユーザーが値を入力する必要があります。

非対話形式で実行する場合は、コマンド実行中に必要となる入力作業をオプション指定や定義ファイルで代替するため、ユーザー入力が不要になります。また、バッチ処理やリモート実行によってセットアップ作業を自動化できるため、管理者の負担や運用コストを低減できます。非対話形式のコマンドは、次のような場合に便利です。

- 監視対象との接続に使用するパスワードを定期的に変更したい
- 複数の監視対象を追加する際の作業を効率化したい

コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」を参照してください。

5.1.3 インストール手順

Performance Management のプログラムをインストールする順序と CD-ROM の提供媒体からプログラムをインストールする手順を説明します。

(1) プログラムのインストール順序

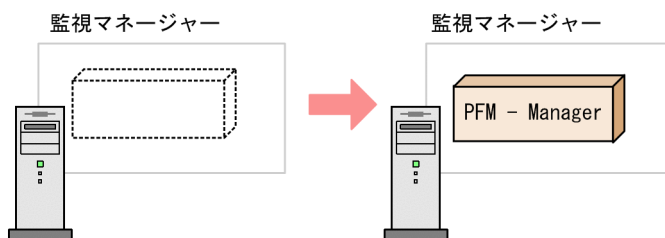
ここでは、Performance Management のプログラムをインストールする順序を説明します。

注意

Performance Management プログラムは、監視マネージャー、監視コンソールサーバ、および監視エージェントをどのような順序でインストールしてもかまいません。

(a) 監視マネージャーでのインストール順序

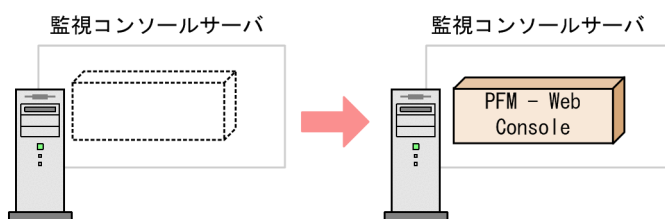
監視マネージャーには、PFM・Manager をインストールします。



1. PFM - Manager をインストールする

(b) 監視コンソールサーバでのインストール順序

監視コンソールサーバには、PFM - Web Console をインストールします。



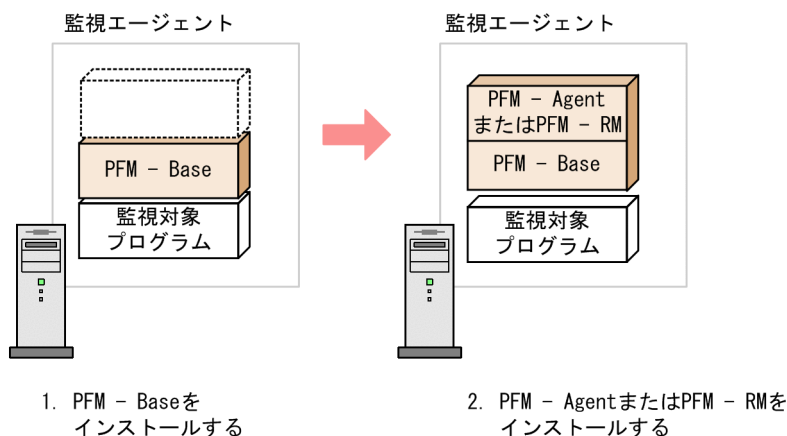
1. PFM - Web Console をインストールする

(c) 監視エージェントでのインストール順序

まず、PFM - Base をインストールし、次に PFM - Agent または PFM - RM をインストールします。PFM - Base がインストールされていないホストに PFM - Agent または PFM - RM をインストールすることはできません。

なお、PFM - Manager と同一ホストに PFM - Agent または PFM - RM をインストールする場合は、PFM - Manager、PFM - Agent または PFM - RM の順でインストールしてください。

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)



インストールの手順の詳細については、各 PFM - Agent または PFM - RM マニュアルを参照してください。

(2) Performance Management プログラムのインストール方法

Performance Management プログラムをインストールするには、CD-ROM の提供媒体を使用する方法と、JP1/NETM/DM を使用してリモートインストールする方法があります。JP1/NETM/DM を使用する方法については、マニュアル「JP1/NETM/DM 運用ガイド 1(Windows(R) 用)」を参照してください。

OS 共通の注意事項

インストールするホストで Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、すべて停止してください。なお、停止するサービスは物理ホスト上および論理ホスト上のすべてのサービスです。サービスの停止方法は、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

Windows Server 2008 の環境でインストールする場合の注意事項

OS のユーザーアカウント制御機能 (UAC) を有効にしている場合は、インストール中にユーザーアカウント制御のダイアログボックスが表示されることがあります。ダイアログボックスが表示された場合は、[続行] ボタンをクリックしてインストールを続行してください。[キャンセル] ボタンをクリックした場合は、インストールが中止されます。

CD-ROM の提供媒体を使用する場合のインストール手順を次に示します。

1. Performance Management プログラムをインストールするホストに、Administrators 権限でログインする。
2. Performance Management のプログラムおよびサービスを停止する。
Performance Management のプログラムおよびサービスが起動している場合は、す

べて停止してください。

3. 提供媒体を CD-ROM ドライブに入れる。

起動したインストーラの指示に従ってインストールを進めます。

インストール時に定義する情報を次に示します。

- ユーザー情報

ユーザー名などを入力します。

- インストール先フォルダ

Performance Management プログラムをインストールするフォルダを指定します。

インストール先フォルダは、[ディレクトリの選択] ダイアログボックスで設定して [OK] ボタンをクリックした時点で作成されます。誤ったフォルダを作成した場合はインストール後にフォルダを削除してください。

- プログラムフォルダ

Windows の [スタート] - [すべてのプログラム] メニューに登録されるプログラムメニュー名を指定します。

デフォルトでは、[Performance Management] が登録されます。

- 接続先 PFM - Manager (PFM - Base の新規インストール時)

PFM - Base の新規インストール時に、接続先 PFM - Manager のホスト名を入力します。

なお、インストール時には接続先 PFM - Manager を設定しないで、あとから設定することもできます。設定しなかった場合、インストール時には PFM - Agent ホストまたは PFM - RM ホストの物理ホスト名が設定されます。インストール後、接続先 PFM - Manager を変更してください。接続先 PFM - Manager の変更については、「5.3.2 接続先 PFM - Manager の変更」を参照してください。

参考

PFM - Web Console を除く Performance Management プログラムのインストール先フォルダおよびプログラムフォルダは、そのホストに初めて Performance Management プログラムをインストールするときだけ指定できます。2 回目以降のインストールの際は、初回インストール時に指定したプログラムフォルダにインストールまたは登録されます。

また、インストール時に接続先 PFM - Manager を設定できるのは、08-00 以前のバージョンの PFM - Agent がインストールされていないホストに、初めて PFM - Base をインストールするときだけです。08-00 以前のバージョンの PFM - Agent がインストールされているホストに PFM - Base をインストールする場合や、PFM - Base を上書きインストールする場合は、設定済みの接続先 PFM - Manager の情報が引き継がれます。

5.1.4 PFM - Manager のセットアップ手順

ここでは、監視マネージャーにインストールされた PFM - Manager をセットアップする手順を示します。

◇オプション◇ は使用する環境によって必要になるセットアップ項目、またはデフォルト

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

の設定を変更する場合のオプションのセットアップ項目を示します。

(1) PFM - Agent または PFM - RM の登録 オプション

PFM - Manager および PFM - Web Console を使って PFM - Agent または PFM - RM を一元管理するために、PFM - Manager に PFM - Agent または PFM - RM を登録する必要があります。

PFM - Manager のバージョンが 08-50 以降の場合、登録は自動で行われるため、ここで説明する手順は不要です。

ただし、PFM - Manager よりあとでリリースされた PFM - Agent または PFM - RM については手動登録が必要になる場合があります。手動登録の可否については、PFM - Manager のリリースノートを参照してください。

参考

自動で登録された PFM - Agent または PFM - RM の情報は、次のタイミングで PFM - Web Console に表示されるようになります。

PFM - Web Console のバージョンが 08-50 以降の場合

登録された PFM - Agent または PFM - RM の起動後に、PFM - Web Console に再ログインしたとき

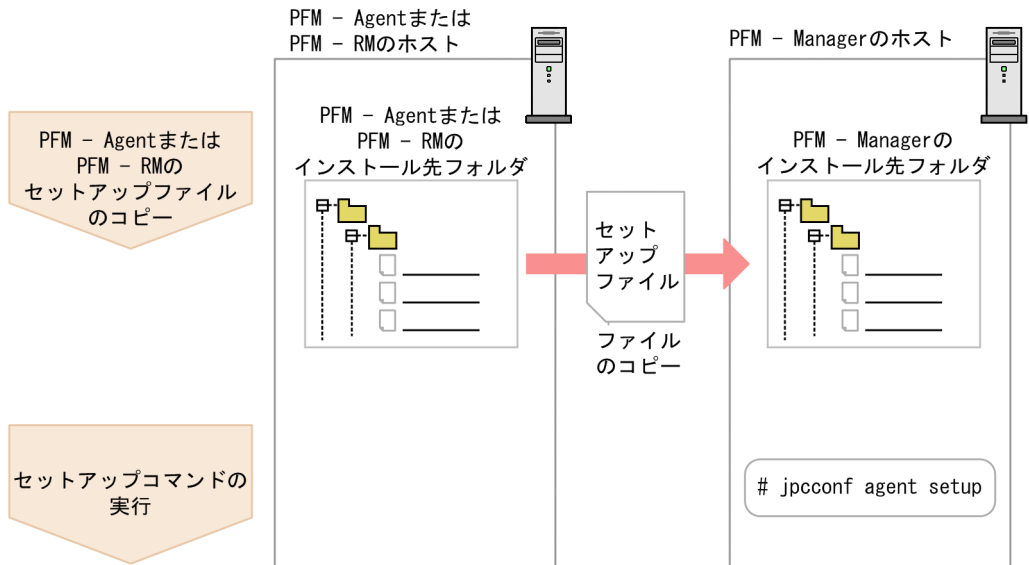
PFM - Web Console のバージョンが 08-11 以前の場合

登録された PFM - Agent または PFM - RM の起動後に、PFM - Web Console を再起動したとき

PFM - Agent または PFM - RM の起動前に登録したい場合は、`jpccconf agent setup` コマンドに `-register` オプションを付加して実行してください。`jpccconf agent setup` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

PFM - Agent または PFM - RM の登録の流れを次に示します。

図 5-3 PFM - Agent または PFM - RM の登録の流れ



注意

- PFM-Agent または PFM-RM の登録は、PFM-Agent または PFM-RM のインストール環境を設定する前に実施してください。
- すでに PFM-Agent または PFM-RM の情報が登録されている Performance Management システムに、新たに同じプロダクト ID で、同じバージョンの PFM-Agent または PFM-RM を追加した場合は、PFM-Agent または PFM-RM の登録は必要ありません。
- バージョンが異なる同じプロダクト ID の PFM-Agent または PFM-RM を、異なるホストにインストールする場合、古いバージョン、新しいバージョンの順で PFM-Agent または PFM-RM をセットアップしてください。
- PFM-Manager と同じホストに PFM-Agent または PFM-RM をインストールした場合、`jpccconf agent setup` コマンドが自動的に実行されます。PFM-Agent または PFM-RM の場合は、共通メッセージログに KAVE05908-I メッセージが出力されるので、結果を確認してください。コマンドが正しく実行されていない場合は、コマンドを実行し直してください。コマンドの実行方法については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドの章を参照してください。

(a) PFM-Agent または PFM-RM のセットアップファイルをコピーする

PFM-Agent または PFM-RM をインストールしたホストにあるセットアップファイルを PFM-Manager をインストールしたホストにコピーします。手順を次に示します。

1. PFM-Agent または PFM-RM のセットアップファイルをバイナリーモードでコピーする。

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

ファイルが格納されている場所およびファイルをコピーする場所を次の表に示します。

表 5-3 コピーするセットアップファイル

コピー元		コピー先	
ホスト	ファイル	ホスト	ファイル
PFM - Agent , PFM - RM	<ul style="list-style-type: none">• Windows の場合 インストール先フォルダ ¥setup¥jpcXXXw.EXE• UNIX の場合 /opt/jp1pc/setup/ jpcXXXw.EXE	PFM - Manager	インストール先 フォルダ ¥setup¥

注

「xxx」は、各 PFM - Agent または PFM - RM のサービスキーを示します。サービスキーの詳細は、各 PFM - Agent または PFM - RM マニュアルを参照してください。

(b) PFM - Manager ホストでセットアップコマンドを実行する

PFM - Manager ホストで PFM - Agent または PFM - RM をセットアップするための次のコマンドを実行します。

```
jpccconf agent setup -key xxx
```

「xxx」は、各 PFM - Agent または PFM - RM のサービスキーを示します。サービスキーの詳細は各 PFM - Agent または PFM - RM マニュアルを参照してください。

例えば、PFM - Agent for Oracle の場合、次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf agent setup -key Oracle
```

ここでは、対話形式の実行例を示していますが、jpccconf agent setup コマンドは非対話形式でも実行できます。jpccconf agent setup コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドについて説明している章を参照してください。

注意

コマンドを実行するローカルホストの Performance Management のプログラムおよびサービスが完全に停止していない状態で jpccconf agent setup コマンドを実行した場合、エラーが発生することがあります。その場合は、Performance Management のプログラムおよびサービスが完全に停止したことを確認したあと、再度 jpccconf agent setup コマンドを実行してください。

PFM - Agent または PFM - RM のセットアップファイルは、この作業が終了したあと、削除してもかまいません。

(2) ネットワークの設定

Performance Management を使用するネットワーク構成に応じて、変更する場合に必要な設定です。

ネットワークの設定では次の二つの項目を設定できます。

IP アドレスを設定する

Performance Management を複数の LAN に接続されたネットワークで使用するときに設定します。複数の IP アドレスを設定するには、jpchosts ファイルにホスト名と IP アドレスを定義します。設定した jpchosts ファイルは Performance Management システム全体で統一させてください。

詳細については「5.3.1 ネットワーク構成の変更」を参照してください。

ポート番号を設定する

Performance Management が使用するポート番号を設定できます。運用での混乱を避けるため、ポート番号とサービス名は、Performance Management システム全体で統一させてください。

ポート番号の設定の詳細については「5.3.1 (1) (b) ポート番号を設定する」を参照してください。

(3) ログのファイルサイズ変更

Performance Management の稼働状況を、Performance Management 独自のログファイルに出力します。このログファイルを「共通メッセージログ」と呼びます。共通メッセージログは、デフォルトで 2,048 キロバイトのファイルが 2 個使用されます。このファイルサイズを変更したい場合に必要な設定です。

詳細については、「5.4.1 共通メッセージログのファイルサイズ設定」を参照してください。

(4) 認証モードの設定

Performance Management の認証モードを PFM 認証モードから JP1 認証モードに変更したい場合に必要な設定です。

詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、ユーザーアカウントと業務グループの管理について説明している章を参照してください。

(5) 業務グループによるアクセスコントロール機能の設定

業務グループを利用して Performance Management のユーザーを管理したい場合に必要な設定です。起動情報ファイル (jpccomm.ini) で、業務グループによるアクセスコン

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

トロール機能の利用有無を設定します。

詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、ユーザーアカウントと業務グループの管理について説明している章を参照してください。

(6) イベントデータの格納先の変更 〈オプション〉

PFM - Manager で管理されるイベントデータの格納先、バックアップ先、またはエクスポート先のフォルダを変更したい場合に必要な設定です。

イベントデータは、デフォルトで次の場所に格納されます。

- ・ 格納先フォルダ：インストール先フォルダ ¥mgr¥store¥
- ・ バックアップ先フォルダ：インストール先フォルダ ¥mgr¥store¥backup¥
- ・ エクスポート先フォルダ：インストール先フォルダ ¥mgr¥store¥dump¥

注

論理ホストで運用する場合のデフォルトの保存先については、「インストール先フォルダ」を「環境ディレクトリ ¥jplpc¥」に読み替えてください。

変更方法についての詳細は、「5.4.2 イベントデータの格納先の変更」を参照してください。

(7) 動作ログ出力の設定 〈オプション〉

アラーム発生時に動作ログを出力したい場合に必要な設定です。動作ログとは、システム負荷などのしきい値オーバーに関するアラーム機能と連動して出力される履歴情報です。設定方法については、「付録 G 動作ログの出力」を参照してください。

(8) ヘルスチェック機能の設定 〈オプション〉

監視エージェントや監視エージェントが稼働するホストの稼働状態を確認したい場合に必要な設定です。設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

(9) PFM サービス自動再起動機能の設定 〈オプション〉

PFM サービスが何らかの原因で異常停止した場合に、自動的に PFM サービスを再起動させたいときに必要な設定です。設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

(10) プロダクト名表示機能の設定 〈オプション〉

08-50 以前からのバージョンアップ時にプロダクト名表示機能を有効にしたい場合、または新規セットアップ時にプロダクト名表示機能を無効にしたい場合に必要な設定です。

プロダクト名表示機能の詳細については、「4.1.2 サービスの表示・指定方法」を参照してください。設定方法については、「5.4.9 プロダクト名表示機能の設定」を参照してください。

5.1.5 PFM - Web Console のセットアップ手順

ここでは、監視コンソールサーバにインストールされた PFM - Web Console をセットアップする手順を示します。

＜オプション＞は使用する環境によって必要になるセットアップ項目、またはデフォルトの設定を変更する場合のオプションのセットアップ項目を示します。

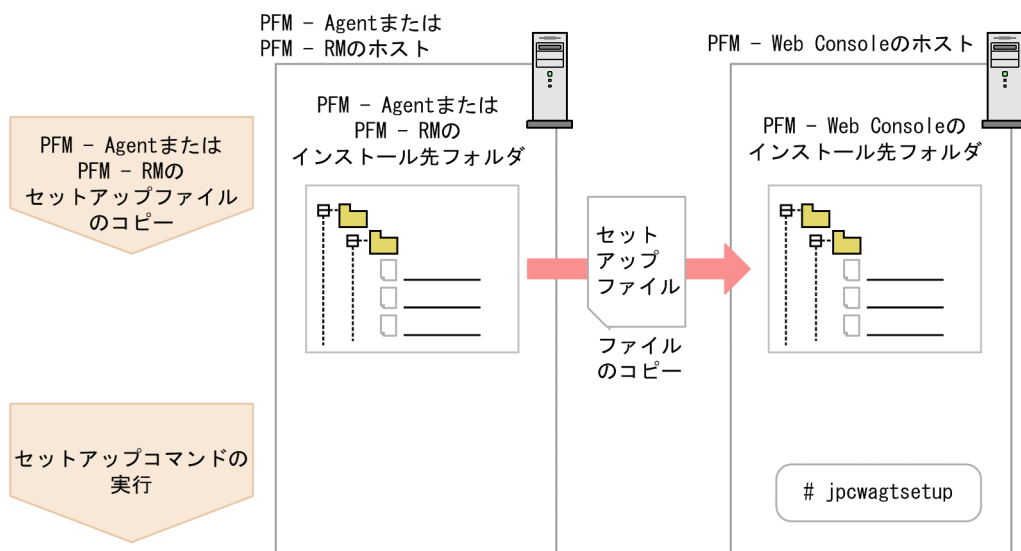
(1) PFM - Agent または PFM - RM の登録 ＜オプション＞

PFM - Manager および PFM - Web Console を使って PFM - Agent または PFM - RM を一元管理するために、PFM - Web Console に PFM - Agent または PFM - RM を登録する必要があります。

PFM - Web Console のバージョンが 08-50 以降の場合、PFM - Agent または PFM - RM の登録は自動で行われるため、ここで説明する手順は不要です。ただし、PFM - Web Console よりあとでリリースされた PFM - Agent または PFM - RM については手動登録が必要になる場合があります。手動登録の要否については、PFM - Web Console のリリースノートを参照してください。

PFM - Agent または PFM - RM の登録の流れを次に示します。

図 5-4 PFM - Agent または PFM - RM の登録の流れ



5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

注意

- すでに PFM - Agent または PFM - RM の情報が登録されている Performance Management システムに、新たに同じプロダクト ID で、同じバージョンの PFM - Agent または PFM - RM を追加した場合、PFM - Agent または PFM - RM の登録は必要ありません。
- バージョンが異なる同じプロダクト ID の PFM - Agent または PFM - RM を、異なるホストにインストールする場合、最新バージョンの PFM - Agent または PFM - RM をセットアップしてください。

(a) PFM - Agent または PFM - RM のセットアップファイルをコピーする

PFM - Agent または PFM - RM をインストールしたホストにあるセットアップファイルを PFM - Web Console をインストールしたホストにコピーします。手順を次に示します。

1. PFM - Web Console が起動されている場合は、PFM - Web Console を停止する。
2. PFM - Agent または PFM - RM のセットアップファイルをバイナリーモードでコピーする。
ファイルが格納されている場所およびファイルをコピーする場所を次の表に示します。

表 5-4 コピーするセットアップファイル

コピー元		コピー先	
ホスト	ファイル	ホスト	ファイル
PFM - Agent , PFM - RM	<ul style="list-style-type: none">• Windows の場合 インストール先フォルダ ¥setup¥jpcXXXw.EXE• UNIX の場合 /opt/jp1pc/setup/ jpcXXXw.EXE	PFM - Web Console	インストール先 フォルダ ¥setup¥

(凡例)

「xxxx」は、各 PFM - Agent または PFM - RM のサービスキーを示します。サービスキーの詳細は、各 PFM - Agent または PFM - RM マニュアルを参照してください。

(b) PFM - Web Console ホストでセットアップコマンドを実行する

PFM - Web Console で PFM - Agent または PFM - RM をセットアップするための次のコマンドを実行します。

```
jpcwagtsetup
```

PFM - Web Console ホストにある PFM - Agent または PFM - RM のセットアップファイ

ルは、この作業が終了したあと削除してもかまいません。

注意

PFM - Web Console を PFM - Agent または PFM - RM と同一のホストにインストールしている場合でも、jpcwagtsetup コマンドの実行は必要です。

(2) ネットワークの設定 オプション

Performance Management を使用するネットワーク構成に応じて、変更する場合に必要な設定です。

ネットワークの設定では次の設定ができます。

ポート番号を設定する

PFM - Web Console が使用するポート番号を設定できます。

ポート番号の設定の詳細については、「5.4.6 PFM - Web Console の設定変更」を参照してください。

(3) 初期設定ファイル (config.xml) の設定 オプション

PFM - Web Console を動作させるための設定が、初期設定ファイル (config.xml) に定義されています。この初期設定の内容を変更する場合に必要な設定です。

config.xml ファイルは、PFM - Web Console のログファイルに関する設定やコンソール画面に表示するデータの最大値などを設定できます。詳細については、「5.4.6 PFM - Web Console の設定変更」を参照してください。

(4) PFM - Web Console の接続先 PFM - Manager の設定 オプション

PFM - Web Console が接続する PFM - Manager を設定します。接続先の PFM - Manager を設定するには、初期設定ファイル (config.xml) ファイルに設定します。

詳細については、「5.4.6 (1) (b) 接続先 PFM - Manager の設定」を参照してください。

(5) PFM - Web Console の認証用のキーファイルの作成 オプション

PFM - Web Console のコマンドを実行する場合は、あらかじめ jpcmkkey コマンドを実行しておく必要があります。jpcmkkey コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

5.1.6 監視コンソールの Web ブラウザの設定手順

PFM - Web Console を使用するために、次に示す Web ブラウザの設定が必要です。

- JavaScript を有効にする。

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

- ファイルをダウンロードできるようにする。
- Cookie を有効にする。
- 画像 (GIF データ) を表示する。
- ページキャッシュを確認する。
- フォントサイズを設定する。

監視コンソールの OS が Windows の場合にサポートする Web ブラウザを次に示します。

表 5-5 監視コンソールの OS が Windows の場合にサポートする Web ブラウザ

Web ブラウザ	バージョン	サポートする PFM - Web Console のバージョン
Firefox	3	09-00 以降
Firefox	2.0.x	08-11 以降
Internet Explorer	8.0	09-00-01 以降
Internet Explorer	7.0	08-10 以降
Internet Explorer	6.0	08-00 以降

Web ブラウザごとの設定項目を表に示します。

(1) Firefox 3 の場合

表 5-6 Firefox 3 の設定

メニュー	カテゴリー	設定項目
[ツール]・[オプション]	[プライバシー]・[Cookie]	[サイトから送られてきた Cookie を保存する] (保存期間の選択は任意)
	[コンテンツ]	[画像を自動的に読み込む] [JavaScript を有効にする]
	[コンテンツ]・[Javascript]	[詳細設定] で「ウィンドウの移動または大きさの変更」を選択する。
	[コンテンツ]・[フォントと配色]	デフォルト値を使用する。
	[コンテンツ]・[言語]	[言語設定] で日本語「ja」をリストの先頭にする。
	[セキュリティ]・[パスワード]	[サイトのパスワードを保存する] のチェックを外す。

(2) Firefox 2.0.x の場合

表 5-7 Firefox 2.0.x の設定

メニュー	カテゴリー	設定項目
[ツール]・[オプション]	[プライバシー] - [Cookie]	[サイトから送られてきた Cookie を保存する] (保存期間の選択は任意)
	[コンテンツ]	[画像を自動的に読み込む] [JavaScript を有効にする]
	[コンテンツ]・[Javascript]	[詳細設定] で「ウィンドウの移動または大きさの変更」を選択する。
	[コンテンツ]・[フォントと配色]	デフォルト値を使用する。
	[セキュリティ]・[パスワード]	「パスワードマネージャ」の「サイトのパスワードを記憶する」のチェックを外す。
	[詳細]・[言語設定]	「ja」をリストの先頭にする。

(3) Internet Explorer 7.0 または Internet Explorer 8.0 の場合

表 5-8 Internet Explorer 7.0 または Internet Explorer 8.0 の設定

メニュー	タブ	ボタン	設定項目
[ツール] - [インター ネットオブ ション]	[セキュリ ティ]	[レベルのカ スタマイズ]	[セキュリティの設定] - [スクリプト] - [アクティブスクリプト] - [有効にする]
			[セキュリティの設定] - [ダウンロード] - [ファイルのダウンロード] - [有効にする]
	[詳細設定]	-	[マルチメディア] - [画像を表示する]
	[全般]	[閲覧の履歴] - [設定]	[保存しているページの新しいバージョンの 確認] - [自動的に確認する]
		[言語]	[日本語 [ja]] または [日本語 (日本) [ja-JP]] が存在する場合 [言語] 一覧で, [日本語 [ja]] または [日本語 (日本) [ja-JP]] が最上位にな るまで [上へ] ボタンをクリックする。 [日本語 [ja]] または [日本語 (日本) [ja-JP]] が存在しない場合 1. [追加] ボタンをクリックして [言語の 選択] ダイアログボックスの [言語] 一 覧で [日本語 [ja]] または [日本語 (日 本) [ja-JP]] を選択し, [OK] ボタンを クリックする。 2. [言語] 一覧で, [日本語 [ja]] または [日本語 (日本) [ja-JP]] が最上位にな るまで [上へ] ボタンをクリックする。
[表示] - [文 字のサイズ]	-	-	[中]

(凡例)

- : 該当しない

(4) Internet Explorer 6.0 の場合

表 5-9 Internet Explorer 6.0 の設定

メニュー	タブ	ボタン	設定項目
[ツール] - [インター ネットオブ ション]	[セキュリ ティ]	[レベルのカ スタマイズ]	[セキュリティの設定] - [スクリプト] - [アクティブスクリプト] - [有効にする]
			[セキュリティの設定] - [ダウンロード] - [ファイルのダウンロード] - [有効にする]
	[詳細設定]	-	[マルチメディア] - [画像を表示する]
	[全般]	[インター ネット一時 ファイル] - [設定]	[保存しているページの新しいバージョンの 確認] - [自動的に確認する]
		[言語]	[日本語 [ja]] が存在する場合 [言語] 一覧で, [日本語 [ja]] が最上位 になるまで [上へ] ボタンをクリック する。 [日本語 [ja]] が存在しない場合 1. [追加] ボタンをクリックして [言語の 選択] ダイアログボックスの [言語] 一 覧で [日本語 [ja]] を選択し, [OK] ボ タンをクリックする。 2. [言語] 一覧で, [日本語 [ja]] が最上位 になるまで [上へ] ボタンをクリックす る。
[表示] - [文 字のサイズ]	-	-	[中]

(凡例)

- : 該当しない

5.2 アンインストールとアンセットアップ

ここでは、Performance Management プログラムをアンインストールおよびアンセットアップする手順を示します。

5.2.1 アンインストールとアンセットアップの前に

ここでは、Performance Management をアンインストールおよびアンセットアップするときの注意事項を次に示します。

(1) アンインストールに必要な OS ユーザー権限に関する注意事項

Performance Management プログラムをアンインストールするときは、必ず、OS の Administrators 権限を持つアカウントで実行してください。

(2) ネットワークに関する注意事項

Performance Management プログラムをアンインストールしても、services ファイルに定義されたポート番号は削除されません。

(3) プログラムに関する注意事項

- Performance Management のプログラムおよびサービスや、Performance Management のファイルを参照するような他プログラム（例えば Windows のイベントビューアなど）を起動したままアンインストールした場合、ファイルやフォルダが残ることがあります。この場合は、手でインストール先フォルダ以下をすべて削除してください。
- Performance Management のプログラムおよびサービスや、Performance Management のファイルを参照するような他プログラム（例えば Windows のイベントビューアなど）を起動したままアンインストールした場合、システムの再起動を促すメッセージが出力されることがあります。この場合、システムを再起動して、アンインストールを完了させてください。
- PFM・Base と、PFM・Agent または PFM・RM がインストールされているホストの場合、PFM・Base のアンインストールは PFM・Agent または PFM・RM をアンインストールしないと実行できません。この場合、PFM・Agent または PFM・RM、PFM・Base の順にアンインストールしてください。また、PFM・Manager と、PFM・Agent または PFM・RM がインストールされているホストの場合も同様に、PFM・Manager のアンインストールは PFM・Agent または PFM・RM をアンインストールしないと実行できません。この場合、PFM・Agent または PFM・RM、PFM・Manager の順にアンインストールしてください。

(4) サービスに関する注意事項

- PFM・Manager をアンインストールするときは、Performance Management システム全体で、Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止して

おいてください。

- PFM - Agent または PFM - RM をアンインストールしただけでは、`jpctool service list` コマンドで表示できるサービス情報は削除されません。この場合、`jpctool service delete` コマンドを使用してサービス情報を削除してください。サービス情報の削除方法については、「5.2.3 サービス情報の削除」を参照してください。
- PFM - Manager をアンインストールしたあと、同じマシンに再インストールすると、`jpctool service list` コマンドで Trap Generator サービスが二つ表示されることがあります。この場合、PFM - Manager のサービスを起動し、「Inactive」となっている Trap Generator サービスを `jpctool service delete` コマンドで削除してください。

(5) PFM - Web Console の注意事項

- アンインストール時に、ログ出力フォルダとして、`%TEMP%` 環境変数の値を参照します。`%TEMP%` 環境変数が未定義の場合、ログは出力されません。
- アンインストール実行中のログは、`%TEMP%\%pfmwebconuninst.log` に出力します。また、アンインストーラの終了コードは `%TEMP%\%pfmwebconuninst.rtn` に出力します。
- アンインストールに失敗した場合は、アンインストール実行時のログ (`%TEMP%\%pfmwebconuninst.log`) を退避して、原因を取り除いたあと、再度アンインストールしてください。アンインストールするプログラムに「Performance Management - Web Console」がない場合は、一度インストールして、再度アンインストールしてください。
- [コントロールパネル]・[管理ツール]・[サービス] アプレット、または [コントロールパネル]・[管理ツール]・[コンピュータの管理]・[サービスとアプリケーション]・[サービス] のサービス一覧を表示した状態で、アンインストールを実行すると、「PFM - Web Service」または「PFM - Web Console」の名前が削除されないで残る場合があります。アンインストール前にはこれらのウィンドウを閉じてください。
- PFM - Web Console がインストールされているホストから、Performance Management プログラムをアンインストールする場合は、Web ブラウザ画面をすべて閉じてからアンインストールを実施してください。
- PFM - Web Console のアンインストールが完了したら、PFM - Web Console の設定を無効にするためにシステムを再起動してください。

(6) その他の注意事項

- インスタンス環境を設定している PFM - Agent または PFM - RM の場合、PFM - Agent または PFM - RM をアンインストールする前に、インスタンス環境をアンセットアップしておいてください。アンセットアップ方法については、各 PFM - Agent または PFM - RM マニュアルの、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。
- NNM 連携機能を使用した場合、PFM - Manager または PFM - Base をアンインス

ツールする前に、NNM 連携機能をアンインストールしておいてください。アンインストール方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、ネットワーク管理製品 (NNM) と連携した稼働監視について説明している章を参照してください。

- アラームテーブルをバインドしている PFM・Agent または PFM・RM をアンインストールまたはアンセットアップする場合、アンインストールまたはアンセットアップの実行前に PFM・Web Console での操作または `jpctool alarm unbind` コマンドを使用して、バインドされているアラームテーブルをすべてアンバインドしてください。
- PFM・Agent または PFM・RM をアンインストールまたはアンセットアップする場合、アンインストールまたはアンセットアップの実行後に、PFM・Web Console のエージェント階層で「User Agents」を選択して表示されるツリーから、不要になったエージェントを必要に応じて削除してください。また、不要になったアラームおよびレポートの定義情報を必要に応じて削除してください。エージェント階層からのエージェントの削除方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、エージェントの監視について説明している章を参照してください。アラームの定義情報の削除方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、アラームによる稼働監視について説明している章を参照してください。レポートの定義情報の削除方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働分析のためのレポートの作成について説明している章を参照してください。
- Store データベースの格納先ディレクトリがデフォルト以外に設定されている場合、Performance Management プログラムをアンインストールしても、Store データベースの格納先のディレクトリのファイルは削除されません。この場合は、Store データベースの格納先のディレクトリ以下をすべて手動で削除してください。

5.2.2 アンインストール手順

Performance Management プログラムをアンインストールする手順を説明します。

1. Performance Management のプログラムをアンインストールするホストに、Administrators 権限でログインする。
2. ローカルホストで Performance Management のプログラムおよびサービスを停止する。
サービス情報を表示して、サービスが起動されていないか確認してください。ローカルホストで Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、すべて停止してください。なお、停止するサービスは物理ホスト上および論理ホスト上のすべてのサービスです。
サービスの停止方法およびサービス情報の表示方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。
3. アンインストールする Performance Management のプログラムを選択する。

Windows の [コントロールパネル] で [プログラムの追加と削除] を選択して、アンインストールする Performance Management プログラムを選択します。

なお、PFM - Manager または PFM - Base を削除する場合は、PFM - Web Console 以外のすべての Performance Management プログラムを事前にアンインストールする必要があります。

注

Windows のバージョンによって名称が異なる場合があります。

4. [削除] を選択し、[OK] ボタンをクリックする。
選択したプログラムがアンインストールされます。

Windows Server 2008 の環境でアンインストールする場合の注意事項

OS のユーザーアカウント制御機能 (UAC) を有効にしている場合は、アンインストール中にユーザーアカウント制御のダイアログボックスが表示されることがあります。ダイアログボックスが表示された場合は、[続行] ボタンをクリックしてアンインストールを続行してください。[キャンセル] ボタンをクリックした場合は、アンインストールが中止されます。

5.2.3 サービス情報の削除

次のような場合、`jpctool service list` コマンドで表示されるサービス情報を削除する必要があります。

- PFM - Agent または PFM - RM をアンインストールしたとき
- 接続先の PFM - Manager を変更したとき
- 運用開始後に PFM - Manager、PFM - Agent、PFM - RM、または PFM - Base のホスト名を変更したとき

Action Handler サービスのサービス情報を削除した場合は、その Action Handler を使用したアラームのアクション実行ができなくなりますので、アラームのアクション実行をする Action Handler サービスを再設定してください。

サービス情報を削除するには `jpctool service delete` コマンドを使用します。PFM - Agent ホストの LAN ケーブルが接続されていないなどの物理的な理由で通信できない場合は、サービス情報を削除できません。この場合、`-force` オプションを指定して実行することで、強制的にサービス情報を削除できます。なお、アラームテーブルがバインドされている PFM - Agent または PFM - RM のサービス情報を削除する場合は、バインドされているアラームテーブルを削除前にすべてアンバインドしてください。

サービス情報を削除する手順を次に示します。

1. PFM - Manager がインストールされているホストにログインする。
2. `jpctool service delete` コマンドを、情報を削除したいサービスのサービス ID を指定して実行する。

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

例えば、ホスト host02 上にある PFM - Agent for Oracle の Agent Store サービスの情報を削除する場合は、次のように指定します。

```
jpctool service delete -id OS* -host host02
```

3. jpctool service sync コマンドを実行する。

jpctool service sync コマンドで同期したサービス情報は、PFM - Web Console の画面でエージェント階層を再表示すると、画面に反映されます。

注意 PFM - RM のリモートエージェントをアンセットアップした場合の注意事項

PFM - RM のリモートエージェントをアンセットアップした場合 (jpccconf target unsetup コマンド実行後) は、自動的にサービス情報が削除されるため、jpctool service delete コマンドの実行は不要です。

ただし、アンセットアップ後に PFM - Web Console に情報を反映するためには、jpctool service sync コマンドの実行が必要です。

サービス情報は、次のタイミングで削除されます。

- PFM - Manager および削除対象の PFM - RM のサービスが起動しているとき
jpccconf target unsetup コマンドを実行すると、PFM - RM から PFM - Manager にサービス情報の削除要求が行われ、PFM - Manager でサービス情報が削除されます。
- PFM - Manager または削除対象の PFM - RM のサービスが停止しているとき
jpccconf target unsetup コマンドを実行後に、PFM - RM のサービスが起動して PFM - Manager に接続されたタイミングで、PFM - Manager でサービス情報が削除されます。

5.3 Performance Management のシステム構成の変更

監視対象システムの構成変更に応じて、Performance Management のシステム構成を変更する場合があります。ここでは、Performance Management のシステム構成を変更する手順を説明します。

5.3.1 ネットワーク構成の変更

ネットワーク構成を変更したときの、Performance Management の設定を変更する手順を説明します。

なお、コマンドについては、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。また、PFM - Manager と PFM - Web Console 間、または PFM - Manager と PFM - Agent または PFM - RM 間のファイアウォールを通過させるための設定および注意事項については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、付録に記載されているポート番号一覧を参照してください。

(1) PFM - Manager ホスト、および PFM - Agent または PFM - RM ホストでの作業手順

PFM - Manager ホスト、および PFM - Agent または PFM - RM ホストでのネットワークの設定変更手順を説明します。

(a) IP アドレスを設定する

複数の LAN に接続されたネットワーク環境で Performance Management を運用するときに使用する IP アドレスを指定したい場合は、IP アドレスを設定します。

IP アドレスを設定したい場合は、`jpchosts` ファイルの内容を直接編集します。

注意

`jpchosts` ファイルを設定した場合、`jpchosts` ファイルに定義したホスト名については、`hosts` ファイルや DNS の定義を参照しません。したがって、ホスト名から取得される IP アドレスを、`jpchosts` ファイルに定義しておく必要があります。

手順を次に示します。

1. テキストエディターなどで、`jpchosts` ファイルを開く。
`jpchosts` ファイルは、インストール先フォルダに格納されています。
2. `jpchosts` ファイルを編集する。
例えば、ホスト名が `hostA` で IP アドレスが `20.108.41.1` であるホストと、ホスト名が `hostB` で IP アドレスが `20.108.41.2` と `20.108.41.3` であるホストの IP アドレスを

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

次のように設定します。

```
hostA 20.108.41.1  
hostB 20.108.41.2, 20.108.41.3
```

IP アドレスが 20.108.41.1 であるホストに、エイリアス名 aliasA を付与する場合、次のように設定します。

```
aliasA 20.108.41.1
```

- 一つのホストに複数の IP アドレスを設定している場合は、先に指定した IP アドレスが優先されます。
 - 次の条件に当てはまる場合、IP アドレス設定は無効です。
 - ホスト名の長さが 33 バイト以上の場合
 - ホスト名が localhost の場合
 - 10 進ドット表記の IP アドレス (例: 172.16.233.12) をホスト名として使用している場合
 - 「-」で始まるホスト名の場合
 - 次の文字または空白を含むホスト名の場合
¥ / : , ; * ? " > < | . =
 - IP アドレスは 10 進ドット表記 (例: 172.16.233.12) で指定してください。
 - 一つのホストに対して指定できる IP アドレスの数は 16 個です。
3. 該当ホストの Performance Management を停止後、注意 2 に従い、jpchosts ファイルをコピーする。
4. 停止した該当ホストの Performance Management を再起動する。
Performance Management を再起動すると、設定した jpchosts ファイルの情報が有効になります。

注意 1

jpchosts ファイルでのホスト名解決は、1 番目に設定している IP アドレスが使用できなくなった場合、それ以降 2 番目の IP アドレスを使用し続けるというものではありません。次回以降の通信でも、まず 1 番目の IP アドレスから順に通信を試みます。

注意 2

jpchosts への PFM - Manager ホストの設定追加の要否

1. PFM - Manager ホストが NIC 一枚の場合
PFM - Manager の jpchosts : 設定の必要はありません。
PFM - Manager に接続している PFM - Agent または PFM - RM の jpchosts : 設定の必要はありません。
2. PFM - Manager ホストが NIC 二枚以上の場合

PFM - Manager の jpchosts : PFM - Manager で使用したい IP アドレスを指定します。

PFM - Manager に接続している PFM - Agent または PFM - RM の jpchosts : PFM - Manager で使用したい IP アドレスを指定します。

jpchosts への PFM - Agent または PFM - RM ホストの設定追加の要否

存在する PFM - Agent または PFM - RM ホストごとに確認します。

1. PFM - Agent または PFM - RM ホストが NIC 一枚の場合

PFM - Manager の jpchosts : 設定の必要はありません。

確認対象の PFM - Agent または PFM - RM の jpchosts : 設定の必要はありません。

その他の PFM - Agent または PFM - RM の jpchosts : 設定の必要はありません。

2. PFM - Agent または PFM - RM ホストが NIC 二枚以上の場合

PFM - Manager の jpchosts : PFM - Agent または PFM - RM で使用したい IP アドレスを指定します。

確認対象の PFM - Agent または PFM - RM の jpchosts : PFM - Agent または PFM - RM で使用したい IP アドレスを指定します。

その他の PFM - Agent または PFM - RM の jpchosts : 設定の必要はありません。

注 確認対象の PFM - Agent または PFM - RM とほかの PFM - Agent または PFM - RM ホスト間で jpctool db backup コマンド, jpctool db clear コマンド, jpctool db dump コマンド, または jpctool service list コマンドなどを使用して通信する場合は, 確認対象の PFM - Agent または PFM - RM の設定を追加する必要があります。

補足

PFM - Manager ホスト, および PFM - Agent または PFM - RM ホスト間で名前解決されていればネットワークの設定について問題はありません。ただし, 運用時に混乱のないように, jpchosts ファイルの定義を設定対象となるホストで統一することをお勧めします。

(b) ポート番号を設定する

PFM - Manager と PFM - Web Console 間, または PFM - Manager と PFM - Agent または PFM - RM 間のファイアウォールを通過させたい場合など, Performance Management システムで使用するポート番号を固定して運用したい場合は, 各サービスに対して固定のポート番号を設定してください。

各サービスに対して固定のポート番号を設定する場合や, 一度設定したポート番号を変更する場合は, jpccconf port define コマンドを使用します。PFM - Web Console 側のポート番号は, 初期設定ファイル (config.xml) で設定します。PFM - Web Console ホストで config.xml ファイルを変更する手順については, 「5.4.6 PFM -

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

Web Console の「設定変更」を参照してください。

ここでは、`jpcconf port define` コマンドの実行手順を対話形式の場合と非対話形式の場合に分けて説明します。`jpcconf port define` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドについて説明している章を参照してください。

また、ポート番号の設定の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の付録の、ファイアウォールの通過方向について説明している箇所を参照してください。

補足

Name Server サービスに設定するポート番号については、Performance Management システム内の全ホストで同じ番号にする必要があります。

また、Status Server サービスに設定するポート番号についても、Performance Management システム内の全ホストで同じ番号にする必要があります。

他の JP1/PFM サービスについても運用での混乱を避けるため、Performance Management システム全体でポート番号とサービス名の対応を統一してください。

対話形式で実行する場合

1. `jpcconf port define` コマンドを実行する。

例えば、すべてのサービスに対してポート番号を固定値に設定する場合、次のようにコマンドを実行します。

```
jpcconf port define -key all
```

2. 個々のサービスに対してポート番号を設定する。

`jpcconf port define` コマンドを実行すると、現在設定されているポート番号またはデフォルトのポート番号が表示されます。

例えば、Name Server サービスに対する、現在のポート番号が 22285 の場合、次のように表示されます。

```
Component [Name Server]
ServiceID [PN1001]
Port [22285]
:
```

ポート番号をどのように設定したいかによって、操作が異なります。設定内容と操作を次の表に示します。システム内でポート番号が重複しないかぎり、`jpcconf port define` コマンドで表示されるポート番号をそのまま使用してください。

設定内容	操作
表示されている番号を、サービス固定のポート番号としてそのまま使用する場合	リターンキーを押す。

設定内容	操作
ポート番号を、表示されている番号から変更する場合	1024 ~ 65535 の範囲内でポート番号を入力する。 ただし、現在システムで使用されているポート番号は指定できない。
ポート番号を固定しない場合	「0」を入力する。 ただし、次のサービスは、ポート番号を固定しないように設定することはできない。「0」を入力した場合は、デフォルト値が設定される。 <ul style="list-style-type: none"> • Name Server サービス • View Server サービス (PFM - Web Console と View Server サービス間) • NNM Object Manager サービス • Status Server サービス

注意

- ポート番号設定時に、Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合、サービスを停止してから `jpccconf port define` コマンドを実行してください。ポート番号の設定が終わったあと、手でサービスを起動してください。
 - `jpccconf port define` コマンドの実行中に、Ctrl+C キーで中断すると、ポート番号は正しく設定されません。`jpccconf port define` コマンドを再実行して、ポート番号を設定し直してください。
3. 再度、`jpccconf port list` コマンドを実行して、ポート番号が正しく設定されたかどうかを確認する。
- 例えば、すべてのサービスのポート番号を表示する場合、次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf port list -key all
```

Services 欄または Port 欄に <error> と表示された場合は、正しく設定されていません。ポート番号を設定し直してください。エラーとなった場合、次の要因が考えられます。

- ポート番号が `services` ファイルに登録されていない。
- `services` ファイルに同じポート番号が重複して登録されている。

非対話形式で実行する場合

1. `jpccconf port define` コマンドで、定義ファイルのテンプレートを作成する。
- 例えば、すべてのサービスに対してポート番号を固定値に設定する場合、次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf port define -key all -template 定義ファイル名
```

対象となるすべてのサービスのラベルおよび値が記載された定義ファイルが出力され

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

ます。ラベルの値は、すでにポート番号が設定されているサービスの場合は設定済みのポート番号になり、ポート番号が設定されていないサービスの場合は0になります。

2. 手順 1 で作成した定義ファイルのテンプレートを編集する。

設定したいポート番号に合わせてテンプレートの設定値を編集します。

定義ファイルの記述形式については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドについて説明している章を参照してください。

定義ファイルの記述例を次に示します。

```
[Common Definitions]
Definition File Version=0001

[Common]
Name Server=22285
Status Server=22350
OpenView=22292
[Manager]
Master Manager=auto
Master Store=auto
Correlator=auto
:
[Windows]
Collector=0
Store=0
:
[Oracle]
[[oracle1]]
Collector=0
Store=0
```

3. jpccconf port define コマンドで、編集した定義ファイルを読み込ませる。

次のようにコマンドを実行します。-input オプションには、手順 2 で編集した定義ファイルを指定します。

```
jpccconf port define -key all -input 定義ファイル名 -noquery
```

(c) PFM - Web Console との通信に使用するホスト名または IP アドレスを設定する

PFM - Manager と PFM - Web Console との間は、TCP/IP を用いて通信します。これは、PFM - Manager と PFM - Web Console が別ホストに存在する場合だけではなく、同一ホスト上に存在する場合も同様です。このため、Performance Management を運用する場合は、PFM - Manager ホストと PFM - Web Console ホストの双方で常に通信可能なホスト名または IP アドレスを設定する必要があります。設定を実施していない場合、PFM - Manager ホスト名または PFM - Web Console ホスト名から、最初に解決される IP アドレスが使用されます。

注

PFM - Manager に接続する PFM - Web Console が複数存在する場合は、すべての PFM - Web Console ホストから通信できるホスト名または IP アドレスを指定する必要があります。

例えば、次のような構成や運用を取る場合は、PFM・Manager ホストと PFM・Web Console ホストの双方で常に通信可能なホスト名または IP アドレスを設定する必要があります。

- PFM・Manager ホストと PFM・Web Console ホスト間で IP アドレス変換 (NAT) を使用している場合
- PFM・Manager ホストが業務用 LAN および監視用 LAN の二つのネットワークに接続され、Performance Management は監視用 LAN でホスト間通信を行う場合
- ホストのメンテナンス作業の際に、一時的に NIC から LAN ケーブルを抜く場合 (この際、NIC に割り当てられた IP アドレスが無効になることがあるため)

ホスト名または IP アドレスの設定の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の付録の、PFM・Manager と PFM・Web Console の通信で使用するホスト名の設定について説明している個所を参照してください。

(2) PFM・Web Console ホストでの作業手順

PFM・Web Console ホストでネットワークの設定を変更するには、初期設定ファイル (config.xml) を変更します。

config.xml ファイルを変更する手順については、「5.4.6 PFM・Web Console の設定変更」を参照してください。

5.3.2 接続先 PFM・Manager の変更

ここでは、Performance Management システムを構築したあとで、接続先の PFM・Manager を変更する方法を説明します。

なお、サービスの起動方法および停止方法の操作については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

(1) PFM・Agent または PFM・RM ホストでの作業手順 オプション

PFM・Agent または PFM・RM の接続先 PFM・Manager を変更するには、jpcconf mgrhost define コマンドを使用します。

PFM・Manager と同じホストに PFM・Agent や PFM・RM をインストールした場合、または PFM・Base のインストール時に接続先 PFM・Manager を設定した場合、この作業は不要です。

注意

- 複数の PFM・Manager には接続できません。一つの監視エージェントで設定できる接続先の PFM・Manager は一つだけです。そのため、一つの監視エージェントに複数の PFM・Agent または PFM・RM がインストールされている場合、それぞ

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

れの接続先として異なる PFM - Manager を設定することはできません。

- PFM - Agent または PFM - RM と、PFM - Manager が同じホストにインストールされている場合、接続先 PFM - Manager はローカルホストの PFM - Manager となります。この場合、接続先の PFM - Manager をリモートホストの PFM - Manager に変更できません。
- 接続先 PFM - Manager を変更する前に、ローカルホストで Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、すべて停止してください。
- PFM - Base のバージョン 08-50 以降でインストール時に接続先 PFM - Manager の設定を省略した場合は、接続先 PFM - Manager の変更を必ず行ってください。

手順を次に示します。

1. Performance Management のプログラムおよびサービスを停止する。

Performance Management のプログラムおよびサービスが起動している場合は、すべて停止してください。サービスの停止には `jpcspm stop` コマンドを使用してください。

```
jpcspm stop -key jp1pc
```

2. 接続先 PFM - Manager を変更する。

接続先 PFM - Manager を変更するには、`jpccconf mgrhost define` コマンドを使用します。例えば、接続先 PFM - Manager をホスト `host02` 上の PFM - Manager に変更する場合、次のように指定します。

```
jpccconf mgrhost define -host host02
```

ここでは、対話形式の実行例を示していますが、`jpccconf mgrhost define` コマンドは非対話形式でも実行できます。`jpccconf mgrhost define` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドについて説明している章を参照してください。

3. 変更後の接続先 PFM - Manager が起動されていることを確認する。

4. PFM - Agent または PFM - RM ホスト上の Performance Management のプログラムおよびサービスを再起動する。

なお、変更前の接続先 PFM - Manager で、PFM - Agent または PFM - RM のホスト名が付加された、Performance Management プログラムのサービス情報をすべて削除してください。サービス情報の削除方法については、「5.2.3 サービス情報の削除」を参照してください。

(2) PFM - Web Console ホストでの作業手順

接続先 PFM - Manager を変更するには、初期設定ファイル (`config.xml`) ファイルを

変更します。詳細については、「5.4.6 (1) (b) 接続先 PFM - Manager の設定」を参照してください。

5.3.3 Performance Management システムでのホスト名の変更

ここでは、Performance Management システムのホスト名に使用する名称を変更する方法について説明します。なお、Performance Management システムのホスト名に使用する名称を監視ホスト名と呼びます。

参考

監視ホスト名は、サービス ID の一部 (デバイス名) などに使用されます。例えば、監視ホスト名が「HostA」のホストに PFM - Agent for Platform (Windows) をインストールした場合、Agent Collector のサービス ID は「TA1HostA」となります。なお、プロダクト名表示機能を使用する場合は、「HostA<Windows>」となります。

デフォルトでは、監視ホスト名が実ホスト名 (hostname コマンドで OS から取得されるホスト名) になっています。

物理ホスト環境に存在する Performance Management システムでは、エイリアス名 (任意のホスト名) を監視ホスト名に設定できます。この機能を、監視ホスト名設定機能といいます。

これによって、例えば同じ実ホスト名を持つホストが複数ある環境では、エイリアス名によってホストを区別して監視できるようになります。

Performance Management システムが現在使用している監視ホスト名を確認するには、次のコマンドを実行します。hostmode は監視ホスト名の取得方法を示し、hostname は監視ホスト名を示します。

```
jpcconf host hostmode -display
```

表示例

```
hostmode : hostname
hostname : hostA
```

監視ホスト名の取得方法と監視ホスト名の関係について次の表に示します。

表 5-10 監視ホスト名の取得方法と監視ホスト名の関係

監視ホスト名の取得方法	監視ホスト名
hostname	物理ホスト名 (hostname コマンドで表示される値)
alias	エイリアス名

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

監視ホスト名にエイリアス名を設定する場合、`jpcconf host hostmode` コマンドを実行して、監視ホスト名の取得方法を `alias` に設定する必要があります。

なお、`jpcconf host hostmode` コマンドを実行した場合、定義情報や性能情報など変更前の情報はすべて引き継がれます。`jpcconf host hostmode` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

注意

`jpcconf host` コマンドの実行中に他コマンドを実行しないでください。ほかのコマンドを実行した場合、`jpcconf host` コマンドまたは他コマンドの実行に失敗することがあります。

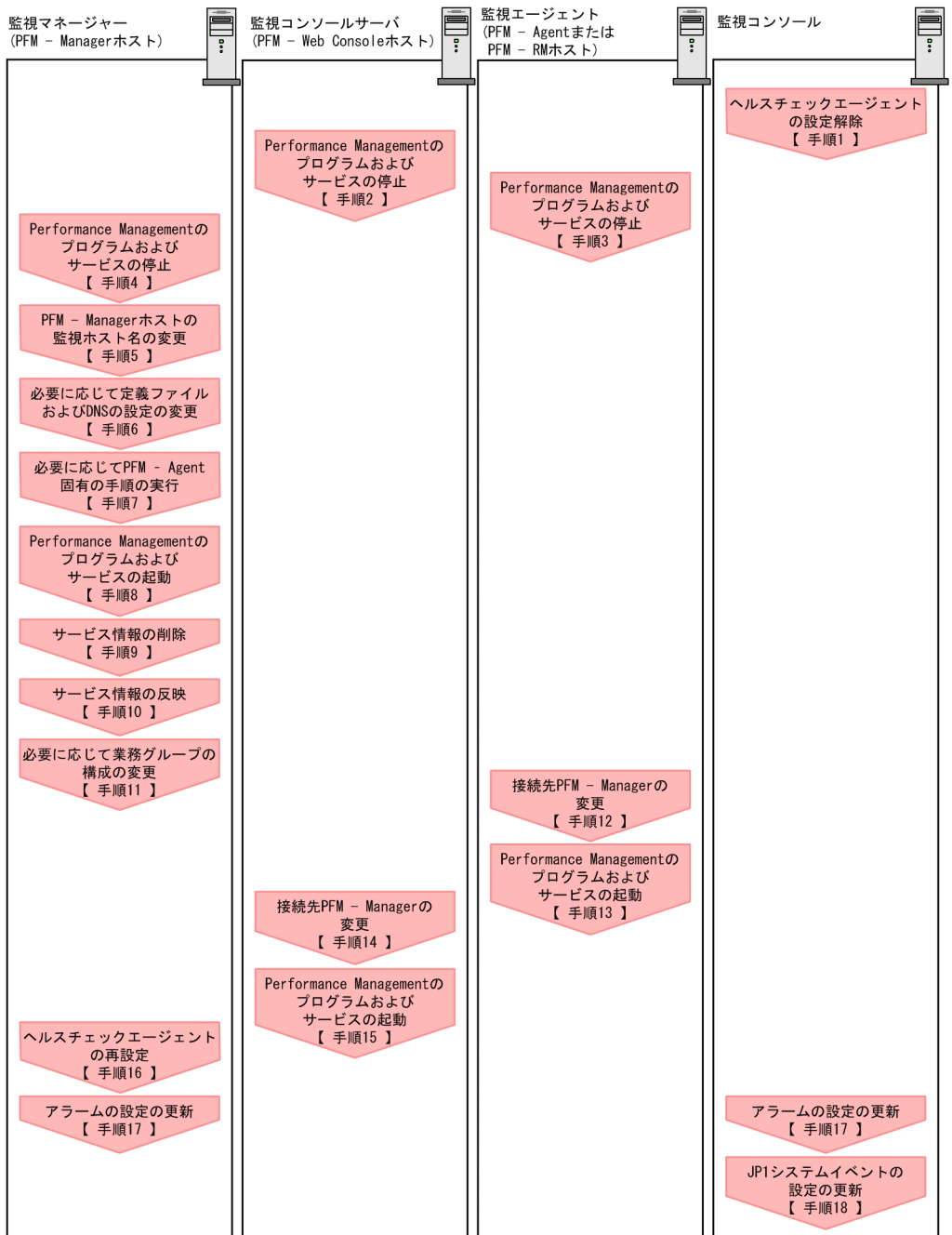
(1) PFM - Manager ホストの監視ホスト名を変更する

PFM - Manager ホストの監視ホスト名を変更する場合、次のホストでの作業が必要です。

- PFM - Manager ホスト
- PFM - Web Console ホスト
- PFM - Agent または PFM - RM ホスト
- 監視コンソール

作業の流れを次の図に示します。

図 5-5 PFM - Manager ホストの監視ホスト名を変更する流れ



(凡例)

: Performance Managementの作業

【 】 : 参照先

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

図中の手順番号に沿って作業手順を次に示します。

1. ヘルスチェックエージェントの設定を解除する。

ヘルスチェック機能を使用している場合、ヘルスチェックエージェントのエージェント定義の削除（エージェント階層の管理フォルダからの削除，アラームテーブルの関連づけの削除）を，PFM - Web Console のブラウザから行います。エージェントの定義を変更する手順の詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，エージェントの監視について説明している章，またはアラームによる稼働監視について説明している章を参照してください。

2. PFM - Web Console ホストでサービスを停止する。

ホスト名を変更する PFM - Manager に接続する PFM - Web Console ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止します。サービスの停止には `jpcwstop` コマンドを使用してください。

3. PFM - Agent または PFM - RM ホストでサービスを停止する。

ホスト名を変更する PFM - Manager に接続する PFM - Agent または PFM - RM ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止します。サービスの停止には `jpcspm stop` コマンドを使用してください。

4. PFM - Manager ホストでサービスを停止する。

ホスト名を変更する PFM - Manager ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止します。サービスの停止には `jpcspm stop` コマンドを使用してください。

5. PFM - Manager ホストの監視ホスト名を変更する。

`jpcconf host hostmode` コマンドを実行して，監視ホスト名の取得方法を変更します。監視ホスト名の取得方法をエイリアス名（`aliasA`）に変更する場合のコマンドの実行例を次に示します。

```
jpcconf host hostmode -mode alias -aliasname aliasA -d d:¥backup
-dbconvert convert
```

`jpcconf host hostmode` コマンドの詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の，コマンドについて説明している章を参照してください。

参考

jpccconf host hostmode コマンドの -d オプションに指定するフォルダには、目安として、指定したホストに存在する PFM - Agent および PFM - RM の Store データベース容量およびインポートディレクトリにあるデータベース容量の合計と同量の空きディスク容量が必要です。ただし、Store データベースの格納先ディレクトリおよびインポートディレクトリを変更している場合、変更後のディレクトリのデータベース容量を基に、必要なディスク容量を算出してください。

例えば、指定したホストに、ヘルスチェックエージェント、PFM - Agent for Platform、および PFM - Agent for Oracle が存在する場合、それぞれの Store データベースの容量およびインポートディレクトリにあるデータベース容量を合計した値の空きディスク容量が必要となります。なお、PFM - Manager の Master Store サービスの Store データベースの容量は合計に含める必要はありません。

6. 必要に応じて、jpchosts ファイル、hosts ファイル、および DNS の設定を変更する。

7. 必要に応じて、PFM - Agent 固有の手順を実行する。

PFM - Manager ホストに PFM - Agent がインストールされている構成では、PFM - Agent 固有の手順が必要な場合があります。PFM - Agent 固有の手順の要否について、次の表に示します。

表 5-11 PFM - Agent 固有の手順の要否

構成		手順の要否と参照先
PFM - Manager ホストにインストールされているのが、PFM - Agent 09-00 以降の場合		PFM - Agent 固有の手順の要否は、PFM - Agent ごとに異なります。PFM - Agent 固有の手順については、各 PFM - Agent マニュアルの、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。
PFM - Manager ホストにインストールされているのが、PFM - Agent 09-00 未満の場合	次の PFM - Agent の場合 <ul style="list-style-type: none"> PFM - Agent for Cosminexus PFM - Agent for Domino PFM - Agent for Enterprise Applications PFM - Agent for Microsoft SQL Server 	PFM - Agent 固有の手順が必要です。固有の手順については「(4) ホスト名変更の際に、必要に応じて行う Agent 固有の手順」を参照してください。
	上記以外の場合	PFM - Agent 固有の手順は不要です。

PFM - Agent 固有の手順が必要な場合は、表の参照先に示された手順を完了してから次の手順に進んでください。

8. PFM - Manager ホストでサービスを起動する。

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

PFM・Manager ホスト上の Performance Management のプログラムおよびサービスを起動します。サービスの起動には `jpcspm start` コマンドを使用してください。

9. PFM・Manager ホストでサービス情報を削除する。

PFM・Manager ホストのホスト名を変更しても、変更前のホスト名が付加された Performance Management プログラムのサービス情報は変更されません。PFM・Manager ホストのホスト名を変更した場合は、変更前の PFM・Manager のサービス情報を削除する必要があります。例えば、変更前の PFM・Manager ホスト名が `hostA` の場合、PFM・Manager ホストで次のようにコマンドを実行して、ホスト `hostA` 上にある PFM・Manager サービスの情報をすべて削除します。

```
jpcctool service delete -id P* -host hostA
jpcctool service delete -id 0* -host hostA
```

`jpcctool service delete` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

なお、コマンド実行時に `KAVE05233-W` メッセージが出力され、サービス情報の削除に失敗する場合、次のように指定してコマンドを再実行してください。

```
jpcctool service delete -id P* -host hostA -force
jpcctool service delete -id 0* -host hostA -force
```

10. PFM・Manager のサービス情報を反映する。

PFM・Web Console にサービス情報の削除を反映するため、PFM・Manager と PFM・Web Console のサービス情報を同期します。サービス情報を同期するには `jpcctool service sync` コマンドを使用してください。

11. 必要に応じて、業務グループの構成を変更する。

ホスト名を変更した PFM・Manager ホストが、業務グループに割り当てられている場合は、業務グループの構成を変更する必要があります。手順の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、ユーザーアカウントと業務グループの管理について説明している章を参照してください。

12. PFM・Agent または PFM・RM ホストで接続先 PFM・Manager の設定を変更する。

ホスト名を変更した PFM・Manager に接続する PFM・Agent または PFM・RM ホストで、接続先 PFM・Manager の設定を変更します。接続先 PFM・Manager の設定の変更は、`jpccconf mgrhost define` コマンドを使用します。例えば、接続先 PFM・Manager のホスト名が `hostB` に変更された場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpccconf mgrhost define -host hostB
```

ここでは、対話形式の実行例を示していますが、`jpccconf mgrhost define` コマンドは非対話形式でも実行できます。`jpccconf mgrhost define` コマンドの詳細につ

いては、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

13. PFM - Agent または PFM - RM ホストでサービスを起動する。

ホスト名を変更した PFM - Manager に接続する PFM - Agent または PFM - RM ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスを起動します。サービスの起動には `jpcspm start` コマンドを使用してください。

14. PFM - Web Console ホストで、接続先 PFM - Manager の設定を変更する。

ホスト名を変更した PFM - Manager に接続する PFM - Web Console ホストで、接続先 PFM - Manager の設定を変更します。接続先 PFM - Manager の設定を変更するには、初期設定ファイル (`config.xml`) ファイルを変更します。詳細については、「5.4.6 (1) (b) 接続先 PFM - Manager の設定」を参照してください。

15. PFM - Web Console ホストでサービスを起動する。

ホスト名を変更した PFM - Manager に接続する PFM - Web Console ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスを起動します。サービスの起動には `jpcwstart` コマンドを使用してください。

16. ヘルスチェックエージェントの定義を再設定する。

ヘルスチェック機能を使用している場合、ホスト名変更後のヘルスチェックエージェントの定義 (手順 1 で解除した定義) を再設定します。

17. アラームの設定を更新する。

次の場合、PFM - Manager ホストの `jpctool alarm` コマンドを使用するか、または監視コンソールから、アラームの設定を更新する必要があります。

- アクションの実行先アクションハンドラに PFM - Manager ホストのアクションハンドラを指定している場合
アラームを編集して、アクションを実行するアクションハンドラとして「PH1 <変更後の PFM - Manager ホスト名>」を設定してください。
- アクションで JP1 イベントを発行している場合
アクションの JP1 イベントの設定を再度行ってください。

アラーム編集方法の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、アラームによる稼働監視について説明している章を参照してください。

18. JP1 システムイベントの設定を更新する。

次のどちらかの条件を満たす場合、PFM - Web Console のブラウザから JP1 システムイベントの設定を更新する必要があります。

- 変更前のホスト名を、JP1 システムイベントの JP1/Base 接続先のイベントサーバ名に指定している。
- 変更前のホスト名を、JP1 システムイベントの監視コンソールのホスト名に指定している。

19. 設定変更後の確認をする。

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

設定変更後は、次の確認をしてください。

- パフォーマンスデータの収集
パフォーマンスデータの収集間隔 (Collection Interval) に指定している時間の 2 倍以上の期間は、稼働させて問題なく収集できるか確認します。
- `jpctool db dump` コマンドの実行
収集したパフォーマンスデータが問題なく出力できるか確認します。
- レポート定義およびアラーム定義の確認
Web ブラウザで作成したレポート定義およびアラームの定義が問題ないか確認します。
- アクション実行の確認
作成したアラームのアクション実行が問題なく実行できるか確認します。

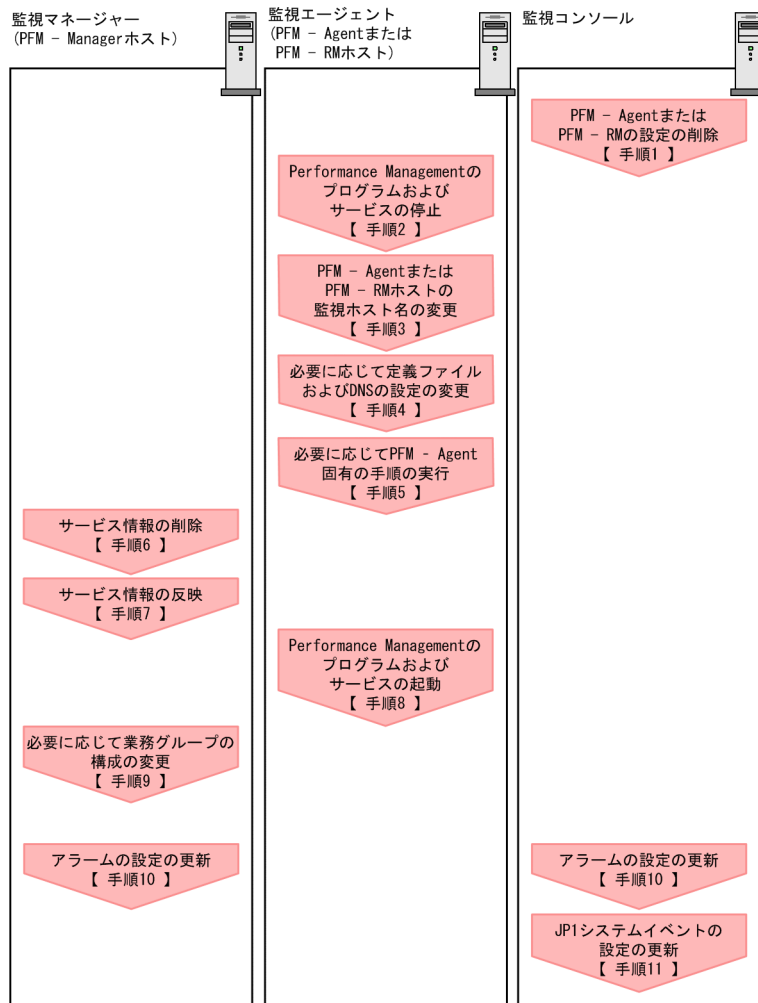
(2) PFM - Agent または PFM - RM ホストの監視ホスト名を変更する

PFM - Agent または PFM - RM ホストの監視ホスト名を変更する場合、次のホストでの作業が必要です。


- PFM - Manager ホスト
- PFM - Agent または PFM - RM ホスト
- 監視コンソール

作業の流れを次の図に示します。

図 5-6 PFM - Agent または PFM - RM ホストの監視ホスト名を変更する流れ



(凡例)

 : Performance Management の作業

【 】 : 参照先

図中の手順番号に沿って作業手順を次に示します。

1. PFM - Agent または PFM - RM の設定を削除する。

ホスト名を変更する PFM - Agent または PFM - RM ホストのエージェント定義の削除（エージェント階層の管理フォルダからの削除，アラームテーブルの関連づけの削除）を，PFM - Web Console のブラウザから行います。

エージェントの定義を変更する手順の詳細については，マニュアル「JP1/ Performance Management 運用ガイド」の，エージェントの監視について説明している章，またはアラームによる稼働監視について説明している章を参照してください

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

い。

2. PFM - Agent または PFM - RM ホストでサービスを停止する。

ホスト名を変更する PFM - Agent または PFM - RM ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止します。サービスの停止には `jpccspm stop` コマンドを使用してください。

3. PFM - Agent または PFM - RM ホストで監視ホスト名を変更する。

`jpccconf host hostmode` コマンドを実行して、監視ホスト名の取得方法を変更します。監視ホスト名の取得方法をエイリアス名 (aliasA) に変更する場合のコマンドの実行例を次に示します。

```
jpccconf host hostmode -mode alias -aliasname aliasA -d d:\¥backup
-dbconvert convert
```

`jpccconf host hostmode` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/ Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

参考

`jpccconf host hostmode` コマンドの `-d` オプションに指定するフォルダには、目安として、指定したホストに存在する PFM - Agent および PFM - RM の Store データベース容量およびインポートディレクトリにあるデータベース容量の合計と同量の空きディスク容量が必要です。ただし、Store データベースの格納先ディレクトリおよびインポートディレクトリを変更している場合、変更後のディレクトリのデータベース容量を基に、必要なディスク容量を算出してください。

例えば、指定したホストに、PFM - Agent for Platform および PFM - Agent for Oracle が存在する場合、それぞれの Store データベースの容量およびインポートディレクトリにあるデータベース容量を合計した値の空きディスク容量が必要となります。なお、PFM - Manager の Master Store サービスの Store データベースの容量は合計に含める必要はありません。

-
4. 必要に応じて、`jpchosts` ファイル、`hosts` ファイル、および DNS の設定を変更する。
 5. 必要に応じて、PFM - Agent 固有の手順を実行する。
PFM - Agent 固有の手順の要否について、次の表に示します。

表 5-12 PFM - Agent 固有の手順の要否

構成		手順の要否と参照先
監視ホスト名を変更するのが、PFM - Agent 09-00 以降の場合		PFM - Agent 固有の手順の要否は、PFM - Agent ごとに異なります。PFM - Agent 固有の手順については、各 PFM - Agent マニュアルの、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。
監視ホスト名を変更するのが、PFM - Agent 09-00 未満の場合	次の PFM - Agent の場合。 <ul style="list-style-type: none"> PFM - Agent for Cosminexus PFM - Agent for Domino PFM - Agent for Enterprise Applications PFM - Agent for Microsoft SQL Server 	PFM - Agent 固有の手順が必要です。固有の手順については「(4) ホスト名変更の際に、必要に応じて行う Agent 固有の手順」を参照してください。
	上記以外の場合	PFM - Agent 固有の手順は不要です。

PFM - Agent 固有の手順が必要な場合は、表の参照先に示された手順を済ませてから次の手順に進んでください。

6. PFM - Manager ホストでサービス情報を削除する。

PFM - Agent または PFM - RM ホストのホスト名を変更しても、変更前のホスト名が付加された Performance Management プログラムのサービス情報は変更されません。PFM - Manager ホストで変更前の PFM - Agent または PFM - RM のサービス情報を削除する必要があります。例えば、変更前の PFM - Agent または PFM - RM ホストのホスト名が hostB の場合、PFM - Agent for Oracle の Agent Store サービスの情報を削除するときは、PFM - Manager ホストで次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpctool service delete -id OS* -host hostB
```

7. PFM - Manager のサービス情報を反映する。

PFM - Web Console にサービス情報の削除を反映するため、PFM - Manager と PFM - Web Console のサービス情報を同期します。サービス情報を同期するには `jpctool service sync` コマンドを使用してください。

同期されたサービス情報は、PFM - Web Console の画面でエージェント階層を再表示すると、画面に反映されます。

8. PFM - Agent または PFM - RM ホストでサービスを起動する。

ホスト名を変更した PFM - Agent または PFM - RM ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスを起動します。サービスの起動には `jpccspm start` コマンドを使用してください。

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

9. 必要に応じて、業務グループの構成を変更する。

ホスト名を変更した PFM - Agent または PFM - RM ホストが、業務グループに割り当てられている場合は、業務グループの構成を変更する必要があります。手順の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、ユーザーアカウントと業務グループの管理について説明している章を参照してください。

10. アラームの設定を更新する。

次の場合、PFM - Manager ホストの `jpctool alarm` コマンドを使用するか、または監視コンソールから、アラームの設定を更新する必要があります。

- アクションの実行先アクションハンドラに PFM - Agent または PFM - RM ホストのアクションハンドラを指定している場合
アラームを編集して、アクションを実行するアクションハンドラとして「PH1 <変更後の PFM - Agent または PFM - RM ホスト名>」を設定してください。

アラーム編集方法の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、アラームによる稼働監視について説明している章を参照してください。

11. JP1 システムイベントの設定を更新する。

次のどちらかの条件を満たす場合、PFM - Web Console のブラウザから JP1 システムイベントの設定を更新する必要があります。

- 変更前のホスト名を、JP1 システムイベントの JP1/Base 接続先のイベントサーバ名に指定している。
- 変更前のホスト名を、JP1 システムイベントの監視コンソールのホスト名に指定している。

12. 設定変更後の確認をする。

設定変更後は、次の確認をしてください。

- パフォーマンスデータの収集
パフォーマンスデータの収集間隔 (Collection Interval) に指定している時間の 2 倍以上の期間は、稼働させて問題なく収集できるか確認します。
- `jpctool db dump` コマンドの実行
収集したパフォーマンスデータが問題なく出力できるか確認します。
- レポート定義およびアラーム定義の確認
Web ブラウザで作成したレポート定義およびアラームの定義が問題ないか確認します。
- アクション実行の確認
作成したアラームのアクション実行が問題なく実行できるか確認します。

(3) 注意事項

監視ホスト名設定機能を使用する場合の注意事項を次に示します。

エイリアス名を使用する場合、エイリアス名からホストの IP アドレスが解決できる必要があります。Performance Management システム以外の IP アドレス解決に影響を

与えたくない場合は、`jpchosts` ファイルで IP アドレスの解決を定義することができます。`jpchosts` ファイルの編集方法については、「5.3.1 ネットワーク構成の変更」を参照してください。ほかのシステムと連携させる場合は、`hosts` ファイルや DNS の定義による IP アドレス解決ができるように設定する必要があります。

監視ホスト名設定機能を使用した場合、PFM - Agent または PFM - RM の種類によっては、共通ログに出力されるホスト名と、実際に稼働しているホスト名が異なる場合があります。

インストールした直後に監視ホスト名設定機能を使用する場合でも「(1) PFM - Manager ホストの監視ホスト名を変更する」および「(2) PFM - Agent または PFM - RM ホストの監視ホスト名を変更する」に記載されている設定を実施する必要があります。

(4) ホスト名変更の際に、必要に応じて行う Agent 固有の手順

ここでは、次の操作の際に必要な PFM - Agent 固有の手順について、製品ごとに説明します。

- PFM - Manager ホストの監視ホスト名を変更する
- PFM - Agent または PFM - RM ホストの監視ホスト名を変更する

具体的に、どのような場合にこの手順が必要になるかについては、「(1) PFM - Manager ホストの監視ホスト名を変更する」または「(2) PFM - Agent または PFM - RM ホストの監視ホスト名を変更する」を参照してください。

(a) PFM - Agent for Cosminexus の場合

作成済みのすべてのインスタンス環境で定義ファイルを編集します。

- 定義ファイル
インストール先フォルダ `%agtc%\agent%` インスタンス名 `%jpcagt.ini`
- 編集内容
[Agent] セクションの `COSMI_HOST` エントリの値に新しいホスト名を設定します。

(b) PFM - Agent for Domino の場合

注意

次の手順は、PFM - Agent for Domino のヘルスチェック機能を使用している場合だけ実行してください。

作成済みのすべてのインスタンス環境で定義ファイルを編集します。

- 定義ファイル
インストール先フォルダ `%agtl%\agent%` インスタンス名 `%jpcagt.ini`
- 編集内容
[Health Check Options] セクションの次のエントリの値に、新しいホスト名を設定します。

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

- [[HTTP Port Check]] サブセクションの Host エントリ
- [[SMTP Port Check]] サブセクションの Host エントリ
- [[POP3 Port Check]] サブセクションの Host エントリ
- [[LDAP Port Check]] サブセクションの Host エントリ
- [[NNTP Port Check]] サブセクションの Host エントリ

(c) PFM - Agent for Enterprise Applications の場合

作成済みのすべてのインスタンス環境に対して、`jpccconf inst setup` コマンドを実行します。例えば、PFM - Agent for Enterprise Applications に「o246bci_SD5_00」という名称のインスタンス環境が存在する場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpccconf inst setup -key agtm -inst o246bci_SD5_00
```

ここでは、対話形式の実行例を示していますが、`jpccconf inst setup` コマンドは非対話形式でも実行できます。

`jpccconf inst setup` コマンドの実行時に「ASHOST」に新しいホスト名を指定し、その他の項目には値を指定する必要はありません。値を指定しない項目は、既存の設定を引き継ぎます。

(d) PFM - Agent for Microsoft SQL Server の場合

作成済みのすべてのインスタンス環境に対して、`jpccconf inst setup` コマンドを実行します。例えば、PFM - Agent for Microsoft SQL Server に「default」という名称のインスタンス環境が存在する場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpccconf inst setup -key agtq -inst default
```

ここでは、対話形式の実行例を示していますが、`jpccconf inst setup` コマンドは非対話形式でも実行できます。

`jpccconf inst setup` コマンドの実行時に「SQL_HOST」に新しいホスト名を指定し、その他の項目には値を指定する必要はありません。値を指定しない項目は、既存の設定を引き継ぎます。

5.3.4 運用開始後のマシンの物理ホスト名の変更

ここでは、Performance Management システムを構築したあとで PFM - Manager ホスト、PFM - Agent ホスト、または PFM - RM ホストのマシンの物理ホスト名を変更する場合に必要な、Performance Management システムでの作業手順を説明します。

初めに、現在 Performance Management システムが使用している監視ホスト名、および監視ホスト名の取得方法を確認します。Performance Management システムが使用している監視ホスト名、および監視ホスト名の取得方法を確認するには、次のコマンドを実行します。`hostmode` は監視ホスト名の取得方法を示し、`hostname` は監視ホスト名を

示します。

```
jpcconf host hostmode -display
```

表示例

```
hostmode : hostname
hostname : hostA
```

監視ホスト名の取得方法と監視ホスト名について次の表に示します。

表 5-13 監視ホスト名の取得方法と監視ホスト名

監視ホスト名の取得方法	監視ホスト名
hostname	物理ホスト名 (hostname コマンドで表示される値)
alias	エイリアス名

監視ホスト名の取得方法が alias に設定されている場合、マシンの物理ホスト名を変更しても Performance Management システムの監視ホスト名はエイリアス名であるため、ここで説明する変更手順を実施する必要はありません。

監視ホスト名の取得方法が hostname に設定されている場合は、「(1) PFM - Manager ホスト名を変更する」または「(2) PFM - Agent または PFM - RM ホスト名を変更する」を実施する必要があります。

なお、jpcconf host hostname コマンドを実行した場合、定義情報や性能情報など変更前の情報はすべて引き継がれます。jpcconf host hostname コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

注意

jpcconf host コマンドの実行中に他コマンドを実行しないでください。ほかのコマンドを実行した場合、jpcconf host コマンドまたは他コマンドの実行に失敗することがあります。

(1) PFM - Manager ホスト名を変更する

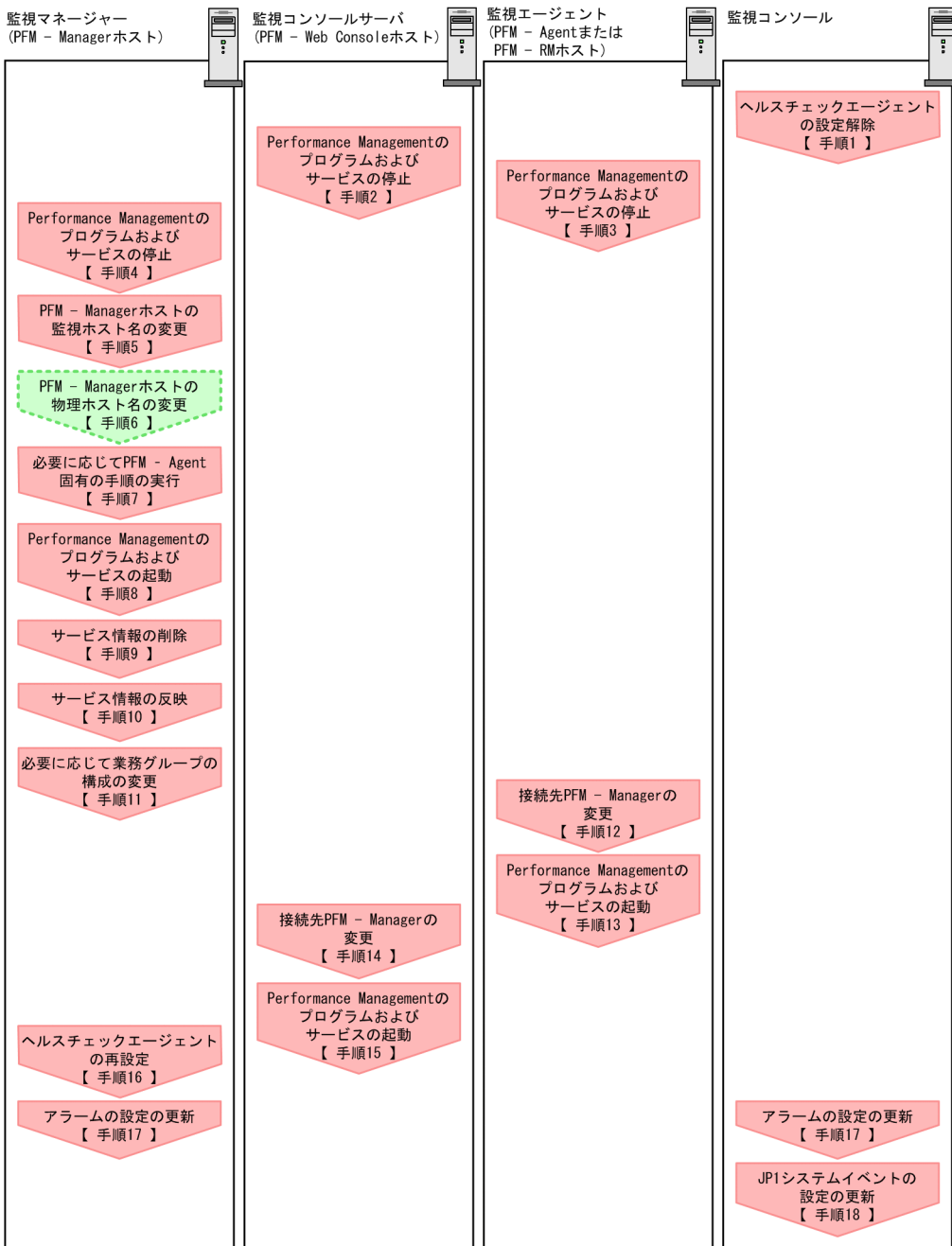
PFM - Manager ホスト名を変更する場合、次のホストでの作業が必要です。

- PFM - Manager ホスト
- PFM - Web Console ホスト
- PFM - Agent または PFM - RM ホスト
- 監視コンソール

作業の流れを次の図に示します。

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

図 5-7 PFM - Manager ホスト名を変更する流れ



(凡例)

■ : Performance Managementの作業

■ : ホスト名変更作業

【 】 : 参照先

図中の手順番号に沿って作業手順を次に示します。

1. ヘルスチェックエージェントの設定を解除する。
ヘルスチェック機能を使用している場合、ヘルスチェックエージェントのエージェント定義の削除（エージェント階層の管理フォルダからの削除，アラームテーブルの関連づけの削除）を，PFM - Web Console のブラウザから行います。エージェントの定義を変更する手順の詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，エージェントの監視について説明している章，またはアラームによる稼働監視について説明している章を参照してください。
2. PFM - Web Console ホストでサービスを停止する。
ホスト名を変更する PFM - Manager に接続する PFM - Web Console ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止します。サービスの停止には `jpcwstop` コマンドを使用してください。
3. PFM - Agent または PFM - RM ホストでサービスを停止する。
ホスト名を変更する PFM - Manager に接続する PFM - Agent または PFM - RM ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止します。サービスの停止には `jpcspm stop` コマンドを使用してください。
4. PFM - Manager ホストでサービスを停止する。
ホスト名を変更する PFM - Manager ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止します。サービスの停止には `jpcspm stop` コマンドを使用してください。
5. PFM - Manager ホストの監視ホスト名を変更する。
`jpcconf host hostname` コマンドを実行して監視ホスト名を変更します。
物理ホスト名を `hostB` に変更する場合のコマンドの実行例を次に示します。


```
jpcconf host hostname -newhost hostB -d d:¥backup -dbconvert
convert
```


`jpcconf host hostname` コマンドの詳細については，マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の，コマンドについて説明している章を参照してください。

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

参考

jpccconf host hostname コマンドの -d オプションに指定するフォルダには、目安として、指定したホストに存在する PFM - Agent および PFM - RM の Store データベース容量およびインポートディレクトリにあるデータベース容量の合計と同量の空きディスク容量が必要です。ただし、Store データベースの格納先ディレクトリおよびインポートディレクトリを変更している場合、変更後のディレクトリのデータベース容量を基に、必要なディスク容量を算出してください。

例えば、指定したホストに、ヘルスチェックエージェント、PFM - Agent for Platform、および PFM - Agent for Oracle が存在する場合、それぞれの Store データベースの容量およびインポートディレクトリにあるデータベース容量を合計した値の空きディスク容量が必要となります。なお、PFM - Manager の Master Store サービスの Store データベースの容量は合計に含める必要はありません。

6. PFM - Manager ホストの物理ホスト名を変更する。

PFM - Manager ホストの物理ホスト名を変更します。必要に応じて、jpchosts ファイル、hosts ファイル、および DNS の設定を変更します。マシンの再起動が必要な場合は、再起動後に Performance Management のプログラムおよびサービスが自動起動しないように、設定を変更しておいてください。PFM - Manager ホスト上での作業が完了したあと、Performance Management のプログラムおよびサービスが自動起動するように、設定を元に戻してください。

7. 必要に応じて、PFM - Agent 固有の手順を実行する。

PFM - Manager ホストに PFM - Agent がインストールされている構成では、PFM - Agent 固有の手順が必要な場合があります。PFM - Agent 固有の手順の要否について、次の表に示します。

表 5-14 PFM - Agent 固有の手順の要否

構成		手順の要否と参照先
PFM - Manager ホストにインストールされているのが、PFM - Agent 09-00 以降の場合		PFM - Agent 固有の手順の要否は、PFM - Agent ごとに異なります。PFM - Agent 固有の手順については、各 PFM - Agent マニュアルの、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。
PFM - Manager ホストにインストールされているのが、PFM - Agent 09-00 未満の場合	次の PFM - Agent の場合。 <ul style="list-style-type: none">PFM - Agent for CosminexusPFM - Agent for DominoPFM - Agent for Enterprise ApplicationsPFM - Agent for Microsoft SQL Server	PFM - Agent 固有の手順が必要です。固有の手順については「(5) ホスト名変更の際に、必要に応じて行う Agent 固有の手順」を参照してください。

	構成	手順の要否と参照先
	上記以外の場合	PFM - Agent 固有の手順は不要です。

PFM - Agent 固有の手順が必要な場合は、表の参照先に示された手順を済ませてから次の手順に進んでください。

- PFM - Manager ホストでサービスを起動する。
PFM - Manager ホスト上の Performance Management のプログラムおよびサービスを起動します。サービスの起動には `jpccspm start` コマンドを使用します。

- PFM - Manager ホストでサービス情報を削除する。
PFM - Manager ホストのホスト名を変更しても、変更前のホスト名が付加された Performance Management プログラムのサービス情報は変更されません。PFM - Manager ホストのホスト名を変更した場合は、変更前の PFM - Manager のサービス情報を削除する必要があります。例えば、変更前の PFM - Manager ホスト名が `hostA` の場合、PFM - Manager ホストで次のようにコマンドを実行して、ホスト `hostA` 上にある PFM - Manager サービスの情報をすべて削除します。

```
jpcc tool service delete -id P* -host hostA
jpcc tool service delete -id 0* -host hostA
```

`jpcc tool service delete` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

なお、コマンド実行時に `KAVE05233-W` メッセージが出力され、サービス情報の削除に失敗する場合、次のように指定してコマンドを再実行してください。

```
jpcc tool service delete -id P* -host hostA -force
jpcc tool service delete -id 0* -host hostA -force
```

- PFM - Manager のサービス情報を反映する。
PFM - Web Console にサービス情報の削除を反映するため、PFM - Manager と PFM - Web Console のサービス情報を同期します。サービス情報を同期するには `jpcc tool service sync` コマンドを使用してください。

- 必要に応じて、業務グループの構成を変更する。
ホスト名を変更した PFM - Manager ホストが、業務グループに割り当てられている場合は、業務グループの構成を変更する必要があります。手順の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、ユーザーアカウントと業務グループの管理について説明している章を参照してください。

- PFM - Agent または PFM - RM ホストで接続先 PFM - Manager の設定を変更する。
ホスト名を変更した PFM - Manager に接続する PFM - Agent または PFM - RM ホス

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

トで、接続先 PFM - Manager の設定を変更します。接続先 PFM - Manager の設定の変更は、`jpccconf mgrhost define` コマンドを使用します。例えば、接続先 PFM - Manager のホスト名が `hostB` に変更された場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpccconf mgrhost define -host hostB
```

ここでは、対話形式の実行例を示していますが、`jpccconf mgrhost define` コマンドは非対話形式でも実行できます。`jpccconf mgrhost define` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

13. PFM - Agent または PFM - RM ホストでサービスを起動する。

ホスト名を変更した PFM - Manager に接続する PFM - Agent または PFM - RM ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスを起動します。サービスの起動には `jpccspm start` コマンドを使用してください。

14. PFM - Web Console ホストで、接続先 PFM - Manager の設定を変更する。

ホスト名を変更した PFM - Manager に接続する PFM - Web Console ホストで、接続先 PFM - Manager の設定を変更します。接続先 PFM - Manager の設定を変更するには、初期設定ファイル (`config.xml`) ファイルを変更します。詳細については、「5.4.6 (1) (b) 接続先 PFM - Manager の設定」を参照してください。

15. PFM - Web Console ホストでサービスを起動する。

ホスト名を変更した PFM - Manager に接続する PFM - Web Console ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスを起動します。サービスの起動には `jpccwstart` コマンドを使用してください。

16. ヘルスチェックエージェントの定義を再設定する。

ヘルスチェック機能を利用している場合、ホスト名変更後のヘルスチェックエージェントの定義 (手順 1 で解除した定義) を再設定します。

17. アラームの設定を更新する。

次の場合、PFM - Manager ホストの `jpcctool alarm` コマンドを使用するか、または監視コンソールから、アラームの設定を更新する必要があります。

- アクションの実行先アクションハンドラに PFM - Manager ホストのアクションハンドラを指定している場合
アラームを編集して、アクションを実行するアクションハンドラとして「PH1 <変更後の PFM - Manager ホスト名>」を設定してください。
- アクションで JP1 イベントを発行している場合
アクションの JP1 イベントの設定を再度行ってください。

アラーム編集方法の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、アラームによる稼働監視について説明している章を参照してください。

18. JP1 システムイベントの設定を更新する。

次のどちらかの条件を満たす場合、PFM・Web Console のブラウザから JP1 システムイベントの設定を更新する必要があります。

- 変更前のホスト名を、JP1 システムイベントの JP1/Base 接続先のイベントサーバ名に指定している。
- 変更前のホスト名を、JP1 システムイベントの監視コンソールのホスト名に指定している。

19. 設定変更後の確認をする。

設定変更後は、次の確認をしてください。

- パフォーマンスデータの収集
パフォーマンスデータの収集間隔 (Collection Interval) に指定している時間の 2 倍以上の期間は、稼働させて問題なく収集できるか確認します。
- jpctool db dump コマンドの実行
収集したパフォーマンスデータが問題なく出力できるか確認します。
- レポート定義およびアラーム定義の確認
Web ブラウザで作成したレポート定義およびアラームの定義が問題ないか確認します。
- アクション実行の確認
作成したアラームのアクション実行が問題なく実行できるか確認します。

20. ネットワーク管理製品 (NNM) と連携した稼働監視を実施している場合は、NNM に再度ログインする。

(2) PFM - Agent または PFM - RM ホスト名を変更する

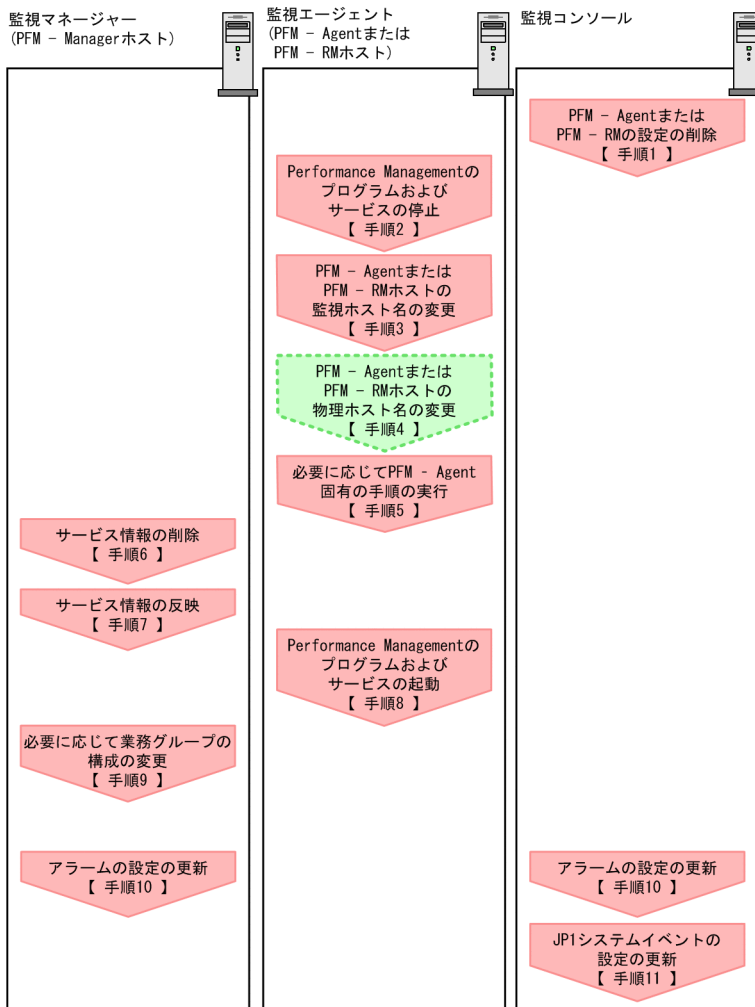
PFM・Agent または PFM・RM ホスト名を変更する場合、次のホストでの作業が必要です。

- PFM・Manager ホスト
- PFM・Agent または PFM・RM ホスト
- 監視コンソール

作業の流れを次の図に示します。

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

図 5-8 PFM - Agent または PFM - RM ホストの監視ホスト名を変更する流れ



(凡例)

■ : Performance Managementの作業

■ : ホスト名変更作業

【 】 : 参照先

図中の手順番号に沿って作業手順を次に示します。

1. PFM - Agent または PFM - RM の設定を削除する。

ホスト名を変更する PFM - Agent または PFM - RM ホストのエージェント定義の削除 (エージェント階層の管理フォルダからの削除, アラームテーブルの関連づけの削除) を, PFM - Web Console のブラウザから行います。

エージェントの定義を変更する手順の詳細については, マニュアル「JP1/

Performance Management 運用ガイド」の, エージェントの監視について説明して

いる章、またはアラームによる稼働監視について説明している章を参照してください。

2. PFM - Agent または PFM - RM ホストでサービスを停止する。
 ホスト名を変更する PFM - Agent または PFM - RM ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止します。サービスの停止には `jpcspm stop` コマンドを使用してください。
3. PFM - Agent または PFM - RM ホストで監視ホスト名を変更する。
`jpcconf host hostname` コマンドを実行して監視ホスト名を変更します。
 物理ホスト名を `hostB` に変更する場合のコマンドの実行例を次に示します。

```
jpcconf host hostname -newhost hostB -d d:\¥backup -dbconvert
convert
```

`jpcconf host hostname` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/ Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

参考

`jpcconf host hostname` コマンドの `-d` オプションに指定するフォルダには、目安として、指定したホストに存在する PFM - Agent および PFM - RM の Store データベース容量およびインポートディレクトリにあるデータベース容量の合計と同量の空きディスク容量が必要です。ただし、Store データベースの格納先ディレクトリおよびインポートディレクトリを変更している場合、変更後のディレクトリのデータベース容量を基に、必要なディスク容量を算出してください。

例えば、指定したホストに、PFM - Agent for Platform および PFM - Agent for Oracle が存在する場合、それぞれの Store データベースの容量およびインポートディレクトリにあるデータベース容量を合計した値の空きディスク容量が必要となります。なお、PFM - Manager の Master Store サービスの Store データベースの容量は合計に含める必要はありません。

4. PFM - Agent または PFM - RM ホストの物理ホスト名を変更する。
 PFM - Agent または PFM - RM ホストの物理ホスト名を変更します。必要に応じて、`jpchosts` ファイル、`hosts` ファイル、および DNS の設定を変更します。マシンの再起動が必要な場合は、再起動後に Performance Management のプログラムおよびサービスが自動起動しないように、設定を変更しておいてください。PFM - Manager ホスト上での作業が完了したあと、Performance Management のプログラムおよびサービスが自動起動するように、設定を元に戻してください。
5. 必要に応じて、PFM - Agent 固有の手順を実行する。
 PFM - Agent 固有の手順の要否について、次の表に示します。

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

表 5-15 PFM - Agent 固有の手順の要否

構成		手順の要否と参照先
監視ホスト名を変更するのが、PFM - Agent 09-00 以降の場合		PFM - Agent 固有の手順の要否は、PFM - Agent ごとに異なります。 PFM - Agent 固有の手順については、各 PFM - Agent マニュアルの、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。
監視ホスト名を変更するのが、PFM - Agent 09-00 未満の場合	次の PFM - Agent の場合。 <ul style="list-style-type: none"> PFM - Agent for Cosminexus PFM - Agent for Domino PFM - Agent for Enterprise Applications PFM - Agent for Microsoft SQL Server 	PFM - Agent 固有の手順が必要です。固有の手順については「(5) ホスト名変更の際に、必要に応じて行う Agent 固有の手順」を参照してください。
	上記以外の場合	PFM - Agent 固有の手順は不要です。

PFM - Agent 固有の手順が必要な場合は、表の参照先に示された手順を済ませてから次の手順に進んでください。

6. PFM - Manager ホストでサービス情報を削除する。

PFM - Agent または PFM - RM ホストのホスト名を変更しても、変更前のホスト名が付加された Performance Management プログラムのサービス情報は変更されません。PFM - Manager ホストで変更前の PFM - Agent または PFM - RM のサービス情報を削除する必要があります。例えば、変更前の PFM - Agent または PFM - RM ホストのホスト名が hostB の場合、PFM - Agent for Oracle の Agent Store サービスの情報を削除するときは、PFM - Manager ホストで次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpctool service delete -id OS* -host hostB
```

7. PFM - Manager のサービス情報を反映する。

PFM - Web Console にサービス情報の削除を反映するため、PFM - Manager と PFM - Web Console のサービス情報を同期します。サービス情報を同期するには jpctool service sync コマンドを使用してください。

同期されたサービス情報は、PFM - Web Console の画面でエージェント階層を再表示すると、画面に反映されます。

8. PFM - Agent または PFM - RM ホストでサービスを起動する。

ホスト名を変更した PFM - Agent または PFM - RM ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスを起動します。サービスの起動には jpcspm start コマンドを使用してください。

9. 必要に応じて、業務グループの構成を変更する。

ホスト名を変更した PFM - Agent または PFM - RM ホストが、業務グループに割り当てられている場合は、業務グループの構成を変更する必要があります。手順の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、ユーザーアカウントと業務グループの管理について説明している章を参照してください。

10. アラームの設定を更新する。

次の場合、PFM - Manager ホストの `jpctool alarm` コマンドを使用するか、または監視コンソールから、アラームの設定を更新する必要があります。

- アクションの実行先アクションハンドラに PFM - Agent または PFM - RM ホストのアクションハンドラを指定している場合
アラームを編集して、アクションを実行するアクションハンドラとして「PH1 <変更後の PFM - Agent または PFM - RM ホスト名>」を設定してください。

アラーム編集方法の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、アラームによる稼働監視について説明している章を参照してください。

11. JP1 システムイベントの設定を更新する。

次のどちらかの条件を満たす場合、PFM - Web Console のブラウザから JP1 システムイベントの設定を更新する必要があります。

- 変更前のホスト名を、JP1 システムイベントの JP1/Base 接続先のイベントサーバ名に指定している。
- 変更前のホスト名を、JP1 システムイベントの監視コンソールのホスト名に指定している。

12. 設定変更後の確認をする。

設定変更後は、次の確認をしてください。

- パフォーマンスデータの収集
パフォーマンスデータの収集間隔 (Collection Interval) に指定している時間の 2 倍以上の期間は、稼働させて問題なく収集できるか確認します。
- `jpctool db dump` コマンドの実行
収集したパフォーマンスデータが問題なく出力できるか確認します。
- レポート定義およびアラーム定義の確認
Web ブラウザで作成したレポート定義およびアラームの定義が問題ないか確認します。
- アクション実行の確認
作成したアラームのアクション実行が問題なく実行できるか確認します。

(3) PFM - RM の監視対象ホスト名を変更する

PFM - RM の監視対象ホスト名を変更する手順を次に示します。

(a) 監視対象の監視対象名を変更しない場合

監視対象に対応したリモートエージェントの監視対象ホスト名の設定を、新しいホスト

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

名に変更する必要があります。リモートエージェント (インスタンス名 : inst1) の監視対象ホスト名を hostA から hostB に変更する場合の、コマンドの実行手順を次に示します。

1. `jpccconf target setup -key RMPlatform -inst inst1 -target hostA` コマンドを実行する。

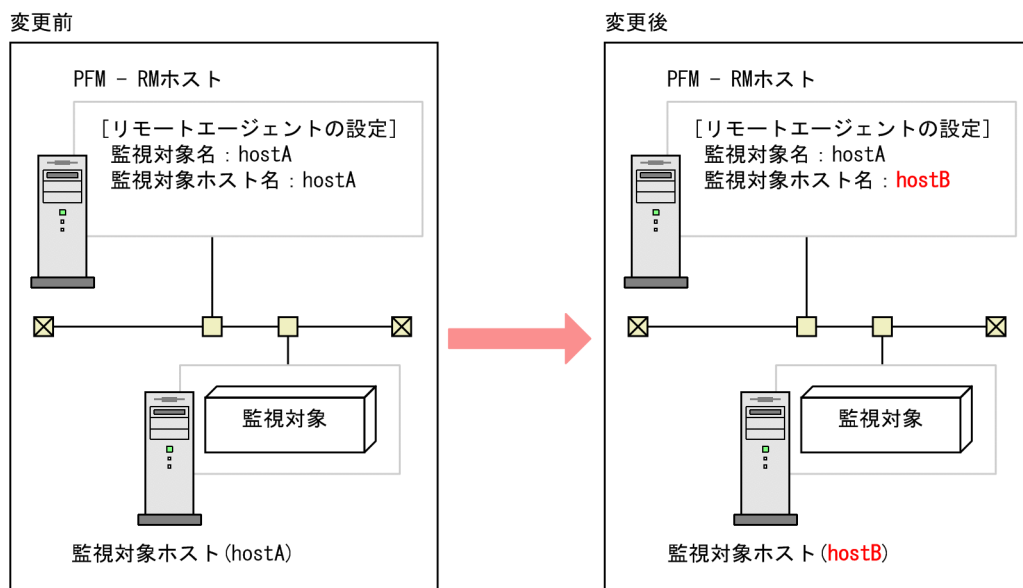
ここでは、対話形式の実行例を示していますが、`jpccconf target setup` コマンドは非対話形式でも実行できます。`jpccconf target setup` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

2. Target Host: hostB と入力する。

コマンドの指示に従って監視対象ホストの設定項目を入力します。設定項目を入力したら、リターンキーを押して設定してください。

PFM - RM の監視対象ホスト名の変更例を次の図に示します。

図 5-9 PFM - RM の監視対象ホスト名の変更例 (監視対象の監視対象名を変更しない場合)



(b) 監視対象の監視対象名を変更する場合

監視対象に対応したリモートエージェントを再作成する必要があります。リモートエージェントを再作成する手順を次に示します。

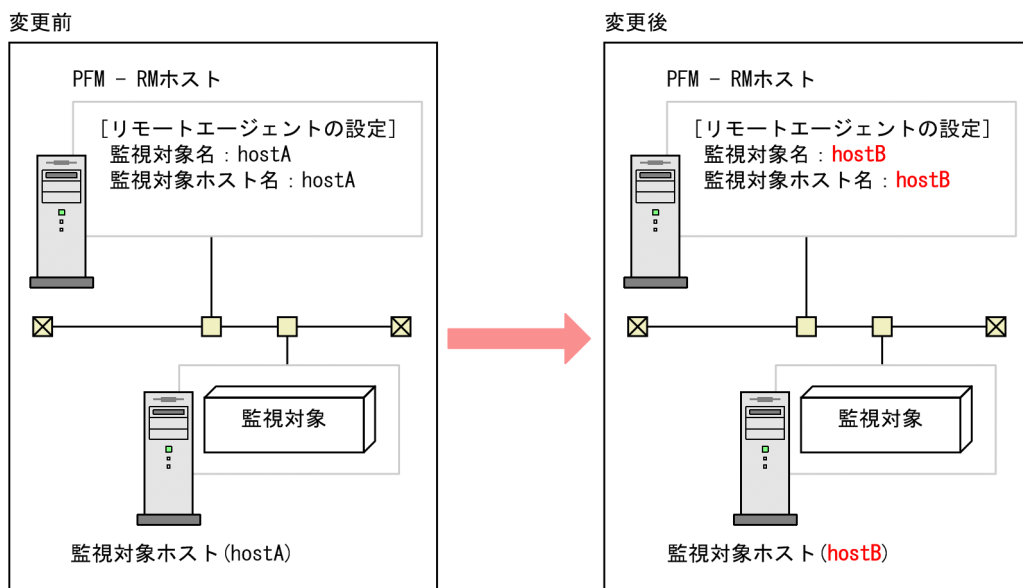
1. `jpccconf target unsetup` コマンドを実行して、監視対象に対応したリモートエージェントを削除する。
2. `jpccconf target setup` コマンドを実行して、新しい監視対象ホスト名でリモート

エージェントを追加する。

なお、監視対象のパフォーマンスデータは引き継げません。

PFM - RM の監視対象ホスト名の変更例を次の図に示します。

図 5-10 PFM - RM の監視対象ホスト名の変更例 (監視対象の監視対象名を変更する場合)



jpccconf target setup コマンドおよび jpccconf target unsetup コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

(4) PFM - Web Console のホスト名を変更する

PFM - Web Console のホスト名を変更する手順を次に示します。

1. PFM - Web Console ホストでサービスを停止する。
ホスト名を変更する PFM - Manager に接続する PFM - Web Console ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止します。サービスの停止には jpcwstop コマンドを使用してください。
2. 通信で使用するホスト名の設定でホスト名を変更している場合、変更後のホスト名にホスト名を変更する。
PFM - Web Console ホストで使用している IP アドレスが、PFM - Manager ホストからは通信できない IP アドレスである場合で、初期設定ファイル (config.xml) に PFM - Web Console ホストのホスト名を指定しているときに必要な手順です。
変更方法については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

の付録の、PFM - Manager と PFM - Web Console の通信で使用するホスト名の設定について説明している個所を参照してください。

3. 統合管理製品 (JP1/IM) と連携した稼働監視をしている場合、変更後のホスト名にホスト名を変更する。

設定しているイベントによって、ホスト名の該当個所を変更後のホスト名に変更します。

- JP1 ユーザーイベントを設定している場合

モニター画面呼び出し定義ファイル、および統合機能メニュー定義ファイルのホスト名を変更後のホスト名に変更します。

- JP1 システムイベントを設定している場合

[JP1 Event Send Host] - [Monitoring Console Host] プロパティの設定を変更後のホスト名に変更します。

統合管理製品 (JP1/IM) の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、統合管理製品 (JP1/IM) と連携した稼働監視について説明している章を参照してください。

4. ネットワーク管理製品 (NNM) と連携した稼働監視をしている場合、変更後のホスト名にホスト名を変更する。

jpcnnm.ini ファイルの PFM - Web Console のホスト名を変更後のホスト名に変更します。

ネットワーク管理製品 (NNM) の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、ネットワーク管理製品 (NNM) と連携した稼働監視について説明している章を参照してください。

5. PFM - Web Console ホストの物理ホスト名を変更する。

PFM - Web Console ホストの物理ホスト名を変更します。マシンの再起動が必要な場合は、再起動後に Performance Management のプログラムおよびサービスが自動起動しないように、設定を変更しておいてください。PFM - Web Console ホスト上での作業が完了したあと、Performance Management のプログラムおよびサービスが自動起動するように、設定を元に戻してください。

6. PFM - Web Console ホストで、サービスを起動する。

ホスト名を変更した PFM - Manager に接続する PFM - Web Console ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスを起動します。サービスの起動には jpcwstart コマンドを使用してください。

7. 統合管理製品 (JP1/IM) と連携している場合は、統合管理製品 (JP1/IM) を再起動する。

(5) ホスト名変更の際に、必要に応じて行う Agent 固有の手順

ここでは、次の操作の際に必要な PFM - Agent 固有の手順について、製品ごとに説明します。

- PFM - Manager ホスト名を変更する
- PFM - Agent または PFM - RM ホスト名を変更する

具体的に、どのような場合にこの手順が必要になるかについては、「(1) PFM - Manager ホスト名を変更する」または「(2) PFM - Agent または PFM - RM ホスト名を変更する」を参照してください。

(a) PFM - Agent for Cosminexus の場合

作成済みのすべてのインスタンス環境で定義ファイルを編集します。

- 定義ファイル
インストール先フォルダ %agt%agent% インスタンス名 %jpcagt.ini
- 編集内容
[Agent] セクションの COSMI_HOST エントリの値に新しいホスト名を設定します。

(b) PFM - Agent for Domino の場合

注意

次の手順は、PFM - Agent for Domino のヘルスチェック機能を使用している場合だけ実行してください。

作成済みのすべてのインスタンス環境で定義ファイルを編集します。

- 定義ファイル
インストール先フォルダ %agt%agent% インスタンス名 %jpcagt.ini
- 編集内容
[Health Check Options] セクションの次のエントリの値に、新しいホスト名を設定します。
 - [[HTTP Port Check]] サブセクションの Host エントリ
 - [[SMTP Port Check]] サブセクションの Host エントリ
 - [[POP3 Port Check]] サブセクションの Host エントリ
 - [[LDAP Port Check]] サブセクションの Host エントリ
 - [[NNTP Port Check]] サブセクションの Host エントリ

(c) PFM - Agent for Enterprise Applications の場合

作成済みのすべてのインスタンス環境に対して、`jpcconf inst setup` コマンドを実行します。例えば、PFM - Agent for Enterprise Applications に「o246bci_SD5_00」という名称のインスタンス環境が存在する場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpcconf inst setup -key agtm -inst o246bci_SD5_00
```

ここでは、対話形式の実行例を示していますが、`jpcconf inst setup` コマンドは非対話形式でも実行できます。

`jpcconf inst setup` コマンドの実行時に「ASHOST」に新しいホスト名を指定し、

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

その他の項目には値を指定する必要はありません。値を指定しない項目は、既存の設定を引き継ぎます。

(d) PFM - Agent for Microsoft SQL Server の場合

作成済みのすべてのインスタンス環境に対して、`jpcconf inst setup` コマンドを実行します。例えば、PFM - Agent for Microsoft SQL Server に「default」という名称のインスタンス環境が存在する場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpcconf inst setup -key agtq -inst default
```

ここでは、対話形式の実行例を示していますが、`jpcconf inst setup` コマンドは非対話形式でも実行できます。

`jpcconf inst setup` コマンドの実行時に「SQL_HOST」に新しいホスト名を指定し、その他の項目には値を指定する必要はありません。値を指定しない項目は、既存の設定を引き継ぎます。

5.4 Performance Management の運用方式の変更

稼働監視システムのシステム管理者の変更や、収集した稼働監視データの運用手順の変更などで、システムの Performance Management の運用方式を変更する場合があります。ここでは、Performance Management の運用方式を変更する手順を説明します。

5.4.1 共通メッセージログのファイルサイズ設定

共通メッセージログは、PFM・Manager、PFM・Base、PFM・Agent、および PFM・RM で出力されます。デフォルトでは、共通メッセージログのログファイルとして、2,048 キロバイトのファイルが 2 ファイル使用されます。共通メッセージログのファイルサイズを変更したい場合に必要な設定です。

ファイルサイズを変更したい場合は、jpccomm.ini ファイルの内容を直接編集します。jpccomm.ini ファイルは、次の場所に格納されています。

物理ホストの場合

Windows の場合

インストール先フォルダ

UNIX の場合

/opt/jp1pc/

論理ホストの場合

Windows の場合

環境ディレクトリ ¥jp1pc¥

UNIX の場合

環境ディレクトリ /jp1pc/

jpccomm.ini ファイルで編集するラベル名、設定できる値の範囲などを次の表に示します。

表 5-16 共通メッセージログのファイルサイズ設定項目 (jpccomm.ini の [Common Section] セクション)

設定項目	ラベル名	設定できる値	デフォルト値
共通メッセージログを格納するファイルのサイズ (キロバイト)	Common Msglog Size	4 ~ 32,768	2,048

手順を次に示します。

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

1. Performance Management のプログラムおよびサービスを停止する。
Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、すべて停止してください。
2. テキストエディターなどで、jpccomm.ini ファイルを開く。
3. 共通メッセージログのファイルサイズを変更する。
次に示す網掛け部分を修正してください。

```
      :  
[Common Section]
```

```
Common Msglog Size=2048
```

```
      :
```

注意

- 行頭および「=」の前後には空白文字を入力しないでください。
- jpccomm.ini ファイルには、共通メッセージログのファイルサイズ以外にも、定義情報が記述されています。[Common Section] セクションの Common Msglog Size 以外の値は変更しないようにしてください。必要な項目以外の値を変更すると、Performance Management が正常に動作しなくなることがあります。

4. jpccomm.ini ファイルを保存して閉じる。

注意

- 共通メッセージログファイルの設定は、同一ホスト上の Performance Management プログラムで共通にしてください。
- jpccomm.ini ファイルの設定内容をインストール時の状態に戻すには、jpccomm.ini ファイルの格納先フォルダにある jpccomm.ini.model ファイルを jpccomm.ini ファイルにコピーしてください。

5.4.2 イベントデータの格納先の変更

PFM - Agent または PFM - RM で発生したイベントデータは、PFM - Manager の Master Store サービスの Store データベースで管理されます。

Store データベースで管理されるイベントデータの、次の格納先フォルダを変更したい場合は、jpcsto.ini ファイルの内容を直接編集します。

- 格納先フォルダ
- バックアップ先フォルダ
- エクスポート先フォルダ

jpcsto.ini ファイルは、次の場所に格納されています。

物理ホストの場合

Windows の場合

インストール先フォルダ ¥mgr¥store¥jpcsto.ini

UNIX の場合

/opt/jplpc/mgr/store/jpcsto.ini

論理ホストの場合

Windows の場合

環境ディレクトリ ¥jplpc¥mgr¥store¥jpcsto.ini

UNIX の場合

環境ディレクトリ /jplpc/mgr/store/jpcsto.ini

(1) jpcsto.ini ファイルの設定項目

jpcsto.ini ファイルで編集するラベル名, 設定できる値の範囲などを次に示します。

表 5-17 イベントデータの格納先の設定項目 (jpcsto.ini の [Data Section] セクション)

設定項目	ラベル名	設定できる値 ¹	デフォルト値
イベントデータを作成するフォルダ	Store Dir 2	1 ~ 127 バイトの絶対パス	物理ホストの場合 <ul style="list-style-type: none"> Windows の場合 インストール先フォルダ ¥mgr¥store¥ UNIX の場合 /opt/jplpc/mgr/store/ 論理ホストの場合 <ul style="list-style-type: none"> Windows の場合 環境ディレクトリ ¥jplpc¥mgr¥store¥ UNIX の場合 環境ディレクトリ /jplpc/mgr/store/

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

設定項目	ラベル名	設定できる値 ¹	デフォルト値
イベントデータのバックアップ先フォルダ	Backup Dir ²	1 ~ 127 バイトの絶対パス	物理ホストの場合 <ul style="list-style-type: none"> Windows の場合 インストール先フォルダ ¥mgr¥store¥backup¥ UNIX の場合 /opt/jplpc/mgr/store/backup/ 論理ホストの場合 <ul style="list-style-type: none"> Windows の場合 環境ディレクトリ ¥jplpc¥mgr¥store¥backup¥ UNIX の場合 環境ディレクトリ / jplpc/mgr/store/backup/
イベントデータを退避する場合の最大世代番号	Backup Save	1 ~ 9	5
イベントデータのエクスポート先フォルダ	Dump Dir ²	1 ~ 127 バイトの絶対パス	物理ホストの場合 <ul style="list-style-type: none"> Windows の場合 インストール先フォルダ ¥mgr¥store¥dump¥ UNIX の場合 /opt/jplpc/mgr/store/dump/ 論理ホストの場合 <ul style="list-style-type: none"> Windows の場合 環境ディレクトリ ¥jplpc¥mgr¥store¥dump¥ UNIX の場合 環境ディレクトリ / jplpc/mgr/store/dump/

注 1

- フォルダ名は、すべて絶対パスで指定してください。
- 指定できる文字は、次の文字を除く、半角英数字、半角記号および半角空白です。
; , * ? ' " < > |
- 指定値に誤りがある場合、Master Store サービスは起動できません。

注 2

Store Dir , Backup Dir , および Dump Dir には、それぞれ重複したフォルダを指定できません。

(2) jpcsto.ini ファイルの編集手順

手順を次に示します。

1. PFM - Manager の Master Store サービスを停止する。
2. テキストエディターなどで、jpcsto.ini ファイルを開く。
3. イベントデータの格納先フォルダなどを変更する。
次に示す網掛け部分を、必要に応じて修正してください。

```

:
[Data Section]

```

```
Store Dir=.
```

```
Backup Dir=.%backup
```

```
Backup Save=5
```

```
Dump Dir=.%dump
```

```

:
```

注意

- 行頭および「=」の前後には空白文字を入力しないでください。
- 各ラベルの値の「.」は、Master Store サービスの Store データベースのデフォルト格納先フォルダを意味します。デフォルト格納先フォルダは次のとおりです。

物理ホストの場合

Windows の場合

インストール先フォルダ %mgr%\store%

UNIX の場合

/opt/jplpc/mgr/store/

論理ホストの場合

Windows の場合

環境ディレクトリ %jplpc%\mgr%\store%

UNIX の場合

環境ディレクトリ /jplpc/mgr/store/

格納先を変更する場合、その格納先フォルダからの相対パスか、または絶対パスで記述してください。

- Store データベースの格納先を変更する場合、指定するフォルダを事前に作成してください。
- jpcsto.ini ファイルには、データベースの格納先フォルダ以外にも、定義情報が記述されています。[Data Section] セクション以外の値は変更しないようにしてください。[Data Section] セクション以外の値を変更すると、Performance Management が正常に動作しなくなることがあります。

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

4. jpcsto.ini ファイルを保存して閉じる。
5. Performance Management のプログラムおよびサービスを起動する。

5.4.3 通信回線の切断の設定

Performance Management は、接続先との通信終了後 70 秒間は回線を切断しません。接続時間によって課金されるような環境で使用する場合には注意してください。

通信終了後、すぐに回線を切断したい場合は、次のように jpccomm.ini ファイルを編集してください。

1. Performance Management のプログラムおよびサービスを停止する。
Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、すべて停止してください。

2. テキストエディターなどで、jpccomm.ini ファイルを開く。

3. 回線の接続モードを変更する。

jpccomm.ini ファイル中のすべてのセクションで次のラベルの値を変更します。

```
NS Keepalive Mode=0
```

4. jpccomm.ini ファイルを保存して閉じる。
5. Performance Management のプログラムおよびサービスを起動する。

注意

PFM・Web Console と PFM・Manager 間では、定期的に通信をしているため、回線は常に接続している状態となります。このためホスト間の通信に WAN 環境などの通信時間や通信量に応じて課金されるネットワークを使用することは推奨しません。

5.4.4 アラームテーブル複数バインド機能の設定

アラームテーブル複数バインド機能を利用するには、PFM・Manager および PFM・Web Console が 08-50 以降である必要があります。アラームテーブル複数バインド機能を有効にすると、08-50 より前のバージョンの PFM・Web Console からは接続できなくなります。

複数のアラームテーブルをバインド可能な監視エージェントの構成を次の表に示します。複数のアラームテーブルをバインドする監視エージェントは、次の表中で と記した構成である必要があります。ただし、表中で × と記した構成の監視エージェントがシステム内に存在する場合も、当該監視エージェントに複数のアラームテーブルをバインドしなければ、アラームテーブル複数バインド機能を利用できます。表で × と記した構成の監視エージェントに複数のアラームテーブルをバインドした場合、当該監視エージェントのアラームの評価結果が保証されません。

PFM - Agent のバージョン	同一ホスト上の PFM - Manager または PFM - Base のバージョン		
	08-50 以降	08-50 未満	なし
08-00 以降		×	-
08-00 未満	×	×	×

(凡例)

- : 複数バインドできる
- ×
- : 不可能な組み合わせ

アラームテーブル複数バインド機能を有効または無効にするには、PFM - Manager ホストの `jpccomm.ini` ファイルの内容を直接編集します。`jpccomm.ini` ファイルは、次の場所に格納されています。

物理ホストの場合

Windows の場合

インストール先フォルダ

UNIX の場合

`/opt/jp1pc/`

論理ホストの場合

Windows の場合

環境ディレクトリ `%jp1pc%`

UNIX の場合

環境ディレクトリ `/jp1pc/`

(1) アラームテーブル複数バインド機能を有効にする場合

- Performance Management のプログラムおよびサービスを停止する。
Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、`jpccspm stop` コマンドですべて停止してください。クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから停止してください。
- テキストエディターなどで、`jpccomm.ini` ファイルを開く。
- アラームテーブル複数バインドの利用可否を設定する。
`jpccomm.ini` ファイル中の [Common Section] セクションで次のラベルの値を変更します。

`Multiple Alarm Table Bind=1`
- `jpccomm.ini` ファイルを保存して閉じる。

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

5. `jpcspm start` コマンドで Performance Management のプログラムおよびサービスを起動する。
クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから起動してください。
6. PFM - Web Console を再起動する。

(2) アラームテーブル複数バインド機能を無効にする場合

1. Performance Management のプログラムおよびサービスを停止する。
Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、`jpcspm stop` コマンドですべて停止してください。クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから停止してください。
2. テキストエディターなどで、`jpccomm.ini` ファイルを開く。
3. アラームテーブル複数バインドの利用可否を設定する。
`jpccomm.ini` ファイル中の [Common Section] セクションで次のラベルの値を変更します。

`Multiple Alarm Table Bind=0`
4. `jpccomm.ini` ファイルを保存して閉じる。
5. `jpcspm start` コマンドで Performance Management のプログラムおよびサービスを起動する。
クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから起動してください。
6. PFM - Web Console を再起動する。

注意

PFM・Agent または PFM・RM に複数のアラームテーブルがバインドされた状態で、アラームテーブル複数バインド機能を無効に設定した場合、次の Master Manager サービス起動時に、複数のアラームテーブルがバインドされている PFM・Agent または PFM・RM については、KAVE00317-W メッセージを出力し、該当 PFM・Agent または PFM・RM にバインドされているすべてのアラームテーブルがアンバインドされます。このため、機能を無効に設定変更したあとの Master Manager 起動に時間が掛かることがあります。なお、起動中の PFM・Agent または PFM・RM については、該当 PFM・Agent または PFM・RM が再起動されるまで複数のアラームテーブルがバインドされた状態が継続します。バインド状態の更新を反映するため、アラームテーブル複数バインド機能を無効に設定した場合、KAVE00317-W メッセージが出力された PFM・Agent または PFM・RM を再起動してください。

5.4.5 IP アドレスの設定変更

Performance Management の運用時に IP アドレスを変更する手順について説明します。

(1) PFM - Manager ホストの IP アドレスを変更する場合

1. PFM - Web Console のログアウト
IP アドレスを変更する PFM - Manager に接続する PFM - Web Console ホストをログアウトします。
2. PFM - Manager ホストの全 PFM サービスの停止
IP アドレスを変更する PFM - Manager ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止します。サービスの停止には `jpcspm stop` コマンドを使用してください。クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから停止してください。
3. PFM - Manager ホストの IP アドレスの変更
PFM - Manager ホストの IP アドレスを変更します。
4. ネットワークの設定
全 PFM - Agent , PFM - RM , PFM - Base , PFM - Web Console , PFM - Manager ホストから該当ホストに対して、TCP で通信接続できるようにします。
5. PFM - Manager ホストの PFM サービスの再起動
PFM - Manager ホスト上の Performance Management のプログラムおよびサービスを起動します。クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから起動してください。
6. PFM - Web Console でログイン
PFM - Web Console でログインします。

(2) PFM - Web Console ホストの IP アドレスを変更する場合

1. PFM - Web Console ホストの全 PFM サービスの停止
IP アドレスを変更する PFM - Web Console ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止します。サービスの停止には `jpcwstop` コマンドを使用してください。クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから停止してください。
2. PFM - Web Console ホストの IP アドレスの変更
PFM - Web Console ホストの IP アドレスを変更します。
3. ネットワークの設定
接続先 PFM - Manager ホストから該当ホストに対して、TCP で通信接続できるようにします。また、監視コンソールから該当ホストに対して、HTTP で通信接続できるようにします。
4. PFM - Web Console ホストの PFM サービスの再起動
PFM - Web Console ホスト上の Performance Management のプログラムおよびサービスを起動します。クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから起動してください。

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

5. PFM - Web Console でログイン

監視コンソールから新しい IP アドレス (またはそのホスト名) の URL で PFM - Web Console に接続します。

(3) PFM - Base ホストの IP アドレスを変更する場合

1. PFM - Base ホストの全 PFM サービスの停止

IP アドレスを変更する PFM - Base がインストールされているホストで Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止します。サービスの停止には `jpcspm stop` コマンドを使用してください。クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから停止してください。

2. PFM - Base ホストの IP アドレスの変更

PFM - Base がインストールされているホストの IP アドレスを変更します。

3. ネットワークの設定

全 PFM - Agent , PFM - RM , PFM - Base , PFM - Web Console , PFM - Manager ホストから該当ホストに対して、TCP で通信接続できるようにします。

4. PFM - Base ホストの PFM サービスを再起動する。

PFM - Base がインストールされているホスト上の Performance Management のプログラムおよびサービスを起動します。クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから起動してください。

(4) PFM - Agent または PFM - RM ホストの IP アドレスを変更する場合

1. PFM - Agent または PFM - RM ホストの全 PFM サービスの停止

IP アドレスを変更する PFM - Agent または PFM - RM ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止します。サービスの停止には `jpcspm stop` コマンドを使用してください。クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから停止してください。

2. PFM - Agent または PFM - RM ホストの IP アドレスの変更

PFM - Agent または PFM - RM がインストールされているホストの IP アドレスを変更します。

3. ネットワークの設定

全 PFM - Agent , PFM - RM , PFM - Base , PFM - Web Console , PFM - Manager ホストから該当ホストに対して、TCP で通信接続できるようにします。

4. PFM - Agent または PFM - RM ホストの PFM サービスの再起動

PFM - Agent または PFM - RM がインストールされているホスト上の Performance Management のプログラムおよびサービスを起動します。クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから起動してください。

5.4.6 PFM - Web Console の設定変更

PFM - Web Console の運用に必要な環境設定は、初期設定ファイル (config.xml) で行います。

初期設定ファイル (config.xml) はインストール先フォルダ ¥conf¥ に格納されています。

注意

初期設定ファイル (config.xml) は、PFM - Web Console サービスの起動時に読み込まれます。初期設定ファイルで変更した設定内容を有効にするには、PFM - Web Console サービスを再起動してください。また、指定された以外の個所を変更すると、PFM - Web Console が正常に動作しない場合がありますので、注意してください。

初期設定ファイルで設定する項目を次に示します。

(1) 初期設定ファイル (config.xml) の設定項目

config.xml ファイルの設定項目を次に示します。

(a) ファイル出力の設定

PFM - Web Console のファイル出力に関する設定を変更するための、config.xml ファイルの項目は次のとおりです。

表 5-18 ファイル出力の設定項目

内容	設定項目	設定できる値	デフォルト値
ログファイルを出力するディレクトリ	logDir	PFM - Web Console のログファイルを出力するディレクトリ	インストール先フォルダ ¥log¥
PFM - Web Console が出力するログファイルの面数	logFileNumber	1 ~ 16	10
一つのログファイルのサイズ	logFileSize	1 ~ 100	4
ログファイルを保持する日数	logFileRetention	1 ~ 30	30
ファイルに出力する行の終端記号 (PFM - Web Console の画面に表示したレポートを CSV 形式で出力する場合または jpcrpt コマンドで CSV 形式のファイルを出力する場合)	lineSeparator	<ul style="list-style-type: none"> • CRLF : Windows で採用されている改行コード。 • LF : UNIX で採用されている改行コード。 	CRLF

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

内容	設定項目	設定できる値	デフォルト値
出力するファイルの文字コード (PFM・Web Console の画面に表示したレポートを CSV 形式で出力する場合または jpcrpt コマンドで CSV 形式のファイルを出力する場合)	characterCode	<ul style="list-style-type: none"> • US-ASCII • windows-1252 • ISO-8859-1 • UTF-8 • UTF-16 • UTF-16BE • UTF-16LE • Shift_JIS • EUC-JP • EUC-JP-LINUX • MS932 	Shift_JIS
出力するファイル名 (PFM・Web Console の画面に表示したレポートを CSV 形式で出力する場合)	csvFileName	<ul style="list-style-type: none"> • 数字 0-9 • . (ピリオド) • _ (アンダーバー) • 半角スペース • 英字 A-Z, a-z <p>指定できる文字数は、100 文字以内で、半角スペースとピリオドだけで構成される名称は指定できません。</p>	Export.csv

注

不正な値を指定すると、デフォルトが設定されます。

(b) 接続先 PFM - Manager の設定

PFM・Web Console の接続先 PFM・Manager の設定を変更するための、config.xml ファイルの項目は次のとおりです。

表 5-19 接続先 PFM - Manager の設定項目

内容	設定項目	設定できる値	デフォルト値
接続する PFM・Manager のホスト名または IP アドレス	host	<p>ホスト名の場合</p> <ul style="list-style-type: none"> • 数字 0-9 • . (ピリオド) • - (ハイフン) • 英字 A-Z, a-z <p>長さは 1 ~ 32 文字以内で指定できます。</p> <p>なお、接続する PFM・Manager が監視ホスト名設定機能によるエイリアス名を使用している場合でも、この項目には PFM・Manager ホストの物理ホスト名を指定してください。</p> <p>IP アドレスの場合</p> <ul style="list-style-type: none"> • 0.0.0.0 ~ 255.255.255.255 	localhost

内容	設定項目	設定できる値	デフォルト値
接続する PFM - Manager の View Server サービスのポート番号	port	1024 ~ 65535	22286

注

不正な値を指定または指定を省略すると、デフォルトが設定されます。

注意

ほかのプロセスとのポート番号の重複を避けるため、次のポート番号は指定しないでください。

- OS が任意で割り当てるポート番号 (動的ポートまたは短命ポートと呼ばれるポート番号)

(c) データの取得や表示の設定

PFM - Web Console のデータの取得や表示の設定を変更するための、config.xml ファイルの設定項目は次のとおりです。

表 5-20 データの取得や表示の設定項目

内容	設定項目	設定できる値	デフォルト値
同一ユーザーの PFM - Web Console への多重ログインの可否	enableDuplicateLogin	true (多重ログイン可能) false (多重ログイン不可能)	true
PFM - Manager から取得する最大レコード件数	maxFetchCount ¹⁹ (<vsa> タグ配下)	1 ~ 2,147,483,647 (整数)	1,440
レポート印刷画面の最大キャッシュ保存数	printCacheSize	5 ~ 20 (整数)	10 または 20 ¹
レポート印刷画面に表示する表データの最大行数	printTableMaxRowSize	0 ~ 15,000 (整数) 0 を指定した場合、行数を制限しません。 ²	0 または 15,000 ³
レポートウィンドウのテーブル表示時に 1 ページ当たり表示するレコード数	displayCountPerPage	1 ~ 2,147,483,647 (整数)	20
一つのリアルタイムレポートに対して、データをキャッシュに保存する最大レコード数	maxRealtimeCache	1 ~ 360 (整数)	30
自動更新の更新間隔	updateInterval	10 ~ 3,600	60

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

内容	設定項目	設定できる値	デフォルト値
ulong のデータ型を使った条件式の定義で指定可能な範囲	condExpValueUlongExtension	指定可能な値は、true か false です。 <ul style="list-style-type: none"> • true : 0 ~ 4,294,967,295 • false : 0 ~ 2,147,483,647 	false
レポートグラフの凡例ラベルに表示できる最大文字数 ⁴	maxSeriesLabelLength	1 ~ 1,024	30
分割送信モードの有無	blockTransferMode	true (有効) false (無効)	true
レポートキャッシュファイル化機能の使用可否	useReportCacheFile	true (使用する) false (使用しない)	false
レポートキャッシュファイルの格納先 ⁵	reportCacheFilePath ⁵	絶対パスで指定 パス長の最大値: 150 文字 指定したフォルダがない場合は、PFM - Web Console のサービス起動時にフォルダが作成されます。	インストール先フォルダ ¥reportcache
グラフ表示するレポートデータ数の制限値 (レポートキャッシュファイル化機能が有効の場合)	graphMaxReportData	1 ~ 2,000,000	2,000,000
タイリング表示で表示できるレポートの最大数	maxTileReports	1 ~ 256	50
リアルタイムレポートを自動更新するリクエスト間隔の制限時間 ⁶	realtimeCacheInterval	60,000 ~ 3,600,000 (ミリ秒)	600,000
一般ユーザー権限でのエージェント階層の操作 (エージェント階層の作成・編集、および [Products] 表示形式での表示) の可否	agentTreeAccessLimit	on (操作不可能) off (操作可能)	off
アラームツリー分離表示の有無	displayAlarmTablesSeparately	true (分離表示有効) false (分離表示無効)	false ⁷
日付のフォーマット	selectFormat	<ul style="list-style-type: none"> • pattern-ddMMyyyy • pattern-MMddyyyy • pattern-yyyyMMdd 	pattern-yyyyMMdd

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

内容	設定項目	設定できる値	デフォルト値
ブックマーク機能の定義情報を保存するリポジトリ ⁵ の格納先	bookmarkRepository ⁵	絶対パスで指定 パス長の最大値: 150 文字 指定したフォルダがない場合は、PFM・Web Console のサービス起動時にフォルダが作成されます。	インストール先フォルダ ¥bookmarks
一般ユーザーおよび業務グループ一般ユーザーでのレポート定義・ブックマークの操作(作成, 編集, 削除, インポート, およびエクスポート)の可否	editReportByOrdinaryUser	on (編集可能) off (編集不可能)	on
サマリ表示でのサーバの稼働状況の上位表示数(表示形式が User Agents の場合)	maxDisplayServer (<user-agents> タグ配下)	1 ~ 100	5 ⁸
サマリ表示でのサーバの稼働状況の上位表示数(表示形式が Products の場合)	maxDisplayServer (<products> タグ配下)	1 ~ 100	5 ⁸
サマリ表示でのエージェントの稼働状況を [ユーザーツリーの視点] で表示させた場合の上位表示数(表示形式が User Agents の場合)	maxDisplayAgents User (<user-agents> タグ配下)	1 ~ 100	5 ⁸
サマリ表示でのエージェントの稼働状況を [プロダクト種別の視点] で表示させた場合の上位表示数(表示形式が User Agents の場合)	maxDisplayAgents Products (<user-agents> タグ配下)	1 ~ 100	5 ⁸
サマリ表示でのエージェントの稼働状況の上位表示数(表示形式が Products の場合)	maxDisplayAgents Products (<products> タグ配下)	1 ~ 100	5 ⁸
サマリ表示でのエージェントのアラームの監視状況の上位表示数(表示形式が User Agents の場合)	maxDisplayAlarm (<user-agents> タグ配下)	1 ~ 100	5 ⁸

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

内容	設定項目	設定できる値	デフォルト値
サマリ表示でのエージェントのアラームの監視状況の上位表示数 (表示形式が Products の場合)	maxDisplayAlarm (<products> タグ配下)	1 ~ 100	5 ⁸
サマリ表示でのイベントの最大表示件数	maxEvents	1 ~ 999	256
PFM - Web Console でキャッシュに保持するイベントの最大数 (業務グループを利用する場合)	maxMonitorEvent NumForMultiTenant (<multi-tenant> タグ配下)	1 ~ 10000 (整数)	999 ⁹
フィールドの検索件数の上限数	searchLimit	1 ~ 100	50
レポート系列ページング機能の使用可否	usingSeriesPaging OnTheGraph	true (使用する) false (使用しない)	true または false ¹⁰
グラフの凡例に表示するフィールドの最大数 (レポート系列ページング機能が有効の場合)	displayLegendCount	1 ~ 40 (整数)	14
プロセス監視のアプリケーション定義のテンプレートファイル格納先 ⁵	processMonitoring TemplatesRepository ⁵	絶対パスで指定 パス長の最大値 : 100 文字 指定したフォルダがない場合は、PFM - Web Console のサービス起動時にフォルダが作成されます。	インストール先フォルダ ¥processMonitoringTemplates
グラフでの最大ドリルダウンデータ数	maxDrilldownPoints	0 ~ 1,500 (整数) 0 を指定した場合、データ数を制限しません。 ¹¹	0 または 1,500 ¹²

内容	設定項目	設定できる値	デフォルト値
グラフに使用する系列色	color1 ~ color16 (<chart-symbolColors> タグ配下)	0 ~ 255 RGB 値をコンマ区切りで指定します。	color1 : 235,143,21 color2 : 204,0,0 color3 : 102,153,0 color4 : 0,102,255 color5 : 102,0,255 color6 : 255,51,153 color7 : 255,185,0 color8 : 255,17,17 color9 : 136,204,0 color10 : 71,145,255 color11 : 134,51,255 color12 : 255,149,246
color1 ~ color16 のうち円グラフに使用しない色	noUseCircleColor (<chart-symbolColors> タグ配下)	0 ~ 16 ¹³ 複数の色番号を指定する場合は、「,」(半角コンマ)」で区切って指定します。	0 (円グラフに使用しない色番号なし)
折れ線グラフの表示に利用するプロットのサイズ	lineSymbolSize (<draw> タグ配下)	LARGE , MEDIUM , SMALL , AUTO ¹⁴	MEDIUM ⁹
集合棒グラフ (積み上げ棒グラフは対象外) の場合の凡例の表示順序	legendSeriesOrderForHBar (<draw> タグ配下)	FORWARD (グラフの一番上に表示されている系列から順に凡例に表示) REVERSE (グラフの一番下に表示されている系列から順に凡例に表示)	REVERSE ⁹
レポート (複合レポート以外) のグラフオプションの項目 [オートラベルを表示する] の初期値	enableAutoLabelAtDefaultDisp	true (初期値をチェックありにする) false (初期値をチェックなしにする)	false ⁹
オートラベル機能で、ツールチップに表示されるデータ値のうち、整数部の最大けた数	autoLabelMaxIntegerDigits (<draw> タグ配下)	1 ~ 14 ¹⁵	7 ⁸
オートラベル機能で、ツールチップに表示されるデータ値のうち、小数部の最大けた数	autoLabelMaxFractionDigits (<draw> タグ配下)	1 ~ 6 ¹⁶	3 ⁸

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

内容	設定項目	設定できる値	デフォルト値
オートラベル機能を有効にするプロットの最大値	maxAutoLabelPoints (<draw> タグ配下)	1 ~ 2000	1440 ⁸
複合レポートで、最前面に表示するグラフ種別	foregroundCombinationGraph (<draw> タグ配下)	3DBAR (3D 表示有効の集合縦棒 / 積み上げ縦棒グラフ) LINE (折れ線グラフ) ¹⁷	3DBAR ⁹
グラフの目盛に表示するデータラベルが小数値の場合の小数部の最大表示けた数	precision (<draw> タグ配下)	0 ~ 15	0 (PFM - Web Console 09-50 以降を新規にインストールした場合は 3) ⁹
グラフの目盛に表示するデータラベルのけた区切りコンマの有無	appendCommaDisplayedForNum (<draw> タグ配下)	true (コンマあり) false (コンマなし)	false ⁹
jpcrpt コマンドで出力するレポートについて View Server から取得する最大レコード件数	maxFetchCount ¹⁹ (<command> タグ配下)	1 ~ 2,147,483,647 (整数で指定)	<vsa> タグ配下の maxFetchCount の値
jpcrpt コマンドで出力する HTML 形式レポートの表データの最大行数	cmdHtmlTableOutputMaxRowSize	0 ~ 15,000 (整数) 0 を指定した場合、行数を制限しません。 ¹⁸	0 または 15,000 ³
セッション共有による強制ログイン画面の表示	informSharedSession (<vsa> タグ配下)	true (有効) false (無効)	true ⁸
グラフのアンチエイリアスの有無	enableAntiAliasForNonAreaGraph (<draw> タグ配下)	true (有効) false (無効)	true ⁸

注 1

PFM - Web Console 09-10 以降を新規インストールした場合、デフォルト値として 10 が指定されています。PFM - Web Console 09-00 以前からバージョンアップインストールした場合など、値が指定されていないときには 20 が仮定されます。

注 2

0 を指定した場合、大量の表データが含まれるレポートに対して [レポート印刷] 画面を表示しようとする、Web ブラウザがハングアップすることがあります。詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の稼働分析のためのレポートの作成の章の、レポート表示時の注意事項について説明している個所を参照してください。

注 3

PFM・Web Console 09-10 以降を新規インストールした場合、デフォルト値として 15,000 が指定されています。PFM・Web Console 09-00 以前からバージョンアップインストールした場合など、値が指定されていないときには 0 が仮定されます。

注 4

バイト数で指定します。ただし、末尾がマルチバイト文字の 1 文字目に当たる場合、末尾の文字も表示されます。

注 5

デフォルトの初期設定ファイル (config.xml) には、bookmarkRepository、reportCacheFileDir、および processMonitoringTemplatesRepository の値は設定されていません。また、XML タグ自身もコメントアウトされています。このため、これらの項目を設定する場合は、タグのコメントアウトを解除した上で値を指定してください。

注 6

自動更新のリクエスト間隔が制限時間を超えたとき、サーバやエージェントは、通知なくレポートが終了したと判断し、処理を終了します。ただし、リクエスト間隔が制限時間を超えているかどうかは 10 秒ごとに判断されます。

例えば、制限時間が 61,000 ミリ秒に設定されている場合、制限時間として 61,000 ミリ秒 ~ 70,000 ミリ秒が設定されていることになります。

注 7

PFM・Web Console 09-50 以降を新規インストールした場合、デフォルト値として true が指定されています。PFM・Web Console 09-10 以前からバージョンアップインストールした場合など、値が指定されていないときには false が仮定されます。また、指定できない値を指定したときにも、false が仮定されます。

注 8

指定を省略した場合、デフォルト値が仮定されます。

注 9

範囲外の値を指定したり、指定を省略したりした場合、デフォルト値が仮定されます。

注 10

PFM・Web Console 09-10 以降を新規インストールした場合、デフォルト値として true が指定されています。PFM・Web Console 09-00 以前からバージョンアップインストールした場合など、値が指定されていないときには false が仮定されます。

注 11

0 を指定した場合、グラフ領域のフィールドの点の個数によっては、メモリーが不足して PFM・Web Console のサービスが停止することがあります。詳細について

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

は、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の稼働分析のためのレポートの作成の章の、レポート表示時の注意事項について説明している個所を参照してください。

注 12

PFM・Web Console 09-10 以降を新規インストールした場合、デフォルト値として 1,500 が指定されています。PFM・Web Console 09-00 以前からバージョンアップインストールした場合など、値が指定されていないときには 0 が仮定されます。

注 13

次の場合は、0 が指定されたと見なされ、color1 ~ color16 で指定したすべての色が円グラフに利用されます。

- 指定を省略した
- 複数指定時に、一つでも範囲外の値や有効でない値を指定した
- 複数指定時に、一つでも 0 が含まれる

次の場合は、color1 ~ color12 のそれぞれのデフォルト色が円グラフに利用されます。

- すべての色番号を指定した
- color1 ~ color16 を一つも指定していない

注 14

AUTO を指定すると、レポートの表示範囲によって、LARGE、MEDIUM、または SMALL のうち表示に適したサイズに自動的に調整されます。

なお、タイリング表示のサムネイルグラフ画像の場合、この項目は適用されません。この場合は、常に SMALL で表示されます。

注 15

実際のデータ値の整数部が、ここで指定したけた数より大きい場合は、けたの小さい方から指定けた数の分だけ表示されます。例えば、指定値が 3 で、ツールチップの指定プロットのデータ値が 123,456 の場合は、ツールチップに「456」と表示されます。

注 16

実際のデータ値の小数部が、ここで指定したけた数より大きい場合は、小数点以下第 1 位から指定けた数の分だけ表示されます。指定けた数を超えた場合は、指定けたの次のけたで四捨五入されます。例えば、指定値が 2 で、ツールチップの指定プロットのデータ値が 1.23456 の場合は、ツールチップに「1.23」と表示されます。

注 17

複合レポートの 3D 表示有効の集合縦棒 / 積み上げ縦棒グラフが設定されていない場合、または折れ線グラフが設定されていない場合、この設定は無視されます。

注 18

0 を指定した場合、大量の表データが含まれるレポートを jpcrpt コマンドで

HTML 出力して、Web ブラウザで表示しようとする、Web ブラウザがハングアップすることがあります。詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の稼働分析のためのレポートの作成の章の、レポート表示時の注意事項について説明している個所を参照してください。

注 19

複合レポートの場合は maxFetchCount の値ではなく、レポートをブックマークに登録した時に設定していた「最大レコード数」の値が適用されます。

(d) View Server サービスとの通信の設定

PFM - Web Console が View Server と通信するときの設定を変更するための、config.xml ファイルの設定項目は次のとおりです。

表 5-21 PFM - Web Console が View Server と通信するときの設定項目

内容	設定項目	設定できる値	デフォルト値
PFM - Web Console (Web サーバ) が View Server サービスとの通信で使用するポート番号	ownPort ^{1 2}	1,024 ~ 65,535	任意の空きポート
PFM - Web Console (コマンド) が View Server サービスとの通信で使用するポート番号	ownCmdPort ^{1 2}	1,024 ~ 65,535	任意の空きポート
PFM - Web Console が View Server サービスとの通信時に、View Server サービスからのコールバック先として使用するホスト名または IP アドレス	ownHost ^{1 3}	ホスト名の場合 <ul style="list-style-type: none"> • 数字 0-9 • . (ピリオド) • - (ハイフン) • 英字 A-Z, a-z 先頭文字は英数字だけ指定できます。 1 ~ 255 バイトで指定します。 IP アドレスの場合 <ul style="list-style-type: none"> • 0.0.0.0 ~ 255.255.255.255 	なし ⁴

注 1

デフォルトの初期設定ファイル (config.xml) には、ownPort、ownCmdPort、および ownHost は設定されていません。また、XML タグ自身もコメントアウトされています。このため、これらの項目を設定する場合は、タグのコメントアウトを解除した上で値を指定してください。

注 2

ファイアウォール環境の場合、この設定が必要です。詳細はマニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の付録の、ファイアウォールの通過方向

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

について説明している個所を参照してください。

注 3

PFM・Manager と PFM・Web Console との間は、TCP/IP を用いて通信します。これは、PFM・Manager と PFM・Web Console が別ホストに存在する場合だけではなく、同一ホスト上に存在する場合も同様です。このため、Performance Management を運用する場合は、PFM・Manager ホストと PFM・Web Console ホストの双方で常に通信可能なホスト名または IP アドレスを設定する必要があります。設定を実施していない場合、PFM・Manager ホスト名または PFM・Web Console ホスト名から、最初に解決される IP アドレスが使用されます。

例えば、次のような構成や運用を取る場合は、PFM・Manager ホストと PFM・Web Console ホストの双方で常に通信可能なホスト名または IP アドレスを設定する必要があります。

- PFM・Manager ホストと PFM・Web Console ホスト間で IP アドレス変換 (NAT) を使用している場合
- PFM・Manager ホストが業務用 LAN および監視用 LAN の二つのネットワークに接続され、Performance Management は監視用 LAN でホスト間通信を行う場合
- ホストのメンテナンス作業の際に、一時的に NIC から LAN ケーブルを抜く場合 (この際、NIC に割り当てられた IP アドレスが無効になることがあるため)

注 4

範囲外を指定する、または無効な値を指定すると、PFM・Web Console ホストの IP アドレスが設定されます。

(e) 自動ログアウトの設定

PFM・Web Console から自動ログアウトするまでの時間を設定するための、config.xml ファイルの項目は次のとおりです。

表 5-22 自動ログアウトの設定項目

内容	設定項目	設定できる値	デフォルト値
PFM・Web Console から自動ログアウトするまでの時間 (秒)	sessionTimeout	0 ~ 86,400	4,000

(f) その他の設定

PFM・Web Console のその他の動作を設定するための、config.xml ファイルの項目は次のとおりです。

表 5-23 その他の設定項目

内容	設定項目	設定できる値	デフォルト値
JP1 イベントを発行する場合に、PFM - Web Console の [新規アラーム > アクション定義] または [編集 > アクション定義] 画面にデフォルトで選択される Action Handler サービスの決定方法	selectAHModeForJP1Event ¹	<ul style="list-style-type: none"> compatible local manager maintain 	compatible または manager ²
アラーム更新時にアラームが不正に削除される問題への対策有無	alarmCompatibleMode (<vsa> タグ配下) ¹	<ul style="list-style-type: none"> true (対応有効) false (対応無効) 	true ³
jpccrpt コマンドで登録レポートや複合ブックマークのレポートを出力する際の、入力パラメーターファイルで指定するブックマーク名の属性値の読み込み方法	cmdRptBookmarkNameDecodeOnce (<command><export> タグ配下) ¹	<ul style="list-style-type: none"> true : 「¥¥」を「¥」に、「¥/」を「/」に置換して読み込む。 false : 「¥¥¥¥」を「¥」に、「¥¥¥/」を「/」に置換して読み込む。「¥¥」と「¥/」は区切り文字として読み込む。 	true ³

注 1

設定できる値の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の付録の、初期設定ファイル (config.xml) について説明している個所を参照してください。

注 2

PFM - Web Console 09-10 以降を新規インストールした場合、デフォルト値として true が指定されています。PFM - Web Console 09-00 以前からバージョンアップインストールした場合など、値が指定されていないときには false が仮定されます。

注 3

不正な値を指定または省略した場合はデフォルトが設定されます。

(2) 変更した初期設定ファイル (config.xml) をデフォルトに戻す手順

バージョンアップによって、config.xml ファイルの構造が変わるおそれがあります。バージョンアップ後に、次に示す手順で、config.xml ファイルの編集内容を新しい config.xml ファイルに反映してください。

1. インストール先フォルダ ¥conf¥config.xml の内容を確認し、編集内容を調べてお

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

く。

2. インストール先フォルダ `¥conf¥config.xml` をバックアップする。
3. インストール先フォルダ `¥sample¥conf¥config.xml` を、インストール先フォルダ `¥conf¥config.xml` に上書きコピーする。
4. 手順 1 で確認した編集内容を新しいインストール先フォルダ `¥conf¥config.xml` に反映する。

初期設定ファイルは、PFM・Web Console 起動時に反映されるため、初期設定ファイルを変更したときは、PFM・Web Console を再起動してください。

注意

`config.xml` ファイルを編集前のデータに戻したい場合は、インストール先フォルダ `¥sample¥conf¥` から `config.xml` ファイルをコピーして、上記のフォルダに上書きしてください。

5.4.7 Store バージョン 2.0 のセットアップとアンセットアップ

(1) セットアップ方法

Store バージョン 2.0 は、PFM・Base 08-10 以降または PFM・Manager 08-10 以降で、監視エージェントが、PFM・Agent 08-00 以降または PFM・RM の場合に利用できます。PFM・Agent のバージョン 08-10 を新規にインストールする場合、および PFM・RM を新規にインストールする場合には、デフォルトで Store バージョン 2.0 が動作します。

注意

Store バージョン 2.0 を利用できるのは Agent Store および Remote Monitor Store サービスの Store データベースだけです。Master Store サービスの Store データベースは、Store バージョン 1.0 でだけ動作するので、Store バージョン 2.0 は利用できません。また、Remote Monitor Store サービスでは Store バージョン 1.0 は利用できません。

Store バージョン 2.0 は、PFM・Agent のバージョンとインストール順序によってセットアップ方法が異なります。既存の環境が Store バージョン 1.0 で稼働している場合は、08-10 以降の製品をインストールしても、Store バージョン 1.0 で稼働する設定のままとなります。この環境の Store データベースを 2.0 へ移行する場合は、セットアップコマンドを実行する必要があります。

PFM・Agent のバージョンごとに、Store バージョン 2.0 の利用可否と利用手順を次の表に示します。

表 5-24 シングルインスタンスの PFM - Agent の場合

PFM - Agent		Store バージョン 2.0 の利用可否	Store バージョン 2.0 の利 用手順
バージョン	インストール方法		
07-50 以前	問わない	利用できない	-
08-00	問わない	セットアップ後利用で きる	セットアップコマンドを 実行
08-10 以降	新規インストール	利用できる	設定不要
	バージョンアップインス トール	利用できる	セットアップコマンドを 実行

(凡例) - 該当しない

表 5-25 マルチインスタンスの PFM - Agent の場合

PFM - Agent		Store バージョン 2.0 の利用可否	Store バージョン 2.0 の利 用手順
バージョン	インスタンスの作成タイミ ング		
07-50 以前	問わない	利用できない	-
08-00 以降	PFM - Base , または PFM - Manager 08-10 をインス トールする前	セットアップ後利用で きる	セットアップコマンドを 実行
	PFM - Base , または PFM - Manager 08-10 をインス トールしたあと	利用できる	jpccconf inst setup コ マンドによるインスタ ンス作成時に、使用する Store バージョンを選択

(凡例) - 該当しない

PFM - Agent で Store バージョン 2.0 を使用する場合はセットアップ手順については、
各 PFM - Agent マニュアルを参照してください。

注意

Store バージョン 1.0 から Store バージョン 2.0 に変更した場合、PD レコードおよ
び PL レコードではデータの保存条件が変更されるため、Store バージョン 2.0 の保
存条件を満たしていないデータは削除されます。また、Store バージョン 2.0 でのデ
フォルトの保存期間は、PFM - Agent および PFM - RM によって異なります。

例えば、デフォルトの保存期間が 10 日の PFM - Agent で、Store バージョン 1.0 の
PD レコードが 10,000 レコードで 2006/01/01 から 2006/12/31 の 365 日分保存され
ている場合、Store バージョン 2.0 に変更すると、過去 355 日分のデータは削除され
ます。

このため、Store バージョン 2.0 に変更する前に、jpctool db dump コマンドで

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

Store バージョン 1.0 の情報を出力してください。

なお、PI レコードは変更前と変更後でデータの内容は変わりません。

(2) アンセットアップ方法

Store バージョン 2.0 は `jpccconf db vrset -ver 1.0` コマンドを使用してアンセットアップします。Store バージョン 2.0 をアンセットアップすると、Store データベースのデータはすべて初期化され、Store バージョン 1.0 に戻ります。

なお、`jpccconf db vrset -ver 1.0` コマンドは、対話形式と非対話形式のどちらでも実行できます。`jpccconf db vrset` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドについて説明している章を参照してください。

注意

Store バージョン 2.0 をアンセットアップすると、データは初期化されます。このため、Store バージョン 1.0 に変更する前に、`jpctool db dump` コマンドで Store バージョン 2.0 の情報を出力してください。

5.4.8 ファイル権限の強化

使用している OS が Windows の場合は、ユーザーがファイル権限を変更し、権限が強化された状態で運用できます。

ファイル権限を強化するには、フォルダの権限を変更します。設定された権限は下位のフォルダに継承されます。

PFM 操作用グループを作成し、そのグループに対して変更以下の権限を与えます。権限を設定したあとは、従来一般ユーザー権限で実行できたコマンドについても、PFM 操作用グループに属しているユーザーだけが実行できます。インストール先フォルダ¥jp1pc¥の権限を次の表に示すように変更します。

表 5-26 フォルダの権限

権限	アクセス許可			
	Administrators	SYSTEM	Backup Operators	PFM Users (ユーザー指定)
フルコントロール			-	-
変更				
読み取りと実行				
フォルダの内容の一覧				
読み取り				
書き込み				

(凡例)

- ： 権限を設定する
- ： 権限を設定しない

論理ホスト環境の場合、PFM 操作用グループにはドメイングループを指定することをお勧めします。ドメイン運用をしていない場合は、各マシンで作成した PFM 操作用グループに対して上記の表に示した権限を設定してください。

5.4.9 プロダクト名表示機能の設定

プロダクト名表示機能を有効にすることで、Performance Management で使用するサービスキーおよびサービス ID の形式をプロダクト名に変更できます。プロダクト名表示機能の詳細については、「4.1.2 サービスの表示・指定方法」を参照してください。

プロダクト名表示機能を設定するには、`jpccconf prodname` コマンドを使用します。`jpccconf prodname` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

(1) 現在のプロダクト名表示機能の設定状況を確認する

1. プロダクト名表示機能の設定状況を確認したいホストにログインする。
2. `jpccconf prodname display` コマンドを実行する。
プロダクト名表示機能の現在の設定が表示されます。
プロダクト名表示機能が有効な場合の実行例を次に示します。

```
C:\Program Files\Hitachi\jp1pc\tools>jpccconf prodname display
available
```

論理ホスト運用をしている場合は、`-lhost` オプションで設定状況を確認したい論理ホストを指定してください。

(2) プロダクト名表示機能を有効にする

1. プロダクト名表示機能を有効にしたいホストにログインする。
2. ホスト上のすべての Performance Management サービスを停止する。
サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。論理ホスト運用をしている場合は、クラスタソフトの操作によって、Performance Management を登録している論理ホストを停止してください。
3. `jpccconf prodname enable` コマンドを実行する。
プロダクト名表示機能が有効になります。
論理ホスト運用をしている場合は、`-lhost` オプションでプロダクト名表示機能を設定したい論理ホストを指定してください。
4. ホスト上のすべての Performance Management サービスを起動する。

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

サービスの起動方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。論理ホスト運用をしている場合は、クラスタソフトの操作によって、Performance Management を登録している論理ホストを起動してください。

(3) プロダクト名表示機能を無効にする

1. プロダクト名表示機能を無効にしたいホストにログインする。
2. ホスト上のすべての Performance Management サービスを停止する。
サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。論理ホスト運用をしている場合は、クラスタソフトの操作によって、Performance Management を登録している論理ホストを停止してください。
3. `jpccconf prodname disable` コマンドを実行する。
プロダクト名表示機能が無効になります。
論理ホスト運用をしている場合は、`-lhost` オプションでプロダクト名表示機能を設定したい論理ホストを指定してください。
4. ホスト上のすべての Performance Management サービスを起動する。
サービスの起動方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。論理ホスト運用をしている場合は、クラスタソフトの操作によって、Performance Management を登録している論理ホストを起動してください。

5.4.10 アラーム正常回復時の測定値出力機能の設定

アラーム正常回復時の測定値出力機能によって、複数インスタンスレコードを監視するアラームが正常状態に回復した場合に、アラームメッセージテキストを出力できます。アラーム正常回復時の測定値出力機能の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、アラームによる稼働監視について説明している章を参照してください。

アラーム正常回復時の測定値出力機能を利用するために必要なシステムのバージョン構成を次に示します。なお、PFM - Web Console のバージョンに制限はありません。

- PFM - Manager : 09-10 以降
- アラーム監視対象の PFM - Agent または PFM - RM : 08-00 以降
- エージェントホストの PFM - Manager または PFM - Base : 09-10 以降

09-10 以降の PFM - Manager を新規にインストールした場合、および 09-00 以前から 09-10 以降へバージョンアップインストールした場合、デフォルトではアラーム正常回復時の測定値出力機能は無効になります。09-10 以降からバージョンアップインストールした場合、アラーム正常回復時の測定値出力機能は以前の設定を引き継ぎます。

アラーム正常回復時の測定値出力機能の設定は、PFM・Manager ホストで行います。PFM・Agent または PFM・RM が上記のシステム構成を満たして、接続先 PFM・Manager でアラーム正常回復時の測定値出力機能を有効に設定している場合、アラーム正常回復時の測定値出力機能が有効になります。PFM・Agent および PFM・RM でのアラーム正常回復時の測定値出力機能の動作を次の表に示します。

PFM・Agent または PFM・RM のバージョン	同一ホスト上の PFM・Manager または PFM・Base のバージョン	アラーム正常回復時の測定値出力機能の設定	
		接続先 PFM・Manager のバージョンが 09-10 以降	接続先 PFM・Manager のバージョンが 09-10 未満
08-00 以降	09-10 以降	接続先 PFM・Manager の設定に従う ¹	無効 ²
	09-10 未満	無効 ³	無効 ³
08-00 未満	バージョンを問わない	無効 ³	無効 ³

注 1

Agent Collector サービスまたは Remote Monitor Collector サービスの起動時に、次に示すメッセージが PFM・Agent または PFM・RM ホストの共通メッセージログに出力されます。

- ・アラーム正常回復時の測定値出力機能を有効で起動した場合：KAVE00349-I
- ・アラーム正常回復時の測定値出力機能を無効で起動した場合：KAVE00350-I

注 2

Agent Collector サービスまたは Remote Monitor Collector サービスの起動時に、PFM・Agent または PFM・RM ホストの共通メッセージログに KAVE00350-I メッセージが出力されます。

注 3

PFM・Agent または PFM・RM ホストの共通メッセージログにアラーム正常回復時の測定値出力機能の設定についてのメッセージは出力されません。

アラーム正常回復時の測定値出力機能を有効または無効にするには、PFM・Manager ホストの `jpccomm.ini` ファイルの内容を直接編集します。`jpccomm.ini` ファイルは、次の場所に格納されています。

物理ホストの場合

Windows の場合

インストール先フォルダ

UNIX の場合

`/opt/jplpc/`

論理ホストの場合

Windows の場合

環境ディレクトリ `%jplpc%`

UNIX の場合

5. インストールとセットアップ (Windows の場合)

環境ディレクトリ /jplpc/

参考

PFM・Manager のアラーム正常回復時の測定値出力機能の設定状態によって、Name Server サービスの起動時に次のメッセージが PFM・Manager ホストの共通ログに出力されます。

- アラーム正常回復時の測定値出力機能が有効な場合：KAVE00349-I
 - アラーム正常回復時の測定値出力機能が無効な場合：KAVE00350-I
 - jpccomm.ini ファイル中の Alarm Message Mode ラベルに 0 または 1 以外の値が指定された場合：KAVE00350-I および KAVE00351-W
-

(1) アラーム正常回復時の測定値出力機能を有効にする場合

1. PFM - Manager のサービスをすべて停止する。

PFM・Manager のサービスが起動されている場合は、jpcspm stop コマンドですべて停止してください。クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから停止してください。

2. テキストエディターなどで、PFM - Manager ホストの jpccomm.ini ファイルを開く。
3. アラーム正常回復時の測定値出力機能の利用有無を設定する。
jpccomm.ini ファイル中の [Common Section] セクションで次のラベルの値を変更します。

Alarm Message Mode=1

4. jpccomm.ini ファイルを保存して閉じる。
5. jpcspm start コマンドで PFM - Manager のサービスを起動する。
クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから起動してください。
6. PFM - Agent および PFM - RM をすべて再起動する。
jpcspm stop および jpcspm start コマンドで、監視している PFM - Agent および PFM - RM をすべて再起動してください。再起動するまでは設定が反映されません。

(2) アラーム正常回復時の測定値出力機能を無効にする場合

1. PFM - Manager のサービスを停止する。
PFM・Manager のサービスが起動されている場合は、jpcspm stop コマンドですべて停止してください。クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから停止してください。

2. テキストエディターなどで、PFM - Manager ホストの `jpccomm.ini` ファイルを開く。
3. アラーム正常回復時の測定値出力機能の利用有無を設定する。
`jpccomm.ini` ファイル中の [Common Section] セクションで次のラベルの値を変更します。

`Alarm Message Mode=0`
4. `jpccomm.ini` ファイルを保存して閉じる。
5. `jpccspm start` コマンドで PFM - Manager のサービスを起動する。
 クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから起動してください。
6. PFM - Agent および PFM - RM をすべて再起動する。
`jpccspm stop` および `jpccspm start` コマンドで、監視している PFM - Agent および PFM - RM をすべて再起動してください。再起動するまでは設定が反映されません。

5.4.11 Agent ホストリモート操作制限オプションおよび Agent 間直接情報参照抑止オプションの設定

Agent ホストリモート操作制限オプションおよび Agent 間直接情報参照抑止オプションを使用すると、PFM - Base のコマンドで操作できるホストを、ローカルホストに限定できます。

それぞれのオプションの詳細については、「4.8.4 コマンドの操作対象ホストを制限する設定」を参照してください。

また、これらのオプションを設定するには、`jpccomm.ini` ファイルの内容を直接編集します。`jpccomm.ini` ファイルは、次の場所に格納されています。

設定するホストが物理ホストの場合

Windows の場合

インストール先フォルダ

UNIX の場合

`/opt/jp1pc/`

設定するホストが論理ホストの場合

Windows の場合

環境ディレクトリ `%jp1pc%`

UNIX の場合

環境ディレクトリ `/jp1pc/`

(1) Agent ホストリモート操作制限オプションの設定の変更

Agent ホストリモート操作制限オプションは、PFM - Manager ホストで設定します。

1. PFM - Manager のサービスをすべて停止する。

PFM - Manager のサービスが起動されている場合は、`jpcspm stop` コマンドですべて停止してください。クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから停止してください。

2. テキストエディターなどで、PFM - Manager ホストの `jpccomm.ini` ファイルを開く。

3. Agent ホストリモート操作制限オプションの利用有無を設定する。

`jpccomm.ini` ファイル中の [Common Section] セクションで次のラベルの値を変更します。

有効にする場合

```
Agent Remote Protection=1
```

無効にする場合

```
Agent Remote Protection=0
```

4. `jpccomm.ini` ファイルを保存して閉じる。

5. `jpcspm start` コマンドで PFM - Manager のサービスを起動する。

クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから起動してください。

(2) Agent 間直接情報参照抑止オプションの設定の変更

Agent 間直接情報参照抑止オプションは、コマンド実行時に `-host` オプションで指定された対象ホスト側で、ステータス情報の提供を拒否するための機能です。このため、それぞれの対象ホストで設定します。

1. PFM - Agent または PFM - RM ホストのすべての Performance Management サービスを停止する。

Performance Management のサービスが起動されている場合は、`jpcspm stop` コマンドですべて停止してください。クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから停止してください。

2. テキストエディターなどで、PFM - Agent または PFM - RM ホストの `jpccomm.ini` ファイルを開く。

3. Agent 間直接情報参照抑止オプションの利用有無を設定する。

`jpccomm.ini` ファイル中の [Common Section] セクションで次のラベルの値を変更します。

有効にする場合

```
Service List Protection=1
```

無効にする場合

Service List Protection=0

4. jpccomm.ini ファイルを保存して閉じる。
5. jpcspm start コマンドで Performance Management サービスを起動する。
クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから起動してください。

5.5 Web ブラウザでマニュアルを参照するための設定

Performance Management では、PFM - Web Console がインストールされているホストに、プログラムプロダクトに標準添付されているマニュアル CD-ROM からマニュアルをコピーすることで、Web ブラウザでマニュアルを参照できるようになります。なお、PFM - Web Console をクラスタ運用している場合は、実行系および待機系それぞれの物理ホストでマニュアルをコピーしてください。

5.5.1 設定手順

(1) PFM - Web Console のヘルプからマニュアルを参照する場合

1. PFM - Web Console のセットアップ手順に従い、PFM - Web Console に PFM - Agent または PFM - RM を登録する (PFM - Agent または PFM - RM の追加セットアップをする)。
2. PFM - Web Console がインストールされているホストに、マニュアルのコピー先フォルダを作成する。
 - 「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の場合
PFM - Web Console のインストール先フォルダ ¥doc¥ja¥pcsy¥
 - 「JP1/Performance Management 運用ガイド」の場合
PFM - Web Console のインストール先フォルダ ¥doc¥ja¥pcop¥
 - 「JP1/Performance Management リファレンス」の場合
PFM - Web Console のインストール先フォルダ ¥doc¥ja¥pcr¥
 - JP1/Performance Management の PFM - Agent または PFM - RM マニュアルの場合
PFM - Web Console のインストール先フォルダ ¥doc¥ja¥XXXX¥
XXXX には、PFM - Agent または PFM - RM のヘルプ ID を指定してください。ヘルプ ID については、各 PFM - Agent または PFM - RM マニュアルの付録に記載されている識別子一覧を参照してください。
3. 手順 2 で作成したフォルダ配下に、マニュアル CD-ROM から次のファイルおよびフォルダをコピーする。

HTML マニュアルの場合

CD-ROM ドライブ ¥MAN¥3020¥ 資料番号 (03004A0D など) 下の、すべての HTM ファイルおよび FIGURE フォルダ

PDF マニュアルの場合

CD-ROM ドライブ ¥MAN¥3020¥ 資料番号 (03004A0D など) 下の PDF ファイルコピーする際、HTML マニュアルの場合は index.htm ファイルが、PDF マニュアルの場合は PDF ファイル自体が、作成したフォルダ直下に配置されるようにしてくだ

さい。マニュアルファイルのコピー方法については、マニュアル CD-ROM の `readme.txt` を参照してください。

4. PFM - Web Console を再起動する。

(2) お使いのマシンのハードディスクからマニュアルを参照する場合

CD-ROM の `setup.exe` を使ってインストールするか、または直接 HTM ファイル、PDF ファイル、および GIF ファイルを任意のフォルダにコピーしてください。HTML マニュアルの場合、次のフォルダ構成になるようにしてください。

html (HTM ファイルを格納)
 FIGURE (GIF ファイルを格納)

5.5.2 参照手順

マニュアルの参照手順を次に示します。

1. PFM - Web Console の [メイン] 画面のメニューバーフレームにある [ヘルプ] メニューをクリックし、[ヘルプ] 画面を表示する。
2. マニュアル名またはマニュアル名の後ろの [PDF] をクリックする。
 マニュアル名をクリックすると HTML 形式のマニュアルが表示されます。[PDF] をクリックすると PDF 形式のマニュアルが表示されます。

Web ブラウザでの文字の表示に関する注意事項

Windows の場合、[スタート] メニューからオンラインマニュアルを表示させると、すでに表示されている Web ブラウザの画面上に HTML マニュアルが表示されることがあります。

また、Internet Explorer 5 を使用している場合、文字が不正に表示されることがあります。この場合、次のように設定してください。

- [表示] - [エンコード] の [自動選択] のチェックを外す。
- [表示] - [エンコード] の日本語で [日本語 (シフト JIS)] を選択する。

6

インストールとセットアップ (UNIX の場合)

この章では、UNIX の場合の Performance Management のインストールおよびセットアップ方法について説明します。

6.1 インストールとセットアップ

6.2 アンインストールとアンセットアップ

6.3 Performance Management のシステム構成の変更

6.4 Performance Management の運用方式の変更

6.5 Web ブラウザでマニュアルを参照するための設定

6.1 インストールとセットアップ

ここでは、Performance Management プログラムをインストールおよびセットアップする手順を示します。

6.1.1 インストールとセットアップの前に

Performance Management をインストールおよびセットアップする前に確認しておくことを説明します。

(1) 前提 OS

Performance Management プログラムが動作する OS を次の表に示します。

表 6-1 前提 OS (UNIX の場合)

OS 名	PFM - Manager	PFM - Web Console	PFM - Base
HP-UX			
Solaris 9 (SPARC) および Solaris 10 (SPARC)			
Solaris 10 (x64) および Solaris 10 (x86)	-	-	
AIX			
Linux (x64), Linux (x86) および Linux Server 6			
Linux (IPF)	-	-	

(凡例)

: 動作する

- : 動作しない

PFM - Agent または PFM - RM の前提 OS は、それぞれ異なります。詳細については、各 PFM - Agent または PFM - RM マニュアルを参照してください。

(2) システム構成の検討

PFM - Manager に接続する PFM - Agent または PFM - RM の数を検討します。見積もり方法の詳細については、「付録 A.1 システム構成」を参照してください。

(3) システム見積もり

Performance Management システムで必要なリソースの見積もりや設定を行います。見積もり方法の詳細については、「付録 C システム見積もり」と各 PFM - Agent マニュアルを参照してください。

(4) ネットワーク環境の設定

Performance Management が動作するためのネットワーク環境について説明します。

(a) IP アドレスの設定

Performance Management システムのすべてのホストは、ホスト名で IP アドレスを解決できる環境を設定してください。IP アドレスを解決できない環境では、Performance Management をインストールできません。

監視ホスト名 (Performance Management システムのホスト名として使用する名前) には、実ホスト名またはエイリアス名を使用できます。

- 監視ホスト名に実ホスト名を使用している場合
Windows システムでは `hostname` コマンド、UNIX システムでは `uname -n` コマンドを実行して確認したホスト名で、IP アドレスを解決できるように環境を設定してください。
なお、UNIX システムでは、`hostname` コマンドで取得するホスト名を使用することもできます。詳細については、「6.3.3 Performance Management システムでのホスト名の変更」を参照してください。
- 監視ホスト名にエイリアス名を使用している場合
設定しているエイリアス名で IP アドレスを解決できるように環境を設定してください。

監視ホスト名の設定については、「6.3.3 Performance Management システムでのホスト名の変更」を参照してください。

ホスト名と IP アドレスは、次のどれかの方法で設定してください。

- `hosts` ファイル
- DNS (Domain Name System)
- Performance Management のホスト情報設定ファイル
 - `jpchosts` ファイル (PFM - Manager, PFM - Agent, PFM - RM, および PFM - Base の場合)
 - `config.xml` ファイル (PFM - Web Console の場合)

注意

- Performance Management は、DNS 環境でも運用できますが、FQDN 形式のホスト名には対応していません。このため、監視ホスト名は、ドメイン名を除いて指定してください。
- 複数の LAN 環境で使用する場合は、`jpchosts` ファイルで IP アドレスを設定してください。詳細については、「6.3.1 ネットワーク構成の変更」を参照してください。
- Performance Management は、DHCP による動的な IP アドレスが割り振られているホスト上で運用できません。Performance Management を導入するすべての

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

ホストに、固定の IP アドレスを設定してください。

- IP アドレスにループバックアドレスは設定できません。
- PFM - Manager ホストにホスト名を二つ以上設定している場合、システム上の PFM - Agent または PFM - RM ホストで `jpccconf mgrhost define` コマンドにより設定する接続先 PFM - Manager ホストのホスト名は、次のようにする必要があります。

PFM - Manager の監視ホスト名に実ホスト名を使用している場合

Windows システムでは `hostname` コマンド、UNIX システムでは `uname -n` コマンドを実行して確認したホスト名

PFM - Manager の監視ホスト名にエイリアス名を使用している場合

設定しているエイリアス名

(b) ポート番号の設定

Performance Management プログラムのサービスは、デフォルトで次の表に示すポート番号が割り当てられています。これ以外のサービスまたはプログラムに対しては、サービスを起動するたびに、そのときシステムで使用されていないポート番号が自動的に割り当てられます。また、ファイアウォール環境で、Performance Management を使用するときには、ポート番号を固定してください。ポート番号の固定の手順は、「6.3.1 (1) (b) ポート番号を設定する」を参照してください。

表 6-2 デフォルトのポート番号と Performance Management プログラムのサービス (UNIX の場合)

サービス説明	サービス名	パラメーター	ポート番号	備考
サービス構成 情報管理機能	Name Server	jp1pcnsvr	22285	PFM - Manager の Name Server サービスで使用する ポート番号。Performance Management のすべてのホス トで設定される。
NNM 連携機 能	NNM Object Manager	jp1pcovsvr	22292	PFM - Manager および PFM - Base の NNM 連携機能で、 マップマネージャーとオブ ジェクトマネージャーの間の 通信で使用するポート番号。 PFM - Manager または PFM - Base がインストールされてい るホストで設定される。
サービス状態 管理機能	Status Server	jp1pcstatv r	22350	PFM - Manager および PFM - Base の Status Server サービ スで使用するポート番号。 PFM - Manager または PFM - Base がインストールされてい るホストで設定される。

サービス説明	サービス名	パラメーター	ポート番号	備考
監視コンソール通信機能	View Server	jplpcvsvr	22286	PFM・Manager の View Server サービスで使用されるポート番号。PFM・Manager ホストで設定される。

これらの Performance Management が使用するポート番号で通信できるように、ネットワークを設定してください。

(5) インストールに必要な OS ユーザー権限について

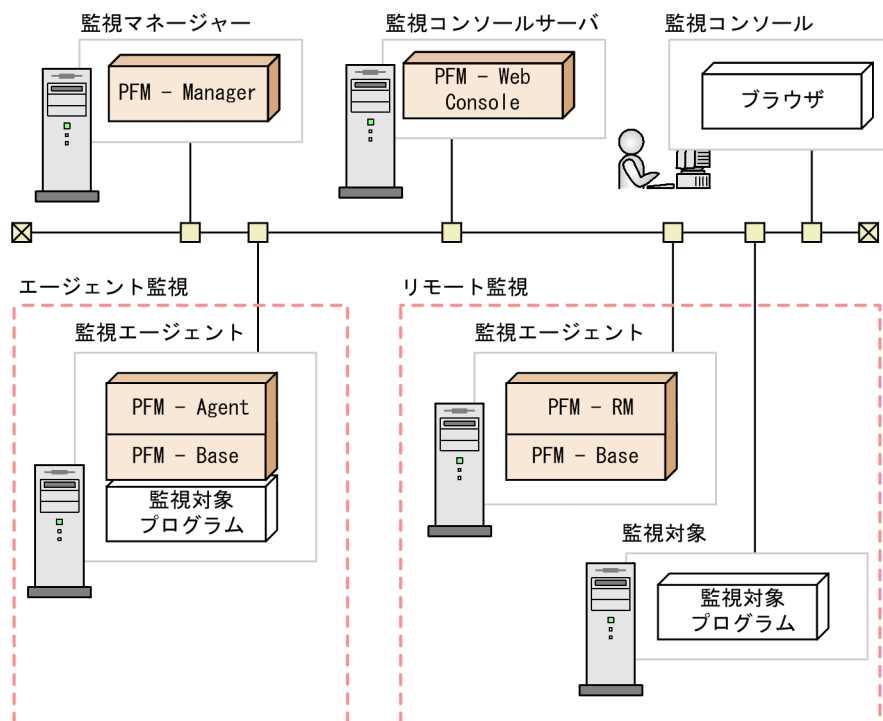
Performance Management プログラムをインストールするときは、必ず、root ユーザーで実行してください。

(6) 前提プログラム

ここでは、Performance Management をインストールする場合に必要な前提プログラムを説明します。前提プログラムの構成図を次に示します。

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

図 6-1 プログラムの構成図



(凡例)

-  : Performance Managementが提供するプログラム
-  : 必要なプログラム

注意

- アラームイベントが発生したときに、E メールでシステム管理者に通知する場合、E メールを送信するための SMTP サーバが必要です。詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、アラームによる稼働監視について説明している章を参照してください。
- Performance Management とその他のシステムとの連携機能を使用する場合は、前提プログラムが異なる場合があります。連携機能についての詳細は、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、統合管理製品 (JP1/IM) と連携した稼働監視について説明している章、およびネットワーク管理製品 (NNM) と連携した稼働監視について説明している章を参照してください。

(a) 監視マネージャーの前提プログラム

監視マネージャーには、PFM - Manager が必要です。また、JP1 ユーザーによる統合認証を行うためには、JP1/Base が必要です。詳細については、JP1/Base マニュアルおよびマニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、ユーザーアカウントと業務グループの管理について説明している章を参照してください。

(b) 監視コンソールサーバの前提プログラム

監視コンソールサーバには、PFM・Web Console が必要です。

(c) 監視エージェントの前提プログラム

監視エージェントには、PFM・Agent または PFM・RM と、PFM・Base をインストールします。PFM・Base は PFM・Agent や PFM・RM の前提プログラムであるため、PFM・Base、PFM・Agent または PFM・RM の順にインストールしてください。

ただし、PFM・Manager と、PFM・Agent または PFM・RM を同一ホストにインストールする場合、PFM・Base は不要です。この場合、PFM・Agent または PFM・RM の前提プログラムは PFM・Manager になるため、PFM・Manager、PFM・Agent または PFM・RM の順にインストールしてください。

監視対象プログラムは、PFM・Agent または PFM・RM ごとに異なります。各 PFM・Agent または PFM・RM の監視対象プログラムについては、各 PFM・Agent または PFM・RM マニュアルを参照してください。

(d) 監視コンソールの前提プログラム

Performance Management で収集した稼働監視データを確認したり、Performance Management の設定を変更したりするためには、監視コンソールに Web ブラウザが必要です。

監視コンソールが UNIX システムの場合に、Performance Management の前提となる Web ブラウザを次に示します。

- Firefox2.0.x または Firefox 3

OS および PFM・Web Console のバージョンによってサポートする Web ブラウザが異なります。詳細については、「6.1.6 監視コンソールの Web ブラウザの設定手順」を参照してください。

(7) クラスタシステムでのインストールとセットアップについて

クラスタシステムでのインストールとセットアップは、前提となるネットワーク環境やプログラム構成が、通常の構成のセットアップとは異なります。また、実行系ノードと待機系ノードでの作業が必要になります。詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

(8) 注意事項

ここでは、Performance Management をインストールおよびセットアップするときの注意事項を説明します。

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

(a) 環境変数に関する注意事項

Performance Management では JPC_HOSTNAME を環境変数として使用しているため、ユーザー独自に環境変数として設定しないでください。設定した場合は、Performance Management が正しく動作しません。

(b) 同一ホストに Performance Management プログラムを複数インストール、セットアップするときの注意事項

Performance Management は、同一ホストに次に示す Performance Management プログラムをインストールすることもできます。

- PFM - Manager
- PFM - Web Console
- PFM - Agent または PFM - RM

補足

システムの性能や信頼性を向上させるため、PFM - Manager、PFM - Web Console、PFM - Agent、および PFM - RM はそれぞれ別のホストで運用することをお勧めします。

同一ホストに Performance Management プログラムを複数インストールする場合の注意事項を次に示します。

- PFM - Manager と、PFM - Agent または PFM - RM を同一ホストにインストールする場合、PFM - Base は不要です。この場合、PFM - Manager が PFM - Agent または PFM - RM の前提製品になるため、PFM - Manager をインストールしてから PFM - Agent または PFM - RM をインストールしてください。
- PFM - Base と PFM - Manager は同一ホストにインストールできません。PFM - Base と、PFM - Agent または PFM - RM がインストールされているホストに PFM - Manager をインストールする場合は、すべての Performance Management プログラムをアンインストール後に PFM - Manager、PFM - Agent または PFM - RM の順でインストールしてください。また、PFM - Manager と、PFM - Agent または PFM - RM がインストールされているホストに PFM - Base をインストールする場合も同様に、すべての Performance Management プログラムをアンインストール後に PFM - Base、PFM - Agent または PFM - RM の順でインストールしてください。
- PFM - Manager がインストールされているホストに PFM - Agent または PFM - RM をインストールすると、PFM - Agent または PFM - RM の接続先 PFM - Manager はローカルホストの PFM - Manager になります。この場合、PFM - Agent または PFM - RM の接続先 PFM - Manager をリモートホストの PFM - Manager に変更できません。リモートホストの PFM - Manager に接続したい場合は、インストールするホストに PFM - Manager がインストールされていないことを確認してください。
- PFM - Web Console がインストールされているホストに、Performance Management プログラムをインストールする場合は、Web ブラウザ画面をすべて閉じてからインス

ツールを実施してください。

- 監視ホスト名設定機能を使用している場合、同一ホスト上に 07-50 以前の PFM - Agent をインストールすることはできません。07-50 以前の PFM - Agent をインストールする場合、事前に監視ホスト名設定機能を使用しない設定に戻す (Get Host Mode ラベルに 0 を設定する) 必要があります。戻していない場合、07-50 以前の PFM - Agent のインストールに失敗することがあります。監視ホスト名の設定については、「6.3.3 Performance Management システムでのホスト名の変更」を参照してください。

(c) バージョンアップの注意事項

古いバージョンの Performance Management プログラムから、バージョンアップする場合の注意事項を次に示します。

なお、07-00 以降からのバージョンアップについての詳細は、「付録 E 移行手順と移行時の注意事項」を参照してください。

- Performance Management のプログラムをインストールするときには、ローカルホストの Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止しておいてください。なお、停止するサービスは物理ホスト上および論理ホスト上のすべてのサービスです。サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。
- PFM - Base と PFM - Manager は同一ホストにインストールできません。PFM - Base と、PFM - Agent または PFM - RM がインストールされているホストに PFM - Manager をインストールする場合は、すべての Performance Management プログラムをアンインストール後に PFM - Manager、PFM - Agent または PFM - RM の順でインストールしてください。また、PFM - Manager と、PFM - Agent または PFM - RM がインストールされているホストに PFM - Base をインストールする場合も同様に、すべての Performance Management プログラムをアンインストール後に PFM - Base、PFM - Agent または PFM - RM の順でインストールしてください。
- バージョン 08-00 以降の Performance Management プログラムでは、Store サービスの実行プログラム (jpcsto および stpq1pr) の配置先が変更されています。PFM - Manager および PFM - Agent を 08-00 以降にバージョンアップする際に、旧配置先の Store サービスの実行プログラムは削除されます。
- バージョンアップインストール時、既存の Store データベースを自動的にバージョンアップするため、一時的に Store データベースの格納先のディスクに Store データベースのサイズの 2 倍の容量を必要とします。バージョンアップインストールをする前に、Store データベースの格納先のディスク空き容量が十分かどうか確認してください。
必要な空き容量は、現在の Store データベースの合計サイズを基準に考慮してください。例えば、現在の Store データベースの合計サイズが 100GB の場合、バージョンアップインストールに必要なディスクの空き容量は 200GB 以上です。Store データ

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

ベースの格納先ディスクを変更している場合は、変更後のディスク容量に対して考慮してください。

(d) PFM - Web Console の注意事項

- Performance Management のプログラムが一つもインストールされていない環境に新規インストールする場合は、インストール先ディレクトリにファイルやフォルダがないことを確認してください。
- インストール時のステータスバーに「Installation failed」と表示されてインストールが失敗した場合、`/etc/.hitachi/.hitachi.log` および `/etc/.hitachi/.install.log` ファイルを採取してください。なお、これらのログファイルは、次にインストールすると上書きされるため、必要に応じてバックアップを採取してください。原因を取り除いたあと、PFM - Web Console をアンインストールし、再度インストールしてください。
- インストールログは、`/etc/.hitachi/.hitachi.log` および `/etc/.hitachi/.install.log` に出力されます。
- PFM - Web Console を上書きインストールした場合、`/opt/jplpcwebcon/conf` ディレクトリ下に格納されている初期設定ファイル (`config.xml`) は更新されません。ただし、`/etc/jplpcwebcon/sample/conf` ディレクトリ下に格納されている `config.xml` は更新されます。
- Solaris 10 のコンテナ機能を利用している場合、Global Zone にインストールしてください。Non-Global Zone にはインストールできません。

(e) 他システムと連携するときの注意事項

NNM と連携している環境にインストールする場合、NNM 連携機能および `ovw` を停止してからインストールしてください。NNM 連携機能については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、ネットワーク管理製品 (NNM) と連携した稼働監視について説明している章を参照してください。NNM の環境変数とコマンドについてはマニュアル「JP1/Cm2/Network Node Manager ネットワーク管理ガイド」または HP NNM マニュアルを参照してください。

(f) その他の注意事項

- Performance Management のプログラムが一つもインストールされていない環境に新規インストールする場合は、インストール先ディレクトリにファイルやフォルダがないことを確認してください。
- インストール時のステータスバーに「Installation failed」と表示されてインストールが失敗した場合、`/etc/.hitachi/.hitachi.log` および `/etc/.hitachi/.install.log` ファイルを採取してください。なお、このログファイルは、次にインストールすると上書きされるため、必要に応じてバックアップを採取してください。
- インストール先ディレクトリにリンクを張り Performance Management のプログラムをインストールした場合、全 Performance Management のプログラムをアンインストールしても、リンク先のディレクトリに一部のファイルやディレクトリが残る場合があります。削除する場合は、手動で行ってください。また、リンク先にインス

ツールする場合、リンク先に同名のファイルやディレクトリがあるときは、Performance Management のプログラムのインストール時に上書きされるので、注意してください。

- /opt/jp1pc/setup ディレクトリに PFM - Agent または PFM - RM のセットアップファイルがある場合、新規 PFM - Agent または PFM - RM の追加セットアップが実行されます。PFM - Agent または PFM - RM の追加セットアップが成功した場合の実行結果は共通メッセージログに KAVE05908-I メッセージが出力されます。確認してください。
- Performance Management のプログラムをインストールする場合、次に示すセキュリティ関連プログラムがインストールされていないかどうか確認してください。インストールされている場合、次の説明に従って対処してください。
 - セキュリティ監視プログラム
セキュリティ監視プログラムを停止するか、または設定を変更して、Performance Management のプログラムのインストールを妨げないようにしてください。
 - ウィルス検出プログラム
ウィルス検出プログラムを停止してから Performance Management のプログラムをインストールしてください。
Performance Management のプログラムのインストール中にウィルス検出プログラムが稼働している場合、インストールの速度が低下したり、インストールが最後まで実行できなかったり、または正しくインストールできなかったりすることがあります。
 - プロセス監視プログラム
プロセス監視プログラムを停止するか、または設定を変更して、Performance Management のサービスまたはプロセス、および共通コンポーネントのサービスまたはプロセスを監視しないようにしてください。
Performance Management のプログラムのインストール中に、プロセス監視プログラムによって、これらのサービスまたはプロセスが起動されたり停止されたりすると、インストールに失敗することがあります。
- バージョン 08-00 以降の Performance Management プログラムをインストールした場合、ステータス管理機能の設定状態は次のようになります。
 - Performance Management のプログラムがインストールされていないホストに 08-00 以降の PFM - Manager または PFM - Base を新規インストールした場合
ステータス管理機能の設定状態：有効になります。
 - それ以外の場合
ステータス管理機能の設定状態：既存のままです。

注 次の場合が該当します。

- 06-70 ~ 07-50 の PFM - Manager を 08-00 以降にバージョンアップした場合
- 06-70 ~ 07-50 の PFM - Agent がインストールされている環境に、08-00 以降の PFM - Manager または PFM - Base を新規インストールした場合

なお、06-70 ~ 07-10 の Performance Management はステータス管理機能を持たない

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

ため、この場合の設定状態は「無効」になります。

ステータス管理機能の設定の変更については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

- バージョン 08-11 以降の PFM・Manager の場合、ヘルスチェック機能を利用できます。バージョン 09-00 以降の PFM・Manager をインストールした場合、ヘルスチェック機能の設定状態は次のようになります。
 - Performance Management のプログラムがインストールされていないホストに 09-00 以降の PFM・Manager を新規インストールした場合
ヘルスチェック機能の設定状態：有効になります。
 - それ以外の場合
ヘルスチェック機能の設定状態：既存のままです。

注 次の場合が該当します。

- 06-70 ~ 08-10 の PFM・Manager を 08-11 以降にバージョンアップした場合
- 06-70 ~ 07-50 の PFM・Agent がインストールされている環境に、08-11 以降の PFM・Manager を新規インストールした場合

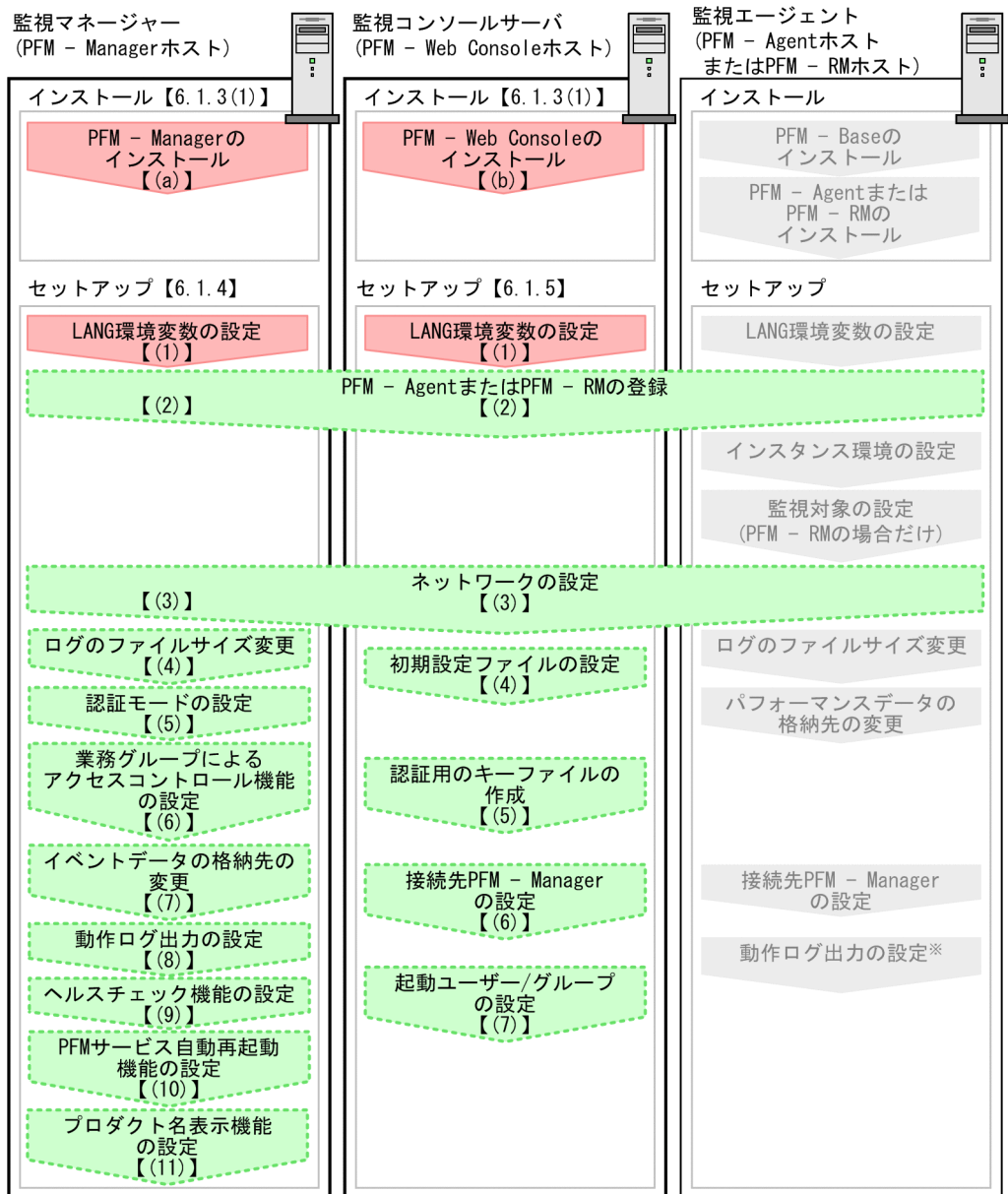
なお、06-70 ~ 08-10 の PFM・Manager はヘルスチェック機能を持たないため、この場合の設定状態は「無効」になります。

ヘルスチェック機能の設定については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

6.1.2 インストールとセットアップの流れ

Performance Management をインストールおよびセットアップする流れを説明します。

図 6-2 インストールとセットアップの流れ



(凡例)



: 必須セットアップ項目



: オプションのセットアップ項目



: 各PFM - Agentのマニュアルに手順が記載されている項目

【 】 : 参照先

注※ 動作ログは、各ホストで一度設定すれば、08-00以降のすべてのPFM - Agentに適用されます。
 設定の詳細については、「付録G 動作ログの出力」を参照してください。

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

ここでは、PFM・Manager のインストール、セットアップ手順を説明します。PFM・Web Console のインストールの手順は「6.1.3(8) PFM・Web Console プログラムのインストール方法」を、セットアップの手順は「6.1.5 PFM・Web Console のセットアップ手順」を参照してください。また、PFM・Agent または PFM・RM のインストール、セットアップ手順は、製品によって異なります。詳細については、各 PFM・Agent または PFM・RM マニュアルを参照してください。

なお、ユーザー入力を必要とするセットアップコマンドは、対話形式で実行するか非対話形式で実行するかを選択できます。

対話形式で実行する場合は、コマンドの指示に従ってユーザーが値を入力する必要があります。

非対話形式で実行する場合は、コマンド実行中に必要となる入力作業をオプション指定や定義ファイルで代替するため、ユーザー入力が不要になります。また、バッチ処理やリモート実行によってセットアップ作業を自動化できるため、管理者の負担や運用コストを低減できます。非対話形式のコマンドは、次のような場合に便利です。

- ・ 監視対象との接続に使用するパスワードを定期的に変更したい
- ・ 複数の監視対象を追加する際の作業を効率化したい

コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」を参照してください。

6.1.3 インストール手順

Performance Management のプログラムをインストールする順序と CD-ROM の提供媒体からプログラムをインストールする手順を説明します。また、PFM・Web Console のプログラムをインストールする手順も説明します。

(1) プログラムのインストール順序

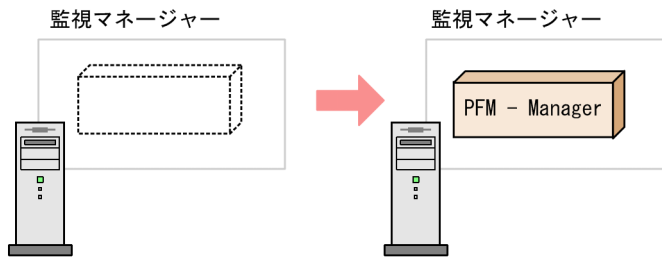
ここでは、Performance Management のプログラムをインストールする順序を説明します。

注意

Performance Management プログラムは、監視マネージャー、監視コンソールサーバ、および監視エージェントをどのような順序でインストールしてもかまいません。

(a) 監視マネージャーでのインストール順序

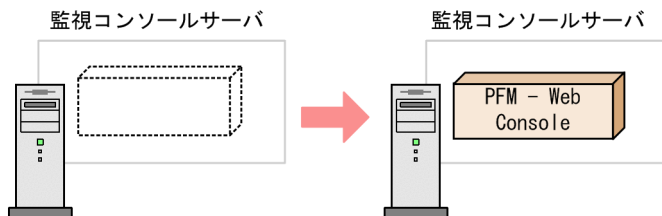
監視マネージャーには、PFM・Manager をインストールします。



1. PFM - Manager をインストールする

(b) 監視コンソールサーバでのインストール順序

監視コンソールサーバには、PFM - Web Console をインストールします。



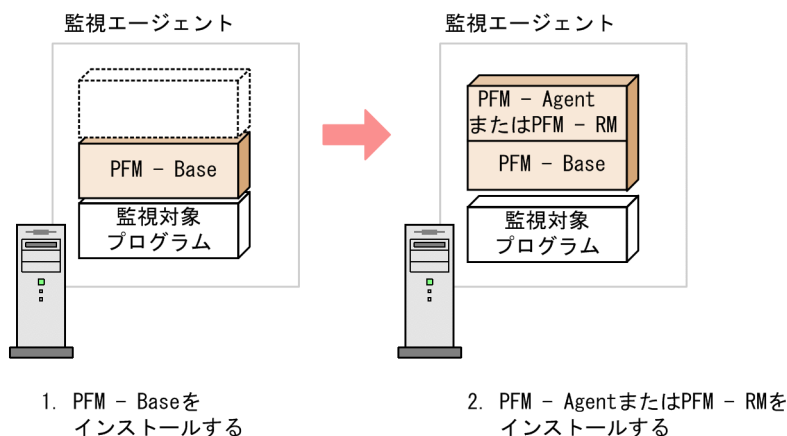
1. PFM - Web Console をインストールする

(c) 監視エージェントでのインストール順序

まず、PFM - Base をインストールし、次に PFM - Agent または PFM - RM をインストールします。PFM - Base がインストールされていないホストに PFM - Agent または PFM - RM をインストールすることはできません。

なお、PFM - Manager と同一ホストに PFM - Agent または PFM - RM をインストールする場合は、PFM - Manager、PFM - Agent または PFM - RM の順でインストールしてください。

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)



インストールの手順の詳細については、各 PFM - Agent または PFM - RM マニュアルを参照してください。

(2) Performance Management プログラムのインストール方法

Performance Management プログラムをインストールするには、CD-ROM の提供媒体を使用する方法と、JP1/NETM/DM を使用してリモートインストールする方法があります。JP1/NETM/DM を使用する方法については、次のマニュアルを参照してください。

- 「JP1/NETM/DM Manager」
- 「JP1/NETM/DM SubManager (UNIX(R) 用)」
- 「JP1/NETM/DM Client (UNIX(R) 用)」

注意

インストールを行うホストで Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、すべて停止してください。なお、停止するサービスは物理ホスト上および論理ホスト上のすべてのサービスです。サービスの停止方法は、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

CD-ROM の提供媒体を使用する場合のインストール手順を OS ごとに示します。

(3) HP-UX の場合

1. Performance Management のプログラムをインストールするホストに、root ユーザーでログインするか、または su コマンドでユーザーを root ユーザーに変更する。
2. ローカルホストで Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止する。
3. Performance Management のプログラムの媒体をセットする。

4. `mount` コマンドを実行して、CD-ROM 装置をマウントする。
例えば、CD-ROM 装置を `/cdrom` にマウントする場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
/usr/sbin/mount -F cdfs -r デバイススペシャルファイル名 /cdrom
```

なお、指定するコマンドは、使用する環境によって異なります。

5. 次のコマンドを実行して、Hitachi PP Installer を起動する。

```
/cdrom/IPFHPUX/SETUP /cdrom
```

Hitachi PP Installer が起動され、初期画面が表示されます。

6. 初期画面で「I」を入力する。
インストールできるプログラムの一覧が表示されます。
7. インストールしたい Performance Management のプログラムを選択する。
プログラムを選択するには、カーソルを移動させ、スペースバーで選択します。
8. 「I」を入力する。
PFM - Base の新規インストールの場合、接続先 PFM - Manager の設定画面が表示されます。PFM - Base の上書きインストールの場合、設定済みの接続先 PFM - Manager の情報が引き継がれてプログラムがインストールされます。
また、PFM - Base 以外のプログラムを選択した場合、選択したプログラムがインストールされます。
9. 接続先 PFM - Manager の設定画面が表示された場合、接続先 PFM - Manager のホスト名を入力する。
インストール時には接続先 PFM - Manager を設定しないで、あとから設定することもできます。設定しなかった場合、インストール時にはエージェントホストの物理ホスト名が設定されます。インストール後、接続先 PFM - Manager を変更してください。接続先 PFM - Manager の変更については、「6.3.2 接続先 PFM - Manager の変更」を参照してください。
10. インストールが正常終了したら、「Q」を入力する。
Hitachi PP Installer の初期画面に戻ります。

(4) Solaris 9 (SPARC) または Solaris 10 (SPARC) の場合

1. Performance Management のプログラムをインストールするホストに、root ユーザーでログインするか、または `su` コマンドでユーザーを root ユーザーに変更する。
2. ローカルホストで Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止する。
3. Performance Management のプログラムの媒体をセットする。

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

4. 次のコマンドを実行して、Hitachi PP Installer を起動する。

```
/cdrom/cdrom/SOLARIS/SETUP /cdrom/cdrom
```

Hitachi PP Installer が起動され、初期画面が表示されます。

なお、指定するコマンドは、使用する環境によって異なります。

5. 初期画面で「I」を入力する。

インストールできるプログラムの一覧が表示されます。

6. インストールしたい Performance Management のプログラムを選択する。

プログラムを選択するには、カーソルを移動させ、スペースバーで選択します。

7. 「I」を入力する。

PFM - Base の新規インストールの場合、接続先 PFM - Manager の設定画面が表示されます。この画面が表示されるのは、08-00 以前のバージョンの PFM - Agent がインストールされていないホストに、初めて PFM - Base をインストールするときだけです。08-00 以前のバージョンの PFM - Agent がインストールされているホストに PFM - Base をインストールする場合や、PFM - Base を上書きインストールする場合は、設定済みの接続先 PFM - Manager の情報が引き継がれます。

また、PFM - Base 以外のプログラムを選択した場合、選択したプログラムがインストールされます。

8. 接続先 PFM - Manager の設定画面が表示された場合、接続先 PFM - Manager のホスト名を入力する。

インストール時には接続先 PFM - Manager を設定しないで、あとから設定することもできます。設定しなかった場合、インストール時にはエージェントホストの物理ホスト名が設定されます。インストール後、接続先 PFM - Manager を変更してください。接続先 PFM - Manager の変更については、「6.3.2 接続先 PFM - Manager の変更」を参照してください。

9. インストールが正常終了したら、「Q」を入力する。

Hitachi PP Installer の初期画面に戻ります。

注

自動マウント機能を解除している環境では、Hitachi PP Installer を起動する前に、`/usr/sbin/mount` コマンドを次のように指定して CD-ROM 装置をマウントしてください。

```
/usr/sbin/mount -F cdfs -r デバイススペシャルファイル名 /cdrom/cdrom
```

なお、指定するコマンドは、使用する環境によって異なります。

(5) Solaris 10 (x86) または Solaris 10 (x64) の場合

1. Performance Management のプログラムをインストールするホストに、root ユーザーでログインするか、または `su` コマンドでユーザーを root ユーザーに変更する。

2. ローカルホストで Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止する。
3. Performance Management のプログラムの媒体をセットする。
4. 次のコマンドを実行して、Hitachi PP Installer を起動する。

```
/cdrom/cdrom/X86SOL/SETUP /cdrom/cdrom
```

Hitachi PP Installer が起動され、初期画面が表示されます。
 なお、指定するコマンドは、使用する環境によって異なります。

5. 初期画面で「I」を入力する。
 インストールできるプログラムの一覧が表示されます。
6. インストールしたい Performance Management のプログラムを選択する。
 プログラムを選択するには、カーソルを移動させ、スペースバーで選択します。
7. 「I」を入力する。
 PFM - Base の新規インストールの場合、接続先 PFM - Manager の設定画面が表示されます。この画面が表示されるのは、08-00 以前のバージョンの PFM - Agent がインストールされていないホストに、初めて PFM - Base をインストールするときだけです。08-00 以前のバージョンの PFM - Agent がインストールされているホストに PFM - Base をインストールする場合や、PFM - Base を上書きインストールする場合は、設定済みの接続先 PFM - Manager の情報が引き継がれます。
 また、PFM - Base 以外のプログラムを選択した場合、選択したプログラムがインストールされます。
8. 接続先 PFM - Manager の設定画面が表示された場合、接続先 PFM - Manager のホスト名を入力する。
 インストール時には接続先 PFM - Manager を設定しないで、あとから設定することもできます。設定しなかった場合、インストール時にはエージェントホストの物理ホスト名が設定されます。インストール後、接続先 PFM - Manager を変更してください。接続先 PFM - Manager の変更については、「6.3.2 接続先 PFM - Manager の変更」を参照してください。
9. インストールが正常終了したら、「Q」を入力する。
 Hitachi PP Installer の初期画面に戻ります。

注

自動マウント機能を解除している環境では、Hitachi PP Installer を起動する前に、
 /usr/sbin/mount コマンドを次のように指定して CD-ROM 装置をマウントしてください。

```
/usr/sbin/mount -F cdfs -r デバイススペシャルファイル名 /cdrom/cdrom
```

なお、指定するコマンドは、使用する環境によって異なります。

(6) AIX の場合

1. Performance Management のプログラムをインストールするホストに、root ユーザーでログインするか、または su コマンドでユーザーを root ユーザーに変更する。
2. ローカルホストで Performance Management のプログラムおよびサービスを停止する。
3. Performance Management のプログラムの媒体をセットする。
4. mount コマンドを実行して、CD-ROM 装置をマウントする。
例えば、CD-ROM 装置を /cdrom にマウントする場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
/usr/sbin/mount -r -v cdrfs /dev/cd0 /cdrom
```

5. 次のコマンドを実行して、Hitachi PP Installer を起動する。

```
/cdrom/AIX/SETUP /cdrom
```

Hitachi PP Installer が起動され、初期画面が表示されます。

6. 初期画面で「I」を入力する。
インストールできるプログラムの一覧が表示されます。
7. インストールしたい Performance Management のプログラムを選択する。
プログラムを選択するには、カーソルを移動させ、スペースバーで選択します。
8. 「I」を入力する。
PFM - Base の新規インストールの場合、接続先 PFM - Manager の設定画面が表示されます。
PFM - Base の上書きインストールでは、設定済みの接続先 PFM - Manager の情報が引き継がれてプログラムがインストールされます。
また、PFM - Base 以外のプログラムを選択した場合、選択したプログラムがインストールされます。
9. 接続先 PFM - Manager の設定画面が表示された場合、接続先 PFM - Manager のホスト名を入力する。
インストール時には接続先 PFM - Manager を設定しないで、あとから設定することもできます。設定しなかった場合、インストール時にはエージェントホストの物理ホスト名が設定されます。インストール後、接続先 PFM - Manager を変更してください。接続先 PFM - Manager の変更については、「6.3.2 接続先 PFM - Manager の変更」を参照してください。
10. インストールが正常終了したら、「Q」を入力する。
Hitachi PP Installer の初期画面に戻ります。

(7) Linux の場合

1. Performance Management のプログラムをインストールするホストに、root ユーザーでログインするか、または su コマンドでユーザーを root ユーザーに変更する。
2. ローカルホストで Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止する。
3. Performance Management のプログラムの媒体をセットする。
4. 次のコマンドを実行して、Hitachi PP Installer を起動する。

```
/mnt/cdrom/linux/setup /mnt/cdrom
```

注

上記下線部には、使用する CD-ROM のマウントディレクトリ名を指定してください。

Hitachi PP Installer が起動され、初期画面が表示されます。

なお、指定するコマンドは、使用する環境によって異なります。

5. 初期画面で「I」を入力する。
インストールできるプログラムの一覧が表示されます。
6. インストールしたい Performance Management のプログラムを選択する。
プログラムを選択するには、カーソルを移動させ、スペースバーで選択します。
7. 「I」を入力する。
PFM - Base の新規インストールの場合、接続先 PFM - Manager の設定画面が表示されます。
PFM - Base の上書きインストールでは、設定済みの接続先 PFM - Manager の情報が引き継がれてプログラムがインストールされます。
また、PFM - Base 以外のプログラムを選択した場合、選択したプログラムがインストールされます。
8. 接続先 PFM - Manager の設定画面が表示された場合、接続先 PFM - Manager のホスト名を入力する。
インストール時には接続先 PFM - Manager を設定しないで、あとから設定することもできます。設定しなかった場合、インストール時にはエージェントホストの物理ホスト名が設定されます。インストール後、接続先 PFM - Manager を変更してください。接続先 PFM - Manager の変更については、「6.3.2 接続先 PFM - Manager の変更」を参照してください。
9. インストールが正常終了したら、「Q」を入力する。
Hitachi PP Installer の初期画面に戻ります。

注意

インストール先ディレクトリがシンボリックリンクである場合、シンボリックリンク設定が解除されてしまいます。インストール前に以下のインストール先ディ

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

レクトリが実ディレクトリであることを確認してください。

```
/opt/jp1pc/*
```

(8) PFM - Web Console プログラムのインストール方法

PFM - Web Console プログラムのインストールは、CD-ROM の提供媒体に格納された日立 PP インストーラを使用します。

(a) ログイン

日立 PP インストーラによる PFM - Web Console のインストールは、root ユーザー以外では実行できません。作業対象のホストに root ユーザーでログインしてください。

(b) 日立 PP インストーラの起動

日立 PP インストーラは提供媒体に格納されています。実行時は、次の点に注意してください。

- ・ デバイススペシャルファイル名や CD-ROM のマウントディレクトリは、OS、ハードウェア構成およびシステム環境によって異なりますので、マニュアルおよびご使用環境などを確認してから実行してください。
- ・ 日立 PP インストーラ実行時の言語種別と実行するターミナルの言語を一致させておいてください。

(c) CD-ROM ファイルシステムのマウント

次のコマンドを入力して、CD-ROM ファイルシステムをマウントします。

```
mount -r -o mode=0544 /dev/cdrom /mnt/cdrom
```

注

上記下線部のデバイススペシャルファイル名および CD-ROM ファイルシステムのマウントディレクトリ名は、環境によって異なりますので注意してください。

(d) CD-ROM セットアッププログラムの起動

次のコマンドを入力すると、CD-ROM セットアッププログラムが日立 PP インストーラと常駐プロセス自動起動プログラムがハードディスク上にインストールされ、日立 PP インストーラが自動的に起動されます。

```
/mnt/cdrom/LINUX/setup /mnt/cdrom
```

注

上記下線部には、使用する CD-ROM のマウントディレクトリ名を指定してください。

CD-ROM のディレクトリ名やファイル名は、ハードウェア環境などによって記述した内

容と見え方が異なることがあります。ls コマンドで確認のうえ、表示されたファイル名をそのまま入力してください。

(e) プログラムのインストール

提供媒体を指定して、日立 PP インストーラまたは CD-ROM セットアッププログラムを起動します。PFM - Web Console の提供媒体を媒体装置にセットしておいてください。

メインメニューで [I] を選択すると、次に示すプログラムインストール画面が表示されます。

PP-NO.	VR	PP-NAME
<@>001	PP 型名	バージョン番号
:		JP1/PFM - Web Console
:		
:		
F) Forward B) Backward J) Down K) Up Space) Select/Unselect I) Install Q) Quit		

インストールするプログラムにカーソルを移動させ、スペースキーで選択します。選択したプログラムの左側には、「<@>」が表示されます。このとき、複数のプログラムを選択することもできます。続いて [I] を入力すると最下行に次のメッセージが表示されます。

```
Install PP? (y: install, n: cancel)==>
```

ここで、[y] または [Y] を選択するとインストールが開始されます。[y] または [Y] 以外を選択すると、インストールが中止されプログラムインストール画面に制御が戻ります。[Q] を入力すると、メインメニューに戻ります。

(f) プログラム一覧の表示

メインメニューで [L] を選択すると、次に示すプログラム一覧表示画面が表示されます。これは、そのホストにインストールされているプログラムの一覧です。

PP-NO.	VR	Install date	PP-NAME
001	PP 型名	バージョン番号	JP1/PFM - Web Console
:		YYYY/MM/DD hh:mm	
:			
:			
F) Forward B) Backward Q) Quit P) Print to /tmp/hitachi_PPLIST ==>			

注

上記下線部の Install date には、プログラムをインストールした時刻が表示されます。

[P] を選択すると、インストール済みプログラム一覧が “/tmp/hitachi_PPLIST” に出力されます。[Q] を選択するとメインメニューに戻ります。

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

(g) 日立 PP インストーラでインストールするときの注意事項

日立 PP インストーラでインストールするときの注意事項を次に示します。

- ・一時的なワークディレクトリから製品ディレクトリへコピー処理を行うため、インストール時に必要なディスク容量は、製品ディスク容量の 2 倍分必要となります。
- ・PFM - Web Console のインストール先ディレクトリは固定 (/opt/jp1pcwebcon/) です。変更できません。
- ・PFM - Manager および PFM - Base のインストール先ディレクトリは固定 (/opt/jp1pc/) です。変更できません。
- ・PFM - Web Console の上書きインストールを実行する場合は、PFM - Web Console のすべてのサービスを停止してください。
- ・PFM - Manager および PFM - Base の上書きインストールを実行する場合は、ホスト上の PFM サービスをすべて停止してください。
- ・「Installation failed.」と表示され、日立 PP インストーラを使ったインストールが失敗した場合は、/etc/.hitachi/.hitachi.log および /etc/.hitachi/.install.log ファイルを採取してシステム管理者に連絡してください。
/etc/.hitachi/.hitachi.log ファイルは、次に日立 PP インストーラを起動すると上書きされます。必要に応じてバックアップを採取してください。
- ・インストール先ディレクトリにリンクを張って PFM - Web Console をインストールした場合、リンク先にインストール製品と同名のファイル、またはディレクトリが存在するときは、上書きされます。

6.1.4 PFM - Manager のセットアップ手順

ここでは、監視マネージャーにインストールされた PFM - Manager をセットアップする手順を示します。

◀オプション▶ は使用する環境によって必要になるセットアップ項目、またはデフォルトの設定を変更する場合のオプションのセットアップ項目を示します。

(1) LANG 環境変数の設定

Performance Management で使用できる LANG 環境変数を次の表に示します。

なお、これらの LANG 環境変数を設定する前に、設定する言語環境が正しくインストール・構築されていることを確認しておいてください。正しくインストール・構築されていない場合、文字化けが発生したり、定義データが不当に書き換わってしまったりすることがあります。日本語環境と英語環境の注意事項については、「4.9.3 日本語版と英語版の混在環境での注意事項」を参照してください。

注意 1

共通メッセージログの言語は、サービス起動時やコマンド実行時に設定されている LANG 環境変数によって決まります。そのため、日本語や英語など、複数の言語

コードの文字列が混在することがあります。

注意 2

LC_ALL 環境変数が設定されており、LANG 環境変数の値と異なる場合は、Performance Management のサービスを起動する際、およびコマンドを実行する際に、LC_ALL 環境変数を解除するか、LANG 環境変数と同一の値に変更してください。

環境変数の変更は、当該操作を行うシェルだけで必要です。システム全体で変更する必要はありません。LC_ALL 環境変数を解除する場合は以下のコマンドで解除可能です。

```
unset LC_ALL
```

表 6-3 Performance Management で使用できる LANG 環境変数

OS	言語種別		LANG 環境変数の値
Linux	日本語	UTF-8 コード	<ul style="list-style-type: none"> ja_JP.UTF-8 ja_JP.utf8
	英語 (日本語なし)		C
HP-UX	日本語	シフト JIS コード	<ul style="list-style-type: none"> ja_JP.SJIS japanese
		EUC コード	<ul style="list-style-type: none"> ja_JP.eucJP japanese.euc
	英語 (日本語なし)		C
Solaris	日本語	シフト JIS コード	ja_JP.PCK
		EUC コード	<ul style="list-style-type: none"> ja japanese
	英語 (日本語なし)		C
AIX	日本語	シフト JIS コード	<ul style="list-style-type: none"> Ja_JP.IBM-932 Ja_JP
		EUC コード	<ul style="list-style-type: none"> ja_JP.IBM-eucJP (PFM - Manager では使用できません) ja_JP
	英語 (日本語なし)		C

注

NNM と連携する場合、セットアップスクリプトで使用できる LANG 環境変数は、次の表に示す値だけです。

表 6-4 NNM との連携時にセットアップスクリプトで使用できる LANG 環境変数

OS	言語種別		LANG 環境変数の値
HP-UX	日本語	Shift-JIS コード	ja_JP.SJIS

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

OS	言語種別		LANG 環境変数の値
Solaris		EUC コード	ja_JP.eucJP
	英語 (日本語なし)		C
	日本語	Shift-JIS コード	ja_JP.PCK
		EUC コード	ja japanese
	英語 (日本語なし)		C

(2) PFM - Agent または PFM - RM の登録 〈オプション〉

PFM - Manager および PFM - Web Console を使って PFM - Agent または PFM - RM を一元管理するために、PFM - Manager に PFM - Agent または PFM - RM を登録する必要があります。

PFM - Manager のバージョンが 08-50 以降の場合、登録は自動で行われるため、ここで説明する手順は不要です。

ただし、PFM - Manager よりあとでリリースされた PFM - Agent または PFM - RM については手動登録が必要になる場合があります。手動登録の可否については、PFM - Manager のリリースノートを参照してください。

参考

自動で登録された PFM - Agent または PFM - RM の情報は、次のタイミングで PFM - Web Console に表示されるようになります。

PFM - Web Console のバージョンが 08-50 以降の場合

登録された PFM - Agent または PFM - RM の起動後に、PFM - Web Console に再ログインしたとき

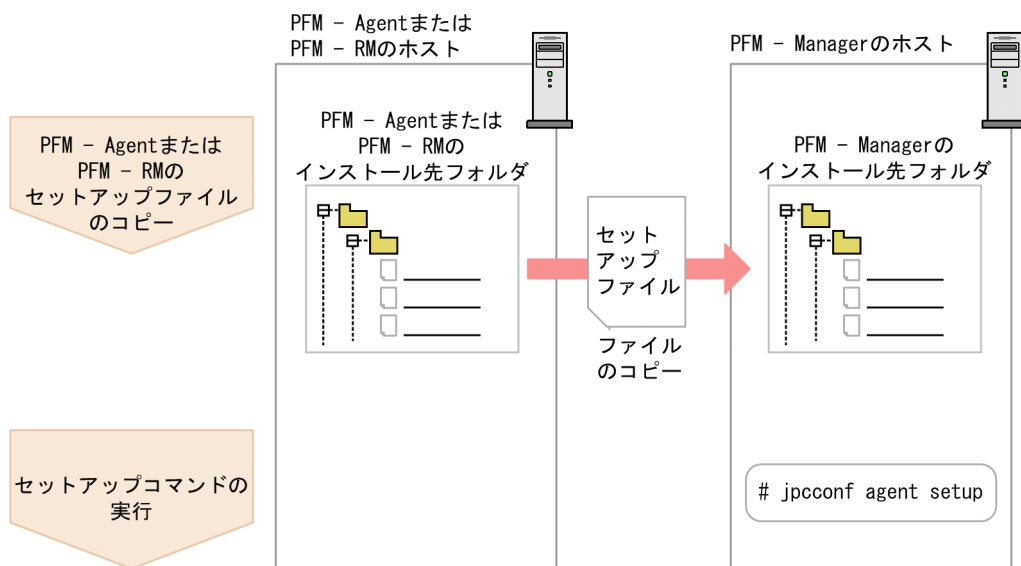
PFM - Web Console のバージョンが 08-11 以前の場合

登録された PFM - Agent の起動後に、PFM - Web Console を再起動したとき

PFM - Agent または PFM - RM の起動前に登録したい場合は、`jpccconf agent setup` コマンドに `-register` オプションを付加して実行してください。`jpccconf agent setup` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

PFM - Agent または PFM - RM の登録の流れを次に示します。

図 6-3 PFM - Agent または PFM - RM の登録の流れ



注意

- PFM-Agent または PFM-RM の登録は、PFM-Agent または PFM-RM のインストール環境を設定する前に実施してください。
- すでに PFM-Agent または PFM-RM の情報が登録されている Performance Management システムに、新たに同じプロダクト ID で、同じバージョンの PFM-Agent または PFM-RM を追加した場合は、PFM-Agent または PFM-RM の登録は必要ありません。
- バージョンが異なる同じプロダクト ID の PFM-Agent または PFM-RM を、異なるホストにインストールする場合、古いバージョン、新しいバージョンの順で PFM-Agent または PFM-RM をセットアップしてください。
- PFM-Manager と同じホストに PFM-Agent または PFM-RM をインストールした場合、`jpccconf agent setup` コマンドが自動的に実行されます。PFM-Agent または PFM-RM の場合は、共通メッセージログに KAVE05908-I が出力されるので、結果を確認してください。コマンドが正しく実行されていない場合は、コマンドを実行し直してください。コマンドの実行方法については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

(a) PFM-Agent または PFM-RM のセットアップファイルをコピーする

PFM-Agent または PFM-RM をインストールしたホストにあるセットアップファイルを PFM-Manager をインストールしたホストにコピーします。手順を次に示します。

1. PFM-Agent または PFM-RM のセットアップファイルをバイナリーモードでコピーする。

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

ファイルが格納されている場所およびファイルをコピーする場所を次の表に示します。

表 6-5 コピーするセットアップファイル

コピー元		コピー先	
ホスト	ファイル	ホスト	ファイル
PFM - Agent , PFM - RM	<ul style="list-style-type: none">• Windows の場合 インストール先ディレクトリ ¥setup¥jpcxxxu.Z• UNIX の場合 /opt/jp1pc/setup/ jpcxxxu.Z	PFM - Manager	/opt/jp1pc/ setup/

(凡例)

「xxx」は、各 PFM - Agent または PFM - RM のサービスキーを示します。サービスキーの詳細は、各 PFM - Agent または PFM - RM マニュアルを参照してください。

(b) PFM - Manager ホストでセットアップコマンドを実行する

PFM - Manager ホストで PFM - Agent または PFM - RM をセットアップするための次のコマンドを実行します。

```
jpccconf agent setup -key xxx
```

「xxx」は、各 PFM - Agent または PFM - RM のサービスキーを示します。

例えば、PFM - Agent for Oracle の場合、次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf agent setup -key Oracle
```

ここでは、対話形式の実行例を示していますが、jpccconf agent setup コマンドは非対話形式でも実行できます。jpccconf agent setup コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドについて説明している章を参照してください。

注意

コマンドを実行するローカルホストの Performance Management のプログラムおよびサービスが完全に停止していない状態で jpccconf agent setup コマンドを実行した場合、エラーが発生することがあります。その場合は、Performance Management のプログラムおよびサービスが完全に停止したことを確認したあと、再度 jpccconf agent setup コマンドを実行してください。

PFM - Agent または PFM - RM のセットアップファイルは、この作業が終了したあと、

削除してもかまいません。

(3) ネットワークの設定 オプション

Performance Management を使用するネットワーク構成に応じて、変更する場合に必要な設定です。

ネットワークの設定では次の二つの項目を設定できます。

IP アドレスを設定する

Performance Management を複数の LAN に接続されたネットワークで使用するときに設定します。複数の IP アドレスを設定するには、`jpchosts` ファイルにホスト名と IP アドレスを定義します。設定した `jpchosts` ファイルは Performance Management システム全体で統一させてください。

詳細については、「6.3.1 ネットワーク構成の変更」を参照してください。

ポート番号を設定する

Performance Management が使用するポート番号を設定できます。運用での混乱を避けるため、ポート番号とサービス名は、Performance Management システム全体で統一させてください。

ポート番号の設定の詳細については、「6.3.1 (1) (b) ポート番号を設定する」を参照してください。

(4) ログのファイルサイズ変更 オプション

Performance Management の稼働状況を、Performance Management 独自のログファイルに出力します。このログファイルを「共通メッセージログ」と呼びます。共通メッセージログは、デフォルトで 2,048 キロバイトのファイルが 2 個使用されます。このファイルサイズを変更したい場合に、必要な設定です。

詳細については、「6.4.1 共通メッセージログのファイルサイズ設定」を参照してください。

(5) 認証モードの設定 オプション

Performance Management の認証モードを PFM 認証モードから JP1 認証モードに変更したい場合に、必要な設定です。

詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、ユーザーアカウントと業務グループの管理について説明している章を参照してください。

(6) 業務グループによるアクセスコントロール機能の設定 オプション

業務グループを利用して Performance Management のユーザーを管理したい場合に必要な設定です。起動情報ファイル (`jpccomm.ini`) で、業務グループによるアクセスコントロール機能の利用有無を設定します。

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、ユーザーアカウントと業務グループの管理について説明している章を参照してください。

(7) イベントデータの格納先変更 〈オプション〉

PFM・Manager で管理されるイベントデータの格納先、バックアップ先、またはエクスポート先のディレクトリを変更したい場合に必要な設定です。

イベントデータは、デフォルトで次の場所に格納されます。

- ・ 格納先ディレクトリ：/opt/jp1pc/mgr/store/
- ・ バックアップ先ディレクトリ：/opt/jp1pc/mgr/store/backup/
- ・ エクスポート先ディレクトリ：/opt/jp1pc/mgr/store/dump/

注

論理ホストで運用する場合のデフォルトの保存先については、「/opt/jp1pc/」を「環境ディレクトリ ¥jp1pc¥」に読み替えてください。

変更方法についての詳細は、「6.4.2 イベントデータの格納先の変更」を参照してください。

(8) 動作ログ出力の設定 〈オプション〉

アラーム発生時に動作ログを出力したい場合に必要な設定です。動作ログとは、システム負荷などのしきい値オーバーに関するアラーム機能と連動して出力される履歴情報です。設定方法については、「付録 G 動作ログの出力」を参照してください。

(9) ヘルスチェック機能の設定 〈オプション〉

監視エージェントや監視エージェントが稼働するホストの稼働状態を確認したい場合に必要な設定です。設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

(10) PFM サービス自動再起動機能の設定 〈オプション〉

PFM サービスが何らかの原因で異常停止した場合に、自動的に PFM サービスを再起動させたいときに必要な設定です。設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

(11) プロダクト名表示機能の設定 〈オプション〉

08-50 以前からのバージョンアップ時にプロダクト名表示機能を有効にしたい場合、または新規セットアップ時にプロダクト名表示機能を無効にしたい場合に必要な設定です。プロダクト名表示機能の詳細については、「4.1.2 サービスの表示・指定方法」を参照し

てください。設定方法については、「6.4.8 プロダクト名表示機能の設定」を参照してください。

6.1.5 PFM - Web Console のセットアップ手順

ここでは、監視コンソールサーバにインストールされた PFM - Web Console をセットアップする手順を示します。

〈オプション〉は使用する環境によって必要になるセットアップ項目、またはデフォルトの設定を変更する場合のオプションのセットアップ項目を示します。

(1) LANG 環境変数の設定

PFM - Web Console で使用できる LANG 環境変数を次の表に示します。

なお、これらの LANG 環境変数を設定する前に、設定する言語環境が正しくインストール・構築されていることを確認しておいてください。正しくインストール・構築されていない場合、文字化けが発生したり、定義データが不当に書き換わってしまったりすることがあります。

注意

稼働状況ログの言語は、サービス起動時やコマンド実行時に設定されている LANG 環境変数によって決まります。そのため、日本語や英語など、複数の言語コードの文字列が混在することがあります。

表 6-6 PFM - Web Console で使用できる LANG 環境変数

OS	言語種別		LANG 環境変数の値
Linux	日本語	UTF-8 コード	<ul style="list-style-type: none"> ja_JP.UTF-8 ja_JP.utf8
	英語 (日本語なし)		C
HP-UX	日本語	シフト JIS コード	<ul style="list-style-type: none"> ja_JP.SJIS japanese
		EUC コード	<ul style="list-style-type: none"> ja_JP.eucJP japanese.euc
	英語 (日本語なし)		C
Solaris	日本語	シフト JIS コード	ja_JP.PCK
		EUC コード	<ul style="list-style-type: none"> ja japanese
	英語 (日本語なし)		C
AIX	日本語	シフト JIS コード	<ul style="list-style-type: none"> Ja_JP.IBM-932 Ja_JP

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

OS	言語種別	LANG 環境変数の値
	EUC コード	<ul style="list-style-type: none"> • ja_JP.ibm-eucJP • ja_JP
	英語 (日本語なし)	C

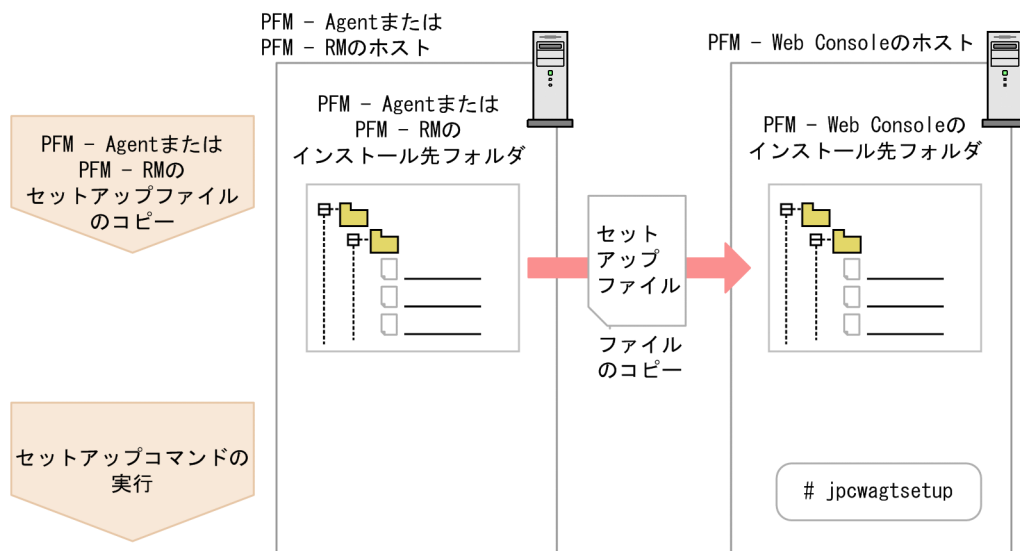
(2) PFM - Agent または PFM - RM の登録 オプション

PFM - Manager および PFM - Web Console を使って PFM - Agent または PFM - RM を一元管理するために、PFM - Web Console に PFM - Agent または PFM - RM を登録する必要があります。

PFM - Web Console のバージョンが 08-50 以降の場合、PFM - Agent または PFM - RM の登録は自動で行われるため、ここで説明する手順は不要です。ただし、PFM - Web Console よりあとでリリースされた PFM - Agent または PFM - RM については手動登録が必要になる場合があります。手動登録の可否については、PFM - Web Console のリリースノートを参照してください。

PFM - Agent または PFM - RM の登録の流れを次に示します。

図 6-4 PFM - Agent または PFM - RM の登録の流れ



注意

- すでに PFM - Agent または PFM - RM の情報が登録されている Performance Management システムに、新たに同じプロダクト ID で、同じバージョンの PFM - Agent または PFM - RM を追加した場合、PFM - Agent または PFM - RM の登録は必要ありません。
- バージョンが異なる同じプロダクト ID の PFM - Agent または PFM - RM を、異

なるホストにインストールする場合、最新バージョンの PFM - Agent または PFM - RM をセットアップしてください。

(a) PFM - Agent または PFM - RM のセットアップファイルをコピーする

PFM - Agent または PFM - RM をインストールしたホストにあるセットアップファイルを PFM - Web Console をインストールしたホストにコピーします。手順を次に示します。

1. PFM - Web Console が起動されている場合は、PFM - Web Console を停止する。
2. PFM - Agent または PFM - RM のセットアップファイルをバイナリーモードでコピーする。
ファイルが格納されている場所およびファイルをコピーする場所を次の表に示します。

表 6-7 コピーするセットアップファイル

コピー元		コピー先	
ホスト	ファイル	ホスト	ファイル
PFM - Agent , PFM - RM	<ul style="list-style-type: none"> • Windows の場合 インストール先フォルダ ¥setup¥jpcxxxu.Z • UNIX の場合 /opt/jplpc/setup/ jpcxxxu.Z 	PFM - Web Console	/opt/ jplpcwebcon/ setup/

(凡例)

「xxx」は、各 PFM - Agent または PFM - RM のサービスキーを示します。サービスキーの詳細は、各 PFM - Agent または PFM - RM マニュアルを参照してください。

(b) PFM - Web Console ホストでセットアップコマンドを実行する

PFM - Web Console で PFM - Agent または PFM - RM をセットアップするための次のコマンドを実行します。

```
jpcwagtsetup
```

PFM - Web Console ホストにある PFM - Agent または PFM - RM のセットアップファイルは、この作業が終了したあと削除してもかまいません。

注意

PFM - Web Console を PFM - Agent または PFM - RM と同一のホストにインストールしている場合でも、jpcwagtsetup コマンドの実行は必要です。

(3) ネットワークの設定

Performance Management を使用するネットワーク構成に応じて、変更する場合に必要な設定です。

ネットワークの設定では次の設定ができます。

ポート番号を設定する

PFM - Web Console が使用するポート番号を設定できます。

ポート番号の設定の詳細については、「6.4.6 PFM - Web Console の設定変更」を参照してください。

(4) 初期設定ファイル (config.xml) の設定

PFM - Web Console を動作させるための設定が、初期設定ファイル (config.xml) に定義されています。この初期設定の内容を変更する場合に必要な設定です。

config.xml ファイルは、PFM - Web Console のログファイルに関する設定やコンソール画面に表示するデータの最大値などを設定できます。詳細については、「6.4.6 PFM - Web Console の設定変更」を参照してください。

(5) PFM - Web Console の認証用のキーファイルの作成

PFM - Web Console のコマンドを実行する場合は、あらかじめ `jpcmkkey` コマンドを実行しておく必要があります。`jpcmkkey` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

(6) PFM - Web Console の接続先 PFM - Manager の設定

PFM - Web Console が接続する PFM - Manager を設定します。接続先の PFM - Manager を設定するには、初期設定ファイル (config.xml) ファイルに設定します。

詳細については、「6.4.6 (1) (b) 接続先 PFM - Manager の設定」を参照してください。

(7) PFM - Web Console の起動ユーザー / グループの設定

PFM - Web Console のサービスは、デフォルトとして `nobody/root` 権限で起動します。このユーザー / グループで PFM - Web Console の起動に失敗した場合、KAVJT0003-E メッセージが出力されます。

この場合、`/opt/jp1pcwebcon/CPSB/httpsd/conf/httpsd.conf` ファイルの `User/Group` をシステムに存在する `root` 以外のユーザーとそのユーザーが属するグループに変更してください。変更する箇所を以下に太字で示します。


```
User nobody
Group root
```

6.1.6 監視コンソールの Web ブラウザの設定手順

PFM - Web Console を使用するために、次に示す Web ブラウザの設定が必要です。

- JavaScript を有効にする。
- ファイルをダウンロードできるようにする。
- Cookie を有効にする。
- 画像 (GIF データ) を表示する。
- ページキャッシュを確認する。
- フォントサイズを設定する。

監視コンソールの OS が UNIX の場合にサポートする Web ブラウザを次に示します。

表 6-8 監視コンソールの OS が UNIX の場合にサポートする Web ブラウザ

Web ブラウザ	バージョン	OS	サポートする PFM - Web Console のバージョン
Firefox	3	Linux	09-00 以降
	2.0.x	HP-UX, Solaris, AIX, Linux	08-11 以降

Web ブラウザごとの設定項目を表に示します。

(1) Firefox 3 の場合

表 6-9 Firefox 3 の設定

メニュー	カテゴリー	設定項目
[編集] - [設定]	[プライバシー] - [Cookie]	[サイトから送られてきた Cookie を保存する] (保存期間の選択は任意)
	[コンテンツ]	[画像を自動的に読み込む] [JavaScript を有効にする]
	[コンテンツ] - [Javascript]	[詳細設定] で「ウィンドウの移動または大きさの変更」を選択する。
	[コンテンツ] - [フォントと配色]	デフォルト値を使用する。
	[コンテンツ] - [言語]	[言語設定] で日本語「ja」をリストの先頭ににする。
	[セキュリティ] - [パスワード]	[サイトのパスワードを保存する] のチェックを外す。

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

(2) Firefox 2.0.x の場合

表 6-10 Firefox 2.0.x の設定

メニュー	カテゴリー	設定項目
[編集] - [設定]	[プライバシー] - [Cookie]	[サイトから送られてきた Cookie を保存する] (保存期間の選択は任意)
	[コンテンツ]	[画像を自動的に読み込む] [JavaScript を有効にする]
	[コンテンツ] - [Javascript]	[詳細設定] で「ウィンドウの移動または大きさの変更」を選択する。
	[コンテンツ] - [フォントと配色]	デフォルト値を使用する。
	[セキュリティ] - [パスワード]	「パスワードマネージャ」の「サイトのパスワードを記憶する」のチェックを外す。
	[詳細] - [言語設定]	「ja」をリストの先頭にする。

(3) Firefox 3.6 の場合

表 6-11 Firefox 3.6 の設定

メニュー	カテゴリー	設定項目
[編集] - [設定]	[プライバシー] - [Cookie]	[サイトから送られてきた Cookie を保存する] (「サードパーティの Cookie も保存する」と保存期間の選択は任意)
	[コンテンツ]	[画像を自動的に読み込む] [JavaScript を有効にする]
	[コンテンツ] - [Javascript]	[詳細設定] で「ウィンドウの移動または大きさの変更」を選択する。
	[コンテンツ] - [フォントと配色]	[サイズ] は 12 を推奨する。その他はデフォルト値を使用する。
	[コンテンツ] - [言語]	[言語設定] で日本語「ja」をリストの先頭にする。
	[セキュリティ] - [パスワード]	「サイトのパスワードを記憶する」のチェックを外す。

6.2 アンインストールとアンセットアップ

ここでは、Performance Management プログラムをアンインストールおよびアンセットアップする手順を示します。

6.2.1 アンインストールとアンセットアップの前に

ここでは、Performance Management をアンインストールおよびアンセットアップするときの注意事項を次に示します。

(1) アンインストールに必要な OS ユーザー権限に関する注意事項

Performance Management プログラムをアンインストールするときは、必ず、root ユーザーで実行してください。

(2) ネットワークに関する注意事項

Performance Management プログラムをアンインストールしても、`services` ファイルに定義されたポート番号は削除されません。

(3) プログラムに関する注意事項

- Performance Management のプログラムおよびサービスや、Performance Management のファイルを参照するような他プログラムを起動したままアンインストールした場合、ファイルやディレクトリが残ることがあります。この場合は、手動でインストール先ディレクトリ以下をすべて削除してください。
- PFM - Base と、PFM - Agent または PFM - RM がインストールされているホストの場合、PFM - Base のアンインストールは PFM - Agent または PFM - RM をアンインストールしないと実行できません。この場合、PFM - Agent または PFM - RM、PFM - Base の順にアンインストールしてください。また、PFM - Manager と、PFM - Agent または PFM - RM がインストールされているホストの場合も同様に、PFM - Manager のアンインストールは PFM - Agent または PFM - RM をアンインストールしないと実行できません。この場合、PFM - Agent または PFM - RM、PFM - Manager の順にアンインストールしてください。

(4) サービスに関する注意事項

- PFM - Manager をアンインストールするときは、Performance Management システム全体で、Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止しておいてください。
- PFM - Agent または PFM - RM をアンインストールしただけでは、`jpctool service list` コマンドで表示できるサービス情報は削除されません。この場合、`jpctool service delete` コマンドを使用してサービス情報を削除してください。サービス情報の削除方法については、「6.2.3 サービス情報の削除」を参照してください。

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

- PFM - Manager をアンインストールしたあと、同じマシンに再インストールすると、`jpctool service list` コマンドで Trap Generator サービスが二つ表示されることがあります。この場合、PFM - Manager のサービスを起動し、「Inactive」となっている Trap Generator サービスを `jpctool service delete` コマンドで削除してください。

(5) PFM - Web Console の注意事項

- アンインストールログは、`/etc/.hitachi/.uninstall.log` に出力します。
- アンインストールに失敗した場合は、アンインストール実行時のログ (`/etc/.hitachi/.uninstall.log`) を退避して、原因を取り除いたあと、再度アンインストールしてください。アンインストールするプログラムに「JP1/PFM - Web Console」がない場合は、一度インストールして、再度アンインストールしてください。
- PFM - Web Console がインストールされているホストから、Performance Management プログラムをアンインストールする場合は、Web ブラウザ画面をすべて閉じてからアンインストールを実施してください。

(6) その他の注意事項

- インスタンス環境を設定している PFM - Agent または PFM - RM の場合、PFM - Agent または PFM - RM をアンインストールする前に、インスタンス環境をアンセットアップしておいてください。アンセットアップ方法については、各 PFM - Agent または PFM - RM マニュアルの、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。
- NNM 連携機能を使用した場合、PFM - Manager または PFM - Base をアンインストールする前に、NNM 連携機能をアンセットアップしておいてください。アンセットアップ方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、ネットワーク管理製品 (NNM) と連携した稼働監視について説明している章を参照してください。
- アラームテーブルをバインドしている PFM - Agent または PFM - RM をアンインストールまたはアンセットアップする場合、アンインストールまたはアンセットアップの実行前に PFM - Web Console での操作または `jpctool alarm unbind` コマンドを使用して、バインドされているアラームテーブルをすべてアンバインドしてください。
- PFM - Agent または PFM - RM をアンインストールまたはアンセットアップする場合、アンインストールまたはアンセットアップの実行後に、PFM - Web Console のエージェント階層で「User Agents」を選択して表示されるツリーから、不要になったエージェントを必要に応じて削除してください。また、不要になったアラームおよびレポートの定義情報を必要に応じて削除してください。エージェント階層からのエージェントの削除方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、エージェントの監視について説明している章を参照してください。アラームの定義情報の削除方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、アラームによる稼働監視について説明している章を参

照してください。レポートの定義情報の削除方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働分析のためのレポートの作成について説明している章を参照してください。

- Store データベースの格納先ディレクトリがデフォルト以外に設定されている場合、Performance Management プログラムをアンインストールしても、Store データベースの格納先のディレクトリのファイルは削除されません。この場合は、Store データベースの格納先のディレクトリ以下をすべて手動で削除してください。

6.2.2 アンインストール手順

(1) Performance Management プログラムのアンインストール手順

Performance Management プログラムをアンインストールする手順を説明します。

1. Performance Management のプログラムをアンインストールするホストに、root ユーザーでログインするか、または su コマンドでユーザーを root ユーザーに変更する。
2. ローカルホストで Performance Management のプログラムおよびサービスを停止する。
サービス情報を表示して、サービスが起動されていないか確認してください。ローカルホストで Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、すべて停止してください。なお、停止するサービスは物理ホスト上および論理ホスト上のすべてのサービスです。
サービスの停止方法およびサービス情報の表示方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。
3. 次のコマンドを実行して、Hitachi PP Installer を起動する。

```
/etc/hitachi_setup
```

Hitachi PP Installer が起動され、初期画面が表示されます。

4. 初期画面で「D」を入力する。
アンインストールできるプログラムの一覧が表示されます。
5. アンインストールしたい Performance Management のプログラムを選択して、「D」を入力する。
選択したプログラムがアンインストールされます。なお、プログラムを選択するには、カーソルを移動させ、スペースバーで選択します。
なお、PFM・Manager または PFM・Base を削除する場合は、ほかのすべての Performance Management プログラムを事前にアンインストールする必要があります。
6. アンインストールが正常終了したら、「Q」を入力する。

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

Hitachi PP Installer の初期画面に戻ります。

(2) PFM - Web Console プログラムのアンインストール手順

PFM - Web Console プログラムをアンインストールするには、次のコマンドを入力してください。

```
/etc/hitachi_setup
```

メインメニューで [D] を選択すると、次に示すプログラム削除画面が表示されます。

PP-NO.	VR	PP-NAME
<@>001	PP 型名	バージョン番号
:		JP1/PPM - Web Console
:		

F) Forward B) Backward J) Down K) Up Space) Select/Unselect D) Delete Q) Quit

アンインストールするプログラムにカーソルを移動させ、スペースキーで選択します。選択したプログラムの左側には、「<@>」が表示されます。このとき、複数のプログラムを選択することもできます。

続いて [D] を入力すると最下行に次のメッセージが表示されます。

```
Delete PP? (y: delete, n: cancel)==>
```

ここで、[y] または [Y] を選択するとプログラムのアンインストールが開始されます。[n] または [N] を選択すると、プログラムのアンインストールが中止されプログラム削除画面に制御が戻ります。[Q] を入力すると、メインメニューに戻ります。

(a) PFM - Web Console プログラムをアンインストールするときの注意事項

PFM - Web Console プログラムをアンインストールするときの注意事項を次に示します。

- 次の状態でアンインストールした場合は、ファイルまたはディレクトリが残ることがあります。残留ファイルがある場合は、/opt/jp1pcwebcon ディレクトリ以下を手動で削除してください。
- サービス起動中のとき
- カレントディレクトリが /opt/jp1pcwebcon 配下で、/etc/hitachi_setup を実行したとき
- /opt/jp1pcwebcon/ にリンクを張り、PFM - Web Console をインストールしたとき
- 論理ホスト環境の削除に失敗したとき

6.2.3 サービス情報の削除

次のような場合、`jpctool service list` コマンドで表示されるサービス情報を削除する必要があります。

- PFM - Agent または PFM - RM をアンインストールしたとき
- 接続先の PFM - Manager を変更したとき
- 運用開始後に、次のどれかのホスト名を変更したとき
 - PFM - Manager
 - PFM - Agent または PFM - RM
 - PFM - Base

サービス情報を削除するには `jpctool service delete` コマンドを使用します。PFM - Agent ホストの LAN ケーブルが接続されていないなどの物理的な理由で通信できない場合は、サービス情報を削除できません。この場合、`-force` オプションを指定して実行することで、強制的にサービス情報を削除できます。なお、アラームテーブルがバインドされている PFM - Agent または PFM - RM のサービス情報を削除する場合は、バインドされているアラームテーブルを削除前にすべてアンバインドしてください。

サービス情報を削除する手順を次に示します。

1. PFM - Manager がインストールされているホストにログインする。
2. `jpctool service delete` コマンドを、情報を削除したいサービスのサービス ID を指定して実行する。
例えば、ホスト `host02` 上にある PFM - Agent for Oracle の Agent Store サービスの情報を削除する場合は、次のように指定します。

```
jpctool service delete -id "OS*" -host host02
```

3. `jpctool service sync` コマンドを実行する。

`jpctool service sync` コマンドで同期したサービス情報は、PFM - Web Console の画面でエージェント階層を再表示すると、画面に反映されます。

注意 PFM - RM のリモートエージェントをアンセットアップした場合の注意事項

PFM - RM のリモートエージェントをアンセットアップした場合 (`jpccconf target unsetup` コマンド実行後) は、自動的にサービス情報が削除されるため、`jpctool service delete` コマンドの実行は不要です。

ただし、アンセットアップ後に PFM - Web Console に情報を反映するためには、`jpctool service sync` コマンドの実行が必要です。

サービス情報は、次のタイミングで削除されます。

- PFM - Manager および削除対象の PFM - RM のサービスが起動しているとき
`jpccconf target unsetup` コマンドを実行すると、PFM - RM から PFM - Manager にサービス情報の削除要求が行われ、PFM - Manager でサービス情報が

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

削除されます。

- PFM・Manager または削除対象の PFM・RM のサービスが停止しているとき
jpccconf target unsetup コマンドを実行後に、PFM・RM のサービスが起動して PFM・Manager に接続されたタイミングで、PFM・Manager でサービス情報が削除されます。

6.3 Performance Management のシステム構成の変更

監視対象システムの構成変更に応じて、Performance Management のシステム構成を変更する場合があります。ここでは、Performance Management のシステム構成を変更する手順を説明します。

6.3.1 ネットワーク構成の変更

ネットワーク構成を変更したときの、Performance Management の設定を変更する手順を説明します。

なお、コマンドについては、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。また、PFM - Manager と PFM - Web Console 間、または PFM - Manager と PFM - Agent または PFM - RM 間のファイアウォールを通過させるための設定および注意事項については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、付録に記載されているポート番号一覧を参照してください。

(1) PFM - Manager ホスト、および PFM - Agent または PFM - RM ホストでの作業手順

PFM - Manager ホスト、および PFM - Agent または PFM - RM ホストでのネットワークの設定変更手順を説明します。

(a) IP アドレスを設定する

複数の LAN に接続されたネットワーク環境で Performance Management を運用するときに使用する IP アドレスを指定したい場合は、IP アドレスを設定します。

IP アドレスを設定したい場合は、`jpchosts` ファイルの内容を直接編集します。

注意

`jpchosts` ファイルを設定した場合、`jpchosts` ファイルに定義したホスト名については、`hosts` ファイルや DNS の定義を参照しません。したがって、ホスト名から取得される IP アドレスを、`jpchosts` ファイルに定義しておく必要があります。

手順を次に示します。

1. テキストエディターなどで、`jpchosts` ファイルを開く。
`jpchosts` ファイルは、`/opt/jp1pc/` に格納されています。
2. `jpchosts` ファイルを編集する。
例えば、ホスト名が `hostA` で IP アドレスが `20.108.41.1` であるホストと、ホスト名が `hostB` で IP アドレスが `20.108.41.2` と `20.108.41.3` であるホストの IP アドレスを

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

次のように設定します。

```
hostA 20.108.41.1
hostB 20.108.41.2, 20.108.41.3
```

IP アドレスが 20.108.41.1 であるホストに、エイリアス名 aliasA を付与する場合、次のように設定します。

```
aliasA 20.108.41.1
```

- 一つのホストに複数の IP アドレスを設定している場合は、先に指定した IP アドレスが優先されます。
 - 次の条件に当てはまる場合、IP アドレス設定は無効です。
 - ホスト名の長さが 33 バイト以上の場合
 - ホスト名が localhost の場合
 - 10 進ドット表記の IP アドレス (例: 172.16.233.12) をホスト名として使用している場合
 - 「-」で始まるホスト名の場合
 - 次の文字または空白を含むホスト名の場合
¥ / : , ; * ? " > < | . =
 - IP アドレス 10 進ドット表記 (例: 172.16.233.12) で指定してください。
 - 一つのホストに対して指定できる IP アドレスの数は 16 個です。
3. 該当ホストの Performance Management を停止後、注意 2 に従い、jpchosts ファイルをコピーする。
 4. 停止した該当ホストの Performance Management を再起動する。
Performance Management を再起動すると、設定した jpchosts ファイルの情報が有効になります。

注意 1

jpchosts ファイルでのホスト名解決は、1 番目に設定している IP アドレスが使用できなくなった場合、それ以降 2 番目の IP アドレスを使用し続けるというものではありません。次回以降の通信でも、まず 1 番目の IP アドレスから順に通信を試みます。

注意 2

jpchosts への PFM - Manager ホストの設定追加の要否

1. PFM - Manager ホストが NIC 一枚の場合
PFM - Manager の jpchosts : 設定の必要はありません。
PFM - Manager に接続している PFM - Agent または PFM - RM の jpchosts : 設定の必要はありません。
2. PFM - Manager ホストが NIC 二枚以上の場合

PFM - Manager の `jpchosts` : PFM - Manager で使用したい IP アドレスを指定します。

PFM - Manager に接続している PFM - Agent または PFM - RM の `jpchosts` : PFM - Manager で使用したい IP アドレスを指定します。

`jpchosts` への PFM - Agent または PFM - RM ホストの設定追加の要否

存在する PFM - Agent または PFM - RM ホストごとに確認します。

1. PFM - Agent または PFM - RM ホストが NIC 一枚の場合

PFM - Manager の `jpchosts` : 設定の必要はありません。

確認対象の PFM - Agent または PFM - RM の `jpchosts` : 設定の必要はありません。

その他の PFM - Agent または PFM - RM の `jpchosts` : 設定の必要はありません。

2. PFM - Agent または PFM - RM ホストが NIC 二枚以上の場合

PFM - Manager の `jpchosts` : PFM - Agent または PFM - RM で使用したい IP アドレスを指定します。

確認対象の PFM - Agent または PFM - RM の `jpchosts` : PFM - Agent または PFM - RM で使用したい IP アドレスを指定します。

その他の PFM - Agent または PFM - RM の `jpchosts` : 設定の必要はありません。

注 確認対象の PFM - Agent または PFM - RM とほかの PFM - Agent または PFM - RM ホスト間で `jpctool db backup` コマンド, `jpctool db clear` コマンド, `jpctool db dump` コマンド, または `jpctool service list` コマンドなどを使用して通信する場合は, 確認対象の PFM - Agent または PFM - RM の設定を追加する必要があります。

補足

PFM - Manager ホスト, および PFM - Agent または PFM - RM ホスト間で名前解決されていればネットワークの設定について問題はありません。ただし, 運用時に混乱のないように, `jpchosts` ファイルの定義を設定対象となるホストで統一することをお勧めします。

(b) ポート番号を設定する

PFM - Manager と PFM - Web Console 間, または PFM - Manager と PFM - Agent または PFM - RM 間のファイアウォールを通過させたい場合など, Performance Management システムで使用するポート番号を固定して運用したい場合は, 各サービスに対して固定のポート番号を設定してください。

各サービスに対して固定のポート番号を設定する場合や, 一度設定したポート番号を変更する場合は, `jpccconf port define` コマンドを使用します。PFM - Web Console 側のポート番号は, 初期設定ファイル (`config.xml`) で設定します。PFM - Web Console ホストで `config.xml` ファイルを変更する手順については, 「6.4.6 PFM -

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

Web Console の「設定変更」を参照してください。

ここでは、`jpcconf port define` コマンドの実行手順を、対話形式の場合と非対話形式の場合に分けて説明します。`jpcconf port define` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドについて説明している章を参照してください。

また、ポート番号の設定の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の付録の、ファイアウォールの通過方向について説明している箇所を参照してください。

補足

Name Server サービスに設定するポート番号については、Performance Management システム内の全ホストで同じ番号にする必要があります。

また、Status Server サービスに設定するポート番号についても、Performance Management システム内の全ホストで同じ番号にする必要があります。

他の JP1/PFM サービスについても運用での混乱を避けるため、Performance Management システム全体でポート番号とサービス名の対応を統一してください。

対話形式で実行する場合

1. `jpcconf port define` コマンドを実行する。

例えば、すべてのサービスに対してポート番号を固定値に設定する場合、次のようにコマンドを実行します。

```
jpcconf port define -key all
```

2. 個々のサービスに対してポート番号を設定する。

`jpcconf port define` コマンドを実行すると、現在設定されているポート番号またはデフォルトのポート番号が表示されます。

例えば、Name Server サービスに対する、現在のポート番号が 22285 の場合、次のように表示されます。

```
Component [Name Server]
ServiceID [PN1001]
Port [22285]
:
```

ポート番号をどのように設定したいかによって、操作が異なります。設定内容と操作を次の表に示します。システム内でポート番号が重複しないかぎり、`jpcconf port define` コマンドで表示されるポート番号をそのまま使用してください。

設定内容	操作
表示されている番号を、サービス固定のポート番号としてそのまま使用する場合	リターンキーを押す。

設定内容	操作
ポート番号を、表示されている番号から変更する場合	1024 ~ 65535 の範囲内でポート番号を入力する。 ただし、現在システムで使用されているポート番号は指定できない。
ポート番号を固定しない場合	「0」を入力する。 ただし、次のサービスは、ポート番号を固定しないように設定することはできない。「0」を入力した場合は、デフォルト値が設定される。 <ul style="list-style-type: none"> • Name Server サービス • View Server サービス (PFM - Web Console と View Server サービス間) • NNM Object Manager サービス • Status Server サービス

注意

- ポート番号設定時に、Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合、サービスを停止してから `jpccconf port define` コマンドを実行してください。ポート番号の設定が終わったあと、手でサービスを起動してください。
- `jpccconf port define` コマンドの実行中に、Ctrl+C キーで中断すると、ポート番号は正しく設定されません。`jpccconf port define` コマンドを再実行して、ポート番号を設定し直してください。

3. 再度、`jpccconf port list` コマンドを実行して、ポート番号が正しく設定されたかどうかを確認する。

例えば、すべてのサービスのポート番号を表示する場合、次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf port list -key all
```

Services 欄または Port 欄に `<error>` と表示された場合は、正しく設定されていません。ポート番号を設定し直してください。エラーとなった場合、次の要因が考えられます。

- ポート番号が `services` ファイルに登録されていない。
- `services` ファイルに同じポート番号が重複して登録されている。

非対話形式で実行する場合

1. `jpccconf port define` コマンドで、定義ファイルのテンプレートを作成する。
例えば、すべてのサービスに対してポート番号を固定値に設定する場合、次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf port define -key all -template 定義ファイル名
```

対象となるすべてのサービスのラベルおよび値が記載された定義ファイルが出力され

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

ます。ラベルの値は、すでにポート番号が設定されているサービスの場合は設定済みのポート番号になり、ポート番号が設定されていないサービスの場合は0になります。

2. 手順 1 で作成した定義ファイルのテンプレートを編集する。

設定したいポート番号に合わせてテンプレートの設定値を編集します。

定義ファイルの記述形式については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドについて説明している章を参照してください。

定義ファイルの記述例を次に示します。

```
[Common Definitions]
Definition File Version=0001

[Common]
Name Server=22285
Status Server=22350
OpenView=22292
[Manager]
Master Manager=auto
Master Store=auto
Correlator =auto
:
[UNIX]
Collector=0
Store=0
:
[Oracle]
[[oracle1]]
Collector=0
Store=0
```

3. jpccconf port define コマンドで、編集した定義ファイルを読み込ませる。

次のようにコマンドを実行します。-input オプションには、手順 2 で編集した定義ファイルを指定します。

```
jpccconf port define -key all -input 定義ファイル名 -noquery
```

(c) PFM - Web Console との通信に使用するホスト名または IP アドレスを設定する

PFM - Manager と PFM - Web Console との間は、TCP/IP を用いて通信します。これは、PFM - Manager と PFM - Web Console が別ホストに存在する場合だけではなく、同一ホスト上に存在する場合も同様です。このため、Performance Management を運用する場合は、PFM - Manager ホストと PFM - Web Console ホストの双方で常に通信可能なホスト名または IP アドレスを設定する必要があります。設定を実施していない場合、PFM - Manager ホスト名または PFM - Web Console ホスト名から、最初に解決される IP アドレスが使用されます。

注

PFM - Manager に接続する PFM - Web Console が複数存在する場合は、すべての PFM - Web Console ホストから通信できるホスト名または IP アドレスを指定する必要があります。

例えば、次のような構成や運用を取る場合は、PFM・Manager ホストと PFM・Web Console ホストの双方で常に通信可能なホスト名または IP アドレスを設定する必要があります。

- PFM・Manager ホストと PFM・Web Console ホスト間で IP アドレス変換 (NAT) を使用している場合
- PFM・Manager ホストが業務用 LAN および監視用 LAN の二つのネットワークに接続され、Performance Management は監視用 LAN でホスト間通信を行う場合
- ホストのメンテナンス作業の際に、一時的に NIC から LAN ケーブルを抜く場合 (この際、NIC に割り当てられた IP アドレスが無効になることがあるため)

ホスト名または IP アドレスの設定の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の付録の、PFM・Manager と PFM・Web Console の通信で使用するホスト名の設定について説明している個所を参照してください。

(2) PFM・Web Console ホストでの作業手順

PFM・Web Console ホストでネットワークの設定を変更するには、初期設定ファイル (config.xml) を変更します。

config.xml ファイルを変更する手順については、「6.4.6 PFM・Web Console の設定変更」を参照してください。

6.3.2 接続先 PFM・Manager の変更

ここでは、Performance Management システムを構築したあとで、接続先の PFM・Manager を変更する方法を説明します。

なお、サービスの起動方法および停止方法の操作については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

(1) PFM・Agent または PFM・RM ホストでの作業手順 オプション

PFM・Agent または PFM・RM の接続先 PFM・Manager を変更するには、jpccconf mgrhost define コマンドを使用します。

PFM・Manager と同じホストに PFM・Agent または PFM・RM をインストールした場合、または PFM・Base のインストール時に接続先 PFM・Manager を設定した場合、この作業は不要です。

注意

- 複数の PFM・Manager には接続できません。一つの監視エージェントで設定できる接続先の PFM・Manager は一つだけです。そのため、一つの監視エージェントに複数の PFM・Agent または PFM・RM がインストールされている場合、それぞ

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

れの接続先として異なる PFM - Manager を設定することはできません。

- PFM - Agent または PFM - RM と、PFM - Manager が同じホストにインストールされている場合、接続先 PFM - Manager はローカルホストの PFM - Manager となります。この場合、接続先の PFM - Manager をリモートホストの PFM - Manager に変更できません。
- 接続先 PFM - Manager を変更する前に、ローカルホストで Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、すべて停止してください。
- PFM - Base のバージョン 08-50 以降でインストール時に接続先 PFM - Manager の設定を省略した場合は、接続先 PFM - Manager の変更を必ず行ってください。

手順を次に示します。

1. Performance Management のプログラムおよびサービスを停止する。

Performance Management のプログラムおよびサービスが起動している場合は、すべて停止してください。サービスの停止には `jpcspm stop` コマンドを使用してください。

```
jpcspm stop -key jplpc
```

2. 接続先 PFM - Manager を変更する。

接続先 PFM - Manager を変更するには、`jpccconf mgrhost define` コマンドを使用します。例えば、接続先 PFM - Manager をホスト `host02` 上の PFM - Manager に変更する場合、次のように指定します。

```
jpccconf mgrhost define -host host02
```

ここでは、対話形式の実行例を示していますが、`jpccconf mgrhost define` コマンドは非対話形式でも実行できます。`jpccconf mgrhost define` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドについて説明している章を参照してください。

3. 変更後の接続先 PFM - Manager が起動されていることを確認する。

4. PFM - Agent または PFM - RM ホスト上の Performance Management のプログラムおよびサービスを再起動する。

なお、変更前の接続先 PFM - Manager で、PFM - Agent または PFM - RM のホスト名が付加された、Performance Management プログラムのサービス情報をすべて削除してください。サービス情報の削除方法については、「6.2.3 サービス情報の削除」を参照してください。

(2) PFM - Web Console ホストでの作業手順

接続先 PFM - Manager を変更するには、初期設定ファイル (`config.xml`) ファイルを

変更します。詳細については、「6.4.6 (1) (b) 接続先 PFM - Manager の設定」を参照してください。

6.3.3 Performance Management システムでのホスト名の変更

ここでは、Performance Management システムのホスト名に使用する名称を変更する方法について説明します。なお、Performance Management システムのホスト名に使用する名称を監視ホスト名と呼びます。

参考

監視ホスト名は、サービス ID の一部 (デバイス名) などに使用されます。例えば、監視ホスト名が「HostA」のホストに PFM - Agent for Platform (UNIX) をインストールした場合、Agent Collector のサービス ID は「UA1HostA」となります。なお、プロダクト名表示機能を使用する場合は、「HostA<UNIX>」となります。

デフォルトでは、監視ホスト名が実ホスト名 (uname -n コマンドで OS から取得されるホスト名) になっています。

物理ホスト環境に存在する Performance Management システムでは、hostname コマンドで OS から取得されるホスト名またはエイリアス名 (任意のホスト名) を監視ホスト名に設定できます。この機能を、監視ホスト名設定機能といいます。

これによって、例えば同じ実ホスト名を持つホストが複数ある環境では、エイリアス名によってホストを区別して監視できるようになります。

Performance Management システムが現在使用している監視ホスト名を確認するには、次のコマンドを実行します。hostmode は監視ホスト名の取得方法を示し、hostname は監視ホスト名を示します。

```
jpcconf host hostmode -display
```

表示例

```
hostmode : uname
hostname : hostA
```

監視ホスト名の取得方法と監視ホスト名の関係について次の表に示します。

表 6-12 監視ホスト名の取得方法と監視ホスト名の関係

監視ホスト名の取得方法	監視ホスト名
uname	物理ホスト名 (uname -n コマンドで表示される値)
hostname	物理ホスト名 (hostname コマンドで表示される値)

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

監視ホスト名の取得方法	監視ホスト名
alias	エイリアス名

監視ホスト名にエイリアス名を設定する場合、`jpccconf host hostmode` コマンドを実行して、監視ホスト名の取得方法を `hostname` または `alias` に設定する必要があります。

なお、`jpccconf host hostmode` コマンドを実行した場合、定義情報や性能情報など変更前の情報はすべて引き継がれます。`jpccconf host hostmode` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

注意

`jpccconf host` コマンドの実行中に他コマンドを実行しないでください。ほかのコマンドを実行した場合、`jpccconf host` コマンドまたは他コマンドの実行に失敗することがあります。

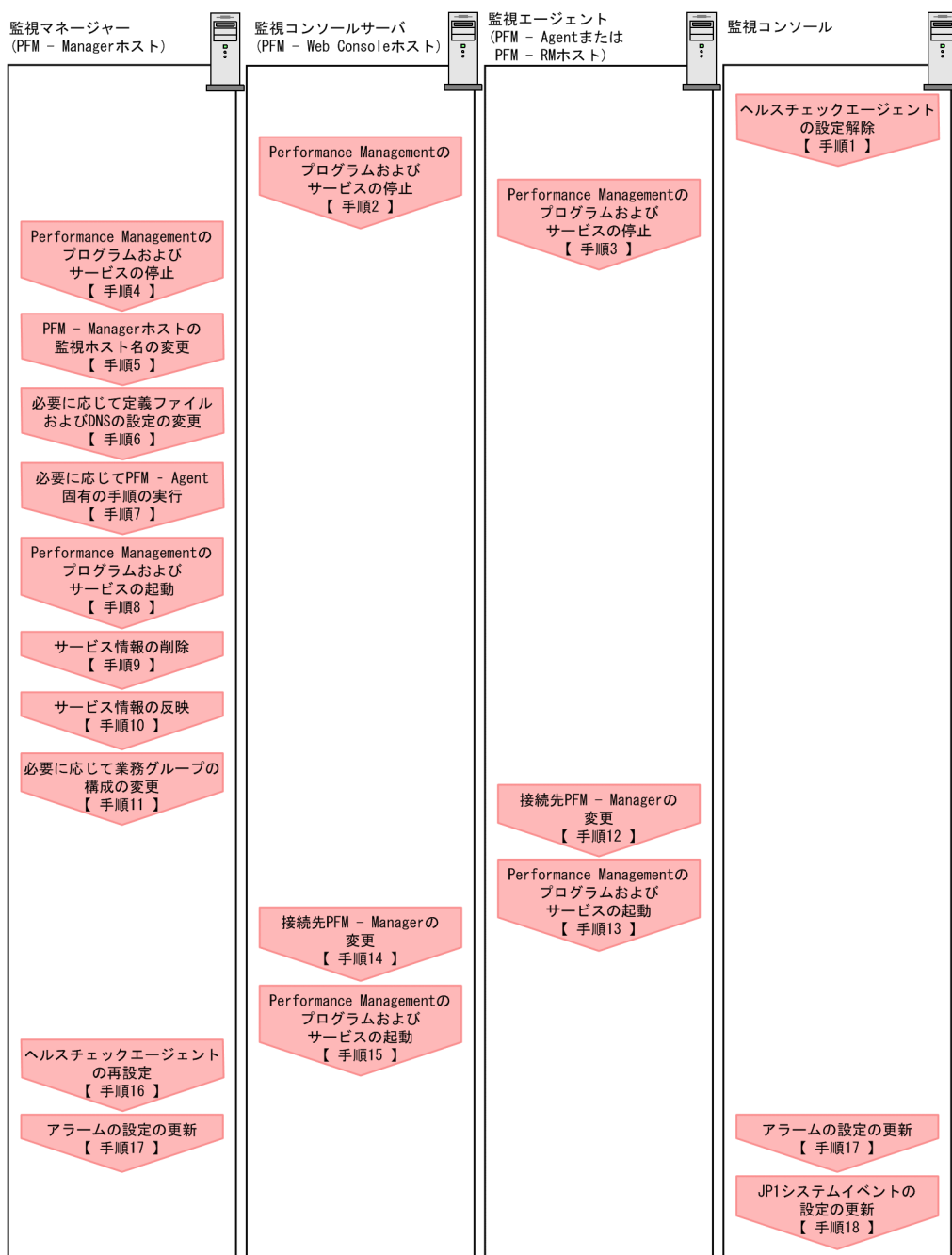
(1) PFM - Manager ホストの監視ホスト名を変更する

PFM - Manager ホストの監視ホスト名を変更する場合、次のホストでの作業が必要です。

- PFM - Manager ホスト
- PFM - Web Console ホスト
- PFM - Agent または PFM - RM ホスト
- 監視コンソール

作業の流れを次の図に示します。

図 6-5 PFM - Manager ホストの監視ホスト名を変更する流れ



(凡例)

: Performance Managementの作業

【 】 : 参照先

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

図中の手順番号に沿って作業手順を次に示します。

1. ヘルスチェックエージェントの設定を解除する。

ヘルスチェック機能を使用している場合、ヘルスチェックエージェントのエージェント定義の削除 (エージェント階層の管理フォルダからの削除、アラームテーブルの関連づけの削除) を、PFM - Web Console のブラウザから行います。エージェントの定義を変更する手順の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、エージェントの監視について説明している章、またはアラームによる稼働監視について説明している章を参照してください。

2. PFM - Web Console ホストでサービスを停止する。

ホスト名を変更する PFM - Manager に接続する PFM - Web Console ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止します。サービスの停止には `jpcwstop` コマンドを使用してください。

3. PFM - Agent または PFM - RM ホストでサービスを停止する。

ホスト名を変更する PFM - Manager に接続する PFM - Agent または PFM - RM ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止します。サービスの停止には `jpcspm stop` コマンドを使用してください。

4. PFM - Manager ホストでサービスを停止する。

ホスト名を変更する PFM - Manager ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止します。サービスの停止には `jpcspm stop` コマンドを使用してください。

5. PFM - Manager ホストの監視ホスト名を変更する。

`jpcconf host hostmode` コマンドを実行して、監視ホスト名の取得方法を変更します。コマンドの実行例を次に示します。

監視ホスト名の取得方法を `hostname` に変更する場合

```
jpcconf host hostmode -mode hostname -d d:¥backup -dbconvert  
convert
```

監視ホスト名の取得方法をエイリアス名 (aliasA) に変更する場合

```
jpcconf host hostmode -mode alias -aliasname aliasA -d d:¥backup  
-dbconvert convert
```

`jpcconf host hostmode` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

参考

jpccconf host hostmode コマンドの -d オプションに指定するディレクトリには、目安として、指定したホストに存在する PFM - Agent および PFM - RM の Store データベース容量およびインポートディレクトリにあるデータベース容量の合計と同量の空きディスク容量が必要です。ただし、Store データベースの格納先ディレクトリおよびインポートディレクトリを変更している場合、変更後のディレクトリのデータベース容量を基に、必要なディスク容量を算出してください。

例えば、指定したホストに、ヘルスチェックエージェント、PFM - Agent for Platform、および PFM - Agent for Oracle が存在する場合、それぞれの Store データベースの容量およびインポートディレクトリにあるデータベース容量を合計した値の空きディスク容量が必要となります。なお、PFM - Manager の Master Store サービスの Store データベースの容量は合計に含める必要はありません。

6. 必要に応じて、jpchosts ファイル、hosts ファイル、および DNS の設定を変更する。

7. 必要に応じて、PFM - Agent 固有の手順を実行する。

PFM - Manager ホストに PFM - Agent がインストールされている構成では、PFM - Agent 固有の手順が必要な場合があります。PFM - Agent 固有の手順の要否について、次の表に示します。

表 6-13 PFM - Agent 固有の手順の要否

構成		手順の要否と参照先
PFM - Manager ホストにインストールされているのが、PFM - Agent 09-00 以降の場合		PFM - Agent 固有の手順の要否は、PFM - Agent ごとに異なります。PFM - Agent 固有の手順については、各 PFM - Agent マニュアルの、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。
PFM - Manager ホストにインストールされているのが、PFM - Agent 09-00 未満の場合	次の PFM - Agent がインストールされている場合。 <ul style="list-style-type: none"> PFM - Agent for Cosminexus PFM - Agent for Domino PFM - Agent for Enterprise Applications PFM - Agent for Microsoft SQL Server 	PFM - Agent 固有の手順が必要です。固有の手順については「(4) ホスト名変更の際に、必要に応じて行う Agent 固有の手順」を参照してください。
	上記以外の場合	PFM - Agent 固有の手順は不要です。

PFM - Agent 固有の手順が必要な場合は、表の参照先に示された手順を完了してから次の手順に進んでください。

8. PFM - Manager ホストでサービスを起動する。

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

PFM - Manager ホスト上の Performance Management のプログラムおよびサービスを起動します。サービスの起動には `jpcspm start` コマンドを使用してください。

9. PFM - Manager ホストでサービス情報を削除する。

PFM - Manager ホストのホスト名を変更しても、変更前のホスト名が付加された Performance Management プログラムのサービス情報は変更されません。PFM - Manager ホストのホスト名を変更した場合は、変更前の PFM - Manager のサービス情報を削除する必要があります。例えば、変更前の PFM - Manager ホスト名が `hostA` の場合、PFM - Manager ホストで次のようにコマンドを実行して、ホスト `hostA` 上にある PFM - Manager サービスの情報をすべて削除します。

```
jpcctool service delete -id "P*" -host hostA
jpcctool service delete -id "0*" -host hostA
```

`jpcctool service delete` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

なお、コマンド実行時に `KAVE05233-W` メッセージが出力され、サービス情報の削除に失敗する場合、次のように指定してコマンドを再実行してください。

```
jpcctool service delete -id "P*" -host hostA -force
jpcctool service delete -id "0*" -host hostA -force
```

10. PFM - Manager のサービス情報を反映する。

PFM - Web Console にサービス情報の削除を反映するため、PFM - Manager と PFM - Web Console のサービス情報を同期します。サービス情報を同期するには `jpcctool service sync` コマンドを使用してください。

11. 必要に応じて、業務グループの構成を変更する。

ホスト名を変更した PFM - Manager ホストが、業務グループに割り当てられている場合は、業務グループの構成を変更する必要があります。手順の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、ユーザーアカウントと業務グループの管理について説明している章を参照してください。

12. PFM - Agent または PFM - RM ホストで接続先 PFM - Manager の設定を変更する。

ホスト名を変更した PFM - Manager に接続する PFM - Agent または PFM - RM ホストで、接続先 PFM - Manager の設定を変更します。接続先 PFM - Manager の設定の変更は、`jpccconf mgrhost define` コマンドを使用します。例えば、接続先 PFM - Manager のホスト名が `hostB` に変更された場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpccconf mgrhost define -host hostB
```

ここでは、対話形式の実行例を示していますが、`jpccconf mgrhost define` コマン

ドは非対話形式でも実行できます。jpccconf mgrhost define コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

13. PFM - Agent または PFM - RM ホストでサービスを起動する。

ホスト名を変更した PFM - Manager に接続する PFM - Agent または PFM - RM ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスを起動します。サービスの起動には jpcspm start コマンドを使用してください。

14. PFM - Web Console ホストで、接続先 PFM - Manager の設定を変更する。

ホスト名を変更した PFM - Manager に接続する PFM - Web Console ホストで、接続先 PFM - Manager の設定を変更します。接続先 PFM - Manager の設定を変更するには、初期設定ファイル (config.xml) ファイルを変更します。詳細については、「6.4.6 (1) (b) 接続先 PFM - Manager の設定」を参照してください。

15. PFM - Web Console ホストでサービスを起動する。

ホスト名を変更した PFM - Manager に接続する PFM - Web Console ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスを起動します。サービスの起動には jpcwstart コマンドを使用してください。

16. ヘルスチェックエージェントの定義を再設定する。

ヘルスチェック機能を使用している場合、ホスト名変更後のヘルスチェックエージェントの定義 (手順 1 で解除した定義) を再設定します。

17. アラームの設定を更新する。

次の場合、PFM - Manager ホストの jpctool alarm コマンドを使用するか、または監視コンソールから、アラームの設定を更新する必要があります。

- アクションの実行先アクションハンドラに PFM - Manager ホストのアクションハンドラを指定している場合
アラームを編集して、アクションを実行するアクションハンドラとして「PH1 < 変更後の PFM - Manager ホスト名 >」を設定してください。
- アクションで JP1 イベントを発行している場合
アクションの JP1 イベントの設定を再度行ってください。

アラーム編集方法の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、アラームによる稼働監視について説明している章を参照してください。

18. JP1 システムイベントの設定を更新する。

次のどちらかの条件を満たす場合、PFM - Web Console のブラウザから JP1 システムイベントの設定を更新する必要があります。

- 変更前のホスト名を、JP1 システムイベントの JP1/Base 接続先のイベントサーバ名に指定している。
- 変更前のホスト名を、JP1 システムイベントの監視コンソールのホスト名に指定している。

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

19. 設定変更後の確認をする。

設定変更後は、次の確認をしてください。

- パフォーマンスデータの収集
パフォーマンスデータの収集間隔 (Collection Interval) に指定している時間の 2 倍以上の期間は、稼働させて問題なく収集できるか確認します。
- `jpctool db dump` コマンドの実行
収集したパフォーマンスデータが問題なく出力できるか確認します。
- レポート定義およびアラーム定義の確認
Web ブラウザで作成したレポート定義およびアラームの定義が問題ないか確認します。
- アクション実行の確認
作成したアラームのアクション実行が問題なく実行できるか確認します。

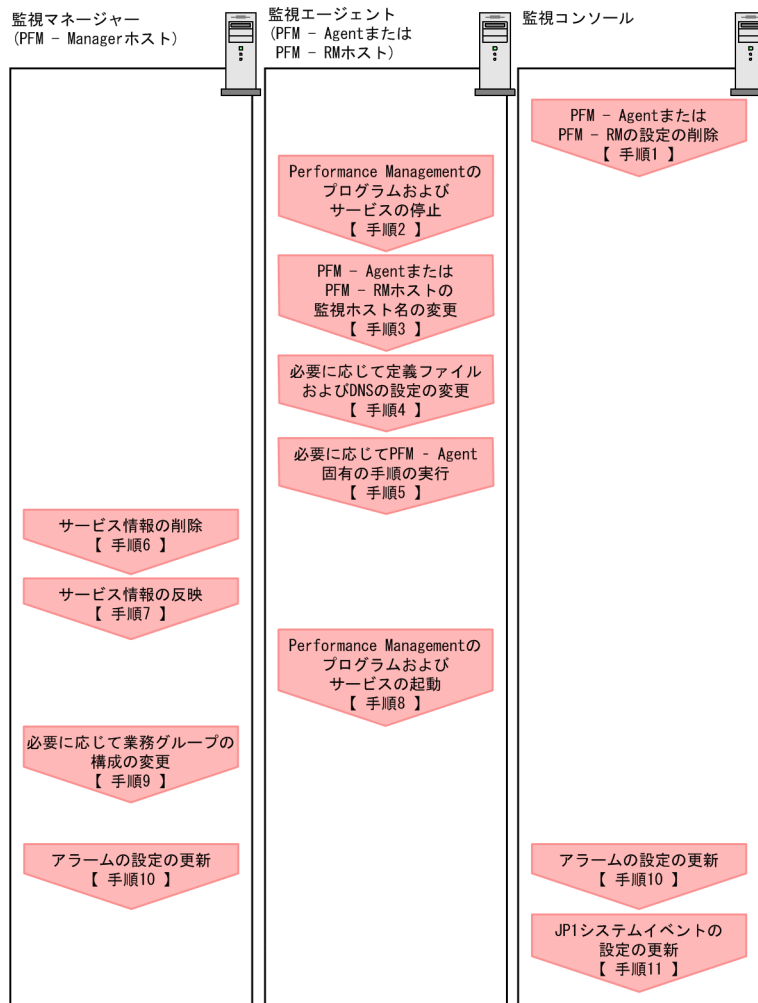
(2) PFM - Agent または PFM - RM ホストの監視ホスト名を変更する

PFM - Agent または PFM - RM ホストの監視ホスト名を変更する場合、次のホストでの作業が必要です。


- PFM - Manager ホスト
- PFM - Agent または PFM - RM ホスト
- 監視コンソール

作業の流れを次の図に示します。

図 6-6 PFM - Agent または PFM - RM ホストの監視ホスト名を変更する流れ



(凡例)

 : Performance Managementの作業

【 】 : 参照先

図中の手順番号に沿って作業手順を次に示します。

1. PFM - Agent または PFM - RM の設定を削除する。

ホスト名を変更する PFM - Agent または PFM - RM ホストのエージェント定義の削除 (エージェント階層の管理フォルダからの削除, アラームテーブルの関連づけの削除) を, PFM - Web Console のブラウザから行います。

エージェントの定義を変更する手順の詳細については, マニュアル「JP1/ Performance Management 運用ガイド」の, エージェントの監視について説明している章, またはアラームによる稼働監視について説明している章を参照してください

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

い。

2. PFM - Agent または PFM - RM ホストでサービスを停止する。

ホスト名を変更する PFM - Agent または PFM - RM ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止します。サービスの停止には `jpcspm stop` コマンドを使用してください。

3. PFM - Agent または PFM - RM ホストで監視ホスト名を変更する。

`jpcconf host hostmode` コマンドを実行して、監視ホスト名の取得方法を変更します。コマンドの実行例を次に示します。

監視ホスト名の取得方法を `hostname` に変更する場合

```
jpcconf host hostmode -mode hostname -d d:¥backup -dbconvert
convert
```

監視ホスト名の取得方法をエイリアス名 (`aliasA`) に変更する場合

```
jpcconf host hostmode -mode alias -aliasname aliasA -d
d:¥backup -dbconvert convert
```

`jpcconf host hostmode` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/ Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

参考

`jpcconf host hostmode` コマンドの `-d` オプションに指定するディレクトリには、目安として、指定したホストに存在する PFM - Agent および PFM - RM の Store データベース容量およびインポートディレクトリにあるデータベース容量の合計と同量の空きディスク容量が必要です。ただし、Store データベースの格納先ディレクトリおよびインポートディレクトリを変更している場合、変更後のディレクトリのデータベース容量を基に、必要なディスク容量を算出してください。

例えば、指定したホストに、PFM - Agent for Platform および PFM - Agent for Oracle が存在する場合、それぞれの Store データベースの容量およびインポートディレクトリにあるデータベース容量を合計した値の空きディスク容量が必要となります。なお、PFM - Manager の Master Store サービスの Store データベースの容量は合計に含める必要はありません。

4. 必要に応じて、`jpchosts` ファイル、`hosts` ファイル、および DNS の設定を変更する。

5. 必要に応じて、PFM - Agent 固有の手順を実行する。

PFM - Agent 固有の手順の要否について、次の表に示します。

表 6-14 PFM - Agent 固有の手順の要否

構成		手順の要否と参照先
監視ホスト名を変更するのが、PFM - Agent 09-00 以降の場合		PFM - Agent 固有の手順の要否は、PFM - Agent ごとに異なります。PFM - Agent 固有の手順については、各 PFM - Agent マニュアルの、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。
監視ホスト名を変更するのが、PFM - Agent 09-00 未満の場合	次の PFM - Agent の場合。 <ul style="list-style-type: none"> PFM - Agent for Cosminexus PFM - Agent for Domino PFM - Agent for Enterprise Applications PFM - Agent for Microsoft SQL Server 	PFM - Agent 固有の手順が必要です。固有の手順については「(4) ホスト名変更の際に、必要に応じて行う Agent 固有の手順」を参照してください。
	上記以外の場合	PFM - Agent 固有の手順は不要です。

PFM - Agent 固有の手順が必要な場合は、表の参照先に示された手順を完了してから次の手順に進んでください。

6. PFM - Manager ホストでサービス情報を削除する。

PFM - Agent または PFM - RM ホストのホスト名を変更しても、変更前のホスト名が付加された Performance Management プログラムのサービス情報は変更されません。PFM - Manager ホストで変更前の PFM - Agent または PFM - RM のサービス情報を削除する必要があります。例えば、変更前の PFM - Agent または PFM - RM ホストのホスト名が hostB の場合、PFM - Agent for Oracle の Agent Store サービスの情報を削除するときは、PFM - Manager ホストで次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpctool service delete -id "OS*" -host hostB
```

7. PFM - Manager のサービス情報を反映する。

PFM - Web Console にサービス情報の削除を反映するため、PFM - Manager と PFM - Web Console のサービス情報を同期します。サービス情報を同期するには `jpctool service sync` コマンドを使用してください。

同期されたサービス情報は、PFM - Web Console の画面でエージェント階層を再表示すると、画面に反映されます。

8. PFM - Agent または PFM - RM ホストでサービスを起動する。

ホスト名を変更した PFM - Agent または PFM - RM ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスを起動します。サービスの起動には `jpccspm start` コマンドを使用してください。

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

9. 必要に応じて、業務グループの構成を変更する。

ホスト名を変更した PFM - Agent または PFM - RM ホストが、業務グループに割り当てられている場合は、業務グループの構成を変更する必要があります。手順の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、ユーザーアカウントと業務グループの管理について説明している章を参照してください。

10. アラームの設定を更新する。

次の場合、PFM - Manager ホストの `jpctool alarm` コマンドを使用するか、または監視コンソールから、アラームの設定を更新する必要があります。

- アクションの実行先アクションハンドラに PFM - Agent または PFM - RM ホストのアクションハンドラを指定している場合
アラームを編集して、アクションを実行するアクションハンドラとして「PH1 <変更後の PFM - Agent または PFM - RM ホスト名>」を設定してください。

アラーム編集方法の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、アラームによる稼働監視について説明している章を参照してください。

11. JP1 システムイベントの設定を更新する。

次のどちらかの条件を満たす場合、PFM - Web Console のブラウザから JP1 システムイベントの設定を更新する必要があります。

- 変更前のホスト名を、JP1 システムイベントの JP1/Base 接続先のイベントサーバ名に指定している。
- 変更前のホスト名を、JP1 システムイベントの監視コンソールのホスト名に指定している。

12. 設定変更後の確認をする。

設定変更後は、次の確認をしてください。

- パフォーマンスデータの収集
パフォーマンスデータの収集間隔 (Collection Interval) に指定している時間の 2 倍以上の期間は、稼働させて問題なく収集できるか確認します。
- `jpctool db dump` コマンドの実行
収集したパフォーマンスデータが問題なく出力できるか確認します。
- レポート定義およびアラーム定義の確認
Web ブラウザで作成したレポート定義およびアラームの定義が問題ないか確認します。
- アクション実行の確認
作成したアラームのアクション実行が問題なく実行できるか確認します。

(3) 注意事項

監視ホスト名設定機能を使用する場合の注意事項を次に示します。

エイリアス名を使用する場合、エイリアス名からホストの IP アドレスが解決できる必要があります。Performance Management システム以外の IP アドレス解決に影響を

与えたくない場合は、`jpchosts` ファイルで IP アドレスの解決を定義できます。
`jpchosts` ファイルの編集方法については、「6.3.1 ネットワーク構成の変更」を参照してください。ほかのシステムと連携させる場合は、`hosts` ファイルや DNS の定義による IP アドレス解決ができるように設定する必要があります。

監視ホスト名設定機能を使用した場合、PFM - Agent または PFM - RM の種類によっては、共通ログに出力されるホスト名と、実際に稼働しているホスト名が異なる場合があります。

インストールした直後に監視ホスト名設定機能を使用した場合でも「(1) PFM - Manager ホストの監視ホスト名を変更する」および「(2) PFM - Agent または PFM - RM ホストの監視ホスト名を変更する」に記載されている設定を実施する必要があります。

(4) ホスト名変更の際に、必要に応じて行う Agent 固有の手順

ここでは、次の操作の際に必要な PFM - Agent 固有の手順について、製品ごとに説明します。

- PFM - Manager ホストの監視ホスト名を変更する
- PFM - Agent または PFM - RM ホストの監視ホスト名を変更する

具体的に、どのような場合にこの手順が必要になるかについては、「(1) PFM - Manager ホストの監視ホスト名を変更する」または「(2) PFM - Agent または PFM - RM ホストの監視ホスト名を変更する」を参照してください。

(a) PFM - Agent for Cosminexus の場合

作成済みのすべてのインスタンス環境で定義ファイルを編集します。

- 定義ファイル
`/opt/jp1pc/agtc/agent/ インスタンス名 /jpcagt.ini`
- 編集内容
 [Agent] セクションの `COSMI_HOST` エントリの値に新しいホスト名を設定します。

(b) PFM - Agent for Domino の場合

注意

次の手順は、PFM - Agent for Domino のヘルスチェック機能を使用している場合だけ実行してください。

作成済みのすべてのインスタンス環境で定義ファイルを編集します。

- 定義ファイル
`/opt/jp1pc/agtl/agent/ インスタンス名 /jpcagt.ini`
- 編集内容
 [Health Check Options] セクションの次のエントリの値に、新しいホスト名を設定します。

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

- [[HTTP Port Check]] サブセクションの Host エントリ
- [[SMTP Port Check]] サブセクションの Host エントリ
- [[POP3 Port Check]] サブセクションの Host エントリ
- [[LDAP Port Check]] サブセクションの Host エントリ
- [[NNTP Port Check]] サブセクションの Host エントリ

(c) PFM - Agent for Enterprise Applications の場合

作成済みのすべてのインスタンス環境に対して、`jpccconf inst setup` コマンドを実行します。例えば、PFM - Agent for Enterprise Applications に「o246bci_SD5_00」という名称のインスタンス環境が存在する場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpccconf inst setup -key agtm -inst o246bci_SD5_00
```

ここでは、対話形式の実行例を示していますが、`jpccconf inst setup` コマンドは非対話形式でも実行できます。

`jpccconf inst setup` コマンドの実行時に「ASHOST」に新しいホスト名を指定し、その他の項目には値を指定する必要はありません。値を指定しない項目は、既存の設定を引き継ぎます。

(d) PFM - Agent for Microsoft SQL Server の場合

作成済みのすべてのインスタンス環境に対して、`jpccconf inst setup` コマンドを実行します。例えば、PFM - Agent for Microsoft SQL Server に「default」という名称のインスタンス環境が存在する場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpccconf inst setup -key agtq -inst default
```

ここでは、対話形式の実行例を示していますが、`jpccconf inst setup` コマンドは非対話形式でも実行できます。

`jpccconf inst setup` コマンドの実行時に「SQL_HOST」に新しいホスト名を指定し、その他の項目には値を指定する必要はありません。値を指定しない項目は、既存の設定を引き継ぎます。

6.3.4 運用開始後のマシンの物理ホスト名の変更

ここでは、Performance Management システムを構築したあとで PFM - Manager ホスト、PFM - Agent ホスト、または PFM - RM ホストのマシンの物理ホスト名を変更する場合に必要な、Performance Management システムでの作業手順を説明します。

初めに、現在 Performance Management システムが使用している監視ホスト名、および監視ホスト名の取得方法を確認します。Performance Management システムが使用している監視ホスト名、および監視ホスト名の取得方法を確認するには、次のコマンドを実行します。`hostmode` は監視ホスト名の取得方法を示し、`hostname` は監視ホスト名を

示します。

```
jpccconf host hostmode -display
```

表示例

```
hostmode : uname
hostname : hostA
```

監視ホスト名の取得方法と監視ホスト名の関係について次の表に示します。

表 6-15 監視ホスト名の取得方法と監視ホスト名の関係

監視ホスト名の取得方法	監視ホスト名
uname	物理ホスト名 (uname -n コマンドで表示される値)
hostname	物理ホスト名 (hostname コマンドで表示される値)
alias	エイリアス名

監視ホスト名の取得方法が alias に設定されている場合、マシンの物理ホスト名 (uname -n または hostname コマンドで表示される値) を変更しても Performance Management システムの監視ホスト名はエイリアス名であるため、ここで説明する変更手順を実施する必要はありません。

次のどちらかの条件を満たす場合は、「(1) PFM - Manager ホスト名を変更する」または「(2) PFM - Agent または PFM - RM ホスト名を変更する」を実施する必要があります。

- 監視ホスト名の取得方法が uname に設定されていて、かつマシンの物理ホスト名 (uname -n コマンドで表示される値) を変更する。
- 監視ホスト名の取得方法が hostname に設定されていて、かつマシンの物理ホスト名 (hostname コマンドで表示される値) を変更する。

なお、jpccconf host hostname コマンドを実行した場合、定義情報や性能情報など変更前の情報はすべて引き継がれます。jpccconf host hostname コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

注意

jpccconf host コマンドの実行中に他コマンドを実行しないでください。ほかのコマンドを実行した場合、jpccconf host コマンドまたは他コマンドの実行に失敗することがあります。

(1) PFM - Manager ホスト名を変更する

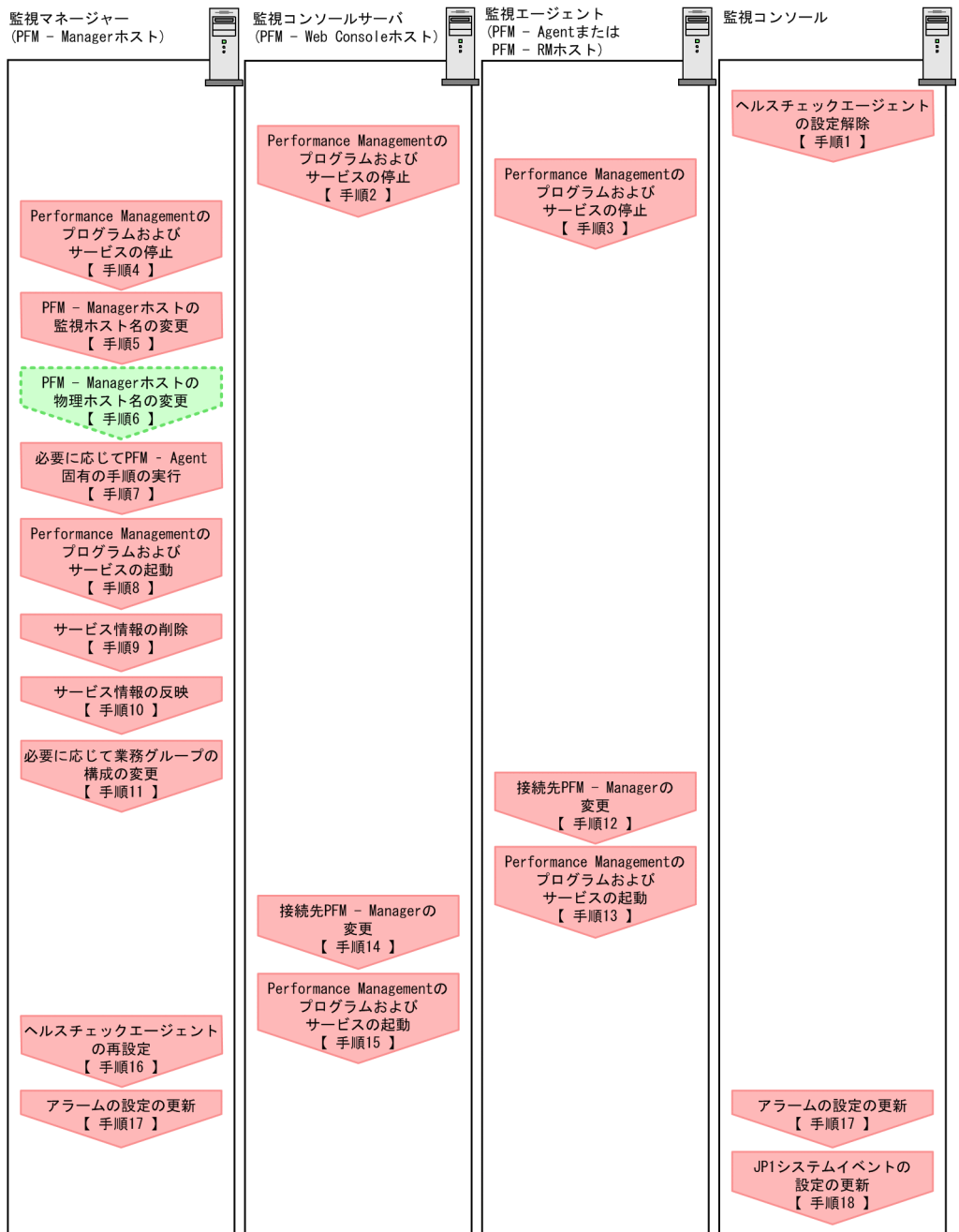
PFM - Manager ホスト名を変更する場合、次のホストでの作業が必要です。

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

- PFM - Manager ホスト
- PFM - Web Console ホスト
- PFM - Agent または PFM - RM ホスト
- 監視コンソール

作業の流れを次の図に示します。

図 6-7 PFM - Manager ホスト名を変更する流れ



(凡例)

: Performance Managementの作業

: ホスト名変更作業

【 】 : 参照先

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

図中の手順番号に沿って作業手順を次に示します。

1. ヘルスチェックエージェントの設定を解除する。

ヘルスチェック機能を使用している場合、ヘルスチェックエージェントのエージェント定義の削除 (エージェント階層の管理フォルダからの削除、アラームテーブルの関連づけの削除) を、PFM - Web Console のブラウザから行います。エージェントの定義を変更する手順の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、エージェントの監視について説明している章、またはアラームによる稼働監視について説明している章を参照してください。

2. PFM - Web Console ホストでサービスを停止する。

ホスト名を変更する PFM - Manager に接続する PFM - Web Console ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止します。サービスの停止には `jpcwstop` コマンドを使用してください。

3. PFM - Agent または PFM - RM ホストでサービスを停止する。

ホスト名を変更する PFM - Manager に接続する PFM - Agent または PFM - RM ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止します。サービスの停止には `jpcspm stop` コマンドを使用してください。

4. PFM - Manager ホストでサービスを停止する。

ホスト名を変更する PFM - Manager ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止します。サービスの停止には `jpcspm stop` コマンドを使用します。

5. PFM - Manager ホストの監視ホスト名を変更する。

`jpcconf host hostname` コマンドを実行して監視ホスト名を変更します。

物理ホスト名を `hostB` に変更する場合のコマンドの実行例を次に示します。

```
jpcconf host hostname -newhost hostB -d d:¥backup -dbconvert  
convert
```

`jpcconf host hostname` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

参考

jpccconf host hostname コマンドの -d オプションに指定するディレクトリには、目安として、指定したホストに存在する PFM - Agent および PFM - RM の Store データベース容量およびインポートディレクトリにあるデータベース容量の合計と同量の空きディスク容量が必要です。ただし、Store データベースの格納先ディレクトリおよびインポートディレクトリを変更している場合、変更後のディレクトリのデータベース容量を基に、必要なディスク容量を算出してください。

例えば、指定したホストに、ヘルスチェックエージェント、PFM - Agent for Platform、および PFM - Agent for Oracle が存在する場合、それぞれの Store データベースの容量およびインポートディレクトリにあるデータベース容量を合計した値の空きディスク容量が必要となります。なお、PFM - Manager の Master Store サービスの Store データベースの容量は合計に含める必要はありません。

6. PFM - Manager ホストの物理ホスト名を変更する。

PFM - Manager ホストの物理ホスト名を変更します。必要に応じて、jpchosts ファイル、hosts ファイル、および DNS の設定を変更します。マシンの再起動が必要な場合は、再起動後に Performance Management のプログラムおよびサービスが自動起動しないように、設定を変更しておいてください。PFM - Manager ホスト上での作業が完了したあと、Performance Management のプログラムおよびサービスが自動起動するように、設定を元に戻してください。

7. 必要に応じて、PFM - Agent 固有の手順を実行する。

PFM - Manager ホストに PFM - Agent がインストールされている構成では、PFM - Agent 固有の手順が必要な場合があります。PFM - Agent 固有の手順の要否について、次の表に示します。

表 6-16 PFM - Agent 固有の手順の要否

構成		手順の要否と参照先
PFM - Manager ホストにインストールされているのが、PFM - Agent 09-00 以降の場合		PFM - Agent 固有の手順の要否は、PFM - Agent ごとに異なります。PFM - Agent 固有の手順については、各 PFM - Agent マニュアルの、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。
PFM - Manager ホストにインストールされているのが、PFM - Agent 09-00 未満の場合	次の PFM - Agent がインストールされている場合。 <ul style="list-style-type: none"> PFM - Agent for Cosminexus PFM - Agent for Domino PFM - Agent for Enterprise Applications PFM - Agent for Microsoft SQL Server 	PFM - Agent 固有の手順が必要です。固有の手順については「(5) ホスト名変更の際に、必要に応じて行う Agent 固有の手順」を参照してください。

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

構成		手順の要否と参照先
	上記以外の場合	PFM - Agent 固有の手順は不要です。

PFM - Agent 固有の手順が必要な場合は、表の参照先に示された手順を済ませてから次の手順に進んでください。

8. PFM - Manager ホストでサービスを起動する。

PFM - Manager ホスト上の Performance Management のプログラムおよびサービスを起動します。サービスの起動には `jpcspm start` コマンドを使用します。

9. PFM - Manager ホストでサービス情報を削除する。

PFM - Manager ホストのホスト名を変更しても、変更前のホスト名が付加された Performance Management プログラムのサービス情報は変更されません。PFM - Manager ホストのホスト名を変更した場合は、変更前の PFM - Manager のサービス情報を削除する必要があります。例えば、変更前の PFM - Manager ホスト名が `hostA` の場合、PFM - Manager ホストで次のようにコマンドを実行して、ホスト `hostA` 上にある PFM - Manager サービスの情報をすべて削除します。

```
jpcctool service delete -id "P*" -host hostA
jpcctool service delete -id "O*" -host hostA
```

`jpcctool service delete` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

なお、コマンド実行時に `KAVE05233-W` メッセージが出力され、サービス情報の削除に失敗する場合、次のように指定してコマンドを再実行してください。

```
jpcctool service delete -id "P*" -host hostA -force
jpcctool service delete -id "O*" -host hostA -force
```

10. PFM - Manager のサービス情報を反映する。

PFM - Web Console にサービス情報の削除を反映するため、PFM - Manager と PFM - Web Console のサービス情報を同期します。サービス情報を同期するには `jpcctool service sync` コマンドを使用してください。

11. 必要に応じて、業務グループの構成を変更する。

ホスト名を変更した PFM - Manager ホストが、業務グループに割り当てられている場合は、業務グループの構成を変更する必要があります。手順の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、ユーザーアカウントと業務グループの管理について説明している章を参照してください。

12. PFM - Agent または PFM - RM ホストで接続先 PFM - Manager の設定を変更する。

ホスト名を変更した PFM - Manager に接続する PFM - Agent または PFM - RM ホス

トで、接続先 PFM - Manager の設定を変更します。接続先 PFM - Manager の設定の変更は、`jpccconf mgrhost define` コマンドを使用します。例えば、接続先 PFM - Manager のホスト名が `hostB` に変更された場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpccconf mgrhost define -host hostB
```

ここでは、対話形式の実行例を示していますが、`jpccconf mgrhost define` コマンドは非対話形式でも実行できます。`jpccconf mgrhost define` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

13. PFM - Agent または PFM - RM ホストでサービスを起動する。

ホスト名を変更した PFM - Manager に接続する PFM - Agent または PFM - RM ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスを起動します。サービスの起動には `jpccspm start` コマンドを使用してください。

14. PFM - Web Console ホストで、接続先 PFM - Manager の設定を変更する。

ホスト名を変更した PFM - Manager に接続する PFM - Web Console ホストで、接続先 PFM - Manager の設定を変更します。接続先 PFM - Manager の設定を変更するには、初期設定ファイル (`config.xml`) ファイルを変更します。詳細については、「6.4.6 (1) (b) 接続先 PFM - Manager の設定」を参照してください。

15. PFM - Web Console ホストでサービスを起動する。

ホスト名を変更した PFM - Manager に接続する PFM - Web Console ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスを起動します。サービスの起動には `jpccwstart` コマンドを使用してください。

16. ヘルスチェックエージェントの定義を再設定する。

ヘルスチェック機能を利用している場合、ホスト名変更後のヘルスチェックエージェントの定義 (手順 1 で解除した定義) を再設定します。

17. アラームの設定を更新する。

次の場合、PFM - Manager ホストの `jpcctool alarm` コマンドを使用するか、または監視コンソールから、アラームの設定を更新する必要があります。

- アクションの実行先アクションハンドラに PFM - Manager ホストのアクションハンドラを指定している場合
アラームを編集して、アクションを実行するアクションハンドラとして「PH1 <変更後の PFM - Manager ホスト名>」を設定してください。
- アクションで JP1 イベントを発行している場合
アクションの JP1 イベントの設定を再度行ってください。

アラーム編集方法の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、アラームによる稼働監視について説明している章を参照してください。

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

18. JP1 システムイベントの設定を更新する。

次のどちらかの条件を満たす場合、PFM - Web Console のブラウザから JP1 システムイベントの設定を更新する必要があります。

- 変更前のホスト名を、JP1 システムイベントの JP1/Base 接続先のイベントサーバ名に指定している。
- 変更前のホスト名を、JP1 システムイベントの監視コンソールのホスト名に指定している。

19. 設定変更後の確認をする。

設定変更後は、次の確認をしてください。

- パフォーマンスデータの収集
パフォーマンスデータの収集間隔 (Collection Interval) に指定している時間の2倍以上の期間は、稼働させて問題なく収集できるか確認します。
- jpctool db dump コマンドの実行
収集したパフォーマンスデータが問題なく出力できるか確認します。
- レポート定義およびアラーム定義の確認
Web ブラウザで作成したレポート定義およびアラームの定義が問題ないか確認します。
- アクション実行の確認
作成したアラームのアクション実行が問題なく実行できるか確認します。

20. ネットワーク管理製品 (NNM) と連携した稼働監視を実施している場合は、NNM に再度ログインする。

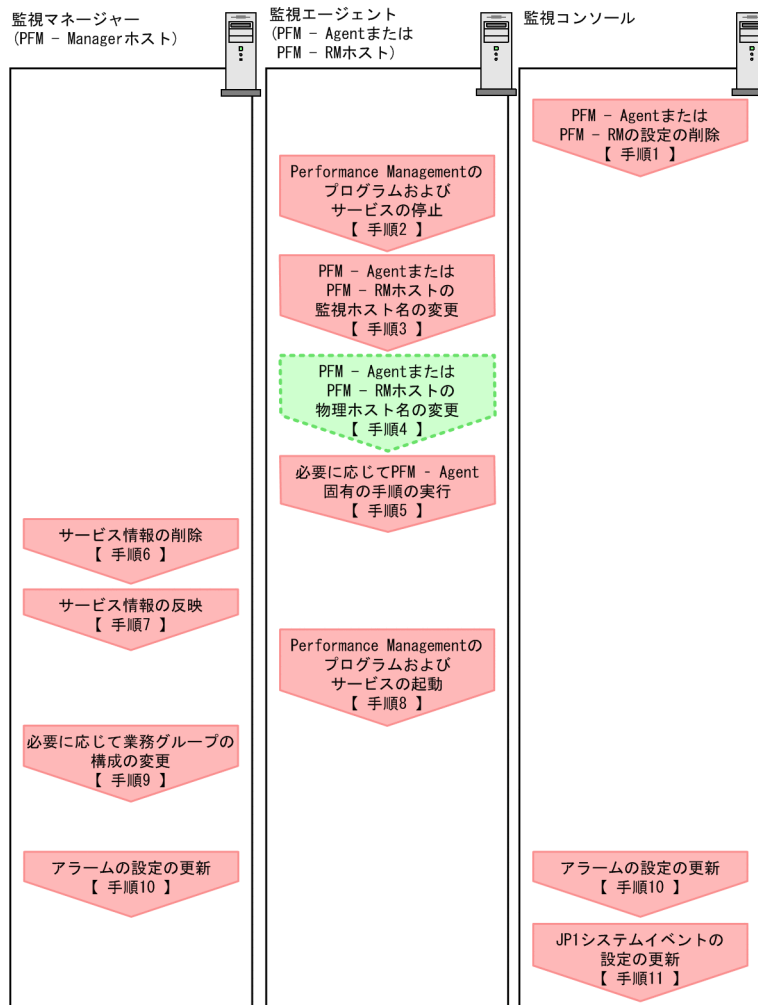
(2) PFM - Agent または PFM - RM ホスト名を変更する

PFM - Agent または PFM - RM ホスト名を変更する場合、次のホストでの作業が必要です。

- PFM - Manager ホスト
- PFM - Agent または PFM - RM ホスト
- 監視コンソール

作業の流れを次の図に示します。

図 6-8 PFM - Agent または PFM - RM ホストの監視ホスト名を変更する流れ



(凡例)

: Performance Managementの作業

: ホスト名変更作業

【 】 : 参照先

図中の手順番号に沿って作業手順を次に示します。

1. PFM - Agent または PFM - RM の設定を削除する。

ホスト名を変更する PFM - Agent または PFM - RM ホストのエージェント定義の削除 (エージェント階層の管理フォルダからの削除, アラームテーブルの関連づけの削除) を, PFM - Web Console のブラウザから行います。

エージェントの定義を変更する手順の詳細については, マニュアル「JP1/ Performance Management 運用ガイド」の, エージェントの監視について説明して

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

いる章、またはアラームによる稼働監視について説明している章を参照してください。

2. PFM - Agent または PFM - RM ホストでサービスを停止する。

ホスト名を変更する PFM - Agent または PFM - RM ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止します。サービスの停止には `jpcspms stop` コマンドを使用してください。

3. PFM - Agent または PFM - RM ホストで監視ホスト名を変更する。

`jpcconf host hostname` コマンドを実行して監視ホスト名を変更します。

物理ホスト名を `hostB` に変更する場合のコマンドの実行例を次に示します。

```
jpcconf host hostname -newhost hostB -d d:¥backup -dbconvert
convert
```

`jpcconf host hostname` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/ Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

参考

`jpcconf host hostname` コマンドの `-d` オプションに指定するディレクトリには、目安として、指定したホストに存在する PFM - Agent および PFM - RM の Store データベース容量およびインポートディレクトリにあるデータベース容量の合計と同量の空きディスク容量が必要です。ただし、Store データベースの格納先ディレクトリおよびインポートディレクトリを変更している場合、変更後のディレクトリのデータベース容量を基に、必要なディスク容量を算出してください。

例えば、指定したホストに、PFM - Agent for Platform および PFM - Agent for Oracle が存在する場合、それぞれの Store データベースの容量およびインポートディレクトリにあるデータベース容量を合計した値の空きディスク容量が必要となります。なお、PFM - Manager の Master Store サービスの Store データベースの容量は合計に含める必要はありません。

-
4. PFM - Agent または PFM - RM ホストの物理ホスト名を変更する。

PFM - Agent または PFM - RM ホストの物理ホスト名を変更します。必要に応じて、`jpchosts` ファイル、`hosts` ファイル、および DNS の設定を変更します。マシンの再起動が必要な場合は、再起動後に Performance Management のプログラムおよびサービスが自動起動しないように、設定を変更しておいてください。PFM - Manager ホスト上での作業が完了したあと、Performance Management のプログラムおよびサービスが自動起動するように、設定を元に戻してください。

5. 必要に応じて、PFM - Agent 固有の手順を実行する。

PFM - Agent 固有の手順の要否について、次の表に示します。

表 6-17 PFM - Agent 固有の手順の要否

構成		手順の要否と参照先
監視ホスト名を変更するのが、PFM - Agent 09-00 以降の場合。		PFM - Agent 固有の手順の要否は、PFM - Agent ごとに異なります。PFM - Agent 固有の手順については、各 PFM - Agent マニュアルの、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。
監視ホスト名を変更するのが、PFM - Agent 09-00 未満の場合。	次の PFM - Agent の場合。 <ul style="list-style-type: none"> PFM - Agent for Cosminexus PFM - Agent for Domino PFM - Agent for Enterprise Applications PFM - Agent for Microsoft SQL Server 	PFM - Agent 固有の手順が必要です。固有の手順については「(5) ホスト名変更の際に、必要に応じて行う Agent 固有の手順」を参照してください。
	上記以外の場合。	PFM - Agent 固有の手順は不要です。

PFM - Agent 固有の手順が必要な場合は、表の参照先に示された手順を済ませてから次の手順に進んでください。

6. PFM - Manager ホストでサービス情報を削除する。

PFM - Agent または PFM - RM ホストのホスト名を変更しても、変更前のホスト名が付加された Performance Management プログラムのサービス情報は変更されません。PFM - Manager ホストで変更前の PFM - Agent または PFM - RM のサービス情報を削除する必要があります。例えば、変更前の PFM - Agent または PFM - RM ホストのホスト名が hostB の場合、PFM - Agent for Oracle の Agent Store サービスの情報を削除するときは、PFM - Manager ホストで次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpctool service delete -id "OS*" -host hostB
```

7. PFM - Manager のサービス情報を反映する。

PFM - Web Console にサービス情報の削除を反映するため、PFM - Manager と PFM - Web Console のサービス情報を同期します。サービス情報を同期するには `jpctool service sync` コマンドを使用してください。

同期されたサービス情報は、PFM - Web Console の画面でエージェント階層を再表示すると、画面に反映されます。

8. PFM - Agent または PFM - RM ホストでサービスを起動する。

ホスト名を変更した PFM - Agent または PFM - RM ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスを起動します。サービスの起動には `jpccspm start` コマンドを使用してください。

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

9. 必要に応じて、業務グループの構成を変更する。

ホスト名を変更した PFM - Agent または PFM - RM ホストが、業務グループに割り当てられている場合は、業務グループの構成を変更する必要があります。手順の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、ユーザーアカウントと業務グループの管理について説明している章を参照してください。

10. アラームの設定を更新する。

次の場合、PFM - Manager ホストの `jpctool alarm` コマンドを使用するか、または監視コンソールから、アラームの設定を更新する必要があります。

- アクションの実行先アクションハンドラに PFM - Agent または PFM - RM ホストのアクションハンドラを指定している場合
アラームを編集して、アクションを実行するアクションハンドラとして「PH1 <変更後の PFM - Agent または PFM - RM ホスト名>」を設定してください。

アラーム編集方法の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、アラームによる稼働監視について説明している章を参照してください。

11. JP1 システムイベントの設定を更新する。

次のどちらかの条件を満たす場合、PFM - Web Console のブラウザから JP1 システムイベントの設定を更新する必要があります。

- 変更前のホスト名を、JP1 システムイベントの JP1/Base 接続先のイベントサーバ名に指定している。
- 変更前のホスト名を、JP1 システムイベントの監視コンソールのホスト名に指定している。

12. 設定変更後の確認をする。

設定変更後は、次の確認をしてください。

- パフォーマンスデータの収集
パフォーマンスデータの収集間隔 (Collection Interval) に指定している時間の 2 倍以上の期間は、稼働させて問題なく収集できるか確認します。
- `jpctool db dump` コマンドの実行
収集したパフォーマンスデータが問題なく出力できるか確認します。
- レポート定義およびアラーム定義の確認
Web ブラウザで作成したレポート定義およびアラームの定義が問題ないか確認します。
- アクション実行の確認
作成したアラームのアクション実行が問題なく実行できるか確認します。

(3) PFM - RM の監視対象ホスト名を変更する

PFM - RM の監視対象ホスト名を変更する手順を次に示します。

(a) 監視対象の監視対象名を変更しない場合

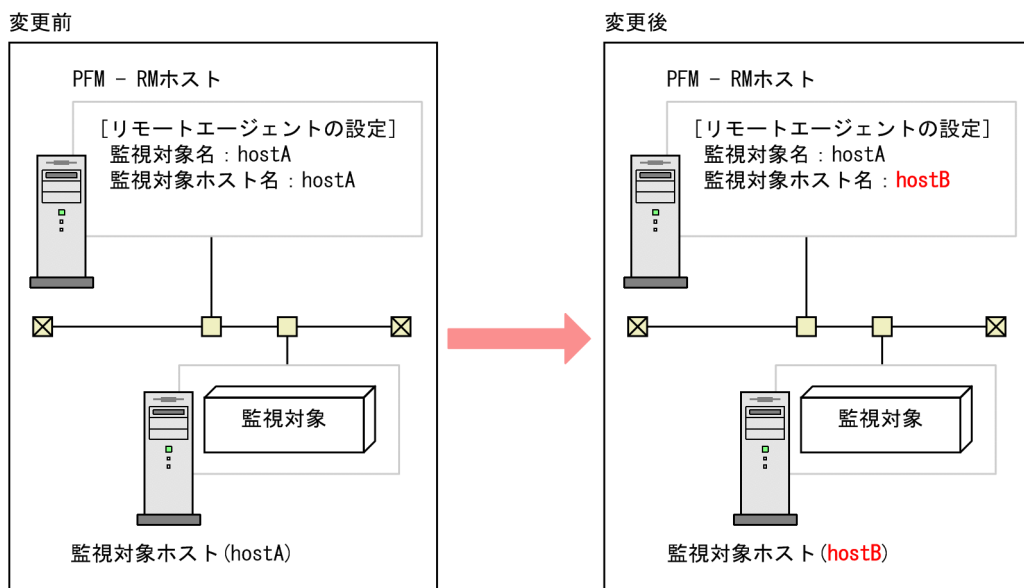
監視対象に対応したリモートエージェントの監視対象ホスト名の設定を、新しいホスト

名に変更する必要があります。リモートエージェント (インスタンス名: inst1) の監視対象ホスト名を hostA から hostB に変更する場合の、コマンドの実行手順を次に示します。

1. `jpccconf target setup -key RMPlatform -inst inst1 -target hostA` コマンドを実行する。
ここでは、対話形式の実行例を示していますが、`jpccconf target setup` コマンドは非対話形式でも実行できます。`jpccconf target setup` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。
2. Target Host: hostB と入力する。
コマンドの指示に従って監視対象ホストの設定項目を入力します。設定項目を入力したら、リターンキーを押して設定してください。

PFM・RMの監視対象ホスト名の変更例を次の図に示します。

図 6-9 PFM・RMの監視対象ホスト名の変更例 (監視対象の監視対象名を変更しない場合)



(b) 監視対象の監視対象名を変更する場合

監視対象に対応したリモートエージェントを再作成する必要があります。リモートエージェントを再作成する手順を次に示します。

1. `jpccconf target unsetup` コマンドを実行して、監視対象に対応したリモートエージェントを削除する。
2. `jpccconf target setup` コマンドを実行して、新しい監視対象ホスト名でリモート

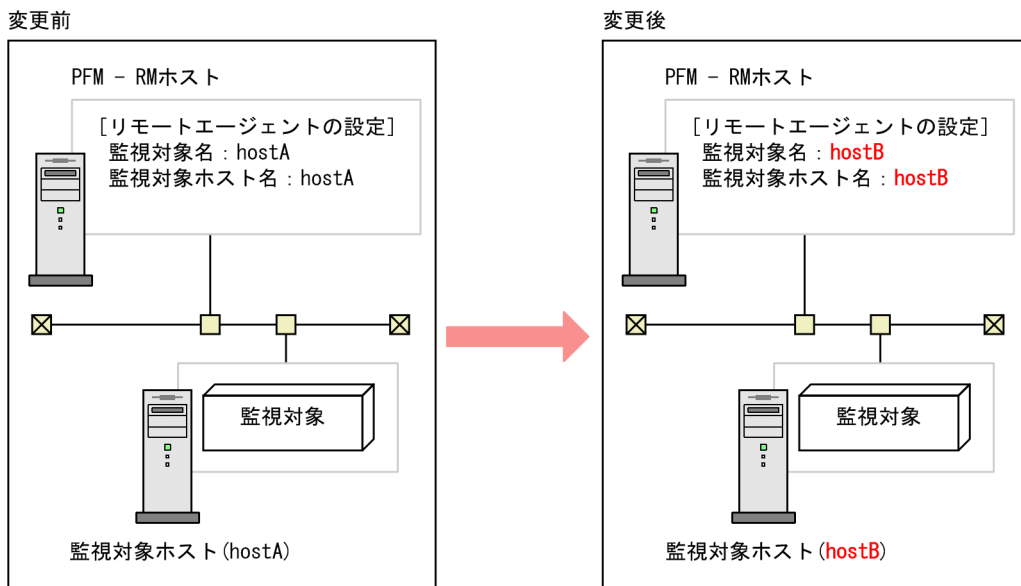
6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

エージェントを追加する。

なお、監視対象のパフォーマンスデータは引き継げません。

PFM - RM の監視対象ホスト名の変更例を次の図に示します。

図 6-10 PFM - RM の監視対象ホスト名の変更例 (監視対象の監視対象名を変更する場合)



jpccconf target setup コマンドおよび jpccconf target unsetup コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

(4) PFM - Web Console のホスト名を変更する

PFM - Web Console のホスト名を変更する手順を次に示します。

1. PFM - Web Console ホストでサービスを停止する。

ホスト名を変更する PFM - Manager に接続する PFM - Web Console ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止します。サービスの停止には jpcwstop コマンドを使用してください。

2. 通信で使用するホスト名の設定でホスト名を変更している場合、変更後のホスト名にホスト名を変更する。

PFM - Web Console ホストで使用している IP アドレスが、PFM - Manager ホストからは通信できない IP アドレスである場合で、初期設定ファイル (config.xml) に PFM - Web Console ホストのホスト名を指定しているときに必要な手順です。

変更方法については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」

の付録の、PFM・Manager と PFM・Web Console の通信で使用するホスト名の設定について説明している個所を参照してください。

3. 統合管理製品 (JP1/IM) と連携した稼働監視をしている場合、変更後のホスト名にホスト名を変更する。

設定しているイベントによって、ホスト名の該当個所を変更後のホスト名に変更します。

- JP1 ユーザーイベントを設定している場合
モニター画面呼び出し定義ファイル、および統合機能メニュー定義ファイルのホスト名を変更後のホスト名に変更します。
- JP1 システムイベントを設定している場合
[JP1 Event Send Host] - [Monitoring Console Host] プロパティの設定を変更後のホスト名に変更します。

統合管理製品 (JP1/IM) の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、統合管理製品 (JP1/IM) と連携した稼働監視について説明している章を参照してください。

4. ネットワーク管理製品 (NNM) と連携した稼働監視をしている場合、変更後のホスト名にホスト名を変更する。

jpcnnm.ini ファイルの PFM・Web Console のホスト名を変更後のホスト名に変更します。

ネットワーク管理製品 (NNM) の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、ネットワーク管理製品 (NNM) と連携した稼働監視について説明している章を参照してください。

5. PFM・Web Console ホストの物理ホスト名を変更する。

PFM・Web Console ホストの物理ホスト名を変更します。マシンの再起動が必要な場合は、再起動後に Performance Management のプログラムおよびサービスが自動起動しないように、設定を変更しておいてください。PFM・Web Console ホスト上での作業が完了したあと、Performance Management のプログラムおよびサービスが自動起動するように、設定を元に戻してください。

6. PFM・Web Console ホストで、サービスを起動する。

ホスト名を変更した PFM・Manager に接続する PFM・Web Console ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスを起動します。サービスの起動には jpcwstart コマンドを使用してください。

7. 統合管理製品 (JP1/IM) と連携している場合は、統合管理製品 (JP1/IM) を再起動する。

(5) ホスト名変更の際に、必要に応じて行う Agent 固有の手順

ここでは、次の操作の際に必要な PFM・Agent 固有の手順について、製品ごとに説明します。

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

- PFM - Manager ホスト名を変更する
- PFM - Agent または PFM - RM ホスト名を変更する

具体的に、どのような場合にこの手順が必要になるかについては、「(1) PFM - Manager ホスト名を変更する」または「(2) PFM - Agent または PFM - RM ホスト名を変更する」を参照してください。

(a) PFM - Agent for Cosminexus の場合

作成済みのすべてのインスタンス環境で定義ファイルを編集します。

- 定義ファイル
/opt/jp1pc/agtc/agent/ インスタンス名 /jpcagt.ini
- 編集内容
[Agent] セクションの COSMI_HOST エントリの値に新しいホスト名を設定します。

(b) PFM - Agent for Domino の場合

注意

次の手順は、PFM - Agent for Domino のヘルスチェック機能を使用している場合だけ実行してください。

作成済みのすべてのインスタンス環境で定義ファイルを編集します。

- 定義ファイル
/opt/jp1pc/agtl/agent/ インスタンス名 /jpcagt.ini
- 編集内容
[Health Check Options] セクションの次のエントリの値に、新しいホスト名を設定します。
 - [[HTTP Port Check]] サブセクションの Host エントリ
 - [[SMTP Port Check]] サブセクションの Host エントリ
 - [[POP3 Port Check]] サブセクションの Host エントリ
 - [[LDAP Port Check]] サブセクションの Host エントリ
 - [[NNTP Port Check]] サブセクションの Host エントリ

(c) PFM - Agent for Enterprise Applications の場合

作成済みのすべてのインスタンス環境に対して、`jpcconf inst setup` コマンドを実行します。例えば、PFM - Agent for Enterprise Applications に「o246bci_SD5_00」という名称のインスタンス環境が存在する場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpcconf inst setup -key agtm -inst o246bci_SD5_00
```

ここでは、対話形式の実行例を示していますが、`jpcconf inst setup` コマンドは非対話形式でも実行できます。

`jpcconf inst setup` コマンドの実行時に「ASHOST」に新しいホスト名を指定し、

その他の項目には値を指定する必要はありません。値を指定しない項目は、既存の設定を引き継ぎます。

(d) PFM - Agent for Microsoft SQL Server の場合

作成済みのすべてのインスタンス環境に対して、`jpcconf inst setup` コマンドを実行します。例えば、PFM - Agent for Microsoft SQL Server に「default」という名称のインスタンス環境が存在する場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpcconf inst setup -key agtq -inst default
```

ここでは、対話形式の実行例を示していますが、`jpcconf inst setup` コマンドは非対話形式でも実行できます。

`jpcconf inst setup` コマンドの実行時に「SQL_HOST」に新しいホスト名を指定し、その他の項目には値を指定する必要はありません。値を指定しない項目は、既存の設定を引き継ぎます。

6.4 Performance Management の運用方式の変更

稼働監視システムのシステム管理者の変更や、収集した稼働監視データの運用手順の変更などで、システムの Performance Management の運用方式を変更する場合があります。ここでは、Performance Management の運用方式を変更する手順を説明します。

6.4.1 共通メッセージログのファイルサイズ設定

共通メッセージログは、PFM - Manager、PFM - Base、PFM - Agent、および PFM - RM で出力されます。デフォルトでは、共通メッセージログのログファイルとして、2,048 キロバイトのファイルが 2 ファイル使用されます。共通メッセージログのファイルサイズを変更したい場合に必要な設定です。

ファイルサイズを変更したい場合は、jpccomm.ini ファイルの内容を直接編集します。jpccomm.ini ファイルは、次の場所に格納されています。

物理ホストの場合

Windows の場合

インストール先フォルダ

UNIX の場合

/opt/jp1pc/

論理ホストの場合

Windows の場合

環境ディレクトリ %jp1pc%

UNIX の場合

環境ディレクトリ /jp1pc/

jpccomm.ini ファイルで編集するラベル名、設定できる値の範囲などを次の表に示します。

表 6-18 共通メッセージログのファイルサイズ設定項目 (jpccomm.ini の [Common Section] セクション)

設定項目	ラベル名	設定できる値	デフォルト値
共通メッセージログを格納する ファイルのサイズ (キロバイト)	Common Msglog Size	4 ~ 32,768	2,048

手順を次に示します。

1. Performance Management のプログラムおよびサービスを停止する。
Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、すべて停止してください。
2. テキストエディターなどで、jpccomm.ini ファイルを開く。
3. 共通メッセージログのファイルサイズを変更する。
次に示す網掛け部分を修正してください。

```

:
[Common Section]
Common Msglog Size=2048
:

```

注意

- 行頭および「=」の前後には空白文字を入力しないでください。
- jpccomm.ini ファイルには、共通メッセージログのファイルサイズ以外にも、定義情報が記述されています。[Common Section] セクションの Common Msglog Size 以外の値は変更しないようにしてください。必要な項目以外の値を変更すると、Performance Management が正常に動作しなくなることがあります。

4. jpccomm.ini ファイルを保存して閉じる。

注意

- 共通メッセージログファイルの設定は、同一ホスト上の Performance Management プログラムで共通にしてください。
- jpccomm.ini ファイルの設定内容をインストール時の状態に戻すには、jpccomm.ini ファイルの格納先ディレクトリにある jpccomm.ini.model ファイルを jpccomm.ini ファイルにコピーしてください。

6.4.2 イベントデータの格納先の変更

PFM - Agent または PFM - RM で発生したイベントデータは、PFM - Manager の Master Store サービスの Store データベースで管理されます。

Store データベースで管理されるイベントデータの、次の格納先ディレクトリを変更したい場合は、jpcsto.ini ファイルの内容を直接編集します。

- 格納先ディレクトリ
- バックアップ先ディレクトリ
- エクスポート先ディレクトリ

jpcsto.ini ファイルは、次の場所に格納されています。

物理ホストの場合

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

Windows の場合

インストール先フォルダ ¥mgr¥store¥jpcsto.ini

UNIX の場合

/opt/jplpc/mgr/store/jpcsto.ini

論理ホストの場合

Windows の場合

環境ディレクトリ ¥jplpc¥mgr¥store¥jpcsto.ini

UNIX の場合

環境ディレクトリ /jplpc/mgr/store/jpcsto.ini

(1) jpcsto.ini ファイルの設定項目

jpcsto.ini ファイルで編集するラベル名, 設定できる値の範囲などを次の表に示します。

表 6-19 イベントデータの格納先の設定項目 (jpcsto.ini の [Data Section] セクション)

設定項目	ラベル名	設定できる値 ¹	デフォルト値
イベントデータを作成するディレクトリ	Store Dir 2	1 ~ 127 バイトの絶対パス	物理ホストの場合 • Windows の場合 インストール先フォルダ ¥mgr¥store¥ • UNIX の場合 /opt/jplpc/mgr/store/ 論理ホストの場合 • Windows の場合 環境ディレクトリ ¥jplpc¥mgr¥store¥ • UNIX の場合 環境ディレクトリ /jplpc/mgr/store/

設定項目	ラベル名	設定できる値 ¹	デフォルト値
イベントデータのバックアップ先ディレクトリ	Backup Dir ²	1 ~ 127 バイトの絶対パス	物理ホストの場合 <ul style="list-style-type: none"> Windows の場合 インストール先フォルダ ¥mgr¥store¥backup¥ UNIX の場合 /opt/jplpc/mgr/store/backup/ 論理ホストの場合 <ul style="list-style-type: none"> Windows の場合 環境ディレクトリ ¥jplpc¥mgr¥store¥backup¥ UNIX の場合 環境ディレクトリ / jplpc/mgr/store/backup/
イベントデータを退避する場合の最大世代番号	Backup Save	1 ~ 9	5
イベントデータのエクスポート先ディレクトリ	Dump Dir ²	1 ~ 127 バイトの絶対パス	物理ホストの場合 <ul style="list-style-type: none"> Windows の場合 インストール先フォルダ ¥mgr¥store¥dump¥ UNIX の場合 /opt/jplpc/mgr/store/dump/ 論理ホストの場合 <ul style="list-style-type: none"> Windows の場合 環境ディレクトリ ¥jplpc¥mgr¥store¥dump¥ UNIX の場合 環境ディレクトリ / jplpc/mgr/store/dump/

注 1

- ディレクトリ名は、すべて絶対パスで指定してください。
- 指定できる文字は、次の文字を除く、半角英数字、半角記号および半角空白です。
; , * ? ' " < > |
- 指定値に誤りがある場合、Master Store サービスは起動できません。

注 2

Store Dir、Backup Dir、および Dump Dir には、それぞれ重複したディレクトリを指定できません。

(2) jpcsto.ini ファイルの編集手順

手順を次に示します。

1. PFM - Manager の Master Store サービスを停止する。
2. テキストエディターなどで、jpcsto.ini ファイルを開く。
3. イベントデータの格納先ディレクトリなどを変更する。
次に示す網掛け部分を、必要に応じて修正してください。

```

:
[Data Section]
```

```
Store Dir=.
```

```
Backup Dir=.%backup
```

```
Backup Save=5
```

```
Dump Dir=.%dump
```

```

:
```

注意

- 行頭および「=」の前後には空白文字を入力しないでください。
- 各ラベルの値の「.」は、Master Store サービスの Store データベースのデフォルト格納先ディレクトリを意味します。デフォルト格納先のディレクトリは次のとおりです。

物理ホストの場合

Windows の場合

インストール先フォルダ %mgr%\store%

UNIX の場合

/opt/jplpc/mgr/store/

論理ホストの場合

Windows の場合

環境ディレクトリ %jplpc%\mgr%\store%

UNIX の場合

環境ディレクトリ /jplpc/mgr/store/

格納先を変更する場合、その格納先ディレクトリからの相対パスか、または絶対パスで記述してください。

- Store データベースの格納先を変更する場合、指定するディレクトリを事前に作成してください。
- jpcsto.ini ファイルには、データベースの格納先ディレクトリ以外にも、定義情報が記述されています。[Data Section] セクション以外の値は変更しないようにしてください。[Data Section] セクション以外の値を変更すると、Performance Management が正常に動作しなくなることがあります。

4. `jpccsto.ini` ファイルを保存して閉じる。
5. Performance Management のプログラムおよびサービスを起動する。

6.4.3 通信回線の切断の設定

Performance Management は、接続先との通信終了後 70 秒間は回線を切断しません。接続時間によって課金されるような環境で使用する場合には注意してください。

通信終了後、すぐに回線を切断したい場合は、次のように `jpcccomm.ini` ファイルを編集してください。

1. Performance Management のプログラムおよびサービスを停止する。
Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、すべて停止してください。

2. テキストエディターなどで、`jpcccomm.ini` ファイルを開く。

3. 回線の接続モードを変更する。

`jpcccomm.ini` ファイル中のすべてのセクションで次のラベルの値を変更します。

```
NS Keepalive Mode=0
```

4. `jpcccomm.ini` ファイルを保存して閉じる。
5. Performance Management のプログラムおよびサービスを起動する。

注意

PFM・Web Console と PFM・Manager 間では、定期的に通信をしているため、回線は常に接続している状態となります。このためホスト間の通信に WAN 環境などの通信時間や通信量に応じて課金されるネットワークを使用することは推奨しません。

6.4.4 アラームテーブル複数バインド機能の設定

アラームテーブル複数バインド機能を利用するには、PFM・Manager および PFM・Web Console が 08-50 以降である必要があります。アラームテーブル複数バインド機能を有効にすると、08-50 より前のバージョンの PFM・Web Console からは接続できなくなります。

複数のアラームテーブルをバインド可能な監視エージェントの構成を次の表に示します。複数のアラームテーブルをバインドする監視エージェントは、次の表中で と記した構成である必要があります。ただし、表中で × と記した構成の監視エージェントがシステム内に存在する場合も、当該監視エージェントに複数のアラームテーブルをバインドしなければ、アラームテーブル複数バインド機能を利用できます。表で × と記した構成の監視エージェントに複数のアラームテーブルをバインドした場合、当該監視エージェントのアラームの評価結果が保証されません。

6. インストールとセットアップ（UNIX の場合）

PFM - Agent のバージョン	同一ホスト上の PFM - Manager または PFM - Base のバージョン		
	08-50 以降	08-50 未満	なし
08-00 以降		×	-
08-00 未満	×	×	×

（凡例）

- ：複数バインドできる
- ×
-

アラームテーブル複数バインド機能を有効または無効にするには、PFM - Manager ホストの `jpccomm.ini` ファイルの内容を直接編集します。`jpccomm.ini` ファイルは、次の場所に格納されています。

物理ホストの場合

Windows の場合

インストール先フォルダ

UNIX の場合

`/opt/jp1pc/`

論理ホストの場合

Windows の場合

環境ディレクトリ `%jp1pc%`

UNIX の場合

環境ディレクトリ `/jp1pc/`

（１）アラームテーブル複数バインド機能を有効にする場合

- Performance Management のプログラムおよびサービスを停止する。
Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、`jpccspm stop` コマンドですべて停止してください。クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから停止してください。
- テキストエディターなどで、`jpccomm.ini` ファイルを開く。
- アラームテーブル複数バインドの利用可否を設定する。
`jpccomm.ini` ファイル中の [Common Section] セクションで次のラベルの値を変更します。

`Multiple Alarm Table Bind=1`
- `jpccomm.ini` ファイルを保存して閉じる。

5. `jpcspm start` コマンドで Performance Management のプログラムおよびサービスを起動する。
クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから起動してください。
6. PFM - Web Console を再起動する。

(2) アラームテーブル複数バインド機能を無効にする場合

1. Performance Management のプログラムおよびサービスを停止する。
Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、`jpcspm stop` コマンドですべて停止してください。クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから停止してください。
2. テキストエディターなどで、`jpccomm.ini` ファイルを開く。
3. アラームテーブル複数バインドの利用可否を設定する。
`jpccomm.ini` ファイル中の [Common Section] セクションで次のラベルの値を変更します。

`Multiple Alarm Table Bind=0`
4. `jpccomm.ini` ファイルを保存して閉じる。
5. `jpcspm start` コマンドで Performance Management のプログラムおよびサービスを起動する。
クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから起動してください。
6. PFM - Web Console を再起動する。

注意

PFM - Agent または PFM - RM に複数のアラームテーブルがバインドされた状態で、アラームテーブル複数バインド機能を無効に設定した場合、次の Master Manager サービス起動時に、複数のアラームテーブルがバインドされている PFM - Agent または PFM - RM については、KAVE00317-W メッセージを出力し、該当 PFM - Agent または PFM - RM にバインドされているすべてのアラームテーブルがアンバインドされます。このため、機能を無効に設定変更したあとの Master Manager 起動に時間が掛かることがあります。なお、起動中の PFM - Agent または PFM - RM については、該当 PFM - Agent または PFM - RM が再起動されるまで複数のアラームテーブルがバインドされた状態が継続します。バインド状態の更新を反映するため、アラームテーブル複数バインド機能を無効に設定した場合、KAVE00317-W メッセージが出力された PFM - Agent または PFM - RM を再起動してください。

6.4.5 IP アドレスの設定変更

Performance Management の運用時に IP アドレスを変更する手順について説明します。

(1) PFM - Manager ホストの IP アドレスを変更する場合

1. PFM - Web Console のログアウト
IP アドレスを変更する PFM - Manager に接続する PFM - Web Console ホストをログアウトします。
2. PFM - Manager ホストの全 PFM サービスの停止
IP アドレスを変更する PFM - Manager ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止します。サービスの停止には `jpcspm stop` コマンドを使用してください。クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから停止してください。
3. PFM - Manager ホストの IP アドレスの変更
PFM - Manager ホストの IP アドレスを変更します。
4. ネットワークの設定
全 PFM - Agent , PFM - RM , PFM - Base , PFM - Web Console , PFM - Manager ホストから該当ホストに対して、TCP で通信接続できるようにします。
5. PFM - Manager ホストの PFM サービスの再起動
PFM - Manager ホスト上の Performance Management のプログラムおよびサービスを起動します。クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから起動してください。
6. PFM - Web Console でログイン
PFM - Web Console でログインします。

(2) PFM - Web Console ホストの IP アドレスを変更する場合

1. PFM - Web Console ホストの全 PFM サービスの停止
IP アドレスを変更する PFM - Web Console ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止します。サービスの停止には `jpcwstop` コマンドを使用してください。クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから停止してください。
2. PFM - Web Console ホストの IP アドレスの変更
PFM - Web Console ホストの IP アドレスを変更します。
3. ネットワークの設定
接続先 PFM - Manager ホストから該当ホストに対して、TCP で通信接続できるようにします。また、監視コンソールから該当ホストに対して、HTTP で通信接続できるようにします。
4. PFM - Web Console ホストの PFM サービスの再起動
PFM - Web Console ホスト上の Performance Management のプログラムおよびサービスを起動します。クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから起動してください。

5. PFM - Web Console でログイン

監視コンソールから新しい IP アドレス (またはそのホスト名) の URL で PFM - Web Console に接続します。

(3) PFM - Base ホストの IP アドレスを変更する場合

1. PFM - Base ホストの全 PFM サービスの停止

IP アドレスを変更する PFM - Base がインストールされているホストで Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止します。サービスの停止には `jpcspm stop` コマンドを使用してください。クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから停止してください。

2. PFM - Base ホストの IP アドレスの変更

PFM - Base がインストールされているホストの IP アドレスを変更します。

3. ネットワークの設定

全 PFM - Agent , PFM - RM , PFM - Base , PFM - Web Console , PFM - Manager ホストから該当ホストに対して、TCP で通信接続できるようにします。

4. PFM - Base ホストの PFM サービスを再起動する。

PFM - Base がインストールされているホスト上の Performance Management のプログラムおよびサービスを起動します。クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから起動してください。

(4) PFM - Agent または PFM - RM ホストの IP アドレスを変更する場合

1. PFM - Agent または PFM - RM ホストの全 PFM サービスの停止

IP アドレスを変更する PFM - Agent または PFM - RM ホストで Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止します。サービスの停止には `jpcspm stop` コマンドを使用してください。クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから停止してください。

2. PFM - Agent または PFM - RM ホストの IP アドレスの変更

PFM - Agent または PFM - RM がインストールされているホストの IP アドレスを変更します。

3. ネットワークの設定

全 PFM - Agent , PFM - RM , PFM - Base , PFM - Web Console , PFM - Manager ホストから該当ホストに対して、TCP で通信接続できるようにします。

4. PFM - Agent または PFM - RM ホストの PFM サービスの再起動

PFM - Agent または PFM - RM がインストールされているホスト上の Performance Management のプログラムおよびサービスを起動します。クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから起動してください。

6.4.6 PFM - Web Console の設定変更

PFM - Web Console の運用に必要な環境設定は、初期設定ファイル (config.xml) で行います。

初期設定ファイル (config.xml) は /opt/jp1pcwebcon/conf/ に格納されています。

注意

初期設定ファイル (config.xml) は、PFM - Web Console サービスの起動時に読み込まれます。初期設定ファイルで変更した設定内容を有効にするには、PFM - Web Console サービスを再起動してください。また、指定された以外の個所を変更すると、PFM - Web Console が正常に動作しない場合がありますので、注意してください。

初期設定ファイルで設定する項目を次に示します。

(1) 初期設定ファイル (config.xml) の設定項目

config.xml ファイルの設定項目を次に示します。

(a) ファイル出力の設定

PFM - Web Console のファイル出力に関する設定を変更するための、config.xml ファイルの項目は次のとおりです。

表 6-20 ファイル出力の設定項目

内容	設定項目	設定できる値	デフォルト値
ログファイルを出力するディレクトリ	logDir	PFM - Web Console のログファイルを出力するディレクトリ	/opt/jp1pcwebcon/log/
PFM - Web Console が出力するログファイルの面数	logFileNumber	1 ~ 16	10
一つのログファイルのサイズ	logFileSize	1 ~ 100	4
ログファイルを保持する日数	logFileRetention	1 ~ 30	30
ファイルに出力する行の終端記号 (PFM - Web Console の画面に表示したレポートを CSV 形式で出力する場合または jperpt コマンドで CSV 形式のファイルを出力する場合)	lineSeparator	<ul style="list-style-type: none"> • CRLF : Windows で採用されている改行コード。 • LF : UNIX で採用されている改行コード。 	CRLF

内容	設定項目	設定できる値	デフォルト値
出力するファイルの文字コード (PFM - Web Console の画面に表示したレポートを CSV 形式で出力する場合または jpcrpt コマンドで CSV 形式のファイルを出力する場合)	characterCode	<ul style="list-style-type: none"> • US-ASCII • windows-1252 • ISO-8859-1 • UTF-8 • UTF-16 • UTF-16BE • UTF-16LE • Shift_JIS • EUC-JP • EUC-JP-LINUX • MS932 	Shift_JIS
出力するファイル名 (PFM - Web Console の画面に表示したレポートを CSV 形式で出力する場合)	csvFileName	<ul style="list-style-type: none"> • 数字 0-9 • . (ピリオド) • _ (アンダーバー) • 半角スペース • 英字 A-Z, a-z <p>指定できる文字数は、100 文字以内で、半角スペースとピリオドだけで構成される名称は指定できません。</p>	Export.csv

注

不正な値を指定すると、デフォルトが設定されます。

(b) 接続先 PFM - Manager の設定

PFM - Web Console の接続先 PFM - Manager の設定を変更するための、config.xml ファイルの項目は次のとおりです。

表 6-21 接続先 PFM - Manager の設定項目

内容	設定項目	設定できる値	デフォルト値
接続する PFM - Manager のホスト名または IP アドレス	host	<p>ホスト名の場合</p> <ul style="list-style-type: none"> • 数字 0-9 • . (ピリオド) • - (ハイフン) • 英字 A-Z, a-z <p>長さは 1 ~ 32 文字以内で指定できません。</p> <p>なお、接続する PFM - Manager が監視ホスト名設定機能によるエイリアス名を使用している場合でも、この項目には PFM - Manager ホストの物理ホスト名を指定してください。</p> <p>IP アドレスの場合</p> <ul style="list-style-type: none"> • 0.0.0.0 ~ 255.255.255.255 	localhost

6. インストールとセットアップ（UNIX の場合）

内容	設定項目	設定できる値	デフォルト値
接続する PFM - Manager の View Server サービスのポート番号	port	1024 ~ 65535	22286

注

不正な値を指定または指定を省略すると、デフォルトが設定されます。

注意

ほかのプロセスとのポート番号の重複を避けるため、次のポート番号は指定しないでください。

- OS が任意で割り当てるポート番号（動的ポートまたは短命ポートと呼ばれるポート番号）

（c）データの取得や表示の設定

PFM - Web Console のデータの取得や表示の設定を変更するための、`config.xml` ファイルの設定項目は次のとおりです。

表 6-22 データの取得や表示の設定項目

内容	設定項目	設定できる値	デフォルト値
同一ユーザーの PFM - Web Console への多重ログインの可否	enableDuplicateLogin	true（多重ログイン可能） false（多重ログイン不可能）	true
PFM - Manager から取得する最大レコード件数	maxFetchCount 19 (<vsa> タグ配下)	1 ~ 2,147,483,647（整数）	1,440
レポート印刷画面の最大キャッシュ保存数	printCacheSize	5 ~ 20（整数）	10 または 20 ¹
レポート印刷画面に表示する表データの最大行数	printTableMaxRowSize	0 ~ 15,000（整数） 0 を指定した場合、行数を制限しません。 ²	0 または 15,000 ³
レポートウィンドウのテーブル表示時に 1 ページ当たり表示するレコード数	displayCountPerPage	1 ~ 2,147,483,647（整数）	20
一つのリアルタイムレポートに対して、データをキャッシュに保存する最大レコード数	maxRealtimeCache	1 ~ 360（整数）	30
自動更新の更新間隔	updateInterval	10 ~ 3,600	60

内容	設定項目	設定できる値	デフォルト値
ulong のデータ型を使った条件式の定義で指定可能な範囲	condExpValueUlongExtension	指定可能な値は、true か false です。 <ul style="list-style-type: none"> • true : 0 ~ 4,294,967,295 • false : 0 ~ 2,147,483,647 	false
レポートグラフの凡例ラベルに表示できる最大文字数 ⁴	maxSeriesLabelLength	1 ~ 1,024	30
分割送信モードの有無	blockTransferMode	true (有効) false (無効)	true
レポートキャッシュファイル化機能の使用可否	useReportCacheFile	true (使用する) false (使用しない)	false
レポートキャッシュファイルの格納先 ⁵	reportCacheFileDir ⁵	絶対パスで指定 パス長の最大値: 150 文字 指定したディレクトリがない場合は、PFM - Web Console のサービス起動時にディレクトリが作成されます。	/opt/jp1pcwebcon/reportcache
グラフ表示するレポートデータ数の制限値 (レポートキャッシュファイル化機能が有効の場合)	graphMaxReportData	1 ~ 2,000,000	2,000,000
タイリング表示で表示できるレポートの最大数	maxTileReports	1 ~ 256	50
リアルタイムレポートを自動更新するリクエスト間隔の制限時間 ⁶	realtimeCacheInterval	60,000 ~ 3,600,000 (ミリ秒)	600,000
一般ユーザー権限でのエージェント階層の操作 (エージェント階層の作成・編集, および [Products] 表示形式での表示) の可否	agentTreeAccessLimit	on (操作不可能) off (操作可能)	off
アラームツリー分離表示の有無	displayAlarmTablesSeparately	true (分離表示有効) false (分離表示無効)	false ⁷
日付のフォーマット	selectFormat	<ul style="list-style-type: none"> • pattern-ddMMyyyy • pattern-MMddyyyy • pattern-yyyyMMdd 	pattern-yyyyMMdd

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

内容	設定項目	設定できる値	デフォルト値
ブックマーク機能の定義情報を保存するリポジトリ ⁵ の格納先	bookmarkRepository ⁵	絶対パスで指定 パス長の最大値：150文字 指定したディレクトリがない場合は、PFM・Web Console のサービス起動時にディレクトリが作成されます。	/opt/jp1pcwebcon/bookmarks
一般ユーザーおよび業務グループ一般ユーザーでのレポート定義・ブックマークの操作（作成，編集，削除，インポート，およびエクスポート）の可否	editReportByOrdinaryUser	on（編集可能） off（編集不可能）	on
サマリ表示でのサーバの稼働状況の上位表示数（表示形式が User Agents の場合）	maxDisplayServer (<user-agents> タグ配下)	1 ~ 100	5 ⁸
サマリ表示でのサーバの稼働状況の上位表示数（表示形式が Products の場合）	maxDisplayServer (<products> タグ配下)	1 ~ 100	5 ⁸
サマリ表示でのエージェントの稼働状況を [ユーザーツリーの視点] で表示させた場合の上位表示数（表示形式が User Agents の場合）	maxDisplayAgents User (<user-agents> タグ配下)	1 ~ 100	5 ⁸
サマリ表示でのエージェントの稼働状況を [プロダクト種別の視点] で表示させた場合の上位表示数（表示形式が User Agents の場合）	maxDisplayAgents Products (<user-agents> タグ配下)	1 ~ 100	5 ⁸
サマリ表示でのエージェントの稼働状況の上位表示数（表示形式が Products の場合）	maxDisplayAgents Products (<products> タグ配下)	1 ~ 100	5 ⁸
サマリ表示でのエージェントのアラームの監視状況の上位表示数（表示形式が User Agents の場合）	maxDisplayAlarm (<user-agents> タグ配下)	1 ~ 100	5 ⁸

内容	設定項目	設定できる値	デフォルト値
サマリ表示でのエージェントのアラームの監視状況の上位表示数 (表示形式が Products の場合)	maxDisplayAlarm (<products> タグ配下)	1 ~ 100	5 ⁸
サマリ表示でのイベントの最大表示件数	maxEvents	1 ~ 999	256
PFM - Web Console でキャッシュに保持するイベントの最大数 (業務グループを利用する場合)	maxMonitorEventNumForMultiTenant (<multi-tenant> タグ配下)	1 ~ 10000 (整数)	999 ⁹
フィールドの検索件数の上限数	searchLimit	1 ~ 100	50
レポート系列ページング機能の使用可否	usingSeriesPagingOnTheGraph	true (使用する) false (使用しない)	true または false ¹⁰
グラフの凡例に表示するフィールドの最大数 (レポート系列ページング機能が有効の場合)	displayLegendCount	1 ~ 40 (整数)	14
プロセス監視のアプリケーション定義のテンプレートファイル格納先 ⁵	processMonitoringTemplatesRepository ⁵	絶対パスで指定 パス長の最大値: 100 文字 指定したディレクトリがない場合は、PFM - Web Console のサービス起動時にディレクトリが作成されます。	/opt/jp1pcwebcon/processMonitoringTemplates
グラフでの最大ドリルダウンデータ数	maxDrilldownPoints	0 ~ 1,500 (整数) 0 を指定した場合、データ数を制限しません。 ¹¹	0 または 1,500 ¹²

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

内容	設定項目	設定できる値	デフォルト値
グラフに使用する系列色	color1 ~ color16 (<chart-symbolColors> タグ配下)	0 ~ 255 RGB 値をコンマ区切りで指定します。	color1 : 235,143,21 color2 : 204,0,0 color3 : 102,153,0 color4 : 0,102,255 color5 : 102,0,255 color6 : 255,51,153 color7 : 255,185,0 color8 : 255,17,17 color9 : 136,204,0 color10 : 71,145,255 color11 : 134,51,255 color12 : 255,149,246
color1 ~ color16 のうち円グラフに使用しない色	noUseCircleColor (<chart-symbolColors> タグ配下)	0 ~ 16 ¹³ 複数の色番号を指定する場合は,「,(半角コンマ)」で区切って指定します。	0 (円グラフに使用しない色番号なし)
折れ線グラフの表示に利用するプロットのサイズ	lineSymbolSize (<draw> タグ配下)	LARGE , MEDIUM , SMALL , AUTO ¹⁴	MEDIUM ⁹
集合横棒グラフ (積み上げ横棒グラフは対象外) の場合の凡例の表示順序	legendSeriesOrderForHBar (<draw> タグ配下)	FORWARD (グラフの一番上に表示されている系列から順に凡例に表示) REVERSE (グラフの一番下に表示されている系列から順に凡例に表示)	REVERSE ⁹
レポート (複合レポート以外) のグラフオプションの項目 [オートラベルを表示する] の初期値	enableAutoLabelAtDefaultDisp	true (初期値をチェックありにする) false (初期値をチェックなしにする)	false ⁹
オートラベル機能で、ツールチップに表示されるデータ値のうち、整数部の最大けた数	autoLabelMaxIntegerDigits (<draw> タグ配下)	1 ~ 14 ¹⁵	7 ⁸
オートラベル機能で、ツールチップに表示されるデータ値のうち、小数部の最大けた数	autoLabelMaxFractionDigits (<draw> タグ配下)	1 ~ 6 ¹⁶	3 ⁸

内容	設定項目	設定できる値	デフォルト値
オートラベル機能を有効にするプロットの最大値	maxAutoLabelPoints (<draw> タグ配下)	1 ~ 2000	1440 ⁸
複合レポートで、最前面に表示するグラフ種別	foregroundCombinationGraph (<draw> タグ配下)	3DBAR (3D 表示有効の集合縦棒 / 積み上げ縦棒グラフ) LINE (折れ線グラフ) ¹⁷	3DBAR ⁹
グラフの目盛に表示するデータラベルが小数値の場合の小数部の最大表示けた数	precision (<draw> タグ配下)	0 ~ 15	0 (PFM・Web Console 09-50 以降を新規にインストールした場合は 3) ⁹
グラフの目盛に表示するデータラベルのけた区切りコンマの有無	appendCommaDisplayedForNum (<draw> タグ配下)	true (コンマあり) false (コンマなし)	false ⁹
jpcrpt コマンドで出力するレポートについて View Server から取得する最大レポートコード件数	maxFetchCount ¹⁹ (<command> タグ配下)	1 ~ 2,147,483,647 (整数で指定)	<vsa> タグ配下の maxFetchCount の値
jpcrpt コマンドで出力する HTML 形式レポートの表データの最大行数	cmdHtmlTableOutputMaxRowSize	0 ~ 15,000 (整数) 0 を指定した場合、行数を制限しません。 ¹⁸	0 または 15,000 ³
セッション共有による強制ログイン画面の表示	informSharedSession (<vsa> タグ配下)	true (有効) false (無効)	true ⁸
グラフのアンチエイリアスの有無	enableAntiAliasForNonAreaGraph (<draw> タグ配下)	true (有効) false (無効)	true ⁸

注 1

PFM・Web Console 09-10 以降を新規インストールした場合、デフォルト値として 10 が指定されています。PFM・Web Console 09-00 以前からバージョンアップインストールした場合など、値が指定されていないときには 20 が仮定されます。

注 2

0 を指定した場合、大量の表データが含まれるレポートに対して [レポート印刷] 画面を表示しようとすると、Web ブラウザがハングアップすることがあります。詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の稼働分析のためのレポートの作成の章の、レポート表示時の注意事項について説明している箇所を参照してください。

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

注 3

PFM・Web Console 09-10 以降を新規インストールした場合、デフォルト値として 15,000 が指定されています。PFM・Web Console 09-00 以前からバージョンアップインストールした場合など、値が指定されていないときには 0 が仮定されます。

注 4

バイト数で指定します。ただし、末尾がマルチバイト文字の 1 文字目に当たる場合、末尾の文字も表示されます。

注 5

デフォルトの初期設定ファイル (config.xml) には、bookmarkRepository , reportCacheFileDir , および processMonitoringTemplatesRepository の値は設定されていません。また、XML タグ自身もコメントアウトされています。このため、これらの項目を設定する場合は、タグのコメントアウトを解除した上で値を指定してください。

注 6

自動更新のリクエスト間隔が制限時間を超えたとき、サーバやエージェントは、通知なくレポートが終了したと判断し、処理を終了します。ただし、リクエスト間隔が制限時間を超えているかどうかは 10 秒ごとに判断されます。

例えば、制限時間が 61,000 ミリ秒に設定されている場合、制限時間として 61,000 ミリ秒 ~ 70,000 ミリ秒が設定されていることになります。

注 7

PFM・Web Console 09-50 以降を新規インストールした場合、デフォルト値として true が指定されています。PFM・Web Console 09-10 以前からバージョンアップインストールした場合など、値が指定されていないときには false が仮定されます。また、指定できない値を指定したときにも、false が仮定されます。

注 8

指定を省略した場合、デフォルト値が仮定されます。

注 9

範囲外の値を指定したり、指定を省略したりした場合、デフォルト値が仮定されます。

注 10

PFM・Web Console 09-10 以降を新規インストールした場合、デフォルト値として true が指定されています。PFM・Web Console 09-00 以前からバージョンアップインストールした場合など、値が指定されていないときには false が仮定されます。

注 11

0 を指定した場合、グラフ領域のフィールドの点の個数によっては、メモリーが不足して PFM・Web Console のサービスが停止することがあります。詳細について

は、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の稼働分析のためのレポートの作成の章の、レポート表示時の注意事項について説明している個所を参照してください。

注 12

PFM - Web Console 09-10 以降を新規インストールした場合、デフォルト値として 1,500 が指定されています。PFM - Web Console 09-00 以前からバージョンアップインストールした場合など、値が指定されていないときには 0 が仮定されます。

注 13

次の場合は、0 が指定されたと見なされ、color1 ~ color16 で指定したすべての色が円グラフに利用されます。

- 指定を省略した
- 複数指定時に、一つでも範囲外の値や有効でない値を指定した
- 複数指定時に、一つでも 0 が含まれる

次の場合は、color1 ~ color12 のそれぞれのデフォルト色が円グラフに利用されます。

- すべての色番号を指定した
- color1 ~ color16 を一つも指定していない

注 14

AUTO を指定すると、レポートの表示範囲によって、LARGE、MEDIUM、または SMALL のうち表示に適したサイズに自動的に調整されます。

なお、タイリング表示のサムネイルグラフ画像の場合、この項目は適用されません。この場合は、常に SMALL で表示されます。

注 15

実際のデータ値の整数部が、ここで指定したけた数より大きい場合は、けたの小さい方から指定けた数の分だけ表示されます。例えば、指定値が 3 で、ツールチップの指定プロットのデータ値が 123,456 の場合は、ツールチップに「456」と表示されます。

注 16

実際のデータ値の小数部が、ここで指定したけた数より大きい場合は、小数点以下第 1 位から指定けた数の分だけ表示されます。指定けた数を超えた場合は、指定けたの次のけたで四捨五入されます。例えば、指定値が 2 で、ツールチップの指定プロットのデータ値が 1.23456 の場合は、ツールチップに「1.23」と表示されます。

注 17

複合レポートの 3D 表示有効の集合縦棒 / 積み上げ縦棒グラフが設定されていない場合、または折れ線グラフが設定されていない場合、この設定は無視されます。

注 18

0 を指定した場合、大量の表データが含まれるレポートを `jpccrpt` コマンドで

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

HTML 出力して、Web ブラウザで表示しようとする、Web ブラウザがハングアップすることがあります。詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の稼働分析のためのレポートの作成の章の、レポート表示時の注意事項について説明している個所を参照してください。

注 19

複合レポートの場合は maxFetchCount の値ではなく、レポートをブックマークに登録した時に設定していた「最大レコード数」の値が適用されます。

(d) View Server サービスとの通信の設定

PFM - Web Console が View Server と通信するときの設定を変更するための、config.xml ファイルの設定項目は次のとおりです。

表 6-23 PFM - Web Console が View Server と通信するときの設定項目

内容	設定項目	設定できる値	デフォルト値
PFM - Web Console (Web サーバ) が View Server サービスとの通信で使用するポート番号	ownPort ^{1 2}	1,024 ~ 65,535	任意の空きポート
PFM - Web Console (コマンド) が View Server サービスとの通信で使用するポート番号	ownCmdPort ^{1 2}	1,024 ~ 65,535	任意の空きポート
PFM - Web Console が View Server サービスとの通信時に、View Server サービスからのコールバック先として使用するホスト名または IP アドレス	ownHost ^{1 3}	ホスト名の場合 • 数字 0-9 • . (ピリオド) • - (ハイフン) • 英字 A-Z, a-z 先頭文字は英数字だけ指定できます。 1 ~ 255 バイトで指定します。 IP アドレスの場合 • 0.0.0.0 ~ 255.255.255.255	なし ⁴

注 1

デフォルトの初期設定ファイル (config.xml) には、ownPort、ownCmdPort、および ownHost は設定されていません。また、XML タグ自身もコメントアウトされています。このため、これらの項目を設定する場合は、タグのコメントアウトを解除した上で値を指定してください。

注 2

ファイアウォール環境の場合、この設定が必要です。詳細はマニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の付録の、ファイアウォールの通過方向

について説明している個所を参照してください。

注 3

PFM・Manager と PFM・Web Console との間は、TCP/IP を用いて通信します。これは、PFM・Manager と PFM・Web Console が別ホストに存在する場合だけではなく、同一ホスト上に存在する場合も同様です。このため、Performance Management を運用する場合は、PFM・Manager ホストと PFM・Web Console ホストの双方で常に通信可能なホスト名または IP アドレスを設定する必要があります。設定を実施していない場合、PFM・Manager ホスト名または PFM・Web Console ホスト名から、最初に解決される IP アドレスが使用されます。

例えば、次のような構成や運用を取る場合は、PFM・Manager ホストと PFM・Web Console ホストの双方で常に通信可能なホスト名または IP アドレスを設定する必要があります。

- PFM・Manager ホストと PFM・Web Console ホスト間で IP アドレス変換 (NAT) を使用している場合
- PFM・Manager ホストが業務用 LAN および監視用 LAN の二つのネットワークに接続され、Performance Management は監視用 LAN でホスト間通信を行う場合
- ホストのメンテナンス作業の際に、一時的に NIC から LAN ケーブルを抜く場合 (この際、NIC に割り当てられた IP アドレスが無効になることがあるため)

注 4

範囲外を指定する、または無効な値を指定すると、PFM・Web Console ホストの IP アドレスが設定されます。

(e) 自動ログアウトの設定

PFM・Web Console から自動ログアウトするまでの時間を設定するための、`config.xml` ファイルの項目は次のとおりです。

表 6-24 自動ログアウトの設定項目

内容	設定項目	設定できる値	デフォルト値
PFM・Web Console から自動ログアウトするまでの時間 (秒)	<code>sessionTimeout</code>	0 ~ 86,400	4,000

(f) その他の設定

PFM・Web Console のその他の動作を設定するための、`config.xml` ファイルの項目は次のとおりです。

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

表 6-25 その他の設定項目

内容	設定項目	設定できる値	デフォルト値
JP1 イベントを発行する場合に、PFM - Web Console の [新規アラーム > アクション定義] または [編集 > アクション定義] 画面にデフォルトで選択される Action Handler サービスの決定方法	selectAHModeForJP1Event ¹	<ul style="list-style-type: none"> compatible local manager maintain 	compatible または manager ²
アラーム更新時にアラームが不正に削除される問題への対策有無	alarmCompatibleMode (<vsa>タグ配下) ¹	<ul style="list-style-type: none"> true (対応有効) false (対応無効) 	true ³
jp1cprt コマンドで登録レポートや複合ブックマークのレポートを出力する際の、入力パラメーターファイルで指定するブックマーク名の属性値の読み込み方法	cmdRptBookmarkNameDecodeOnce (<command><export>タグ配下) ¹	<ul style="list-style-type: none"> true: 「¥¥」を「¥」に、「¥/」を「/」に置換して読み込む。 false: 「¥¥¥¥」を「¥」に、「¥¥¥/」を「/」に置換して読み込む。「¥¥」と「¥/」は区切り文字として読み込む。 	true ³

注 1

設定できる値の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の付録の、初期設定ファイル (config.xml) について説明している個所を参照してください。

注 2

PFM - Web Console 09-10 以降を新規インストールした場合、デフォルト値として true が指定されています。PFM - Web Console 09-00 以前からバージョンアップインストールした場合など、値が指定されていないときには false が仮定されます。

注 3

不正な値を指定または省略した場合はデフォルトが設定されます。

(2) 変更した初期設定ファイル (config.xml) をデフォルトに戻す手順

バージョンアップによって、config.xml ファイルの構造が変わるおそれがあります。バージョンアップ後に、次に示す手順で、config.xml ファイルの編集内容を新しい config.xml ファイルに反映してください。

1. /opt/jp1pcwebcon/conf/config.xml の内容を確認し、編集内容を調べておく。

2. /opt/jplpcwebcon/conf/config.xml をバックアップする。
3. /opt/jplpcwebcon/sample/conf/config.xml を、/opt/jplpcwebcon/conf/config.xml に上書きコピーする。
4. 手順 1 で確認した編集内容を新しい /opt/jplpcwebcon/conf/config.xml に反映する。

初期設定ファイルは、PFM・Web Console 起動時に反映されるため、初期設定ファイルを変更したときは、PFM・Web Console を再起動してください。

注意

config.xml ファイルを編集前のデータに戻したい場合は、/opt/jplpcwebcon/sample/conf/ から config.xml ファイルをコピーして、上記のフォルダに上書きしてください。

6.4.7 Store バージョン 2.0 のセットアップとアンセットアップ

(1) セットアップ方法

Store バージョン 2.0 は、PFM・Base 08-10 以降または PFM・Manager 08-10 以降で、監視エージェントが、PFM・Agent 08-00 以降または PFM・RM の場合に利用できます。PFM・Agent のバージョン 08-10 を新規にインストールする場合、および PFM・RM を新規にインストールする場合には、デフォルトで Store バージョン 2.0 が動作します。

注意

Store バージョン 2.0 を利用できるのは Agent Store および Remote Monitor Store サービスの Store データベースだけです。Master Store サービスの Store データベースは、Store バージョン 1.0 でだけ動作するので、Store バージョン 2.0 は利用できません。また、Remote Monitor Store サービスでは Store バージョン 1.0 は利用できません。

Store バージョン 2.0 は、PFM・Agent のバージョンとインストール順序によってセットアップ方法が異なります。既存の環境が Store バージョン 1.0 で稼働している場合は、08-10 以降の製品をインストールしても、Store バージョン 1.0 で稼働する設定のままとなります。この環境の Store データベースを 2.0 へ移行する場合は、セットアップコマンドを実行する必要があります。

PFM・Agent のバージョンごとに、Store バージョン 2.0 の利用可否と利用手順を次の表に示します。

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

表 6-26 シングルインスタンスの PFM - Agent の場合

PFM - Agent		Store バージョン 2.0 の利用可否	Store バージョン 2.0 の利 用手順
バージョン	インストール方法		
07-50 以前	問わない	利用できない	-
08-00	問わない	セットアップ後利用で きる	セットアップコマンドを 実行
08-10 以降	新規インストール	利用できる	設定不要
	バージョンアップインス トール	利用できる	セットアップコマンドを 実行

(凡例) - 該当しない

表 6-27 マルチインスタンスの PFM - Agent の場合

PFM - Agent		Store バージョン 2.0 の利用可否	Store バージョン 2.0 の利 用手順
バージョン	インスタンスの作成タイミ ング		
07-50 以前	問わない	利用できない	-
08-00 以降	PFM - Base, または PFM - Manager08-10 をインス トールする前	セットアップ後利用で きる	セットアップコマンドを 実行
	PFM - Base, または PFM - Manager08-10 をインス トールしたあと	利用できる	jpccconf inst setup コ マンドによるインスタ ンス作成時に, 使用する Store バージョンを選択

(凡例) - 該当しない

PFM - Agent で Store バージョン 2.0 を使用する場合はセットアップ手順については,
各 PFM - Agent マニュアルを参照してください。

注意

Store バージョン 1.0 から Store バージョン 2.0 に変更した場合, PD レコードおよ
び PL レコードではデータの保存条件が変更されるため, Store バージョン 2.0 の保
存条件を満たしていないデータは削除されます。また, Store バージョン 2.0 でのデ
フォルトの保存期間は, PFM - Agent および PFM - RM によって異なります。

例えば, デフォルトの保存期間が 10 日の PFM - Agent で, Store バージョン 1.0 の
PD レコードが 10,000 レコードで 2006/01/01 から 2006/12/31 の 365 日分保存され
ている場合, Store バージョン 2.0 に変更すると, 過去 355 日分のデータは削除され
ます。

このため, Store バージョン 2.0 に変更する前に, jpctool db dump コマンドで

Store バージョン 1.0 の情報を出力してください。

なお、PI レコードは変更前と変更後でデータの内容は変わりません。

(2) アンセットアップ方法

Store バージョン 2.0 は `jpccconf db vrset -ver 1.0` コマンドを使用してアンセットアップします。Store バージョン 2.0 をアンセットアップすると、Store データベースのデータはすべて初期化され、Store バージョン 1.0 に戻ります。

なお、`jpccconf db vrset -ver 1.0` コマンドは、対話形式と非対話形式のどちらでも実行できます。`jpccconf db vrset` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドについて説明している章を参照してください。

注意

Store バージョン 2.0 をアンセットアップすると、データは初期化されます。このため、Store バージョン 1.0 に変更する前に、`jpctool db dump` コマンドで Store バージョン 2.0 の情報を出力してください。

6.4.8 プロダクト名表示機能の設定

プロダクト名表示機能を有効にすることで、Performance Management で使用するサービスキーおよびサービス ID の形式をプロダクト名に変更できます。プロダクト名表示機能の詳細については、「4.1.2 サービスの表示・指定方法」を参照してください。

プロダクト名表示機能を設定するには、`jpccconf prodname` コマンドを使用します。`jpccconf prodname` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

(1) 現在のプロダクト名表示機能の設定状況を確認する

1. プロダクト名表示機能の設定状況を確認したいホストにログインする。

2. `jpccconf prodname display` コマンドを実行する。

プロダクト名表示機能の現在の設定が表示されます。

プロダクト名表示機能が有効な場合の実行例を次に示します。

```
# jpccconf prodname display
available
```

論理ホスト運用をしている場合は、`-lhost` オプションで設定状況を確認したい論理ホストを指定してください。

(2) プロダクト名表示機能を有効にする

1. プロダクト名表示機能を有効にしたいホストにログインする。

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

2. ホスト上のすべての Performance Management サービスを停止する。
サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。論理ホスト運用をしている場合は、クラスタソフトの操作によって、Performance Management を登録している論理ホストを停止してください。
3. `jpccnf prodname enable` コマンドを実行する。
プロダクト名表示機能が有効になります。
論理ホスト運用をしている場合は、`-lhost` オプションでプロダクト名表示機能を設定したい論理ホストを指定してください。
4. ホスト上のすべての Performance Management サービスを起動する。
サービスの起動方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。論理ホスト運用をしている場合は、クラスタソフトの操作によって、Performance Management を登録している論理ホストを起動してください。

(3) プロダクト名表示機能を無効にする

1. プロダクト名表示機能を無効にしたいホストにログインする。
2. ホスト上のすべての Performance Management サービスを停止する。
サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。論理ホスト運用をしている場合は、クラスタソフトの操作によって、Performance Management を登録している論理ホストを停止してください。
3. `jpccnf prodname disable` コマンドを実行する。
プロダクト名表示機能が無効になります。
論理ホスト運用をしている場合は、`-lhost` オプションでプロダクト名表示機能を設定したい論理ホストを指定してください。
4. ホスト上のすべての Performance Management サービスを起動する。
サービスの起動方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。論理ホスト運用をしている場合は、クラスタソフトの操作によって、Performance Management を登録している論理ホストを起動してください。

6.4.9 アラーム正常回復時の測定値出力機能の設定

アラーム正常回復時の測定値出力機能によって、複数インスタンスレコードを監視するアラームが正常状態に回復した場合に、アラームメッセージテキストを出力できます。アラーム正常回復時の測定値出力機能の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、アラームによる稼働監視について説明している章を参照してください。

アラーム正常回復時の測定値出力機能を利用するために必要なシステムのバージョン構成を次に示します。なお、PFM・Web Console のバージョンに制限はありません。

- PFM・Manager : 09-10 以降
- アラーム監視対象の PFM・Agent または PFM・RM : 08-00 以降
- エージェントホストの PFM・Manager または PFM・Base : 09-10 以降

09-10 以降の PFM・Manager を新規にインストールした場合、および 09-00 以前から 09-10 以降へバージョンアップインストールした場合、デフォルトではアラーム正常回復時の測定値出力機能は無効になります。09-10 以降からバージョンアップインストールした場合、アラーム正常回復時の測定値出力機能は以前の設定を引き継ぎます。

アラーム正常回復時の測定値出力機能の設定は、PFM・Manager ホストで行います。PFM・Agent または PFM・RM が上記のシステム構成を満たしていて、接続先 PFM・Manager でアラーム正常回復時の測定値出力機能を有効に設定している場合、アラーム正常回復時の測定値出力機能が有効になります。PFM・Agent および PFM・RM でのアラーム正常回復時の測定値出力機能の動作を次の表に示します。

PFM・Agent または PFM・RM のバージョン	同一ホスト上の PFM・Manager または PFM・Base のバージョン	アラーム正常回復時の測定値出力機能の設定	
		接続先 PFM・Manager のバージョンが 09-10 以降	接続先 PFM・Manager のバージョンが 09-10 未満
08-00 以降	09-10 以降	接続先 PFM・Manager の設定に従う ¹	無効 ²
	09-10 未満	無効 ³	無効 ³
08-00 未満	バージョンを問わない	無効 ³	無効 ³

注 1

Agent Collector サービスまたは Remote Monitor Collector サービスの起動時に、次に示すメッセージが PFM・Agent または PFM・RM ホストの共通メッセージログに出力されます。

- ・アラーム正常回復時の測定値出力機能を有効で起動した場合：KAVE00349-I
- ・アラーム正常回復時の測定値出力機能は無効で起動した場合：KAVE00350-I

注 2

Agent Collector サービスまたは Remote Monitor Collector サービスの起動時に、PFM・Agent または PFM・RM ホストの共通メッセージログに KAVE00350-I メッセージが出力されます。

注 3

PFM・Agent または PFM・RM ホストの共通メッセージログにアラーム正常回復時の測定値出力機能の設定についてのメッセージは出力されません。

アラーム正常回復時の測定値出力機能を有効または無効にするには、PFM・Manager ホストの jpccomm.ini ファイルの内容を直接編集します。jpccomm.ini ファイルは、次の場所に格納されています。

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

物理ホストの場合

Windows の場合

インストール先フォルダ

UNIX の場合

/opt/jp1pc/

論理ホストの場合

Windows の場合

環境ディレクトリ ¥jp1pc¥

UNIX の場合

環境ディレクトリ /jp1pc/

参考

PFM - Manager のアラーム正常回復時の測定値出力機能の設定状態によって、Name Server サービスの起動時に次のメッセージが PFM - Manager ホストの共通ログに出力されます。

- アラーム正常回復時の測定値出力機能が有効な場合：KAVE00349-I
 - アラーム正常回復時の測定値出力機能が無効な場合：KAVE00350-I
 - jpccomm.ini ファイル中の Alarm Message Mode ラベルに 0 または 1 以外の値が指定された場合：KAVE00350-I および KAVE00351-W
-

(1) アラーム正常回復時の測定値出力機能を有効にする場合

1. PFM - Manager のサービスをすべて停止する。

PFM - Manager のサービスが起動されている場合は、jpcspm stop コマンドですべて停止してください。クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから停止してください。

2. テキストエディターなどで、PFM - Manager ホストの jpccomm.ini ファイルを開く。
3. アラーム正常回復時の測定値出力機能の利用有無を設定する。
jpccomm.ini ファイル中の [Common Section] セクションで次のラベルの値を変更します。

Alarm Message Mode=1

4. jpccomm.ini ファイルを保存して閉じる。
5. jpcspm start コマンドで PFM - Manager のサービスを起動する。
クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから起動してください。

6. PFM - Agent および PFM - RM をすべて再起動する。

jpcspms stop および jpcspms start コマンドで、監視している PFM - Agent および PFM - RM をすべて再起動してください。再起動するまでは設定が反映されません。

(2) アラーム正常回復時の測定値出力機能を無効にする場合

1. PFM - Manager のサービスを停止する。

PFM - Manager のサービスが起動されている場合は、jpcspms stop コマンドですべて停止してください。クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから停止してください。

2. テキストエディターなどで、PFM - Manager ホストの jpccomm.ini ファイルを開く。

3. アラーム正常回復時の測定値出力機能の利用有無を設定する。

jpccomm.ini ファイル中の [Common Section] セクションで次のラベルの値を変更します。

```
Alarm Message Mode=0
```

4. jpccomm.ini ファイルを保存して閉じる。

5. jpcspms start コマンドで PFM - Manager のサービスを起動する。

クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから起動してください。

6. PFM - Agent および PFM - RM をすべて再起動する。

jpcspms stop および jpcspms start コマンドで、監視している PFM - Agent および PFM - RM をすべて再起動してください。再起動するまでは設定が反映されません。

6.4.10 Agent ホストリモート操作制限オプションおよび Agent 間直接情報参照抑止オプションの設定

Agent ホストリモート操作制限オプションおよび Agent 間直接情報参照抑止オプションを使用すると、PFM - Base のコマンドで操作できるホストを、ローカルホストに限定できます。

それぞれの機能の詳細については、「4.8.4 コマンドの操作対象ホストを制限する設定」を参照してください。

また、これらのオプションを設定するには、jpccomm.ini ファイルの内容を直接編集します。jpccomm.ini ファイルは、次の場所に格納されています。

設定するホストが物理ホストの場合

Windows の場合

6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

インストール先フォルダ

UNIX の場合

/opt/jp1pc/

設定するホストが論理ホストの場合

Windows の場合

環境ディレクトリ ¥jp1pc¥

UNIX の場合

環境ディレクトリ /jp1pc/

(1) Agent ホストリモート操作制限オプションの設定の変更

Agent ホストリモート操作制限オプションは、PFM - Manager ホストで設定します。

1. PFM - Manager のサービスをすべて停止する。

PFM - Manager のサービスが起動されている場合は、`jpcspm stop` コマンドですべて停止してください。クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから停止してください。

2. テキストエディターなどで、PFM - Manager ホストの `jpccomm.ini` ファイルを開く。

3. Agent ホストリモート操作制限オプションの利用有無を設定する。

`jpccomm.ini` ファイル中の [Common Section] セクションで次のラベルの値を変更します。

有効にする場合

Agent Remote Protection=1

無効にする場合

Agent Remote Protection=0

4. `jpccomm.ini` ファイルを保存して閉じる。
5. `jpcspm start` コマンドで PFM - Manager のサービスを起動する。
クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから起動してください。

(2) Agent 間直接情報参照抑止オプションの設定の変更

Agent 間直接情報参照抑止オプションは、コマンド実行時に `-host` オプションで指定された対象ホスト側で、ステータス情報の提供を拒否するための機能です。このため、それぞれの対象ホストで設定します。

1. PFM - Agent または PFM - RM ホストのすべての Performance Management サービスを停止する。
Performance Management のサービスが起動されている場合は、`jpcspm stop` コマ

ンドですべて停止してください。クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから停止してください。

2. テキストエディターなどで、PFM - Agent または PFM - RM ホストの `jpccomm.ini` ファイルを開く。

3. Agent 間直接情報参照抑止オプションの利用有無を設定する。

`jpccomm.ini` ファイル中の [Common Section] セクションで次のラベルの値を変更します。

有効にする場合

```
Service List Protection=1
```

無効にする場合

```
Service List Protection=0
```

4. `jpccomm.ini` ファイルを保存して閉じる。
5. `jpcspm start` コマンドで Performance Management サービスを起動する。
クラスタシステムを利用している場合は、クラスタソフトから起動してください。

6.5 Web ブラウザでマニュアルを参照するための設定

Performance Management では、PFM - Web Console がインストールされているホストに、プログラムプロダクトに標準添付されているマニュアル CD-ROM からマニュアルをコピーすることで、Web ブラウザでマニュアルを参照できるようになります。なお、PFM - Web Console をクラスタ運用している場合は、実行系、待機系それぞれの物理ホストでマニュアルをコピーしてください。

6.5.1 設定手順

(1) PFM - Web Console のヘルプからマニュアルを参照する場合

1. PFM - Web Console のセットアップ手順に従い、PFM - Web Console に PFM - Agent または PFM - RM を登録する (PFM - Agent または PFM - RM の追加セットアップを実施する)。
2. PFM - Web Console がインストールされているホストに、マニュアルのコピー先ディレクトリを作成する。
 - 「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の場合
/opt/jp1pcwebcon/doc/ja/pcsy/
 - 「JP1/Performance Management 運用ガイド」の場合
/opt/jp1pcwebcon/doc/ja/pcop/
 - 「JP1/Performance Management リファレンス」の場合
/opt/jp1pcwebcon/doc/ja/pcr/
 - JP1/Performance Management の PFM - Agent または PFM - RM マニュアルの場合
/opt/jp1pcwebcon/doc/ja/XXXX/
XXXX には、PFM - Agent または PFM - RM のヘルプ ID を指定してください。ヘルプ ID については、各 PFM - Agent または PFM - RM マニュアルの付録に記載されている識別子一覧を参照してください。
3. 手順 2 で作成したディレクトリ配下に、マニュアル CD-ROM から次のファイルおよびディレクトリをコピーする。

HTML マニュアルの場合

/CD-ROM のマウントポイント /MAN/3020/ 資料番号 (03004A0D など) 下の、すべての HTML ファイルおよび FIGURE ディレクトリ

PDF ファイル

/CD-ROM のマウントポイント /MAN/3020/ 資料番号 (03004A0D など) 下の、PDF ファイル

コピーする際、HTML マニュアルの場合は index.htm ファイルが、PDF マニュアル

の場合は PDF ファイル自体が、作成したディレクトリ配下に配置されるようにしてください。マニュアルファイルのコピー方法については、マニュアル CD-ROM の `readme.txt` を参照してください。

4. PFM - Web Console を再起動する。

(2) お使いのマシンのハードディスクからマニュアルを参照する場合

CD-ROM の `setup.exe` を使ってインストールするか、または直接 HTM ファイル、PDF ファイル、および GIF ファイルを任意のディレクトリにコピーしてください。HTML マニュアルの場合、次のディレクトリ構成になるようにしてください。

html (HTM ファイルを格納)
 FIGURE (GIF ファイルを格納)

6.5.2 参照手順

マニュアルの参照手順を次に示します。

1. PFM - Web Console の [メイン] 画面のメニューバーフレームにある [ヘルプ] メニューをクリックし、[ヘルプ] 画面を表示する。
2. マニュアル名またはマニュアル名の後ろの [PDF] をクリックする。
 マニュアル名をクリックすると HTML 形式のマニュアルが表示されます。[PDF] をクリックすると PDF 形式のマニュアルが表示されます。

付録

付録 A 制限値

付録 B 命名規則

付録 C システム見積もり

付録 D カーネルパラメーター一覧

付録 E 移行手順と移行時の注意事項

付録 F バージョン互換

付録 G 動作ログの出力

付録 H ヘルスチェックエージェント

付録 I コマンドの格納先

付録 J 各バージョンの変更内容

付録 K (3020-3-R31-31) の変更内容

付録 L 用語解説

付録 A 制限値

Performance Management の制限値を次に示します。

付録 A.1 システム構成

一つの PFM - Manager に接続できる PFM - Web Console , PFM - Agent , および PFM - RM の数は、使用するシステム構成やネットワーク環境によって異なります。一つの PFM - Manager に接続できる PFM - Web Console , PFM - Agent , および PFM - RM の数の目安を次に示します。

(1) 接続できる PFM - Web Console 数

一つの PFM - Manager に接続できる PFM - Web Console の最大数は、20 です。

(2) 接続できる PFM - Agent および PFM - RM 数

一つの PFM - Manager に接続できる PFM - Agent および PFM - RM の最大数は、500 です。ただし、PFM - Agent および PFM - RM から発行されるアラームイベントの発行頻度が高くなったり、多数の PFM - Agent および PFM - RM から同時にアラームイベントが発行されたりすると、PFM - Manager のアラームイベント処理に遅延が発生します。一つの PFM - Manager でアラームイベントを効率的に処理できる PFM - Agent および PFM - RM の数を次の表に示します。

なお、Performance Management 以外のプログラムが原因となるシステムの性能の負荷は考慮していません。PFM - Agent および PFM - RM の数は目安となっていますので、運用を始める前にシステムの動作を検証してください。

表 A-1 一つの PFM - Manager に接続できる PFM - Agent および PFM - RM の最大数

アラームイベント発生頻度 (回 / 時間) ^{1 2}	接続できる PFM - Agent および PFM - RM 数
60	68
30	119
20	163
10	267
5	422
4	472
1	500

注 1

一つの PFM - Agent または PFM - RM の 1 時間当たりの発行アラームイベント数を示します。

注 2

アラームイベントの発生頻度は、アラームの設定によって異なります。

マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、アラームによる稼働監視について説明している章を参照して、環境に応じたアラームイベントの発生頻度を見積もってください。その上で、PFM・Manager に接続できる PFM・Agent および PFM・RM 数を算出してください。

接続できる PFM・Agent および PFM・RM 数は、次のように算出してください。

- PFM・Agent の場合

PFM・Agent の数は、動作する Agent Collector サービスの数です。

ホスト上にマルチインスタンスエージェントが二つ、シングルインスタンスエージェントが一つの場合、そのホスト上の PFM・Agent の数は 3 となります。

- PFM・RM の場合

PFM・RM の数は、動作する RM Collector サービス、監視するリモートエージェント、およびグループエージェントの数の総和です。

グループエージェントは、PFM・RM で作成されたインスタンスにつき一つ作成されます。ホスト上に PFM・RM のインスタンスが二つあり、それぞれが監視するリモートエージェントの数が 10 台ある場合、そのホスト上の PFM・RM の数は次のようになります。

PFM・RM の数

=2 (RM Collector サービス)+20 (リモートエージェントの数)+2 (グループエージェントの数)

=24

注意

- 一つのホスト上で複数のサービスのセットを起動できるアプリケーションプログラムを、一つの PFM・Agent または PFM・RM で監視する場合、1 インスタンスを一つとして数えます。
- 一つの PFM・Agent または PFM・RM の 1 時間当たりの発行アラームイベント数は、必ず 0 より大きい値を指定してください。
- PFM・Agent および PFM・RM の接続最大数を超えるシステムを構築する場合、拠点ごとに PFM・Manager を設置し、PFM・Agent および PFM・RM を分散して運用してください。その際、PFM・Web Console を各拠点の PFM・Manager に接続して運用してください。
- PFM・Agent および PFM・RM から発行されるアラームイベントの発行頻度が高くなったり、多数の PFM・Agent および PFM・RM から同時にアラームイベントが発行されたりすると、PFM・Manager のアラームイベント処理に遅延が発生します。その場合も、拠点ごとに PFM・Manager を設置し、PFM・Agent および PFM・RM を分散させて管理するようにしてください。
- アラームのアクションを設定する際、PFM・Web Console のブラウザの [新規アラーム > アクション定義] 画面の [コマンド] フィールドの [アクションハンドラ] に「LOCAL」以外を選択すると、PFM・Manager に負荷が集中します。大

規模システムで、アラームを契機としてアクションを実行させる場合は、PFM - Manager ホストへの負荷集中を防止するために、[新規アラーム > アクション定義] 画面の [コマンド] フィールドの [アクションハンドラ] に「LOCAL」を選択するようにしてください。

- アラームを設定する際、PFM - Web Console のブラウザの [新規アラーム > 基本情報] 画面の [高度な設定] エリアで、[常にアラームを通知する] や [すべてのデータを評価する] を選択すると、アラームイベントの発行頻度が高くなります。大規模システムでこれらを選択する場合は、[発生頻度] で設定するインターバル値を高く設定することで、システムに負荷を掛けないようにしてください。
- 多数の PFM - Agent および PFM - RM を起動している状態で、PFM - Manager を起動すると、PFM - Manager の起動に時間が掛かることがあります。その場合は、PFM - Manager を起動してから、各 PFM - Agent および PFM - RM を起動するようにしてください。

(3) PFM - Web Console が接続できる PFM - Agent および PFM - RM 数

一つの PFM - Manager に接続できる PFM - Agent および PFM - RM の最大数になります。

付録 A.2 PFM - Web Console の表示

(1) PFM - Web Console で表示できるレポート画面の数

PFM - Web Console で表示できるレポート画面の数を次の表に示します。

表 A-2 PFM - Web Console で表示できるレポート画面の数

内容	最大数
一つの PFM - Web Console で表示できるレポート画面	4
一つの PFM - Agent または PFM - RM の情報を複数の PFM - Web Console で表示できるレポート画面	10

(2) レポートに表示できる最大データ数

リアルタイムレポートでは、データを 30 回分まで表示します。変更する場合は、初期設定ファイル (config.xml) の maxRealtimeCache を変更してください。

(3) 表示するリアルタイムレポートの数

PFM - Agent または PFM - RM で複数インスタンスレコードを収集する場合、1 回の収集で扱うことができるインスタンス数は 32,767 個までです。

(4) 表示するレポートのフィールド数

レポート内のフィールド数は制限していませんが、フィールド数が多い場合、グラフや

凡例が一部またはすべて見えなくなることがあります。表示するフィールド数は 20 個程度を推奨します。

(5) タイリング表示で表示できるレポートのグラフ数

タイリング表示で表示できるレポートのグラフの最大数は、デフォルトで 50 です。タイリング表示を実行した場合にサーバへの負荷が高いときは、対象のブックマークを複数に分割して、グラフの表示数を減らしてください。

タイリング表示で表示できるレポートのグラフの最大数を変更したい場合は、初期設定ファイル (config.xml) の maxTileReports の値を変更してください。

付録 A.3 Store データベースのサイズ

(1) Store バージョン 2.0 の場合

Store バージョン 2.0 では、データファイルが一定の期間で分割され、レコードタイプごとにそれぞれ別のデータファイルにデータが格納されるため、データ全体ではなく分割されたデータファイルそれぞれについてサイズの上限があります。それぞれのデータファイルサイズの上限は 2 ギガバイトです。また、UNIX の ulimit コマンドによるファイルサイズ制限や、ファイルシステムの制限を超えた管理はできません。

(2) Store バージョン 1.0 の場合

Performance Management で扱う Store データベース全体のファイルサイズの上限は 2 ギガバイトです。また、UNIX の ulimit コマンドによるファイルサイズ制限や、ファイルシステムの制限を超えた管理はできません。

付録 A.4 アラーム数，アラームテーブル数の制限について

Performance Management で使用できるアラーム数およびアラームテーブル数の最大値を次の表に示します。

表 A-3 アラーム数およびアラームテーブル数の最大値

説明	最大値
Performance Management のシステム全体で使用できるアラームの数	10,000
一つのアラームテーブルに定義できるアラームの数	250
一つのエージェントにバインドできるアラームテーブルの数	50
一つのエージェントにバインドできるアラームの数	250

注

Performance Management の仕様上の最大値は 2,500 です。ただし 250 個を超えた場合、PFM - Manager、PFM - Agent、または PFM - RM の処理が遅延します。

付録 B 命名規則

Performance Management のサービスの命名規則について説明します。

付録 B.1 サービスの命名規則

Performance Management では、PFM・Web Console の GUI や各種コマンドを使ってサービスを管理します。サービスを特定するためにサービス ID やサービスキーがあります。ここではサービス ID とサービスキーの命名規則について説明します。

なお、サービス ID とサービスキーの形式は、プロダクト名表示機能が有効か無効かによって異なります。プロダクト名表示機能の詳細については、「4.1.2 サービスの表示・指定方法」を参照してください。

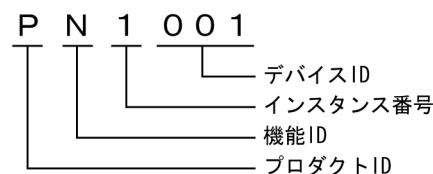
(1) サービス ID

Performance Management のサービスには、一意の ID が付加されています。この ID を「サービス ID」と呼びます。コマンドを使用して Performance Management のシステム構成を確認する場合、または個々のエージェントのパフォーマンスデータを退避する場合などに、Performance Management のサービス ID を指定してコマンドを実行します。

(a) プロダクト名表示機能が無効な場合

プロダクト名表示機能が無効な場合、サービス ID の形式はサービスにかかわらず同一です。サービス ID の構成を次に示します。

図 B-1 サービス ID が PN1001 の場合の例



次に、サービス ID のそれぞれの構成要素について説明します。

プロダクト ID

プロダクト ID とは、このサービスが Performance Management のどのプログラムプロダクトのサービスかを示す 1 バイトの識別子です。

PFM・Manager の各サービス、および Action Handler サービスの場合、プロダクト ID は「P」です。ヘルスチェックエージェントのプロダクト ID は「0」です。

各 PFM・Agent または PFM・RM のプロダクト ID については、各 PFM・Agent または PFM・RM マニュアルの、付録に記載されている識別子一覧を参照してください。

機能 ID

機能 ID とは、このサービスの機能種別を示す 1 バイトの識別子です。

機能 ID とその機能 ID が示すサービス名および機能の概要を、次の表に示します。

表 B-1 サービス名と機能 ID

機能 ID	サービス名	機能概要
A	Agent Collector	パフォーマンスデータを収集する機能。
	Remote Monitor Collector	
	リモートエージェント	
	グループエージェント	
C	Trap Generator	クライアント機能や SNMP トラップを発行する機能。
E	Correlator	サービス間のイベント配信を制御する機能。
H	Action Handler	アクションを実行する機能。
M	Master Manager	Performance Management のメイン機能。
N	Name Server	システム内のサービス構成情報を管理する機能。
P	View Server	PFM - Web Console と PFM - Manager 間の通信サーバ機能。
S	Agent Store	パフォーマンスデータ、イベントデータを管理する機能。
	Remote Monitor Store	
	Master Store	
T	Status Server	サービスのステータスを管理する機能。

インスタンス番号

インスタンス番号とは、内部処理で使用する、1 バイトの管理番号を示す識別子です。

デバイス ID

デバイス ID とは、このサービスが起動されている、Performance Management システム上のホストなどを示す 1 ～ 255 バイトの識別子です。デバイス ID は、サービスによって設定される内容が異なります。

サービス名と設定されるデバイス ID の内容を次の表に示します。

表 B-2 サービス名とデバイス ID

サービス名	デバイス ID の設定内容
Name Server	「001」固定。
Master Manager	「001」固定。
View Server	ホスト名が設定される。
Correlator	「001」固定。
Action Handler	ホスト名が設定される。

サービス名	デバイス ID の設定内容
Trap Generator	ホスト名が設定される。
Agent Collector	インスタンス構成でない場合は、ホスト名が設定される。 インスタンス構成の場合は、インスタンス名〔ホスト名〕が設定される。
Remote Monitor Collector	
Agent Store	インスタンス構成でない場合は、ホスト名が設定される。 インスタンス構成の場合は、インスタンス名〔ホスト名〕が設定される。
Remote Monitor Store	
リモートエージェント	インスタンス名〔監視対象名 @Remote Monitor Collector サービス稼働ホスト名〕が設定される。
グループエージェント	インスタンス名〔グループ名 @Remote Monitor Collector サービス稼働ホスト名〕が設定される。
Master Store	「001」固定。
Status Server	ホスト名が設定される。

(b) プロダクト名表示機能が有効な場合

プロダクト名表示機能が有効な場合、サービス ID の形式はサービスによって異なります。サービス名と設定されるサービス ID の内容を次に示します。

表 B-3 サービス名とサービス ID

サービス名	サービス ID
Name Server	<Name Server>
Master Manager	<Master Manager>
View Server	<View Server>
Correlator	<Correlator>
Action Handler	デバイス ID<Action Handler>
Trap Generator	<Trap Generator>
Agent Collector	デバイス ID< プロダクト名 >
Remote Monitor Collector	
リモートエージェント	
グループエージェント	
Agent Store	デバイス ID< プロダクト名 >(Store)
Remote Monitor Store	
Master Store	<Master Store>
Status Server	デバイス ID<Status Server>
Web Console	<Web Console>

注

jpctool service list コマンドの出力以外では使用されません。

次に、サービス ID のそれぞれの構成要素について説明します。

デバイス ID

デバイス ID とは、このサービスが起動されている、Performance Management システム上のホストなどを示す 1 ～ 255 バイトの識別子です。デバイス ID は、サービスによって設定される内容が異なります。デバイス ID の形式は、プロダクト名表示機能が無効の場合と同じです。デバイス ID に設定される内容については、表 B-2 を参照してください。

プロダクト名

PFM - Agent または PFM - RM のプロダクト名です。

(2) サービスキー

Performance Management の各サービスを起動したり停止したりする場合などに、「サービスキー」と呼ばれる識別子を指定してコマンドを実行します。

なお、コマンド実行時に指定するサービスキーには、コマンドを実行するホストのプロダクト名表示機能の設定状態にかかわらず、次に示す (a) と (b) のどちらの形式も使用できます。

また、jpcspm start、jpcspm stop、jpctool service list コマンド実行時にサービスキーを指定するときには、一部のサービスキーの示すサービスが異なります。詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、それぞれのコマンドについて説明している章を参照してください。

(a) プロダクト名表示機能が無効な場合

サービスキーの一覧を次の表に示します。

表 B-4 サービスキー一覧（プロダクト名表示機能が無効な場合）

サービスキー	意味
all	すべての Performance Management プログラムのサービスを示す。 同一ホストの PFM - Web Console との起動・停止連携を設定し、 jpcspm start、jpcspm stop、jpctool service list コマンド 実行時に指定した場合、PFM - Web Console サービスを含む。
jplpc	すべての Performance Management プログラムのサービスを示す。 PFM - Web Console サービスは含まない。 jpcspm start、jpcspm stop、jpctool service list コマンド の実行時だけ指定できる。
mgr	PFM - Manager サービスを示す（ただし、Action Handler サービスは 除く）。
act	Action Handler サービスを示す。
stat	Status Server サービスを示す。

サービスキー	意味
agt0	ヘルスチェックエージェントのサービス (Agent Collector, Agent Store) を示す。
wc	PFM - Web Console サービスを示す。

各 PFM - Agent または PFM - RM のサービスキーについては、各 PFM - Agent または PFM - RM マニュアルを参照してください。

(b) プロダクト名表示機能が有効な場合

サービスキーの一覧を次の表に示します。なお、コマンド実行時に指定する場合、大文字、小文字は区別されません。

表 B-5 サービスキー一覧 (プロダクト名表示機能が有効な場合)

サービスキー	意味
Manager	PFM - Manager サービスを示す (ただし、Action Handler サービスは除く)。
AH	Action Handler サービスを示す。
StatSvr	Status Server サービスを示す。
HC	ヘルスチェックエージェントのサービス (Agent Collector, Agent Store) を示す。
WebConsole	PFM - Web Console サービスを示す。

各 PFM - Agent または PFM - RM のサービスキーについては、各 PFM - Agent または PFM - RM マニュアルを参照してください。ただし、08-51 以前の PFM - Agent の場合は、「付録 B.3 PFM - Agent のサービスキー一覧 (プロダクト名表示機能有効時)」を参照してください。

付録 B.2 Performance Management のサービス名と Windows のサービス名との対応

Performance Management プログラムのサービス名は、Windows の [サービス] ウィンドウから表示できる Windows のサービス名とは異なります。

Performance Management プログラムのサービス名と Windows のサービス名との対応を次の表に示します。

表 B-6 PFM - Manager のサービス名と Windows のサービス名との対応

サービス名	Windows のサービス名
Name Server	PFM - Name Server
Master Manager	PFM - Master Manager

サービス名	Windows のサービス名
View Server	PFM - View Server
Correlator	PFM - Correlator
Action Handler	PFM - Action Handler
Trap Generator	PFM - Trap Generator
Master Store	PFM - Master Store
Status Server	PFM - Status Server
Agent Collector	PFM - Agent for HealthCheck
Agent Store	PFM - Agent Store for HealthCheck

表 B-7 PFM - Web Console のサービス名と Windows のサービス名との対応

サービス名	Windows のサービス名
Web Console	PFM - Web Console
Web Service	PFM - Web Service

表 B-8 PFM - Base のサービス名と Windows のサービス名との対応

サービス名	Windows のサービス名
Action Handler	PFM - Action Handler
Status Server	PFM - Status Server

表 B-9 PFM - Agent のサービス名と Windows のサービス名との対応

サービス名	Windows のサービス名
Agent Collector	PFM - Agent for XXXX ¹ [インスタンス名] ²
Agent Store	PFM - Agent Store for XXXX ¹ [インスタンス名] ²

注 1

「XXXX」は各 PFM - Agent の監視対象プログラム名を示します。

注 2

一つのホスト上で複数のサービスのセットを起動できるアプリケーションプログラムを監視する PFM - Agent の場合は、インスタンス名が表示されます。

表 B-10 PFM - RM のサービス名と Windows のサービス名との対応

サービス名	Windows のサービス名
Remote Monitor Collector	PFM - RM for XXXX [インスタンス名]
Remote Monitor Store	PFM - RM Store for XXXX [インスタンス名]

注

「XXXX」は各 PFM - RM の監視対象プログラム名を示します。

付録 B.3 PFM - Agent のサービスキー一覧（プロダクト名表示機能有効時）

08-51 以前の PFM - Agent について、プロダクト名表示機能を有効にしている場合のサービスキー一覧を次の表に示します。

表 B-11 PFM - Agent のサービスキー一覧

製品名	サービスキー（プロダクト名表示機能有効時）
PFM - Agent for Cosminexus	Cosminexus
PFM - Agent for DB2	DB2
PFM - Agent for Domino	Domino
PFM - Agent for Enterprise Applications	EAP
PFM - Agent for Exchange Server	Exchange
PFM - Agent for HiRDB	HiRDB
PFM - Agent for IIS	IIS
PFM - Agent for JP1/AJS	AJS3
PFM - Agent for Microsoft SQL Server	SQL
PFM - Agent for OpenTP1	OpenTP1
PFM - Agent for Oracle	Oracle
PFM - Agent for Platform (UNIX)	UNIX
PFM - Agent for Platform (Windows)	Windows
PFM - Agent for Service Response	SR
PFM - Agent for Virtual Machine	VM
PFM - Agent for WebLogic Server	WebLogic
PFM - Agent for WebSphere Application Server	WAS
PFM - Agent for WebSphere MQ	MQ

付録 C システム見積もり

Performance Management を使ったシステムを構築する前に、使用するマシンの性能が Performance Management を運用するのに十分であるか、見積もってください。

なお、PFM - Agent または PFM - RM でも同様に、使用するマシンの性能が PFM - Agent または PFM - RM を運用するのに十分であるか、見積もってください。PFM - Agent のシステム見積もりについては、各 PFM - Agent または PFM - RM マニュアルの、付録に記載されているシステム見積もりを参照してください。

見積もり項目を次に説明します。

付録 C.1 メモリー所要量

メモリー所要量は、Performance Management の設定状況や使用状況によって変化します。Performance Management のメモリー所要量のおおよその見積もりを、OS ごとに示します。

(1) Windows の場合

表 C-1 メモリー所要量 (Windows の場合)

プログラム	メモリー所要量 (単位: メガバイト)	
	Windows Server 2003	Windows Server 2008
PFM - Manager	550	600
PFM - Web Console	1,040	1,040
PFM - Base	30	30

(2) UNIX の場合

表 C-2 メモリー所要量 (UNIX の場合)

プログラム	メモリー所要量 (単位: メガバイト)					
	HP-UX	Solaris	AIX	Linux (Linux Server 6)	Linux (Linux 5 ま で, IPF 除 く)	Linux (IPF)
PFM - Manager	1,100	450	350	850	850	-
PFM - Web Console	1,630	1,430	1,430	1,527	1,430	-
PFM - Base	60	30	20	30	30	160

(凡例)

- : 未サポート

付録 C.2 ディスク占有量

ディスク占有量は、パフォーマンスデータを収集するレコード数によって変化します。

Performance Management のディスク占有量の見積もりについて説明します。

(1) システム全体のディスク占有量

システム全体のディスク占有量を、OS ごとに示します。なお、ここで示す PFM - Manager のディスク占有量は、Master Store サービスの Store データベースのディスク占有量を含みます。

(a) Windows の場合

表 C-3 システム全体のディスク占有量 (Windows の場合)

プログラム	状態	ディスク占有量 (単位: メガバイト)	
		Windows Server 2003	Windows Server 2008
PFM - Manager	インストール時	205	210
	標準 ^{1 2}	$510 + 0.1 * a + 0.015 * a * b + 0.01 * c + 2 * d + W$	$510 + 0.1 * a + 0.015 * a * b + 0.01 * c + 2 * d + W$
PFM - Web Console	インストール時	325	140 ³ +365
	標準 ⁴	$325 + 160 + (e * f * g)$	$1403 + 365 + 160 + (e * f * g)$
PFM - Base	インストール時	30	35
	標準	$130 + 2 * d$	$130 + 2 * d$

(凡例)

a : 接続する PFM - Agent または PFM - RM 数 (インスタンスを起動している場合は、インスタンス数も加える)

b : PA レコードの保存数 (初期状態は 1,000)⁵

c : ユーザーが作成するレポート数

d : 共通メッセージログファイルの上限値 (メガバイト)

e : config.xml の logFileName の値

f : config.xml の logFileSize の値

g : jpcrdef, jpcasrec, jpcaspsv, jpcprocdef コマンドで利用するサブコマンド数と jpcrpt, jpcmkkey コマンド (最大数: 13)

W : ヘルスチェックエージェントの Store データベースで使用するディスク占有量

注 1

Master Store サービスの Store データベースを `jpctool db backup` コマンドでバックアップする場合、バックアップ後のデータを格納するためのディスク容量が必要になります。表に示したディスク占有量には含まれていないため、バックアップする場合はこのディスク容量を加算してください。なお、デフォルトでは次のフォルダにバックアップされます。

インストール先フォルダ `¥jplpc¥mgr¥store¥backup¥`

注 2

- Store バージョン 2.0 の場合

ヘルスチェックエージェントの Store データベースを `jpctool db backup` コマンドでフルバックアップ、部分バックアップする場合、また、`jpctool db import` コマンドでインポートする場合、それぞれの操作後のデータを格納するためのディスク容量が必要になります。表に示したディスク占有量には含まれていないため、バックアップする場合はこのディスク容量を加算してください。なお、デフォルトでは次のフォルダにデータが格納されます。

フルバックアップのとき：インストール先フォルダ

`¥jplpc¥agt0¥store¥backup¥`

部分バックアップのとき：インストール先フォルダ

`¥jplpc¥agt0¥store¥partial¥`

インポートのとき：インストール先フォルダ `¥jplpc¥agt0¥store¥import¥`

- Store バージョン 1.0 の場合

ヘルスチェックエージェントの Store データベースを `jpctool db backup` コマンドでバックアップする場合、バックアップ後のデータを格納するためのディスク容量が必要になります。表に示したディスク占有量には含まれていないため、バックアップする場合はこのディスク容量を加算してください。なお、デフォルトでは次のフォルダにバックアップされます。

インストール先フォルダ `¥jplpc¥agt0¥store¥backup¥`

注 3

システムドライブのディスク占有量。例えば、システムドライブが C:、通常のドライブが D: の環境で、D: ドライブに PFM・Web Console をインストールした場合でも、C: ドライブが 140 メガバイト使用されます。

注 4

レポートキャッシュファイル化機能が有効な場合、表中の値とは別にレポートキャッシュファイルのディスク占有量を見積もる必要があります。

レポートキャッシュファイルのディスク占有量の詳細については、「付録 C.6 レポートキャッシュファイルを使用する場合のディスク占有量」を参照してください。

注 5

$a * b * 0.015 < 2000$ (メガバイト) を満たす値を b に設定してください。

(b) UNIX の場合

表 C-4 システム全体のディスク占有量 (UNIX の場合)

プログラム	状態	ディスク占有量 (単位: メガバイト)					
		HP-UX	Solaris	AIX	Linux (Linux Server 6)	Linux (Linux 5 まで, IPF 除 く)	Linux (IPF)
PFM - Manager	インス トール時	500 * 2	260 * 2	470 * 2	260 * 2	260 * 2	-
	標準 ¹ ²	800+0.1 * a+0.015 * a * b+0.01 * c+2 * d+W	560+0.1 * a+0.015 * a * b+0.01 * c+2 * d+W	770+0.1 * a+0.015 * a * b+0.01 * c+2 * d+W	590+0.1 * a+0.015 * a * b+0.01 * c+2 * d+W	560+0.1 * a+0.015 * a * b+0.01 * c+2 * d+W	-
PFM - Web Console	インス トール時	925	715	640	510	550	-
	初期状態 での運用 ³	925+160+ (e * f * g)	715+160 +(e * f * g)	640+160 +(e * f * g)	510+160+(e * f * g)	550+160 +(e * f * g)	-
PFM - Base	インス トール時	240 * 2	50 * 2	220 * 2	70 * 2	70 * 2	80 * 2
	標準	330+2 * d	Solaris (SPARC): 150 +2 * d Solaris (x86 * x64): 150 +2 * d	320+2 * d	210+2 * d	170+2 * d	180+2 * d

(凡例)

a : 接続する PFM - Agent または PFM - RM 数 (インスタンスを起動している場合は, インスタンス数も加える)

b : PA レコードの保存数 (初期状態は 1,000) ⁴

c : ユーザーが作成するレポート数

d : 共通メッセージログファイルの上限値 (メガバイト)

e : config.xml の logFileNumber の値

f : config.xml の logFileSize の値

g: jpcrdef, jpcasrec, jpcaspsv, jpcprocdef コマンドで利用するサブコマンド数と jpcrpt, jpcmkkey コマンド (最大 13)

W: ヘルスチェックエージェントの Store データベースで使用するディスク占有量

- : 未サポート

注 1

Master Store サービスの Store データベースを jpctool db backup コマンドでバックアップする場合、バックアップ後のデータを格納するためのディスク容量が必要になります。表に示したディスク占有量には含まれていないため、バックアップする場合はこのディスク容量を加算してください。なお、デフォルトでは次のフォルダにバックアップされます。

/opt/jplpc/mgr/store/backup/

注 2

- Store バージョン 2.0 の場合

ヘルスチェックエージェントの Store データベースを jpctool db backup コマンドでフルバックアップ、部分バックアップする場合、また、jpctool db import コマンドでインポートする場合、それぞれの操作後のデータを格納するためのディスク容量が必要になります。表に示したディスク占有量には含まれていないため、バックアップする場合はこのディスク容量を加算してください。なお、デフォルトでは次のフォルダにデータが格納されます。

フルバックアップのとき: /opt/jplpc/agt0/store/backup/

部分バックアップのとき: /opt/jplpc/agt0/store/partial/

インポートのとき: /opt/jplpc/agt0/store/import/

- Store バージョン 1.0 の場合

ヘルスチェックエージェントの Store データベースを jpctool db backup コマンドでバックアップする場合、バックアップ後のデータを格納するためのディスク容量が必要になります。表に示したディスク占有量には含まれていないため、バックアップする場合はこのディスク容量を加算してください。なお、デフォルトでは次のフォルダにバックアップされます。

/opt/jplpc/agt0/store/backup/

注 3

レポートキャッシュファイル化機能が有効な場合、表中の値とは別にレポートキャッシュファイルのディスク占有量を見積もる必要があります。

レポートキャッシュファイルのディスク占有量の詳細については、「付録 C.6 レポートキャッシュファイルを使用する場合のディスク占有量」を参照してください。

注 4

a * b * 0.015 < 2000 (メガバイト) を満たす値を b に設定してください。

(c) PFM - Manager のディスク占有量の見積もり例

見積もり例 1

前提条件

- 稼働 OS : Windows Server 2003
- ヘルスチェック機能 : 有効
- ヘルスチェックエージェントの Store バージョン : 2.0

変数の値

表 C-3 に示した変数 a ~ d および W が次の値とします。なお、変数 W の値の算出方法については、「付録 C.4 PFM - Agent 08-00 以降を Store データベース (Store バージョン 2.0) で使用する場合のディスク占有量」を参照してください。

a=100
b=1,000
c=100
d=2
W=100

ディスク占有量の算出式

$$\begin{aligned} & 510 + 0.1 * a + 0.015 * a * b + 0.01 * c + 2 * d + W \\ & = 510 + 0.1 * 100 + 0.015 * 100 * 1000 + 0.01 * 100 + 2 * 2 + 100 \\ & = 510 + 10 + 1500 + 1 + 4 + 100 \\ & = 2125 \text{ (メガバイト)} \end{aligned}$$

見積もり例 2

前提条件

- 稼働 OS : Windows Server 2003
- ヘルスチェック機能 : 有効
- ヘルスチェックエージェントの Store バージョン : 1.0

変数の値

表 C-3 に示した変数 a ~ d および W が次の値とします。なお、変数 W の値の算出方法については、「(2) Store データベースのディスク占有量 (ヘルスチェックエージェント)」を参照してください。

a=100
b=1,000
c=100
d=2
W=50

ディスク占有量の算出式

$$\begin{aligned} & 510 + 0.1 * a + 0.015 * a * b + 0.01 * c + 2 * d + W \\ & = 510 + 0.1 * 100 + 0.015 * 100 * 1000 + 0.01 * 100 + 2 * 2 + 50 \\ & = 510 + 10 + 1500 + 1 + 4 + 50 \\ & = 2075 \text{ (メガバイト)} \end{aligned}$$

見積もり例 3

前提条件

- ・稼働 OS : Windows Server 2003
- ・ヘルスチェック機能 : 無効

変数の値

表 C-3 に示した変数 a ~ d および W が次の値とします。なお、ヘルスチェック機能が無効のため、ヘルスチェックエージェントの Store データベースは使用されません。このため、変数 W の値は 0 になります。

a=100
b=1,000
c=100
d=2
W=0

ディスク占有量の算出式

$$\begin{aligned}
 &510 + 0.1 * a + 0.015 * a * b + 0.01 * c + 2 * d + W \\
 &= 510 + 0.1 * 100 + 0.015 * 100 * 1000 + 0.01 * 100 + 2 * 2 + 0 \\
 &= 510 + 10 + 1500 + 1 + 4 + 0 \\
 &= 2025 \text{ (メガバイト)}
 \end{aligned}$$

(2) Store データベースのディスク占有量 (ヘルスチェックエージェント)

ヘルスチェック機能を使用する場合は、ヘルスチェックエージェントの Store データベースについてもディスク占有量を考慮する必要があります。ヘルスチェックエージェントの Store データベースのディスク容量は Store バージョンによって異なります。ヘルスチェックエージェントでは、Store バージョンのデフォルト値は 2.0 です。Store バージョンが 2.0 の場合のディスク容量の見積みについては「付録 C.4 PFM・Agent 08-00 以降を Store データベース (Store バージョン 2.0) で使用する場合のディスク占有量」を参照してください。ここでは、Store バージョンが 1.0 の場合のディスク占有量を示します。

(a) 見積み式 (Store バージョン 1.0)

Store データベースでは、各レコードは、レコードタイプごとに一つのファイルに格納されます。Store データベース (Store バージョン 1.0) のディスク占有量について、レコードタイプごとに次の表に示します。

表 C-5 レコードタイプごとの Store データベースのディスク占有量

レコードタイプ	ディスク占有量の見積み式 (単位: バイト)
PI レコードタイプ	$(X_1 + \dots + X_a + 3,500 * a)$
PD レコードタイプ	$(Y_1 + \dots + Y_b + 700 * b)$

(凡例)

X : PI レコードタイプのレコードで履歴データを収集する各レコードのディスク占有量

X の算出式を次に示します。

$$X = \{e * f + (d+1,900) * \{(e * f) / (65,250-d) + 1\}^{-1}\} * g * 1.5$$

Y : PD レコードタイプのレコードで履歴データを収集する各レコードのディスク占有量

Y の算出式を次に示します。

$$Y = \{e * h + (d+1,900) * \{(e * f) / (65,250-d) + 1\}^{-1} * (h/f)^{-2}\} * 1.5$$

a : PI レコードタイプのレコードで履歴データを収集するレコード数

b : PD レコードタイプのレコードで履歴データを収集するレコード数

d : 履歴データを収集する各レコードの固定部のサイズ³

e : 履歴データを収集する各レコードの可変部のサイズ³

f : 履歴データを収集する各レコードのインスタンス数（単数インスタンスレコードの場合は 1）⁵

g : 履歴データを収集する各レコードの保存レコード数（インスタンス数は考慮しません）⁴

h : 履歴データを収集する各レコードの保存レコード数の上限値

注 1

$\{(e * f) / (65,250-d) + 1\}$ の計算結果は、小数点以下を切り捨ててください。

注 2

(h/f) の計算結果は、小数点以下を切り捨ててください。

注 3

各レコードの固定部・可変部のサイズについては、「付録 H.1 データモデル」のレコードサイズを参照してください。

注 4

PI レコードタイプのレコードの場合、収集したデータがある一定の区分（時、日、週、月、および年単位）に自動的に要約されるので、分、時、日、週、月、および年の部分の保存レコード数を考慮して計算する必要があります。デフォルトの保存期間と保存レコード数を次の表に示します。

データの種類	保存期間	保存レコード数 （収集間隔が 1 分の場合）
分単位	1 日	1,440
時単位	7 日	168
日単位	1 年	366
週単位	1 年	52
月単位	1 年	12
年単位	制限なし	（収集年数）* 1

注 5

各レコードのインスタンス数について次の表に示します。

表 C-6 各レコードのインスタンス数

レコード ID	コマンド	備考
PI_HAVL	jpctool service list -id "?A*" -host ""	このコマンドによって表示されるホスト名 の数
PD_HC	jpctool service list -id "?A*" -host ""	このコマンドによって表示される Agent Collector および Remote Monitor Collector サービスの数
PD_HOST	jpctool service list -id "?A*" -host ""	このコマンドによって表示されるホスト名 の数

(b) 見積もり例

見積もり例 1

PI レコードタイプの Host Availability(PI_HAVL) について、PI_HAVL 以外の PI レコードタイプを保存設定していない場合。表 C-5 に示した変数 a ~ g が次の値とします。

a=1
d=681
e=292
f=25
g=2,039

(f の求め方)

表 C-6 からレコードのインスタンス数を求めることができます。今回は f=25 とします。

(g の求め方)

PI_HAVL の収集間隔を 5 分、年単位の収集年数を 1 年として、保存期間の設定が表 C-5 の注 4 のとおりである場合。

$288+168+366+52+12+1=887$ レコード
g=887

X の算出式

$$\begin{aligned} X &= \{e * f + (d+1,900) * \{e * f / (65,250-d) + 1\}\} * g * 1.5 \\ X &= \{292 * 25 + (681+1,900) * \{292 * 25 / (65,250-681) + 1\}\} * 887 * 1.5 \\ &= \{7,300 + (2,581) * \{7,300 / 64,569 + 1\}\} * 1330.5 \\ &= \{7,300 + 2,581 * 1\} * 1330.5 \\ &= 9,881 * 1330.5 \\ &= 13,146,671 \text{ (バイト)} \\ &= \text{約} 12.5 \text{ (メガバイト)} \end{aligned}$$

見積もり例 2

PD レコードタイプの Health Check Detail(PD_HC) について、PD_HC 以外の PD レコードタイプを保存設定していない場合。

b=1
d=716
e=988

f=25
h=15,000

(fの求め方)

表 C-6 のレコードに対応するパフォーマンスオブジェクトのインスタンス数を参照してください。今回は f=3 とします。

(hの求め方)

保存期間の設定のデフォルトは 10,000 レコードです。
今回は保存期間の設定を 15,000 レコードと設定します。

Y の算出式

$$\begin{aligned} Y &= \{e * h + (d+1,900) * \{(e * f) / (65,250-d) + 1\} * (h/f)\} * 1.5 \\ Y &= \{988 * 15,000 + (716+1,900) * \{(988 * 25) / (65,250-716) + 1\} * \\ &\quad (15,000/25)\} * 1.5 \\ &= \{988 * 15,000 + 2,616 * \{24,700/64,534 + 1\} * 600\} * 1.5 \\ &= \{14,820,000 + 2,616 * 1 * 744\} * 1.5 \\ &= \{14,820,000 + 1,202,304\} * 1.5 \\ &= 16,022,304 * 1.5 \\ &= 24,033,456 \text{ (バイト)} \\ &= \text{約} 23 \text{ (メガバイト)} \end{aligned}$$

(3) Store データベースに対する jpctool db backup コマンド・jpctool db dump コマンド実行時に必要なディスク占有量

PFM・Manager の Master Store サービスおよびヘルスチェックエージェントの Store データベースでの作業に必要なディスク占有量については、「付録 C.5 Store データベースに対する jpctool db backup コマンド・jpctool db dump コマンド実行時に必要なディスク占有量」を参照してください。

付録 C.3 クラスタシステムで運用する場合のディスク占有量

クラスタシステムで運用する場合の共有ディスクに必要なディスク占有量を、OS ごとに示します。

(1) 共有ディスクのディスク占有量

(a) Windows の場合

表 C-7 共有ディスクのディスク占有量 (Windows の場合)

プログラム	ディスク占有量の見積もり式 (単位: メガバイト)
PFM・Manager ¹ ²	$306 + 0.1 * a + 0.015 * a * b + 0.01 * c + 2 * d + W$
PFM・Web Console	10
PFM・Base	$25 + 2 * d$

(凡例)

- a: 接続する PFM - Agent または PFM - RM 数 (インスタンスを起動している場合は, インスタンス数も加える)
- b: PA レコードの保存数 (初期状態は 1,000) ³
- c: ユーザーが作成するレポート数
- d: ログファイルの上限値 (メガバイト)
- W: ヘルスチェックエージェントの Store データベースで使用するディスク占有量

注 1

Master Store サービスの Store データベースを `jpctool db backup` コマンドでバックアップする場合, バックアップ後のデータを格納するためのディスク容量が必要になります。表に示したディスク占有量には含まれていないため, バックアップする場合はこのディスク容量を加算してください。なお, デフォルトでは次のフォルダにバックアップされます。

環境ディレクトリ `¥jplpc¥mgr¥store¥backup¥`

注 2

• Store バージョン 2.0 の場合

ヘルスチェックエージェントの Store データベースを `jpctool db backup` コマンドでフルバックアップ, 部分バックアップする場合, また, `jpctool db import` コマンドでインポートする場合, それぞれの操作後のデータを格納するためのディスク容量が必要になります。表に示したディスク占有量には含まれていないため, バックアップする場合はこのディスク容量を加算してください。なお, デフォルトでは次のフォルダにデータが格納されます。

フルバックアップのとき: 環境ディレクトリ `¥jplpc¥agt0¥store¥backup¥`

部分バックアップのとき: 環境ディレクトリ `¥jplpc¥agt0¥store¥partial¥`

インポートのとき: 環境ディレクトリ `¥jplpc¥agt0¥store¥import¥`

• Store バージョン 1.0 の場合

ヘルスチェックエージェントの Store データベースを `jpctool db backup` コマンドでバックアップする場合, バックアップ後のデータを格納するためのディスク容量が必要になります。表に示したディスク占有量には含まれていないため, バックアップする場合はこのディスク容量を加算してください。なお, デフォルトでは次のフォルダにバックアップされます。

環境ディレクトリ `¥jplpc¥agt0¥store¥backup¥`

注 3

- a * b * 0.015 < 2000 (メガバイト) を満たす値を b に設定してください。

(b) UNIX の場合

表 C-8 共有ディスクのディスク占有量 (UNIX の場合)

プログラム	ディスク占有量の見積もり式 (単位: メガバイト)			
	HP-UX	Solaris	AIX	Linux
PFM - Manager ¹ 2	$306+0.1 * a+0.015 * a * b+0.01 * c+2 * d+W$	$306+0.1 * a+0.015 * a * b+0.01 * c+2 * d+W$	$306+0.1 * a+0.015 * a * b+0.01 * c+2 * d+W$	$306+0.1 * a+0.015 * a * b+0.01 * c+2 * d+W$
PFM - Web Console	10	10	10	10
PFM - Base	$25+2 * d$	$25+2 * d$	$25+2 * d$	$25+2 * d$

(凡例)

a: 接続する PFM - Agent または PFM - RM 数 (インスタンスを起動している場合は, インスタンス数も加える)

b: PA レコードの保存数 (初期状態は 1,000)³

c: ユーザーが作成するレポート数

d: ログファイルの上限値 (メガバイト)

W: ヘルスチェックエージェントの Store データベースで使用するディスク占有量

注 1

Master Store サービスの Store データベースを `jpctool db backup` コマンドでバックアップする場合, バックアップ後のデータを格納するためのディスク容量が必要になります。表に示したディスク占有量には含まれていないため, バックアップする場合はこのディスク容量を加算してください。なお, デフォルトでは次のフォルダにバックアップされます。

環境ディレクトリ `/jplpc/mgr/store/backup/`

注 2

• Store バージョン 2.0 の場合

ヘルスチェックエージェントの Store データベースを `jpctool db backup` コマンドでフルバックアップ, 部分バックアップする場合, また, `jpctool db import` コマンドでインポートする場合, それぞれの操作後のデータを格納するためのディスク容量が必要になります。表に示したディスク占有量には含まれていないため, バックアップする場合はこのディスク容量を加算してください。なお, デフォルトでは次のフォルダにデータが格納されます。

フルバックアップのとき: 環境ディレクトリ `/jplpc/agt0/store/backup/`

部分バックアップのとき: 環境ディレクトリ `/jplpc/agt0/store/partial/`

インポートのとき：環境ディレクトリ /jplpc/agt0/store/import/

- Store バージョン 1.0 の場合

ヘルスチェックエージェントの Store データベースを jpctool db backup コマンドでバックアップする場合、バックアップ後のデータを格納するためのディスク容量が必要になります。表に示したディスク占有量には含まれていないため、バックアップする場合はこのディスク容量を加算してください。なお、デフォルトでは次のフォルダにバックアップされます。

環境ディレクトリ /jplpc/agt0/store/backup/

注 3

$a * b * 0.015 < 2000$ (メガバイト) を満たす値を b に設定してください。

(c) クラスタシステムで運用する場合の PFM - Manager のディスク占有量の見積もり例

クラスタシステムで運用する場合は、共有ディスクおよび各ノードのローカルディスクのディスク占有量を見積もってください。

PFM - Manager をクラスタシステムで運用する場合のディスク占有量の見積もり例を次に示します。なお、この場合はヘルスチェックエージェントも論理ホストで稼働します。

見積もり例 1

前提条件

- 稼働 OS : Windows Server 2003
- ヘルスチェック機能 : 有効
- ヘルスチェックエージェントの Store バージョン : 2.0
- 共有ディスクのディスク占有量の見積もり例

変数の値

表 C-7 に示した変数 $a \sim d$ および W が次の値とします。なお、変数 W の値の算出方法については、「付録 C.4 PFM - Agent 08-00 以降を Store データベース (Store バージョン 2.0) で使用する場合はディスク占有量」を参照してください。

$a=100$
 $b=1,000$
 $c=100$
 $d=2$
 $W=100$

共有ディスクのディスク占有量の算出式

表 C-7 に示した見積もり式を使用して算出します。

$306 + 0.1 * a + 0.015 * a * b + 0.01 * c + 2 * d + W$
 $= 306 + 0.1 * 100 + 0.015 * 100 * 1000 + 0.01 * 100 + 2 * 2 + 100$
 $= 306 + 10 + 1500 + 1 + 4 + 100$
 $= 1921$ (メガバイト)

- ローカルディスクのディスク占有量の見積もり例

変数の値

表 C-3 に示した変数 $a \sim d$ および W が次の値とします。クラスタ運用時のローカル

ディスクのディスク占有量を算出する場合、変数 a, b, c, W は 0 として計算してください。

$a=0$
 $b=0$
 $c=0$
 $d=2$
 $W=0$

ローカルディスクのディスク占有量の算出式

表 C-3 に示した見積もり式を使用して算出します。

$$\begin{aligned} & 510 + 0.1 * a + 0.015 * a * b + 0.01 * c + 2 * d + W \\ &= 510 + 0.1 * 0 + 0.015 * 0 * 0 + 0.01 * 0 + 2 * 2 + 0 \\ &= 510 + 0 + 0 + 0 + 4 + 0 \\ &= 514 \text{ (メガバイト)} \end{aligned}$$

見積もり例 2

前提条件

- 稼働 OS : Windows Server 2003
- ヘルスチェック機能 : 有効
- ヘルスチェックエージェントの Store バージョン : 1.0
- 共有ディスクのディスク占有量の見積もり例

変数の値

表 C-7 に示した変数 $a \sim d$ および W が次の値とします。なお、変数 W の値の算出方法については、「付録 C.2(2) Store データベースのディスク占有量 (ヘルスチェックエージェント)」を参照してください。

$a=100$
 $b=1,000$
 $c=100$
 $d=2$
 $W=50$

共有ディスクのディスク占有量の算出式

表 C-7 に示した見積もり式を使用して算出します。

$$\begin{aligned} & 306 + 0.1 * a + 0.015 * a * b + 0.01 * c + 2 * d + W \\ &= 306 + 0.1 * 100 + 0.015 * 100 * 1000 + 0.01 * 100 + 2 * 2 + 50 \\ &= 306 + 10 + 1500 + 1 + 4 + 50 \\ &= 1871 \text{ (メガバイト)} \end{aligned}$$

- ローカルディスクのディスク占有量の見積もり例

変数の値

表 C-3 に示した変数 $a \sim d$ および W が次の値とします。クラスタ運用時のローカルディスクのディスク占有量を算出する場合、変数 a, b, c, W は 0 として計算してください。

$a=0$
 $b=0$
 $c=0$
 $d=2$
 $W=0$

ローカルディスクのディスク占有量の算出式

表 C-3 に示した見積もり式を使用して算出します。

$$\begin{aligned}
 &510 + 0.1 * a + 0.015 * a * b + 0.01 * c + 2 * d + W \\
 &= 510 + 0.1 * 0 + 0.015 * 0 * 0 + 0.01 * 0 + 2 * 2 + 0 \\
 &= 510 + 0 + 0 + 0 + 4 + 0 \\
 &= 514 \text{ (メガバイト)}
 \end{aligned}$$

見積もり例 3

前提条件

- 稼働 OS : Windows Server 2003
- ヘルスチェック機能 : 無効
- 共有ディスクのディスク占有量の見積もり例

変数の値

表 C-7 に示した変数 a ~ d および W が次の値とします。なお、ヘルスチェック機能が無効のため、ヘルスチェックエージェントの Store データベースは使用されません。このため、変数 W の値は 0 になります。

a=100
 b=1,000
 c=100
 d=2
 W=0

共有ディスクのディスク占有量の算出式

表 C-7 に示した見積もり式を使用して算出します。

$$\begin{aligned}
 &306 + 0.1 * a + 0.015 * a * b + 0.01 * c + 2 * d + W \\
 &= 306 + 0.1 * 100 + 0.015 * 100 * 1000 + 0.01 * 100 + 2 * 2 + 0 \\
 &= 306 + 10 + 1500 + 1 + 4 + 0 \\
 &= 1821 \text{ (メガバイト)}
 \end{aligned}$$

- ローカルディスクのディスク占有量の見積もり例

変数の値

表 C-3 に示した変数 a ~ d および W が次の値とします。クラスタ運用時のローカルディスクのディスク占有量を算出する場合、変数 a, b, c, W は 0 として計算してください。

a=0
 b=0
 c=0
 d=2
 W=0

ローカルディスクのディスク占有量の算出式

表 C-3 に示した見積もり式を使用して算出します。

$$\begin{aligned}
 &510 + 0.1 * a + 0.015 * a * b + 0.01 * c + 2 * d + W \\
 &= 510 + 0.1 * 0 + 0.015 * 0 * 0 + 0.01 * 0 + 2 * 2 + 0 \\
 &= 510 + 0 + 0 + 0 + 4 + 0 \\
 &= 514 \text{ (メガバイト)}
 \end{aligned}$$

(2) Store データベースに対する jpctool db backup コマンド・jpctool db dump コマンド実行時に必要なディスク占有量

PFM・Manager の Master Store サービスおよびヘルスチェックエージェントの Store データベースでの作業に必要な共有ディスクのディスク占有量については、「付録 C.5 Store データベースに対する jpctool db backup コマンド・jpctool db dump コマンド実行時に必要なディスク占有量」を参照してください。

付録 C.4 PFM - Agent 08-00 以降を Store データベース (Store バージョン 2.0) で使用する場合のディスク占有量

PFM・Agent 08-00 以降を Store データベース (Store バージョン 2.0) で使用する場合のディスク占有量について説明します。

(1) 見積もり式

ディスク占有量、ファイル数、およびディレクトリ数の見積もりについて説明します。

(a) ディスク占有量

Store データベースのディスク占有量は、レコードタイプごとのディスク占有量の総和となります。PI レコードタイプについては、さらに要約区分ごとのディスク占有量の総和となります。

注意

パフォーマンスデータが Store データベースに格納される際、幾つかのフィールドが追加されます。追加されるフィールドは、ディスク占有量に含まれるため、新たに容量を見積もる必要はありません。各レコードに共通して追加されるフィールドは Store バージョン 1.0 と同じです。詳細については、PFM・Agent マニュアルを参照してください。

レコードタイプごとのディスク占有量 X の見積もり式 (単位: バイト)

$$X = \{ (e+2) * f' + (d+60) * \{ ((e+2) * f') / (65,250-d) + 1 \}^{1.1} \} * a/b * (c+1) * 1.1$$

a: レコードタイプ、要約区分ごとに値が異なります。表 C-9 を参照してください。

b: レコードタイプ、要約区分ごとに値が異なります。表 C-9 を参照してください。

2

c: 履歴データの保存期間設定値³。レコードタイプ、要約区分ごとに指定する単位が異なります。単位については表 C-9 を参照してください。

d: 履歴データを収集する各レコードの固定部のサイズ⁴

e: 履歴データを収集する各レコードの可変部のサイズ⁴

f: 履歴データを収集する各レコードのインスタンス数 (単数インスタンスレコード

の場合は 1) ⁵

$f : f$ が 2 以上の場合, 4 の倍数に丸め込みます。例えば, $f=2$ の場合は, $f=4$ となります。 $f=13$ の場合は, $f=16$ となります。 $f=1$ の場合は, $f=1$ となります。

表 C-9 a, b, および c に設定する値

レコードタイプ	要約区分	a	b	c
PI	分	1,440	$1+(g-1)/60^2$	保存期間 (単位: 日)
	時	24	$1+(g-1)/3,600^2$	保存期間 (単位: 日)
	日	7	$1+(g-1)/86,400^2$	保存期間 (単位: 週)
	週	1	$1+(g-1)/604,800^2$	保存期間 (単位: 週)
	月	1	$1+(g-1)/2,592,000^2$	保存期間 (単位: 月)
	年	1	$1+(g-1)/31,622,400^2$	保存期間 (単位: 年)
PD	-	1,440	$g/60$	保存期間 (単位: 日)
PL	-	1,440	$g/60$	保存期間 (単位: 日)

(凡例)

g : 履歴データの収集インターバル設定値 (単位: 秒)

- : 該当しない。

注 1

$\{((e+2) * f)/(65,250-d)+1\}$ の計算結果は, 小数点以下を切り捨ててください。

注 2

PI レコードタイプの b の計算結果は, 小数点以下を切り捨ててください。

注 3

PFM - Agent 08-00 を Store バージョン 2.0 で使用する場合は保存期間は Store バージョン 1.0 で使用していた際の設定に依存します。詳細は「JP1/ Performance Management リファレンス」の, `jpccconf db vrset` コマンドについて説明している個所を参照してください。

注 4

各レコードの固定部・可変部のサイズについては, Store バージョン 1.0 と同じです。詳細は各 PFM - Agent マニュアルを参照してください。

注 5

レコードごとのインスタンス数については, Store バージョン 1.0 と同じです。詳細は各 PFM - Agent マニュアルを参照してください。

(b) ファイル数

Store データベースで作成されるファイル数 N の見積もり式を次に示します。

$$N = 20 + 2 * ((A11 + A12 + \dots + A1m + m) + (A21 + A22 + \dots + A2m + m) + (A31 + A32 + \dots + A3m + m) + (A41 + A42 + \dots + A4m + m) + (A51 + A52 + \dots + A5m + m) + (11 * m) + (B1 + B2 + \dots + Bn + n) + (C1 + C2 + \dots + Co + o))$$

m : PI レコードタイプで収集しているレコードの数

n : PD レコードタイプで収集しているレコードの数

o : PL レコードタイプの収集しているレコードの数

A11 ~ A1m : PI レコードタイプのレコードごとの分レコードの保存期間設定値 (単位 : 日)

A21 ~ A2m : PI レコードタイプのレコードごとの時レコードの保存期間設定値 (単位 : 日)

A31 ~ A3m : PI レコードタイプのレコードごとの日レコードの保存期間設定値 (単位 : 週)

A41 ~ A4m : PI レコードタイプのレコードごとの週レコードの保存期間設定値 (単位 : 週)

A51 ~ A5m : PI レコードタイプのレコードごとの月レコードの保存期間設定値 (単位 : 月)

B1 ~ Bn : PD レコードタイプのレコードごとの保存期間設定値 (単位 : 日)

C1 ~ Co : PL レコードタイプのレコードごとの保存期間設定値 (単位 : 日)

(c) ディレクトリ数

Store データベースで作成されるディレクトリ数 N の見積もり式を次に示します。

$$N = 25 + 2 * ((A1max) + (A2max) + (A3max) + (A4max) + (A5max) + 11 + (Bmax) + (Cmax))$$

A1max : PI レコードタイプで収集しているレコードの要約区分が「分」のデータの保存期間設定値の最大値 (単位 : 日)

A2max : PI レコードタイプで収集しているレコードの要約区分が「時」のデータの保存期間設定値の最大値 (単位 : 日)

A3max : PI レコードタイプで収集しているレコードの要約区分が「日」のデータの保存期間設定値の最大値 (単位 : 週)

A4max : PI レコードタイプで収集しているレコードの要約区分が「週」のデータの保存期間設定値の最大値 (単位: 週)

A5max : PI レコードタイプで収集しているレコードの要約区分が「月」のデータの保存期間設定値の最大値 (単位: 月)

Bmax : PD レコードタイプのレコードごとの保存期間設定値の最大値 (単位: 日)

Cmax : PL レコードタイプのレコードごとの保存期間設定値の最大値 (単位: 日)

(d) Store サービスがオープンするファイル数

Store サービスがオープンするファイル数 N の見積もり式を次に示します。

$$N = 20 + 2 * (6 * l + m + n)$$

l : PI レコードタイプで収集しているレコードの数

m : PD レコードタイプで収集しているレコードの数

n : PL レコードタイプの収集しているレコードの数

(2) 見積もり例

見積もり例として PFM - Agent for Platform で Store データベース (Store バージョン 2.0) を使用した場合について説明します。

(a) ディスク占有量

PI_LOGD レコードと PD レコードを収集する設定にした場合を例に挙げて説明します。

PI_LOGD レコードの見積もりについて説明します。「(1) 見積もり式」の見積もり式で示した変数が次の値とします。

d=681 (バイト)
e=700 (バイト)
f=3
f'=4
g=60 (秒)

次に、分レコード、時レコードなどそれぞれの計算を行います。

分レコード

変数を次の値とします。

a=1,440
b=1+(60-1)/60
=1.98...
=1 (小数点以下切り捨て)
c=3 (日)

見積もり式を次に示します。

$$\begin{aligned} X(\text{分}) &= \{ (700+2) * 4 + (681+60) * \{ ((700+2) * 4) / (65,250-681) + 1 \} \} \\ &\quad * 1,440 / 1 * (3+1) * 1.1 \\ &= \{ 2,808 + 741 * 1 \} * 6,336 \end{aligned}$$

$$=3,549 * 6,336$$

$$=22,486,464 \text{ (バイト)} = \text{約} 21 \text{ (メガバイト)}$$

時レコード

変数を次の値とします。

$$a=24$$

$$b=1+(60-1)/3,600$$

$$=1.01\dots$$

$$=1 \text{ (小数点以下切り捨て)}$$

$$c=3 \text{ (日)}$$

見積もり式を次に示します。

$$X(\text{時}) = \{ (700+2) * 4 + (681+60) * \{ ((700+2) * 4) / (65,250-681) + 1 \} \}$$

$$* 24 / 1 * (3+1) * 1.1$$

$$= \{ 2,808 + 741 * 1 \} * 105.6$$

$$= 3,549 * 105.6$$

$$= 374,774.4 \text{ (バイト)} = \text{約} 0.4 \text{ (メガバイト)}$$

日レコード

変数を次の値とします。

$$a=7$$

$$b=1+(60-1)/86,400$$

$$=1.00\dots$$

$$=1 \text{ (小数点以下切り捨て)}$$

$$c=1 \text{ (週)}$$

見積もり式を次に示します。

$$X(\text{日}) = \{ (700+2) * 4 + (681+60) * \{ ((700+2) * 4) / (65,250-681) + 1 \} \}$$

$$* 7 / 1 * (1+1) * 1.1$$

$$= \{ 2,808 + 741 * 1 \} * 15.4$$

$$= 3,549 * 15.4$$

$$= 54,654.6 \text{ (バイト)} = \text{約} 0.05 \text{ (メガバイト)}$$

週レコード

変数を次の値とします。

$$a=1$$

$$b=1+(60-1)/604,800$$

$$=1.00\dots$$

$$=1 \text{ (小数点以下切り捨て)}$$

$$c=1 \text{ (週)}$$

見積もり式を次に示します。

$$X(\text{週}) = \{ (700+2) * 4 + (681+60) * \{ ((700+2) * 4) / (65,250-681) + 1 \} \}$$

$$* 1 / 1 * (1+1) * 1.1$$

$$= \{ 2,808 + 741 * 1 \} * 2.2$$

$$= 3,549 * 2.2$$

$$= 7,807.8 \text{ (バイト)} = \text{約} 0.007 \text{ (メガバイト)}$$

月レコード

変数を次の値とします。

$$a=1$$

$$b=1+(60-1)/2,592,000$$

$$=1.00\dots$$

$$=1 \text{ (小数点以下切り捨て)}$$

$$c=1 \text{ (月)}$$

見積もり式を次に示します。

$$\begin{aligned} X(\text{月}) &= \{ (700+2) * 4 + (681+60) * \{ ((700+2) * 4) / (65,250-681) + 1 \} \} \\ &\quad * 1/1 * (1+1) * 1.1 \\ &= \{ 2,808 + 741 * 1 \} * 2.2 \\ &= 3,549 * 2.2 \\ &= 7,807.8 (\text{バイト}) = \text{約} 0.007 (\text{メガバイト}) \end{aligned}$$

年レコード

変数を次の値とします。

$$\begin{aligned} a &= 1 \\ b &= 1 + (60-1) / 31,622,400 \\ &= 1.00... \\ &= 1 (\text{小数点以下切り捨て}) \\ c &= 10 (\text{固定}) \end{aligned}$$

見積もり式を次に示します。

$$\begin{aligned} X(\text{年}) &= \{ (700+2) * 4 + (681+60) * \{ ((700+2) * 4) / (65,250-681) + 1 \} \} \\ &\quad * 1/1 * (10+1) * 1.1 \\ &= \{ 2,808 + 741 * 1 \} * 12.1 \\ &= 3,549 * 12.1 \\ &= 42,942.9 (\text{バイト}) = \text{約} 0.04 (\text{メガバイト}) \end{aligned}$$

以上から、PI_LOGD レコードの見積もりは次のようになります。

$$\begin{aligned} X(\text{合計}) &= X(\text{分}) + X(\text{時}) + X(\text{日}) + X(\text{週}) + X(\text{月}) + X(\text{年}) \\ &= 21.504 (\text{メガバイト}) \\ &= \text{約} 22 (\text{メガバイト}) \end{aligned}$$

次に PD レコードの見積もりについて説明します。

変数を次の値とします。

$$\begin{aligned} a &= 1,400 \\ b &= 60/60 = 1 \\ c &= 10 (\text{日}) \\ d &= 681 (\text{バイト}) \\ e &= 472 (\text{バイト}) \\ f &= 10 \\ f' &= 12 \\ g &= 60 (\text{秒}) \end{aligned}$$

見積もり式を次に示します。

$$\begin{aligned} X &= \{ (472+2) * 12 + (681+60) * \{ ((472+2) * 12) / (65,250-681) + 1 \} \} \\ &\quad * 1,400/1 * (10+1) * 1.1 \\ &= \{ 5,688 + 741 * 1 \} * 17,424 \\ &= 6,429 * 17,424 \\ &= 112,018,896 (\text{バイト}) = \text{約} 107 (\text{メガバイト}) \end{aligned}$$

したがって、必要なディスク占有量は PI_LOGD+PD=129 メガバイトとなります。

(b) ファイル数

PI, PI_LOGD, PD, および PD_PDI レコードを収集する場合を例に挙げて説明します。「(1) 見積もり式」の見積もり式で示した変数が次の値とします。

m=2
n=2
o=なし
A11 ~ A1m=3 (日)
A21 ~ A2m=3 (日)
A31 ~ A3m=1 (週)
A41 ~ A4m=1 (週)
A51 ~ A5m=1 (月)
B1 ~ Bn=10 (日)
C1 ~ Co=不要

Store データベースで作成されるファイル数 N の見積もり式を次に示します。

$$\begin{aligned}
 N &= 20 + 2 * (\\
 &\quad (A11 + A12 + \dots + A1m + m) + \\
 &\quad (A21 + A22 + \dots + A2m + m) + \\
 &\quad (A31 + A32 + \dots + A3m + m) + \\
 &\quad (A41 + A42 + \dots + A4m + m) + \\
 &\quad (A51 + A52 + \dots + A5m + m) + \\
 &\quad (11 * m) + \\
 &\quad (B1 + B2 + \dots + Bn + n) + \\
 &\quad (C1 + C2 + \dots + Co + o) \\
 &\quad) \\
 &= 20 + 2 * \{ \\
 &\quad [3 (PI分) + 3 (PI_LOGD分) + 2] + \\
 &\quad [3 (PI分) + 3 (PI_LOGD分) + 2] + \\
 &\quad [1 (PI分) + 1 (PI_LOGD分) + 2] + \\
 &\quad [1 (PI分) + 1 (PI_LOGD分) + 2] + \\
 &\quad [1 (PI分) + 1 (PI_LOGD分) + 2] + \\
 &\quad [11 * 2] + \\
 &\quad [10 (PD分) + 10 (PD_PDI分) + 2] \\
 &\quad \} \\
 &= 20 + 2 * \{ 8 + 8 + 4 + 4 + 22 + 22 \} \\
 &= 20 + 2 * 72 = 20 + 144 = 164
 \end{aligned}$$

(c) ディレクトリ数

PI, PI_LOGD, PD, および PD_PDI レコードを収集する場合を例に挙げて説明します。

「(1) 見積もり式」のディレクトリ数の見積もり式で示した変数が次の値とします。

A1max=3 (日) (考え方: PIが2日, PI_LOGDが3日の場合は3日となります。)
A2max=3 (日)
A3max=1 (週)
A4max=1 (週)
A5max=1 (月)
Bmax=10 (日) (考え方: PD_PDIが8日, PDが10日の場合は10日となります。)
Cmax=なし

Store データベースで作成されるディレクトリ数 N の見積もり式を次に示します。

$$\begin{aligned}
 N &= 25 + 2 * ((A1max) + (A2max) + (A3max) + (A4max) + (A5max) + 11 + (Bmax) + (Cmax)) \\
 &= 25 + 2 * (3 + 3 + 1 + 1 + 1 + 11 + 10 + 0) = 85
 \end{aligned}$$

(d) Store サービスがオープンするファイル数

PI, PI_LOGD, PD, および PD_PDI レコードを収集する場合を例に挙げて説明しま

す。

「(1) 見積もり式」の見積もり式で示した変数が次の値とします。

l=2
m=2
n=0

Store サービスがオープンするファイル数 N の見積もり式を次に示します。

$$\begin{aligned} N &= 20 + 2 * (6 * l + m + n) \\ &= 20 + 2 * (6 * 2 + 2 + 0) = 48 \end{aligned}$$

付録 C.5 Store データベースに対する jpctool db backup コマンド・jpctool db dump コマンド実行時に必要なディスク占有量

(1) Master Store サービスの場合

PFM・Manager の Master Store サービスの Store データベースに対して jpctool db backup コマンドおよび jpctool db dump コマンドを実行する場合に必要なディスク占有量を、OS ごとに示します。

(a) Windows の場合

表 C-10 Master Store サービスの Store データベースでの作業に必要なディスク占有量
(Windows の場合)

作業	ディスク占有量の見積もり式 (単位: メガバイト)
Store データベースのバックアップ (jpctool db backup コマンドの実行)	$2 * (1 + 0.1 * a + 0.015 * a * b)$
Store データベースのエクスポート (jpctool db dump コマンドの実行)	$2 * (1 + 0.1 * a + 0.015 * a * b)$

(凡例)

a: 接続する PFM・Agent または PFM・RM 数 (インスタンスを起動している場合は、インスタンス数も加える)

b: PA レコードの保存数 (初期状態は 1,000)

注

$a * b * 0.015 < 2000$ (メガバイト) を満たす値を b に設定してください。

なお、デフォルトでは次に示すディスク領域を使用します。

作業	使用ディスク領域（デフォルトの場合）	
	物理ホスト運用時	論理ホスト運用時
Store データベースのバックアップ (jpctool db backup コマンドの実行)	インストール先フォルダ ¥jplpc¥mgr¥store¥backup¥ 配下	環境ディレクトリ ¥jplpc¥mgr¥store¥backup¥ 配下
Store データベースのエクスポート (jpctool db dump コマンドの実行)	インストール先フォルダ ¥jplpc¥mgr¥store¥dump¥ 配下	環境ディレクトリ ¥jplpc¥mgr¥store¥dump¥ 配下

(b) UNIX の場合

表 C-11 Master Store サービスの Store データベースでの作業に必要なディスク占有量
(UNIX の場合)

作業	ディスク占有量の見積もり式（単位：メガバイト）			
	HP-UX	Solaris	AIX	Linux
Store データベースのバックアップ (jpctool db backup コマンドの実行)	$2 * (1+0.1 * a+0.015 * a * b)$	$2 * (1+0.1 * a+0.015 * a * b)$	$2 * (1+0.1 * a+0.015 * a * b)$	$2 * (1+0.1 * a+0.015 * a * b)$
Store データベースのエクスポート (jpctool db dump コマンドの実行)	$2 * (1+0.1 * a+0.015 * a * b)$	$2 * (1+0.1 * a+0.015 * a * b)$	$2 * (1+0.1 * a+0.015 * a * b)$	$2 * (1+0.1 * a+0.015 * a * b)$

(凡例)

a：接続する PFM・Agent または PFM・RM 数（インスタンスを起動している場合は、インスタンス数も加える）

b：PA レコードの保存数（初期状態は 1,000）

注

$a * b * 0.015 < 2000$ （メガバイト）を満たす値を b に設定してください。

なお、デフォルトでは次に示すディスク領域を使用します。

作業	使用ディスク領域（デフォルトの場合）	
	物理ホスト運用時	論理ホスト運用時
Store データベースのバックアップ (jpctool db backup コマンドの実行)	/opt/jplpc/mgr/store/backup/ 配下	環境ディレクトリ /jplpc/mgr/store/backup/ 配下

作業	使用ディスク領域（デフォルトの場合）	
	物理ホスト運用時	論理ホスト運用時
Store データベースの エクスポート (jpctool db dump コマンドの実行)	/opt/jp1pc/mgr/store/dump/ 配下	環境ディレクトリ /jp1pc/ mgr/store/dump/ 配下

(2) PFM - Agent または PFM - RM の場合

PFM - Agent または PFM - RM の Store データベースに対して jpctool db backup コマンドおよび jpctool db dump コマンドを実行する場合に必要なディスク占有量を、Store バージョンごとに示します。

(a) Store バージョン 2.0 の場合

表 C-12 PFM - Agent または PFM - RM の Store データベースでの作業に必要なディスク占有量（Store バージョン 2.0 の場合）

作業	ディスク占有量の見積もり式（単位：メガバイト）
Store データベースのフルバックアップ (jpctool db backup コマンドの実行)	S
Store データベースの部分バックアップ (jpctool db backup コマンドに -partial オプションを付けて実行)	S のうち、-partial オプションでバックアップ対象に指定した期間およびレコード範囲分
Store データベースのエクスポート (jpctool db dump コマンドの実行)	S のうち、エクスポート対象に指定した期間およびレコード範囲分

(凡例)

S：PFM - Agent または PFM - RM の Store データベースで使用するディスク占有量

注

変数 S の値の算出方法については、「付録 C.4 PFM - Agent 08-00 以降を Store データベース（Store バージョン 2.0）で使用する場合のディスク占有量」を参照してください。

なお、デフォルトでは次に示すディスク領域を使用します。ここでは OS ごとに表に示します。

表 C-13 デフォルトの使用ディスク領域 (Windows の場合)

作業	エージェントの種類	使用ディスク領域 (デフォルトの場合)	
		物理ホスト運用時	論理ホスト運用時
Store データベースのフルバックアップ (jpctool db backup コマンドの実行)	シングルインスタンスエージェント	インストール先フォルダ ¥jplpc¥agtX¥store¥backup¥ 配下	環境ディレクトリ ¥jplpc¥agtX¥store¥backup¥ 配下
	マルチインスタンスエージェント	インストール先フォルダ ¥jplpc¥agtX¥store¥ インスタンス名 ¥backup¥ 配下	環境ディレクトリ ¥jplpc¥agtX¥store¥ インスタンス名 ¥backup¥ 配下
Store データベースの部分バックアップ (jpctool db backup コマンドに -partial オプションを付けて実行)	シングルインスタンスエージェント	インストール先フォルダ ¥jplpc¥agtX¥store¥partial¥ 配下	環境ディレクトリ ¥jplpc¥agtX¥store¥partial¥ 配下
	マルチインスタンスエージェント	インストール先フォルダ ¥jplpc¥agtX¥store¥ インスタンス名 ¥partial¥ 配下	環境ディレクトリ ¥jplpc¥agtX¥store¥ インスタンス名 ¥partial¥ 配下
Store データベースのエクスポート (jpctool db dump コマンドの実行)	シングルインスタンスエージェント	インストール先フォルダ ¥jplpc¥agtX¥store¥dump¥ 配下	環境ディレクトリ ¥jplpc¥agtX¥store¥dump¥ 配下
	マルチインスタンスエージェント	インストール先フォルダ ¥jplpc¥agtX¥store¥ インスタンス名 ¥dump¥ 配下	環境ディレクトリ ¥jplpc¥agtX¥store¥ インスタンス名 ¥dump¥ 配下

注

「agtX」の X は、各 PFM - Agent または PFM - RM のプロダクト ID を示します。

表 C-14 デフォルトの使用ディスク領域 (UNIX の場合)

作業	エージェントの種類	使用ディスク領域 (デフォルトの場合)	
		物理ホスト運用時	論理ホスト運用時
Store データベースのフルバックアップ (jpctool db backup コマンドの実行)	シングルインスタンスエージェント	/opt/jplpc/agtX/store/backup/ 配下	環境ディレクトリ /jplpc/agtX/store/backup/ 配下
	マルチインスタンスエージェント	/opt/jplpc/agtX/store/ インスタンス名 /backup/ 配下	環境ディレクトリ /jplpc/agtX/store/ インスタンス名 /backup/ 配下

作業	エージェントの種類	使用ディスク領域（デフォルトの場合）	
		物理ホスト運用時	論理ホスト運用時
Store データベースの部分バックアップ (jpctool db backup コマンドに -partial オプションを付けて実行)	シングルインスタンスエージェント	/opt/jplpc/agtX/store/backup/partial/ 配下	環境ディレクトリ /jplpc/agtX/store/backup/partial/ 配下
	マルチインスタンスエージェント	/opt/jplpc/agtX/store/ インスタンス名 /backup/partial/ 配下	環境ディレクトリ /jplpc/agtX/store/ インスタンス名 /backup/partial/ 配下
Store データベースのエクスポート (jpctool db dump コマンドの実行)	シングルインスタンスエージェント	/opt/jplpc/agtX/store/backup/dump/ 配下	環境ディレクトリ /jplpc/agtX/store/backup/dump/ 配下
	マルチインスタンスエージェント	/opt/jplpc/agtX/store/ インスタンス名 /backup/dump/ 配下	環境ディレクトリ /jplpc/agtX/store/ インスタンス名 /backup/dump/ 配下

注

「agtX」の X は、各 PFM - Agent または PFM - RM のプロダクト ID を示します。

(b) Store バージョン 1.0 の場合

表 C-15 PFM - Agent または PFM - RM の Store データベースでの作業に必要なディスク占有量 (Store バージョン 1.0 の場合)

作業	ディスク占有量の見積もり式 (単位: メガバイト)
Store データベースのバックアップ (jpctool db backup コマンドの実行)	$2 * S$
Store データベースのエクスポート (jpctool db dump コマンドの実行)	$2 * S$

(凡例)

S : PFM - Agent または PFM - RM の Store データベースで使用するディスク占有量

注

変数 S の値の算出方法については、「付録 C.2(2) Store データベースのディスク占有量 (ヘルスチェックエージェント)」を参照してください。

なお、デフォルトで使用するディスク領域については、表 C-13 (Windows の場合) または表 C-14 (UNIX の場合) を参照してください。

付録 C.6 レポートキャッシュファイルを使用する場合の ディスク占有量

レポートキャッシュファイル化機能が有効な場合に、レポートキャッシュファイルが占有するディスク容量について説明します。なお、レポートキャッシュファイル化機能の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」のレポートについて説明している章を参照してください。

(1) 見積もり式

レポートキャッシュファイルは、次に示す 3 種類のファイルから構成されます。レポートキャッシュファイルのディスク占有量は、これら 3 種類のファイルサイズの総和となります。

- 行データファイル
- 時間位置情報ファイル
- 行データファイルポインタリストファイル

レポートキャッシュファイル化機能が有効な場合、レポートの表示または出力操作を行うたびに、レポートキャッシュファイル格納ディレクトリの配下に新しくディレクトリが作成され、レポートキャッシュファイルが格納されます。

参考

複数のレポートを同時に表示する場合、それぞれのレポートのレポートキャッシュファイルを合計したディスク占有量が必要です。

レポートキャッシュファイルのディスク占有量の見積もり式を次に示します。

$$C = t * (i * (f + d + 9) + 12)$$

(凡例)

C：レポートキャッシュファイルのディスク占有量

t：出力データ時間数 ¹

i：レコードのインスタンス数

f：1 レコード当たりのフィールド数 ²

d：1 レコードに含まれるフィールドのデータ長（バイト）の合計 ^{2 3}

注 1

（レポート間隔 * 表示期間）+ 1 で算出します。例えば、レポート間隔が「時」で、レポートの表示期間が過去 7 日以内の場合、出力データ時間数は 7 日 * 24 時間 + 1 = 169 になります。なお、PD レコードタイプおよび PL レコードタイプの場合のレポート間隔は「分」だけです。

注 2

見積もりには、次の表に示すレポート種別によって自動的に付加されるフィールドも含めてください。

レポート種別	自動的に付加されるフィールド
リアルタイムレポート	<ul style="list-style-type: none"> Record Time レコード固有の ODBC キーフィールド (マルチインスタンスレコードだけ)
履歴レポート (単一のエージェント)	<ul style="list-style-type: none"> Date and Time レコード固有の ODBC キーフィールド (マルチインスタンスレコードだけ)
履歴レポート (複数のエージェント)	<ul style="list-style-type: none"> Date and Time Agent Host Agent Instance

注 3

各フィールドのデータ長については、各 PFM・Agent または PFM・RM マニュアルに記載されている各レコードおよび Store データベースに記録されるときだけ追加されるフィールドのデータ型を確認の上、次に示す表から対応するデータ長を求めてください。

なお、データ型が char(n) または string(n) のフィールド長は可変長のため、n に示される最大長で見積もってください。ただし、シフト JIS コードや EUC コードで Store データベースに保存された 2 バイト文字は、レポートキャッシュファイルへの記録時に UTF-8 コードに変換されるため、1 文字が 2 バイトではなく 3 バイトで保存されます。このため、フィールドに格納される文字のバイト長によって、算出式が異なります。

データ型	データ長 (バイト)
<ul style="list-style-type: none"> char(n) string(n) 	$n+4$ (1 バイト文字の場合) $(n * 1.5) + 4$ (2 バイト文字の場合)
float	4
double	8
short	2
<ul style="list-style-type: none"> ushort long word 	4
ulong	8
<ul style="list-style-type: none"> time_t timeval utime 	8
uchar	4

また、複合レポートのレポートキャッシュファイルのディスク占有量は、複合レポート

に含まれる各レポートのレポートキャッシュファイルの合計です。複合レポートの場合のディスク占有量の見積もり式を次に示します。

$$C=C_1+C_2+\dots+C_R$$

(凡例)

C：複合レポートのレポートキャッシュファイルのディスク占有量

C_1, C_2, \dots, C_R ：各レポートのレポートキャッシュファイルのディスク占有量

R：複合レポートに含まれるレポート数

(2) 見積もり例

ヘルスチェックエージェントの PI_HAVL レコードをレポートに表示する場合を例にして説明します。

前提条件を次に示します。

- ・ レポート種別：履歴レポート（単一のエージェント）
- ・ レコードのインスタンス数（監視対象エージェント数）：4
- ・ 表示期間：過去 7 日以内
- ・ レポート間隔：分
- ・ レポートに含めるフィールド：Availability , Total Available Time , Total Monitoring Time

見積もりに当たり、レポートに含まれる各フィールドのデータ長を求めます。ODBC キーフィールド、およびレポート種別によって自動的に付加されるフィールドを考慮すると、レポートに含まれるフィールドおよびそのデータ長は次のとおりです。

フィールド	データ型	データ長
Date and Time	time_t	8
Host	string(256)	260
Availability	float	4
Total Available Time	ulong	8
Total Monitoring Time	ulong	8

この場合、「(1) 見積もり式」に示す変数は次のようになります。

- ・ t の値：60 * 24 * 7+1=10081
- ・ i の値：4
- ・ f の値：5
- ・ d の値：8+260+4+8+8=288

以上から、レポートキャッシュファイルのディスク占有量は次のようになります。

$$\begin{aligned} C &= t * (i * (f + d + 9) + 12) \\ &= 10081 * (4 * (5 + 288 + 9) + 12) \\ &= 10081 * (1208 + 12) \\ &= 12,298,820 \text{ (バイト)} \\ &= \text{約} 12 \text{ (メガバイト)} \end{aligned}$$

付録 C.7 PFM - Manager に接続する PFM - Agent および PFM - RM が多い場合の見積もりと設定

(1) PFM - Agent および PFM - RM の接続数の上限を増やす方法

PFM - Manager に接続する PFM - Agent または PFM - RM の数が多くなり、接続数の上限を超えると、PFM - Agent または PFM - RM との間で接続待ちや再接続が頻発します。その結果、PFM - Manager の負荷が急激に高くなり、次の現象が発生して PFM - Manager へ長時間接続できなくなる場合があります。

- PFM - Web Console の操作がタイムアウトする
- PFM - Agent または PFM - RM の起動時に、スタンドアロンモードから通常の起動モードへ長時間移行しない

この現象が発生する場合は、PFM - Manager で次の手順を実施してください。

1. PFM - Manager との通信が発生しない時間の最大値を次の手順で見積もる。
 - (1) PFM - Manager に接続する PFM - Agent および PFM - RM ごとに、レコードの収集間隔（単位：秒）の最小値を求めます。
 - (2) (1) で求めた収集間隔のうち、最大の収集間隔（単位：秒）を求めます。
 - (3) 「(2) で求めた収集間隔 + 60」と 360 を比較し、大きいほうの値が PFM - Manager との通信が発生しない時間（単位：秒）の最大値となります。
2. jpccomm.ini ファイルの [Name Server Section] , [Master Manager Section] , [Correlator Section] セクションの、「NS Connection Timeout」および「NS Maximum Connections」ラベルを編集する。
jpccomm.ini ファイルの格納先は次のとおりです。環境ディレクトリは、jpccconf ha setup コマンド実行時に指定したディレクトリを指します。

OS	jpccomm.ini ファイルの格納先
Windows の場合	<ul style="list-style-type: none">• PFM - Manager が物理ホスト環境の場合 インストール先フォルダ ¥jpccomm.ini• PFM - Manager が論理ホスト環境の場合 環境ディレクトリ ¥jplpc¥jpccomm.ini
UNIX の場合	<ul style="list-style-type: none">• PFM - Manager が物理ホスト環境の場合 /opt/jplpc/jpccomm.ini• PFM - Manager が論理ホスト環境の場合 環境ディレクトリ /jplpc/jpccomm.ini

jpccomm.ini ファイルの編集箇所は次のとおりです。

[変更前]

```
NS Connection Timeout=70
:
NS Maximum Connections=100
```

[変更後]

```
NS Connection Timeout=手順1で算出したPFM - Managerとの通信が発生しない時間の最大値
:
NS Maximum Connections=1500
```

3. PFM - Manager を再起動する。

設定後も同じ現象が発生する場合は、「(2) レコード収集間隔により再接続処理が多発する場合」を参照して、レコード収集期間を変更してください。

参考

PFM - Manager 09-00 以降を新規にインストールした環境では、「NS Maximum Connections」の初期値は 1500 に設定されています。

(a) PFM - Manager との通信が発生しない時間の見積もり例

この例では、次の条件を基に説明します。

PFM - Agent for Oracle のインスタンス A の収集するレコード

レコード a の収集間隔：180 秒

レコード b の収集間隔：300 秒

PFM - Agent for SQL Server のインスタンス B の収集するレコード

レコード a の収集間隔：360 秒

レコード b の収集間隔：3,600 秒

この場合の、PFM - Manager との通信が発生しない時間の最大値の算出方法を次に示します。

1. PFM - Agent のインスタンスごとに、収集間隔の最小値を求める。

インスタンス A の収集間隔の最小値：180 秒

インスタンス B の収集間隔の最小値：360 秒

2. 手順 1 で求めたインスタンスごとの収集間隔の最小値のうちの、最大値を求める。

180 秒 (インスタンス A) < 360 秒 (インスタンス B)

この結果、インスタンス B の 360 秒が最大値と判断できます。

3. 「手順 2 で求めた最大値 +60」と 360 とを比較する。

$360 + 60 (= 420) > 360$

大きいほうの値が PFM・Manager との通信が発生しない時間の最大値となるため、
この場合の PFM・Manager との通信が発生しない時間の最大値は 420 秒となります。

(2) レコード収集間隔により再接続処理が多発する場合

同一装置内の PFM・Manager または PFM・Base が 09:00 以前の場合、PFM・Agent では収集されている全レコードの収集間隔の最小値が 60 秒以上、PFM・RM では収集されている全レコードの収集間隔の最小値が 300 秒以上に設定されていると、収集するたびに PFM・Manager への再接続処理が実行されます。

このように設定されている PFM・Agent または PFM・RM が多いと、PFM・Manager への再接続処理が集中し、PFM・Agent または PFM・RM から PFM・Manager へのイベント送信に失敗するなど、通信処理が失敗することがあります。

このような現象が発生する場合は、収集間隔の最小値を 60 秒より大きい値に設定している PFM・Agent のホスト、または収集間隔の最小値を 300 秒より大きい値に設定している PFM・RM のホストで次の設定をすることで、PFM・Manager への負荷を軽減できます。

- 1. PFM・Agent ホストまたは PFM・RM ホストの収集間隔の最小値を求める。
 - (a) PFM・Agent または PFM・RM が収集しているレコードまたはアラーム評価に使用しているレコードに対して設定されている収集間隔の最小値（単位：秒）を PFM・Agent または PFM・RM のインスタンスごとに求める。
 - (b) 同じ PFM・Agent 製品または PFM・RM 製品のインスタンスが複数ある場合は、(a) で求めた最小値をインスタンス間で比較し、最大値を求める（同じ PFM・Agent 製品または PFM・RM 製品のインスタンス数が一つの場合は、(a) で求めた値を使用します）。

- 2. jpccomm.ini ファイルの [Agent Collector x Section] の「NS Cache Maintenance Time」ラベルを編集する。
[Agent Collector x Section] の「x」には、PFM・Agent または PFM・RM ごとに固有のプロダクト ID が入ります。PFM・Agent または PFM・RM のプロダクト ID は、各 PFM・Agent または PFM・RM マニュアルの識別子一覧を参照してください。
jpccomm.ini ファイルの格納先は次のとおりです。環境ディレクトリは、jpccconf ha setup コマンド実行時に指定したディレクトリを指します。

OS	jpccomm.ini ファイルの格納先
Windows の場合	<ul style="list-style-type: none">PFM・Agent または PFM・RM が物理ホスト環境の場合 インストール先フォルダ ¥jpccomm.iniPFM・Agent が論理ホスト環境の場合 環境ディレクトリ ¥jplpc¥jpccomm.ini

OS	jpccomm.ini ファイルの格納先
UNIX の場合	<ul style="list-style-type: none"> PFM - Agent または PFM - RM が物理ホスト環境の場合 /opt/jplpc/jpccomm.ini PFM - Agent が論理ホスト環境の場合 環境ディレクトリ /jplpc/jpccomm.ini

jpccomm.ini ファイルの編集箇所は次のとおりです。

[変更前]

```
NS Cache Maintenance Time=70
```

[変更後]

```
NS Cache Maintenance Time=手順1で算出した収集間隔の最小値 + 10
```

3. PFM - Agent を再起動する。

(a) 収集間隔の見積み例

この例では、次の条件を基に説明します。

ホスト 1 (PFM - Agent for Oracle) のインスタンス A のレコード収集間隔

レコード a : 180 秒

レコード b : 300 秒

ホスト 1 (PFM - Agent for Oracle) のインスタンス B のレコード収集間隔

レコード a : 300 秒

レコード c : 600 秒

ホスト 2 (PFM - Agent for SQL Server) のインスタンス C のレコード収集間隔

レコード a : 60 秒

レコード b : 600 秒

この場合の、ホスト 1 とホスト 2 での見積みと修正方法を次に示します。

ホスト 1 の場合

- ホスト 1 上の PFM - Agent for Oracle で、インスタンスごとに収集するレコードの収集間隔の最小値を求める。
インスタンス A : 180 秒
インスタンス B : 300 秒
- インスタンスが複数あるため、レコードの収集間隔を比較して最大値を求める。
180 秒 (インスタンス A) < 300 秒 (インスタンス B)
この結果、インスタンス B の 300 秒が PFM - Agent for Oracle の最大値と判断できます。
- 2 で求めた最大値に 10 を加算する。

$$300 + 10 = 310 \text{ 秒}$$

4. jpccomm.ini ファイルの [Agent Collector O Section] セクションの設定値を次のように変更する。

NS Cache Maintenance Time=310

ホスト 2 の場合

ホスト 2 上の PFM - Agent for SQL Server では、収集するレコードの収集間隔の最小値は 60 秒となります。そのため、jpccomm.ini ファイルの [Agent Collector Q Section] セクションは、変更の必要はありません。

付録 D カーネルパラメーター一覧

UNIX 環境で Performance Management を使用する場合、Performance Management の実行処理に必要なリソースを割り当てるために、OS のカーネルパラメーターを調整します。ここでは、PFM - Manager および PFM - Base で調整が必要なカーネルパラメーターを OS ごとに説明します。

なお、PFM - Agent によっては、カーネルパラメーターの調整が必要な場合があります。各 PFM - Agent のカーネルパラメーターの調整については、各 PFM - Agent マニュアルの、付録に記載されているカーネルパラメーターを参照してください。

付録 D.1 HP-UX の場合

(1) PFM - Manager が必要とするシステムリソース

PFM - Manager が必要とするシステムリソースを次の表に示します。

システムリソース	パラメーター	見積もり
ファイルシステム	nfile ³	330+100 * 監視する PFM - Agent 製品数 ¹
	nflocks	330+100 * 監視する PFM - Agent 製品数 ¹
	ninode	330+100 * 監視する PFM - Agent 製品数 ¹
	maxfiles	330+100 * 監視する PFM - Agent 製品数 ¹
	maxfiles_lim	330+100 * 監視する PFM - Agent 製品数 ¹
共用メモリー	shmmni	-
	shmmax	-
	shmseg	-
セマフォ	semmni	-
	semmns	-
	semume	-
	semmnu	-
	semvmx	-
プロセス	nproc	11+2 * 同時に実行するコマンド数 ²

システムリソース	パラメーター	見積もり
	maxuprc	-
	nkthread	-
	max_thread_proc	-
メッセージキュー	msgmni	-
	msgmax	-
	msgmnb	-
	msgtql	-
メモリー	maxdsiz	104,857,600
	maxssiz	134,217,728

(凡例)

- : 調整が不要なパラメーター

注 1

監視する PFM - Agent または PFM - RM 製品数は、インスタンスを起動している場合は、インスタンス数も加えます。一つのホストに Agent for Platform だけならば 1、一つのホストに Agent for HiRDB などのマルチインスタンスを二つ作成している場合は 2 と数えてください。

注 2

一度に同時に実行されるコマンドの最大実行数です。例えば、`jpctool db backup -direct` コマンドを複数のエージェントに同時に実行する運用がある場合は、その同時実行数になります。

注 3

HP-UX 11i V3 の場合は調整不要です。

(2) PFM - Base が必要とするシステムリソース

PFM - Base が必要とするシステムリソースを次の表に示します。

システムリソース	パラメーター	見積もり
ファイルシステム	nfile ²	30
	nflocks	30
	ninode	30
	maxfiles	30
	maxfiles_lim	30
共用メモリー	shmmni	-

システムリソース	パラメーター	見積もり
セマフォ	shmmax	-
	shmseg	-
	semmni	-
	semmns	-
	semume	-
	semmnu	-
プロセス	semvmx	-
	nproc	3+2 * 同時に実行するコマンド数 ¹
	maxuprc	-
	nkthread	-
メッセージキュー	max_thread_proc	-
	msgmni	-
	msgmax	-
	msgmnb	-
メモリー	msgtql	-
	maxdsiz	2,048,000
	maxssiz	2,048,000

(凡例)

- : 調整が不要なパラメーター

注 1

一度に同時に実行されるコマンドの最大実行数です。例えば、`jpctool db backup -direct` コマンドを複数のエージェントに同時に実行する運用がある場合は、その同時実行数になります。

注 2

HP-UX 11i V3 の場合は調整不要です。

(3) PFM - Web Console が必要とするシステムリソース

PFM - Web Console が必要とするシステムリソースを次の表に示します。

システムリソース	パラメーター	見積もり
ファイルシステム	nfile	375
	nflocks	-

システムリソース	パラメーター	見積もり
	ninode	-
	maxfiles	-
	maxfiles_lim	-
共用メモリー	shmmni	-
	shmmmax	28,788
	shmseg	-
セマフォ	semmni	-
	semmns	-
	semume	-
	semnu	-
	semvmx	-
プロセス	nproc	304
	maxuprc	-
	nkthread	335
	max_thread_proc	-
メッセージキュー	msgmni	-
	msgmax	-
	msgmnb	-
	msgtql	-
メモリー	maxdsiz	-
	maxssiz	-

(凡例)

- : 調整が不要なパラメーター

注

HP-UX 11i V3 の場合は調整不要です。

(4) Store データベースを Store バージョン 2.0 で使用する場合に PFM - Agent または PFM - RM で必要となるシステムリソース

PFM - Base 08-10 以降または PFM - Manager 08-10 以降でサポートする Store バージョン 2.0 の機能を使用する場合に、追加で必要となるシステムリソースを次の表に示します。

システムリソース	パラメーター	見積もり (追加)
ファイルシステム	nfile ²	Store サービスがオープンするファイル数 ¹
	ninode	
	maxfiles	
	maxfiles_lim	

注 1

Store サービスがオープンするファイル数の見積もりについては「付録 C.4(1)(d) Store サービスがオープンするファイル数」を参照してください。また、オープンするファイル数の上限は ulimit コマンドを使用して変更できます。カーネルパラメーターの見積もりがシステムの上限を超えた場合は ulimit コマンドによって上限を十分大きい値に設定してください。

注 2

HP-UX 11i V3 の場合は調整不要です。

付録 D.2 Solaris の場合

(1) PFM - Manager が必要とするシステムリソース

PFM - Manager が必要とするシステムリソースを次の表に示します。

システムリソース	パラメーター	見積もり
ファイルシステム	rlim_fd_cur	330+100 * 監視する PFM - Agent 製品数 ³
	rlim_fd_max	330+100 * 監視する PFM - Agent 製品数 ³
共用メモリー	shmsys:shminfo_shmmni (project.max-shm-ids) ¹	-
	shmsys:shminfo_shmmax (project.max-shm-memory) ¹	-
セマフォ	semsys:seminfo_semmni (project.max-sem-ids) ¹	-
	semsys:seminfo_semmns ²	-
	semsys:seminfo_semume ²	-
	semsys:seminfo_semmnu ²	-
	semsys:seminfo_semopm	-

システムリソース	パラメーター	見積もり
プロセス	semsys:seminfo_semmsl	-
	maxuprc	11+2 * 同時に実行するコマンド数 ⁴
	max_nprocs	11+2 * 同時に実行するコマンド数 ⁴
メッセージキュー	msgsys:msginfo_msgmni (project.max-msg-ids) ¹	-
	msgsys:msginfo_msgmax ²	-
	msgsys:msginfo_msgmnb	-
	msgsys:msginfo_msgtql (process.max-msg-messages) ¹	-
メモリー	-	-

(凡例)

- : 調整が不要なパラメーター

注 1 Solaris 10 の資源制御によって調整する場合に指定するパラメーター。

注 2 Solaris 10 の場合、このパラメーターは指定不要です。

注 3 インスタンスを起動している場合は、インスタンス数も加えます。

注 4 一度に同時に実行されるコマンドの最大実行数です。例えば、jpctool db backup -direct コマンドを複数のエージェントに同時に実行する運用がある場合は、その同時実行数になります。

(2) PFM - Base が必要とするシステムリソース

PFM - Base が必要とするシステムリソースを次の表に示します。

システムリソース	パラメーター	見積もり
ファイルシステム	rlim_fd_cur	30
	rlim_fd_max	30
共用メモリー	shmsys:shminfo_shmmni (project.max-shm-ids) ¹	-
	shmsys:shminfo_shmmax (project.max-shm-memory) ¹	-
セマフォ	semsys:seminfo_semmni (project.max-sem-ids) ¹	-

システムリソース	パラメーター	見積もり
	semsys:seminfo_semmns ²	-
	semsys:seminfo_semume ²	-
	semsys:seminfo_semmnu ²	-
	semsys:seminfo_semopm	-
	semsys:seminfo_semmsl	-
プロセス	maxuprc	3+2 * 同時に実行するコマンド数 ³
	max_nprocs	3+2 * 同時に実行するコマンド数 ³
メッセージキュー	msgsys:msginfo_msgmni (project.max-msg-ids) ¹	-
	msgsys:msginfo_msgmax ²	-
	msgsys:msginfo_msgmnb	-
	msgsys:msginfo_msgtql (process.max-msg-messages) ¹	-
メモリー	-	-

(凡例)

- : 調整が不要なパラメーター

注 1 Solaris 10 の資源制御によって調整する場合に指定するパラメーター。

注 2 Solaris 10 の場合、このパラメーターは指定不要です。

注 3 一度に同時に実行されるコマンドの最大実行数です。例えば、`jpctool db backup -direct` コマンドを複数のエージェントに同時に実行する運用がある場合は、その同時実行数になります。

(3) PFM - Web Console が必要とするシステムリソース

PFM - Web Console が必要とするシステムリソースを次の表に示します。

システムリソース	パラメーター	見積もり
ファイルシステム	rlim_fd_cur	375
	rlim_fd_max	30
共用メモリー	shmsys:shminfo_shmni (project.max-shm-ids)	-

システムリソース	パラメーター	見積もり
	shmsys:shminfo_shmmax (project.max-shm-memory)	28,788
	shmsys:shminfo_shmmin	-
	shmsys:shminfo_shmseg	-
セマフォ	semsys:seminfo_semmni (project.max-sem-ids)	-
	semsys:seminfo_semmns	-
	semsys:seminfo_semume	-
	semsys:seminfo_semmnu	-
	semsys:seminfo_semopm	-
	semsys:seminfo_semmsl	-
プロセス	maxuprc	-
	max_nprocs	304
メッセージキュー	msgsys:msginfo_msgmni (project.max-msg-ids)	-
	msgsys:msginfo_msgmax	-
	msgsys:msginfo_msgmnb	-
	msgsys:msginfo_msgtql (process.max-msg-messages)	-
メモリー	-	-

(凡例)

- : 調整が不要なパラメーター

(4) Store データベースを Store バージョン 2.0 で使用する場合に PFM - Agent または PFM - RM で必要となるシステムリソース

PFM - Base 08-10 以降または PFM - Manager 08-10 以降でサポートする Store バージョン 2.0 の機能を使用する場合に、追加で必要となるシステムリソースを次の表に示します。

システムリソース	パラメーター	見積もり (追加)
ファイルシステム	rlim_fd_cur	Store サービスがオープンするファイル数
	rlim_fd_max	

注

Store サービスがオープンするファイル数の見積もりについては「付録 C.4(1)(d) Store サービスがオープンするファイル数」を参照してください。また、オープンするファイル数の上限は `ulimit` コマンドを使用して変更できます。カーネルパラメーターの見積もりがシステムの上限を超えた場合は `ulimit` コマンドによって上限を十分大きい値に設定してください。

付録 D.3 AIX の場合

(1) PFM - Manager が必要とするシステムリソース

PFM - Manager が必要とするシステムリソースを次の表に示します。

システムリソース	パラメーター	見積もり
ファイルシステム	<code>nfiles</code>	330+100 * 監視する PFM - Agent 製品数 ¹
	<code>nfiles_hard</code>	330+100 * 監視する PFM - Agent 製品数 ¹
共用メモリー	<code>shmmni</code>	-
	<code>shmmmax</code>	-
	<code>shmmmin</code>	-
セマフォ	<code>semnmi</code>	-
	<code>semvmx</code>	-
	<code>semume</code>	-
	<code>semopm</code>	-
プロセス	<code>maxuproc</code>	11+2 * 同時に実行するコマンド数 ²
メッセージキュー	<code>msgmni</code>	-
	<code>msgmax</code>	-
	<code>msgmnm</code>	-
メモリー	<code>data_hard</code>	104,857,600
	<code>stack_hard</code>	134,217,728

(凡例)

- : 調整が不要なパラメーター

注 1

インスタンスを起動している場合は、インスタンス数も加えます。

注 2

一度に同時に実行されるコマンドの最大実行数です。例えば、`jpctool db backup -direct` コマンドを複数のエージェントに同時に実行する運用がある場合は、その同時実行数になります。

(2) PFM - Base が必要とするシステムリソース

PFM - Base が必要とするシステムリソースを次の表に示します。

システムリソース	パラメーター	見積もり
ファイルシステム	<code>nofiles</code>	30
	<code>nofiles_hard</code>	30
共用メモリー	<code>shmni</code>	-
	<code>shmmax</code>	-
	<code>shmmni</code>	-
セマフォ	<code>semni</code>	-
	<code>semvmx</code>	-
	<code>semume</code>	-
	<code>semopm</code>	-
プロセス	<code>maxuproc</code>	3+2 * 同時に実行するコマンド数
メッセージキュー	<code>msgmni</code>	-
	<code>msgmax</code>	-
	<code>msgmnm</code>	-
メモリー	<code>data_hard</code>	104,857,600 (100MB)
	<code>stack_hard</code>	134,217,728 (128MB)

(凡例)

- : 調整が不要なパラメーター

注

一度に同時に実行されるコマンドの最大実行数です。例えば、`jpctool db backup -direct` コマンドを複数のエージェントに同時に実行する運用がある場合は、その同時実行数になります。

(3) PFM - Web Console が必要とするシステムリソース

PFM - Web Console が必要とするシステムリソースを次の表に示します。

システムリソース	パラメーター	見積もり
ファイルシステム	<code>nofiles</code>	375

システムリソース	パラメーター	見積もり
共用メモリー	nofiles_hard	-
	shmmni	-
	shmmax	-
セマフォ	shmmin	-
	semnmi	-
	semvmx	-
プロセス	semume	-
	semopm	-
	maxuproc	-
メッセージキュー	msgmni	-
	msgmax	-
	msgmnm	-
メモリー	data_hard	-
	stack_hard	-

(凡例)

- : 調整が不要なパラメーター

(4) Store データベースを Store バージョン 2.0 で使用する場合に PFM - Agent または PFM - RM で必要となるシステムリソース

PFM - Base 08-10 以降または PFM - Manager 08-10 以降でサポートする Store バージョン 2.0 の機能を使用する場合に、追加で必要となるシステムリソースを次の表に示します。

システムリソース	パラメーター	見積もり (追加)
ファイルシステム	nofiles	Store サービスがオープンするファイル数
	nofiles_hard	

注

Store サービスがオープンするファイル数の見積もりについては「付録 C.4(1)(d) Store サービスがオープンするファイル数」を参照してください。また、オープンするファイル数の上限は ulimit コマンドを使用して変更できます。カーネルパラメーターの見積もりがシステムの上限を超えた場合は ulimit コマンドによって上限を十分大きい値に設定してください。

付録 D.4 Linux の場合

(1) PFM - Manager が必要とするシステムリソース

PFM - Manager が必要とするシステムリソースを次の表に示します。

システムリソース	パラメーター	見積もり
ファイルシステム	FILE-MAX	330+100 * 監視する PFM - Agent 製品数
共用メモリー	SHMMNI	-
	SHMALL	-
	SHMMAX	-
セマフォ	SEMMNI	-
	SEMMNS	-
プロセス	-	-
メッセージキュー	MSGMNI	-
	MSGMAX	-
メモリー	-	-

(凡例)

- : 調整が不要なパラメーター

注

インスタンスを起動している場合は、インスタンス数も加えます。

(2) PFM - Base が必要とするシステムリソース

PFM - Base が必要とするシステムリソースを次の表に示します。

システムリソース	パラメーター	見積もり
ファイルシステム	FILE-MAX	30
共用メモリー	SHMMNI	-
	SHMALL	-
	SHMMAX	-
セマフォ	SEMMNI	-
	SEMMNS	-
プロセス	-	-
メッセージキュー	MSGMNI	-
	MSGMAX	-

システムリソース	パラメーター	見積もり
メモリー	-	-

(凡例)

- : 調整が不要なパラメーター

(3) PFM - Web Console が必要とするシステムリソース

PFM - Web Console が必要とするシステムリソースを次の表に示します。

システムリソース	パラメーター	見積もり
ファイルシステム	FILE-MAX	32
共用メモリー	SHMMNI	-
	SHMALL	8,308,800
	SHMMAX	-
セマフォ	SEMMNI	-
	SEMMNS	-
プロセス	-	-
メッセージキュー	MSGMNI	-
	MSGMAX	-
メモリー	-	-

(凡例)

- : 調整が不要なパラメーター

(4) Store データベースを Store バージョン 2.0 で使用する場合に PFM - Agent または PFM - RM で必要となるシステムリソース

PFM - Base 08-10 以降または PFM - Manager 08-10 以降でサポートする Store バージョン 2.0 の機能を使用する場合に、追加で必要となるシステムリソースを次の表に示します。

システムリソース	パラメーター	見積もり (追加)
ファイルシステム	FILE-MAX	Store サービスがオープンするファイル数

注

Store サービスがオープンするファイル数の見積もりについては「付録 C.4(1)(d) Store サービスがオープンするファイル数」を参照してください。また、オープンするファイル数の上限は `ulimit` コマンドを使用して変更できます。カーネルパラ

メーターの見積もりがシステムの上限を超えた場合は `ulimit` コマンドによって上限を十分大きい値に設定してください。

付録 E 移行手順と移行時の注意事項

ここでは、旧バージョンの Performance Management からの移行（07-50 以前から 09-00 以降へのバージョンアップ）について説明します。

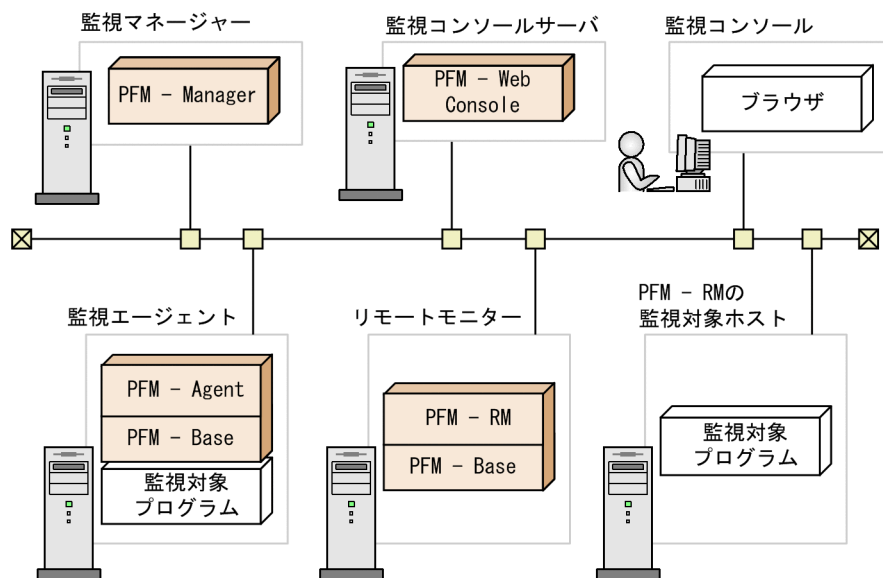
付録 E.1 Performance Management の製品体系の変更

Performance Management での、09-00 以降と 07-50 以前の製品体系の違いを示します。

（１）09-00 以降の Performance Management の製品体系

09-00 以降の Performance Management は、PFM - Manager、PFM - Web Console、PFM - Base、PFM - Agent、および PFM - RM の五つの製品で構成されます。

図 E-1 09-00 以降の Performance Management の製品体系



（凡例）

: Performance Managementが提供するプログラム

PFM - Base は PFM - Agent および PFM - RM の前提製品です。PFM - Base がインストールされていないと PFM - Agent および PFM - RM はインストールできません。ただし、PFM - Manager と、PFM - Agent または PFM - RM を同一ホストにインストールする場合、PFM - Base をインストールする必要はありません。PFM - Manager と PFM - Base は排他製品となるため、同一ホストにインストールすることはできません。

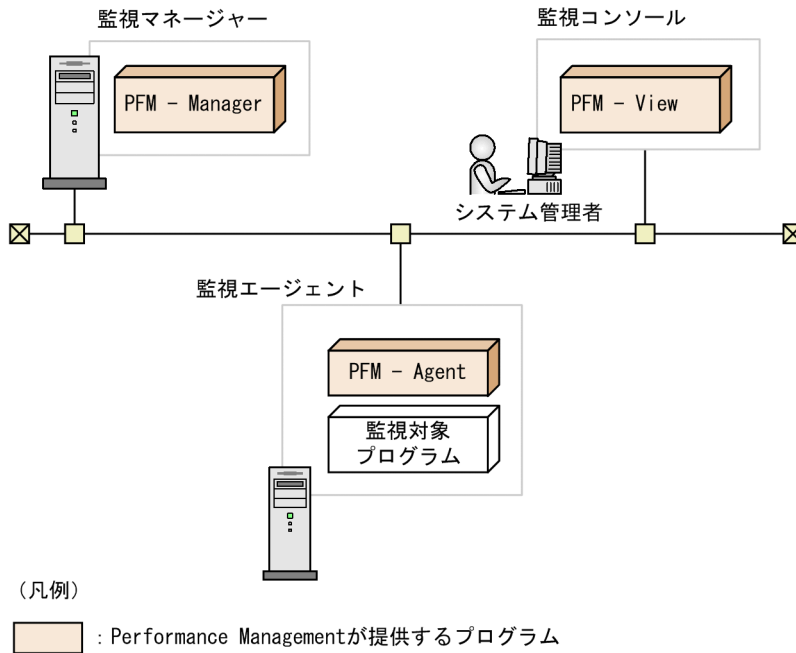
PFM - RM はリモート監視を実現する製品です。一つの PFM - RM で複数の監視対象プログラムを監視できます。PFM - RM を監視対象プログラムの数だけ用意する必要はあ

りません。

(2) 07-50 以前の Performance Management の製品体系

07-50 以前の Performance Management は、PFM - Manager、PFM - View、および PFM - Agent の三つの製品で構成されます。

図 E-2 07-50 以前の Performance Management の製品体系



付録 E.2 08-00 以降の PFM - Web Console と 07-00 以前の PFM - View との関係について

08-00 以降の PFM - Web Console は、07-00 以前の PFM - View とは別製品です。08-00 以降の PFM - View 製品はありません。

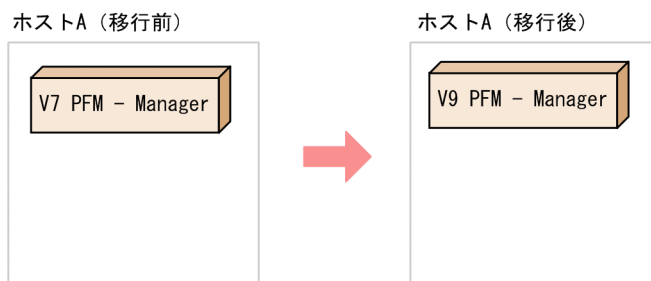
PFM - Web Console は、ほかの Performance Management のプログラムと同一ホストにインストールできますが、マシンの負荷を考慮して PFM - Manager、PFM - Agent とは別のホストにインストールすることをお勧めします。なお、同一ホストにインストールする場合、PFM - Web Console とほかの Performance Management プログラムとの間にインストール順序や排他はありません。

付録 E.3 07-50 以前から 09-00 以降へ移行時のインストール順序

ここでは、07-50 以前の Performance Management のプログラムを 09-00 以降にバージョンアップするときのインストール順序を示します。なお、アンインストールはインストールの逆の順序になります。

(1) PFM - Manager を 09-00 以降に移行する場合

(a) PFM - Manager を 09-00 以降に移行する場合



(凡例)

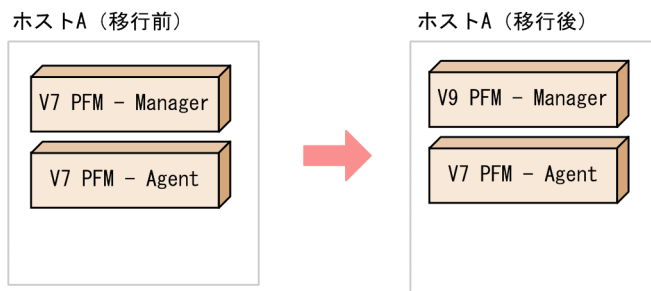
V7 : 07-50以前

V9 : 09-00以降

インストール順序

1. 09-00 以降の PFM - Manager を上書きインストールする。

(b) 07-50 以前の PFM - Manager と PFM - Agent が同一ホストにインストールされている環境で、PFM - Manager だけを 09-00 以降に移行する場合



(凡例)

V7 : 07-50以前

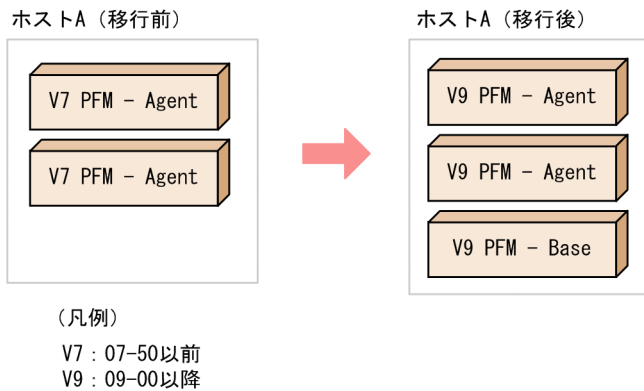
V9 : 09-00以降

インストール順序

1. 08-00 以降の PFM - Manager を上書きインストールする。

注意

この構成の場合、PFM - Manager をアンインストールするときは、07-50 以前の PFM - Agent をアンインストールする必要があります。

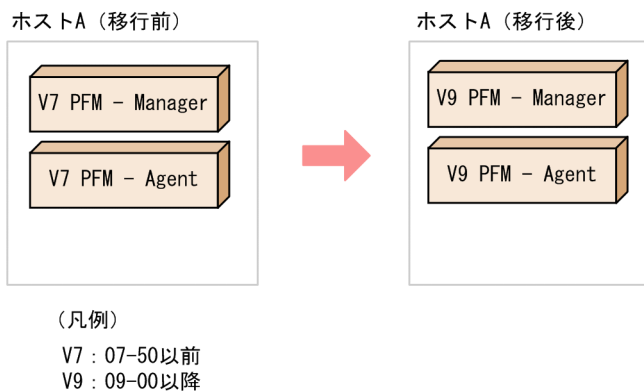
(2) PFM - Agent を 09-00 以降に移行する場合**(a) 一つまたは複数の PFM - Agent のすべてを 09-00 以降に移行する場合****インストール順序**

1. 09-00 以降の PFM - Base を新規インストールする。
2. 09-00 以降の PFM - Agent を上書きインストールする。

注意

1 台のホストに複数の PFM - Agent をインストールする場合でも、PFM - Base は一つでかまいません。

また、PFM - Agent 間にインストール順序はありません。

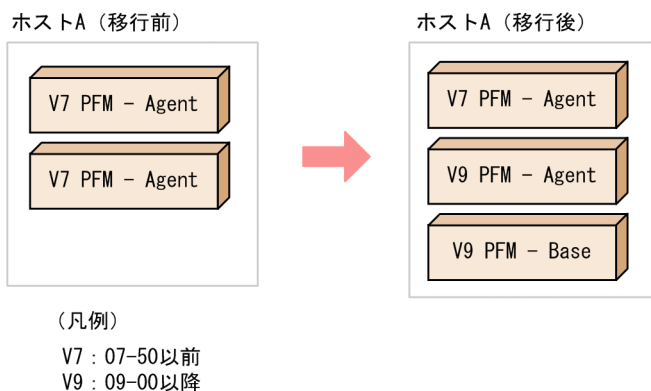
(b) 07-50 以前の PFM - Manager と PFM - Agent が同一ホストにインストールされている環境で、PFM - Manager と PFM - Agent を 09-00 以降に移行する場合**インストール順序**

1. 09-00 以降の PFM - Manager を上書きインストールする。
2. 09-00 以降の PFM - Agent を上書きインストールする。

注意

PFM - Manager , PFM - Agent を同一ホストにインストールする場合 , PFM - Base は不要です。

- (c) 1 台のホストに複数の 07-50 以前の PFM - Agent がインストールされている環境で , PFM - Agent の一部だけ 09-00 以降に移行する場合



インストール順序

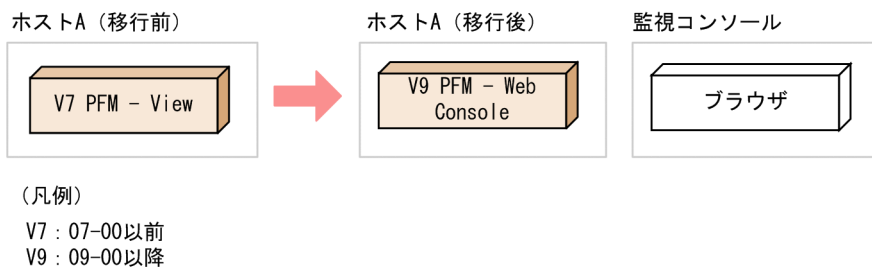
1. 09-00 以降の PFM - Base を新規インストールする。
2. バージョンアップ対象の PFM - Agent に 09-00 以降の PFM - Agent を上書きインストールする。

注意

この構成の場合 , PFM - Base をアンインストールするときは , 07-50 以前および 09-00 以降の PFM - Agent をアンインストールする必要があります。

(3) PFM - View を 09-00 以降に移行する場合

- (a) PFM - View 07-00 以前を PFM - Web Console 09-00 以降に移行する場合



インストール順序

1. 09-00 以降の PFM - Web Console を新規インストールする。

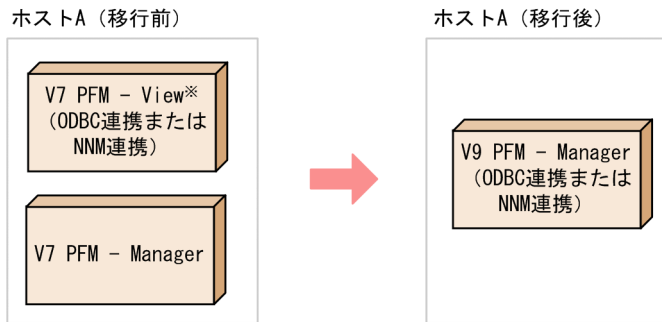
注意

監視コンソールの環境として PFM - Web Console だけを使用する場合は、07-00 以前の PFM - View はアンインストールしてかまいません。

- (b) PFM - View 07-00 以前の ODBC 連携または NNM 連携の機能を 09-00 以降に移行する場合

次の二とおりがあります。

PFM - Manager 09-00 以降に移行する



(凡例)

V7 : 07-50以前

V9 : 09-00以降

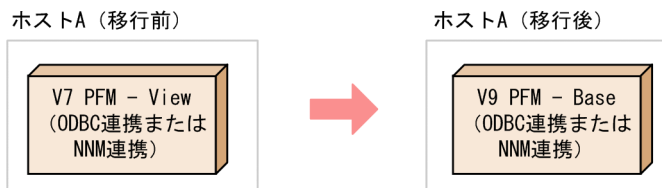
注※

PFM - Viewは、07-00以前

インストール順序

1. 09-00 以降の PFM - Manager を上書きインストールする。

PFM - Base 08-00 以降に移行する



(凡例)

V7 : 07-00以前

V9 : 09-00以降

インストール順序

1. 09-00 以降の PFM - Base を新規インストールする。

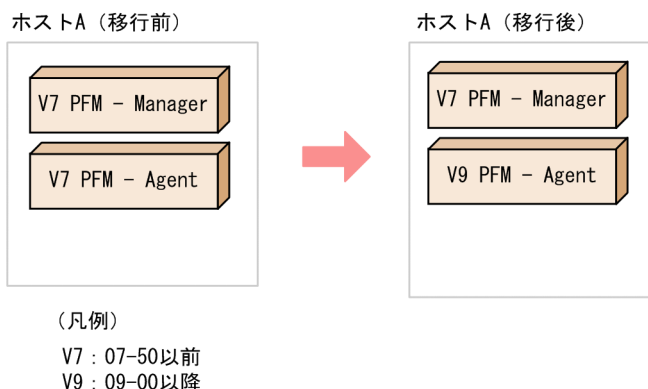
注意

監視コンソールの環境として PFM - Web Console だけを使用する場合は、07-00 以前の PFM - View はアンインストールしてかまいません。

(4) 組み合わせられない Performance Management の構成

次に示す構成では、Performance Management を使用できません。

07-50 以前の PFM - Manager と PFM - Agent が同一ホストにインストールされている環境で、PFM - Agent だけを 09-00 以降に移行する



注意

PFM - Manager と PFM - Agent を同一ホストにインストールする場合、09-00 以降の PFM - Agent の前提製品は、08-00 以降の PFM - Manager になります。したがって、09-00 以降の PFM - Agent を使用する場合、PFM - Manager には 08-00 以降のものを使用してください。なお、バージョンに関係なく PFM - Manager と PFM - Base は排他関係にあるため、この環境に PFM - Base はインストールできません。

付録 E.4 Performance Management のプログラムのバージョンアップ方法

Performance Management のプログラムをバージョンアップするには、Performance Management のプログラムを上書きインストールします。

手順を次に示します。

1. NNM 連携を実施している場合は、NNM 連携機能および ovw を停止してからインストールする。
連携機能の停止方法は、それぞれの連携機能について説明している章を参照してください。
2. ローカルホストの Performance Management のプログラムのサービスをすべて停止する。

サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

3. Performance Management のプログラムを上書きインストールする。
4. Performance Management を運用するためのセットアップを実施する。
5. Performance Management との連携機能を再開する。

ポイント

PFM・Manager がクラスタ環境の場合にバージョンアップをする場合は、実行系・待機系のどちらか一方で共有ディスクをオンラインにする必要があります。PFM・Web Console がクラスタ環境の場合にバージョンアップをする場合は共有ディスクをオンラインにする必要はありません。

インストールの詳細については、「5. インストールとセットアップ (Windows の場合)」または「6. インストールとセットアップ (UNIX の場合)」を参照してください。

付録 E.5 移行時の注意事項

09-50 以降の PFM・Web Console では、グラフに使用されるデフォルトの系列色を変更しました。グラフの系列色は初期設定ファイル (config.xml) を編集して変更できます。詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働分析のためのレポートの作成について説明している章を参照してください。

09-50 以降の PFM・Web Console では、レポートのグラフの外観に変更点があります。変更点を次の表に示します。

表 E-1 グラフの外観の変更点

グラフの種別	変更箇所	PFM - Web Console 09-10 以前	PFM - Web Console 09-50 以降
すべてのグラフ	背景色	灰色	白色
	データラベルと系列名	複数の系列が同一名称の場合、そのまま表示	複数の系列が同一名称の場合、名称の末尾に連番を付加して表示
	3D グラフの形状	立体	<ul style="list-style-type: none"> 棒グラフ：平面グラデーション 円グラフ：立体
集合縦棒	データラベル	隣のデータラベルと文字列が重なる場合、文字を間引いて表示	隣のデータラベルと文字列が重なる場合、重なる部分を「...」と表示
集合横棒	データラベル	隣のデータラベルと文字列が重なる場合、文字を間引いて表示	隣のデータラベルと文字列が重なる場合、文字サイズを縮小して表示
	系列色	グラフの下から上の順序で彩色	グラフの上から下の順序で彩色

グラフの種類	変更箇所	PFM - Web Console 09-10 以前	PFM - Web Console 09-50 以降
円	百分率の始点	データ数に応じて変動	常に 12 時の位置
	グラフの配置	複数グラフ表示時は左ぞろえで配置	複数グラフ表示時は中央ぞろえで配置
面・積み上げ面	データ欠落部分の表示 (グラフオプションで「データ欠落部分でグラフを欠落する」選択時)	データ欠落部分では面が表示されない	<ul style="list-style-type: none"> データ欠落部分を 0 として、データ存在部分と直線で結んだ領域に面を表示 複数インターバルでデータ欠落が続いた場合、直前のデータ存在部分と最後のデータ欠落部分 (値は 0) との間を直線で結んだ領域に面を表示
積み上げ面	境界線の表示	あり	なし
複合レポート	グリッド表示	系列グループ 1 のグラフの Y 軸に対して表示	最前面に表示されるグラフの Y 軸に対して表示
	Y 軸ラベルの配置	系列の順序に内側から配置	グラフの前面から背面の順序に内側から配置
	凡例	中央ぞろえで表示	左ぞろえで表示
	系列色	最初の系列グループから昇順で彩色	最後の系列グループから昇順で彩色

09-50 以降の PFM - Manager で、業務グループによるアクセスコントロール機能を有効にしている場合、09-10 以前の PFM - Web Console から接続できなくなります。

09-50 以降の PFM - Base または PFM - Manager をインストールした場合、新規インストールかバージョンアップインストールかに関係なく、Agent ホストリモート操作制限オプションおよび Agent 間直接情報参照抑止オプションは無効に設定されます。Agent ホストリモート操作制限オプションおよび Agent 間直接情報参照抑止オプションを有効にしたい場合は、「5.4.11 Agent ホストリモート操作制限オプションおよび Agent 間直接情報参照抑止オプションの設定」(Windows の場合) または「6.4.10 Agent ホストリモート操作制限オプションおよび Agent 間直接情報参照抑止オプションの設定」(UNIX の場合) を参照してください。

09-10-02 以降の PFM - Manager を新規またはバージョンアップインストールした場合、エージェントのアラームステータスの確認状況によっては、エージェントイベントとして次に示すメッセージテキストが出力されることがあります。

- State change(Unconfirmed)
- State information
- State information(Unconfirmed)

詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の付録

の、起動情報ファイル (jpccomm.ini) について説明している個所を参照してください。

09-00 以前から 09-10 以降の Performance Management へバージョンアップインストールした場合、PFM・Agent または PFM・RM の各フィールドの Log プロパティが Yes または No に固定される場合があります。この場合に、既存の Log プロパティの設定値が異なるときには、KAVE00352-W メッセージが共通メッセージログに出力され、設定値が変更されます。Log プロパティが固定されるレコードについては、各 PFM・Agent または PFM・RM のマニュアルを参照してください。

09-10 以降の PFM・Base または PFM・Manager を新規にインストールした場合、および 09-00 以前から 09-10 以降へバージョンアップインストールした場合、アラーム正常回復時の測定値出力機能は無効になります。09-10 以降からバージョンアップインストールした場合、アラーム正常回復時の測定値出力機能は以前の設定を引き継ぎます。アラーム正常回復時の測定値出力機能を有効にしたい場合は、「5.4.10 アラーム正常回復時の測定値出力機能の設定」(Windows の場合) または「6.4.9 アラーム正常回復時の測定値出力機能の設定」(UNIX の場合) を参照してください。

09-10 以降の PFM・Web Console を新規にインストールした場合は、レポート系列ページング機能がデフォルトで有効になります。09-10 以降からバージョンアップインストールした場合、レポート系列ページング機能は以前の設定を引き継ぎます。09-00 以前から 09-10 以降へバージョンアップインストールした場合、レポート系列ページング機能は無効になります。レポート系列ページング機能を有効にしたい場合は、「5.4.6(1)(c) データの取得や表示の設定」(Windows の場合) または「6.4.6(1)(c) データの取得や表示の設定」(UNIX の場合) を参照してください。

09-00 以降の PFM・Base または PFM・Manager を新規にインストールした場合は、プロダクト名表示機能がデフォルトで有効になります。09-00 以降からバージョンアップインストールした場合、プロダクト名表示機能は以前の設定を引き継ぎます。08-51 以前から 09-00 以降へバージョンアップインストールした場合、プロダクト名表示機能は無効になります。プロダクト名表示機能を有効にしたい場合は、「5.4.9 プロダクト名表示機能の設定」(Windows の場合) または「6.4.8 プロダクト名表示機能の設定」(UNIX の場合) を参照してください。

09-00 以降の PFM・Web Console では、監視コンソールの Web ブラウザとして Mozilla をサポートしていません。監視コンソールが UNIX の場合、Web ブラウザには Firefox 2 または 3 を利用してください。

バージョン 08-50 以降では、Solaris で、適用していないと Performance Management のプログラムが起動できない前提パッチがあります。必要なパッチについてはリリースノートを参照してください。

バージョンアップするには、古いバージョンの Performance Management のプログラムをアンインストールしないでください。アンインストールすると、古いバージョンで作成したレポート定義、アラーム定義、パフォーマンスデータなども一緒に

削除されてしまうため、新しいバージョンで使用できなくなります。

08-00 以降の PFM - Manager を 07-50 以前の Performance Management のプログラムと混在させてインストールする場合、08-00 以降の PFM - Manager をアンインストールするには、PFM - Web Console 以外の Performance Management プログラム、PFM - Manager の順でアンインストールする必要があります。

08-00 以降の PFM - Base を 07-50 以前の Performance Management のプログラムと混在させてインストールする場合、08-00 以降の PFM - Base をアンインストールするには、PFM - Web Console 以外の Performance Management プログラム、PFM - Base の順でアンインストールする必要があります。

Performance Management のプログラムを上書きインストールすると、次の項目が自動的に更新されます。

- Agent Store および Remote Monitor Store サービスの Store データベースファイル
- ini ファイル
- 一つのホスト上で複数のサービスのセットを起動できるアプリケーションプログラムを、一つの PFM - Agent または PFM - RM で監視している PFM - Agent または PFM - RM のインスタンス環境

Performance Management プログラムを新規にインストールした場合は、ステータス管理機能がデフォルトで有効になります。ただし、07-50 から 08-00 以降へバージョンアップインストールした場合、ステータス管理機能の設定状態は元のままとなります。

バージョン 08-00 以降の Performance Management プログラムをインストールした場合、ステータス管理機能の設定状態は次のようになります。

- Performance Management のプログラムがインストールされていないホストに 08-00 以降の PFM - Manager または PFM - Base を新規インストールした場合
ステータス管理機能の設定状態：有効になります。
- それ以外の場合
ステータス管理機能の設定状態：既存のままです。

注 次の場合が該当します。

- 06-70 ~ 07-50 の PFM - Manager を 08-00 以降にバージョンアップした場合
- 06-70 ~ 07-50 の PFM - Agent がインストールされている環境に、08-00 以降の PFM - Manager または PFM - Base を新規インストールした場合

なお、06-70 ~ 07-00 の Performance Management はステータス管理機能を持たないため、この場合の設定状態は「無効」になります。

バージョン 08-00 以降の Performance Management プログラムでは、Store サービスの実行プログラム（Windows の場合は jpcsto.exe および stpq1pr.exe、UNIX の場合は jpcsto および stpq1pr）の配置先が変更されています。PFM - Manager および PFM - Agent を 08-00 以降にバージョンアップする際に、旧配置先の Store サービスの実行プログラムは削除されます。

付録 F バージョン互換

Performance Management のプログラム (PFM - Manager および PFM - Agent) の、システム構成のバージョン互換、およびデータモデルのバージョン互換について説明します。

なお、PFM - Agent が対応する PFM - Base のバージョンは、各 PFM - Agent で異なります。PFM - Base のバージョン互換については、PFM - Agent ごとに確認してください。

付録 F.1 システム構成のバージョン互換

Performance Management のシステム構成でバージョンが混在した場合に、組み合わせられる Performance Management システム構成について説明します。

(1) PFM - Manager が 09-50 以降の場合

09-50 以降の PFM - Manager を使用したシステム構成では、すべてのバージョンの PFM - Agent および PFM - RM を監視できます。また、監視コンソールサーバとして PFM - Web Console 08-00 以降 が必要です。すべてのバージョンの PFM - View とは接続できません。

注

PFM - RM を運用する場合は、「付録 F.4 PFM - RM を運用する場合のシステム構成のバージョン互換」を参照してください。

09-50 以降の PFM - Manager では、次に示すメッセージテキストのエージェントイベントが発行されることがあります。

- State change(Unconfirmed)
- State information
- State information(Unconfirmed)

PFM - Manager で業務グループによるアクセスコントロール機能を有効に設定している場合、PFM - Web Console のバージョンが 09-50 以降である必要があります。09-10 以前の PFM - Web Console からは接続できません。

(2) PFM - Manager が 09-00 以降かつ 09-10 以前の場合

09-00 以降かつ 09-10 以前の PFM - Manager を使用したシステム構成では、すべてのバージョンの PFM - Agent および PFM - RM を監視できます。また、監視コンソールサーバとして PFM - Web Console 08-00 以降 が必要です。すべてのバージョンの PFM - View とは接続できません。

注

PFM - RM を運用する場合は、「付録 F.4 PFM - RM を運用する場合のシステム構成のバージョン互換」を参照してください。

エージェントイベントのうち、メッセージテキストが KAV から始まるイベントは、イベント発行元のエージェントホストにインストールされた PFM - Base が 09-00 以降の場合に発行されます。

次に示す機能を利用するには、PFM - Manager または PFM - Base と同一ホストにインストールされた PFM - Web Console のバージョンが 09-00 以降である必要があります。

- `jpcspm` コマンドを使用した、PFM - Web Console のサービスの起動・停止
- `jpctool service list` コマンドを使用した、PFM - Web Console のサービス稼働状態の表示

(3) PFM - Manager が 08-00 以降かつ 08-50 以前の場合

08-00 以降かつ 08-50 以前の PFM - Manager を使用したシステム構成では、すべてのバージョンの PFM - Agent を監視できます。また、監視コンソールとして PFM - Web Console 08-00 以降または PFM - View 07-00 が必要です。06-70 以前の PFM - View とは接続できません。また、使用する機能によって利用できるバージョンが異なります。

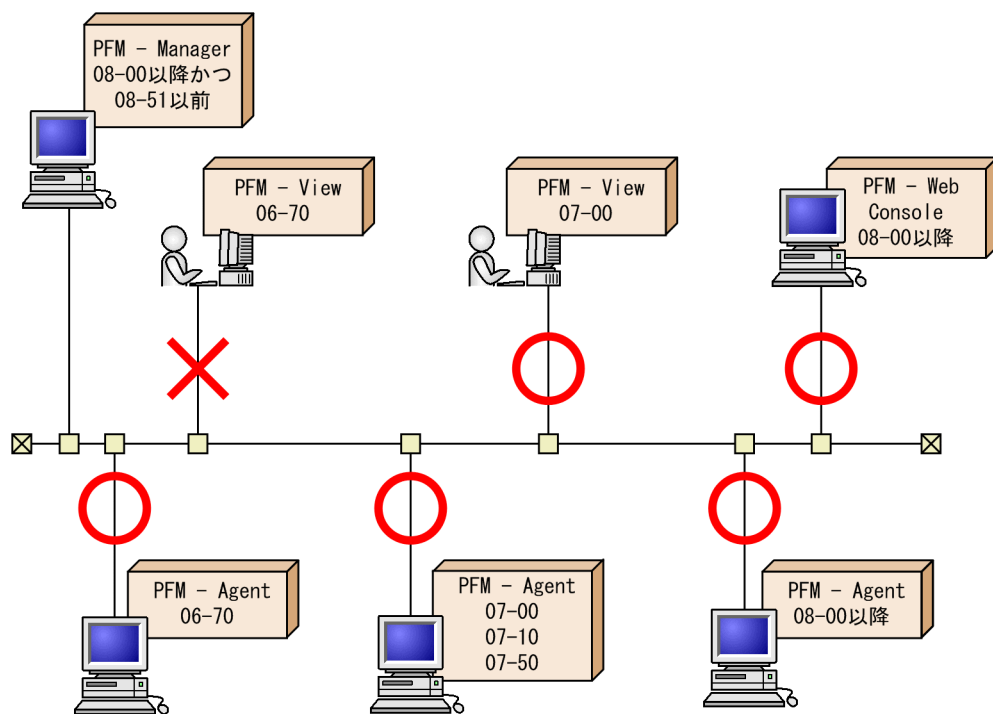
- ヘルスチェック機能は、PFM - View では対応していません。PFM - Web Console は 08-11 以降で対応しています。利用できるバージョンの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。
- エージェント固有プロパティの一括配布は、PFM - View では対応していません。PFM - Web Console は 08-11 以降で対応しています。
- アラームテーブル複数バインド機能は、PFM - Manager 08-50 以降、かつ PFM - Web Console 08-50 以降で対応しています。また、PFM - Agent 08-00 以降、かつ PFM - Agent と同一ホスト上の PFM - Base が 08-50 以降で対応しています。

なお、Linux 環境で LANG 環境変数に UTF-8 コードを指定した PFM - Agent に対して次の項目に全角文字を使用する場合、PFM - Agent が接続する PFM - Manager と PFM - Agent と同一ホスト上の PFM - Base を 08-10 以降にする必要があります。

- アラームテーブル、アラームの定義に含まれるすべての設定
- レポートの定義に含まれるフィルター条件式
- レポートの定義に含まれるフィールドレベルのドリルダウンレポートの条件式
- パフォーマンスデータの収集条件を指定する LOGIF の条件式
- ODBC ドライバー使用時のパフォーマンスデータの抽出条件式

PFM - Manager または PFM - Base のどちらかが 08-00 の場合、ASCII7 ビットコードの範囲の文字だけ使用してください。それ以外の文字を使用すると、PFM - Web Console または PFM - View で正しく表示されない、またはプログラムが正しく動作しない場合があります。

PFM - Manager が 08-00 以降かつ 08-50 以前の場合に接続できるシステム構成を次の図に示します。

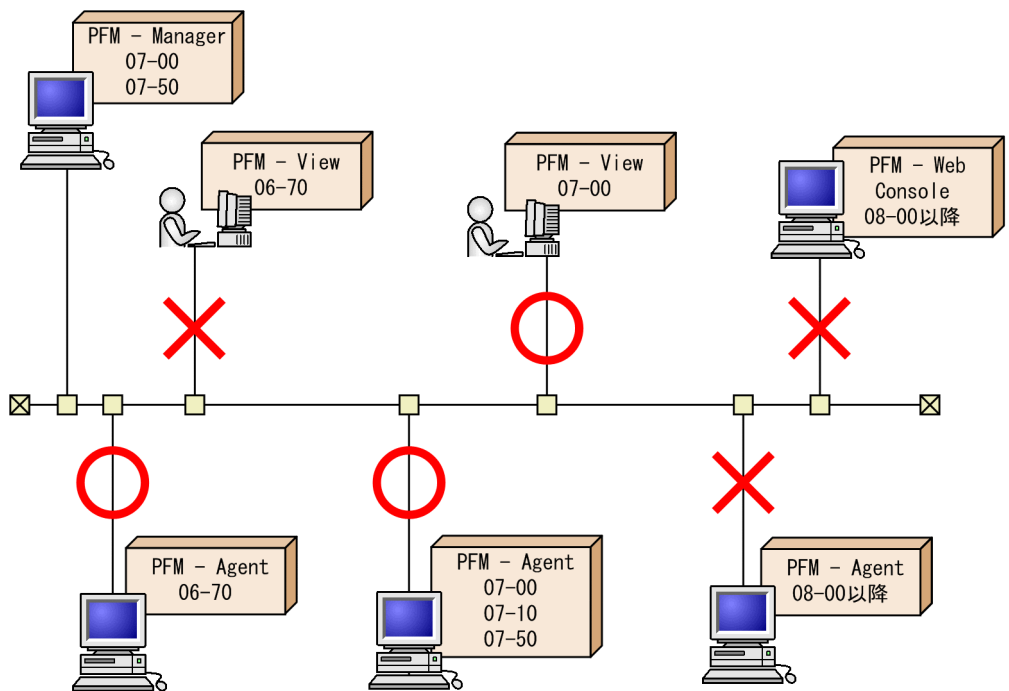


(4) PFM - Manager が 07-00 または 07-50 の場合

07-00 または 07-50 の PFM - Manager を使用したシステム構成では、07-50 以前の PFM - Agent を監視できます。08-00 以降の PFM - Agent は監視できません。

また、監視コンソールとして PFM - View 07-00 が必要です。PFM - Web Console 08-00 以降とは接続できません。

PFM - Manager が 07-00 または 07-50 の場合に接続できるシステム構成を次の図に示します。

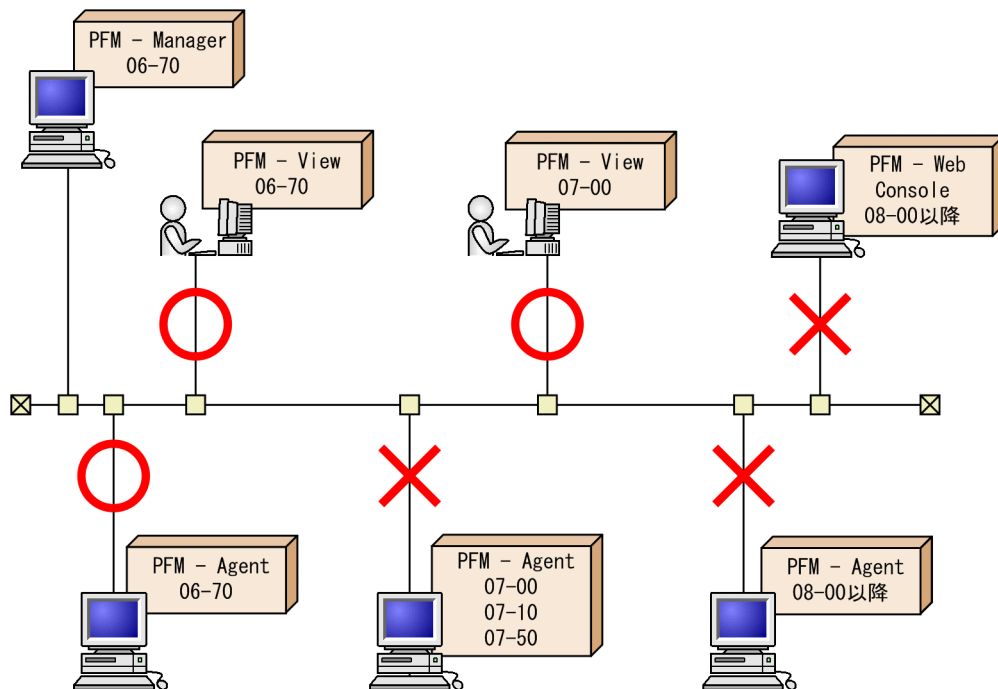


(5) PFM - Manager が 06-70 の場合

06-70 の PFM - Manager を使用したシステム構成では、06-70 の PFM - Agent だけを監視できます。07-00 以降の PFM - Agent は監視できません。

また、07-00 以前の PFM - View が必要です。PFM - Web Console 08-00 以降とは接続できません。

PFM - Manager が 06-70 の場合に接続できるシステム構成を次の図に示します。



付録 F.2 データモデルのバージョン互換

PFM・Agent には、製品のバージョンのほかに、データモデルのバージョンがあります。

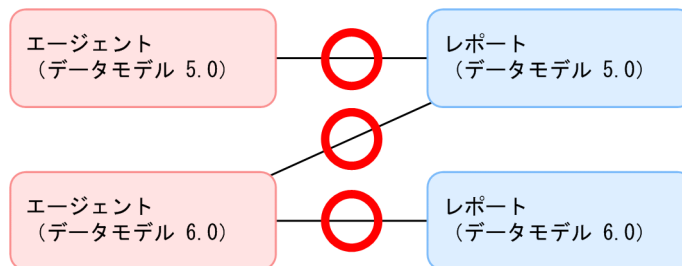
PFM・Agent をバージョンアップすると、データモデルもバージョンアップされる場合があります。データモデルは上位互換を保っているため、古いバージョンで定義したレポートの定義やアラームの定義は、新しいバージョンのデータモデルでも使用できます。

PFM・Agent のデータモデルのバージョンについては、各 PFM・Agent マニュアルの、付録に記載されているバージョン互換を参照してください。

5.0 と 6.0 のデータモデルのバージョンが混在する場合を例にして、バージョンの互換性について説明します。

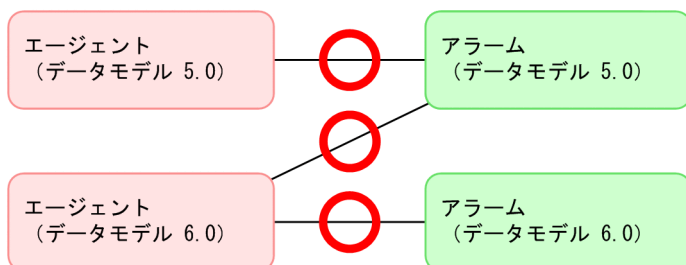
(1) レポートを表示する場合

データモデルのバージョン 5.0 で定義したレポートは、データモデルのバージョン 5.0 または 6.0 で定義したエージェントから表示できます。データモデルのバージョン 6.0 で定義したレポートは、データモデルのバージョン 6.0 で定義したエージェントだけに表示できます。



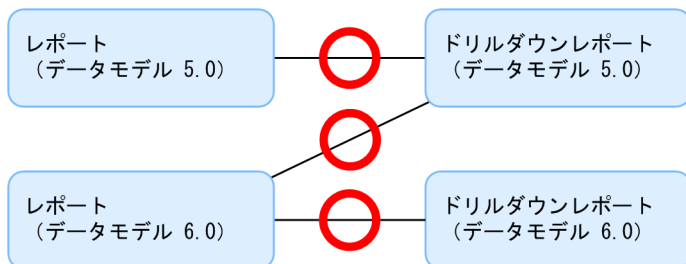
(2) アラームテーブルをバインドする場合

データモデルのバージョン 5.0 で定義したアラームテーブルは、データモデルのバージョン 5.0 または 6.0 で定義したエージェントにバインドできます。データモデルのバージョン 6.0 で定義したアラームテーブルは、データモデルのバージョン 6.0 で定義したエージェントだけにバインドできます。



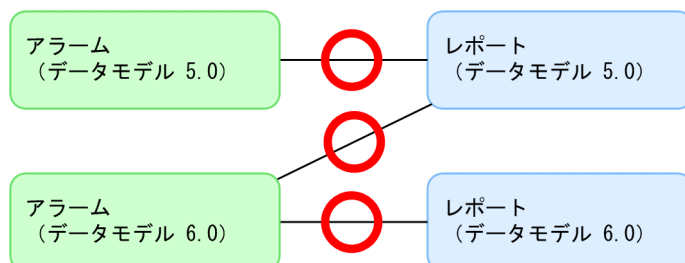
(3) レポートにドリルダウンレポートを関連づける場合

データモデルのバージョン 5.0 で定義したドリルダウンレポートは、データモデルのバージョン 5.0 または 6.0 で定義したレポートに関連づけることができます。データモデルのバージョン 6.0 で定義したドリルダウンレポートは、データモデルのバージョン 6.0 で定義したレポートだけに関連づけることができます。



(4) アラームにレポートを関連づける場合

データモデルのバージョン 5.0 で定義したレポートは、データモデルのバージョン 5.0 または 6.0 で定義したアラームに関連づけることができます。データモデルのバージョン 6.0 で定義したレポートは、データモデルのバージョン 6.0 で定義したアラームだけに関連づけることができます。



付録 F.3 PFM - Web Console でのデータモデルの表示

PFM - Agent にデータモデルのバージョンが複数ある場合には、PFM - Web Console の画面に複数のデータモデルのバージョンが表示されます。例えば、アラームの監視テンプレートや、レポートを定義するための画面、アラームを定義する画面などに複数のデータモデルのバージョンが表示されます。

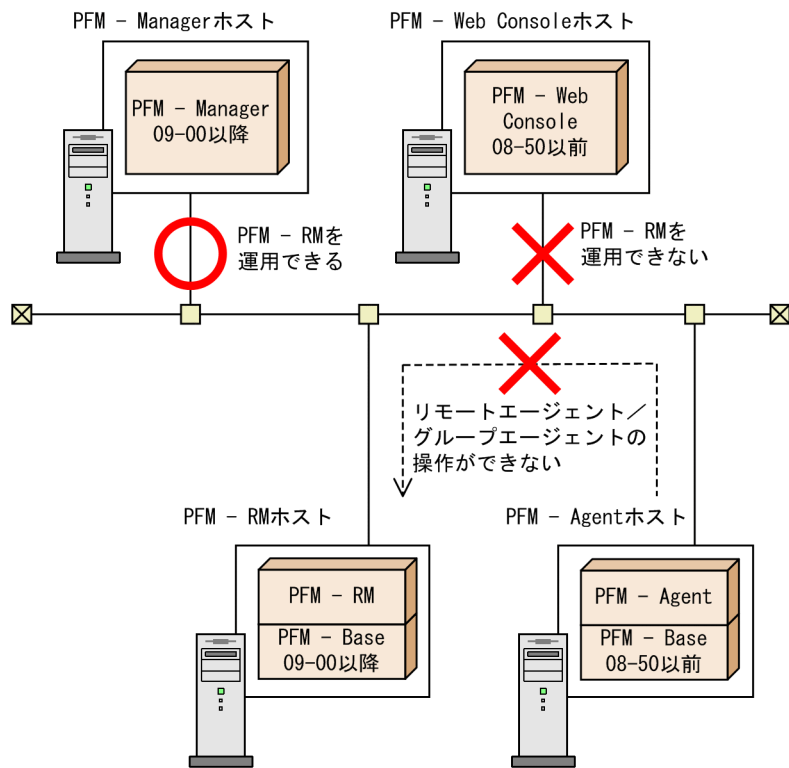
PFM - Agent のデータモデルのバージョンについては、各 PFM - Agent マニュアルの、付録に記載されているバージョン互換を参照してください。

付録 F.4 PFM - RM を運用する場合のシステム構成のバージョン互換

PFM - RM を運用する場合、PFM - Manager、PFM - Web Console、および PFM - Base は 09-00 以降である必要があります。また、09-00 未満の PFM - Manager または PFM - Base がインストールされたホストから、jpcctrl コマンドを使用しての、リモートエージェントおよびグループエージェントに対する操作は実行できません。

PFM - RM を運用する場合のシステム構成のバージョン互換を次に示します。

図 F-1 PFM - RM を運用する場合のシステム構成のバージョン互換



(凡例)

---> : jpcctrlコマンドによるエージェントの操作

付録 G 動作ログの出力

Performance Management の動作ログとは、システム負荷などのしきい値オーバーに関するアラーム機能と連動して出力される履歴情報です。

例えば、しきい値オーバーなどの異常が発生したことを示すアラーム発生時に、いつ、どのサービスがアラームを発生させたのかを示す情報が動作ログに出力されます。

動作ログは、PFM・Manager または PFM・Base が 08-10 以降の場合に出力できます。動作ログは、CSV 形式で出力されるテキストファイルです。定期的に保存して表計算ソフトで加工することで、分析資料として利用できます。

動作ログは、jpccomm.ini の設定によって出力されるようになります。ここでは、動作ログの出力内容と、動作ログを出力するための設定方法について説明します。

付録 G.1 動作ログに出力される事象の種別

動作ログに出力される事象の種別および Performance Management が動作ログを出力する契機を次の表に示します。事象の種別とは、動作ログに出力される事象を分類するための、動作ログ内での識別子です。

表 G-1 動作ログに出力される事象の種別

事象の種別	説明	Performance Management が出力する契機
StartStop	ソフトウェアの起動と終了を示す事象。	<ul style="list-style-type: none"> PFM サービスの起動・停止 スタンドアロンモードの開始・終了
Authentication	システム管理者やユーザーが、接続または認証を試みて成功または失敗したことを示す事象。	PFM・Web Console からのログイン認証結果（PFM ユーザー /JP1 ユーザー）
ConfigurationAccess	システム管理者が許可された運用操作を実行し、操作が成功または失敗したことを示す事象。	<ul style="list-style-type: none"> アラーム・アクション定義の作成、更新、削除 アラームのバインド・アンバインド PFM ユーザーの追加・削除・更新
ExternalService	JP1 製品と外部サービスとの通信結果を示す事象。	<ul style="list-style-type: none"> PFM・Agent または PFM・RM PFM・Manager との接続状態の変更 PFM・Manager PFM・Agent または PFM・RM の接続・切断
AnomalyEvent	しきい値のオーバーなどの異常が発生したことを示す事象。	アラームの発生
	異常な通信の発生を示す事象。	
ManagementAction	プログラムの重要なアクションの実行を示す事象。 ほかの監査カテゴリーを契機にアクションが実行されたことを示す事象。	自動アクションの実行

付録 G.2 動作ログの保存形式

ここでは、動作ログのファイル保存形式について説明します。

動作ログは規定のファイル（カレント出力ファイル）に出力され、満杯になった動作ログは別のファイル（シフトファイル）として保存されます。動作ログのファイル切り替えの流れは次のとおりです。

1. 動作ログは、カレント出力ファイル「jpcaudit.log」に順次出力されます。
2. カレント出力ファイルが満杯になると、その動作ログはシフトファイルとして保存されます。

シフトファイル名は、カレント出力ファイル名の末尾に数値を付加した名称です。シフトファイルの名称は、カレント出力ファイルが満杯になるたびにそれぞれ「ファイル名末尾の数値 +1」へ変更されます。つまり、ファイル末尾の数値が大きいくほど、古いログファイルとなります。

例

カレント出力ファイル「jpcaudit.log」が満杯になると、その内容はシフトファイル「jpcaudit1.log」へ保管されます。

カレント出力ファイル名が再び満杯になると、そのログは「jpcaudit1.log」へ移され、既存のシフトファイル「jpcaudit1.log」は「jpcaudit2.log」へリネームされます。

なお、ログファイル数が保存面数（jpccomm.ini ファイルで指定）を超えると、いちばん古いログファイルが削除されます。

3. カレント出力ファイルが初期化され、新たな動作ログが書き込まれます。

動作ログの出力可否、出力先および保存面数は、jpccomm.ini ファイルで設定します。jpccomm.ini ファイルの設定方法については、「付録 G.4 動作ログを出力するための設定」を参照してください。

付録 G.3 動作ログの出力形式

Performance Management の動作ログには、監査事象に関する情報が出力されます。動作ログは、ホスト（物理ホスト・論理ホスト）ごとに 1 ファイル出力されます。動作ログの出力先ホストは次のようになります。

- サービスを実行した場合：実行元サービスが動作するホストに出力
- コマンドを実行した場合：コマンドを実行したホストに出力

動作ログの出力形式、出力先、出力項目について次に説明します。

(1) 出力形式

CALFHM x.x, 出力項目1=値1, 出力項目2=値2, ..., 出力項目n=値n

(2) 出力先

物理ホストの場合

- Windows の場合
インストール先フォルダ ¥auditlog¥
- UNIX の場合
/opt/jp1pc/auditlog/

論理ホストの場合

- Windows の場合
環境ディレクトリ ¥jp1pc¥auditlog¥
- UNIX の場合
環境ディレクトリ /jp1pc/auditlog/

動作ログの出力先は、jpccomm.ini ファイルで変更できます。jpccomm.ini ファイルの設定方法については、「付録 G.4 動作ログを出力するための設定」を参照してください。

(3) 出力項目

出力項目には二つの分類があります。

共通出力項目

動作ログを出力する JP1 製品が共通して出力する項目です。

固有出力項目

動作ログを出力する JP1 製品が任意に出力する項目です。

(a) 共通出力項目

共通出力項目に出力される値と項目の内容を次の表に示します。

表 G-2 動作ログの共通出力項目

項番	出力項目		値	内容
	項目名	出力される属性名		
1	共通仕様識別子	-	CALFHM	動作ログフォーマットであることを示す識別子
2	共通仕様リビジョン番号	-	x.x	動作ログを管理するためのリビジョン番号
3	通番	seqnum	通し番号	動作ログレコードの通し番号
4	メッセージ ID	msgid	KAVEXXXX・x	製品のメッセージ ID

項番	出力項目		値	内容
	項目名	出力される属性名		
5	日付・時刻	date	YYYY-MM-DDThh:mm:ss.sssTZD	動作ログの出力日時およびタイムゾーン
6	発生プログラム名	progid	JP1PFM	事象が発生したプログラムのプログラム名
7	発生コンポーネント名	compid	サービス ID	事象が発生したコンポーネント名
8	発生プロセス ID	pid	プロセス ID	事象が発生したプロセスのプロセス ID
9	発生場所	ocp:host	<ul style="list-style-type: none"> • ホスト名 • IP アドレス 	事象が発生した場所
10	事象の種別	ctgry	<ul style="list-style-type: none"> • StartStop • Authentication • ConfigurationAccess • ExternalService • AnomalyEvent • ManagementAction 	動作ログに出力される事象を分類するためのカテゴリ名
11	事象の結果	result	<ul style="list-style-type: none"> • Success (成功) • Failure (失敗) • Occurrence (発生) 	事象の結果
12	サブジェクト識別情報	subj:pid	プロセス ID	次のどれかの情報 <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー操作によって動作するプロセス ID • 事象を発生させたプロセス ID
		subj:uid	アカウント識別子 (PFM ユーザー /JP1 ユーザー)	<ul style="list-style-type: none"> • 事象を発生させたユーザー名
		subj:euid	実行ユーザー ID (OS ユーザー)	<ul style="list-style-type: none"> • ユーザーに 1:1 で対応付けられた識別情報

(凡例)

- : なし。

注

T は日付と時刻の区切りです。

TZD はタイムゾーン指定子です。次のどれかが出力されます。

+hh:mm : UTC から hh:mm だけ進んでいることを示す。

-hh:mm : UTC から hh:mm だけ遅れていることを示す。

Z : UTC と同じであることを示す。

(b) 固有出力項目

固有出力項目に出力される値と項目の内容を次の表に示します。

表 G-3 動作ログの固有出力項目

項番	出力項目		値	内容
	項目名	出力される属性名		
1	オブジェクト情報	obj	<ul style="list-style-type: none"> PFM - Agent または PFM - RM のサービス ID 追加, 削除, 更新されたユーザー名 (PFM ユーザー) 	操作の対象
		obj:table	アラームテーブル名	
		obj:alarm	アラーム名	
2	動作情報	op	<ul style="list-style-type: none"> Start (起動) Stop (停止) Add (追加) Update (更新) Delete (削除) Change Password (パスワード変更) Activate (有効化) Inactivate (無効化) Bind (バインド) Unbind (アンバインド) 	事象を発生させた動作情報
3	権限情報	auth	<ul style="list-style-type: none"> 管理者ユーザー Management 一般ユーザー Ordinary Windows Administrator UNIX SuperUser 	操作したユーザーの権限情報
		auth:mode	<ul style="list-style-type: none"> PFM 認証モード pfm JPl 認証モード jpl OS ユーザー os 	操作したユーザーの認証モード
4	出力元の場所	dtp:host	PFM - Agent または PFM - RM のホスト名	アラームの発生したホスト

項番	出力項目		値	内容
	項目名	出力される属性名		
5	指示元の場所	subj:host	<ul style="list-style-type: none"> ログイン元ホスト名 実行ホスト名(jpctool alarm コマンド実行時だけ) 	操作の指示元のホスト
6	自由記述	msg	メッセージ	アラーム発生時、および自動アクションの実行時に出力されるメッセージ

固有出力項目は、出力契機ごとに出力項目の有無や内容が異なります。出力契機ごとに、メッセージ ID と固有出力項目の内容を次に説明します。

PFM サービスの起動・停止 (StartStop)

- 出力ホスト：該当するサービスが動作しているホスト
- 出力コンポーネント：起動・停止を実行する各サービス

項目名	属性名	値
メッセージ ID	msgid	起動：KAVE03000-I 停止：KAVE03001-I
動作情報	op	起動：Start 停止：Stop

スタンドアロンモードの開始・終了 (StartStop)

- 出力ホスト：PFM・Agent または PFM・RM ホスト
- 出力コンポーネント：PFM・Agent ホストの場合は、Agent Collector および Agent Store サービス。PFM・RM ホストの場合は、Remote Monitor Collector および Remote Monitor Store サービス。

項目名	属性名	値
メッセージ ID	msgid	スタンドアロンモードを開始：KAVE03002-I スタンドアロンモードを終了：KAVE03003-I

注 1 固有出力項目は出力されない。

注 2 PFM・Agent または PFM・RM の各サービスは、起動時に PFM・Manager ホストに接続し、ノード情報の登録、最新のアラーム定義情報の取得などを行う。PFM・Manager ホストに接続できない場合、稼働情報の収集など一部の機能だけが有効な状態（スタンドアロンモード）で起動する。その際、スタンドアロンモードで起動することを示すため、KAVE03002-I が出力される。その後、一定期間ごとに PFM・Manager への再接続を試み、ノード情報の登録、定義情報の取得などに成功すると、スタンドアロンモードから回復し、KAVE03003-I が出力される。この動作ログによって、KAVE03002-I と KAVE03003-I が出力されている間は、PFM・Agent または PFM・RM が不完全な状態で起動していることを知ることができる。

PFM - Web Console からのログイン認証結果 (Authentication)

- 出力ホスト：PFM - Manager (ViewServer) が動作しているホスト
- 出力コンポーネント：ViewServer

項目名	属性名	値
メッセージ ID	msgid	ログイン成功：KAVE03050-I ログイン失敗：KAVE03051-W
権限情報	auth	管理者ユーザー：Management 一般ユーザー：Ordinary
	auth:mode	PFM 認証モード：pfm JP1 認証モード：jp1
指示元の場所	subjp:host	ログイン元ホスト名 (PFM - Web Console)

アラーム・アクション定義の作成・更新・削除 (ConfigurationAccess)

- 出力ホスト：PFM - Manager (ViewServer) が動作しているホストまたは jpctool alarm コマンドの実行ホスト
- 出力コンポーネント：ViewServer / jpctool alarm コマンド

項目名	属性名	値
メッセージ ID	msgid	作成：KAVE03150-I 更新：KAVE03151-I 削除：KAVE03152-I 有効化：KAVE03153-I 無効化：KAVE03154-I
オブジェクト情報	obj:table	対象となったアラームテーブル名
	obj:alarm	対象となったアラーム名 (ない場合は省略される)
動作情報	op	作成：Add 更新：Update 削除：Delete 有効化：Activate 無効化：Inactivate
権限情報	auth	管理者ユーザー：Management
	auth:mode	PFM 認証モード：pfm JP1 認証モード：jp1 OS ユーザー：os
指示元の場所	subjp:ipv4	ViewServer だけ：ログイン元 IP アドレス (PFM - Web Console)
	subjp:host	実行ホスト名 (jpctool alarm コマンド実行時だけ)

注 1 09-50 未満の PFM - Manager または PFM - Web Console を使用している環境で、PFM - Web Console からアラーム定義の作成を行った場合、KAVE03150-I(op=Add) ではなく KAVE03151-I(op=Update) が出力される。

注 2 PFM・Web Console からアラーム定義の有効化を行った場合、KAVE03153-I(op= Activate)ではなく KAVE03151-I(op=Update) が出力される。

注 3 PFM・Web Console からアラーム定義の無効化を行った場合、KAVE03154-I(op= Inactivate)ではなく KAVE03151-I(op=Update) が出力される。

注 4 PFM・Web Console からアラーム定義の更新を行った場合、KAVE03152-I(op=Delete) , KAVE03151-I(op=Update) が出力される。

注 5 アラーム定義のコピーを行った場合、KAVE03150-I(op=Add) が出力される。(PFM・Web Console , jpctool alarm コマンド共通)

アラームのバインド・アンバインド (ConfigurationAccess)

- 出力ホスト: PFM・Manager が動作しているホストまたは jpctool alarm コマンドの実行ホスト
- 出力コンポーネント: ViewServer / Master Manager / jpctool alarm コマンド

項目名	属性名	値
メッセージ ID	msgid	バインド: KAVE03155-I アンバインド: KAVE03156-I
オブジェクト情報	obj	PFM・Agent または PFM・RM のサービス ID
	obj:table	アラームテーブル名
動作情報	op	バインド: Bind アンバインド: Unbind
	op:mode	アラームテーブル複数バインド有効時のバインド操作で、すでにバインドされているアラームテーブルをアンバインドしない場合だけ: Add
権限情報	auth	管理者ユーザー: Management
	auth:mode	PFM 認証モード: pfm JP1 認証モード: jp1 OS ユーザー: os
指示元の場所	subjp:ipv4	ViewServer だけ: ログイン元 IP アドレス (PFM・Web Console)
	subjp:host	jpctool alarm コマンド, Master Manager だけ: 実行ホスト名
自由記述	msg	アラームテーブル複数バインド機能を無効にしたときに Master Manager がアンバインドを実行した場合だけ: text=auto-unbind

PFM ユーザーの追加・削除・更新 (ConfigurationAccess)

- 出力ホスト: PFM・Manager (ViewServer) が動作しているホスト
- 出力コンポーネント: ViewServer

項目名	属性名	値
メッセージ ID	msgid	追加 : KAVE03157-I 削除 : KAVE03158-I 更新 : KAVE03159-I パスワード変更 : KAVE03160-I
オブジェクト情報	obj	追加・削除・更新されたユーザー名 (PFM ユーザー)
動作情報	op	作成 : Add 削除 : Delete 更新 : Update パスワード変更 : Change Password
権限情報	auth	管理者ユーザー : Management
	auth:mode	PFM 認証モード : pfm
指示元の場所	subjp:ipv4	ログイン元 IP アドレス (PFM - Web Console)

PFM - Manager との接続状態の変更 (ExternalService)

- 出力ホスト : PFM - Agent または PFM - RM ホスト
- 出力コンポーネント : PFM - Agent ホストの場合は , Agent Collector および Agent Store サービス。PFM - RM ホストの場合は , Remote Monitor Collector および Remote Monitor Store サービス。

項目名	属性名	値
メッセージ ID	msgid	PFM - Manager へのイベントの送信に失敗 (キューイングを開始) : KAVE03300-I PFM - Manager へのイベントの再送が完了 : KAVE03301-I

注 1 固有出力項目は出力されない。

注 2 Agent Store および Remote Monitor Store サービスは , PFM - Manager へのイベント送信に失敗すると , イベントのキューイングを開始し , 以降はイベントごとに最大 3 件がキューに貯められる。KAVE03300-I は , イベント送信に失敗し , キューイングを開始した時点で出力される。PFM - Manager との接続が回復したあと , キューイングされたイベントの送信が完了した時点で , KAVE03301-I が出力される。この動作ログによって , KAVE03300-I と KAVE03301-I が出力されている間は , PFM - Manager へのイベント送信がリアルタイムでできていなかった期間と知ることができる。

注 3 Agent Collector または Remote Monitor Collector サービスは , 通常 , Agent Store または Remote Monitor Store サービスを経由して PFM - Manager にイベントを送信する。何らかの理由で Agent Store または Remote Monitor Store サービスが停止している場合だけ , 直接 PFM - Manager にイベントを送信するが , 失敗した場合に KAVE03300-I が出力される。この場合 , キューイングを開始しないため , KAVE03301-I は出力されない。この動作ログによって , PFM - Manager に送信されなかったイベントがあることを知ることができる。

PFM - Agent または PFM - RM の接続・切断 (ExternalService)

- 出力ホスト : PFM - Manager ホスト

- 出力コンポーネント：Name Server サービス（Agent Collector および Remote Monitor Collector，Agent Store および Remote Monitor Store との接続・切断だけが対象）

項目名	属性名	値
メッセージ ID	msgid	PFM - Agent または PFM - RM と接続：KAVE03304-I PFM - Agent または PFM - RM と切断：KAVE03305-I
オブジェクト情報	obj	PFM - Agent または PFM - RM のサービス ID

アラームの発生（AnomalyEvent）

- 出力ホスト：PFM - Manager ホスト
- 出力コンポーネント：Correlator サービス

項目名	属性名	値
メッセージ ID	msgid	KAVE03450-I
検出元の場所	dtp:host	PFM - Agent または PFM - RM のホスト名
自由記述	msg	serviceid=PFM - Agent または PFM - RM のサービス ID, severity={E W I}, date= アラーム発生日時 , text= メッセージテキスト

自動アクションの実行（ManagementAction）

- 出力ホスト：アクションを実行したホスト
- 出力コンポーネント：Action Handler サービス

項目名	属性名	値
メッセージ ID	msgid	コマンド実行プロセス生成に成功：KAVE03500-I コマンド実行プロセス生成に失敗：KAVE03501-W E-mail 送信に成功：KAVE03502-I E-mail 送信に失敗：KAVE03503-W
自由記述	msg	コマンド実行：cmd= 実行したコマンドライン E-mail 送信：mailto= 送信先 E メールアドレス

注 コマンド実行プロセスの生成に成功した時点で KAVE03500-I が出力される。その後、コマンドが実行できたかどうかのログ、および実行結果のログは、動作ログには出力されない。

（４）出力例

動作ログの出力例を次に示します。

```
CALFHM 1.0, seqnum=1, msgid=KAVE03000-I,
date=2007-01-18T22:46:49.682+09:00,
progid=JP1PFM, compid=TA1host01, pid=2076,
ocp:host=host01, ctgry=StartStop, result=Occurrence,
subj:pid=2076,op=Start
```

付録 G.4 動作ログを出力するための設定

動作ログを出力するための設定は、jpccomm.ini ファイルで定義します。設定しない場合、動作ログは出力されません。動作ログを出力するための設定内容とその手順について次に示します。

(1) 設定手順

動作ログを出力するための設定手順を次に示します。

1. ホスト上の全 PFM サービスを停止させる。
2. テキストエディターなどで、jpccomm.ini ファイルを編集する。
3. jpccomm.ini ファイルを保存して閉じる。

(2) jpccomm.ini ファイルの詳細

jpccomm.ini ファイルの詳細について説明します。

(a) 格納先ディレクトリ

物理ホストの場合

- Windows の場合
インストール先フォルダ
- UNIX の場合
/opt/jplpc/

論理ホストの場合

- Windows の場合
環境ディレクトリ %jplpc%
- UNIX の場合
環境ディレクトリ /jplpc/

(b) 形式

jpccomm.ini ファイルには、次の内容を定義します。

- 動作ログの出力の有無
- 動作ログの出力先
- 動作ログの保存面数
- 動作ログのファイルサイズ

指定形式は次のとおりです。

"項目名"= 値

設定項目を次の表に示します。

表 G-4 jpccomm.ini ファイルで設定する項目および初期値

項番	項目	説明
1	[Action Log Section]	セクション名です。変更はできません。
2	Action Log Mode	<p>動作ログを出力するかどうかを指定します。この項目の設定は省略できません。</p> <ul style="list-style-type: none"> 初期値 0 (出力しない) 指定できる値 0 (出力しない), 1 (出力する) <p>これ以外の値を指定すると、エラーメッセージが出力され、動作ログは出力されません。</p>
3	Action Log Dir	<p>動作ログの出力先を絶対パスで指定します。 論理ホスト環境の場合は共有ディスク上のディレクトリを指定します。共有ディスク上にないディレクトリを指定した場合、論理ホストを構成する各物理ホストへ動作ログが出力されます。 なお、制限長を超えるパスを設定した場合や、ディレクトリへのアクセスが失敗した場合は、共通ログにエラーメッセージが出力され、動作ログは出力されません。</p> <ul style="list-style-type: none"> 初期値 省略 省略した場合に適用される値 (デフォルト値) 物理ホストの場合： Windows : インストール先フォルダ ¥auditlog¥ UNIX : /opt/jp1pc/auditlog/ 論理ホストの場合： Windows : 環境ディレクトリ ¥jp1pc¥auditlog¥ UNIX : 環境ディレクトリ /jp1pc/auditlog/ 指定できる値 1 ~ 185 バイトの文字列
4	Action Log Num	<p>ログファイルの総数の上限 (保存面数) を指定します。カレント出力ファイルとシフトファイルの合計を指定してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> 初期値 省略 省略した場合に適用される値 (デフォルト値) 5 指定できる値 2 ~ 10 の整数 <p>数値以外の文字列を指定した場合、エラーメッセージが出力され、デフォルト値である 5 が設定されます。 範囲外の数値を指定した場合、エラーメッセージを出力し、指定値に最も近い 2 ~ 10 の整数値が設定されます。</p>

項番	項目	説明
5	Action Log Size	<p>ログファイルのサイズをキロバイト単位で指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 初期値 省略 • 省略した場合に適用される値（デフォルト値） 2048 • 指定できる値 512 ~ 2096128 の整数 <p>数値以外の文字列を指定した場合、エラーメッセージが出力され、デフォルト値である 2048 が設定されます。</p> <p>範囲外の数値を指定した場合、エラーメッセージが出力され、指定値に最も近い 512 ~ 2096128 の整数値が設定されます。</p>

注

物理ホストで設定したあと、`jpccconf ha setup` コマンドで論理ホストを設定すると、物理ホストの設定が論理ホストにも反映されます。論理ホストと物理ホストを同時に使用する場合には、動作ログの出力先ディレクトリが同一にならないようにしてください。

付録 H ヘルスチェックエージェント

Performance Management では、ヘルスチェックエージェントのデータモデルおよび監視テンプレートを用意しています。ここではヘルスチェックエージェントのデータモデルおよび監視テンプレートの詳細について説明します。

付録 H.1 データモデル

(1) データモデルについて

ヘルスチェックエージェントのデータモデルについて説明します。PFM - Manager のバージョンに対応するヘルスチェックエージェントのデータモデルバージョンを次の表に示します。

PFM - Manager のバージョン	データモデルバージョン
08-11	3.0
08-50	4.0
09-00 以降	5.0

また、データモデルバージョンに対応するレコードを次の表に示します。

レコード名 (レコード ID)	データモデルバージョン			説明
	3.0	4.0	5.0	
Health Check Detail(PD_HC)				ヘルスチェック結果の詳細情報
Host Availability(PI_HAVL)	-			ホストごとの稼働実績、稼働率
Host Detail(PD_HOST)	-			ヘルスチェック結果のホストごとの詳細情報
Reserved Interval(PI)				予約レコード
Reserved Detail(PD)				予約レコード
System Overview(PI_SYS)	-			システム内のホストの稼働状況サマリ

(凡例)

- : 対応している
- : 対応していない

(2) レコードの記載形式

各レコードの説明は、次の項目から構成されています。

機能

各レコードに格納されるパフォーマンスデータの概要および注意事項について説明します。

デフォルト値および変更できる値

各レコードに設定されているパフォーマンスデータの収集条件のデフォルト値およびユーザーが変更できる値を表で示します。「デフォルト値および変更できる値」に記載している項目とその意味を次の表に示します。この表で示す各項目については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

表 H-1 デフォルト値および変更できる値

項目	意味	変更可否
Collection Interval	パフォーマンスデータの収集間隔（秒単位）。	可：変更できる
Collection Offset ¹	パフォーマンスデータの収集を開始するオフセット値（秒単位）。オフセット値については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照のこと。 また、パフォーマンスデータの収集開始時刻については、「4. Performance Management の機能」を参照のこと。	不可：変更できない
Log	収集したパフォーマンスデータを Store データベースに記録するかどうか。 Yes：記録する。ただし、「Collection Interval=0」の場合、記録しない。 No：記録しない。	
LOGIF	収集したパフォーマンスデータを Store データベースに記録するかどうかの条件。	
Sync Collection With ²	レコードのプロパティの [Description] の値に表示されているレコードと同期を取ってパフォーマンスデータを収集するかどうか。詳細は、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照のこと。	

注 1

指定できる値は、0 ～ 32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは、複数のデータを収集する場合に、一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので、収集処理の負荷を分散するために使用します。なお、データ収集の記録時間は、Collection Offset の値に関係なく、Collection Interval と同様の時間となります。

注 2

Sync Collection With の表示がある場合、Collection Interval と Collection Offset は表示されません。

ODBC キーフィールド

PFM・Manager または PFM・Base で、SQL を使用して Store データベースに格納

されているレコードのデータを利用する場合に必要な ODBC キーフィールドを示します。ODBC キーフィールドには、各レコード共通のものと各レコード固有のものとがあります。ここで示すのは、各レコード固有の ODBC キーフィールドです。複数インスタンスレコードだけが、固有の ODBC キーフィールドを持っています。各レコード共通の ODBC キーフィールドについては、「(3) ODBC キーフィールド一覧」を参照してください。ODBC キーフィールドの使用方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の ODBC 準拠のアプリケーションプログラムと連携した稼働分析について説明している章を参照してください。

ライフタイム

各レコードに収集されるパフォーマンスデータの一貫性が保証される期間を示します。ライフタイムについては、「4. Performance Management の機能」を参照してください。

レコードサイズ

1 回の収集で各レコードに格納されるパフォーマンスデータの容量を示します。

フィールド

各レコードのフィールドについて表で説明します。表の各項目について次に説明します。

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)

- PFM - View 名
PFM - Web Console で表示されるフィールド名 (PFM - View 名) を示します。
- PFM - Manager 名
PFM - Manager で、SQL を使用して Store データベースに格納されているフィールドのデータを利用する場合、SQL 文で記述するフィールド名 (PFM - Manager 名) を示します。
SQL 文では、先頭に各レコードのレコード ID を付加した形式で記述します。
例えば、Process Detail (PD) レコードの Interval (INTERVAL) フィールドの場合、「PD_INTERVAL」と記述します。

説明

- 各フィールドに格納されるパフォーマンスデータについて説明します。
各フィールドのパフォーマンスデータの求め方には、次の種類があります。
- 今回収集したデータと前回のインターバルで収集したデータによって求められた平均や割合を求めるもの。
 - 今回収集したデータだけで求められるもの (OS 内部で累積された値を含む)。
 - ほかのフィールドのデータから求めるもの (各レコードのフィールドの表にある「データソース」参照)。

特に断り書きがない場合、データの収集間隔によって求められる値となります。

要約

Agent Store がデータを要約するときの方法（要約ルール）を示します。要約ルールについては、「(4) 要約ルール」を参照してください。

形式

char 型や float 型など、各フィールドの値のデータ型を示します。データ型については、「(5) データ型一覧」を参照してください。

デルタ

累積値として収集するデータに対し、変化量でデータを表すことを「デルタ」と呼びます。デルタについては、「(6) フィールドの値」を参照してください。

データソース

該当するフィールドの値の計算方法または取得先を示します。フィールドの値については、「(6) フィールドの値」を参照してください。

(3) ODBC キーフィールド一覧

ODBC キーフィールドには、各レコード共通のものと各レコード固有のものとがあります。ここで示すのは、各レコード共通の ODBC キーフィールドです。PFM・Manager で、SQL を使用して Store データベースに格納されているレコードのデータを利用する場合、ODBC キーフィールドが必要です。

各レコード共通の ODBC キーフィールド一覧を次の表に示します。各レコード固有の ODBC キーフィールドについては、各レコードの説明を参照してください。

表 H-2 各レコード共通の ODBC キーフィールド一覧

ODBC キーフィールド	ODBC フォーマット	データ	説明
レコード ID_DATE	SQL_INTEGER	内部	レコードが生成された日付を表すレコードのキー。
レコード ID_DATETIME	SQL_INTEGER	内部	レコード ID_DATE フィールドとレコード ID_TIME フィールドの組み合わせ。
レコード ID_DEVICEID	SQL_VARCHAR	内部	ヘルスチェックエージェントが動作しているホスト名。
レコード ID_DRAWER_TYPE	SQL_VARCHAR	内部	区分。有効な値を次に示す。 m：分 H：時 D：日 W：週 M：月 Y：年
レコード ID_PROD_INST	SQL_VARCHAR	内部	ヘルスチェックエージェントのインスタンス名。
レコード ID_PRODID	SQL_VARCHAR	内部	ヘルスチェックエージェントの製品 ID。

ODBC キーフィールド	ODBC フォーマット	データ	説明
レコード ID_RECORD_TYPE	SQL_VARCHAR	内部	レコードタイプを表す識別子 (4 バイト)。
レコード ID_TIME	SQL_INTEGER	内部	レコードが生成された時刻 (グリニッジ標準時)。

(4) 要約ルール

PI レコードタイプのレコードでは、Collection Interval に設定された間隔で収集されるデータと、あらかじめ定義されたルールに基づき一定の期間 (分, 時, 日, 週, 月, または年単位) ごとに要約されたデータが、Store データベースに格納されます。要約の種類はフィールドごとに定義されています。この定義を「要約ルール」と呼びます。

要約ルールによっては、要約期間中の中間データを保持する必要があるものがあります。この場合、中間データを保持するためのフィールドが Store データベース内のレコードに追加されます。このフィールドを「追加フィールド」と呼びます。追加フィールドの一部は、PFM・Web Console でレコードのフィールドとして表示されます。PFM・Web Console に表示される追加フィールドは、履歴レポートに表示するフィールドとして使用できます。

なお、要約によって追加される「追加フィールド」と区別するために、ここでは、この節の各レコードの説明に記載されているフィールドを「固有フィールド」と呼びます。

追加フィールドのフィールド名は次のようになります。

- Store データベースに格納される追加フィールド名
固有フィールドの PFM・Manager 名にサフィックスが付加されたフィールド名になります。
- PFM・Web Console で表示される追加フィールド名
固有フィールドの PFM・View 名にサフィックスが付加されたフィールド名になります。

PFM・Manager 名に付加されるサフィックスと、それに対応する PFM・View 名に付加されるサフィックス、およびフィールドに格納されるデータを次の表に示します。

表 H-3 追加フィールドのサフィックス一覧

PFM - Manager 名	PFM - View 名	格納データ
_TOTAL	(Total)	要約期間内のレコードのフィールドの値の総和
_COUNT	-	要約期間内の収集レコード数
_HI	(Max)	要約期間内のレコードのフィールド値の最大値
_LO	(Min)	要約期間内のレコードのフィールド値の最小値

(凡例)

- : 追加フィールドがないことを示します。

要約ルールの一覧を次の表に示します。

表 H-4 要約ルール一覧

要約ルール名	要約ルール
COPY	要約期間内の最新のレコードのフィールド値がそのまま格納される。
AVG	<p>要約期間内のフィールド値の平均値が格納される。 次に計算式を示す。 (フィールド値の総和) / (収集レコード数)</p> <p>追加フィールド (Store データベース)</p> <ul style="list-style-type: none"> • _TOTAL • _COUNT <p>追加フィールド (PFM - Web Console)</p> <ul style="list-style-type: none"> • (Total)
ADD	要約期間内のフィールド値の総和が格納される。
LO	要約期間内のフィールド値の最小値が格納される。
HILO	<p>要約期間内のデータの最大値, 最小値, および平均値が格納される。 固有フィールドには平均値が格納される。 次に計算式を示す。 (フィールド値の総和) / (収集レコード数)</p> <p>追加フィールド (Store データベース)</p> <ul style="list-style-type: none"> • _HI • _LO • _TOTAL • _COUNT <p>追加フィールド (PFM - Web Console)</p> <ul style="list-style-type: none"> • (Max) • (Min) • (Total)
-	要約されないことを示す。

注

PFM - Manager 名に「PCT」が含まれるフィールドは、PFM - Web Console に追加される (Total) フィールドを履歴レポートで利用できません。

(5) データ型一覧

各フィールドの値のデータ型と、対応する C および C++ のデータ型の一覧を次の表に示します。この表で示す「データ型」の「フィールド」の値は、各レコードのフィールドの表にある「形式」の列に示されています。

表 H-5 データ型一覧

データ型		サイズ (バイト)	説明
フィールド	C および C++		
char n	char()	n	n バイトの長さを持つ文字データ。
float	float	4	数値 (3.4E ± 38 (7 けた))。
long	long	4	数値 (-2,147,483,648 ~ 2,147,483,647)。
short	short	2	数値 (-32,768 ~ 32,767)。
string(n)	char[]	() 内の数	n バイトの長さを持つ文字列。最後の文字は、 「null」。
time_t	unsigned long	4	数値 (0 ~ 4,294,967,295)。
ulong	unsigned long	4	数値 (0 ~ 4,294,967,295)。

(6) フィールドの値

ここでは、各フィールドに格納される値について説明します。

データソース

各フィールドには、Performance Management や監視対象プログラムから取得した値や、これらの値をある計算式に基づいて計算した値が格納されます。各フィールド値の取得先または計算方法は、フィールドの表の「データソース」列で示します。ヘルスチェックエージェントの「データソース」列の文字列は、取得したパフォーマンスデータを加工してフィールドの値を設定している場合、そのフィールドに設定される値の計算方法を示します。なお、データソースでは、次に示す表記方法で示します。

- 「-」は、取得したパフォーマンスデータを加工してフィールドの値を設定していないことを示します。

デルタ

変化量でデータを表すことを「デルタ」と呼びます。例えば、1 回目に収集されたパフォーマンスデータが「3」、2 回目に収集されたパフォーマンスデータが「4」とすると、変化量として「1」が格納されます。各フィールドの値がデルタ値かどうかは、フィールドの表の「デルタ」列で示します。

リアルタイムレポートの設定で、[デルタ値で表示] がチェックされている場合、最初にデータが収集されたときから値が表示されます。ただし、前回のデータを必要とするレポートの場合、初回の値は「0」で表示されます。2 回目以降のデータ収集は、収集データの値が表示されます。

ヘルスチェックエージェントで収集されるパフォーマンスデータは、次の表のように異なります。

表 H-6 ヘルスチェックエージェントで収集されるパフォーマンスデータ

レコードタイプ	デルタ	データ種別	[デルタ値で表示] のチェック	レコードの値
PI レコードタイプ	Yes	-	-	-
	No	リアルタイムデータ	あり	収集時点の値が表示される。
			なし	収集時点の値が表示される。
		・履歴データ ・アラームの監視データ	-	収集時点の値が表示される。
PD レコードタイプ	Yes	-	-	-
	No	リアルタイムデータ	あり	収集時点の値が表示される。
			なし	収集時点の値が表示される。
		・履歴データ ・アラームの監視データ	-	収集時点の値が表示される。

(凡例)

- : 該当しない

注

次に示す PFM・Web Console の項目がチェックされているかどうかを示します。

- ・レポートウィザードの [編集 > 表示設定 (リアルタイムレポート)] 画面の [デルタ値で表示]
- ・レポートウィンドウの [Properties] タブの [表示設定 (リアルタイムレポート)] の [デルタ値で表示]

パフォーマンスデータが収集される際の注意事項を次に示します。

ヘルスチェックエージェントで最初に格納される履歴レポートのパフォーマンスデータは、前回収集されたデータと今回収集されたデータを基に作成されます。このため、履歴レポートを収集開始してから最初にパフォーマンスデータが収集されるまでの時間は、設定した収集間隔の最大 2 倍の時間が掛かります。

各フィールドの平均および割合

各フィールドの平均や割合の値については、Interval 時間によって秒単位の値として求められるものと、データの収集間隔によって求められるものとがあります。特に断り書きがない場合、データの収集間隔によって求められる値となります (Interval が 60 秒間隔の場合、1 分単位のデータとなります)。

Interval フィールドの値

Interval フィールドの値は、レコードタイプによって異なります。Interval フィールドの値を次の表に示します。

表 H-7 Interval フィールドの値

レコード タイプ	インスタンス タイプ	レポートタイプ	説明
PI レコード タイプ	複数インスタ ンスレコード	リアルタイムレ ポート	最初の値は「0」。以降はレポートに設定されてい る「更新間隔」の値を表示する（秒単位）。
		履歴レポート	レポートに設定されている「更新間隔」の値を 表示する（秒単位）。 要約した場合、最後に収集した値を表示する。
	シングルイン スタンスレ コード	リアルタイムレ ポート	最初の値は「0」。 以降はレポートに設定されている「更新間隔」 の値を表示する（秒単位）。
		履歴レポート	レポートに設定されている「更新間隔」の値を 表示する（秒単位）。 要約した場合、要約したレコードの合計を表示す る。
PD レコ ードタイプ	複数インスタ ンスレコード	リアルタイムレ ポート	最初の値は「0」。 以降はレポートに設定されている「更新間隔」 の値を表示する（秒単位）。 ただし、次のレコードでは、常に「0」。 <ul style="list-style-type: none"> • Device Detail (PD_DEV) • Process Detail (PD) • Process End Detail (PD_PEND) • Service Process Detail (PD_SVC)
		履歴レポート	レポートに設定されている「更新間隔」の値を 表示する（秒単位）。 ただし、次のレコードでは、常に「0」。 <ul style="list-style-type: none"> • Device Detail (PD_DEV) • Process Detail (PD) • Process End Detail (PD_PEND) • Service Process Detail (PD_SVC)
	シングルイン スタンスレ コード	リアルタイムレ ポート	-
		履歴レポート	-

(凡例)

- : 該当しない

注

「更新間隔」は、次の計算式で算出されます。

Interval フィールドの値 = Record Time フィールドの値 - 前回取得時の Record
Time フィールドの値

(7) Store データベースに記録されるときだけ追加されるフィールド

Store データベースに記録されるときだけ追加されるフィールドを次の表に示します。

表 H-8 Store データベースに記録されるときだけ追加されるフィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	形式	デルタ	サポート バージョ ン	データ ソース
Agent Host (DEVICEID)	ヘルスチェックエージェントが動作 しているホスト名。	string(2 56)	No	すべて	-
Agent Instance (PROD_INST)	ヘルスチェックエージェントが動作 しているホスト名。	string(2 56)	No	すべて	-
Agent Type (PRODID)	ヘルスチェックエージェントのプロ ダクト ID。1 バイトの識別子で表 される。	char	No	すべて	-
Date (DATE)	レコードが作成された日。グリニッ ジ標準時。 ^{1 2}	char 3	No	すべて	-
Date and Time (DATETIME)	Date (DATE) フィールドと Time (TIME) フィールドの組み合わせ。 ²	char 6	No	すべて	-
Drawer Type (DRAWER_TYP E)	PI レコードタイプのレコードの場 合、データが要約される区分。 PFM - Web Console のレポートで表 示する場合と ODBC ドライバーを 使用して表示する場合とで、区分の 表示が異なる。 ³	char	No	すべて	-
GMT Offset (GMT_ADJUST)	グリニッジ標準時とローカル時間の 差。秒単位。	long	No	すべて	-
Time (TIME)	レコードが作成された時刻。グリ ニッジ標準時。 ^{1 2}	char 3	No	すべて	-

(凡例)

- : ヘルスチェック機能によってパフォーマンスデータを加工してフィールドの値を設定して
いないことを意味します。

注 1

PI レコードタイプのレコードでは、データが要約されるため、要約される際の基準となる時刻
が設定されます。レコード区分ごとの設定値を次の表に示します。

表 H-9 レコード区分ごとの設定値

区分	レコード区分ごとの設定値
分	レコードが作成された時刻の 0 秒
時	レコードが作成された時刻の 0 分 0 秒
日	レコードが作成された日の 0 時 0 分 0 秒
週	レコードが作成された週の月曜日の 0 時 0 分 0 秒
月	レコードが作成された月の 1 日の 0 時 0 分 0 秒
年	レコードが作成された年の 1 月 1 日の 0 時 0 分 0 秒

注 2

レポートや ODBC ドライバーによるデータ表示を行った場合、Date フィールドは YYYYMMDD 形式で、Date and Time フィールドは YYYYMMDD hh:mm:ss 形式で、Time フィールドは hh:mm:ss 形式で表示されます。

注 3

PFM・Web Console のレポートで表示する場合と ODBC ドライバーを使用して表示する場合の違いを次の表に示します。

表 H-10 表示方法によるデータ要約区分の違い

区分	PFM - Web Console	ODBC ドライバー
分	Minute	m
時	Hour	H
日	Day	D
週	Week	W
月	Month	M
年	Year	Y

(8) Store データベースに格納されているデータをエクスポートすると出力されるフィールド

jpctool db dump コマンドで、Store データベースに格納されているデータをエクスポートすると、次に示すフィールドが出力されます。これらのフィールドも、Store データベースに記録されるとき追加されるフィールドですが、PFM・Web Console では表示されないため、レポートに表示するフィールドとして使用できません。これらのフィールドは、ヘルスチェックエージェントが内部で使用するフィールドなので、運用では使用しないでください。

- レコード ID_DATE_F
- レコード ID_DEVICEID_F
- レコード ID_DRAWER_TYPE_F
- レコード ID_DRAWER_COUNT
- レコード ID_DRAWER_COUNT_F
- レコード ID_INST_SEQ
- レコード ID_PRODID_F
- レコード ID_PROD_INST_F
- レコード ID_RECORD_TYPE
- レコード ID_RECORD_TYPE_F
- レコード ID_SEVERITY
- レコード ID_SEVERITY_F
- レコード ID_TIME_F
- レコード ID_UOWID

- レコード ID_UOWID_F
- レコード ID_UOW_INST
- レコード ID_UOW_INST_F

(9) Health Check Detail (PD_HC)

機能

PFM - Agent または PFM - RM の稼働状態を示すデータや、PFM - Agent または PFM - RM が稼働するホストの稼働状態を示すデータが格納されます。このレコードは複数インスタンスレコードです。このレコードは次のような場合に利用できます。

- エージェントの稼働状態変化に対するアラーム、アクションを設定する。
エージェント単位での状態変化を JP1/IM などの統合管理製品で監視できます。
- サービス稼働状態監視モードで監視結果レポートを確認する。
エージェントおよびエージェントを構成するサービスの状態、状態の更新日時など、サービス稼働状態監視モードで収集した詳細な情報が確認できます。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Log	No	可
Collection Interval	300	可
Collection Offset	0	可
LOGIF	空白	可

注

ここで指定した値がヘルスチェック機能のポーリング周期となります。

ODBC キーフィールド

PD_HC_AGENT

ライフタイム

エージェントの初回の起動からアンセットアップまたはアンインストールまで。

レコードサイズ

- 固定部：716 バイト
- 可変部：1,023 バイト

フィールド

共通フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	デー タ ソース
Record Type (INPUT_RECORD_T YPE)	レコード名。常に「HC」。	-	char 8	No	-
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	-	time_t	No	-
Interval (INTERVAL)	レコードが格納された収集間隔 の時間 (秒単位)。	-	ulong	No	-
Monitoring Level by Num (MONITORING_LEV EL_NUM)	ヘルスチェック機能の監視レベ ル (数値)。予約フィールドのため 使用できません。	-	short	No	-
Monitoring Level (MONITORING_LEV EL)	ヘルスチェック機能の監視レベ ル (文字列)。値は次のとおり。 • Host : ホスト稼働状態監視 • Service : サービス稼働状態監視	-	string(33)	No	-

エージェントの稼働状態判定フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	デー タ ソース
Agent (AGENT)	監視対象エージェントのサービ ス ID。	-	string(259)	No	-
Host (HOST)	監視対象エージェントが稼働す るホスト名。	-	string(256)	No	-
Agent Category by Num (AGENT_CATEGORY _NUM)	監視対象エージェントの種別 (数値)。予約フィールドのため 使用できません。	-	short	No	-
Agent Category (AGENT_CATEGORY)	監視対象エージェントの種別。 値は次のとおり。 • Agent : PFM - Agent • Remote Monitor : PFM - RM • Remote Agent : リモートエー ジェント	-	string(33)	No	-
Polling Date and Time (POLLING_DATETI ME)	監視対象エージェントに対して ポーリングを行った日時。	-	time_t	No	-

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	デー タ ソース
Agent Op Status by Num (AGENT_STATE_NUM)	監視対象エージェントのステータス（数値）。値は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"> • 0：非対応 • 4：動作中 • 8：縮退稼働 • 12：サービス停止 • 16：状態不明 • 24：ホスト停止 	-	short	No	-
Agent Op Status (AGENT_STATE)	監視対象エージェントのステータス（文字列）。値は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"> • Not Supported：非対応 • Running：動作中 • Incomplete：縮退稼働 • Stopped：サービス停止 • Unconfirmed：状態不明 • Host Not Available：ホスト停止 	-	string(33)	No	-
Agent Op Status Change (AGENT_STATE_CHANGE)	監視対象エージェントのステータスが、前回のポーリング時と比較して変化したかを表すフラグ。値は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"> • 0：変化なし • 1：変化あり 	-	short	No	-

注

表示されるエージェントのステータスは、ヘルスチェックエージェントの監視レベルによって異なります。ステータスの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

ホストの稼働状態判定フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データ ソース
Host Op Status by Num (HOST_STATE_NUM)	監視対象エージェントが稼働するホストのステータス（数値）。予約フィールドのため使用できません。	-	short	No	-

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データ ソース
Host Op Status (HOST_STATE)	<p>監視対象エージェントが稼働するホストのステータス（文字列）。値は次のとおり。</p> <p>通常のエージェントの場合</p> <ul style="list-style-type: none"> • Success：通信成功 • Failure: エラー詳細：通信失敗。エラーの詳細情報は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"> • Remote Host Unavailable：対象ホストが応答しない • Connection Unavailable：対象ホストとコネクションが確立できない • Socket Failure：ソケットの操作でエラーが発生した • Unknown：状態不明 <p>リモートエージェントの場合</p> <ul style="list-style-type: none"> • Success：通信成功 • Failure：通信失敗 • Unknown：状態不明 	-	string(33)	No	-

サービスの稼働状態判定フィールド（Agent Collector および Remote Monitor Collector サービス）

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データ ソース
Collector Inclusion in Agent (COLLECTOR_INCL_AGENT)	<p>Agent Collector および Remote Monitor Collector をエージェントのステータス評価に含めるかを表すフラグ。ホストの稼働状態を監視する場合は 0，サービスの稼働状態を監視する場合は 1 が設定されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 0：含めない • 1：含める 	-	short	No	-
Collector Op Status by Num (COLLECTOR_STAT_E_NUM)	<p>Agent Collector および Remote Monitor Collector のサービス稼働状態（数値）。予約フィールドのため使用できません。</p>	-	short	No	-

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Collector Op Status (COLLECTOR_STATUS)	Agent Collector および Remote Monitor Collector のサービス稼働状態 (文字列)。値は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"> • Start Pending : 起動処理中 • Active : 起動中 • Standalone Active : 起動中 (スタンドアロンモード) • Busy : リクエスト処理中 • Standalone Busy : リクエスト処理中 (スタンドアロンモード) • Too Long Busy : 長時間リクエスト処理中 ¹ • Standalone Too Long Busy : 長時間リクエスト処理中 (スタンドアロンモード) ¹ • Stop Pending : 停止処理中 • Inactive : 停止中 • Unknown : 不明 ² 	-	string(33)	No	-
Collector Op Status Last-Updated (COLLECTOR_STATUS_LAST_UPDATE)	Agent Collector および Remote Monitor Collector のサービス稼働状態更新日時。	-	time_t	No	-
Collector Op Status Cont-Period (COLLECTOR_STATUS_CONT_PERIOD)	Agent Collector および Remote Monitor Collector のサービス稼働状態継続時間 (秒単位)。 ³	-	time_t	No	-
Collector Op Status Change (COLLECTOR_STATUS_CHANGE)	Agent Collector および Remote Monitor Collector のサービス稼働状態継続が、前回のポーリング時と比較して変化したかを表すフラグ。値は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"> • 0 : 変化なし • 1 : 変化あり 	-	short	No	-

注 1

ヘルスチェックエージェントのプロパティで Busy as Inactive を Yes に設定した場合に、Time to Busy as Inactive で設定した時間以上 Busy または Standalone Busy の状態が続いているときに設定されます。この場合、このサービスは停止しているものとして対象エージェントの稼働状態を判定します。

注 2

ホスト稼働状態監視の場合、またはサービス稼働状態監視で次の場合に設定されます。

- ・サービスを監視対象に含めていない場合。
- ・対象ホストまたは対象ホスト上の Status Server が停止している場合。
- ・サービスがステータス管理機能に対応していない場合。

- ・サービスはステータス管理機能に対応しているが、サービスが異常終了したなどの理由により、ステータス管理機能でサービスの状態を正しく認識できない場合。この場合、このサービスは停止しているものとして対象エージェントの稼働状態を判定します。サービスの状態を正しく認識させるには、該当サービスの再起動が必要です。

注 3

サービス稼働状態継続時間は、ポーリングを行った時刻（Polling Date and Time）と、サービスが現在の稼働状態に遷移した時刻（Collector Op Status Last-Updated, Store Op Status Last-Updated または AH Op Status Last-Updated）の差分として計算されます。そのため、Performance Management を運用する各ホストで時刻が一致している必要があります。

サービスの稼働状態判定フィールド（Agent Store および Remote Monitor Store サービス）

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データ ソース
Store Inclusion in Agent (STORE_INCL_AGE NT)	Agent Store および Remote Monitor Store をエージェントのステータス評価に含めるかを表すフラグ。ホストの稼働状態を監視する場合は 0、サービスの稼働状態を監視する場合は 1 が設定されます。 ・ 0：含めない ・ 1：含める	-	short	No	-
Store Op Status by Num (STORE_STATE_NUM)	Agent Store および Remote Monitor Store のサービス稼働状態（数値）。予約フィールドのため使用できません。	-	short	No	-
Store Op Status (STORE_STATE)	Agent Store および Remote Monitor Store のサービス稼働状態（文字列）。値は次のとおり。 ・ Start Pending：起動処理中 ・ Active：起動中 ・ Standalone Active：起動中（スタンドアロンモード） ・ Busy：リクエスト処理中 ・ Standalone Too Long Busy：リクエスト処理中（スタンドアロンモード） ・ Too Long Busy：長時間リクエスト処理中 ¹ ・ Standalone Too Long Busy：長時間リクエスト処理中（スタンドアロンモード） ¹ ・ Stop Pending：停止処理中 ・ Inactive：停止中 ・ Unknown：不明 ²	-	string(33)	No	-

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Store Op Status Last-Updated (STORE_STATE_LAST_UPDATE)	Agent Store および Remote Monitor Store のサービス稼働状態更新日時。	-	time_t	No	-
Store Op Status Cont-Period (STORE_STATE_COUNT_PERIOD)	Agent Store および Remote Monitor Store のサービス稼働状態継続時間 (秒単位)。 ³	-	time_t	No	-
Store Op Status Change (STORE_STATE_CHANGE)	Agent Store および Remote Monitor Store のサービス稼働状態継続が、前回のポーリング時と比較して変化したかを表すフラグ。値は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"> • 0 : 変化なし • 1 : 変化あり 	-	short	No	-

注 1

ヘルスチェックエージェントのプロパティで Busy as Inactive を Yes に設定した場合に、Time to Busy as Inactive で設定した時間以上 Busy または Standalone Busy の状態が続いているときに設定されます。この場合、このサービスは停止しているものとして対象エージェントの稼働状態を判定します。

注 2

ホスト稼働状態監視の場合、またはサービス稼働状態監視で次の場合に設定されます。

- ・サービスを監視対象に含めていない場合。
- ・対象ホストまたは対象ホスト上の Status Server が停止している場合。
- ・サービスがステータス管理機能に対応していない場合。
- ・サービスはステータス管理機能に対応しているが、サービスが異常終了したなどの理由により、ステータス管理機能でサービスの状態を正しく認識できない場合。この場合、このサービスは停止しているものとして対象エージェントの稼働状態を判定します。サービスの状態を正しく認識させるには、該当サービスの再起動が必要です。

注 3

サービス稼働状態継続時間は、ポーリングを行った時刻 (Polling Date and Time) と、サービスが現在の稼働状態に遷移した時刻 (Collector Op Status Last-Updated, Store Op Status Last-Updated または AH Op Status Last-Updated) の差分として計算されます。そのため、Performance Management を運用する各ホストで時刻が一致している必要があります。

サービスの稼働状態判定フィールド (Action Handler サービス)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データ ソース
AH Inclusion in Agent (AH_INCL_AGENT)	Action Handler をエージェントのステータス評価に含めるかを表すフラグ。 <ul style="list-style-type: none"> • 0 : 含めない • 1 : 含める 	-	short	No	-
AH Op Status by Num (AH_STATE_NUM)	Action Handler のサービス稼働状態 (数値) 。予約フィールドのため使用できません。	-	short	No	-
AH Op Status (AH_STATE)	Action Handler のサービス稼働状態 (文字列) 。値は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"> • Start Pending : 起動処理中 • Active : 起動中 • Standalone Active : 起動中 (スタンドアロンモード) • Busy : リクエスト処理中 • Standalone Busy : リクエスト処理中 (スタンドアロンモード) • Too Long Busy : 長時間リクエスト処理中 : ¹ • Standalone Too Long Busy : 長時間リクエスト処理中 (スタンドアロンモード) ¹ • Stop Pending : 停止処理中 • Inactive : 停止中 • Unknown : 不明 ² 	-	string(33)	No	-
AH Op Status Last-Updated (AH_STATE_LAST_UPDATE)	Action Handler のサービス稼働状態更新日時。	-	time_t	No	-
AH Op Status Cont-Period (AH_STATE_CONT_PERIOD)	Action Handler のサービス稼働状態継続時間 (秒単位) 。 ³	-	time_t	No	-
AH Op Status Change (AH_STATE_CHANGE)	Action Handler のサービス稼働状態が、前回のポーリング時と比較して変化したかを表すフラグ。値は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"> • 0 : 変化なし • 1 : 変化あり 	-	short	No	-

注 1

ヘルスチェックエージェントのプロパティで Busy as Inactive を Yes に設定した場合に、Time to Busy as Inactive で設定した時間以上 Busy または Standalone Busy の状態が続いているときに設定されます。この場合、このサービスは停止しているものとして対象エージェントの稼働状態を判定します。

注 2

ホスト稼働状態監視の場合、またはサービス稼働状態監視で次の場合に設定されます。

- ・サービスを監視対象に含めていない場合。
- ・対象ホストまたは対象ホスト上の Status Server が停止している場合。
- ・サービスがステータス管理機能に対応していない場合。
- ・サービスはステータス管理機能に対応しているが、サービスが異常終了したなどの理由により、ステータス管理機能でサービスの状態を正しく認識できない場合。この場合、このサービスは停止しているものとして対象エージェントの稼働状態を判定します。サービスの状態を正しく認識させるには、該当サービスの再起動が必要です。

注 3

サービス稼働状態継続時間は、ポーリングを行った時刻 (Polling Date and Time) と、サービスが現在の稼働状態に遷移した時刻 (Collector Op Status Last-Updated, Store Op Status Last-Updated または AH Op Status Last-Updated) の差分として計算されます。そのため、Performance Management を運用する各ホストで時刻が一致している必要があります。

メッセージテキストフィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Message Text (MESSAGE_TEXT)	監視対象エージェントの稼働状態に関する詳細情報。	-	string(256)	No	-

メッセージテキスト

メッセージテキストフィールドには、メッセージが次のように表示されます。

ホスト稼働状態監視のとき、サービス稼働状態監視でエージェントの稼働状態が「非対応」「状態不明」「ホスト停止」のとき

HC: <HC_AGT>

サービス稼働状態監視でエージェントの稼働状態が「動作中」「縮退稼働」「サービス停止」のとき

HC: <HC_AGT> (Collector: <HC_AC>, Store: <HC_AS>[, Action Handler: <HC_AH>])

(凡例)

<HC_AGT> : エージェント稼働状態

<HC_AC> : Agent Collector および Remote Monitor Collector のサービス稼働状態

<HC_AS> : Agent Store および Remote Monitor Store のサービス稼働状態

<HC_AH> : Action Handler のサービス稼働状態

メッセージの出力例

PD_HC レコードの Message Text フィールドに出力されるメッセージの例を次に示します。

HC : Not Supported

HC : Running (Collector: Active, Store: Active)

HC : Incomplete (Collector: Active, Store: Inactive, Action Handler: Active)

HC : Stopped (Collector: Inactive, Store: Inactive)

HC : Host Not Available

(10) Host Availability (PI_HAVL)

機能

システムを構成しているホストの稼働実績，稼働率が格納されます。このレコードは複数インスタンスレコードです。このレコードは次のような場合に利用できます。

- ・ タイムスケールでのホストの稼働率を確認する。

ホスト単位での稼働実績を確認できます。

なお，リモートエージェントだけで監視しているホストの稼働状態が「Unknown (状態不明)」の場合，そのホストのデータは格納されません。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Log	No	可
Sync Collection With	Detail Records , HC	不可
LOGIF	空白	可

ODBC キーフィールド

PI_HAVL_HOST

ライフタイム

エージェントの初回の起動からアンセットアップまたはアンインストールまで。

レコードサイズ

- ・ 固定部：681 バイト
- ・ 可変部：292 バイト

フィールド

共通フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	デー タ ソース
Record Type (INPUT_RECORD_T YPE)	レコード名。	CO PY	char 8	No	-
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	CO PY	time_t	No	-
Interval (INTERVAL)	レコードが格納された収集間隔 の時間 (秒単位)。	CO PY	ulong	No	-

固有フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	デー タ ソース
Host (HOST)	ホスト名。	CO PY	string(256)	No	-
Availability (AVAILABILITY)	稼働率 (%) (稼働 : 100% / 停止 : 0%)	AV G	float	No	-
Total Available Time (TOTAL_AVAILABLE_TIME)	稼働時間 (秒) (稼働 : Interval / 停止 : 0)	AD D	ulong	No	-
Total Not Available Time (TOTAL_NOTAVAILA BLE_TIME)	停止時間 (秒) (稼働 : 0 / 停止 : Interval)	AD D	ulong	No	-
Total Monitoring Time (TOTAL_MONITORI NG_TIME)	監視時間 (秒) 常に Interval。	AD D	ulong	No	-
Summary Start Date and Time (SUMMARY_START_ DATETIME)	要約期間での初回格納時刻。 格納時は常に Record Time。	LO	time_t	No	-
Summary End Date and Time (SUMMARY_END_D ATETIME)	要約期間での最終格納時刻。 格納時は常に Record Time。	CO PY	time_t	No	-

(11) Host Detail (PD_HOST)

機能

ヘルスチェック結果をホスト単位で集計した情報が格納されます。このレコードはホスト名をキーとする複数インスタンスレコードです。このレコードは次のような場合に利用できます。

- ホストの状態変化に対するアラーム , アクションを設定する。
ホスト単位での状態変化を , JP1/IM などの統合管理製品で監視できます。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Log	No	可
Sync Collection With	Detail Records , HC	不可
LOGIF	空白	可

ODBC キーフィールド

PD_HOST_HOST

ライフタイム

エージェントの初回の起動からアンセットアップまたはアンインストールまで。

レコードサイズ

- 固定部：716 バイト
- 可変部：325 バイト

フィールド**共通フィールド**

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	デー タ ソース
Record Type (INPUT_RECORD_T YPE)	レコード名。	-	char 8	No	-
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	-	time_t	No	-
Interval (INTERVAL)	レコードが格納された収集間 隔の時間 (秒単位)。	-	ulong	No	-
Monitoring Level by Num (MONITORING_LEV EL_NUM)	ヘルスチェック機能の監視レ ベル (数値)。予約フィールドのた め使用できません。	-	short	No	-
Monitoring Level (MONITORING_LEV EL)	ヘルスチェック機能の監視レ ベル (文字列)。値は次のとおり。 • Host : ホスト稼働状態監視 • Service : サービス稼働状態監 視	-	string(33)	No	-

固有フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	デー タ ソース
Host (HOST)	ホスト名。	-	string(256)	No	-
Polling Date and Time (POLLING_DATETI ME)	ポーリング日時。	-	time_t	No	-
Status (STATE)	ステータス。 (稼働 : Available / 停止 : Not Available / 状態不明 : Unknown)	-	string(33)	No	-

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	デー タ ソース
Status by Num (STATE_NUM)	ステータス。 (稼働 : 0 / 停止 : 1 / 状態不明 : 2)	-	short	No	-
Status Change (STATE_CHANGE)	ステータス変化の有無。 (変化なし : 0 / 変化あり : 1)	-	short	No	-
Num of Agents (NUM_AGENTS)	ホスト上のエージェントの総数。	-	ulong	No	-
Num of Not Supported (NUM_NOTSUPPORTED)	ホスト上の「非対応」のエージェント数。 稼働状態の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照のこと。	-	ulong	No	-
Num of Running (NUM_RUNNING)	ホスト上の「動作中」のエージェント数。 稼働状態の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照のこと。	-	ulong	No	-
Num of Incomplete (NUM_INCOMPLETE)	ホスト上の「縮退稼働」のエージェント数。 稼働状態の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照のこと。	-	ulong	No	-
Num of Stopped (NUM_STOPPED)	ホスト上の「サービス停止」のエージェント数。 稼働状態の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照のこと。	-	ulong	No	-

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	デー タ ソース
Num of Unconfirmed (NUM_UNCONFIRMED)	ホスト上の「状態不明」のエージェント数。 稼働状態の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照のこと。	-	ulong	No	-
Num of Host Not Available (NUM_HOSTNOTAVAILABLE)	ホスト上の「ホスト停止」のエージェント数。 稼働状態の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照のこと。	-	ulong	No	-

(12)Reserved Interval (PI)

予約レコードのため使用できません。

(13)Reserved Detail (PD)

予約レコードのため使用できません。

(14)System Overview (PI_SYS)

機能

システムを構成するホストの稼働状況サマリとして、稼働しているホストの数、割合などが格納されます。このレコードは単数インスタンスレコードです。このレコードは次のような場合に利用できます。

- スナップショットでのシステムの稼働状態サマリを確認する。
システムの現在の状態、およびその履歴・傾向を確認できます。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Log	No	可
Sync Collection With	Detail Records , HC	不可
LOGIF	空白	可

ODBC キーフィールド

なし

ライフタイム

エージェントの初回の起動からアンセットアップまたはアンインストールまで。

レコードサイズ

- 固定部：801 バイト
- 可変部：0 バイト

フィールド**共通フィールド**

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	デー タ ソース
Record Type (INPUT_RECORD_T YPE)	レコード名。	-	char 8	No	-
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	-	ulong	No	-
Interval (INTERVAL)	レコードが格納された収集間隔 の時間 (秒単位)。	-	ulong	No	-

固有フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	デー タ ソース
% Available Hosts (PCT_AVAILABLE_H OSTS)	ホスト稼働率 (%)。 (稼働ホスト数 / 全体のホスト 数)	HIL O	float	No	-
Num of Available Hosts (NUM_AVAILABLE_ HOSTS)	稼働ホスト数。	HIL O	ulong	No	-
Num of Not Available Hosts (NUM_NOTAVAILAB LE_HOSTS)	停止ホスト数。	HIL O	ulong	No	-
Num of Unknown Hosts (NUM_UNKNOWN_ HOSTS)	状態不明ホスト数。	HIL O	ulong	No	-
Num of Hosts (NUM_HOSTS)	全体のホスト数。	HIL O	ulong	No	-

付録 H.2 監視テンプレートの概要

Performance Management では、ヘルスチェックエージェントのアラームとレポートを定義する場合、次の方法があります。

- ヘルスチェックエージェントで定義されているアラームやレポートをそのまま使用する
- ヘルスチェックエージェントで定義されているアラームやレポートをコピーしてカスタマイズする
- ウィザードを使用して新規に定義する

ヘルスチェックエージェントでは、アラームやレポートを監視テンプレートとして用意しています。監視テンプレートのアラームとレポートは、必要な情報があらかじめ定義されているので、コピーしてそのまま使用したり、ユーザーの環境に合わせてカスタマイズしたりできます。そのため、ウィザードを使用して新規に定義をしなくても、監視対象の運用状況を監視する準備が容易にできます。

ここでは、ヘルスチェックエージェントで定義されている監視テンプレートのアラームとレポートの設定内容について説明します。

付録 H.3 監視テンプレート（アラーム）

（1）アラームの記載形式

ここでは、アラームの記載形式を示します。アラームは、アルファベット順に記載しています。

アラーム名

監視テンプレートのアラーム名を示します。

概要

このアラームで監視できる監視対象の概要について説明します。

主な設定


このアラームの主な設定値を表で説明します。この表では、アラームの設定値と、PFM・Web Console の [アラーム階層] 画面でアラームアイコンをクリックし、[プロパティの表示] メソッドをクリックしたときに表示される、[プロパティ] 画面の設定項目との対応を示しています。各アラームの設定の詳細については、PFM・Web Console のアラームの [プロパティ] 画面で確認してください。

設定値の「 - 」は、設定が常に無効であることを示します。

なお、条件式で異常条件と警告条件が同じ場合は、アラームイベントは異常のものだけが発行されます。

関連レポート

このアラームに関連する、監視テンプレートのレポートを示します。PFM・Web Console の [エージェント階層] タブでエージェントアイコンをクリックし、[ア

ラームの状態の表示] メソッドで表示される  アイコンをクリックすると、このレポートを表示できます。

(2) アラーム一覧

ヘルスチェックエージェントの監視テンプレートで定義されているアラームは、「PFM Health Check Template Alarm VV.RR」というアラームテーブルにまとめられています。「VV.RR」は、監視テンプレートのアラームテーブルのバージョンを示します。このアラームテーブルは、PFM・Web Console の [アラーム階層] タブに表示される「HealthCheck」フォルダに格納されています。

ヘルスチェックエージェントのバージョンに対応するデータモデルバージョンとアラームテーブルバージョンを次の表に示します。

ヘルスチェックエージェントのバージョン	データモデルバージョン	アラームテーブルバージョン
08-11	3.0	8.11
08-50	4.0	8.50
09-00 以降	5.0	09.00

また、監視テンプレートで定義されているアラームを次の表に示します。

表 H-11 アラーム一覧

アラームテーブルバージョン	アラームテーブル名	アラーム名	説明
8.11	PFM HealthCheck Solution Alarms 8.11	Status Change	対象エージェントのヘルスチェック状態の変化。
		Abnormal Status(A)	対象エージェントのヘルスチェック状態。
		Abnormal Status(S)	対象エージェントのヘルスチェック状態。
8.50	PFM HealthCheck Solution Alarms 8.50	Status Change	対象エージェントのヘルスチェック状態の変化。
		Abnormal Status(A)	対象エージェントのヘルスチェック状態。
		Abnormal Status(S)	対象エージェントのヘルスチェック状態。

アラームテーブル バージョン	アラームテーブル名	アラーム名	説明
09.00		Host Status Change	対象エージェントホストの稼働状態の変化。
		Host Not Available	対象エージェントホストの稼働状態。
	PFM HealthCheck Template Alarms 09.00	Status Change	対象エージェントのヘルスチェック状態の変化。
		Abnormal Status(A)	対象エージェントのヘルスチェック状態。
		Abnormal Status(S)	対象エージェントのヘルスチェック状態。
		Host Status Change	対象エージェントホストの稼働状態の変化。
		Host Not Available	対象エージェントホストの稼働状態。
	PFM HealthCheck Template Alarms [Service] 09.00	Service State Change	対象エージェントのヘルスチェック状態の変化（リモートエージェントを除く）。
		Service Abnormal(A)	対象エージェントのヘルスチェック状態（リモートエージェントを除く）。
		Service Abnormal(S)	対象エージェントのヘルスチェック状態（リモートエージェントを除く）。

(3) アラーム作成時の留意事項

ヘルスチェックイベントとアラームイベントは、それぞれ発行されるタイミングが異なります。ヘルスチェックイベントが各ホストへのポーリング完了時に随時発行されるのに対し、アラームイベントはレコードの Collection Interval ごとに評価され発行されます。監視テンプレートのアラームを利用する場合、PD_HC および PD_HOST レコードを参照しているため、すべての対象エージェントホストへのポーリングの完了後に評価されます。ユーザーがアラームを作成する場合、アラーム評価は条件式に指定するレコードの Collection Interval ごとに行われることに留意して作成する必要があります。また、アラームの発生するホストは、ヘルスチェックエージェントが動作するホスト（PFM・Manager ホスト）です。アラームに対してアクションを設定する場合、アクションハンドラとして LOCAL を指定すると、PFM・Agent ホストまたは PFM・RM ホ

スト上ではなく、PFM・Manager ホスト上で実行されます。

(4) Status Change

概要

Status Change アラームは、対象エージェントのヘルスチェック状態の変化を監視します。ヘルスチェック状態が変化した Agent がある場合に、対象エージェントごとに 1 件アラームが通知されます。エージェントイベント（ヘルスチェックイベント）と同じ粒度でアラームが必要な場合に使用します。このアラームはデフォルトでは無効に設定されています。

発行されるアラームの重大度は、遷移先のヘルスチェック状態に関係なく、常に警告となります。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	HealthCheck(3.0)
	メッセージテキスト	Status of %CVS2 changed to %CVS3
	アラームを有効にする	なし
	常にアラームを通知する	チェック
	すべてのデータを評価	チェック
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度	指定なし
条件式	レコード名（レコード ID）	Health Check Detail (PD_HC)
	異常条件	Agent Op Status Change = "-1" AND (Agent = "*" AND Agent Op Status = "**")
	警告条件	Agent Op Status Change = "1"AND (Agent = "*" AND Agent Op Status = "**")
アクション	E メール	なし
	コマンド	なし
	SNMP	異常，警告

関連レポート

Reports/HealthCheck/Troubleshooting/Recent Past/ System Overview

(5) Abnormal Status(A)

概要

Abnormal Status (A) アラームは、対象エージェントのヘルスチェック状態を監視します。ヘルスチェック状態が正常でない状態（「非対応」または「動作中」）以外の状

態)に遷移したエージェントがある場合に、対象エージェントごとに1件アラームが通知されます。エージェントごとにヘルスチェック状態の異常を検知したい場合に使用します。このアラームはデフォルトでは無効に設定されています。

発行されるアラームの重大度は、縮退稼働へ遷移した場合に警告となり、サービス停止、状態不明、またはホスト停止へ遷移した場合に異常となります。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	HealthCheck(3.0)
	メッセージテキスト	Status of %CVS2 changed to %CVS3
	アラームを有効にする	なし
	常にアラームを通知する	チェック
	すべてのデータを評価	チェック
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度	指定なし
条件式	レコード名 (レコード ID)	Health Check Detail (PD_HC)
	異常条件	Agent Op Status Change = "1"AND (Agent = "*" AND (Agent Op Status = "*"AND Agent Op Status by Num > "8"))
	警告条件	Agent Op Status Change = "1"AND (Agent = "*" AND (Agent Op Status = "*"AND Agent Op Status by Num > "4"))
アクション	E メール	なし
	コマンド	なし
	SNMP	異常、警告

関連レポート

Reports/HealthCheck/Troubleshooting/Recent Past/ System Overview

(6) Abnormal Status(S)

概要

Abnormal Status (S) アラームは、対象エージェントのヘルスチェック状態を監視します。ヘルスチェック状態が正常でない(「非対応」または「動作中」以外の)状態に遷移したエージェントがある場合に、1ポーリング周期ごとに集約し最大1件のアラームが通知されます。システム単位でヘルスチェック状態の異常を検知したい場合に使用します。このアラームはデフォルトで有効に設定されています。

発行されるアラームの重大度は、縮退稼働へ遷移したエージェントがある場合に警告、サービス停止、状態不明、またはホスト停止へ遷移した Agent がある場合に異常となります。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		
項目	詳細項目	設定値
基本情報	プロダクト	HealthCheck(3.0)
	メッセージテキスト	Transition to abnormal status was detected
	アラームを有効にする	チェック
	常にアラームを通知する	チェック
	すべてのデータを評価	なし
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度	指定なし
条件式	レコード名 (レコード ID)	Health Check Detail (PD_HC)
	異常条件	Agent Op Status Change = "1"AND Agent Op Status by Num > "8"
	警告条件	Agent Op Status Change = "1"AND Agent Op Status by Num > "4"
アクション	E メール	なし
	コマンド	なし
	SNMP	異常, 警告

関連レポート

Reports/HealthCheck/Troubleshooting/Recent Past/ System Overview

(7) Host Status Change

概要

Host Status Change アラームは、対象エージェントホストの稼働状態の変化を監視します。稼働状態が変化したホストがある場合に、対象エージェントホストごとに 1 件アラームが通知されます。ホストの稼働状態の変化をアラームで通知したい場合に使用します。このアラームはデフォルトでは無効に設定されています。発行されるアラームの重大度は、ホストの稼働状態に関係なく常に警告となります。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		
項目	詳細項目	設定値
基本情報	プロダクト	HealthCheck(4.0)
	メッセージテキスト	Host status of %CVS2 changed to %CVS3
	アラームを有効にする	なし

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
	常にアラームを通知する	チェック
	すべてのデータを評価	チェック
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度	指定なし
条件式	レコード名 (レコード ID)	Host Detail(PD_HOST)
	異常条件	Status Change = "-1" AND (Host = "*" AND Status = "*")
	警告条件	Status Change = "1" AND (Host = "*" AND Status = "*")
アクション	E メール	なし
	コマンド	なし
	SNMP	異常, 警告

関連レポート

Reports/HealthCheck/Troubleshooting/Real-Time/Host Status (Real-Time) (4.0)

(8) Host Not Available

概要

Host Not Available アラームは、対象エージェントホストの稼働状態を監視します。稼働状態が停止に遷移したホストがある場合に、対象エージェントホストごとに 1 件アラームが通知されます。ホストの稼働状態の停止を検知したい場合に使用します。このアラームはデフォルトでは無効に設定されています。発行されるアラームの重大度は、異常となります。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	HealthCheck(4.0)
	メッセージテキスト	Host status of %CVS2 changed to Not Available
	アラームを有効にする	なし
	常にアラームを通知する	チェック
	すべてのデータを評価	チェック
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度	指定なし
条件式	レコード名 (レコード ID)	Host Detail(PD_HOST)

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
	異常条件	Status Change = "1" AND (Host = "*" AND Status by Num = "1")
	警告条件	Status Change = "1" AND (Host = "*" AND Status by Num = "1")
アクション	E メール	なし
	コマンド	なし
	SNMP	異常, 警告

関連レポート

Reports/HealthCheck/Troubleshooting/Real-Time/Host Status (Real-Time) (4.0)

(9) Service State Change

概要

Service State Change アラームは、対象エージェントのヘルスチェック状態の変化を監視します。ヘルスチェック状態が変化したエージェントがある場合に、対象エージェントごとに 1 件アラームが通知されます。このアラームはデフォルトでは無効に設定されています。

Status Change アラームと同様に、エージェントイベント（ヘルスチェックイベント）と同じ粒度でアラームが必要な場合に使用してください。ただし、このアラームではリモートエージェントは監視対象外です。したがって、PFM - RM 運用時に、実際にサービスとして稼働している PFM - Agent および PFM - RM だけを監視したい場合に有用なアラームです。

発行されるアラームの重大度は、遷移先のヘルスチェック状態に関係なく、常に警告となります。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	HealthCheck(5.0)
	メッセージテキスト	Status of %CVS3 changed to %CVS4
	アラームを有効にする	なし
	常にアラームを通知する	チェック
	すべてのデータを評価	チェック
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度	指定なし
条件式	レコード名 (レコード ID)	Health Check Detail (PD_HC)

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
	異常条件	Agent Category <> "Remote Agent" AND (Agent Op Status Change = "-1" AND (Agent = "*" AND Agent Op Status = "*"))
	警告条件	Agent Category <> "Remote Agent" AND (Agent Op Status Change = "1" AND (Agent = "*" AND Agent Op Status = "*"))
アクション	E メール	なし
	コマンド	なし
	SNMP	異常, 警告

関連レポート

Reports/HealthCheck/Troubleshooting/Recent Past/ System Overview

(10) Service Abnormal (A)

概要

Service Abnormal (A) アラームは、対象エージェントのヘルスチェック状態を監視します。ヘルスチェック状態が正常でない状態（「非対応」または「動作中」以外の状態）に遷移したエージェントがある場合に、対象エージェントごとに 1 件アラームが通知されます。このアラームはデフォルトでは無効に設定されています。

Abnormal Status (A) アラームと同様に、エージェントごとにヘルスチェック状態の異常を検知したい場合に使用してください。ただし、このアラームではリモートエージェントは監視対象外です。したがって、PFM - RM 運用時に、実際にサービスとして稼働している PFM - Agent および PFM - RM だけを監視したい場合に有用なアラームです。

発行されるアラームの重大度は、縮退稼働へ遷移した場合に警告となり、サービス停止、状態不明、またはホスト停止へ遷移した場合に異常となります。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	HealthCheck(5.0)
	メッセージテキスト	Status of %CVS3 changed to %CVS4
	アラームを有効にする	なし
	常にアラームを通知する	チェック
	すべてのデータを評価	チェック
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度	指定なし

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
条件式	レコード名 (レコード ID)	Health Check Detail (PD_HC)
	異常条件	Agent Category <> "Remote Agent" AND (Agent Op Status Change = "1" AND (Agent = "*" AND (Agent Op Status = "*" AND Agent Op Status by Num > "8")))
	警告条件	Agent Category <> "Remote Agent" AND (Agent Op Status Change = "1" AND (Agent = "*" AND (Agent Op Status = "*" AND Agent Op Status by Num > "4")))
アクション	E メール	なし
	コマンド	なし
	SNMP	異常, 警告

関連レポート

Reports/HealthCheck/Troubleshooting/Recent Past/ System Overview

(11) Service Abnormal (S)

概要

Service Abnormal (S) アラームは、対象エージェントのヘルスチェック状態を監視します。ヘルスチェック状態が正常でない (「非対応」または「動作中」以外の) 状態に遷移したエージェントがある場合に、1 ポーリング周期ごとに集約し最大 1 件のアラームが通知されます。このアラームはデフォルトで有効に設定されています。Abnormal Status (S) アラームと同様に、システム単位でヘルスチェック状態の異常を検知したい場合に使用してください。ただし、このアラームではリモートエージェントは監視対象外です。したがって、PFM - RM 運用時に、実際にサービスとして稼働している PFM - Agent および PFM - RM だけを監視したい場合に有用なアラームです。

発行されるアラームの重大度は、縮退稼働へ遷移した場合に警告となり、サービス停止、状態不明、またはホスト停止へ遷移した場合に異常となります。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	HealthCheck(5.0)
	メッセージテキスト	Transition to abnormal status was detected
	アラームを有効にする	チェック
	常アラームを通知する	チェック

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
	すべてのデータを評価	なし
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度	指定なし
条件式	レコード名 (レコード ID)	Health Check Detail (PD_HC)
	異常条件	Agent Category <> "Remote Agent" AND (Agent Op Status Change = "1"AND Agent Op Status by Num > "8")
	警告条件	Agent Category <> "Remote Agent" AND (Agent Op Status Change = "1"AND Agent Op Status by Num > "4")
アクション	E メール	なし
	コマンド	なし
	SNMP	異常, 警告

関連レポート

Reports/HealthCheck/Troubleshooting/Recent Past/ System Overview

付録 H.4 監視テンプレート (レポート)

(1) レポートの記載形式

ここでは、レポートの記載形式を示します。レポートは、アルファベット順に記載しています。

レポート名

監視テンプレートのレポート名を示します。

概要

このレポートで表示できる情報の概要について説明します。

格納先

このレポートの格納先を示します。

レコード

このレポートで使用するパフォーマンスデータが、格納されているレコードを示します。履歴レポートを表示するためには、この欄に示すレコードを収集するように、あらかじめ設定しておく必要があります。レポートを表示する前に、PFM - Web Console の [エージェント階層] 画面でエージェントのプロパティを表示して、このレコードが「Log = Yes」に設定されているか確認してください。リアルタイムレポートの場合、設定する必要はありません。

フィールド

このレポートで使用するレコードのフィールドについて、表で説明します。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

このレポートのフィールドに関連づけられた、監視テンプレートのレポートを表で説明します。このドリルダウンレポートを表示するには、PFM・Web Console のレポートウィンドウのグラフ、一覧、または表をクリックしてください。履歴レポートの場合、時間項目からドリルダウンレポートを表示することで、より詳細な時間間隔でレポートを表示できます。なお、レポートによってドリルダウンレポートを持つものと持たないものがあります。

ドリルダウンレポートについての詳細は、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働分析のためのレポートの作成について説明している章を参照してください。

（２）レポートのフォルダ構成

ヘルスチェックエージェントのレポートのフォルダ構成を次に示します。＜ ＞内は、フォルダ名を示します。

```
<HealthCheck>
+-- <Monthly Trend>
    +-- System Summary (4.0)
    +-- Hosts Availability (4.0)
    +-- <Drilldown Only>
        +-- Host Availability (4.0)
+-- <Status Reporting>
    +-- System Overview (Historical)
    +-- System Overview (Status Change)
    +-- System Summary (4.0)
    +-- Hosts Availability (4.0)
    +-- <Drilldown Only>
        +-- Host Availability (4.0)
+-- <Troubleshooting>
    +-- <Real-Time>
        +-- System Overview (Real-Time)
        +-- Hosts Status (Real-Time) (4.0)
    +-- <Drilldown Only>
        +-- Agent Detail (Real-Time)
        +--
    +-- <Recent Past>
        +-- System Overview (Historical)
        +-- System Overview (Status Change)
    +-- <Drilldown Only>
        +-- Agent Detail (Historical)
        +-- Agent Overview (Historical)
        +-- Agent Overview (Status Change)
```

各フォルダの説明を次に示します。

「Status Reporting」フォルダ

日、または週ごとに集計された情報を表示するレポートが格納されています。システムの総合的な状態を見るために使用します。

「Troubleshooting」フォルダ

トラブルを解決するのに役立つ情報を表示するレポートが格納されています。システ

ムに問題が発生した場合，問題の原因を調査するために使用します。

- 「Real-Time」フォルダ

現在のシステムの状態を確認するためのリアルタイムレポートが格納されています。

- 「Recent Past」フォルダ

最近 1 時間の 1 分ごとに集計された情報を表示する履歴レポートが格納されています。

さらに，これらのフォルダの下位には，次のフォルダがあります。上位のフォルダによって，どのフォルダがあるかは異なります。各フォルダについて次に説明します。

- 「Advanced」フォルダ

デフォルトで「Log = No」に設定されているレコードを使用しているレポートが格納されています。このフォルダのレポートを表示するには，使用しているレコードの設定を PFM・Web Console で「Log = Yes」にする必要があります。

- 「Drilldown Only」フォルダ

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）として表示されるレポートが格納されています。そのレポートのフィールドに関連する詳細な情報を表示するために使用します。

（３）レポート一覧

監視テンプレートで定義されているレポートをアルファベット順に次の表に示します。

表 H-12 レポート一覧

レポート名	表示する情報
Agent Detail (Historical)	ヘルスチェック結果の詳細
Agent Detail (Real-Time)	ヘルスチェック結果の詳細
Agent Overview (Historical)	ヘルスチェック結果の概要
Agent Overview (Status Change)	ヘルスチェック結果の概要
Host Availability (4.0)	システムを構成するホストの，ホストごとの稼働時間，稼働率などの情報（ドリルダウン先のレポート）
Hosts Availability (4.0)	システムを構成するホストの，ホストごとの稼働時間，稼働率などの情報
Hosts Status (Real-Time) (4.0)	システムを構成するホストの稼働状態
System Overview (Historical)	ヘルスチェック結果の概要
System Overview (Real-Time)	ヘルスチェック結果の概要
System Overview (Status Change)	ヘルスチェック結果の概要
System Summary (4.0)	システムを構成するホストの稼働状態

（４）System Overview (Historical)

概要

System Overview (Historical) レポートは、ヘルスチェック結果の概要を表示します。各エージェントの稼働状態を表で確認できるほか、各エージェントのステータスを数値化した折れ線グラフで時間遷移を確認できます。グラフでは、重大度の高いステータスほど大きな数値になっているため、視覚的に問題個所を確認できます。また、ドリルダウンによって、特定のエージェントやホストについての絞り込みや、特定のエージェントの稼働状態についての詳細レポートに遷移できます。

格納先

Reports/HealthCheck/Status Reporting/Daily Trend
Reports/HealthCheck/Troubleshooting/Recent Past

レコード

Health Check Detail (PD_HC)

フィールド

フィールド名	説明
Polling Date and Time	ポーリング時間
Agent	PFM - Agent または PFM - RM 名
Host	PFM - Agent または PFM - RM ホスト名
Agent Op Status	エージェント稼働状態
Message Text	エージェント稼働状態詳細情報

ドリルダウンレポート (フィールドレベル)

レポート名	説明
Agent Overview (Historical)	選択したエージェントの稼働状態の詳細を表示する。このレポートを表示するには、Agent フィールドまたは Host フィールドをクリックする。
Agent Detail (Historical)	選択したエージェントの稼働状態の詳細を表示する。このレポートを表示するには、Agent Op Status フィールドまたは Agent Op Status by Num フィールドをクリックする。

(5) System Overview (Real-Time)

概要

System Overview (Real-Time) レポートは、最新のヘルスチェック結果の概要を表示します。各エージェントの稼働状態を表で確認できるほか、ドリルダウンによって、特定のエージェントの稼働状態についての詳細レポートに遷移できます。

格納先

Reports/HealthCheck/Troubleshooting/Real-Time

レコード

Health Check Detail (PD_HC)

フィールド

フィールド名	説明
Polling Date and Time	ポーリング時間
Agent	PFM - Agent または PFM - RM 名
Host	PFM - Agent または PFM - RM ホスト名
Agent Op Status	エージェント稼働状態
Message Text	エージェント稼働状態詳細情報

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Agent Detail (Real-Time)	選択したエージェントの稼働状態の詳細を表示する。このレポートを表示するには、Agent Op Status フィールドをクリックする。

(6) System Overview (Status Change)

概要

System Overview (Status Change) レポートは、ヘルスチェック結果の概要を表示します。表示される情報は System Overview (Historical) レポートと同等ですが、ヘルスチェック結果に変化があったフィールドだけが表示されます。グラフ表示はありません。ドリルダウンによって、特定のエージェントやホストについての絞り込みや、特定のエージェントの稼働状態についての詳細レポートに遷移できます。

格納先

Reports/HealthCheck/Status Reporting/Daily Trend
Reports/HealthCheck/Troubleshooting/Recent Past

レコード

Health Check Detail (PD_HC)

フィールド

フィールド名	説明
Polling Date and Time	ポーリング時間
Agent	PFM - Agent または PFM - RM 名
Host	PFM - Agent または PFM - RM ホスト名
Agent Op Status	エージェント稼働状態
Message Text	エージェント稼働状態詳細情報

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Agent Overview (Status Change)	選択したエージェントの稼働状態の詳細を表示する。このレポートを表示するには、Agent フィールドまたは Host フィールドをクリックする。
Agent Detail (Historical)	選択したエージェントの稼働状態の詳細を表示する。このレポートを表示するには、Agent Op Status フィールドをクリックする。

(7) System Summary (4.0)

概要

System Summary (4.0) レポートは、ヘルスチェック結果を基に、システムを構成するホストの稼働状態を表示します。稼働状態は表で確認できるほか、全ホスト台数、稼働ホスト台数の折れ線グラフで時間遷移を確認できます。Num of Available Hosts (Max) と Num of Available Hosts (Min) で値が異なる場合、その要約期間内に稼働ホスト台数が変化したことを表します。

注意

ホストの稼働、停止のタイミングによって、Num of Available Hosts (Max) と Num of Available Hosts (Min) に変化がない場合でも、実際に稼働しているホストが変化していることがあります。

格納先

Reports/HealthCheck/Monthly Trend
Reports/HealthCheck/Status Reporting/Daily Trend

レコード

System Overview (PI_SYS)

フィールド

フィールド名	説明
Num of Hosts (Max)	システム内の全ホスト台数（最大値）
Num of Available Hosts (Max)	システム内の稼働ホスト台数（最大値）
Num of Available Hosts (Min)	システム内の稼働ホスト台数（最小値）
% Available Hosts	システム内の稼働ホスト率（%）

(8) Agent Overview (Historical)

概要

Agent Overview (Historical) レポートは、ヘルスチェック結果の概要を表示します。各エージェントの稼働状態を表で確認できるほか、各エージェントのステータスを数値化した折れ線グラフで時間遷移を確認できます。グラフでは、重大度の高いス

データほど大きな数値になっているため、視覚的に問題個所を確認できます。また、ドリルダウンによって、特定のエージェントの稼働状態についての詳細レポートに遷移できます。

格納先

Reports/HealthCheck/Troubleshooting/Recent Past/Drilldown Only

レコード

Health Check Detail (PD_HC)

フィールド

フィールド名	説明
Polling Date and Time	ポーリング時間
Agent	PFM - Agent または PFM - RM 名
Host	PFM - Agent または PFM - RM ホスト名
Agent Op Status	エージェント稼働状態
Message Text	エージェント稼働状態詳細情報

ドリルダウンレポート (フィールドレベル)

レポート名	説明
Agent Detail (Historical)	選択したエージェントの稼働状態の詳細を表示する。このレポートを表示するには、Agent Op Status フィールドまたは Agent Op Status by Num フィールドをクリックする。

(9) Agent Overview (Status Change)

概要

Agent Overview (Status Change) レポートは、ヘルスチェック結果の概要を表示します。表示される情報は Agent Overview (Historical) レポートと同等ですが、ヘルスチェック結果に変化があったフィールドだけが表示されます。グラフ表示はありません。ドリルダウンによって、特定のエージェントの稼働状態についての詳細レポートに遷移できます。System Overview (Status Change) レポートからドリルダウンで遷移できます。

格納先

Reports/HealthCheck/Troubleshooting/Recent Past/Drilldown Only

レコード

Health Check Detail (PD_HC)

フィールド

フィールド名	説明
Polling Date and Time	ポーリング時間
Agent	PFM - Agent または PFM - RM 名
Host	PFM - Agent または PFM - RM ホスト名
Agent Op Status	エージェント稼働状態
Message Text	エージェント稼働状態詳細情報

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Agent Detail (Historical)	選択したエージェントの稼働状態の詳細を表示する。このレポートを表示するには、Agent Op Status フィールドをクリックする。

(10) Host Availability (4.0)

概要

Host Availability (4.0) レポートは、ヘルスチェック結果を基に、システムを構成するホストごとの稼働時間、稼働率などの情報を表示します。稼働状態は表で確認できるほか、ホストごとの稼働率の折れ線グラフで時間遷移を視覚的に確認できます。Hosts Availability (4.0) レポートからドリルダウンで遷移します。

格納先

Reports/HealthCheck/Monthly Trend/Drilldown Only
Reports/HealthCheck/Status Reporting/Daily Trend/Drilldown Only

レコード

Host Availability (PI_HAVL)

フィールド

フィールド名	説明
Host	ホスト名
Availability	稼働率（％）
Total Available Time	監視時間における稼働時間（秒）
Total Monitoring Time	監視時間（秒）

(11) Hosts Availability (4.0)

概要

Hosts Availability (4.0) レポートは、ヘルスチェック結果を基に、システムを構成するホストごとの稼働時間、稼働率などの情報を表示します。稼働状態は表で確認できるほか、ホストごとの稼働率の折れ線グラフで時間遷移を視覚的に確認できます。

また，ドリルダウンによって，特定のホストだけを表示するよう絞り込みができます。

格納先

Reports/HealthCheck/Monthly Trend

Reports/HealthCheck/Status Reporting/Daily Trend

レコード

Host Availability (PI_HAVL)

フィールド

フィールド名	説明
Host	ホスト名
Availability	稼働率 (%)
Total Available Time	監視時間における稼働時間 (秒)
Total Monitoring Time	監視時間 (秒)

(12) Hosts Status (Real-Time) (4.0)

概要

Hosts Status (Real-Time) (4.0) レポートは，ヘルスチェック結果を，システムを構成するホストごとに集約した形式で表示します。

格納先

Reports/HealthCheck/Troubleshooting/Real-Time

レコード

Host Detail (PD_HOST)

フィールド

フィールド名	説明
Polling Date and Time	ポーリング日時
Host	ホスト名
Status	ホストの状態

(13) Agent Detail (Historical)

概要

Agent Detail (Historical) レポートは，ヘルスチェック結果の詳細を表示します。エージェントの稼働状態の詳細を一覧で確認できます。特定のエージェントについて詳細な情報を確認したい場合に利用します。
System Overview (Historical / Status Change) レポートおよび Agent Overview (Historical / Status Change) レポートからドリルダウンで遷移できます。

格納先

Reports/HealthCheck/Troubleshooting/Recent Past/Drilldown Only

レコード

Health Check Detail (PD_HC)

フィールド

フィールド名	説明
Polling Date and Time	ポーリング時間
Agent	PFM - Agent または PFM - RM 名
Host	PFM - Agent または PFM - RM ホスト名
Agent Op Status	エージェント稼働状態
Collector Op Status	Agent Collector および Remote Monitor Collector サービスの稼働状態
Collector Op Status Last-Updated	Agent Collector および Remote Monitor Collector サービスの稼働状態更新時刻
Store Op Status	Agent Store および Remote Monitor Store サービスの稼働状態
Store Op Status Last-Updated	Agent Store および Remote Monitor Store サービスの稼働状態更新時刻
AH Op Status	Action Handler サービスの稼働状態
AH Op Status Last-Updated	Action Handler サービスの稼働状態更新時刻
Message Text	エージェント稼働状態詳細情報

(14) Agent Detail (Real-Time)

概要

Agent Detail (Real-Time) レポートは、ヘルスチェック結果の詳細を表示します。エージェントの稼働状態の詳細を一覧で確認できます。特定のエージェントについて詳細な情報を確認したい場合に利用します。System Overview (Real-Time) レポートからドリルダウンで遷移できます。

格納先

Reports/HealthCheck/Troubleshooting/Real-Time/Drilldown Only

レコード

Health Check Detail (PD_HC)

フィールド

フィールド名	説明
Polling Date and Time	ポーリング時間

フィールド名	説明
Agent	PFM - Agent または PFM - RM 名
Host	PFM - Agent または PFM - RM ホスト名
Agent Op Status	エージェント稼働状態
Collector Op Status	Agent Collector および Remote Monitor Collector サービスの稼働状態
Collector Op Status Last-Updated	Agent Collector および Remote Monitor Collector サービスの稼働状態更新時刻
Store Op Status	Agent Store および Remote Monitor Store サービスの稼働状態
Store Op Status Last-Updated	Agent Store および Remote Monitor Store サービスの稼働状態更新時刻
AH Op Status	Action Handler サービスの稼働状態
AH Op Status Last-Updated	Action Handler サービスの稼働状態更新時刻
Message Text	エージェント稼働状態詳細情報

付録 I コマンドの格納先

Performance Management の操作で使用するコマンドの格納先を説明します。

付録 I.1 コマンドの種類と格納先

Performance Management の操作で使用するコマンドには次の種類があり、それぞれ格納先が異なります。

表 I-1 PFM - Manager および PFM - Base のコマンド

OS	コマンドの格納先
Windows の場合	PFM - Manager または PFM - Base のインストール先フォルダ ¥tools¥
UNIX の場合	/opt/jplpc/tools/

表 I-2 PFM - Web Console のコマンド

OS	コマンドの格納先
Windows の場合	PFM - WebConsole のインストール先フォルダ ¥tools¥
UNIX の場合	/opt/jplpcwebcon/tools/

付録 I.2 コマンドごとの格納先一覧

Performance Management の操作で使用するコマンドについて、コマンド名および格納先について次の表に示します。記載順序はコマンド名のアルファベット順です。

表 I-3 コマンドの格納先

コマンド名	格納先	コマンド名	格納先
jpcaspsv output	表 I-2	jpcaspsv update	表 I-2
jpcasrec output	表 I-2	jpcasrec update	表 I-2
jpccconf agent setup	表 I-1	jpccconf agttree export	表 I-1
jpccconf agttree import	表 I-1	jpccconf bgdef check	表 I-1
jpccconf bgdef delete	表 I-1	jpccconf bgdef display	表 I-1
jpccconf bgdef export	表 I-1	jpccconf bgdef import	表 I-1
jpccconf bgdef list	表 I-1	jpccconf db define	表 I-1
jpccconf db display	表 I-1	jpccconf db vrset	表 I-1
jpccconf ha export	表 I-1	jpccconf ha import	表 I-1
jpccconf ha list	表 I-1	jpccconf ha setup	表 I-1
jpccconf ha unsetup	表 I-1	jpccconf hc disable	表 I-1

コマンド名	格納先	コマンド名	格納先
jpccconf hc display	表 I-1	jpccconf hc enable	表 I-1
jpccconf host hostmode	表 I-1	jpccconf host hostname	表 I-1
jpccconf im disable	表 I-1	jpccconf im enable	表 I-1
jpccconf inst list	表 I-1	jpccconf inst setup	表 I-1
jpccconf inst unsetup	表 I-1	jpccconf mgrhost define	表 I-1
jpccconf mgrhost display	表 I-1	jpccconf ov disable	表 I-1
jpccconf ov enable	表 I-1	jpccconf port define	表 I-1
jpccconf port list	表 I-1	jpccconf prodname disable	表 I-1
jpccconf prodname display	表 I-1	jpccconf prodname enable	表 I-1
jpccconf stat disable	表 I-1	jpccconf stat display	表 I-1
jpccconf stat enable	表 I-1	jpccconf target display	表 I-1
jpccconf target list	表 I-1	jpccconf target setup	表 I-1
jpccconf target unsetup	表 I-1	jpcimevt	表 I-1
jpcmkkey	表 I-2	jpcprocdef create	表 I-2
jpcprocdef delete	表 I-2	jpcprocdef list	表 I-2
jpcprocdef output	表 I-2	jpcras	表 I-1
jpcrdef create	表 I-2	jpcrdef delete	表 I-2
jpcrdef output	表 I-2	jpcrpt	表 I-2
jpcspm start	表 I-1	jpcspm stop	表 I-1
jpctool alarm active	表 I-1	jpctool alarm bind	表 I-1
jpctool alarm check	表 I-1	jpctool alarm copy	表 I-1
jpctool alarm delete	表 I-1	jpctool alarm export	表 I-1
jpctool alarm import	表 I-1	jpctool alarm inactive	表 I-1
jpctool alarm list	表 I-1	jpctool alarm unbind	表 I-1
jpctool db backup	表 I-1	jpctool db clear	表 I-1
jpctool db dmconvert	表 I-1	jpctool db dump	表 I-1
jpctool db import	表 I-1	jpctool db restore	表 I-1
jpctool service delete	表 I-1	jpctool service list	表 I-1
jpctool service register	表 I-1	jpctool service sync	表 I-1
jpcwagtsetup	表 I-2	jpcwras	表 I-2
jpcwstart	表 I-2	jpcwstop	表 I-2

付録 J 各バージョンの変更内容

付録 J.1 09-10 の変更内容

一般ユーザー権限のユーザーに対して、エージェント階層の参照を制限できるようにしました。

セットアップコマンドを非対話形式で実行できるようにしました。

次のコマンドでエージェント階層を作成および編集できるようにしました。

- `jpccconf agttree export`
エージェント階層定義ファイルをエクスポートするコマンド
- `jpccconf agttree import`
エージェント階層定義ファイルをインポートするコマンド

バージョン 09-00 以降の PFM - Manager をインストールした場合のヘルスチェック機能の設定状態について記載しました。

監視コンソールの Web ブラウザとして Internet Explorer 8.0 をサポートしました。

同一ユーザーの PFM - Web Console への多重ログインの可否を設定できるようにしました。

レポート表示時にメモリーに保持されるキャッシュをディスク上のファイルに出力できるようにしました。

レポート印刷画面および HTML 形式レポートに表示する表データの最大行数を制限できるようにしました。

レポートの凡例の数が多い場合に、レポートをページ分割できるようにしました。

エージェント階層から PFM - Agent for Platform および PFM - RM for Platform のプロセス監視を設定できるようにしました。

グラフでの最大ドリルダウンデータ数を制限できるようにしました。

JP1 イベントを発行する場合に PFM - Web Console の [新規アラーム > アクション定義] または [編集 > アクション定義] 画面にデフォルトで選択される Action Handler サービスの決定方法を選択できるようにしました。

複数インスタンスレコードをアラーム監視している場合に、フィールドの値が正常域内に戻ったことを通知できるようにしました。

Master Store サービスの Store データベースにイベントデータを格納する場合に必要なとするディスク占有量の見積もり式を追加しました。

ヘルスチェックエージェントのデータモデルに次の項目を記載しました。

- レコードの記載形式
- ODBC キーフィールド一覧
- 要約ルール

- データ型一覧
- フィールドの値
- Store データベースに格納されているデータをエクスポートすると出力されるフィールド

付録 J.2 09-00 の変更内容

Performance Management 製品に次のプログラムプロダクトを追加し、リモート監視に対応しました。

PFM - RM

Performance Management のサービスで発生する事象を、JP1 システムイベントまたはエージェントイベントで通知できるようにしました。

プロダクト名表示機能を追加し、サービスキーとサービス ID を新しい形式で表示・指定できるようにしました。

08-51 以前のコマンドと互換性を持つ新形式のコマンドを追加しました。また、オプション形式を統一しました。

システム全体やサービスの最新稼働状況の概要を、サマリ表示画面で監視できるようにしました。

タイリング表示機能を追加し、複数の履歴レポートのグラフをサムネイル画像で表示できるようにしました。

フィールド検索機能を追加し、アラームやレポートの設定時に設定したい情報をキーワードとして監視項目を検索できるようにしました。

クイックガイド機能を追加し、従来のレポート定義手順を実行することなくレポートを表示できるようにしました。また、アラーム定義手順を簡易化しました。

レポート表示画面から表示レポート定義を編集できるようになりました。

Performance Management 製品稼働ホストのホスト名を変更する手順を簡易化しました。

PFM - Manager、PFM - Base および PFM - Web Console のサービスの起動・停止を連携できるようにしました。

監視コンソールの Web ブラウザとして Internet Explorer 7.0 および Firefox 3 を追加しました。

監視コンソールの Web ブラウザとして Mozilla を削除しました。

仮想環境の監視エージェントを追加しました。

Windows、UNIX、Oracle および Microsoft SQL Server のリモートモニターを追加しました。

「ソリューションセット」の名称を「監視テンプレート」に変更しました。

ヘルスチェックエージェントの監視テンプレートのアラームテーブルのバージョンを 8.50 から 09.00 に変更しました。

ヘルスチェックエージェントの監視テンプレートのアラームテーブルを、次の名称に変更しました。

PFM HealthCheck Template Alarms

付録 J.3 08-50 の変更内容（適用 OS が Windows Server 2008）

Windows Server 2008 をサポートしました。

レポートのグラフ画像を時刻補正して表示できるようにしました。

付録 J.4 08-50 の変更内容（適用 OS が Windows Server 2008 以外）

運用中に異常停止となった PFM サービスを自動的に再起動できるようにしました。

監視エージェントに複数のアラームテーブルをバインドできるようにしました。

同名のホストが複数ある環境で Performance Management を使用できるようにしました。

Performance Management のセットアップを簡易化しました。

UNIX 環境で PFM - Web Console を利用できるようにしました。

バージョン 08-50 では、Solaris のパッチをインストールする必要がある旨追記しました。

ヘルスチェックエージェントのデータモデルバージョンに 4.0 を追加しました。これに伴い、PI_HAVL、PD_HOST、PI_SYS レコードを追加しました。

ヘルスチェックエージェントの監視テンプレートのアラームテーブルバージョンに 8.50 を追加しました。これに伴い、Host Status Change アラーム、Host Not Available アラームを追加しました。

ヘルスチェックエージェントの監視テンプレートのレポートに Host Availability(4.0)、Hosts Availability (4.0)、Hosts Status (Real-Time) (4.0)、System Summary (4.0) を追加しました。

付録 J.5 08-11 の変更内容

監視エージェントとして、IBM WebSphere Application Server および IBM WebSphere MQ を追加しました。

ヘルスチェック機能サポートによって、監視エージェントや監視エージェントが稼働

するホストの稼働状態を監視できるようにしました。

PFM - Web Console のツリービューの表示を改善しました。

GUI からレポートを HTML 形式で出力できるようにしました。

監視コンソールの Web ブラウザとして Firefox を利用できるようにしました。

ユーザー操作または自動更新がされないまま一定時間が経過した場合に自動ログアウトするためのタイムアウト時間を指定できるようにしました。

PFM - Agent 固有のプロパティを一括配布できるようにしました。

ブックマーク中の登録レポート、複合ブックマーク中の複合レポートをコマンドから出力できるようにしました。

付録 J.6 08-10 の変更内容

Store バージョン 2.0 をサポートしました。

監視エージェントとして BEA WebLogic Server を追加しました。

jpccrpt コマンドでレポートを HTML 出力できるようにしました。

複数のレポートを重ね合わせて表示できるようにしました。

動作ログを出力できるようにしました。

Windows を使用する場合のファイル権限を強化しました。

HP-UX(IPF) で PFM - Manager を利用できるようにしました。

Linux で PFM - Web Console を利用できるようにしました。

Linux で、LANG 環境変数に UTF-8 を使用できるようにしました。

エージェントにプロパティを配布できるようにしました。

ブックマークおよび複合ブックマークに登録されているレポートをドリルダウンレポートとして表示できるようにしました。

レポート階層からレポートの定義内容を表示できるようにしました。

エージェント階層からブックマークにレポートを登録できるようにしました。

アラームテーブルに関連づけた監視エージェントを表示できるようにしました。

付録 J.7 08-00 の変更内容

監視基盤として PFM - Base を追加しました。

監視コンソールサーバとして PFM - Web Console を追加しました。

付録 J.8 07-50 の変更内容

Performance Management のサービスのステータスを管理するための「ステータス管理機能 (Status Server サービス)」を追加しました。

Performance Management の共通メッセージログの内容を JP1 イベントに変換する機能である「ログファイルラップ機能」を追加しました。

Performance Management が出力する共通メッセージログの保存方法として「ラップアラウンドファイル (jpclogw) 方式」を追加し、次の二つの方式から選択できるようにしました。

- シーケンシャルファイル (jpclog) 方式 (従来方式)
- ラップアラウンドファイル (jpclogw) 方式

jpcras コマンドで Windows イベントログを採取できるようにしました。

付録 J.9 07-00 の変更内容

PFM・Manager および PFM・View の適用 OS を次の表のように変更しました。

プログラム名	変更内容
PFM・Manager	Windows Server 2003 を追加した。 Windows NT を削除した。
PFM・View	Windows Server 2003 を追加した。 Windows NT および AIX を削除した。

複数の LAN に接続されたネットワーク環境での運用をサポートしました。

スタンドアロンモードで PFM・Agent を起動する機能をサポートしました。

jpchasetup import コマンドの実行で待機系ノードにコピーできる設定情報に、ポート番号の設定を追加しました。

JP1/IM・Central Scope との連携機能をサポートしました。

インストール時の障害を出力するインストールログファイルを追加しました。

Master Store サービスまたは Agent Store サービス起動時に実行していた Store データベースのインデックスファイルの作成処理を、バージョンアップインストール時、またはデータベースのリストア時に実行するように変更しました。

レポート出力処理の監視時間を設定できるようにしました。

付録 K (3020-3-R31-31) の変更内容

3020-3-R31-31 の変更内容を表 K-1 に示します。

表 K-1 (3020-3-R31-31) の変更内容

#	変更箇所	追加・変更内容														
1	前書き	<p>対象製品</p> <p>[追加]</p> <p>P-812C-AA91 JP1/Performance Management - Manager 09-50 (適用 OS : Linux Server 6 (32-bit x86) , Linux Server 6 (64-bit x86_64))</p> <p>P-812C-AJ91 JP1/Performance Management - Base 09-50 (適用 OS : Linux Server 6 (32-bit x86) , Linux Server 6 (64-bit x86_64))</p> <p>P-812C-AR91 JP1/Performance Management - Web Console 09-50 (適用 OS : Linux Server 6 (32-bit x86) , Linux Server 6 (64-bit x86_64))</p>														
2	はじめに	<p>新旧対応表</p> <p>[訂正前]</p> <p>マニュアル「JP1 Version 8 JP1/Performance Management システム構築・運用ガイド」(3020-3-K61-80) とこのマニュアル「JP1 Version 9 JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」(3020-3-R31-30) との対応は次のようになっています。</p> <table><tr><td>JP1 Version 8 JP1/Performance Management システム構築・運用ガイド (3020-3-K61-80)</td><td>JP1 Version 9 JP1/Performance Management 設計・構築ガイド (3020-3-R31-30)</td></tr><tr><td>:</td><td>:</td></tr></table> <p>[訂正後]</p> <p>マニュアル「JP1 Version 8 JP1/Performance Management システム構築・運用ガイド」(3020-3-K61-80) とこのマニュアル「JP1 Version 9 JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」(3020-3-R31) との対応は次のようになっています。</p> <table><tr><td>JP1 Version 8 JP1/Performance Management システム構築・運用ガイド (3020-3-K61-80)</td><td>JP1 Version 9 JP1/Performance Management 設計・構築ガイド (3020-3-R31)</td></tr><tr><td>:</td><td>:</td></tr></table>	JP1 Version 8 JP1/Performance Management システム構築・運用ガイド (3020-3-K61-80)	JP1 Version 9 JP1/Performance Management 設計・構築ガイド (3020-3-R31-30)	:	:	JP1 Version 8 JP1/Performance Management システム構築・運用ガイド (3020-3-K61-80)	JP1 Version 9 JP1/Performance Management 設計・構築ガイド (3020-3-R31)	:	:						
JP1 Version 8 JP1/Performance Management システム構築・運用ガイド (3020-3-K61-80)	JP1 Version 9 JP1/Performance Management 設計・構築ガイド (3020-3-R31-30)															
:	:															
JP1 Version 8 JP1/Performance Management システム構築・運用ガイド (3020-3-K61-80)	JP1 Version 9 JP1/Performance Management 設計・構築ガイド (3020-3-R31)															
:	:															
3	はじめに	<p>このマニュアルでの表記</p> <p>[追加]</p> <table><tr><th colspan="3">このマニュアルでの表記</th><th>正式名称</th></tr><tr><td colspan="3">:</td><td>:</td></tr><tr><td rowspan="2">Linux</td><td rowspan="2">Linux Server 6</td><td>Linux Server 6 (32-bit x86)</td><td>Red Hat Enterprise Linux(R) Server 6 (32-bit x86)</td></tr><tr><td>Linux Server 6 (64-bit x86_64)</td><td>Red Hat Enterprise Linux(R) Server 6 (64-bit x86_64)</td></tr></table>	このマニュアルでの表記			正式名称	:			:	Linux	Linux Server 6	Linux Server 6 (32-bit x86)	Red Hat Enterprise Linux(R) Server 6 (32-bit x86)	Linux Server 6 (64-bit x86_64)	Red Hat Enterprise Linux(R) Server 6 (64-bit x86_64)
このマニュアルでの表記			正式名称													
:			:													
Linux	Linux Server 6	Linux Server 6 (32-bit x86)	Red Hat Enterprise Linux(R) Server 6 (32-bit x86)													
		Linux Server 6 (64-bit x86_64)	Red Hat Enterprise Linux(R) Server 6 (64-bit x86_64)													

#	変更箇所	追加・変更内容
4	3.4.3	<p>監視項目の検討 (2) レポートの検討 (b) どの項目をデータベースに保存するか</p> <p>[訂正前]</p> <ul style="list-style-type: none"> パフォーマンスデータの収集間隔とタイミング 監視項目が多数あると、収集処理および記録処理がある時点で集中するため、性能が低下することがあります。 <p>[訂正後]</p> <ul style="list-style-type: none"> パフォーマンスデータの収集間隔とタイミング 監視項目が多数あると、収集処理および記録処理がある時点で集中するため、性能が低下します。
5	4.2	<p>パフォーマンスデータを収集・管理する機能</p> <p>[訂正前]</p> <ul style="list-style-type: none"> パフォーマンスデータの収集間隔とタイミング パフォーマンスデータを収集する間隔を設定できます。また、監視項目が多数あると、収集処理および記録処理がある時点で集中するため、性能が低下することがあります。 <p>[訂正後]</p> <ul style="list-style-type: none"> パフォーマンスデータの収集間隔とタイミング パフォーマンスデータを収集する間隔を設定できます。また、監視項目が多数あると、収集処理および記録処理がある時点で集中するため、性能が低下します。
6	5.1.1	<p>インストールとセットアップの前に (4) ネットワーク環境の設定 (a) IP アドレスの設定</p> <p>注意</p> <p>[追加]</p> <ul style="list-style-type: none"> PFM - Manager ホストにホスト名を二つ以上設定している場合、システム上の PFM - Agent または PFM - RM ホストで <code>jpccconf mgrhost define</code> コマンドにより設定する接続先 PFM - Manager ホストのホスト名は、次のようにする必要があります。 PFM - Manager の監視ホスト名に実ホスト名を使用している場合 Windows システムでは <code>hostname</code> コマンド、UNIX システムでは <code>uname -n</code> コマンドを実行して確認したホスト名 PFM - Manager の監視ホスト名にエイリアス名を使用している場合 設定しているエイリアス名
7	5.1.1	<p>インストールとセットアップの前に (8) 注意事項 (f) その他の注意事項</p> <p>[訂正前]</p> <ul style="list-style-type: none"> ウィルス検出プログラム ウィルス検出プログラムを停止してから Performance Management のプログラムをインストールすることを推奨します。 <p>[訂正後]</p> <ul style="list-style-type: none"> ウィルス検出プログラム ウィルス検出プログラムを停止してから Performance Management のプログラムをインストールしてください。

#	変更箇所	追加・変更内容
8	5.3.1	<p>ネットワーク構成の変更</p> <p>(1) PFM・Manager ホスト，および PFM・Agent または PFM・RM ホストでの作業手順</p> <p>(b) ポート番号を設定する</p> <p>補足</p> <p>[訂正前]</p> <p>運用での混乱を避けるため，Performance Management システム全体でポート番号とサービス名の対応を統一してください。</p> <p>[訂正後]</p> <p>Name Server サービスに設定するポート番号については，Performance Management システム内の全ホストで同じ番号にする必要があります。</p> <p>また，Status Server サービスに設定するポート番号についても，Performance Management システム内の全ホストで同じ番号にする必要があります。</p> <p>他の JP1/PFM サービスについても運用での混乱を避けるため，Performance Management システム全体でポート番号とサービス名の対応を統一してください。</p>

#	変更箇所	追加・変更内容												
9	5.3.3	<p>Performance Management システムでのホスト名の変更</p> <p>(1) PFM - Manager ホストの監視ホスト名を変更する</p> <p>7. 必要に応じて, PFM - Agent 固有の手順を実行する。</p> <p>表 5-11 PFM - Agent 固有の手順の要否</p> <p>[訂正前]</p>												
		<table><tr><th colspan="2">構成</th><th>手順の要否と参照先</th></tr><tr><td colspan="2">PFM - Managerホストにインストールされているのが, PFM - Agent 09-00以降の場合</td><td>PFM - Agent固有の手順の要否は, PFM - Agentごとに異なります。PFM - Agent固有の手順については, 各 PFM - Agentマニュアルの, インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。</td></tr><tr><td>PFM - Managerホストにインストールされているのが, PFM - Agent 09-00未満の場合</td><td>次のPFM - Agentの場合 ・ PFM - Agent for Cosminexus ・ PFM - Agent for Domino※ ・ PFM - Agent for Enterprise Applications ・ PFM - Agent for Microsoft SQL Server</td><td rowspan="2">PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(4) ホスト名変更の際に, 必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。</td></tr><tr><td></td><td>上記以外の場合 (PFM - Managerホストにインストールされているのが, PFM - RMの場合を含む)</td></tr></table>		構成		手順の要否と参照先	PFM - Managerホストにインストールされているのが, PFM - Agent 09-00以降の場合		PFM - Agent固有の手順の要否は, PFM - Agentごとに異なります。PFM - Agent固有の手順については, 各 PFM - Agentマニュアルの, インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。	PFM - Managerホストにインストールされているのが, PFM - Agent 09-00未満の場合	次のPFM - Agentの場合 ・ PFM - Agent for Cosminexus ・ PFM - Agent for Domino※ ・ PFM - Agent for Enterprise Applications ・ PFM - Agent for Microsoft SQL Server	PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(4) ホスト名変更の際に, 必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。		上記以外の場合 (PFM - Managerホストにインストールされているのが, PFM - RMの場合を含む)
構成		手順の要否と参照先												
PFM - Managerホストにインストールされているのが, PFM - Agent 09-00以降の場合		PFM - Agent固有の手順の要否は, PFM - Agentごとに異なります。PFM - Agent固有の手順については, 各 PFM - Agentマニュアルの, インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。												
PFM - Managerホストにインストールされているのが, PFM - Agent 09-00未満の場合	次のPFM - Agentの場合 ・ PFM - Agent for Cosminexus ・ PFM - Agent for Domino※ ・ PFM - Agent for Enterprise Applications ・ PFM - Agent for Microsoft SQL Server	PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(4) ホスト名変更の際に, 必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。												
	上記以外の場合 (PFM - Managerホストにインストールされているのが, PFM - RMの場合を含む)													
		<p>注※</p> <p>PFM - Agent for Dominoのヘルスチェック機能を使用している場合だけ, PFM - Agent固有の手順が必要になります。</p>												

#	変更箇所	追加・変更内容												
		[訂正後]												
		<table><tr><th colspan="2">構成</th><th>手順の要否と参照先</th></tr><tr><td colspan="2">PFM - Managerホストにインストールされているのが、 PFM - Agent 09-00以降の場合</td><td>PFM - Agent固有の手順の要否は、 PFM - Agentごとに異なります。 PFM - Agent固有の手順については、 各 PFM - Agentマニュアルの、 インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。</td></tr><tr><td rowspan="2">PFM - Managerホストにインストールされているのが、 PFM - Agent 09-00未満の場合</td><td>次のPFM - Agentの場合<ul style="list-style-type: none">• PFM - Agent for Cosminexus• PFM - Agent for Domino• PFM - Agent for Enterprise Applications• PFM - Agent for Microsoft SQL Server</td><td rowspan="2">PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(4) ホスト名変更の際に、 必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。</td></tr><tr><td>上記以外の場合</td><td>PFM - Agent固有の手順は不要です。</td></tr></table>		構成		手順の要否と参照先	PFM - Managerホストにインストールされているのが、 PFM - Agent 09-00以降の場合		PFM - Agent固有の手順の要否は、 PFM - Agentごとに異なります。 PFM - Agent固有の手順については、 各 PFM - Agentマニュアルの、 インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。	PFM - Managerホストにインストールされているのが、 PFM - Agent 09-00未満の場合	次のPFM - Agentの場合 <ul style="list-style-type: none">• PFM - Agent for Cosminexus• PFM - Agent for Domino• PFM - Agent for Enterprise Applications• PFM - Agent for Microsoft SQL Server	PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(4) ホスト名変更の際に、 必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。	上記以外の場合	PFM - Agent固有の手順は不要です。
構成		手順の要否と参照先												
PFM - Managerホストにインストールされているのが、 PFM - Agent 09-00以降の場合		PFM - Agent固有の手順の要否は、 PFM - Agentごとに異なります。 PFM - Agent固有の手順については、 各 PFM - Agentマニュアルの、 インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。												
PFM - Managerホストにインストールされているのが、 PFM - Agent 09-00未満の場合	次のPFM - Agentの場合 <ul style="list-style-type: none">• PFM - Agent for Cosminexus• PFM - Agent for Domino• PFM - Agent for Enterprise Applications• PFM - Agent for Microsoft SQL Server	PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(4) ホスト名変更の際に、 必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。												
	上記以外の場合		PFM - Agent固有の手順は不要です。											

#	変更箇所	追加・変更内容	
10	5.3.3	Performance Management システムでのホスト名の変更 (2) PFM - Agent または PFM - RM ホストの監視ホスト名を変更する 5. 必要に応じて、PFM - Agent 固有の手順を実行する。 表 5-12 PFM - Agent 固有の手順の要否 [訂正前]	
		構成	手順の要否と参照先
		監視ホスト名を変更するのが、PFM - Agent 09-00以降の場合	PFM - Agent固有の手順の要否は、PFM - Agentごとに異なります。PFM - Agent固有の手順については、各 PFM - Agentマニュアルの、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。
		監視ホスト名を変更するのが、PFM - Agent 09-00未満の場合	次のPFM - Agentの場合。 <ul style="list-style-type: none"> ・ PFM - Agent for Cosminexus ・ PFM - Agent for Domino※ ・ PFM - Agent for Enterprise Applications ・ PFM - Agent for Microsoft SQL Server PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(4) ホスト名変更の際に、必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。
		上記以外の場合（監視ホストを変更するのが、PFM - RMの場合を含む）	PFM - Agent固有の手順は不要です。
		注※ PFM - Agent for Dominoのヘルスチェック機能を使用している場合だけ、PFM - Agent固有の手順が必要になります。	

#	変更箇所	追加・変更内容	
		[訂正後]	
		構成	手順の可否と参照先
		監視ホスト名を変更するのが、PFM - Agent 09-00以降の場合	PFM - Agent固有の手順の可否は、PFM - Agentごとに異なります。PFM - Agent固有の手順については、各 PFM - Agentマニュアルの、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。
		監視ホスト名を変更するのが、PFM - Agent 09-00未満の場合	次の PFM - Agent の場合。 <ul style="list-style-type: none"> ・ PFM - Agent for Cosminexus ・ PFM - Agent for Domino ・ PFM - Agent for Enterprise Applications ・ PFM - Agent for Microsoft SQL Server
		上記以外の場合	PFM - Agent固有の手順は不要です。
11	5.3.3	Performance Management システムでのホスト名の変更 (2) PFM - Agent または PFM - RM ホストの監視ホスト名を変更する 10. アラームの設定を更新する。 [削除] ・ アクションで JP1 イベントを発行している場合 アクションの JP1 イベントの設定を再度行ってください。	

#	変更箇所	追加・変更内容												
12	5.3.4	<p>運用開始後のマシンの物理ホスト名の変更 (1) PFM - Manager ホスト名を変更する 7. 必要に応じて, PFM - Agent 固有の手順を実行する。 表 5-14 PFM - Agent 固有の手順の要否 [訂正前]</p> <table><tr><th colspan="2">構成</th><th>手順の要否と参照先</th></tr><tr><td colspan="2">PFM - Managerホストにインストールされているのが, PFM - Agent 09-00以降の場合</td><td>PFM - Agent固有の手順の要否は, PFM - Agentごとに異なります。PFM - Agent固有の手順については, 各 PFM - Agentマニュアルの, インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。</td></tr><tr><td rowspan="2">PFM - Managerホストにインストールされているのが, PFM - Agent 09-00未満の場合</td><td>次のPFM - Agentの場合。 <ul style="list-style-type: none">PFM - Agent for CosminexusPFM - Agent for Domino※PFM - Agent for Enterprise ApplicationsPFM - Agent for Microsoft SQL Server</td><td>PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(5) ホスト名変更の際に, 必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。</td></tr><tr><td>上記以外の場合 (PFM - Managerホストにインストールされているのが, PFM - RMの場合を含む)</td><td>PFM - Agent固有の手順は不要です。</td></tr></table>		構成		手順の要否と参照先	PFM - Managerホストにインストールされているのが, PFM - Agent 09-00以降の場合		PFM - Agent固有の手順の要否は, PFM - Agentごとに異なります。PFM - Agent固有の手順については, 各 PFM - Agentマニュアルの, インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。	PFM - Managerホストにインストールされているのが, PFM - Agent 09-00未満の場合	次のPFM - Agentの場合。 <ul style="list-style-type: none">PFM - Agent for CosminexusPFM - Agent for Domino※PFM - Agent for Enterprise ApplicationsPFM - Agent for Microsoft SQL Server	PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(5) ホスト名変更の際に, 必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。	上記以外の場合 (PFM - Managerホストにインストールされているのが, PFM - RMの場合を含む)	PFM - Agent固有の手順は不要です。
構成		手順の要否と参照先												
PFM - Managerホストにインストールされているのが, PFM - Agent 09-00以降の場合		PFM - Agent固有の手順の要否は, PFM - Agentごとに異なります。PFM - Agent固有の手順については, 各 PFM - Agentマニュアルの, インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。												
PFM - Managerホストにインストールされているのが, PFM - Agent 09-00未満の場合	次のPFM - Agentの場合。 <ul style="list-style-type: none">PFM - Agent for CosminexusPFM - Agent for Domino※PFM - Agent for Enterprise ApplicationsPFM - Agent for Microsoft SQL Server	PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(5) ホスト名変更の際に, 必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。												
	上記以外の場合 (PFM - Managerホストにインストールされているのが, PFM - RMの場合を含む)	PFM - Agent固有の手順は不要です。												
<p>注※ PFM - Agent for Dominoのヘルスチェック機能を使用している場合だけ, PFM - Agent固有の手順が必要になります。</p>														

#	変更箇所	追加・変更内容											
		[訂正後]											
		<table><tr><th>構成</th><th>手順の要否と参照先</th></tr><tr><td>PFM - Managerホストにインストールされているのが、 PFM - Agent 09-00以降の場合</td><td>PFM - Agent固有の手順の要否は、 PFM - Agentごとに異なります。 PFM - Agent固有の手順については、 各 PFM - Agentマニュアルの、 インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。</td></tr><tr><td>PFM - Managerホストにインストールされているのが、 PFM - Agent 09-00未満の場合</td><td><table><tr><td>次のPFM - Agentの場合。<ul style="list-style-type: none">• PFM - Agent for Cosminexus• PFM - Agent for Domino• PFM - Agent for Enterprise Applications• PFM - Agent for Microsoft SQL Server</td><td>PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(5) ホスト名変更の際に、 必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。</td></tr><tr><td>上記以外の場合</td><td>PFM - Agent固有の手順は不要です。</td></tr></table></td></tr></table>		構成	手順の要否と参照先	PFM - Managerホストにインストールされているのが、 PFM - Agent 09-00以降の場合	PFM - Agent固有の手順の要否は、 PFM - Agentごとに異なります。 PFM - Agent固有の手順については、 各 PFM - Agentマニュアルの、 インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。	PFM - Managerホストにインストールされているのが、 PFM - Agent 09-00未満の場合	<table><tr><td>次のPFM - Agentの場合。<ul style="list-style-type: none">• PFM - Agent for Cosminexus• PFM - Agent for Domino• PFM - Agent for Enterprise Applications• PFM - Agent for Microsoft SQL Server</td><td>PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(5) ホスト名変更の際に、 必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。</td></tr><tr><td>上記以外の場合</td><td>PFM - Agent固有の手順は不要です。</td></tr></table>	次のPFM - Agentの場合。 <ul style="list-style-type: none">• PFM - Agent for Cosminexus• PFM - Agent for Domino• PFM - Agent for Enterprise Applications• PFM - Agent for Microsoft SQL Server	PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(5) ホスト名変更の際に、 必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。	上記以外の場合	PFM - Agent固有の手順は不要です。
構成	手順の要否と参照先												
PFM - Managerホストにインストールされているのが、 PFM - Agent 09-00以降の場合	PFM - Agent固有の手順の要否は、 PFM - Agentごとに異なります。 PFM - Agent固有の手順については、 各 PFM - Agentマニュアルの、 インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。												
PFM - Managerホストにインストールされているのが、 PFM - Agent 09-00未満の場合	<table><tr><td>次のPFM - Agentの場合。<ul style="list-style-type: none">• PFM - Agent for Cosminexus• PFM - Agent for Domino• PFM - Agent for Enterprise Applications• PFM - Agent for Microsoft SQL Server</td><td>PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(5) ホスト名変更の際に、 必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。</td></tr><tr><td>上記以外の場合</td><td>PFM - Agent固有の手順は不要です。</td></tr></table>	次のPFM - Agentの場合。 <ul style="list-style-type: none">• PFM - Agent for Cosminexus• PFM - Agent for Domino• PFM - Agent for Enterprise Applications• PFM - Agent for Microsoft SQL Server	PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(5) ホスト名変更の際に、 必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。	上記以外の場合	PFM - Agent固有の手順は不要です。								
次のPFM - Agentの場合。 <ul style="list-style-type: none">• PFM - Agent for Cosminexus• PFM - Agent for Domino• PFM - Agent for Enterprise Applications• PFM - Agent for Microsoft SQL Server	PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(5) ホスト名変更の際に、 必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。												
上記以外の場合	PFM - Agent固有の手順は不要です。												

#	変更箇所	追加・変更内容	
13	5.3.4	<p>運用開始後のマシンの物理ホスト名の変更 (2) PFM - Agent または PFM - RM ホスト名を変更する 5. 必要に応じて, PFM - Agent 固有の手順を実行する。 表 5-15 PFM - Agent 固有の手順の要否 [訂正前]</p>	
		構成	手順の要否と参照先
		監視ホスト名を変更するのが, PFM - Agent 09-00以降の場合	PFM - Agent固有の手順の要否は, PFM - Agentごとに異なります。PFM - Agent固有の手順については, 各 PFM - Agentマニュアルの, インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。
		監視ホスト名を変更するのが, PFM - Agent 09-00未満の場合	<p>次のPFM - Agentの場合。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ PFM - Agent for Cosminexus ・ PFM - Agent for Domino※ ・ PFM - Agent for Enterprise Applications ・ PFM - Agent for Microsoft SQL Server <p>PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(5) ホスト名変更の際に, 必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。</p>
		上記以外の場合 (監視ホストを変更するのが, PFM - RMの場合を含む)	PFM - Agent固有の手順は不要です。
		<p>注※ PFM - Agent for Dominoのヘルスチェック機能を使用している場合だけ, PFM - Agent固有の手順が必要になります。</p>	

#	変更箇所	追加・変更内容													
		[訂正後]													
		<table><tr><th colspan="2">構成</th><th>手順の要否と参照先</th></tr><tr><td colspan="2">監視ホスト名を変更するのが、PFM - Agent 09-00以降の場合</td><td>PFM - Agent固有の手順の要否は、PFM - Agentごとに異なります。PFM - Agent固有の手順については、各 PFM - Agentマニュアルの、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。</td></tr><tr><td rowspan="2">監視ホスト名を変更するのが、PFM - Agent 09-00未満の場合</td><td>次のPFM - Agentの場合。 ・ PFM - Agent for Cosminexus ・ PFM - Agent for Domino ・ PFM - Agent for Enterprise Applications ・ PFM - Agent for Microsoft SQL Server</td><td>PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(5) ホスト名変更の際に、必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。</td></tr><tr><td>上記以外の場合</td><td>PFM - Agent固有の手順は不要です。</td></tr></table>		構成		手順の要否と参照先	監視ホスト名を変更するのが、PFM - Agent 09-00以降の場合		PFM - Agent固有の手順の要否は、PFM - Agentごとに異なります。PFM - Agent固有の手順については、各 PFM - Agentマニュアルの、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。	監視ホスト名を変更するのが、PFM - Agent 09-00未満の場合	次のPFM - Agentの場合。 ・ PFM - Agent for Cosminexus ・ PFM - Agent for Domino ・ PFM - Agent for Enterprise Applications ・ PFM - Agent for Microsoft SQL Server	PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(5) ホスト名変更の際に、必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。	上記以外の場合	PFM - Agent固有の手順は不要です。	
構成		手順の要否と参照先													
監視ホスト名を変更するのが、PFM - Agent 09-00以降の場合		PFM - Agent固有の手順の要否は、PFM - Agentごとに異なります。PFM - Agent固有の手順については、各 PFM - Agentマニュアルの、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。													
監視ホスト名を変更するのが、PFM - Agent 09-00未満の場合	次のPFM - Agentの場合。 ・ PFM - Agent for Cosminexus ・ PFM - Agent for Domino ・ PFM - Agent for Enterprise Applications ・ PFM - Agent for Microsoft SQL Server	PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(5) ホスト名変更の際に、必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。													
	上記以外の場合	PFM - Agent固有の手順は不要です。													
14	5.3.4	運用開始後のマシンの物理ホスト名の変更 (2) PFM - Agent または PFM - RM ホスト名を変更する 10. アラームの設定を更新する。 [削除] ・ アクションで JP1 イベントを発行している場合 アクションの JP1 イベントの設定を再度行ってください。													
15	5.4.6	PFM - Web Console の設定変更 (1) 初期設定ファイル (config.xml) の設定項目 (c) データの取得や表示の設定 表 5-20 データの取得や表示の設定項目 [追加]													
		<table><tr><th>内容</th><th>設定項目</th><th>設定できる値</th><th>デフォルト値</th></tr><tr><td>セッション共有による強制ログイン画面の表示</td><td>informSharedSession (<vsa>タグ配下)</td><td>true (有効) false (無効)</td><td>true※8</td></tr><tr><td>グラフのアンチエイリアスの有無</td><td>enableAntiAlias ForNonAreaGraph (<draw>タグ配下)</td><td>true (有効) false (無効)</td><td>true※8</td></tr></table>		内容	設定項目	設定できる値	デフォルト値	セッション共有による強制ログイン画面の表示	informSharedSession (<vsa>タグ配下)	true (有効) false (無効)	true※8	グラフのアンチエイリアスの有無	enableAntiAlias ForNonAreaGraph (<draw>タグ配下)	true (有効) false (無効)	true※8
内容	設定項目	設定できる値	デフォルト値												
セッション共有による強制ログイン画面の表示	informSharedSession (<vsa>タグ配下)	true (有効) false (無効)	true※8												
グラフのアンチエイリアスの有無	enableAntiAlias ForNonAreaGraph (<draw>タグ配下)	true (有効) false (無効)	true※8												

#	変更箇所	追加・変更内容																								
16	5.4.6	<p>PFM - Web Console の設定変更</p> <p>(1) 初期設定ファイル (config.xml) の設定項目</p> <p>(c) データの取得や表示の設定</p> <p>表 5-20 データの取得や表示の設定項目</p> <p>[追加]</p> <table><thead><tr><th>内容</th><th>設定項目</th><th>設定できる値</th><th>デフォルト値</th></tr></thead><tbody><tr><td>同一ユーザーのPFM - Web Console への多重ログインの可否</td><td>enableDuplicate Login</td><td>true (多重ログイン可能) false (多重ログイン可能)</td><td>true</td></tr><tr><td>PFM - Manager から取得する最大レコード件数</td><td>maxFetchCount ※19 (<vsa>タグ配下)</td><td>1 ~ 2, 147, 483, 647 (整数)</td><td>1, 440</td></tr><tr><td colspan="4"><中略></td></tr><tr><td>jpcrpt コマンドで出力するレポートについてView Server から取得する最大レコード件数</td><td>maxFetchCount ※19 (<command>タグ配下)</td><td>1 ~ 2, 147, 483, 647 (整数で指定)</td><td><vsa> タグ配下のmaxFetchCountの値</td></tr><tr><td>jpcrpt コマンドで出力するHTML 形式レポートの表データの最大行数</td><td>cmdHtmlTableOutputMaxRowSize</td><td>0 ~ 15, 000 (整数) 0 を指定した場合、行数を制限しません。 ※18</td><td>0または15, 000※3</td></tr></tbody></table> <p>注 19 複合レポートの場合は maxFetchCount の値ではなく、レポートをブックマークに登録した時に設定していた「最大レコード数」の値が適用されます。</p>	内容	設定項目	設定できる値	デフォルト値	同一ユーザーのPFM - Web Console への多重ログインの可否	enableDuplicate Login	true (多重ログイン可能) false (多重ログイン可能)	true	PFM - Manager から取得する最大レコード件数	maxFetchCount ※19 (<vsa>タグ配下)	1 ~ 2, 147, 483, 647 (整数)	1, 440	<中略>				jpcrpt コマンドで出力するレポートについてView Server から取得する最大レコード件数	maxFetchCount ※19 (<command>タグ配下)	1 ~ 2, 147, 483, 647 (整数で指定)	<vsa> タグ配下のmaxFetchCountの値	jpcrpt コマンドで出力するHTML 形式レポートの表データの最大行数	cmdHtmlTableOutputMaxRowSize	0 ~ 15, 000 (整数) 0 を指定した場合、行数を制限しません。 ※18	0または15, 000※3
内容	設定項目	設定できる値	デフォルト値																							
同一ユーザーのPFM - Web Console への多重ログインの可否	enableDuplicate Login	true (多重ログイン可能) false (多重ログイン可能)	true																							
PFM - Manager から取得する最大レコード件数	maxFetchCount ※19 (<vsa>タグ配下)	1 ~ 2, 147, 483, 647 (整数)	1, 440																							
<中略>																										
jpcrpt コマンドで出力するレポートについてView Server から取得する最大レコード件数	maxFetchCount ※19 (<command>タグ配下)	1 ~ 2, 147, 483, 647 (整数で指定)	<vsa> タグ配下のmaxFetchCountの値																							
jpcrpt コマンドで出力するHTML 形式レポートの表データの最大行数	cmdHtmlTableOutputMaxRowSize	0 ~ 15, 000 (整数) 0 を指定した場合、行数を制限しません。 ※18	0または15, 000※3																							
17	6.1.1	<p>インストールとセットアップの前に</p> <p>(1) 前提 OS</p> <p>表 6-1 前提 OS (UNIX の場合)</p> <p>[訂正前]</p> <table><thead><tr><th>OS名</th><th>PFM - Manager</th><th>PFM - Web Console</th><th>PFM - Base</th></tr></thead><tbody><tr><td>:</td><td>:</td><td>:</td><td>:</td></tr><tr><td>Linux (x64) および Linux (x86)</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td></tr><tr><td>:</td><td>:</td><td>:</td><td>:</td></tr></tbody></table>	OS名	PFM - Manager	PFM - Web Console	PFM - Base	:	:	:	:	Linux (x64) および Linux (x86)	○	○	○	:	:	:	:								
OS名	PFM - Manager	PFM - Web Console	PFM - Base																							
:	:	:	:																							
Linux (x64) および Linux (x86)	○	○	○																							
:	:	:	:																							

#	変更箇所	追加・変更内容																
		<div>[訂正後]</div> <table><tr><th>OS名</th><th>PFM - Manager</th><th>PFM - Web Console</th><th>PFM - Base</th></tr><tr><td>:</td><td>:</td><td>:</td><td>:</td></tr><tr><td>Linux (x64), Linux (x86) およびLinux Server 6</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td></tr><tr><td>:</td><td>:</td><td>:</td><td>:</td></tr></table>	OS名	PFM - Manager	PFM - Web Console	PFM - Base	:	:	:	:	Linux (x64), Linux (x86) およびLinux Server 6	○	○	○	:	:	:	:
OS名	PFM - Manager	PFM - Web Console	PFM - Base															
:	:	:	:															
Linux (x64), Linux (x86) およびLinux Server 6	○	○	○															
:	:	:	:															
18	6.1.1	<div>インストールとセットアップの前に</div> <div>(4) ネットワーク環境の設定</div> <div>(a) IP アドレスの設定</div> <div>注意</div> <div>[追加]</div> <div><ul style="list-style-type: none">PFM - Manager ホストにホスト名を二つ以上設定している場合、システム上の PFM - Agent または PFM - RM ホストで <code>jpccconf mgrhost define</code> コマンドにより設定する接続先 PFM - Manager ホストのホスト名は、次のようにする必要があります。 PFM - Manager の監視ホスト名に実ホスト名を使用している場合 Windows システムでは <code>hostname</code> コマンド、UNIX システムでは <code>uname -n</code> コマンドを実行して確認したホスト名 PFM - Manager の監視ホスト名にエイリアス名を使用している場合 設定しているエイリアス名</div>																
19	6.1.1	<div>インストールとセットアップの前に</div> <div>(8) 注意事項</div> <div>(f) その他の注意事項</div> <div>[訂正前]</div> <div><ul style="list-style-type: none">ウィルス検出プログラム ウィルス検出プログラムを停止してから Performance Management のプログラムをインストールすることを推奨します。</div> <div>[訂正後]</div> <div><ul style="list-style-type: none">ウィルス検出プログラム ウィルス検出プログラムを停止してから Performance Management のプログラムをインストールしてください。</div>																
20	6.1.4	<div>PFM - Manager のセットアップ手順</div> <div>(1) LANG 環境変数の設定</div> <div>[訂正前]</div> <div>注意</div> <div>[訂正後]</div> <div>注意 1</div>																

#	変更箇所	追加・変更内容																
21	6.1.4	<p>PFM・Manager のセットアップ手順</p> <p>(1) LANG 環境変数の設定</p> <p>[追加]</p> <p>注意 2</p> <p>LC_ALL 環境変数が設定されており、LANG 環境変数の値と異なる場合は、Performance Management のサービスを起動する際、およびコマンドを実行する際に、LC_ALL 環境変数を解除するか、LANG 環境変数と同一の値に変更してください。</p> <p>環境変数の変更は、当該操作を行うシェルだけで必要です。システム全体で変更する必要はありません。LC_ALL 環境変数を解除する場合は以下のコマンドで解除可能です。</p> <pre>unset LC_ALL</pre>																
22	6.1.6	<p>監視コンソールの Web ブラウザの設定手順</p> <p>[追加]</p> <p>(3) Firefox 3.6 の場合</p> <p>表 6-11 Firefox 3.6 の設定</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>メニュー</th><th>カテゴリー</th><th>設定項目</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="6">[編集] – [設定]</td><td>[プライバシー] – [Cookie]</td><td>[サイトから送られてきたCookieを保存する] (「サードパーティのCookieも保存する」と保存期間の選択は任意)</td></tr> <tr> <td>[コンテンツ]</td><td>[画像を自動的に読み込む] [JavaScriptを有効にする]</td></tr> <tr> <td>[コンテンツ] – [JavaScript]</td><td>[詳細設定] で「ウィンドウの移動または大きさの変更」を選択する。</td></tr> <tr> <td>[コンテンツ] – [フォントと配色]</td><td>[サイズ] は12を推奨する。その他はデフォルト値を使用する。</td></tr> <tr> <td>[コンテンツ] – [言語]</td><td>[言語設定] で日本語「ja」をリストの先頭にする。</td></tr> <tr> <td>[セキュリティ] – [パスワード]</td><td>「サイトのパスワードを記憶する」のチェックを外す。</td></tr> </tbody> </table>	メニュー	カテゴリー	設定項目	[編集] – [設定]	[プライバシー] – [Cookie]	[サイトから送られてきたCookieを保存する] (「サードパーティのCookieも保存する」と保存期間の選択は任意)	[コンテンツ]	[画像を自動的に読み込む] [JavaScriptを有効にする]	[コンテンツ] – [JavaScript]	[詳細設定] で「ウィンドウの移動または大きさの変更」を選択する。	[コンテンツ] – [フォントと配色]	[サイズ] は12を推奨する。その他はデフォルト値を使用する。	[コンテンツ] – [言語]	[言語設定] で日本語「ja」をリストの先頭にする。	[セキュリティ] – [パスワード]	「サイトのパスワードを記憶する」のチェックを外す。
メニュー	カテゴリー	設定項目																
[編集] – [設定]	[プライバシー] – [Cookie]	[サイトから送られてきたCookieを保存する] (「サードパーティのCookieも保存する」と保存期間の選択は任意)																
	[コンテンツ]	[画像を自動的に読み込む] [JavaScriptを有効にする]																
	[コンテンツ] – [JavaScript]	[詳細設定] で「ウィンドウの移動または大きさの変更」を選択する。																
	[コンテンツ] – [フォントと配色]	[サイズ] は12を推奨する。その他はデフォルト値を使用する。																
	[コンテンツ] – [言語]	[言語設定] で日本語「ja」をリストの先頭にする。																
	[セキュリティ] – [パスワード]	「サイトのパスワードを記憶する」のチェックを外す。																
23	6.3.1	<p>ネットワーク構成の変更</p> <p>(1) PFM・Manager ホスト、および PFM・Agent または PFM・RM ホストでの作業手順</p> <p>(b) ポート番号を設定する</p> <p>補足</p> <p>[訂正前]</p> <p>運用での混乱を避けるため、Performance Management システム全体でポート番号とサービス名の対応を統一してください。</p> <p>[訂正後]</p> <p>Name Server サービスに設定するポート番号については、Performance Management システム内の全ホストで同じ番号にする必要があります。</p> <p>また、Status Server サービスに設定するポート番号についても、Performance Management システム内の全ホストで同じ番号にする必要があります。</p> <p>他の JP1/PFM サービスについても運用での混乱を避けるため、Performance Management システム全体でポート番号とサービス名の対応を統一してください。</p>																

#	変更箇所	追加・変更内容	
24	6.3.3	Performance Management システムでのホスト名の変更 (1) PFM - Manager ホストの監視ホスト名を変更する 7. 必要に応じて、PFM - Agent 固有の手順を実行する。 表 6-13 PFM - Agent 固有の手順の要否 [訂正前]	
		構成	手順の要否と参照先
		PFM - Managerホストにインストールされているのが、PFM - Agent 09-00以降の場合	PFM - Agent固有の手順の要否は、PFM - Agentごとに異なります。PFM - Agent固有の手順については、各 PFM - Agentマニュアルの、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。
		PFM - Managerホストにインストールされているのが、PFM - Agent 09-00未満の場合	次の PFM - Agent がインストールされている場合。 <ul style="list-style-type: none"> PFM - Agent for Cosminexus PFM - Agent for Domino※ PFM - Agent for Enterprise Applications PFM - Agent for Microsoft SQL Server
		上記以外の場合 (PFM - Managerホストにインストールされているのが、PFM - RMの場合を含む)	PFM - Agent固有の手順は不要です。
		注※ PFM - Agent for Dominoのヘルスチェック機能を使用している場合だけ、PFM - Agent固有の手順が必要になります。	

#	変更箇所	追加・変更内容	
		[訂正後]	
		構成	手順の要否と参照先
		PFM - Managerホストにインストールされているのが、PFM - Agent 09-00以降の場合	PFM - Agent固有の手順の要否は、PFM - Agentごとに異なります。PFM - Agent固有の手順については、各 PFM - Agentマニュアルの、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。
		PFM - Managerホストにインストールされているのが、PFM - Agent 09-00未満の場合	PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(4) ホスト名変更の際に、必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。
		次のPFM - Agentがインストールされている場合。 <ul style="list-style-type: none"> ・ PFM - Agent for Cosminexus ・ PFM - Agent for Domino ・ PFM - Agent for Enterprise Applications ・ PFM - Agent for Microsoft SQL Server 	
		上記以外の場合	PFM - Agent固有の手順は不要です。

#	変更箇所	追加・変更内容											
25	6.3.3	<p>Performance Management システムでのホスト名の変更 (2) PFM - Agent または PFM - RM ホストの監視ホスト名を変更する 5. 必要に応じて、PFM - Agent 固有の手順を実行する。 表 6-14 PFM - Agent 固有の手順の要否 [訂正前]</p> <table> <tr> <th colspan="2">構成</th><th>手順の要否と参照先</th></tr> <tr> <td colspan="2">PFM - Managerホストにインストールされているのが、PFM - Agent 09-00以降の場合</td><td>PFM - Agent固有の手順の要否は、PFM - Agentごとに異なります。PFM - Agent固有の手順については、各 PFM - Agentマニュアルの、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。</td></tr> <tr> <td rowspan="2">PFM - Managerホストにインストールされているのが、PFM - Agent 09-00未満の場合</td><td>次のPFM - Agentがインストールされている場合。 <ul style="list-style-type: none"> PFM - Agent for Cosminexus PFM - Agent for Domino※ PFM - Agent for Enterprise Applications PFM - Agent for Microsoft SQL Server </td><td>PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(4) ホスト名変更の際に、必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。</td></tr> <tr> <td>上記以外の場合 (PFM - Managerホストにインストールされているのが、PFM - RMの場合を含む)</td><td>PFM - Agent固有の手順は不要です。</td></tr> </table> <p>注※ PFM - Agent for Dominoのヘルスチェック機能を使用している場合だけ、PFM - Agent固有の手順が必要になります。</p>	構成		手順の要否と参照先	PFM - Managerホストにインストールされているのが、PFM - Agent 09-00以降の場合		PFM - Agent固有の手順の要否は、PFM - Agentごとに異なります。PFM - Agent固有の手順については、各 PFM - Agentマニュアルの、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。	PFM - Managerホストにインストールされているのが、PFM - Agent 09-00未満の場合	次のPFM - Agentがインストールされている場合。 <ul style="list-style-type: none"> PFM - Agent for Cosminexus PFM - Agent for Domino※ PFM - Agent for Enterprise Applications PFM - Agent for Microsoft SQL Server 	PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(4) ホスト名変更の際に、必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。	上記以外の場合 (PFM - Managerホストにインストールされているのが、PFM - RMの場合を含む)	PFM - Agent固有の手順は不要です。
構成		手順の要否と参照先											
PFM - Managerホストにインストールされているのが、PFM - Agent 09-00以降の場合		PFM - Agent固有の手順の要否は、PFM - Agentごとに異なります。PFM - Agent固有の手順については、各 PFM - Agentマニュアルの、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。											
PFM - Managerホストにインストールされているのが、PFM - Agent 09-00未満の場合	次のPFM - Agentがインストールされている場合。 <ul style="list-style-type: none"> PFM - Agent for Cosminexus PFM - Agent for Domino※ PFM - Agent for Enterprise Applications PFM - Agent for Microsoft SQL Server 	PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(4) ホスト名変更の際に、必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。											
	上記以外の場合 (PFM - Managerホストにインストールされているのが、PFM - RMの場合を含む)	PFM - Agent固有の手順は不要です。											

#	変更箇所	追加・変更内容	
		[訂正後]	
		構成	手順の要否と参照先
		監視ホスト名を変更するのが、PFM - Agent 09-00以降の場合	PFM - Agent固有の手順の要否は、PFM - Agentごとに異なります。PFM - Agent固有の手順については、各 PFM - Agentマニュアルの、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。
		監視ホスト名を変更するのが、PFM - Agent 09-00未満の場合	<div> <div> 次のPFM - Agentの場合。 <ul style="list-style-type: none"> PFM - Agent for Cosminexus PFM - Agent for Domino PFM - Agent for Enterprise Applications PFM - Agent for Microsoft SQL Server </div> <div> 上記以外の場合 </div> </div>
			PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(4) ホスト名変更の際に、必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。
			PFM - Agent固有の手順は不要です。
26	6.3.3	Performance Management システムでのホスト名の変更 (2) PFM - Agent または PFM - RM ホストの監視ホスト名を変更する 10. アラームの設定を更新する。 [削除] <ul style="list-style-type: none"> アクションで JP1 イベントを発行している場合 アクションの JP1 イベントの設定を再度行ってください。 	

#	変更箇所	追加・変更内容												
27	6.3.4	<p>運用開始後のマシンの物理ホスト名の変更 (1) PFM・Manager ホスト名を変更する 7. 必要に応じて、PFM・Agent 固有の手順を実行する。 表 6-16 PFM・Agent 固有の手順の要否 [訂正前]</p>												
		<table><tr><th colspan="2">構成</th><th>手順の要否と参照先</th></tr><tr><td colspan="2">PFM - Managerホストにインストールされているのが、PFM - Agent 09-00以降の場合</td><td>PFM - Agent固有の手順の要否は、PFM - Agentごとに異なります。PFM - Agent固有の手順については、各 PFM - Agentマニュアルの、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。</td></tr><tr><td rowspan="2">PFM - Managerホストにインストールされているのが、PFM - Agent 09-00未満の場合</td><td>次のPFM - Agentがインストールされている場合。 ・ PFM - Agent for Cosminexus ・ PFM - Agent for Domino※ ・ PFM - Agent for Enterprise Applications ・ PFM - Agent for Microsoft SQL Server</td><td>PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(5) ホスト名変更の際に、必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。</td></tr><tr><td>上記以外の場合 (PFM - Managerホストにインストールされているのが、PFM - RMの場合を含む)</td><td>PFM - Agent固有の手順は不要です。</td></tr></table>		構成		手順の要否と参照先	PFM - Managerホストにインストールされているのが、PFM - Agent 09-00以降の場合		PFM - Agent固有の手順の要否は、PFM - Agentごとに異なります。PFM - Agent固有の手順については、各 PFM - Agentマニュアルの、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。	PFM - Managerホストにインストールされているのが、PFM - Agent 09-00未満の場合	次のPFM - Agentがインストールされている場合。 ・ PFM - Agent for Cosminexus ・ PFM - Agent for Domino※ ・ PFM - Agent for Enterprise Applications ・ PFM - Agent for Microsoft SQL Server	PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(5) ホスト名変更の際に、必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。	上記以外の場合 (PFM - Managerホストにインストールされているのが、PFM - RMの場合を含む)	PFM - Agent固有の手順は不要です。
構成		手順の要否と参照先												
PFM - Managerホストにインストールされているのが、PFM - Agent 09-00以降の場合		PFM - Agent固有の手順の要否は、PFM - Agentごとに異なります。PFM - Agent固有の手順については、各 PFM - Agentマニュアルの、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。												
PFM - Managerホストにインストールされているのが、PFM - Agent 09-00未満の場合	次のPFM - Agentがインストールされている場合。 ・ PFM - Agent for Cosminexus ・ PFM - Agent for Domino※ ・ PFM - Agent for Enterprise Applications ・ PFM - Agent for Microsoft SQL Server	PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(5) ホスト名変更の際に、必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。												
	上記以外の場合 (PFM - Managerホストにインストールされているのが、PFM - RMの場合を含む)	PFM - Agent固有の手順は不要です。												
		<p>注※ PFM - Agent for Dominoのヘルスチェック機能を使用している場合だけ、PFM - Agent固有の手順が必要になります。</p>												

#	変更箇所	追加・変更内容															
		[訂正後]															
		<table><tr><th>構成</th><th>手順の要否と参照先</th></tr><tr><td colspan="2">PFM - Managerホストにインストールされているのが、 PFM - Agent 09-00以降の場合。</td></tr><tr><td colspan="2">PFM - Agent固有の手順の要否は、 PFM - Agentごとに異なります。 PFM - Agent固有の手順については、 各 PFM - Agentマニュアルの、 インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。</td></tr><tr><td>PFM - Managerホストにインストールされているのが、 PFM - Agent 09-00未満の場合。</td><td>次のPFM - Agentがインストールされている場合。<ul style="list-style-type: none">・ PFM - Agent for Cosminexus・ PFM - Agent for Domino・ PFM - Agent for Enterprise Applications・ PFM - Agent for Microsoft SQL Server</td><td colspan="2">PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(5) ホスト名変更の際に、 必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。</td></tr><tr><td></td><td>上記以外の場合</td><td colspan="2">PFM - Agent固有の手順は不要です。</td></tr></table>		構成	手順の要否と参照先	PFM - Managerホストにインストールされているのが、 PFM - Agent 09-00以降の場合。		PFM - Agent固有の手順の要否は、 PFM - Agentごとに異なります。 PFM - Agent固有の手順については、 各 PFM - Agentマニュアルの、 インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。		PFM - Managerホストにインストールされているのが、 PFM - Agent 09-00未満の場合。	次のPFM - Agentがインストールされている場合。 <ul style="list-style-type: none">・ PFM - Agent for Cosminexus・ PFM - Agent for Domino・ PFM - Agent for Enterprise Applications・ PFM - Agent for Microsoft SQL Server	PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(5) ホスト名変更の際に、 必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。			上記以外の場合	PFM - Agent固有の手順は不要です。	
構成	手順の要否と参照先																
PFM - Managerホストにインストールされているのが、 PFM - Agent 09-00以降の場合。																	
PFM - Agent固有の手順の要否は、 PFM - Agentごとに異なります。 PFM - Agent固有の手順については、 各 PFM - Agentマニュアルの、 インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。																	
PFM - Managerホストにインストールされているのが、 PFM - Agent 09-00未満の場合。	次のPFM - Agentがインストールされている場合。 <ul style="list-style-type: none">・ PFM - Agent for Cosminexus・ PFM - Agent for Domino・ PFM - Agent for Enterprise Applications・ PFM - Agent for Microsoft SQL Server	PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(5) ホスト名変更の際に、 必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。															
	上記以外の場合	PFM - Agent固有の手順は不要です。															

#	変更箇所	追加・変更内容												
28	6.3.4	<p>運用開始後のマシンの物理ホスト名の変更 (2) PFM - Agent または PFM - RM ホスト名を変更する 5. 必要に応じて, PFM - Agent 固有の手順を実行する。 表 6-17 PFM - Agent 固有の手順の要否 [訂正前]</p>												
		<table><tr><th colspan="2">構成</th><th>手順の要否と参照先</th></tr><tr><td colspan="2">PFM - Managerホストにインストールされているのが, PFM - Agent 09-00以降の場合。</td><td>PFM - Agent固有の手順の要否は, PFM - Agentごとに異なります。PFM - Agent固有の手順については, 各 PFM - Agentマニュアルの, インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。</td></tr><tr><td rowspan="2">PFM - Managerホストにインストールされているのが, PFM - Agent 09-00未満の場合。</td><td>次のPFM - Agentがインストールされている場合。<ul style="list-style-type: none">• PFM - Agent for Cosminexus• PFM - Agent for Domino※• PFM - Agent for Enterprise Applications• PFM - Agent for Microsoft SQL Server</td><td>PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(5) ホスト名変更の際に, 必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。</td></tr><tr><td>上記以外の場合 (PFM - Managerホストにインストールされているのが, PFM - RMの場合を含む)。</td><td>PFM - Agent固有の手順は不要です。</td></tr></table>		構成		手順の要否と参照先	PFM - Managerホストにインストールされているのが, PFM - Agent 09-00以降の場合。		PFM - Agent固有の手順の要否は, PFM - Agentごとに異なります。PFM - Agent固有の手順については, 各 PFM - Agentマニュアルの, インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。	PFM - Managerホストにインストールされているのが, PFM - Agent 09-00未満の場合。	次のPFM - Agentがインストールされている場合。 <ul style="list-style-type: none">• PFM - Agent for Cosminexus• PFM - Agent for Domino※• PFM - Agent for Enterprise Applications• PFM - Agent for Microsoft SQL Server	PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(5) ホスト名変更の際に, 必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。	上記以外の場合 (PFM - Managerホストにインストールされているのが, PFM - RMの場合を含む)。	PFM - Agent固有の手順は不要です。
構成		手順の要否と参照先												
PFM - Managerホストにインストールされているのが, PFM - Agent 09-00以降の場合。		PFM - Agent固有の手順の要否は, PFM - Agentごとに異なります。PFM - Agent固有の手順については, 各 PFM - Agentマニュアルの, インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。												
PFM - Managerホストにインストールされているのが, PFM - Agent 09-00未満の場合。	次のPFM - Agentがインストールされている場合。 <ul style="list-style-type: none">• PFM - Agent for Cosminexus• PFM - Agent for Domino※• PFM - Agent for Enterprise Applications• PFM - Agent for Microsoft SQL Server	PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(5) ホスト名変更の際に, 必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。												
	上記以外の場合 (PFM - Managerホストにインストールされているのが, PFM - RMの場合を含む)。	PFM - Agent固有の手順は不要です。												
		<p>注※ PFM - Agent for Dominoのヘルスチェック機能を使用している場合だけ, PFM - Agent固有の手順が必要になります。</p>												

#	変更箇所	追加・変更内容													
		[訂正後]													
		<table><tr><th colspan="2">構成</th><th>手順の要否と参照先</th></tr><tr><td colspan="2">監視ホスト名を変更するのが、PFM - Agent 09-00以降の場合。</td><td>PFM - Agent固有の手順の要否は、PFM - Agentごとに異なります。PFM - Agent固有の手順については、各 PFM - Agentマニュアルの、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。</td></tr><tr><td rowspan="2">監視ホスト名を変更するのが、PFM - Agent 09-00未満の場合。</td><td>次のPFM - Agentの場合。 ・ PFM - Agent for Cosminexus ・ PFM - Agent for Domino ・ PFM - Agent for Enterprise Applications ・ PFM - Agent for Microsoft SQL Server</td><td>PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(5) ホスト名変更の際に、必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。</td></tr><tr><td>上記以外の場合</td><td>PFM - Agent固有の手順は不要です。</td></tr></table>		構成		手順の要否と参照先	監視ホスト名を変更するのが、PFM - Agent 09-00以降の場合。		PFM - Agent固有の手順の要否は、PFM - Agentごとに異なります。PFM - Agent固有の手順については、各 PFM - Agentマニュアルの、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。	監視ホスト名を変更するのが、PFM - Agent 09-00未満の場合。	次のPFM - Agentの場合。 ・ PFM - Agent for Cosminexus ・ PFM - Agent for Domino ・ PFM - Agent for Enterprise Applications ・ PFM - Agent for Microsoft SQL Server	PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(5) ホスト名変更の際に、必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。	上記以外の場合	PFM - Agent固有の手順は不要です。	
構成		手順の要否と参照先													
監視ホスト名を変更するのが、PFM - Agent 09-00以降の場合。		PFM - Agent固有の手順の要否は、PFM - Agentごとに異なります。PFM - Agent固有の手順については、各 PFM - Agentマニュアルの、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。													
監視ホスト名を変更するのが、PFM - Agent 09-00未満の場合。	次のPFM - Agentの場合。 ・ PFM - Agent for Cosminexus ・ PFM - Agent for Domino ・ PFM - Agent for Enterprise Applications ・ PFM - Agent for Microsoft SQL Server	PFM - Agent固有の手順が必要です。固有の手順については「(5) ホスト名変更の際に、必要に応じて行う Agent固有の手順」を参照してください。													
	上記以外の場合	PFM - Agent固有の手順は不要です。													
29	6.3.4	運用開始後のマシンの物理ホスト名の変更 (2) PFM - Agent または PFM - RM ホスト名を変更する 10. アラームの設定を更新する。 [削除] ・ アクションで JP1 イベントを発行している場合 アクションの JP1 イベントの設定を再度行ってください。													
30	6.4.6	PFM - Web Console の設定変更 (1) 初期設定ファイル (config.xml) の設定項目 (c) データの取得や表示の設定 表 6-22 データの取得や表示の設定項目 [追加]													
		<table><tr><th>内容</th><th>設定項目</th><th>設定できる値</th><th>デフォルト値</th></tr><tr><td>セッション共有による強制ログイン画面の表示</td><td>informSharedSession (<vsa>タグ配下)</td><td>true (有効) false (無効)</td><td>true※8</td></tr><tr><td>グラフのアンチエイリアスの有無</td><td>enableAntiAlias ForNonAreaGraph (<draw>タグ配下)</td><td>true (有効) false (無効)</td><td>true※8</td></tr></table>		内容	設定項目	設定できる値	デフォルト値	セッション共有による強制ログイン画面の表示	informSharedSession (<vsa>タグ配下)	true (有効) false (無効)	true※8	グラフのアンチエイリアスの有無	enableAntiAlias ForNonAreaGraph (<draw>タグ配下)	true (有効) false (無効)	true※8
内容	設定項目	設定できる値	デフォルト値												
セッション共有による強制ログイン画面の表示	informSharedSession (<vsa>タグ配下)	true (有効) false (無効)	true※8												
グラフのアンチエイリアスの有無	enableAntiAlias ForNonAreaGraph (<draw>タグ配下)	true (有効) false (無効)	true※8												

#	変更箇所	追加・変更内容																								
31	6.4.6	<p>PFM・Web Console の設定変更</p> <p>(1) 初期設定ファイル (config.xml) の設定項目</p> <p>(c) データの取得や表示の設定</p> <p>表 6-22 データの取得や表示の設定項目</p> <p>[追加]</p> <table><tr><th>内容</th><th>設定項目</th><th>設定できる値</th><th>デフォルト値</th></tr><tr><td>同一ユーザーのPFM - Web Console への 多重ログインの可否</td><td>enableDuplicate Login</td><td>true (多重ロ グイン可能) false (多重ロ グイン可能)</td><td>true</td></tr><tr><td>PFM - Manager から 取得する最大レコ ード件数</td><td>maxFetchCount ※19 (<vsa>タグ配下)</td><td>1 ~ 2, 147, 483, 647 (整数)</td><td>1, 440</td></tr><tr><td colspan="4">< 中略 ></td></tr><tr><td>jpcrpt コマンドで 出力するレポートに ついてView Server から取得する最大レ コード件数</td><td>maxFetchCount ※19 (<command>タグ配 下)</td><td>1 ~ 2, 147, 483, 647 (整数で指定)</td><td><vsa> タグ配下 のmaxFetchCount の値</td></tr><tr><td>jpcrpt コマンドで 出力するHTML 形式 レポートの表データ の最大行数</td><td>cmdHtmlTableOut putMaxRowSize</td><td>0 ~ 15, 000 (整数) 0 を指定した場合、 行数を制限しませ ん。 ※18</td><td>0または15, 000※3</td></tr></table> <p>注 19 複合レポートの場合は maxFetchCount の値ではなく、レポートをブックマ ークに登録した時に設定していた「最大レコード数」の値が適用されます。</p>	内容	設定項目	設定できる値	デフォルト値	同一ユーザーのPFM - Web Console への 多重ログインの可否	enableDuplicate Login	true (多重ロ グイン可能) false (多重ロ グイン可能)	true	PFM - Manager から 取得する最大レコ ード件数	maxFetchCount ※19 (<vsa>タグ配下)	1 ~ 2, 147, 483, 647 (整数)	1, 440	< 中略 >				jpcrpt コマンドで 出力するレポートに ついてView Server から取得する最大レ コード件数	maxFetchCount ※19 (<command>タグ配 下)	1 ~ 2, 147, 483, 647 (整数で指定)	<vsa> タグ配下 のmaxFetchCount の値	jpcrpt コマンドで 出力するHTML 形式 レポートの表データ の最大行数	cmdHtmlTableOut putMaxRowSize	0 ~ 15, 000 (整数) 0 を指定した場合、 行数を制限しませ ん。 ※18	0または15, 000※3
内容	設定項目	設定できる値	デフォルト値																							
同一ユーザーのPFM - Web Console への 多重ログインの可否	enableDuplicate Login	true (多重ロ グイン可能) false (多重ロ グイン可能)	true																							
PFM - Manager から 取得する最大レコ ード件数	maxFetchCount ※19 (<vsa>タグ配下)	1 ~ 2, 147, 483, 647 (整数)	1, 440																							
< 中略 >																										
jpcrpt コマンドで 出力するレポートに ついてView Server から取得する最大レ コード件数	maxFetchCount ※19 (<command>タグ配 下)	1 ~ 2, 147, 483, 647 (整数で指定)	<vsa> タグ配下 のmaxFetchCount の値																							
jpcrpt コマンドで 出力するHTML 形式 レポートの表データ の最大行数	cmdHtmlTableOut putMaxRowSize	0 ~ 15, 000 (整数) 0 を指定した場合、 行数を制限しませ ん。 ※18	0または15, 000※3																							
32	付録 A.1	<p>システム構成</p> <p>(2) 接続できる PFM・Agent および PFM・RM 数</p> <p>[訂正前]</p> <p>一つの PFM・Manager に接続できる PFM・Agent および PFM・RM の最大数は、 500 です。ただし、PFM・Agent および PFM・RM から発行されるアラームイベ ントの発行頻度が高くなったり、多数の PFM・Agent および PFM・RM から同時にア ラームイベントが発行されたりすると、PFM・Manager のアラームイベント処理に 遅延が発生することがあります。</p> <p>[訂正後]</p> <p>一つの PFM・Manager に接続できる PFM・Agent および PFM・RM の最大数は、 500 です。ただし、PFM・Agent および PFM・RM から発行されるアラームイベ ントの発行頻度が高くなったり、多数の PFM・Agent および PFM・RM から同時にア ラームイベントが発行されたりすると、PFM・Manager のアラームイベント処理に 遅延が発生します。</p>																								

#	変更箇所	追加・変更内容
33	付録 A.1	<p>システム構成 (2) 接続できる PFM・Agent および PFM・RM 数</p> <p>注意</p> <p>[訂正前] PFM・Agent および PFM・RM から発行されるアラームイベントの発行頻度が高くなり、多数の PFM・Agent および PFM・RM から同時にアラームイベントが発行されたりすると、PFM・Manager のアラームイベント処理に遅延が発生することがあります。</p> <p>[訂正後] PFM・Agent および PFM・RM から発行されるアラームイベントの発行頻度が高くなり、多数の PFM・Agent および PFM・RM から同時にアラームイベントが発行されたりすると、PFM・Manager のアラームイベント処理に遅延が発生します。</p>
34	付録 A.1	<p>システム構成 (2) 接続できる PFM・Agent および PFM・RM 数</p> <p>注意</p> <p>[訂正前] アラームのアクションを設定する際、PFM・Web Console のブラウザの [新規アラーム > アクション定義] 画面の [コマンド] フィールドの [アクションハンドラ] に「LOCAL」以外を選択すると、PFM・Manager に負荷が集中することがあります。</p> <p>[訂正後] アラームのアクションを設定する際、PFM・Web Console のブラウザの [新規アラーム > アクション定義] 画面の [コマンド] フィールドの [アクションハンドラ] に「LOCAL」以外を選択すると、PFM・Manager に負荷が集中します。</p>
35	付録 A.2	<p>PFM・Web Console の表示 (1) PFM・Web Console で表示できるレポート画面の数</p> <p>[訂正前] PFM・Web Console で表示できるレポート画面の数の目安を次の表に示します。</p> <p>[訂正後] PFM・Web Console で表示できるレポート画面の数を次の表に示します。</p>
36	付録 A.2	<p>PFM・Web Console の表示 (5) タイリング表示で表示できるレポートのグラフ数</p> <p>[訂正前] タイリング表示で表示できるレポートのグラフの最大数は、デフォルトで 50 です。タイリング表示を実行した場合にサーバへの負荷が高いときは、対象のブックマークを複数に分割して、グラフの表示数を減らすことを推奨します。</p> <p>[訂正後] タイリング表示で表示できるレポートのグラフの最大数は、デフォルトで 50 です。タイリング表示を実行した場合にサーバへの負荷が高いときは、対象のブックマークを複数に分割して、グラフの表示数を減らしてください。</p>
37	付録 A.4	<p>アラーム数、アラームテーブル数の制限について 表 A-3 アラーム数およびアラームテーブル数の最大値</p> <p>[訂正前] 注</p> <p>Performance Management の仕様上の最大値は 2,500 です。ただし 250 個を超えた場合、PFM・Manager、PFM・Agent、または PFM・RM の処理が遅延することがあります。</p>

#	変更箇所	追加・変更内容																												
		<p>[訂正後]</p> <p>注</p> <p>Performance Management の仕様上の最大値は 2,500 です。ただし 250 個を超えた場合、PFM - Manager、PFM - Agent、または PFM - RM の処理が遅延します。</p>																												
38	付録 C	<p>システム見積もり</p> <p>[訂正前]</p> <p>Performance Management を使ったシステムを構築する前に、使用するマシンの性能が Performance Management を運用するのに十分であるか、見積もっておくことをお勧めします。</p> <p>なお、PFM - Agent または PFM - RM でも同様に、使用するマシンの性能が PFM - Agent または PFM - RM を運用するのに十分であるか、見積もっておくことをお勧めします。</p> <p>[訂正後]</p> <p>Performance Management を使ったシステムを構築する前に、使用するマシンの性能が Performance Management を運用するのに十分であるか、見積もってください。</p> <p>なお、PFM - Agent または PFM - RM でも同様に、使用するマシンの性能が PFM - Agent または PFM - RM を運用するのに十分であるか、見積もってください。</p>																												
39	付録 C.1	<p>メモリー所要量</p> <p>(2) UNIX の場合</p> <p>表 C-2 メモリー所要量 (UNIX の場合)</p> <p>[訂正前]</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">プログラム</th><th colspan="2">メモリー所要量 (単位: メガバイト)</th></tr> <tr> <th colspan="2">Linux (IPF除く)</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>PFM - Manager</td><td colspan="2">850</td></tr> <tr> <td>PFM - Web Console</td><td colspan="2">1,430</td></tr> <tr> <td>PFM - Base</td><td colspan="2">30</td></tr> </tbody> </table> <p>[訂正後]</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">プログラム</th><th colspan="2">メモリー所要量 (単位: メガバイト)</th></tr> <tr> <th>Linux (Linux Server 6)</th><th>Linux (Linux 5まで, IPF除く)</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>PFM - Manager</td><td>850</td><td>850</td></tr> <tr> <td>PFM - Web Console</td><td>1,527</td><td>1,430</td></tr> <tr> <td>PFM - Base</td><td>30</td><td>30</td></tr> </tbody> </table>	プログラム	メモリー所要量 (単位: メガバイト)		Linux (IPF除く)		PFM - Manager	850		PFM - Web Console	1,430		PFM - Base	30		プログラム	メモリー所要量 (単位: メガバイト)		Linux (Linux Server 6)	Linux (Linux 5まで, IPF除く)	PFM - Manager	850	850	PFM - Web Console	1,527	1,430	PFM - Base	30	30
プログラム	メモリー所要量 (単位: メガバイト)																													
	Linux (IPF除く)																													
PFM - Manager	850																													
PFM - Web Console	1,430																													
PFM - Base	30																													
プログラム	メモリー所要量 (単位: メガバイト)																													
	Linux (Linux Server 6)	Linux (Linux 5まで, IPF除く)																												
PFM - Manager	850	850																												
PFM - Web Console	1,527	1,430																												
PFM - Base	30	30																												

#	変更箇所	追加・変更内容																												
40	付録 C.2	ディスク占有量 (1) システム全体のディスク占有量 (b) UNIX の場合 表 C-4 システム全体のディスク占有量 (UNIX の場合) [訂正前]																												
		<table> <tr> <th rowspan="2">プログラム</th><th rowspan="2">状態</th><th colspan="2">ディスク占有量 (単位: メガバイト)</th></tr> <tr> <th colspan="2">Linux (IPF除く)</th></tr> <tr> <td rowspan="2">PFM - Manager</td><td>インストール時</td><td colspan="2">260 * 2</td></tr> <tr> <td>標準※1※2</td><td colspan="2">$560 + 0.1 * a + 0.015 * a * b + 0.01 * c + 2 * d + W$</td></tr> <tr> <td rowspan="2">PFM - Web Console</td><td>インストール時</td><td colspan="2">550</td></tr> <tr> <td>初期状態での運用※3</td><td colspan="2">$550 + 160 + (e * f * g)$</td></tr> <tr> <td rowspan="2">PFM - Base</td><td>インストール時</td><td colspan="2">70 * 2</td></tr> <tr> <td>標準</td><td colspan="2">$170 + 2 * d$</td></tr> </table>		プログラム	状態	ディスク占有量 (単位: メガバイト)		Linux (IPF除く)		PFM - Manager	インストール時	260 * 2		標準※1※2	$560 + 0.1 * a + 0.015 * a * b + 0.01 * c + 2 * d + W$		PFM - Web Console	インストール時	550		初期状態での運用※3	$550 + 160 + (e * f * g)$		PFM - Base	インストール時	70 * 2		標準	$170 + 2 * d$	
プログラム	状態	ディスク占有量 (単位: メガバイト)																												
		Linux (IPF除く)																												
PFM - Manager	インストール時	260 * 2																												
	標準※1※2	$560 + 0.1 * a + 0.015 * a * b + 0.01 * c + 2 * d + W$																												
PFM - Web Console	インストール時	550																												
	初期状態での運用※3	$550 + 160 + (e * f * g)$																												
PFM - Base	インストール時	70 * 2																												
	標準	$170 + 2 * d$																												
		[訂正後]																												
		<table> <tr> <th rowspan="2">プログラム</th><th rowspan="2">状態</th><th colspan="2">ディスク占有量 (単位: メガバイト)</th></tr> <tr> <th>Linux (Linux Server 6)</th><th>Linux (Linux 5まで, IPF除く)</th></tr> <tr> <td rowspan="2">PFM - Manager</td><td>インストール時</td><td>260 * 2</td><td>260 * 2</td></tr> <tr> <td>標準※1※2</td><td>$590 + 0.1 * a + 0.015 * a * b + 0.01 * c + 2 * d + W$</td><td>$560 + 0.1 * a + 0.015 * a * b + 0.01 * c + 2 * d + W$</td></tr> <tr> <td rowspan="2">PFM - Web Console</td><td>インストール時</td><td>510</td><td>550</td></tr> <tr> <td>初期状態での運用※3</td><td>$510 + 160 + (e * f * g)$</td><td>$550 + 160 + (e * f * g)$</td></tr> <tr> <td rowspan="2">PFM - Base</td><td>インストール時</td><td>70 * 2</td><td>70 * 2</td></tr> <tr> <td>標準</td><td>$210 + 2 * d$</td><td>$170 + 2 * d$</td></tr> </table>		プログラム	状態	ディスク占有量 (単位: メガバイト)		Linux (Linux Server 6)	Linux (Linux 5まで, IPF除く)	PFM - Manager	インストール時	260 * 2	260 * 2	標準※1※2	$590 + 0.1 * a + 0.015 * a * b + 0.01 * c + 2 * d + W$	$560 + 0.1 * a + 0.015 * a * b + 0.01 * c + 2 * d + W$	PFM - Web Console	インストール時	510	550	初期状態での運用※3	$510 + 160 + (e * f * g)$	$550 + 160 + (e * f * g)$	PFM - Base	インストール時	70 * 2	70 * 2	標準	$210 + 2 * d$	$170 + 2 * d$
プログラム	状態	ディスク占有量 (単位: メガバイト)																												
		Linux (Linux Server 6)	Linux (Linux 5まで, IPF除く)																											
PFM - Manager	インストール時	260 * 2	260 * 2																											
	標準※1※2	$590 + 0.1 * a + 0.015 * a * b + 0.01 * c + 2 * d + W$	$560 + 0.1 * a + 0.015 * a * b + 0.01 * c + 2 * d + W$																											
PFM - Web Console	インストール時	510	550																											
	初期状態での運用※3	$510 + 160 + (e * f * g)$	$550 + 160 + (e * f * g)$																											
PFM - Base	インストール時	70 * 2	70 * 2																											
	標準	$210 + 2 * d$	$170 + 2 * d$																											

#	変更箇所	追加・変更内容														
41	付録 C.3	<p>クラスタシステムで運用する場合のディスク占有量 (1) 共有ディスクのディスク占有量 (a) Windows の場合 表 C-7 共有ディスクのディスク占有量 (Windows の場合) [追加]</p> <table><tr><th>プログラム</th><th>ディスク占有量の見積もり式 (単位 : メガバイト)</th></tr><tr><td>PFM - Base</td><td>$25+2 * d$</td></tr></table> <p>(凡例) d : ログファイルの上限値 (メガバイト)</p>	プログラム	ディスク占有量の見積もり式 (単位 : メガバイト)	PFM - Base	$25+2 * d$										
プログラム	ディスク占有量の見積もり式 (単位 : メガバイト)															
PFM - Base	$25+2 * d$															
42	付録 C.3	<p>クラスタシステムで運用する場合のディスク占有量 (1) 共有ディスクのディスク占有量 (b) UNIX の場合 表 C-8 共有ディスクのディスク占有量 (UNIX の場合) [追加]</p> <table><tr><th rowspan="2">プログラム</th><th colspan="4">ディスク占有量の見積もり式 (単位 : メガバイト)</th></tr><tr><th>HP-UX</th><th>Solaris</th><th>AIX</th><th>Linux</th></tr><tr><td>PFM - Base</td><td>$25+2 * d$</td><td>$25+2 * d$</td><td>$25+2 * d$</td><td>$25+2 * d$</td></tr></table> <p>(凡例) d : ログファイルの上限値 (メガバイト)</p>	プログラム	ディスク占有量の見積もり式 (単位 : メガバイト)				HP-UX	Solaris	AIX	Linux	PFM - Base	$25+2 * d$	$25+2 * d$	$25+2 * d$	$25+2 * d$
プログラム	ディスク占有量の見積もり式 (単位 : メガバイト)															
	HP-UX	Solaris	AIX	Linux												
PFM - Base	$25+2 * d$	$25+2 * d$	$25+2 * d$	$25+2 * d$												
43	付録 D.1	<p>カーネルパラメーター一覧 付録 D.1 HP-UX の場合 (1) PFM - Manager が必要とするシステムリソース [訂正前]</p> <table><tr><th>システムリソース</th><th>パラメーター</th><th>見積もり</th></tr><tr><td>ファイルシステム</td><td>nfile</td><td>$330+100 * \text{監視する PFM - Agent 製品数}^{\ast 1}$</td></tr></table> <p>[訂正後]</p> <table><tr><th>システムリソース</th><th>パラメーター</th><th>見積もり</th></tr><tr><td>ファイルシステム</td><td>nfile^{※3}</td><td>$330+100 * \text{監視する PFM - Agent 製品数}^{\ast 1}$</td></tr></table> <p>注※3 HP-UX 11i V3の場合は調整不要です。</p>	システムリソース	パラメーター	見積もり	ファイルシステム	nfile	$330+100 * \text{監視する PFM - Agent 製品数}^{\ast 1}$	システムリソース	パラメーター	見積もり	ファイルシステム	nfile ^{※3}	$330+100 * \text{監視する PFM - Agent 製品数}^{\ast 1}$		
システムリソース	パラメーター	見積もり														
ファイルシステム	nfile	$330+100 * \text{監視する PFM - Agent 製品数}^{\ast 1}$														
システムリソース	パラメーター	見積もり														
ファイルシステム	nfile ^{※3}	$330+100 * \text{監視する PFM - Agent 製品数}^{\ast 1}$														

#	変更箇所	追加・変更内容																		
44	付録 D.1	<p>カーネルパラメーター一覧 付録 D.1 HP-UX の場合 (2) PFM・Base が必要とするシステムリソース [訂正前]</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>システムリソース</th><th>パラメーター</th><th>見積もり</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>ファイルシステム</td><td>nfile</td><td>30</td></tr> <tr> <td>プロセス</td><td>nproc</td><td>3+2 * 同時に実行するコマンド数*</td></tr> </tbody> </table> <p>注※ 一度に同時に実行されるコマンドの最大実行数です。例えば、Jpctool db backup -direct コマンドを複数のエージェントに同時に実行する運用がある場合は、その同時実行数になります。</p> <p>[訂正後]</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>システムリソース</th><th>パラメーター</th><th>見積もり</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>ファイルシステム</td><td>nfile※2</td><td>30</td></tr> <tr> <td>プロセス</td><td>nproc</td><td>3+2 * 同時に実行するコマンド数※1</td></tr> </tbody> </table> <p>注※1 一度に同時に実行されるコマンドの最大実行数です。例えば、Jpctool db backup -direct コマンドを複数のエージェントに同時に実行する運用がある場合は、その同時実行数になります。</p> <p>注※2 HP-UX 11i V3 の場合は調整不要です。</p>	システムリソース	パラメーター	見積もり	ファイルシステム	nfile	30	プロセス	nproc	3+2 * 同時に実行するコマンド数*	システムリソース	パラメーター	見積もり	ファイルシステム	nfile※2	30	プロセス	nproc	3+2 * 同時に実行するコマンド数※1
システムリソース	パラメーター	見積もり																		
ファイルシステム	nfile	30																		
プロセス	nproc	3+2 * 同時に実行するコマンド数*																		
システムリソース	パラメーター	見積もり																		
ファイルシステム	nfile※2	30																		
プロセス	nproc	3+2 * 同時に実行するコマンド数※1																		
45	付録 D.1	<p>カーネルパラメーター一覧 付録 D.1 HP-UX の場合 (3) PFM・Web Console が必要とするシステムリソース [訂正前]</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>システムリソース</th><th>パラメーター</th><th>見積もり</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>ファイルシステム</td><td>nfile</td><td>375</td></tr> </tbody> </table> <p>[訂正後]</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>システムリソース</th><th>パラメーター</th><th>見積もり</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>ファイルシステム</td><td>nfile※</td><td>375</td></tr> </tbody> </table> <p>注※ HP-UX 11i V3 の場合は調整不要です。</p>	システムリソース	パラメーター	見積もり	ファイルシステム	nfile	375	システムリソース	パラメーター	見積もり	ファイルシステム	nfile※	375						
システムリソース	パラメーター	見積もり																		
ファイルシステム	nfile	375																		
システムリソース	パラメーター	見積もり																		
ファイルシステム	nfile※	375																		

#	変更箇所	追加・変更内容																		
46	付録 D.1	<p>カーネルパラメーター一覧 付録 D.1 HP-UX の場合 (4) Store データベースを Store バージョン 2.0 で使用する場合に PFM・Agent または PFM・RM で必要となるシステムリソース [訂正前]</p> <table> <tr> <th>システムリソース</th><th>パラメーター</th><th>見積もり</th></tr> <tr> <td rowspan="4">ファイルシステム</td><td>nfile</td><td rowspan="4">Store サービスがオープンするファイル数※</td></tr> <tr> <td>ninode</td></tr> <tr> <td>maxfiles</td></tr> <tr> <td>Maxfiles_lim</td></tr> </table> <p>注※ Store サービスがオープンするファイル数の見積もりについては「付録 C.4(1)(d) Store サービスがオープンするファイル数」を参照してください。また、オープンするファイル数の上限はulimitコマンドを使用して変更できます。カーネルパラメーターの見積もりがシステムの上限を超えた場合はulimitコマンドによって上限を十分大きい値に設定してください。</p> <p>[訂正後]</p> <table> <tr> <th>システムリソース</th><th>パラメーター</th><th>見積もり</th></tr> <tr> <td rowspan="4">ファイルシステム</td><td>nfile※2</td><td rowspan="4">Store サービスがオープンするファイル数※1</td></tr> <tr> <td>ninode</td></tr> <tr> <td>maxfiles</td></tr> <tr> <td>maxfiles_lim</td></tr> </table> <p>注※1 Store サービスがオープンするファイル数の見積もりについては「付録 C.4(1)(d) Store サービスがオープンするファイル数」を参照してください。また、オープンするファイル数の上限はulimitコマンドを使用して変更できます。カーネルパラメーターの見積もりがシステムの上限を超えた場合はulimitコマンドによって上限を十分大きい値に設定してください。</p> <p>注※2 HP-UX 11i V3の場合は調整不要です。</p>	システムリソース	パラメーター	見積もり	ファイルシステム	nfile	Store サービスがオープンするファイル数※	ninode	maxfiles	Maxfiles_lim	システムリソース	パラメーター	見積もり	ファイルシステム	nfile※2	Store サービスがオープンするファイル数※1	ninode	maxfiles	maxfiles_lim
システムリソース	パラメーター	見積もり																		
ファイルシステム	nfile	Store サービスがオープンするファイル数※																		
	ninode																			
	maxfiles																			
	Maxfiles_lim																			
システムリソース	パラメーター	見積もり																		
ファイルシステム	nfile※2	Store サービスがオープンするファイル数※1																		
	ninode																			
	maxfiles																			
	maxfiles_lim																			

#	変更箇所	追加・変更内容																																		
47	付録 D.3	<p>AIX の場合 (2) PFM - Base が必要とするシステムリソース [訂正前]</p> <table> <tr> <th>システムリソース</th><th>パラメーター</th><th>見積もり</th></tr> <tr> <td>:</td><td>:</td><td>:</td></tr> <tr> <td>プロセス</td><td>maxuprc</td><td>3+2 * 同時に実行するコマンド数※</td></tr> <tr> <td>:</td><td>:</td><td>:</td></tr> <tr> <td rowspan="2">メモリー</td><td>data_hard</td><td>2,560,000</td></tr> <tr> <td>stack_hard</td><td>2,560,000</td></tr> </table> <p>[訂正後]</p> <table> <tr> <th>システムリソース</th><th>パラメーター</th><th>見積もり</th></tr> <tr> <td>:</td><td>:</td><td>:</td></tr> <tr> <td>プロセス</td><td>maxuproc</td><td>3+2 * 同時に実行するコマンド数※</td></tr> <tr> <td>:</td><td>:</td><td>:</td></tr> <tr> <td rowspan="2">メモリー</td><td>data_hard</td><td>104,857,600 (100MB)</td></tr> <tr> <td>stack_hard</td><td>134,217,728 (128MB)</td></tr> </table>	システムリソース	パラメーター	見積もり	:	:	:	プロセス	maxuprc	3+2 * 同時に実行するコマンド数※	:	:	:	メモリー	data_hard	2,560,000	stack_hard	2,560,000	システムリソース	パラメーター	見積もり	:	:	:	プロセス	maxuproc	3+2 * 同時に実行するコマンド数※	:	:	:	メモリー	data_hard	104,857,600 (100MB)	stack_hard	134,217,728 (128MB)
システムリソース	パラメーター	見積もり																																		
:	:	:																																		
プロセス	maxuprc	3+2 * 同時に実行するコマンド数※																																		
:	:	:																																		
メモリー	data_hard	2,560,000																																		
	stack_hard	2,560,000																																		
システムリソース	パラメーター	見積もり																																		
:	:	:																																		
プロセス	maxuproc	3+2 * 同時に実行するコマンド数※																																		
:	:	:																																		
メモリー	data_hard	104,857,600 (100MB)																																		
	stack_hard	134,217,728 (128MB)																																		
48	付録 D.3	<p>AIX の場合 (3) PFM - Web Console が必要とするシステムリソース [訂正前]</p> <table> <tr> <th>システムリソース</th><th>パラメーター</th><th>見積もり</th></tr> <tr> <td>:</td><td>:</td><td>:</td></tr> <tr> <td>共用メモリー</td><td>shmmax</td><td>28,788</td></tr> <tr> <td>:</td><td>:</td><td>:</td></tr> <tr> <td>プロセス</td><td>maxuprc</td><td>—</td></tr> <tr> <td>:</td><td>:</td><td>:</td></tr> </table>	システムリソース	パラメーター	見積もり	:	:	:	共用メモリー	shmmax	28,788	:	:	:	プロセス	maxuprc	—	:	:	:																
システムリソース	パラメーター	見積もり																																		
:	:	:																																		
共用メモリー	shmmax	28,788																																		
:	:	:																																		
プロセス	maxuprc	—																																		
:	:	:																																		

#	変更箇所	追加・変更内容		
		[訂正後]		
		システムリソース	パラメーター	見積もり
		：	：	：
		共用メモリー	shmmax	—
		：	：	：
		プロセス	maxuproc	—
		：	：	：

付録 L 用語解説

(英字)

Action Handler

PFM・Manager または PFM・Base のサービスの一つです。アクションを実行するサービスのことです。

Agent Collector

PFM・Agent のサービスの一つです。パフォーマンスデータを収集したり、アラームに設定されたしきい値で、パフォーマンスデータを評価したりするサービスのことです。

Agent Store

PFM・Agent のサービスの一つです。パフォーマンスデータを格納するサービスのことです。Agent Store サービスは、パフォーマンスデータの記録のためにデータベースを使用します。各 PFM・Agent に対応して、各 Agent Store サービスがあります。

Correlator

PFM・Manager のサービスの一つです。サービス間のイベント配信を制御するサービスのことで、アラームの状態を評価して、しきい値を超過するとアラームを Trap Generator サービスおよび PFM・Web Console に送信します。

HA クラスタシステム

高可用性を実現させるためのクラスタシステムです。障害が発生しても運用を継続できるようにすることを目的としています。業務実行中のサーバで障害が発生すると、待機していた別のサーバが業務の処理を引き継ぎます。これによって、障害発生時の業務の中断を防ぎ、可用性を向上させることができます。
このマニュアルでは、単に「クラスタシステム」と記述している場合は、HA クラスタシステムのことを指します。

Master Manager

PFM・Manager のサービスの一つです。PFM・Manager のメインサービスのことです。

Master Store

PFM・Manager のサービスの一つです。各 PFM・Agent から発行されたアラームイベントを管理するサービスのことです。Master Store サービスはイベントデータの保持のためにデータベースを使用します。

Name Server

PFM・Manager のサービスの一つです。システム内のサービス構成情報を管理するサービスのことです。

ODBC キーフィールド

PFM・Manager または PFM・Base で、SQL を使用して Store データベースに格納されているレコードのデータを利用する場合に必要な ODBC キーフィールドを示します。ODBC キーフィールド

には、各レコード共通のものと各レコード固有のものがあります。

PD レコードタイプ

「Product Detail レコードタイプ」を参照してください。

Performance Management

システムのパフォーマンスに関する問題を監視および分析するために必要なソフトウェア群の総称です。Performance Management は、次の五つのプログラムプロダクトで構成されます。

- PFM - Manager
- PFM - Web Console
- PFM - Base
- PFM - Agent
- PFM - RM

Performance Management ODBC ドライバー

Performance Management の Open Data Access コンポーネントに用意された ODBC ドライバーです。このドライバーを組み込むことで、Microsoft の ODBC に対応したアプリケーションプログラムから Agent Store および Remote Monitor Store サービスのデータにアクセスできます。

PFM - Agent

Performance Management を構成するプログラムプロダクトの一つです。PFM - Agent は、エージェント監視機能に相当し、監視対象となるアプリケーション、データベース、OS によって、各種の PFM - Agent があります。PFM - Agent には、次の機能があります。

- 監視対象のパフォーマンスの監視
- 監視対象のデータの収集および記録

PFM - Base

Performance Management を構成するプログラムプロダクトの一つです。Performance Management で稼働監視を行うための基盤機能を提供します。PFM - Agent および PFM - RM を動作させるための前提製品です。

- 各種コマンドなどの管理ツール
- Performance Management と他システムとの連携に必要な共通機能

PFM - Manager

Performance Management を構成するプログラムプロダクトの一つです。PFM - Manager は、マネージャー機能に相当し、次の機能があります。

- Performance Management のプログラムプロダクトの管理
- イベントの管理

PFM - Manager 名

Store データベースに格納されているフィールドを識別するための名称です。コマンドでフィールドを指定する場合などに使用します。

PFM - RM

Performance Management を構成するプログラムプロダクトの一つです。PFM - RM は、リモート監視機能に相当し、監視対象となるアプリケーション、データベース、OS によって、各種の PFM - RM があります。PFM - RM には、次の機能があります。

- 監視対象のパフォーマンスの監視
- 監視対象のデータの収集および記録

PFM - View 名

PFM - Manager 名の別名です。PFM - Manager 名に比べ、より直感的な名称になっています。例えば、PFM - Manager 名の「INPUT_RECORD_TYPE」は、PFM - View 名で「Record Type」です。PFM - Web Console の GUI 上でフィールドを指定する場合などに使用します。

PFM - Web Console

Performance Management を構成するプログラムプロダクトの一つです。Web ブラウザで Performance Management システムを一元的に監視するため Web アプリケーションサーバの機能を提供します。PFM - Web Console には、次の機能があります。

- GUI の表示
- 統合監視および管理機能
- レポートの定義およびアラームの定義

PI レコードタイプ

「Product Interval レコードタイプ」

Product Detail レコードタイプ

現在起動しているプロセスの詳細情報など、ある時点でのシステムの状態を示すパフォーマンスデータが格納されるレコードタイプのことです。PD レコードタイプは、次のような、ある時点でのシステムの状態を知りたい場合に使用します。

- システムの稼働状況
- 現在使用しているファイルシステム容量

Product Interval レコードタイプ

1 分ごとのプロセス数など、ある一定の時間（インターバル）ごとのパフォーマンスデータが格納されるレコードタイプのことです。PI レコードタイプは、次のような、時間の経過に伴うシステムの状態の変化や傾向を分析したい場合に使用します。

- 一定時間内に発生したシステムコール数の推移
- 使用しているファイルシステム容量の推移

Remote Monitor Collector

PFM - RM のサービスの一つです。パフォーマンスデータを収集したり、アラームに設定されたしきい値で、パフォーマンスデータを評価したりするサービスのことです。

Remote Monitor Store

PFM - RM のサービスの一つです。パフォーマンスデータを格納するサービスのことです。Remote Monitor Store サービスは、パフォーマンスデータの記録のためにデータベースを使用します。各 PFM - RM に対応して、各 Remote Monitor Store サービスがあります。

Store データベース

Agent Collector および Remote Monitor Collector サービスが収集したパフォーマンスデータが格納されるデータベースのことです。

Trap Generator

PFM・Manager のサービスの一つです。SNMP トラップを発行するサービスのことです。

UAC

ユーザーアカウント制御 (User Account Control) のことです。Windows Server 2008 では、管理ユーザーとしてログオンしても管理者特権が制限されています。管理者特権の必要なプログラムを実行しようすると、特権昇格のための UAC ポップアップが表示されます。

UAC ポップアップ

Windows Server 2008 の UAC 機能が有効な場合に、特権昇格を促すポップアップウィンドウのことです。特権昇格を行った場合、該当プログラムは管理者特権を持った状態で起動されます。

View Server

PFM・Manager のサービスの一つです。PFM・Web Console と PFM・Manager 間を接続するサービスのことです。

WRP

Windows リソース保護のことです。WRP で保護されたファイルは、削除や変更ができなくなっています。UAC とは独立した機能で、たとえ管理者特権を持っていても削除や変更はできません。

(実行)

アクション

監視するデータがしきい値に達した場合に、Performance Management によって自動的に実行される動作のことです。次の動作があります。

- Eメールの送信
- コマンドの実行
- SNMP トラップの発行
- JP1 イベントの発行

アラーム

監視するデータがしきい値に達した場合のアクションやイベントメッセージを定義した情報のことです。

アラームテーブル

次の情報を定義した一つ以上のアラームをまとめたテーブルです。

- 監視するオブジェクト (Process, TCP, Webservice など)
- 監視する情報 (CPU 使用率, 1 秒ごとの受信バイト数など)
- 監視する条件 (しきい値)

インスタンス

このマニュアルでは、インスタンスという用語を次のように使用しています。

- レコードの記録形式を示す場合
1 行で記録されるレコードを「単数インスタンスレコード」、複数行で記録されるレコードを「複数インスタンスレコード」、レコード中の各行を「インスタンス」と呼びます。
- PFM・Agent および PFM・RM の起動方式を示す場合

同一ホスト上の監視対象を一つのエージェントで監視する方式のエージェントを「シングルインスタンスエージェント」、同一ホスト上の監視対象を複数のエージェントで監視する方式のエージェントを「マルチインスタンスエージェント」、マルチインスタンスエージェントの各エージェントサービスを「インスタンス」と呼びます。

インスタンス番号

内部処理で使用する、1 バイトの管理番号を示す識別子のことです。サービス ID の一部です。

エージェント

パフォーマンスデータを収集する PFM・Agent および PFM・RM のサービスのことです。

エージェント監視

監視対象のサーバにエージェントをインストールして、サーバの稼働状況を監視する運用形態です。監視対象のサーバにエージェントをインストールする必要がありますが、充実した監視項目でサーバの稼働状況を監視できます。

オートラベル

グラフ上のプロットにマウスポインタを重ねると、対応するデータの値をツールチップに表示できる機能のことです。

オープンインターフェース

ODBC や SNMP に準拠した製品または JP1/IM と連携できる機能のことです。

(力行)

監視テンプレート

PFM・Agent および PFM・RM に用意されている、定義済みのアラームとレポートのことです。監視テンプレートを使用することで、複雑な定義をしなくても PFM・Agent および PFM・RM の運用状況を監視する準備が容易にできるようになります。

管理者コンソール

Windows Server 2008 の UAC 機能が有効な場合に、管理者特権が必要なコマンドを実行するために Performance Management が提供するコマンドプロンプトのことです。

管理ツール

サービスの状態の確認やパフォーマンスデータを操作するために使用する各種のコマンドまたは GUI 上の機能のことです。次のことができます。

- サービスの構成および状態の表示
- パフォーマンスデータの退避および回復
- パフォーマンスデータのテキストファイルへのエクスポート
- パフォーマンスデータの消去

機能 ID

Performance Management プログラムのサービスの機能種別を示す、1 バイトの識別子のことです。サービス ID の一部です。

業務グループ

Performance Management の監視対象ホストを組織ごとに分け、ユーザーが参照できる監視エージェントを限定するためのグループです。業務グループを割り当てられたユーザーは、その業務グループの範囲内で監視エージェントを参照できます。また、Performance Management で使用できる業務グループには、Performance Management で定義する業務グループと、統合管理製品 (JP1/IM) で定義する業務グループがあります。

業務グループユーザー

操作対象として、業務グループが割り当てられたユーザーのことです。業務グループユーザーは、割り当てられた業務グループの範囲内で監視エージェントを参照できます。

クラスタシステム

クラスタシステムとは、複数のサーバシステムを連携して一つのシステムとして運用するシステムです。大きく分けて HA (High Availability) クラスタシステムと負荷分散クラスタシステムの 2 種類があります。

このマニュアルでは、単に「クラスタシステム」と記述している場合は、HA クラスタシステムのことを指します。

「HA クラスタシステム」

「負荷分散クラスタシステム」

系列グループ

複合ブックマークに登録されたオブジェクトを表示形式によって分類したものです。複合ブックマークの編集によって設定できます。

(サ行)

サービス ID

Performance Management プログラムのサービスに付加された、一意の ID のことです。コマンドを使用して Performance Management のシステム構成を確認する場合、または個々のエージェントのパフォーマンスデータをバックアップする場合などは、Performance Management プログラムのサービス ID を指定してコマンドを実行します。

サービス ID の形式は、プロダクト名表示機能の設定によって異なります。サービス ID の形式については、「4.1.2 サービスの表示・指定方法」を参照してください。

システムユーザー

Performance Management システム全体を操作できるユーザーのことです。

実行系ノード

クラスタシステムを構成するそれぞれのサーバシステムの、業務を実行中のノード (論理ホストがアクティブなノード) のことです。

シングルインスタンスエージェント

同一ホスト上の監視対象を一つのエージェントで監視する方式のエージェントのことです。

「インスタンス」を参照してください。

スタンドアロンモード

PFM・Agent または PFM・RM 単独で起動している状態のことです。PFM・Manager の Master Manager サービスおよび Name Server サービスが、障害などのため起動できない状態でも、PFM・Agent または PFM・RM だけを起動して、パフォーマンスデータを収集できます。

(タ行)

待機系ノード

クラスタシステムを構成するそれぞれのサーバシステムの、実行系ノードの障害時に業務を引き継げるよう待機しているノードのことです。

単数インスタンスレコード

1 行で記録されるレコードです。このレコードは、固有の ODBC キーフィールドを持ちません。「インスタンス」を参照してください。

データグループ

同一時刻のレコードを一つのデータとした集合のことです。一つのデータグループには 1 レコード以上が存在します。

データベース ID

PFM・Agent および PFM・RM の各レコードに付けられた、レコードが格納されるデータベースを示す ID です。データベース ID は、そのデータベースに格納されるレコードの種類を示しています。データベース ID を次に示します。

- PI
PI レコードタイプのレコードのデータベースであることを示します。
- PD
PD レコードタイプのレコードのデータベースであることを示します。

データモデル

各 PFM・Agent および PFM・RM が持つレコードおよびフィールドの総称のことです。データモデルは、バージョンで管理されています。

デバイス ID

Performance Management プログラムのサービスが起動されている、Performance Management システム上のホストを示す 1 ～ 255 バイトの識別子のことです。サービス ID の一部です。

登録レポート

ブックマーク機能を利用して、表示条件やエージェントとあわせて登録されたレポートです。一度登録しておけば、簡単な操作で目的のレポートを表示できます。

ドリルダウンレポート

レポートまたはレポートのフィールドに関連づけられたレポートです。あるレポートの詳細情報や関連情報を表示したい場合に使用します。

(八行)

バインド

アラームをエージェントと関連づけることです。バインドすると、エージェントによって収集されているパフォーマンスデータが、アラームで定義したしきい値に達した場合、ユーザーに通知できるようになります。

パフォーマンスデータ

監視対象システムから収集したリソースの稼働状況データのことです。

非対話形式 (コマンド)

コマンドの実行中に必要な入力作業について、オプションの指定や定義ファイルの読み込みで代替するコマンドの実行形式です。

非対話形式でコマンドを実行することで、稼働監視システムの構築を省力化でき、ユーザーの負担を軽減できます。

フィールド

レコードを構成するパフォーマンスデータの集まりのことです。

フェールオーバー

クラスタシステムで障害が発生したときに、業務を実行するサーバの処理を実行系ノードから待機系ノードに引き継ぐことです。

負荷分散クラスタシステム

複数のノードで処理の負荷を分散して実行するシステムです。複数のノードで処理を分散して実行することによって処理能力を向上させることを目的としています。また、障害が発生してノードが停止してもほかのノードに処理を切り替えることによってシステムの可用性も向上できます。

複合ブックマーク

複数の登録レポート、複数のベースラインを保持、管理するオブジェクトのことです。複合レポートを表示できます。

複合レポート画面

複合ブックマーク内の登録レポートおよびベースラインを同一表示するレポート画面です。

複数インスタンスレコード

複数行で記録されるレコードです。このレコードは、固有の ODBC キーフィールドを持っています。

「インスタンス」を参照してください。

物理ホスト

クラスタシステムを構成する各サーバに固有な環境のことです。物理ホストの環境は、フェールオーバー時にもほかのサーバに引き継がれません。

プライマリーホスト名

グループエージェントの稼働ホスト名のことです。グループエージェントは複数の監視対象を一括監視するため、複数の監視対象のうち、そのグループエージェントを代表する監視対象のホスト名が使用されます。

デフォルトで設定される「All」グループエージェントでは、PFM・RM の稼働ホスト名が使用されます。

プロダクト ID

該当する Performance Management プログラムのサービスが、Performance Management のどのプログラムプロダクトのものかを示す 1 バイトの識別子のことです。サービス ID の一部です。

プロット

グラフの構成要素の一つで、グラフ領域のフィールド上でデータを示す点のことです。例えば、折れ線グラフは、これらの点を順に直線で結ぶことで生成されます。また、Performance Management では、プロットをダブルクリックすることでドリルダウンできたり、プロットにマウスポイントを重ねることで対応するデータの値をツールチップに表示できたりします。

ベースライン

過去のある期間のレポートを基準値として保存したオブジェクトのことです。複合レポートに基準値として同一表示できます。

ヘルスチェック

次のサービスやホストの稼働状態を監視する機能です。

- PFM・Agent または PFM・RM のサービス
- PFM・Agent または PFM・RM が稼働するホスト
- PFM・RM の監視対象ホスト

この機能は PFM・Manager が提供します。

ヘルスチェックエージェント

次のサービスやホストの稼働状態を監視するためのエージェントです。

- PFM・Agent または PFM・RM のサービス
- PFM・Agent または PFM・RM が稼働するホスト
- PFM・RM の監視対象ホスト

(マ行)

マルチインスタンスエージェント

同一ホスト上の監視対象を複数のエージェントで監視する方式のエージェントのことです。
「インスタンス」を参照してください。

(ラ行)

ライフタイム

各レコードに収集されるパフォーマンスデータの一貫性が保証される期間のことです。

リアルタイムレポート

監視対象の現在の状況を示すレポートです。

リモート監視

監視対象のサーバにエージェントをインストールしないで、別のホストからリモートでサーバの稼働状況を監視する運用形態です。監視対象のサーバにエージェントをインストールする作業が不要なので、稼働中のシステムに対して稼働監視を始める場合に便利です。エージェント監視と比較すると監視項目は少ないものの、一つの PFM・RM で、複数の監視対象のパフォーマンスデータを収集・管理できます。

履歴レポート

監視対象の過去から現在までの稼働状況を示すレポートです。

レコード

収集したパフォーマンスデータを格納する形式のことです。レコードの種類は、Store データベースの各データベースによって異なります。

レポート

PFM・Agent および PFM・RM が収集したパフォーマンスデータをグラフィカルに表示する際の情報を定義したものです。主に、次の情報を定義します。

- レポートに表示させるレコード
- パフォーマンスデータの表示項目
- パフォーマンスデータの表示形式（表、グラフなど）

レポートキャッシュファイル

レポートのデータが一時的に格納されるディスク上のファイルのことです。

レポートキャッシュファイルは、レポートキャッシュファイル化機能を有効にした場合に生成され、PFM・Web Console でレポートを表示するときや `jpcrpt` コマンドでレポートを出力するときに使用されます。これによって、PFM・Web Console がメモリーに保持するデータが減少し、メモリー不足が発生しにくくなります。

論理ホスト

クラスタシステムでの運用時に JP1 の実行環境となる論理上のサーバのことです。障害の発生時には、論理ホスト単位で系が切り替わります。論理ホストは専用の IP アドレスを持ち、フェールオーバー時にはその IP アドレスを引き継いで動作します。そのため、障害で物理的なサーバが切り替わった場合も、クライアントからは同じ IP アドレスでアクセスでき、一つのサーバが常に動作しているように見えます。

索引

A

Abnormal Status(A) アラーム 515
Abnormal Status(S) アラーム 516
Action Handler 92, 93
Action Handler (用語解説) 571
Agent Collector 93
Agent Collector (ヘルスチェックエージェント) 92
Agent Collector (用語解説) 571
Agent Collector サービス 105
Agent Detail (Historical) 530
Agent Detail (Real-Time) 531
Agent Overview (Historical) 527
Agent Overview (Status Change) 528
Agent Store 94
Agent Store(ヘルスチェックエージェント) 93
Agent Store (用語解説) 571
Agent Store サービス 106
Agent 間直接情報参照抑止オプション 269, 385
Agent ホストリモート操作制限オプション 269, 385

C

Collection Interval 106, 113
Collection Offset 113
config.xml 249, 366
Correlator 92
Correlator (用語解説) 571

F

Firefox 2.0.x 193, 310
Firefox 3 192, 309
Firefox 3.6 310

H

HA クラスタシステム (用語解説) 571

Host Availability (4.0) 529
Host Not Available アラーム 518
Hosts Status (Real-Time) (4.0) 530
Host Status Change アラーム 517

I

Internet Explorer 6.0 195
Internet Explorer 7.0 194
Internet Explorer 8.0 194
IP アドレス 168, 277
IP アドレスの設定変更 246, 363

J

JP1 イベント 13
jpcaspsv 158
jpcasrec 157
jpccomm.ini 239, 244, 356, 361
jpccconf agent setup 152
jpccconf agttree export 155
jpccconf agttree import 155
jpccconf bgdef check 155
jpccconf bgdef delete 155
jpccconf bgdef display 155
jpccconf bgdef export 155
jpccconf bgdef import 156
jpccconf bgdef list 156
jpccconf db define 154
jpccconf db display 154
jpccconf db vrset 154
jpccconf db vrset -ver 2.0 127
jpccconf ha 153
jpccconf hc 154
jpccconf host 152
jpccconf im 155
jpccconf inst list 153
jpccconf inst setup 153
jpccconf inst unsetup 153
jpccconf mgrhost 152
jpccconf ov 155
jpccconf port 152

jpcconf prodname 154
 jpcconf stat 154
 jpcconf target display 153
 jpcconf target list 153
 jpcconf target setup 153
 jpcconf target unsetup 153
 jpcimevt 158
 jpcprocdef create 154
 jpcprocdef delete 154
 jpcprocdef list 154
 jpcprocdef output 154
 jpcras 158
 jpcrdef 157
 jpcrpt 157
 jpcspm start 158
 jpcspm stop 158
 jpcsto.ini 240, 357
 jpctool alarm 157
 jpctool db backup 157
 jpctool db clear 157
 jpctool db dmconvert 157
 jpctool db dump 157
 jpctool db import 124, 157
 jpctool db restore 157
 jpctool service delete 156
 jpctool service list 156
 jpctool service register 156
 jpctool service sync 156
 jpcwagtsetup 152
 jpcwras 158
 jpcwstart 158
 jpcwstop 159

L

LANG 環境変数の設定 298, 305

M

Master Manager 92
 Master Manager (用語解説) 571
 Master Store 92
 Master Store (用語解説) 571
 Master Store サービス 128

N

Name Server 92
 Name Server (用語解説) 571

O

ODBC キーフィールド (用語解説) 571
 ODBC キーフィールド一覧 489
 ODBC ドライバー 106

P

PA レコードタイプ 128
 PD_HC 497
 PD_HOST 507
 PD レコードタイプ 101
 PD レコードタイプ (用語解説) 572
 Performance Management (用語解説) 572
 Performance Management ODBC ドライ
 バー (用語解説) 572
 Performance Management が提供する製品
 群 9
 Performance Management による稼働監視
 6
 Performance Management の構成例 10
 PFM - Agent (用語解説) 572
 PFM - Agent または PFM - RM の登録
 184, 189, 300, 306
 PFM - Agent または PFM - RM ホスト名を変
 更する 229, 346
 PFM - Base (用語解説) 572
 PFM - Manager (用語解説) 572
 PFM - Manager との通信が発生しない時間
 の見積もり 434
 PFM - Manager のセットアップ手順
 183, 298
 PFM - Manager ホスト名を変更する
 223, 339
 PFM - Manager 名 (用語解説) 572
 PFM - RM (用語解説) 572
 PFM - RM のヘルスチェック 134
 PFM - View 名 (用語解説) 573
 PFM - Web Console 93
 PFM - Web Console (用語解説) 573

PFM - Web Console の設定変更 249, 366
 PFM - Web Console のセットアップ手順
 189, 305
 PFM - Web Console の注意事項 176, 284
 PFM - Web Service 93
 PFM サービス自動再起動機能 18, 85, 140
 PI_HAVL 506
 PI_SYS 510
 PI レコードタイプ 101
 PI レコードタイプ (用語解説) 573
 PL レコードタイプ 101
 Product Alarm レコードタイプ 128
 Product Detail レコードタイプ 101
 Product Detail レコードタイプ (用語解説)
 573
 Product Interval レコードタイプ 101
 Product Interval レコードタイプ (用語解
 説) 573
 Product Log レコードタイプ 101

R

Remote Monitor Collector 94
 Remote Monitor Collector (用語解説) 573
 Remote Monitor Collector サービス 105
 Remote Monitor Store 94
 Remote Monitor Store (用語解説) 573
 Remote Monitor Store サービス 106

S

Service Abnormal (A) アラーム 520
 Service Abnormal (S) アラーム 521
 Service State Change アラーム 519
 Status Change アラーム 515
 Status Server 92, 93
 Store データベース 83, 108, 120
 Store データベース (用語解説) 573
 Store データベースに格納されているデー
 タをエクスポートすると出力されるフィ
 ールド 496
 Store データベースに記録されるときだけ
 追加されるフィールド 494
 Store バージョン 1.0 83

Store バージョン 2.0 83
 System Overview (Historical) 524
 System Overview (Real-Time) 525
 System Overview (Status Change) 526
 System Summary (4.0) 527

T

Trap Generator 92
 Trap Generator (用語解説) 574

U

UAC (用語解説) 574
 UAC ポップアップ (用語解説) 574
 ulimit 395

V

View Server 92
 View Server (用語解説) 574
 View Server サービスとの通信の設定
 259, 376

W

Web ブラウザ 191, 309
 Web ブラウザでマニュアルを参照するた
 めの設定 272, 388
 WRP (用語解説) 574

あ

アクション 128
 アクション (用語解説) 574
 アラーム (用語解説) 574
 アラーム一覧 513
 アラームイベント 128
 アラーム正常回復時の測定値出力機能
 266, 382
 アラームテーブル (用語解説) 574
 アラームテーブル複数バインド機能 244
 アラームテーブル複数バインド機能の
 設定 361
 アラームの記載形式 512
 アンインストール 196, 198, 311, 313

アンセットアップ 196, 311
アンセットアップ (Store バージョン 2.0)
262, 379

い

移行時の注意事項 452
移行手順 452
イベントデータ 240, 357
イベントデータの格納先の変更 240, 357
インスタンス 94
インスタンス (用語解説) 574
インスタンス番号 (用語解説) 575
インストール 168, 182, 276, 290
インストール順序 180, 288
インポート 123

う

運用方式の変更 239, 356

え

エイリアス名 169, 277
エイリアス名 (UNIX) 325
エイリアス名 (Windows) 209
エイリアス名 (概要) 70
エージェント (用語解説) 575
エージェント監視 27
エージェント監視 (用語解説) 575

お

オートラベル (用語解説) 575
オープンインターフェース (用語解説) 575

か

カーネルパラメーター 438
概要 1
監視エージェント 9
監視基盤 9
監視コンソール 144
監視コンソールサーバ 9
監視テンプレート 19
監視テンプレート (用語解説) 575

監視テンプレートの概要 512
監視ホスト名 209, 325
監視ホスト名設定機能 209, 325
監視マネージャー 9
管理者コンソール (用語解説) 575
管理ツール (用語解説) 575

き

機能 ID (用語解説) 575
共通メッセージログ 239, 356
業務グループ 30, 147
業務グループ (用語解説) 576
業務グループユーザー (用語解説) 576
共有ディスク 412

く

クラスタシステム 16
クラスタシステム (用語解説) 576
グループエージェント 28

け

系列グループ (用語解説) 576

こ

構成変更 201, 317
互換 463
コマンド 151
コマンド実行時の出力例 (プロダクト名表示
機能が無効の場合) 97
コマンド実行時の出力例 (プロダクト名表示
機能が有効の場合) 97
コマンドの格納先 533

さ

サービス 90
サービス ID (用語解説) 576
サービス階層 91
サービス階層の表示例 (プロダクト名表示機
能が無効の場合) 96
サービス階層の表示例 (プロダクト名表示機
能が有効の場合) 96

サービスキー 399
 サービスキー一覧 399, 400, 402
 サービスの稼働状態監視 85
 サービスの指定方法 95
 サービスの表示方法 95
 サービス名 400
 差分 116
 差分データの保存について 116

し

システム構成の検討 168, 276
 システム構成の変更 201, 317
 システムの運用で使用するコマンド 156
 システムの起動・停止で使用するコマンド 158
 システムの設定で使用するコマンド 151
 システム見積もり 168, 276, 403
 システムユーザー (用語解説) 576
 システムリソース 438
 実行系ノード (用語解説) 576
 実ホスト名 169, 209, 277, 325
 自動再起動機能 85, 141
 自動ログアウトの設定 260, 377
 収集開始時刻 113
 収集できるパフォーマンスデータ 8
 シングルインスタンスエージェント (用語解説) 576

す

スタンドアロンモード (用語解説) 577
 ステータス管理機能 131

せ

制限値 392
 設計から運用までの流れ 61
 接続先 PFM・Manager の設定 250, 367
 接続先 PFM・Manager の変更 207, 323
 接続数の上限を増やす 433
 セットアップ 183, 298
 セットアップ (Store バージョン 2.0) 262, 379
 セットアップファイル 185, 190, 301, 307

前提 OS 168, 276
 前提プログラム 171, 279

そ

その他の設定 (config.xml) 260, 377

た

待機系ノード (用語解説) 577
 タイリング表示 23
 他システムと連携するときの注意事項 176, 284
 単数インスタンスレコード 103
 単数インスタンスレコード (用語解説) 577

つ

通信回線の切断の設定 244, 361

て

定期再起動機能 85, 142
 ディスク占有量 404, 412, 425, 427
 ディスク占有量 (Store バージョン 2.0) 418
 ディスク容量の見積もり 86
 データ型一覧 491
 データグループ 104
 データグループ (用語解説) 577
 データの取得や表示の設定 251, 368
 データベース ID (用語解説) 577
 データモデル 101, 486
 データモデル (用語解説) 577
 デバイス ID (用語解説) 577
 デルタ 116

と

動作ログの出力 473
 登録レポート (用語解説) 577
 特長 11
 ドリルダウンレポート 144
 ドリルダウンレポート (フィールドレベル) 523
 ドリルダウンレポート (用語解説) 577

に

日本語版と英語版の混在環境での注意事項 161

ね

ネットワーク環境 168, 277

は

バージョンアップの注意事項 175, 283
バージョン互換 463
バインド 79
バインド (用語解説) 578
パフォーマンスデータ 100
パフォーマンスデータ (用語解説) 578
パフォーマンスデータのライフサイクル 106

ひ

非対話形式 (コマンド) (用語解説) 578
非要約レコード 120

ふ

ファイル権限の強化 264
フィールド 101, 522
フィールド (用語解説) 578
フェールオーバー (用語解説) 578
負荷分散クラスタシステム (用語解説) 578
複合ブックマーク (用語解説) 578
複合レポート 24
複合レポート画面 (用語解説) 578
複数インスタンスレコード 103
複数インスタンスレコード (用語解説) 578
物理ホスト (用語解説) 578
部分バックアップ 123
プライマリーホスト名 (用語解説) 578
プログラムの構成図 (UNIX) 280
プログラムの構成図 (Windows) 172
プロダクト ID (用語解説) 579
プロダクト名表示機能 95, 265, 381
プロダクト名表示機能が利用できる範囲 97
プロット (用語解説) 579

へ

ベースライン 24
ベースライン (用語解説) 579
ヘルスチェック (用語解説) 579
ヘルスチェックイベント 135
ヘルスチェックエージェント 134, 486
ヘルスチェックエージェント (用語解説) 579
ヘルスチェック機能 17, 85, 131
変更内容 535

ほ

ポート番号 170, 278
ホストの稼働状態監視 85
ホスト名の変更 209, 325

ま

マニュアルを参照する 272, 388
マルチインスタンスエージェント (用語解説) 579

み

見積もり 86, 403

め

命名規則 396
メモリー所要量 403

よ

用語解説 571
要約 118
要約レコード 118

ら

ライフタイム 108
ライフタイム (用語解説) 579

り

リアルタイムデータ 100

リアルタイムレポート（用語解説） 579
リモートエージェント 28
リモート監視 28
リモート監視（用語解説） 580
履歴データ 100
履歴データの収集開始時刻の例 114
履歴レポート（用語解説） 580

れ

レコード 100, 522
レコード（用語解説） 580
レポート 22
レポート（用語解説） 580
レポート一覧 524
レポートキャッシュファイル（用語解説）
580
レポートの記載形式 522
レポートのフォルダ構成 523

ろ

論理ホスト（用語解説） 580